chapter 9 of the testament

律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｈａｐｔｅｒ　９　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｅｓｔａｍｅｎｔ

【Ｎコード】
Ｎ１５２７Ｌ

【作者名】
律子

【あらすじ】
今からおよそ１００年後の日本に、突如脅威的な力を持つ巨大な化け物『オーガ』の群れが出現する。政府軍は国民の生命を守るべくこれらの対応にあたるも、このオーガの力のためになす術がないのであった。同じ頃、東京都八王子山林地帯において討伐行動に出ていた防衛省管轄公益法人東京陸運保険機構が未知のオーガをつれた記憶喪失の青年と接触し、これを保護する。
他方、オーガの出現とともに進行を開始したおそるべき計画『チャプター９』。そんな裏舞台の暗躍にも気づかぬまま、青年は記憶を

求め、愛すべき仲間を守るためにただ外道どもを制する戦いに身を投じるしかなかった。

プロローグ

ある夜のことである。
もうまもなく冬を迎えようとしているその寒空は、凍てつく冷気によって澄み渡っていた。
しかし、崩壊した巨大都市の粉塵が夜空を覆いつくしているので、星はひとつも輝いていない。
さらに酷いことに、その街は人の活動の場としての機能を失っている。かつては無数の人々がひしめき合うコンクリートジャングルであったのだろうが、今はその面影だけを残してあとの残りは全て風化させてしまった。いうなれば、ただの瓦礫の山でしかないのだ。
だから、誰もそこにはいないし、街から発せられる光も全く存在しない。そのうえ、今宵は新月のため、月の光も届かない。
だから、この街は完全なる暗黒に包まれ、自分の目の前すらろくに見ることができないほどであった。

いや、ふたつだけ、緑色の光が強く輝いているのを見て取れる。
それは、人間が作り出す光ではない。こんな気味の悪い光を人間が作るはずがない。
光というにはあまりに暗すぎるのだ。
そんな暗い光ではあるが、かすかにその怪光に照らされ、何かを見て取ることができる。
それはふたつの巨大な化け物の影であった。

「もう一度聞く。君はもう、俺についてきてはくれないのか?」

「ああ、俺は俺のやり方で世界をつくる。どうしても邪魔するというのであれば、たとえお前であっても容赦はしない」

「なぜだ?君の求めた世界は、俺と同じではなかったか。今まで、ずっとそれを追い続けて、ともに歩んできたではないか」

「悪いな。今ここで告白しよう。俺は間違っていた。そして、お前もな」

「君のような生ぬるいやり方で、どれだけの成果が得られたのか、それは歴史を見れば明らかであろう。それは君もよく知っているはずだ。間違っているのは君なのだ」

「お前のやり方はそれ以下だと言っているだろう」

「我が国をここまでに落ちぶれさせた過去のやり方が、俺の崇高な理念に勝ると?」

「そうだ。お前の理念など、単なる独りよがりの、はた迷惑なイデオロギーでしかない。お前のようなやり方が、どれほどの悲劇を生んできたのか、歴史をみれば明らかであろう」

「俺は違う。あのような過去の大罪人などとは決定的に違うのだ」

「もうこれ以上、お前と議論をしても無駄なようだな。時間が惜しい、俺は行くぞ」

「君をここで手放すくらいなら、いっそのこと、俺が君を殺す」

「馬鹿やろう!!」

「君が悪いんだ。俺は・・俺は・・・」

「なに・・、何だお前？その力・・」

「しねぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「うわぁぁぁぁ！！」

今宵は、闇によって支配される。
ここは一筋の光すら達しえぬ、深海の底のような世界。
それは、行き場をなくした人間たちの心を忠実に再現したような世界である。

今はもう、人間たちは、何もかもが見えないのだ。
彼らはいま何処をどうやって歩いているのかすらわからない。
それは、黒よりも暗い闇のせいではない。
自分自身が、その目を潰した。
それ故、彼らに光が届くことはないだろう。

もう二度と・・。

＞ｉ７９９６―１１９９＜

プロローグ（後書き）

本日も、このようなところにアクセスいただき大変恐縮でございます。
本作品は、暗さを特に追求したストーリー構成になっておりますので、ご気分が沈んでいる状態でお読みになることのないよう、お気をつけ下さい。

第1話　心見えぬ、物見えぬ

―２１１０年、日本―

「大臣、お呼びでしょうか？」

大臣と呼ばれる男、宇賀法務大臣は、法務省舎にある一室で、タバコをふかしてはある人物を待っていた。価値がどれほどのものかは知れないが、馬鹿でかい不可解な絵画が飾られた大臣室は、赤い絨毯の敷き詰められた豪勢な間取りであり、樫の木を削って作られた机と、ふかふかした背もたれのついた大きな椅子がぽつりとおいてある。大臣はその椅子にもたれかかって、眉間にしわを寄せながら窓の風景を見ていた。もっとも、上からのお呼びがかかればすぐにでも馳せ参じるのが役人という人間にこびり付いた性質であり、その人物はあっという間に到着した。そのため、点けたばかりのタバコはまだたっぷりと残されている。

「君をわざわざここへ呼んだのは、もちろんどういうことか、わかっているだろう」

大臣は、偉そうに背もたれによりかかったまま声のするほうに振り向くと、やってきた若い部下、半田検事に問いかけた。

「例の、『オーガ』の件でしょうか？」

半田は若輩者でありながら、幾つもの修羅場をくぐり抜けてきたようで、その鋭い眼光を眼鏡の下から光らせる。

「うむ、まさしくそのとおりだ。見たまえ、半田君」

宇賀は、つい先ほどまで自分が見ていた窓の光景を、半田にも示した。半田はそれに従い、窓から見える東京の街を見下ろす。この大臣室は、およそ地上３０メートルの高さに位置し、ある程度遠くの景色を見ることができる。そのため、瓦礫と化した首都東京という大パノラマが閲覧者の前に大展開されるのだ。

「国民は年中、オーガどもの面を拝みながら生活をしなければならないからな。もう彼らの不安は限界のようだ。早く平和な日本を取り戻せとうるさい。しかしながら、たまにはよい薬とは思わんかね」

「大臣、ご冗談を・・」

この日本という国は世界でもっとも平和な国であった。自由よりも平等の観念を優先するこの国では、どれほど体たらくな人間であろうとも、一定の幸福の享受が保障され、無事に一生を終えることが国家的に約束されていた。すなわち、楽園である。そんな母のような国家のためか、甘やかされすぎた国民は、次第にその能力はおろか、日本国民としての誇りすら失っていた。国民の異常な無気力により、この国はたるみきっているのである。このような閉塞状態がもう何十年と継続し、国家の病状は慢性的な状態にまで到達していた。だから、大臣の発言はあながち冗談ではないようだ。

「もう、あれから３年ですか。いくら国家規模の薬とはいえ、強すぎては体が壊れてしまいます」

そんな折に国家の存亡にかかわる大事件が発生したのだ。それは今より３年前、すなわち、２１０７年のことである。突如、なぞの生物が同時多発的に、日本全土に出現した。防衛省は自衛隊により対処しようとするが、完全に平和ボケしていた軍隊はことごとく壊滅。日本に偏在する大都市と言う大都市は全て崩壊。犠牲者は３千万人

にものぼった。

「２００年弱も旧憲法９条の維持を謳い、戦争の根絶を主張していた日本国民が国に武装することを許したのだ。これだけでも薬の効力は凄まじいものがある。ただ、君の言うとおり、副作用がやっかいなのだ」

そして、化け物の登場後、日本国憲法の改正運動は全国に拡散し、軍拡志向を加えた憲法の抜本的な改正が完了する。そして、銃砲刀剣類の私的所有に加え、私的軍隊の編成まで認められるに至ったのである。長いことたるんでいた日本人の意識が目を覚ました瞬間である。ただ、その代償として、この国に化け物どもが縦横無尽に闊歩することとなった。

「しかし、私はこの事件を解決するための重要な情報を掴んだ」

宇賀は急に立ち上がり、窓の景色を見ながら言う。

「重要な情報とおっしゃいますと?」

「外法学・・・。君も東大生だったのなら聞いたことくらいはあるだろう」

大臣は、唐突に聴きなれない言葉を発した。すると、部下は天井を見上げて、その言葉の記憶をたどった。確か、自分の友人の知り合いくらい離れた人間が、外法学ゼミというあやしいサークル活動に精を出していたのを覚えている。実際にも、半田自身、そのサークル構成員に外法学の素質があるとおだてられ、勧誘を受けたものだ。

「ええ、私は全く興味がありませんでしたが、そのような学問があったことは知っています」

外法学とは、ここ5年間で、急激な成長を遂げている新たな学問分野である。実際のところ、世間的にはクローン技術並みに疑念が投げかけられている怪しい分野であったが、もうすでに研究論文もいくつか市販されているほどである。そもそも、外法学が研究され始めたのは、6年前の火星への日本人有人着陸事件がきっかけとなっている。そこで、火星人が書いたと思われる、暗号文書が見つかったのだ。それを一部の人間が解読していったところ実は外法典であることが判明した。これは歴史を塗り替えるほどの大事件になると思われたが、クローン技術があまり話題にならないのと同じように、その存在を疑問視する声が挙がるだけで、国民はほとんど外法学に注目することはなかった。このようにして、外法学はごく一部の大学関係者の中で研究が進められることとなった。

「あの『オーガ』どもは、どうやら外法で作られているようなのだ。これはまだマスコミにはリークしていない極秘の情報である。それにしても、やつらに知られるとろくなことがないな」

宇賀は、声だけで笑った。

「いわゆる『外法物』というものですか」

他方で半田は、冷静に本題を進める。

「君もよく知っているではないか。そうだ、『鬼』を作ったのは外法を修めた紛れもない人間なのだ。少々きちがいに過ぎる奴だろう。宗教上の事件よりも厄介だ」

「つまり、この事件は神の天罰でも、宇宙人の襲来でもなんでもなく、人間の凶悪犯罪者による犯行ということですか」

「そういうことだ」

「なるほど。大臣のおっしゃりたいことはよくわかりました」

「この事件は内乱事件なのだ。だからこそ、東京地検特捜部には、どこよりも早い事件解決を図ってもらおうと思う。我々は、長年霞ヶ関でも肩身の狭い思いばかりをしていたが、この事件は法務省の力量を世間に知らしめる絶好の機会なのだ」

「私も同感です、大臣」

半田は命を承ると、宇賀に向かって一礼した。

「防衛省ですら止められなかった軍隊を、法務省が止めたとなれば傑作だぞ」

大臣は、英雄となった自分の姿でも想像しているのか、大声で笑ったのである。半田はそのような宇賀を背にして、冷静に眼鏡の位置を直した。

―東京都八王子市山林地帯―

都心から距離を置く、この東京都八王子は、森の深い山林地帯が多く残っていた。そこに生立する木々は、どれもが葉を赤く紅葉させ、命の限りを尽くして鮮やかな色彩を山一面にもたらすのだ。そのため、秋もいよいよ本番であることを知らせてくれる。空は爽やかな秋晴れで雲も少ないが、冬はもう間もなくのところまで接近しており、空気はかなり冷えきっていた。

そんな美しい赤い大自然の世界の中に、一体の人を形作る鉄の塊あるいは人間の叡智を結集したカラクリというべきものがあった。また、それに対峙するかのように巨大な化け物がうなり散らしては、涎をだらだらと垂らし、その闘争本能を剥き出しにしているのである。

鉄のカラクリにはひとりの少女と犬が搭乗している。少女はその頭から丁度鼻の上あたりまでにかけてすっぽりと覆いかぶさるほどのヘルメットのようなものを装備していた。そのため、表面上その表情は明らかではないが、その口元のこわばりから緊張の中にあるこ

とは明白であった。

「どうしよう。みんなとははぐれちゃったし、私だけでどうにかするしかないじゃん」

どうやら少女は仲間と業務にあたっていたところ、現在対峙する化け物に襲撃され、その仲間たちとは引き裂かれてしまったらしい。

「もう弾もないみたいだし」

交戦状態が長期化したのか、相当量の弾丸を消費し、トリガーを引いてもうんともすんともいわないことから現在弾切れ状態に陥ったことを認識する。しかし、相手である化け物にはそんな少女の身の上話など毛ほども関心がないのは明白である。実際に化け物は遠慮などする気もなく、豪腕を振り上げて少女に襲い掛かる。足元にいる犬が少女の戦闘スーツの端を口で引っ張って、警戒を促す。

「もうわかってるって・・・うわぁ！！」

赤いもみじの葉が舞い上がる。ライフル銃を持っていた鉄のカラクリの右腕が、肩から全部化け物に奪われてしまった。切断部分が小爆発し、紫電を散らす。もっとも、弾切れのライフル銃など、戦場ではモデルガンと同程度の価値しか有していないため、惜しいとは思わない。

「これじゃ、社長に怒られちゃうな。言い訳考えとかなくっちゃ」

しかし、それは仮に無事、生きて帰ることができた場合を想定した話である。ここで、この化け物に殺されてしまっては、どれほど美しい言い訳を考えたとしてもそれは水泡に帰すことになるのだから。

「こっちだって、やられっぱなしってわけにはいかないから」

鉄のカラクリは残された左手に高周波ナイフを携え、力任せに化け物の胴体に突き刺す。化け物は悲鳴を挙げ、鮮血を辺りにどばどばばら撒く。赤い山林を、より鮮やかな赤で塗りたくるのだ。しかし、それでも化け物の機能を完全に停止させるには程遠い一撃であったため、カウンターを許してしまう。

「きゃあ！！」

鉄のカラクリは頭部を完全に潰されてしまった。コックピット内から外界を見ることができる唯一の目を失ったことで、少女は外に関する情報を完全に遮断されてしまった。

「でも、あなたの負けよ」

だが、少女の詰みの一手はすでに決まっていた。つまり、化け物にできた深いナイフ創に強力な爆弾を埋め込んでいたのである。しかし、化け物はそれに気づいておらず、なりふり構わず襲い掛かってくる。化け物は自己の腕をまるで触手の様に変化させると、鉄の塊をそのまま縛り上げ、拘束し、自己の下に引き寄せる。

「わ、ちょっと、待って、私まで巻き込む気？」

化け物に仕込んだ爆弾は、もう間も無く爆発する予定である。したがって、このままではこの化け物と心中する結果となる。

「きゅうちゃん、逃げるよ。しっかり掴まってて」

そういって、少女は非常脱出用のスイッチを押した。鉄の塊から、小さなたまごの様な物体が勢いよく飛び出す。その瞬間、大きな爆音が鳴り響き、その爆風に乗っかるように少女は遠くに投げ出されていった。

（二）

「いててて・・・」

少女は自己の無事を確認する。勢いよく飛ばされたが、ここが山林地帯であったため、落下地点にあった大木の葉がクッションになり、幸い衝撃はほとんどなかった。

少女は、自己の頭にかぶっていたヘルメットをはずす。すると、ヘルメットの中に仕舞いこまれていた、細く清流のように流れる黒髪がふわりと花開くのである。たちまちにして、その花開いた髪の束は落ち着きを取り戻し、彼女の顔周りを内巻くように優しく覆いかぶさった。その黒い艶めかしい髪は、少女の廉潔な肌の白さを際立たせる。また、その白き肌に申し訳なさそうに存在する小さな唇に塗られた紅も、彼女の純白さに絶妙なアクセントを付する。

しかし、そんな少女は殊更に目を瞑り続けていた。そう、少女は盲目なのである。あのヘルメットは少女の目の役割をしていたのだ。ただ、動力源が失われた今となっては、単なる邪魔なヘルメットでしかない。ひとまず少女は、そのヘルメットを放置して、犬とコックピットから降りることにする。

コクピットを降りると、地面を埋め尽くすほどの枯葉の絨毯が広がっていた。少女は目が見えなくともその柔らかい感触から、深い森に迷い込んでいることを実感する。犬は少女の手綱を引っ張って、適当な場所へと、彼女を誘導する。この犬は盲導犬なのだ。

「迎えが来るのを待つしかない・・・か」

幸い、携帯電話のＧＰＳは生きており、救助が来るのも時間の問題であろうと楽観できた。

「お腹減ったなぁ」

自分の体力が消耗していることに気づくと、これ以上余計な労力の消費を抑えるため、少女はその場に座ることとした。その時である。

「わんわん」

犬は強く手綱を引き、主人をある方向へと導く。そのため、地べたに座ろうとしてしゃがみこんだ少女は、前のめりになりながらも手綱の引かれる方へと歩く。次第に枯葉をざくざく踏みつける音が大きくなる。

「ちょ、ちょっときゅうちゃん！！」

つまずきそうになる主人をよそに、犬はただこっちだといわんばかりに手綱を引く。本来、盲導犬とはその任務に尽くすため、厳しい訓練を受けるから、自発的に何かをすることはほとんどないのだが、今回に限ってはその経験則の適用はないようだ。だから、少女は何か異常なことが起こっているのだということを具体的に認識できた。

ある一定の距離を進むと、犬はそこで動くのをやめた。と、同時に少女はそこで何かを心の目で見てしまった。少女には目が見えなくとも、はっきりと見えるのである。彼女の前に聳える、その圧倒的な存在物を。それは少女が望むと望まぬとにかかわらず、目に見えると見えないとにかかわらず、その存在物は彼女の心に恐ろしい像を突き立ててくるのだ。

「オーガ！！」

少女は生きた心地がしなかった。これは先ほど戦っていた化け物と同じ感じがする。そうだとすれば、この目の前のものは明らかに自分にとって仇なすべき存在なのだ。だが、盲目のこの少女には抗う術はない。

それに加えて、この敵はかつてない恐ろしさを滲み出している。今まで彼女が戦ってきた敵のそれとはまるで違うのだ。いわば、地獄へ直結する冥界の扉である。生きとし生けるものへ向けられた凄まじい憎悪の念。生を謳歌するものへの果てしない妬み。これら全てが、少女を地獄へと誘おうとするのだ。

しかし、いつまでたっても少女に爪が立てられることはなかった。というより、この敵は全く動こうとはしない。少女は心を落ち着かせてみると、たしかにいやな感じはある。ただ、悪意がない。むしろ、この怨念たちは少女に助けを求めているように思えた。

（タスケテ・・）

そう、これは苦しくて、もうどうにもならないほどの苦悩から搾り出される一握りの願い。苦しいとすらいうことのできないほどの痛烈な痛み。

ふと、少女ははじめて自分から光が失われたときの苦しみを思い出した。何もかもが自分の世界から消えていったのだ。大好きな父親の顔も、花の美しい花弁も何もかもがいなくなっていったのだ。それは身を投げたくなるほどの悲痛である。そうだった、この鬼が感じている苦しみは、あの時の自分と同じなのだ。

反面、少女はその苦しみが決して永続的なものでないことも知っていた。現に自身がその苦しみを乗り越えて今、ここにいるから。きっと、この鬼も助けられる、その一心で少女はそこに立ち尽くして

いた。

「わんわん」

突如、犬が、少女に呼びかける。これにより、ふと我に返った少女は、もうひとつの存在を感じ取った。自分と同じくらいの脈拍および呼吸の息遣い。それはどうやら人間の気配のようである。

「人・・こんなところに何で・・」

（三）

男はふと目が覚めたのであった。決して眠くて仕方がなかったというわけではないが、脳の覚醒が中途半端であったため、とりあえず目を半分ほど開けてみるのである。そして、おぼろげながらも自分が現在置かれた状況を把握する。たとえば、自分の周りには背の低い木々が乱立し、枯れた落ち葉が地面を敷き詰めていることから、林の中にいることがまず分かった。太陽の光がこれらの木々の隙間から差しこんで眩しい。また、見るまでもないが今の自分の姿勢からして何かに寄りかかっているのだろう。しかも、身体がとんでもなく冷える。どうやらとんでもないところで居眠りをしてしまったようだ。確かに、身体の節々において疲労が残っており何となく体全体が重い気がする。これはおそらく寝違えてしまったからであろう。

それはともかく、二度寝してしまいそうな意識の中で男はなぜこのようなところにいるのかを思い出すことにした。しかし、ここにどのようにして来て、どこへ行こうとしていたのかは全く思い出せない。いや、そもそもどこから来たのかすら男は思い出せていない。さらに記憶をさかのぼってみても何も思い出せはしない。というより男は何も知らないというべきであった。むしろ生まれたばかりの赤子同然なのである（もっとも、日本語を用いる能力、および一般

人程度の論理的分析的判断能力は備えているものとする）。
したがって、昨日のことはもとより自分の名前が何であったかすら知らない状態であった。ようやくにして、男は自分の身に降りかかっている事の重大さに気づいた。それと同時に強烈な不安感を覚え、腹の底がぞっとする感覚に襲われた。そのおかげか寝ぼけ半分となっていた男の意識が完全に動き出す。

「俺は誰だ」

今自分が置かれている状況を把握するには、絶対的に情報量が足りないのは明白である。そこで、男は行動を開始すべく立ち上がることにした。すると、今まで気づかなかったが人の歩幅計算でおよそ５歩程度離れた正面に何かを見つけることができた。おそらく半分眠っているような意識の下で見落としていた重要な情報である。それは、人と犬である。覚醒を開始した男の存在に気づいたのか、その人と犬はこちらの方に姿勢を向けた。よく見ると、人の方は１０台後半の少女か。細く真直ぐに伸びた黒くきれいな髪からすると典型的な日本人女性であることがわかる。ただ、戦闘用のスーツを着ているのは異様ではある。他方、犬は、その少女の下半身ほどの大きさがある、黒のやや大型犬で心地良さそうに伏せた状態でくつろいでいる。とにかく、これらの事情から結論するに、彼女に話しかけて解答を求めるのがもっとも必要かつ合理的な方法であろう。

「君は？ここは一体？」

男が問いかけたことで、彼女はこれに反応する。

「いや、私もきゅうちゃんに引っ張られてここに来たばかりなの。そしたらアナタたちが倒れてたからよくわかんなくて・・・」

きゅうちゃんなるものとは、現在この男に与えられているコンテクストから推測して、彼女の犬のことであろう。また、男は少女が常に目をつむっているということに気づいた。

「君、目が見えないのか？」

目を閉じているからといって必ずしも目が見えないわけではないが、男はつい気になって聞いてしまった。

「うん、小さい頃病気でね」

やはり彼女は盲目のようである。なるほど、あの犬は十中八九、彼女のための盲導犬であったか。そして、彼女が目をつむるのは、相手としっかり目を合わすことができないため、相手に不快感を与えないための配慮であろう。

「すまないな。変なことを尋ねてしまって」

「気にしてないよ。目が見えなくてもアナタたちが今どうしてるかくらい全然わかるし、慣れちゃえば大した事ないから」

人は五官の機能のうち一つを失った場合、その他の機関がそれを補うべく通常では考えられないほどの発達を見せるとよく言うが、このような現象はおそらく彼女の身にも起こっているのだろう。どうやら光学的な情報によらなくとも、男たちの動きを完全に探知できるらしい。

「ん？アナタたち？」

いや、そんなことはもとより、男は何か重大な事実を見落としているのである。彼女は明らかに『アナタたち』と言った。しかも2回

も、である。もちろん、男には連れがいたような覚えなど全くない。しかし、たしかに彼女はアナタたちと言った。そうである以上、男が知らないが、彼女が知っている第三者が間違いなく存在している。男は首を左右に振り、軽く周辺をさがすも、それらしき第三者の存在は発見できない。はたして、その者はこの場にはおらず、今どこかへ行ってしまっているのだろうか。

「君は今、俺のことをアナタたちと言ったが、他にだれかいるのか？」

彼女は男のことを頭のおかしい人と思っているのだろう、少しいぶかしげに答えてくれた。

「だって、アナタのうしろにいるの、アナタの“オーガ”じゃない？」

「おーが？」

男は少女の言われるがままに背後をみる。何で今まで気づかなかったのだろうかと思う。そこには岩か大木があるのかと勘違いしていた。大きすぎて逆に気にも留めなかったのである。

それはなんと、およそ一般的な2階建ての建物程度の高さがある、人の形をしたものであった。そしてそれが、座禅を組むような姿勢で鎮座していたではないか。いま思えば、これを枕にしてずっと倒れていたのか。

「なんだこれ？」

「？」

少女はそんなことアタシに訊かれても、といった顔をして首をかしげている。

「あ、そうかアナタたちはこれをオーガって呼んでるとは限んない

もんね」
「ん、どういうこと？」
「えぇと、オーガっていうのは厳密にいうと私たち日本軍がそれによく似た敵軍の兵器に対して勝手につけた呼び名で、正式名称じゃないんだよね」

ここで、ｏｇｒｅ：オーガとは、日本語でいう人食い鬼にあたる意味をもつが、なるほど、たしかにこれは鬼のような体裁をとっているようだ。何でできているのかはわからないが、強靭な筋肉、そして鬼を鬼たらしめている頭に生えた2本の角。加えて、胸元に光る、あの緑色をした宝玉はなんであろう。

「君は軍人なのか」
「うん、一応。アナタもそうなんでしょ？」
「・・・」

正直その質問には答えかねる。本当にそうかもしれないし、下手に答えてしまうと身柄を拘束される虞（おそれ）もないわけではない。そんな男の迷いをくみとったのか、彼女は言う。

「あ、別に君が敵ってわかっても捕まえて尋問したりはしないから安心して」

それにしても、これまでのふたりのやりとりからして、この男と彼女の日本軍というのはどうやら対立しているということが何となくわかった。だとすると、彼女はなぜこのようなところにいるのか、もしくはなぜ男が気を失っている間に自分を殺さなかったのか、いろいろと疑問がないでない。もっとも、記憶のない男の認識を基準とすると、彼女が対立抗争中の憎き相手方であるという認識はないし、これを害するといった目的も毛頭ない。

「俺たちは敵同士なんだろう。だったらこんなところにいたらまずいんじゃないか？」
「はは、確かに」
彼女はそんな自分を一笑しているのか、純粋に面白がっているのかは判断しかねるが、笑いながらそのように答えるのであった。
「でも、実際に近くで見ると、アナタもアナタのオーガもやさしそうな感じがする。まあ、すごいなんとなくなんだけど」
男には彼女に対する悪意を何ら有しないのは確かであるし、彼女の感覚が鋭いだけのことであると言ってしまえばそれまでだ。しかし、それだけの根拠でよく信じれたものだ。もしこれが罠だったらいまごろ彼女はおそらくこの世にはいないであろう。
「あ、でも、もとはといえば、この子が私を引っ張ってきたことからはじまったんだった。いつもはこんな強引なことする子じゃないんだけどな」
この子とは犬のことであるが、強引に引っ張られてきたことの恨みが残っていたのか、少女はしゃがみこむと、犬に対してせっかんをはじめた。
「そういえば、アナタこれに乗ってきたんでしょ？それにしてもオーガに人が乗っていたなんてびっくりしちゃった」
確かに彼女の質問は的を得ている。男の傍にこのオーガがあったということは、これと一緒に来たか、またはこれに乗ってきたかのいずれかであり、これに男の来歴の手がかりがあるのは間違いない。

それにしてもこれって乗り物なのか、はなはだ疑問である。とりあえず、男がこれに乗ってきたかどうかをここで断ずることはできないのでこう答えた。

「わからない。俺はおそらく記憶喪失みたいなんだ。だからこれにどうやって乗るのかも分からない」

「そうなんだ。ごめんね、ヘンなこと聞いて」

「いや、気にしてないよ」

つい先ほどの盲目に関するやりとりのカーボンコピーのようになってしまい、お互いに苦笑せざるを得ないのである。

「ところで、オーガって生き物なのか？」

「私は生き物だと思ってる。まあ、そうじゃないって言う人もいるんだけど」

彼女はそこにあるオーガというものを手で撫でながらそのように答えてくれた。

（四）

「あとさ、とりあえずこの近くになんか大きい町なんかあれば教えて欲しいんだけど・・・。」

と、男はこのような問いをしようとしたところ、これは言葉にならざる声としてかき消されてしまった。というのも、彼女に問いかけようとした瞬間、男は言葉を発することすら畏れ多いような感覚に襲われたためである。男はその光景を目の当たりにして息を呑んだ。今までの和やかな雰囲気から積み上げられた彼女のアイデンティティが一気に瓦解する。

そうだ、男は不思議な光景を見たのだ。彼女は見えぬ目を開くと、

そこには魂を吸い込まれるような深紅の眼球が暗く沈んでいるのである。それに加えて彼女の顔つきが異常なまでに凛と冴えわたったことでむしろ神秘的ですらあった。そしてゆっくりと目を閉じ、ある方向を指差して彼女は言うのである。

「鬼がくる」

鬼。鬼がくるだと。なぜそのようなことがわかるのか。少女の指し示す方向へ目を凝らしてみる。何も見えない。彼女は何か科学的合理的な根拠に基づいてものを言っているのか。あえて反証をあげよう。全くそんな気配はないではないか。早く近くの町へ案内しろ。

「あの、何もそんな気配なんてないけど・・」

「あと３０秒もすれば私たちは彼らの射程内に入る。もっとも、アナタは彼らの仲間である可能性が高いから攻撃されないと思う。でも、私はもう逃げ切れないから間違いなく殺される。どうしてくれるの、あなたが話しかけてきたから気づくの遅れちゃったじゃない」

男は、この少女がなんとも勝手であるのだろうと思った。彼女が神秘的だの何だのと思った記憶はすぐさま抹消することにした。

それにしても、だんだん地響きが聞こえるようになってきた。重量のある物が地面に叩きつけられるような轟音が次第に大きくなってゆき、大地を揺るがす。これは明らかに巨大生物が大地を駆ける音である。男は音源の方へ目を向けることにする。すると。

鬼。

鬼。

鬼。

本当に鬼が来た。そこにいるオーガと同程度の大きさがある３匹の鬼が大きな一つ目を血走らせ、飢える貪欲な野獣のごとくこちらを

目がけて疾走していることを確認できた。

「おい、早く逃げないと」

男は、逃げ出すそぶりを見せつつ、彼女の袖を掴む。しかし、彼女は動こうとはしなかった。

「だめ。もう間に合わない」

少女は腹をくくったかのように落ち着いた声で、再び赤い目を見開き、見えぬ目でしっかりと男を見据えて言葉を続ける。

「だけど、アナタがそれで助けてくれれば、私はまだ生きられる」

この少女は一体何を言っているのだろう。男がこのオーガなるものに乗ることはできないと言ったのは前述のとおりであるが、それをわかった上で言っているのか。そもそも、この少女は男があの3匹の鬼の仲間であることを十分に認識しているのであろう。だとすれば、普通に考えて敵が敵を助けるということはありえないということもわかっているであろう。もはやこの少女は戯れているとしか言いようがないのである。仮に、男とあの3匹の鬼との間に通謀があるとすれば殺してくださいと言うに等しい。

「・・・」

しかし、この少女がいくら無茶な少女であるとはいえ、このままあの貪欲な鬼どもに差し出すのを黙って見逃せるほど男は図太い神経を持ち合わせてはいなかった。男とあの鬼どもとの関係は従来どのようなものであったのかは知りえぬ。竹馬の友として酒を毎晩飲み交わす関係にあったのかもしれぬ。あるいは、日々夢を語り合った

恋人であったかもしれぬ。だが、このときばかりはこの少女を守りたいという意思だけが記憶のない男の全細胞を支配したのである。

もう鬼はすぐそこまで来ている。男はこのオーガへの乗り口らしき箇所を懸命に探す。しかし、この体の穴という穴を調べたところで何ら途が開けたような様子はない。鬼は3方向から私たちを包囲し、このオーガに対して威嚇を始めだした。うなり声をあげ、一つしかない大きな目でこちらをにらみつけていることから、今にもこのオーガに襲い掛かってきそうなのは明白であった。どうやらこの鬼どもと男が友軍ではないかといった彼女の予想は幸か不幸か見事にはずれてしまったのである。ただ、事実として状況は一向に良くなってはいない。

3匹の鬼のうち1匹が少女の存在に気づいた。しかし、彼女は一向に怯えたりすくみあがったりしていない。まさか、今の状況が見えていないわけではないであろうに。とにかく、彼女がいま最も危機的な状況にあることは事実である。肝がすわっていることは立派であるが、死んでしまっては何にもならない。早急に助けなければ、間違いなく殺されることになるだろう。

そういえば、たしか彼女はこのオーガが生き物であると言っていた。とすれば、強く語りかければ乗せてくれるのかもしれない。あまり無意味に言葉を発するのは好きではないのだが、今はそんな悠長なことを考えている時間的余裕はない。

「頼む。力を貸してくれ。あの子を助けなきゃ」

「・・・」

思ったとおりにはいかなかった。やはり、このオーガを動かすための要件が何かしら欠けているのだろうか。

男は少女の安否を確かめる。すると鬼に距離を詰められて、いつ殺されてもおかしくない位置に来ていた。

（何であいつ逃げないんだよ。何でだ。何で）

男はただただ苛立ち、心の中で自問自答していた。別に答えなどを期待しているわけではなかった。とうに答えなど出ていたからである。すなわち・・

「何で俺は何もできないんだ」

ただ無力な自分が無性に腹立たしかった。無力な自分に対する叱咤、憤怒の感情が噴き出すようにたち現れてくる。自己嫌悪、自虐、無価値、クズ、ゴミ、もう何とでも呼べばよい。

力が欲しい。この怒りをあの忌々しい鬼どもにぶつけるだけの力が。

この脆弱な己を破壊するだけの力が。

そしてそのとき、沈黙を続けていた男の鬼がようやく動き出すのであった。

第2話　朕ノ名ハ・・・

『力・・欲シイ・・』

誰かが、頭の中に直接語りかけてくる。
このえもいえぬ不快感。なんとなく、かゆくてたまらない。

（お前は・・・）

男の前に、ゆらめきながら何かが語りかけているのだ。だが、それがいったい何なのか、男にもさっぱりわからなかった。

『アハハハハハハ。朕ノ力、外ナル法ノ力。貴様ニ賜ウ。朕ハ万物ノ淵源二顰シ魂ノ根拠タルアニマ。ヒャーハハハハハ』

最後まで、男の前の存在の笑いが止まることはなかった。

気がつけば、男は見慣れぬ空間に座っていた。ここは直径にして５メートルほどの球体の中身をくり抜いた中心であろうか。また、種々雑多な装置が至る所に設置されていてなんだか狭苦しい。かといって決して居心地が悪いというわけではなく、むしろ懐かしさに浸れるような感傷さえわいてくるのである。この男の目の前にはモニター画面らしきものがあり、そこには『ｔｈｅ　ｅｘｅｃｕｔｉｏｎｅｒ　９，　ＯＫ』という文字が点灯していた。
これが私のオーガの名前か。そうか、私は今、あのオーガの中にいるのだ。

「力を貸してくれるのか」

白い巨大なオーガは応えない。そもそも、こんな変な物体に会話を期待すること自体がおかしいことであろう。だが、中に入れてくれた以上は、男にその力を貸すことを承諾したものとみなしてよさそうである。

「それにしても、これ、どうやって動かせばいいんだ」

もちろん男はこのオーガに乗っていた記憶も失っているので、どのように動かせばよいかなど知る由もない。

「まあ、なんとかなるか」

しかし、今はあの少女を救うことだけをただ考えることしかできず、いま男がすべき唯一至上の命題はまさに少女に襲い掛からんとしている鬼を破壊するだけであった。だから、自分でも驚くほど適当に、その問題を無視してしまうのだ。

（走れ）

搭乗者がそう念じた途端、男のオーガはその足の筋肉をメリメリ唸らせて、その鬼どもを目がけて跳躍する。対象は少女をどう嬲り殺そうか思慮にふけっているのか、男が近づいていることに全く気づかずに、ただ涎をだらだらたらしているだけだ。

そして敵の間抜けもあり、男のオーガは対象に向けて右の豪腕を振りかざしても敵が防禦行動に入ることもない。そのため敵は何が自分に起こっているのかを認識することなく、アホ面を曝したままその頭部を鷲掴みにされる。そして、この男のオーガは跳躍の勢いのまま、それをもって敵の頭部を大地に叩きつけることができた。

これによって、攻撃対象の頭部は熟れたざくろのように砕け、血しぶきを周囲に散らし、対象は次第にこと切れていった。

男の鬼も大量の返り血をあびたため、もともと白無垢のようなその純白の肉体に赤い鮮血が滴り落ちる。

（それにしても、何だこのオーガの滑らかな動き）

この白いオーガは、まるで自分が思えばそのとおりに行動してくれる。これなら操作方法など知らなくともなんとかなりそうである。

残り2匹。

連れがやられたことに憤りを感じているのか、2匹の鬼はためらうことなく自分の方に襲い掛かってきた。

男はとっさに1匹を素手でなぎ払い、吹き飛ばしたものの、もう1匹の攻撃を防ぐことはできなかった。この鬼は自らの腕を膨張させ、力任せに背後から殴りつける。激しい衝撃が全体に走る。

転倒。

しかもこの機を逃さんと、追撃の手を緩めることはない。他方もまた、ぴょこぴょこ飛び跳ねながら必殺の一撃を叩き込むため、このオーガに襲い掛かる。

「くそ・・・」

すぐに体を起こして退くも、さすがに転倒した状態からではまともな回避行動に移ることは困難であったため、今一度兇撃を食らわざるを得なくなった。男のオーガは、再び強く大地に叩きつけられる。しかし、なんとか致命傷は避けることができた。全然動けないものではない。急いで反撃の体勢を立て直すことにする。

「このままじゃ埒があかないな。何か武器はないか」

男の目の前に、どうやらタッチパネル式のマニュアル画面があり、そこから『ｗｅａｐｏｎｓ』の項目を見つけることができた。もっとも、悠長にこれを選り好みしている暇はない。２匹の鬼はすぐそこまで来ているのだから。

とりあえず、男は大きく間合いを取るため２～３回後方に飛ぶ。その瞬間、間一髪で相手の攻撃を逃れることができた。

「武器は・・・、これだけか」

画面に出てきたのは『ｓｗｏｒｄ』だけであった。今はこれだけでどうにかするしかあるまい。

男は、タッチパネルにふれてこれを選択すると、さらに画面上に『５６３．５ＭＰを消費します』という意味不明の文言を見た。これはロールプレイングゲームか、と突っ込みたくなる。

それと同時に、男は魂が吸われる様な不快な精神状態に陥る。だが、ここで死ぬよりははるかに良いものと思われ、強いて気にはしない。すると、一瞬にして鬼の両腕が鋭利な両刃剣へと変わる。腕が剣へと変わるときの反動で、ついついバランスを崩してしまう。だが、太陽の光を反射して、ぎらぎらと輝くこの刃であれば、容易に敵の肉を切り刻むことも可能である。これで戦うしかない。

２匹の鬼は相変わらず猪突猛進の勢いで飛び掛る。おそらくは時間差による波状攻撃を仕掛けてくる模様。とすると、前の鬼は囮か。第１の攻撃は避けるのが無難であろう。

しかし、これを避けようとしたその瞬間、前の鬼の腕が伸び、足をすくわれる。その後、すかさず鬼は男を引きずり戻し、その身体をもって拘束する。男は身体の自由を求めてあがくが、肢体をからめとられ容易には解放してくれそうにない。気づけば後ろの鬼は次第ににじりよっていて、止めの一撃を準備していた。

ざくり。

「・・・！！！」

後方の鬼の頭部に剣が突き刺さる。目玉が裂け、後頭部まで貫く一撃。はたしてその司令塔を失ったのか、鬼は足元からその場に崩れ落ちた。

実は必殺の一撃を準備していたのはこちらも同じである。先ほど鬼の手が伸縮するのを見て、自分のオーガにも同様の性質があることを確信したためである。伸ばした腕を元に戻す。

「あとはコイツなんだが」

残り１匹。

残された鬼は当初の作戦が不可能となったため、死なばもろともという思いからか山乗りになって、首元に噛み付く。威力はそこまでたいしたことはないのだが、いかんせんこのままではまずいのは言うまでもない。するとその時である。

『胸部大型波動砲の発動要件を充たしました。効果発動に関わるコストは５６９８・３４ＭＰです』

再び意味不明の情報が画面に映る。しかし、現状を打破するにはいまやこれしか方法はないであろう。先ほどの剣に比べておよそ１０倍と若干コストが高い気もするが自分とあの少女の生命という、やむにやまれぬ反対利益をもちだしてこれを正当化する。

「ＯＫ、執行する」

男は想像した。絶大なる力をもって、この忌々しい鬼を地の果てへ

と吹き飛ばすイメージを。蓄積されつつある全ての怒りを叩きつけるイメージを。

その時、辺りには眩しい閃光が走り抜けた。光の波動とともに勢いよく放たれた強烈な衝撃波が前方にあるいかなるものをも吹き飛ばしてゆく。自分にしがみついていた鬼も、この光の波動によって自身の主たる部分を吹き飛ばされ、あえなく塵と消えていった。

残り０匹。

（二）

ひとまずは、ふりかかった緊急の危難を避けることに成功した。しかし、先ほどの砲撃のせいで精神を削られたような感覚が男を襲い、呼吸するのも苦しい。だが、意識が遠のくというほどのレヴェルではないので、むしろこれですんで良かったと感謝すべきか。

（そうだ、あの少女は無事であろうか）

男は鬼の目を通して辺りを見回す。

（居た）

少女は木陰に少し身を隠し、犬の手綱をしっかりと携えながらただただ呆然と立ち尽くしているのである。

（ええと、こいつから降りるにはどうすれば・・）

鬼に乗り込もうとした時とは異なり、鬼から降りるための装置は容易に発見できた。『ｅｘｉｔ』と記載のある赤いスイッチであるから、明らかにこれがそれであろう。

スイッチを押した途端、男の前方の壁面が中心から同心円状に消え

てゆき、外界と鬼の体内が繋がる。男はそこから外界へ飛び込み、少女のところへと向かった。

「大丈夫か。怪我はない？」

少女は状況がいまひとつよく読めてないのであろう、安心してよいのか、それともまだ警戒すべきなのかわからずにいた。もっとも、犬のほうはとっくに警戒をといていて、相変わらず面倒くさそうにしている。

「私、助かったの？」
「ああ、敵は倒したよ」

すると、彼女は安心したのか、ようやく緊張をといた。反面、安心したせいか、今頃になってひざの笑いが止まらなくなり、その場にへたりこんでしまった。

「あははは、変だね、私。震えが止まんないよ」

加えて、ほろりほろりと涙まで出てきて、挙句の果てにはそれは止まらなくなっていた。こんな時、一体どうすべきであろうか。積極的に手を差し伸べるべきか、消極的な態度を採るべきか。

「もう大丈夫だって。俺たちは助かったんだ」

結局、どっちつかずの当たり障りのない方法を採用し、少女をなだめることにする。
それにしても、この少女がついさっきまで鬼がそこまで襲い掛かっていたにもかかわらず、全然怯えていなかったとは誰も信じないであろう。

「いつもおとうさんに死ぬときは腹を決めろとか、醜い死に様だけは晒すなとか言われていたから、ずっと押さえ込んでたけど、やっぱり怖かったよぉ」

そのように、少女は嗚咽をまぜながら自分はがんばったのだという言い分を主張する。しかしながら、泣きたいのはこっちである。記憶のないこの男には逃げ出すことすら許されていないのだから。少し使うところが違う気もするが、男はこのとき、鬼の目にも涙か、とつぶやいた。犬は相変わらず面倒くさそうにして泣きじゃくる主人を見守っているのであった。

（三）

ようやく少女が落ち着きを取り戻してきたところで何かが近づいてくる音がした。ただ、この音は鬼の飛び跳ねるような音ではなく鉄と鉄が打ち付けあうような機械音である。

「あ、みんなきてくれたんだ」

少女はすっと立ち上がり、木陰から抜け出して、晴天にむかって手を振る。

すると、太陽の光を遮るかのように、大きな黒い影が現れた。そのまま、この影は私たちの付近に着地し、その姿を私に見せてくれた。それは鬼に比べて、かなり角ばったフォルムであって、いかにも旧式のロボットであり、あまりスマートではない。すると、その中から３０台半ばのいかにも軍人であるといった感じの体格の良い男性が身を乗り出してきた。

「おーい、無事かぁ？」

「うん、大丈夫！」

少女は救助に来たその男に向かって手を振りながら応えた。

「まったくよぉ、ここら辺は鬼がうろついてっから、犬の散歩もたいがいにしろっていつも言ってんだろ。ただでさえオメェ、犬も歩けば棒にあたるっつーか、オメェも歩くと鬼にあたるんだからよ」

「うっさいなぁ」

男は少女の無事を確認し、辺りの状況を見渡すと、一瞬遅れてその異様さに気づく。

「って、おい！あれ、オーガじゃねぇ？やべぇよ、なんでオメェんなとこにいんだよ、おい？」

男は軽傷にまみれた白いオーガを指差して動揺しだした。普通の人間であればいたって自然な防衛本能の発現行為であろう。

「西田さん、あのオーガは味方だから大丈夫」

この男、どうやら姓を西田と名乗っているらしい。名は明らかでないが、たけしではないかなとふと思った。この強面であだ名は、にっしーはないだろうから、たけちゃんではないでろうか。想像に難くない。まあ、今はそんなこと、どうでもいいのだが。

「おい、鬼に味方もクソもあっかよ！じゃあ、なにか？ここに倒れてる鬼全部あいつがやっつけてお姫さん助けたってのか？」

「うん」

少女は、まことにこやかな表情で頷いた。

「ざけんな。そんなの罠に決まってんだろが。今おれがそいつに引導を渡してやる」

だが、西田はそんな無垢な少女に向かって怒鳴る。すると、少女は一瞬にして怯えてしまうのだ。そして、西田は半分外に出していた半身を機械に乗りこませ、その手に所持する機関銃を男の鬼のほうに向けた。

「ちょっとまって。ホントなんだって」

少女は慌てて、西田の機械と男のオーガとの間に割り込む。

「この人がこの子に乗って私を助けてくれたの」

少女はこの人（男）をまず指差し、次いでこの子（男のオーガ）を指差した。これによって西田は鬼と同伴している不審な男の存在にようやく気づく。

「てめぇか」

そして、西田は男のほうに銃口を向けた。

「鬼さんがこの子になんの用だ。返答によっちゃ今ここでてめぇを撃ち殺す」

向こうはどうやら質問をしているらしいが、どうするべきであろうか。向こうは完全にこちらを少女の誘拐を目論んでいる悪人か何かと誤解している。返答によっては本当に撃ち殺されかねない。土下座でもして記憶喪失でした、とでも言うのか。馬鹿げているという

ほかない。

と、その時。

西田の顔が凍りつく。

「西田さん。本当だって言ってるでしょ。これ以上彼に銃口を向け続けるなら、たとえ西田さんでも許さない」

少女が男の前に立ち、西田をにらめつける。この感じ、あの時にふと見せた顔だろうか。男は彼女の顔を正面から見ているわけではないが、されど背筋がしびれるような感覚が走る。彼女ににらみつけられている西田の苦しみはいうまでもない。

「あのさ・・しーちゃん？おじさん、怖いんだけど・・・」

西田は、少女の逆切れに出鼻を挫かれて、威勢を失ってしまった。そうこうしている間に、もう一機がこちらに割って入り、幸い一触触発の張り詰めた空気を乱してくれた。もう一機の乗り手が拡声器らしきものを使って言う。

「え～。西田、その辺にしなさい。あと、詩季も」

３０台前後の女性の大人びた声が響き、両者を仲裁する。詩季とは少女の名であろうか。

「隊長～、おれはこいつのためを思って・・・」

「だって、西田さんが・・・」

「いいからあなたたちは黙ってください。あなたたちの感情論をだらだらきいてる、なんかイラついて来るのよね」

「・・・ごめんなさい」

隊長なる女性は言葉ひと言で泥沼になりつつあった紛争を一挙に解決し、互いの言い分をひっこめさせた。もうふたりとも下を向いて、すっかり黙り込んでしまった。

「それと、君」

隊長とされる女性はロボットを男のほうに向けて言う。

「この光景を見る限り、少なくとも鬼どもの味方ではないんでしょ」

男は首肯する。

「なら、ちょっとうちの事務所まで来ない？そこに転がってる鬼の運搬も手伝ってほしいから」

再び首肯する。というより、記憶喪失のため何より情報の欲しいこの男には首肯し難い理由など何ら見出せなかったからである。

「じゃ、決まりね。西田、これ運ぶの手伝って」

そういいつつ、隊長とされるロボットはさっさとそこに倒れていた一体の鬼を持って、さっさと行ってしまった。

「隊長～、鬼っすよ？あんなやつほんとに信じていいんすか？ねぇ、隊長？」

西田も隊長機の後に続いて行ってしまった。

すると、男と詩季という少女で、再びふたりきりとなった。それに

しても、あの人たちはこの少女を迎えに来たのではなく、ただ鬼を取りに来ただけか。
詩季はこちらを振り向く。例によって目は閉じられていた。

「ごめんね。西田さん、本当はやさしい人なんだけど、鬼のことになるといつもああなの。許してあげてね」

彼女は眉をひそめて、西田の代わりに男に対して詫びた。
それにしても西田の人間性は言われずとも今までのやり取りで容易にわかる。ありがた迷惑なほどの心配性。即ちそれは、彼がこの少女を妹のように思うが故の本心の現れ。ただ、少し器用に生きるのが下手なだけだ。

「さて、俺たちも行くか」

男は、このままここにいても仕方がないと、少女に対して、出発を促す。

「うん。乗せてもらってもいいかな?」

詩季は男の手をとって、なんだかわくわくしながらも、よもや断りはしないであろうということを当然の前提として訊いてきた。
男はうなずいた。けだし、首肯せぬことが極めて困難であったからである。
鬼のほうへ歩き出す。

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね。私は桐生　詩季。この子がきゅうすけ。よろしくね」

鬼のほうへ向かって歩きながら、彼女はそう自己と犬とを紹介して

くれた。とすれば、自分も自己を名乗るのがまた礼儀というもの。

「俺は・・・」

そしてふと思い出す。

男は何も覚えていないことを思い出すのである。これは一見論理矛盾を孕んでいるようであるが、論理的にありえないでないし、実際にそうなのであるから無理にでも観念して欲しいと思う。

「あ、そっか、君は記憶喪失なんだっけ？」

詩季は男の置かれている状況を察して、そう言ってくれた。しかしながら、彼女は男の名前が聞けなかったのが残念であったようで、少し苦笑いをした。

そんなやり取りをしている間に、ふたりはオーガに乗り込む。なお、今度は入り口を開けたままにしていたので入るには困らなかった。

しかし、今度は鬼の中に二人の人間と犬がおり、若干窮屈である。

まあ、やむをえないので入り口を閉じると、例によって『ｔｈｅ ｅｘｅｃｕｔｉｏｎｅｒ ９，ＯＫ』の文字が表示される。

何気なくこの字面をみていると、この鬼も自分を表す手がかりがこれだけであったなということに気づく。

「ナイン」

「え？」

詩季は、突然の男の発言に当惑する。

「とりあえず、俺の名前は『ナイン』」

ナイン。

自分でももう少しマシな名前にすべきではないかと思ったが、ナインとこの鬼とはおそらくこれからも一心同体であろう。（おそらく）かつての味方からも見放されたこのあわれな鬼と名前すらないみじめなこの青年とは境遇が同じなのだ。とすれば、皮肉にもしっくりくる名前ではないか。また、他に適当な名前の候補群など思い浮かばない。

「うん。ナイン君、よろしくね」

詩季も気に入ってくれたのか、笑顔を取り戻した。

「あと、ナイン君さ」

「ん？」

「私が泣いたこと誰にも言わないでよね」

例によって詩季の目は開いていた。どうやら冗談ではない時、この少女は開眼させるようである。私は鬼の操縦に紛れさせ、あえて聞かぬふりをした。きゅうすけは相変わらず面倒くさそうにあくびをするのであった。

第3話　鬼払い契約

―東京都町田市某所―

ここはかつて、東京のベットタウンとして、住宅地や商業用施設が数多く密集していたが、今ではそこそこ鬼の出没しやすい地域として危険度Cとの評価を受けている。なお、危険度はAからFまであり、Aが最も危険という。したがって、ここは3番目に鬼が出やすい危険な土地であるとして、かつてほどは人も住んでおらず、所有者がいなくなってしまった土地建物も多く残っている。実際に街中を歩くと、住宅は多いものの、人気はほとんどないか、あるいは全くない。いわば、ゴーストタウンと化している。もっとも、まだ使える家が大量に放置されていることを良いことに、火事場泥棒的な不法占拠者も絶えず、にぎやかなところはにぎやかでアナーキストには絶好の街かもしれない。そのような街の一角に、ナインが出会った少女、桐生詩季の所属する事務所がある。ナインは彼女の案内のもと、ようやくそこに到着した。

外の看板には『公益社団法人　東京陸運保険機構』とあり、５０坪ほどの横長のガレージと、隣には別棟が付随していた。

ふたりがその敷地内に入ろうとすると、中から小ぢんまりとした女性が出てきて、拡声器を使っていう。

「お乗りになったオーガはとりあえずそちらのガレージに置いて、隣の事務所においでください」

誘導員の指示に従って、ガレージに入る。そこには数台のロボットと先ほど持っていった鬼が2匹倒れていた。ナインたちも、ひとまずここから降りて事務所へ向かう。

（二）

「空いている椅子、適当に見つけて座ってもらえる？」

ナインは、軍人の事務所というから一体どのようなものかと思っていたが、ステンレス製の机がいくつかひざを突き合わすように並べられていて、ビルの一室を借りたデスクワーク専用のオフィスにしか見えなかった。ただし、この部屋からでもガレージ内の様子を見ることができるようになっており、鬼の死体が窓の風景となっている点は例外である。

この部屋の中には現在８人ほどの被用者がせかせかと筆を走らせたり、キーボードを叩いたりしていた。さらに、部屋の隅には一つだけ離れ小島のようなデスクがあって、そこにも一人女性がいた。

「ほら、なにぼーっと突っ立ってんの？早く座って」

隅にいる背の高い女性が無意味に立ちすくんでいたナインに早く座るよう働きかける。ナインは、ひとつ空いているパイプ椅子を見つけてそれに座る。

「それにしても、軍の事務所という割には、武器とか一切置いてないんですね」

不思議なことに、武器らしき武器はこの部屋に一切ない。急に襲撃があった時、一体どうしているのだろうかとナインも不安にならないでない。

「うちは、どちらかっていうと保険屋が本業だから。あ、君、もうちょっとこっち来て」

背の高い女性は遠慮がちな位置に腰を掛けたナインに対し、若干近寄るよう手のジェスチャーによって指図した。

「はじめまして、だったわね。私は弥生　遼子。ここの代表理事兼隊長兼整備班長兼工場長をやっているわ。まあ、めんどくさい肩書きだけど、好きなので呼んで」

この女性、弥生遼子はおそらく西田が隊長と呼んでいた人物であろう。年はやはり３０前後か。黒のパワースーツをしっかりと着こなしており、フレームレスのインテリ眼鏡をかけている。しかし、彼女は仕事が忙しくて、その長い髪の手入れにまで気が回らないのだろうか、彼女は肩にかかるくらいの長さの茶髪をみだりに垂らしている。もう半年前にかけたようなツイストパーマは、今となっては髪の毛をだらしなく見せるものでしかなくなっているのである。とはいえ、彼女の容貌からはいかにもキャリアウーマンというべき誇りと強さを感じる。それにしてもこの女性の肩書きの数は半端ではない。

「で、早速本題に入りたいんだけど、別に尋問してるわけじゃないから答えたくなかったら答えなくてもいいから」

弥生はそのように言うが、後ろの方からは西田がこちらににらみを利かせていて、強制捜査的雰囲気が漂っている。あくまで任意の取り調べだというのであれば、まずは後ろに控えている西田を排除してもらわないことには事実上の強制尋問である。したがって、とてもではないが黙秘などできそうもない。

「まず、なんで君はオーガをもってたの？」

最もな質問であるとナインは思って、返答に困った。鼻の上に嫌な

汗をかいているのがわかる。

「わかりません」

しかし、このように応えるしかないのである。ナイン自身なぜ鬼と一緒にいたのか身に覚えがない以上、不知とせざるを得ないのだ。しかしながら、この人たちがナインの言を信じてくれるとは到底思えない。相手方のナインに対する心証は悪くなる一方である。

「じゃあ、どうして君は同じ仲間である鬼に狙われてたの？」

これも良い質問だなと思った。鬼が鬼に襲われるなど通常考えられないはずである。よほど合理的な説明をしない限り、罠ではないかと疑われても仕方がない。それだけに、ナインは返答に知恵を絞る必要があった。

「わかりません」

とはいえ、合理的な説明などできるわけもなかった。なぜなら、その理由はこちらが聞きたいぐらいなのだから。

「えーと、君がいたところは八王子森林地帯なんだけど、そこにいた理由は？」

意外にもあっさりと質問をパスしてもらって、ナインは安心する。もう開き直って、どのような質問が来ようが構いはしないと思うようになった。

「すいません、それもわかりません」

今までの質問全て不知で通してしまった。もう相互理解など実現しないのかもしれない。ナインは、半ば自棄的になってしまっていた。

「ふーん」

不満なのか、いまいち腑に落ちないのか、弥生はこまったこまったと言わんばかりの顔をして頭をかく。しかしながら、全て嘘偽りのない答えである。

ナインは無実の被疑者が捜査当局によって犯人に仕立て上げられ、毎日朝から晩まで自白を求められるのは想像を絶する苦痛なのであろうと身をもって知った。身に覚えのないことを言わされる悔しさとはそれほどまでに大きいのだ。しかし、そうは問屋がおろさなくて、取調べにおいて黙秘を続ける被疑者に対しては必ずといっていいほど正義の名の下に恐怖の洗礼がなされるのも通例であろう。いくら悔しくとも恐怖と疲労の末に自白に及んでしまうのである。これでは黙秘権の保障など画餅に帰してしまうであろう。ナインも今からこのようになるのかと思いをめぐらせていると、案の定、後ろの方で苛立ちを抑えていた西田がついに我慢の限界を迎えるのであった。

「てめぇ、知らぬ存ぜぬで通ると思ったら大間違いだぜ。隊長、やっぱこんな奴信用ならねぇ。この野郎、完全に俺たちをなめくさってんすよ！」

西田は溜め込んだ怒りとともに、ナインを指差して大声で怒鳴り散らした。

「あんたは黙ってて」

弥生は眼鏡の下の細い目でにらみを利かし、そのことばひとつで西

田は押し黙らせてしまった。おそらくこの男の方が年長であろうが、完全にこの女の尻に敷かれている。西田は、口をつむいでしまい、部屋中に緊張が走った。

「あの、社長」

西田のせいで話を切り出しにくい雰囲気ができていたが、勇気を持って詩季がおそるおそる手を挙げた。それにしても、この女性、隊長だとか社長だとか呼ばれてややこしくならないのだろうか。

「なぁに、詩季？」

弥生は西田に向けていた殺気に満ちた表情とは対照的に、少女にはまことにこやかな笑顔を向けた。場の空気を悪くしたことを少し反省したのだろうか。

「ナイン君は記憶喪失なんです。多分嘘ではないと考えます」

弥生は頭のどこかでひっかかっていた謎が腑に落ちたのか、表情を緩め、姿勢を正すしぐさをした。

「なるほどね。仮にそれが本当なら、ある程度説明はつきそうね。教えてくれてありがと」

弥生はそういって眼鏡を掛け直すと、なにやらメモ用紙に殴り書きをはじめた。そして、まるで速記語のような彼女にしか解読できない文章群を完成させるとペンを机の上に置いた。

「えーと、君はナイン君って言ったっけ？あ、もっと楽にしていいわよ」

気がつけば緊張で背筋が異様に伸びていた。少し喉もからからである。

「はい」

やや背もたれに寄りかかるように浅く座りなおす。

「次からの質問はこちらからも交換条件を出すけど、その代わりかならずイエスかノーで答えること。いいわね」

とりあえず、第一段階はクリアか、とナインは思った。今となっては、詩季のおかげで『ナイン記憶喪失の理論』が広まっているので、都合の悪い質問はこれを援用すれば万事問題ないであろう。

「イエス」

ナインは、なんとなく気が楽になり、どんな質問でもこいという勢いで答えた。

「お客様、まずはお茶をどうぞ」

そのタイミングで、給湯係の女性だろうか、先ほど入り口で誘導してくれた小さな女性職員がナインの前にお茶を置いた。そういえば自分は客として招かれて来たのであった。ここに来て一度もそのような取扱がなされなかったため、すっかり忘れていたのである。

ナインは、お茶を少し口に含んで、からからになった口内を潤す。

どうやらここからが本格的な交渉になりそうだということで、いよいよ覚悟を決める。

「まず、私たちがあなたに提供してあげられるのは、相当額の報酬および第1級危険業務取扱手当ならびに君に対する各種保護手続ってところかな」

相当額の報酬。それはいったい何に対する報酬を意味するのだろうか。それに第1級危険業務というのも気になる。いや、これらの情報を有機的に結合させて推理すれば、容易に判断できる。

「それってつまり」

「察しがいいわね。そう、しばらくここで働いてみない？どうせ他に行く宛てもないんでしょ」

弥生遼子は、片目をウインクして笑顔で答えてくれた。

「質問後段に関してはイエス・・・」

かなり意外な質問がなされたため、面食らってしまうのである。もっとも、それはナインだけではないようであるが。

「ちょ、隊長冗談でしょ。俺はぜってぇやだぜ。たいちょ・・・」

弥生は西田の顔に向けて、机の上にあったコーヒーカップを投擲した。それは、二度も同じことを言わせるなという意思の現れであろう。幸い熱い液体は入っておらず、冷めた液体しか入っていなかったので火傷はしなかったようだ。むしろ中身が熱かったら熱かったで火に油を注ぐようなものか。西田の顔を茶色の液体が滴り落ちる。

「それで、業務内容はあれですか」

聞くまでもない。この人は鬼の力を利用したいのであろう。だから、

ナインはため息をついた。

「そう。鬼退治よ。ちなみに給与なんだけど、うちは歩合制だから基本給２０万円プラス仕事量ってとこ」

ナインは待遇に不満があるわけではなかったが、いくら自己防衛のためとはいえ、敵であるオーガを使うのははたして平気なのだろうかと気になった。

「とはいっても、俺が使ってるのは敵のオーガですよ。そのオーガが鬼の討伐に加わって平気なんですか？そんなことしたら軍法会議とかにかけられませんか？」

ナインはやや大げさに極端論を持ち出してみるのである。

「うちは大丈夫よ。防衛省とは契約上の関係しかないから鬼使おうが何しようが債務不履行にはならないわよ。第一、新日本国憲法７９条３項で軍法会議を含む特別裁判所は禁止されてるから、そんなのありえないわ」

しかし、あっさりと反駁される。おまけに、弥生は契約書読む？といった表情でＢ５サイズの用紙２０枚ほどある分厚い契約書をナインの前に投げる。まとまりのある紙が落ちる音というのはどうして重みが感じられるのだろうか。

「一応言っておくけど、うちらはあくまでビジネス。世界の平和を守るなんて大層な理念はこれっぽっちもないから、そこらへんも理解したうえで答えてね」

弥生はナインの心にダメ押しの一手をかける。正直、今のナインに

は周りの世界などどうでもよかった。記憶のない自分にとって、この国が母国なのかもわからないし、いなくなって困る人もおぼえていないから、世界平和のためとかいう熱い気持ちが芽生えてこないのである。また、こういった集団のほうが気兼ねなく動けそうで好都合なのだ。

そうだ、自分でも回りくどかったかと少し反省しているが、もう答えは決まっているのである。自分のなくした記憶を取り戻すためにもなり、この人たちのためにもなり、自分の生活のためにもなる。これほど好条件な環境はもう存在し得ないであろう。

「イエス」

「OK、これで交渉成立ね！じゃ、この契約書に署名・押印してちょうだい！署名は一回的な芸名とかでもいいわよ。有事の時は筆跡鑑定で特定できるから。あと、印鑑がなければ拇印でもいいわ」

一体いつの間に用意していたのか、弥生は雇用契約書と万年筆、さらには朱肉をナインの前に次々と置いていく。

「契約書の内容はほとんどさっき述べたとおり。あとで、契約解除事由とかいろいろ読んどいてね」

弥生は4から5枚組みの契約書をぱらぱらめくり、もう読んだよねといった顔を向けて、すぐに署名欄にサインするよう指図した。契約書の内容を一瞬見たが、字が非常に細かいにもかかわらず、紙全体に隙間なく記載がなされており、読み終えるだけで1時間はかかりそうであった。したがって、先ほどの説明ではポジティヴな条項しか説明できておらず、ネガティヴな条項は全く説明がなされなかったと見るべきか。

とはいえ、どんな契約書であっても、ナインが今からしようとしている仕事は鬼を狩る仕事である。所詮人間同士の約束事に過ぎない

契約書上の問題は最終的に金で解決できしまう。それとは違って、鬼との戦いは気を抜けば問答無用に自己の死に直結しかねない修羅の道。それに比べれば、契約書にどれほど不利な条項が含まれていようが恐れるに足らなかった。

それにしても、弥生のやり口は、まるでたちの悪い詐術のようで、彼女に乗せられてはあっという間に契約書が完成してしまった。ナインは、決して騙されたのではない、自分の意思で決めたのだと、何度も自己に言い聞かすしかなかった。

「ふー、これでいいですか」

最後に自分の親指で指紋押捺をして完成する。

「OK，これでナイン君も東京陸運保険機構の一員ね」

団堂は、弥生が『東京陸運保険機構』と言ったことをきっかけにして、そういえば入り口の看板とか、契約書の上の方に東京陸運保険機構（以下、甲とする）とか書いてあったことに気づく。おそらくこの人たちの団体名義であろうか。

「あの、いまさらなんですけどここって軍隊ではないんですか？」

「まあ、形式上はただの公益社団法人よ。その方が国の予算もおりるわ、税金がかからないわで利点が多いのよ。一応、国内の陸上運輸における安全を保持し、もって、国民の生命・身体・財産の保護に寄与することを目的とする定款記載の団体目的も果たしてるし。あと、公益法人は非営利団体っていう建前があるから、実は金儲けをしているなんてばらさないでね」

この弥生遼子という女性、伊達に肩書きが多いだけではなくて、実質的にもかなり狡猾であるとナインは思った。

「で、実質は防衛省に雇われた非正規軍第１３部隊っていうのが私たちの正体。要するに、傭兵部隊って感じかな」

詩季がそのように補足的な説明を加えてくれた。

「そういうこと。だから、お得意様である防衛省からお呼びがかかればすぐにでもはせ参じて鬼を倒すこと。あとは、近くに鬼が現れたら、それを仕留めてお得意様に献上するの」

弥生はびしッと人差し指を立ててわが社の理念を口にする。

「あの、献上って？」

「ええ、オーガって賞金首みたいなもんだから、これを捕まえて防衛省にもってくと報酬がでるのよ。ちなみに、今日の３匹（１匹はほとんど消えちゃってたけど）は一番ランクが低いから１体につき１０００万円。今の時代、うちみたく鬼退治専門の傭兵派遣会社なんて珍しくないのよ。いやぁ、しかし、今日はナイン君のおかげでもうかっちゃった」

弥生は２０００万円が目前にみえているのか、げらげら笑う。しかし、本来恐怖の対象である鬼すらビジネスチャンスにしてしまうとは。このことからナインは、善悪を超越した人間の金への飽くなきまでの欲望とは鬼以上に恐ろしいものであると思った。

「あと、現在ではあと2種類の鬼が確認されてて、もちろんこれらも懸賞の対象よ。すなわち、通称、赤鬼と青鬼。前者と交戦した部隊はいくつかあるんだけど、そのどれもが全滅しているから、これはすごく危険ね。後者は、過去に１つだけ捕獲例があるんだけど、すごい犠牲を払った上で成功させたみたいなのよね」

弥生はプリントアウトしたそれぞれの鬼に関する資料を見せてくれた。赤鬼と呼ばれる方の資料には特に特筆すべき点はない。このことは、逆説的にいえば、資料を持ち帰らんとする者は資料を持ち帰る前に殺されるということを説明してくれている。

他方、青鬼はちゃんと写真が残っているようだ。ところがこの鬼、鬼というには華奢な体つきであり、しかも大きな羽が生えている。ただし、青いという一点に関しては厳密に貫徹してはいる。

「あと、鬼の本隊はどこを拠点にしているのかはわかりますか」

「それなら、結構明確に判明してるわ。まず、大きく分けて鬼は9つの部隊を日本全土に分布しているの。それぞれ、関東は霞ヶ関、横浜、浦和、東北は仙台、北海道は札幌、中部は名古屋、関西は大阪、京都、九州は福岡だったかな。本隊に近づくと、必ずと言っていいほど赤鬼が見張りを担当しているみたいだから本隊の5キロ圏内には誰も近づけないのよね」

このことから、日本の大都市圏はほとんど鬼の手に落ちているということが明白であり、今の日本の危機的状況を痛烈に理解できる。なるほど、いくら金を積もうとも、政府は鬼を排除したいわけである。なぜなら、鬼退治が成功すれば、政府の支持率は磐石なものとなるのは明らかだからだ。

「でも、昨日、浦和にあった鬼の本隊が突然消えたらしいのよ。まあ、こっちとしては脅威が減ったから何にもわるいことはないんだけど、やっぱり気になってね。そんな時浦和からそう遠くない八王子にあなたが現れたのははたして偶然かしらね」

弥生が独り言のようにもらしたこの言葉、たしかにナイン自身にとって、嫌でも気になるものであったが、今はまだこれに答えること

はできなかった。

（三）

―その夜であった―

場所は事務所付属の仮眠室。弥生が日中、ナインにこういったのである。

『ナイン君、悪いんだけど、今、君の部屋はないから、ひとまずそこで生活してくれないかな』

『はい、いいですよ・・ってここですか？』

『うん、ごめんねぇ』

これにしたがって、ナインはしばらくこの部屋で起臥寝食をすることになった。しかし、ここは仮眠室というより、仮眠室という記載のある真新しい紙が何人かの手によってついさっき張られたのであって、もとは2畳間ほどしかない縦長にソファが2つ並んでいるだけの喫煙所である。いまは季節的に冬に一直線であり、夜は相当気温が下がるのだ。したがって、ナインに与えられた部屋は、夜は結構冷え込み、しかもヤニ臭いのであった。

喫煙所から仕事場へ戻るためのドアには四角いガラス製の覗き窓がついていてそこから仕事場の光が漏れてくる。まだおそらく仕事中の人間がいるのであろう。

（そういえば、はらへったな。）

先ほどから腹の虫が収まらない。彼が八王子で目が覚めてから今の今まで何も口にしていないのである。

と、その時、急に喫煙所の電球が点き、ドアが開いた。入ってきた

のは詩季ときゅうすけであった。

「ごめん、起こしちゃった？」

長く暗い部屋で考え事をしていたからか、急に部屋が明るくなったことで目が明るさに慣れないでいる。

「いや、寝付けなかったから。それより一服しにきたのかい？」

私は寝そべって、２つのソファを占領していたが、体を起こして、詩季に近い方のソファを譲る。

「あの、ナイン君。私、そういう風に見える？それに、まだ１９だから。もう行こう、きゅうちゃん。ヤニ臭くなっちゃいますよ」

そう、未成年者の喫煙は法律で禁止されている。詩季は機嫌を損なってしまったのか、手に持っていた食料をナインの方に放り投げ、退出の意思をあらわにする。

「悪い、冗談だよ」

おそらく、詩季はかなりの労力を費やしたに違いない。にもかかわらず、せっかく食料をもって様子を見にきてくれた盲目の少女を不機嫌なまま帰してしまうのは非常に虫の居所が悪かったので、慌てて慰謝の念をあらわす。

「おもしろい人」

冗談だったのはあちらも同じであったようだ。少女は笑顔を取り戻した。

（四）

「あのさ、詩季はどうしてここに入ったんだ？」

食料を胃に納め、ナインたちは少し談笑を始めていた。

「私、正確にはここの社員ではなくて、インターン学生なの」

「あれ、昼間軍人だっていわなかったっけ？」

ナインは確かに、この少女が自分のことを軍人と名乗っていたことを思い出した。現代は学徒出陣というべき時代なのだろうか。いや、インターンというぐらいだから任意で軍人の仕事をしているのであろう。それにしても弥生は学生までも兵隊に使ってどうする気なのであろうか。

「昼間、私が軍人だって言ったのは説明が面倒だったからで、本業は学生。ここはおとうさんの紹介で働かせてもらってるの」

しかしながら、今や学生もおちおち勉強に遊びに勤しんでいる時代ではなくなったようである。大学の講義中であろうが、ひとたび鬼に襲われれば終わりであるから。鬼の前ではどれほど理論武装したところで、一瞬で首を刈り取られるだろう。

「でも何でよりによって、目の悪い君が傭兵なんだ」

「う～ん、目が見えないからかな」

問いを持って問いを答えるように返答してくれた。ナインは、もう少し実質的な理由を説明して欲しいと思った。

「私、目が見えないでしょう。だから、料理とかそういう仕事は全然だめだけど、ロボットの操縦は機械が私の目になってくれるから案外簡単なの。もちろん、怖い時もあるけど、いつもみんなが助けてくれたよ」

ふつうは料理など一般的な作業ができないなら、当然に普通の人ができないこともできないと考えるのではないかと思う。それだけに、この少女は変わった論理を持っているのだなと、ナインは感じた。

「西田さんて、怖いだけかと思ってたけど、案外、弱みがある・・というか、とても間抜けな人だね」

ナインは、昼間の西田の醜態を思い出して言った。

「あはは、あれは西田さんいつものことだから。西田さん、社長のこと好きだからああやって尻に敷かれているの」

そういえば弥生も非常に変わった人間である。冷静で知的で狡猾で、西田とは全然違う人生を歩んできたのはいうまでもないだろう。例えるなら、弥生は年収１０００万円以上のホワイトカラー上級層の家庭に生まれ、英才教育を受け続けて、当然のように一流大学に合格する人間であるが、西田は飲んだくれの親父とそれを罵倒する肝っ玉なお袋に叩かれながら、勉強なんてすることもなく外で友達と日が暮れるまで遊び続けて今まで生きてきた人間であるのだろう。ここまでくれば、両者はもはや別の生命体に近い。

「社長はちょっとお金に汚いところもあるけど、少なくとも卑怯な人じゃないよ。むしろ、すごく負けず嫌いな人。これ、社長に言ったら怒られるかなぁ・・・」

少女は、閉じた瞼をさらに強くしかめて、数秒悩むしぐさをみせる。

「大丈夫、誰にも言わないから」

彼女は、言いたくてたまらないような様子を見せていたので、ナインはその背中を少しだけ押してあげた。

「そうね・・。社長はもともと防衛省の官僚だったの。だけど、リストラ名目でここの代表理事のポストに強制的に天下りさせられたみたいで、その時の社長は悔しさのあまりボロボロ泣いてたって西田さんが言ってた」

弥生という人間はただの合理主義者かと思っていたが、意外と人間っぽいところもあって安心した。人間は強さと弱さとのバランスが何よりも重要である。それにしても、西田と弥生との関係は結構古いものなのだなと思った。もとより、そうでなければコーヒーをぶっかけるなど到底できないであろうが・・。

「社長と西田さんが出会ったのは防衛省時代で、一般兵の指揮監督をしていた社長に西田さんが一目ぼれしたそうなの。かたや本庁勤務の指揮官、かたや一般兵卒よ。でね、・・」

（桐生詩季か・・）

ナインは、彼女の話半分に、すぐ手の届きそうな位置に居る彼女を見つめる。記憶のないナインにとって彼女が重要な存在になりつつあるのは何となく気づいていた。彼女がナインを信じてくれなかったなら、今頃途方にくれていたに違いない。その意味で、ナインが記憶を失ってからできた仲間第一号は彼女である。

それにしても詩季というこの少女。丹念にとかされた黒く綺麗な髪。それとは対照的に白い肌。か弱く伸びた華奢な肢体。その容貌はまるで日本人形をも連想させる、和の世界に潜む美そのもの。また、盲目のため常に目を閉じているその独自の表情と相俟って、この少女が纏うアウラは神秘的ですらある。

ただ。

（よくしゃべる子だな・・）

ナインは、詩季の足元で伏せているきゅうすけをみる。やはり、めんどくさそうにしていたのであった。

このあと、詩季が話しつかれるまで、現在ナインが知っているメンバーの噂話が続いた。

第４話　鬼ニ宿リシ、心之光

『先生、おはようございます』

自分の前に、ゆらゆらと浮かぶ八つの影がある。それはまるでモザイクのようで、実体がなく、どの影が誰のそれであるか判別できない。いや、そもそもそれは、人間のものであるかどうかすらも疑わしい。

『先生・・・』
『先生・・・』

そして、その奇怪な影たちは、どうやら自分の方を向いている。腰をくの字に曲げて、ひたすらに『先生』とだけ言葉を発するのだ。

『やあ、捕まえたよ・・・』

すると、八つの影のうち、ひとつの影が躍り出てきた。その影は、見るもの全てを切り刻んでしまうかのような細い目をこちらに向けた。それによって、自分の身体は恐怖に支配される。

「なんだ、お前は・・。来るな。来るな」

怖くて、逃げ出したい気持ちでいっぱいであるが、金縛りにでもあったかのように身体が全く動いてはくれない。

『チャプター９・・・待っていたんだ・・ずっと・・・』

そして、動けない自分に影が絡み付いてきた。そのあとに続くよう

に、残りの影もハイエナのように群がってくる。叫び声を挙げたい。でも、声すらでない。完全なる無抵抗である。絶望を甘受するのだ。そのときの自分の恐怖は、とうに絶頂を迎えていた。

（二）

「うわぁぁぁぁぁぁ」

ナインは、突然にして飛び起きる。

汗びっしょりで、シャツが身体にはり付いてしまっているほどだ。

「夢か・・・」

辺りを見渡すと、自分は現在、東京陸運保険機構に設置されている狭い喫煙所にいることがわかり、ナインは内心、ほっとしていた。だが、心臓の高鳴りは暫くは落ち着きそうも無かった。

「ナイン君、大丈夫?」

事務所に隣接しているこの喫煙所での会話は、ある程度、事務所にもれてしまう。そのため、ナインの叫び声は事務所に到達していたのであろう。そこで、ナインの様子が心配になった桐生詩季が、彼の様子を窺いにきたのだ。

「怖い夢でも・・見たの?」

彼女は、目が見えずとも、ナインの心拍数の異常性からして悪夢にうなされていたと感じた。現在の彼の鼓動のリズムは、人が驚いたときのそれと一致しているのだ。

「いや、すまない。大丈夫だ・・・」

ナインは、なんとか落ち着きを取り戻した。それにしても、怖い夢を見ていたのはたしかだが、具体的にどのような夢であったのかは、もうほとんど記憶に無かった。なにが怖かったのかすら思い出せないのだ。

「そう・・・」

詩季は、なんとなく下をうつむいてしまった。だが、ワン・クッション置いてすぐに、彼女は顔を上げて、ナインに笑顔を見せた。

「とにかく、おはよう。ナイン君。といっても、まだ朝の7時すぎだから、出勤時間までまだ少し時間はあるけど・・・。もう少し寝てる？」

「いや、もう目が覚めちゃったよ。だから、俺も起きるさ」

そういって、ナインは重い腰を持ち上げた。そして、ふと、詩季は部屋に違和感を感じて、ナインの身体を触りだした。

「あ、ナイン君、すごい汗。着替えないと風邪ひいちゃうわ」

ナインはそういわれて、自分の汗の様子を見てみた。やはり、けっこう汗で湿ってしまっているようだ。

「そうはいっても、着替えなんて無いぞ。それにこれくらい、問題ないだろう」

「だぁめ。最初に着ていた戦闘用スーツあるでしょ。ひとまずそれに着替えなきゃ」

「あれか・・」

戦闘用スーツ、たしかに最初はそれを着衣しており、そこに脱ぎ捨てたのを置いているが、強く身体を絞めつけるので、できればあまり着たくはない。

「わかった・・」

ナインは、びっしょり濡れて、脱ぎにくくなったシャツを必死に脱ぐと、上裸になる。

「てか、別にこれでもよくないか?君は、目が見えないし・・」
「そうだけど・・・。気分的に嫌・・・。それに、そのままだと寒いよ」

外を見ればわかるが、季節はもう秋の終わりである。上裸でいられるほど温かい気温はとっくに過ぎ去ってしまっているのだ。それにしても、ナインは、彼女に毛嫌いされている気がしてショックであった。

「これも、インフォーマルな生活に似つかわしくはない代物なんだがな。気分的に嫌ならしょうがないか・・」

事務所において、ひとり戦闘服を着ている光景を想像すると極めて滑稽であった。だが、女性に嫌と言われては仕方がない。

「あ、ちがうの、ナイン君の裸が嫌とかじゃなくて、なんとなく、私が恥ずかしいから、気にしないで」

詩季は、慌てて訂正してくれた。それを聞いて、ナインは結構救われた気がする。

「いいよ。俺も女性の前で、不適切な行動を採りたくないからな。ひとまず、これを着ておくよ」
「ありがとう」

ナインは、改めて、きつきつの戦闘用スーツに足を滑り込ませていった。

「ひとまず、それを着たらナイン君の服、買いに行こう」
「って、これで外を出歩くの？」
「うん。だって、私、紳士服なんて持ってないし、ここにはそんなものもないよ」
「そうなのか・・。なら、詩季が適当になんか買ってきてくれよ」
「私、目が見えないから、ナイン君が似合う服なんて全然わかんないもん。間違って、スカートとか買ってきちゃうよ」

詩季は、いたずらな笑みを浮かべて答えてくれた。それにしてもこの女、自分に都合の悪いときだけ、盲目の少女でいるとはふざけている。どうやっても、生きた感度センサーである彼女が間違ってスカートなんて買うわけがないだろう。

「ったく、わかったよ。でもさ、仕事までそう時間ないだろう？」
「え？そんなの全然大丈夫。一応、拘束時間は８時３０分からだけど、何にもやることないもの。社長には、ナイン君の生活必需品を買いに行ってましたって言えば、オッケー」
「ええ？いいのか、そんなんで？」
「大丈夫だよ、ほら。早く行こう」

詩季は、なんとなく要領の得ないナインの背中を押して、事務所の外へと追いやっていく。

ふと、ナインは彼女の足元に這いつくばっているきゅうすけと目が合った。
彼は、ナインに対して同情をしてくれているようであったが、知らん顔してナインから目を逸らした。

外に出ると、ひんやりとした冷気がふたりと一匹を包んだ。事務所の中にいる限りわからなかったが、外は結構寒い。あのまま湿ったシャツを着ていれば、高確率で風邪をひくという結果になっていただろう。

「それで、どこに行くんだい」
「えぇっと、町田の駅前にファスト・ファッションのお店があったから、そこまで歩いて行きましょ」

町田市自体、人口の多い街ではなくなっていたため、すれ違う人はほとんどいない。どうやら、すれ違う人々に蔑まれながら歩くという可能性は低いようで安堵した。

「それにしても、君は歩くの早いな。そんなに早く歩いて怖くはないの？」

詩季は、きゅうすけに引かれながら、まるで盲人とは思えないほどのスピードですたすたと歩くので、ナインは舌を巻いた。

「もう、ずっとこの街を歩いているもの。それにきゅうちゃんがいれば、私、最強よ」

少女は、さらにスピードをあげてみせてくれた。きゅうすけも、なにやらどや顔でナインの方をみて、調子に乗っているようだ。

「おい、そんなに早く歩いたらさすがに・・・」
「きゃあ」

言わんこっちゃなかったようだ。調子に乗った彼女は、石に気づかず、そこに蹴躓いてしまった。

「いたぁい・・」

詩季は、転んだ拍子に膝をすりむいたらしく、負傷箇所をさすった。

「大丈夫か？」

ナインは急いで彼女のもとへ駆け寄り、スーツに装備されていた簡易救急セットを取り出した。そこには、消毒液に浸しこんだガーゼと、絆創膏が内蔵されていて、擦り傷の手当にピッタリであった。

「調子に乗るからだ。ほら、足をみせて」
「あ、うん・・」

ナインは、パックをあけて消毒液でびっしょりのガーゼを取り出し、傷口に当てる。すると、血液と混じった消毒液が滴り落ちてくる。

「しみるか？」
「ううん、大丈夫」

負傷箇所の防腐処置が完了すると、ナインはそこに絆創膏を当てた。

「よし、これで大丈夫だろう」
「あ、ありがとう・・」

彼女は、しりもちをついたまま張られた絆創膏を数回指でさすり、ぼぉっとしていた。

「それと、詩季」

「何？」

「パンツ見えてる」

彼女は、ナインの助言により現状を認識すると、顔を真っ赤にした。

「もぉやだぁ。最低」

彼女は慌てて立ち上がった。すると、どこからともなくナインの頬に強烈な平手が飛んできた。

「ナイン君の馬鹿」

そして、彼女はナインを置いて、ひとりすたすたと先に行ってしまった。

「なぜ俺は叩かれなければならないんだろう・・・」

「わんわん！！」

ナインは、頬をさすりながら、ぼそりとつぶやいたのであった。

（三）

その後、ナインが公益社団法人東京陸運保険機構に入社して3日が経過した頃である。

この三日間は特に防衛省からの派遣要請も出ていなかったので、弥

生遼子に大量の事務処理を任されていた。なんでも、わが社のアイドル、通称『あいちゃん』こと田中　愛という代表理事専属の秘書が風邪で休んでしまい、業務が著しく滞っているそうなのである。仕方なく、ナインは最近捕らえた鬼の売買記録などを整理したり、武器・弾薬などを発注したり、喫煙所を掃除したり、わが社の印章を押し付けられて取引先の営業にまわったりとやることは意外に多かった。それにしても、『あいちゃん』なる人物はいつもこれほどの事務をこなしているのかと思うと不憫で仕方なくなる。弥生が被用者に訴えられる日がくるのもそう遠くない未来の話であろう。

ところで話は変わるが、この前、ナインが仮眠室兼喫煙所で本を読んでいたところ、偶然にもタバコを吸いにきた西田と鉢合わせてしまったという小事件が起きた。いつもならば、修羅場となる前に弥生が西田を止めてくれるので助かってはいたのだが、この日ばかりは彼女も不在であった。

ところが、西田はナインを排斥しにきたわけではなく、今までの非礼を詫びると言ってきた。はじめはナインも殴られるのではないかと警戒をしていたが、ひざを突き合わせて話せば、結構話のわかる人間であることに気づいた。彼は、鬼に兄を殺されたという身の上話をしてくれたのである。それならば、ナインを殊更に目の敵にしていたことも筋が通る話である。それでも、この男がそんな人間臭いはなしをするのは例外中の例外であり、多分、たまりかねた弥生にこっ酷くしかられたので、やむをえず謝りにきたに違いない。理由は何にせよ、そういうわけであるから、今ではナインと西田とは仲良しになりつつある。

さらに最近ナインは、読書にはまっているのである。ここの事務所から徒歩5分のところに大きな本屋があって、仕事が１９時に終わると毎日（といっても3日だが）本を買いにいっては仮眠室で読み漁った。ちなみにこの時にはまっていたのはニーチェの著作であり、

かなり難解であるが時間を忘れて読みふけっていた。よって、今ではこの喫煙所は簡易的なナインのための書斎と化しており、所内の喫煙者も気軽に利用できずに困っている。中には、近くのカフェテラスまでたばこを吸いに行く者までである。しかし、言い分があるのならば代表理事に言ってもらいたい。ここにナインを置いたのは紛れもなく彼女である以上、ナインが非難されるのは筋違いというものであるからだ。

詩季もこのようなナインの本好きを見かねて、大学に入ったらどうかと提案する。ナインはこれに対して、？いまさら無理ではないか、？仕事はどうするのかと反論する。彼女は、？の反論に対して、社会人枠なら学力さえ足りてればいつ入学しても問題ないことを挙げ、？の反論に対しては、社長のデスクワークなんてやらなくていいよという。あの人、仕事をサボりたいだけだからとさらにいう。ただ鬼が出てきたときだけは仕事するようにすれば良いというのだ。なるほど、それなら今度、社会人枠で入学してみようかなと密かに野望を抱いたのである。

して、３日が経過した次の日であった。弥生遼子から新しいことがわかったから早くガレージに来るよう連絡が入った。

ナインは、事務所の隣にあるガレージへ向かう。今はもう、あの時に持ち帰ってきた鬼の残骸はとうに処分されており、すっかり片付いてしまっているようだ。ナインのオーガは隅のほうに立っていた。

「あ、ナイン君、遅いわよ」

弥生はなにやら落ち着かないようすである。ナインは連絡を受けてすぐに出向いたつもりであったが、それでも怒られる始末である。何か相当な発見があったのであろうか。

「まず、君に渡しておきたいものがあるから・・、これ」

それはなにやら鍵のようなものである。ようやく自分の部屋がもらえるのであろうか。いや、そうだとしたら、この弥生という人間はわざわざこんなところにナインを呼んだりはしないはずである。なぜなら、彼女にとってナインの部屋などどうでもよいから。ナインの部屋の鍵ぐらい関心度の低いものであるならば、喫煙所で寝ているこの男の近くに鍵を投げておいておくような人間なのだ。ならばこれは一体何であろうと、ナインはあるゆる角度からまじまじとそれを観察する。

「それはこのオーガの鍵よ。これのコックピットに入るための要件って結構厳しいみたいだったから、私たちがプログラムをちょっといじって簡単に開けられるようにしたの。見てて、こんな感じ」

弥生は、鍵についたスイッチを押した。

すると、鬼は身体の間接部分などから薄緑色の光を一瞬だけ放っては鬼の股間のあたりの筋肉が遅滞なく開き、同時に鬼は人が乗り込みやすいようにしゃがんでくれた。まるで車のエンジンキーであるが、これならば、すぐにでも乗り込むことができる。しかし、プログラムなんてどうやっていじったのだろうか。

「ね、簡単でしょ。この鍵はあなたにあげる」

弥生はこちらに近寄り、鍵を手渡してくれた。鍵には、変な生物を象ったキーホルダーが付着していた。彼女の趣味であろうか。

「ありがとうございます」

ナインは弥生に対して頭を下げた。その時、弥生は何かを呟いた。

「ねぇ、ナイン君。あなた本当にこれに乗るの？」

頭を上げて、弥生の表情を見ると、いつもは強く頼りがいのある表情をしていた弥生であったが、この時ばかりはそんな弥生の強さも忘れてしまうほど暗く沈んでいた。

「あのね、実は昨日整備の子が調整のためこれに乗って、ｓｗｏｒｄ　プログラムを起動させたんだけど、そのせいで謎の病にかかっちゃったのよ。幸い命に別状はないみたいだけど」

ｓｗｏｒｄプログラムとは始めからこの鬼に積んであったもので、自己の腕を剣にかえるものである。まさか、たしかに私はあの時そのプログラムを実行しているが、少しぞっとする程度の気持ち悪さしか生じなかったはずである。

「そんなことって・・」

「ほら見て、鬼の胸部」

弥生はオーガの胸部の光る部分を指差した。ナインもそれに続く。

「あれはオーガの心の光なのよ。薄緑色でなんだか宗教的色彩があって薄気味悪いでしょ。基本的にはどのオーガもあの光を持ってて、講学上は精神球体とかメンタルスフィアとかいわれているわ。そして、オーガは殺した人間の魂をその光の中に吸収するとされているのよ」

「じゃあ、その整備員の人も、これに魂を吸われたってことですか」

弥生は頷く。考えてみれば、対峙した鬼全て、このような光を胸から放っていたのだ。しかし、ナインの鬼の光の強さは質的・量的に

も他の鬼のそれとは比べ物にならない。おそらく、このオーガは無数の屍を積み重ねた上、その怨念や憎しみすらもその糧として用いているのである。まさに外法の賜物といわざるを得ない。

「このオーガは、間違いなく乗り手の魂を食らう鬼。これに乗り続けていたら、あなたはナインですらなくなる時が必ず来るわ。それでもあなたはこれに乗るの？」

弥生はいつもよりも強いまなざしでナインを直視する。この人の人柄でもないのだが、彼の身を案じてくれているのだろうか。否、ナインが万が一心を失ったとき弥生自信やその仲間に生じる危険を懸念しているのだ。しかし、もう戻ることは許されない。

ナインはゆっくりと、かつ深く頷いた。

「そう、決意は固いのね。この文書に私が調べたことは全部書いてあるから、しっかり読んどいて。それから明日からはちゃんとそれに乗ってもらうわね」

そういって、弥生はいつもの彼女に戻り、2，3枚のレポートを私に手渡して行ってしまった。レポートのアウトラインだけを見るため、ぱらぱら紙面をめくると、彼女にしてはやや内容の薄いものを作成したようである。早速、ナインはこれを見ることにした。

―Ｔｈｅ　ｅｘｅｃｕｔｉｏｎｅｒ　９について―

おそらく、ｔｈｅ　ｅｘｅｃｕｔｉｏｎｅｒ　９とは、あらゆる鬼の試作機的存在であるとして、ここではこれを『プロトオーガ』と呼ぶことにする。

まず、巷にあふれている餓鬼（いわゆる下等オーガ）とは明らかにその構造を異にする。

第1は、一般的な鬼の筋肉には人工筋肉（これは我々も入手可能素

材）が用いられるのに対して、プロトオーガのそれは、塩基配列構造がきわめて人間のそれと似通っているということである。このことから、プロトオーガは人間の死体か何かを培養して作られた、いわゆる外法物であると推論する。なお、外法物の定義に関してはここで詳説しないが、通説的見解を前提とする。すなわち、実物のアンチテーゼである虚物を全部ないし一部分でも有しているものを外法物という。たとえば、実物に1パーセントでも虚物を含むのならそれは外法物にあたる。

第2に、操縦者の有無という点が挙がる。そもそも、我々を含めて、オーガは無人、もしくはそれ自体の意思を持って動いているものと考えられていたが、このプロトオーガの操縦者である『ナイン』という人物を発見したことで、これまでの通説的推論が根底から揺さぶられたのである。したがって、幸か不幸か、学会でも少数派であった鬼有人説が日の目を見ることになる。もっとも、ここで鬼有人説を詳説しない。なお、いわゆる下等オーガに関しては、人間の搭乗記録はないので、これは無人であると見てよさそうである。

ここで、鬼有人説が妥当するとすれば、少なくとも鬼は自然発生的に出現したのではなさそうだ。とすると、この鬼による叛乱はおそらく人為的な結果であろうか。早く首謀者を特定する必要があろう。ただ、間違いなくその首謀者はいずれかの本隊に潜んでいるはず。

また、プロトオーガの正式名称がｔｈｅ　ｅｘｅｃｕｔｉｏｎｅｒ『９』であることと、敵の本隊が『９』あったこと（浦和の本隊は先日壊滅しているので残りは８だが）は偶然ではないと考えられる。つまり、それぞれの隊の隊長機的役割を担っているのがプロトオーガである。このことから、少なくとも我々はあと8体ものプロトオーガを破壊する必要がある。

私自身プロトオーガを観察したところ、あれは恐ろしすぎる力を秘めていた。操縦者のナイン氏は恒常的な記憶喪失であり、ほとんどこれを使いこなしてはいないようであるが、記憶が戻った時、どれ

ほどの力を発揮するのか全くもって未知数である。少なくとも、現在我々が難攻不落であると考えている通称、赤鬼以上の強さをこのプロトオーガは有しており、逆説的には赤鬼を倒せないようでは、その後ろに控えているプロトオーガをはじめとするより凶悪な鬼に勝てるはずもないのである。

プロトオーガは、操縦者のメンタルポイント（ＭＰ）を吸収して、それを動力として活動すると解される。ここで、メンタルポイントとはおそらく操縦者の精神力を数値化したものである。もっとも、個人のメンタルポイントをどのように算出するかその基準は全く明らかではないが。個人差は非常に大きいと考えられる。

実際に、作業員である甲がおよそ６００ＭＰ使用しただけで倒れたのに対し、ナイン氏は前回の戦闘記録からおよそ８０００ＭＰも使用したにもかかわらずこれといって問題が生じなかった。

また、人間から抽出されたメンタルポイントは、オーガ一般にとってその中核をなすいわゆる精神球体（メンタルスフィア）によって吸収される。

さらには、このプロトオーガ自身に備わっている自己再生機能も見逃すわけにはいかない。我々がこれを回収した時点において、戦闘による損傷があちこちに見られていたが、その３時間後にはその損傷も綺麗に治癒されていたのである。このことからも、オーガの生命体的な側面が窺えるといえよう。

あとはプロトオーガの写真などが６葉添付されている。

第5話　井の中の蛙の教義

―東京都町田市高度１００００メートル上空にて―

そこには1匹の鬼がいた。

鬼が空を飛ぶなど、およそ想像に苦しむが、事実としてそのオーガは自身の体より大きな羽を広げて滞空していたのだ。

そのオーガは遥か天空から、地上を這いつくばるあわれで脆弱な蟻どもを見下していたのであった。この光景こそ、天空の絶対者のみに許された至高の悦びである。このオーガの手にかかれば、下界の人間など一瞬で灰塵に帰すことができるが、一方的に他者を見下すことができる悦びというものはそう滅多にお目にかかれるようなものではない。なので、あえて生かしているのだ。

そう、お前たちは私の一存で、あるいは気まぐれで生かされているに過ぎない虫けらなのだ。

今日は非常に天気が良い。まさに晴天の空。雲ひとつない、風も少ない、冴えわたる満天の空。

そのオーガは空の蒼にとけこむように青いのである。

そう、この鬼は青鬼と呼ばれるオーガ。

地上にいる鬼とはことなり、相対的に小柄な鬼であって、また鬼にしては極めて華奢な体つきをしているが、これは何よりも身軽さを重視した結果である。

また、彼は晴天のスナイパー。そのため、物事を立体的に把握する必要から、餓鬼とは異なって、特別にふたつの目をもつことを許させた上位のオーガなのだ。

特に、日本の政府軍には戦闘機等を除く、空戦用のロボットを有していないため、大抵の敵はこの鬼の前になす術もないまま狙い撃ち

にされ、蜂の巣にされるのがオチ。
したがって、彼は蒼天という聖域の支配者。故に無敵の鬼。この世に彼よりも空高く飛べる者など存在しないのだ。もっとも、一体だけ人間に遅れをとってやられてしまったが、少なくとも彼はそんなミスはしない。
さあ、この絶対者に貴様らの醜くもこそばゆい姿を見せるのだ。貴様らはもはやショーウインドに飾られたスペクタクルにすぎぬ。今宵は喜劇か、それとも悲劇か。それはいずれにせよ無数のかけがえの無い人間を素材にした魂の舞台。お前たちはこの絶対者のためだけに存在するのだ。これこそが、絶対者にのみ持つことの許される究極の教義（ドグマ）である。

ところが今日は、そんな青鬼がこの東京都町田市上空において第１級危険物を発見したのであった。厳密にはそれを視認したわけではないが、独特のアウラを持っているからいやでも鼻につく。鬼でありながら人間と行動を共にする、異端の鬼。裏切り者。即ち、この絶対者を唯一脅かしうる存在である。この完成されつつある壮大なスペクタクルの中に紛れ込んだ癌細胞である。これを放置するのであるならば、いずれはこの鬼自身もこのショーウインドの構成部分の一部をなす羽目になりかねない。
危険。危険。危険。
青鬼の頭の中は、警戒信号で満ち溢れている。
すると、その右腕は１０メートルほどの長さまで伸張し、弾丸の砲台が一丁出来上がる。また、その羽はより大きく広がり、バランスを失することのないよう、そのか細い身体を支えるのである。それはまるで、パラボラアンテナのような形状となり、準衛星軌道上から、相手に気づかれることも無く必殺の一撃を放つのである。そのライフルのバレルと化した凶悪な右腕を弾丸コース上の地上のある１点へと向ける。

（二）

ナインは、ヤニの匂いに包まれた、硬いソファの上でまどろみに落ち込んでいた。

足を伸ばして眠るだけの広さはないから、身体をくの字に曲げるしかないのだが、そのように縮こまって眠るのも慣れてくると良いものだ。そして、そのうえから毛布を被り、ぬくぬくと蓑虫のようにしていると、結構温かかったりする。

だが、そんな二度寝中の幸福感も束の間、一気にナインの毛布が引き剥がされる。すると、毛布の中に溜め込んでいた熱が一斉に逃げ出して、代わりに氷のような冷気が彼を襲う。

「さむっ・・」

「ほら、ナイン。起きて。仕事よ、仕事」

弥生遼子が、まどろんでいたナインを叩き起こしに来たようだ。彼女は、なにやら服装をがっちりと決め込んで、口にはタバコをくわえている。いつになく気合いが入っているのは明らかだ。きっと何かあるにちがいない。

「社長、どうしたんですか？まだ、朝の8時前じゃないですか・・。もう少し、寝かしてください・・」

とはいえ、あと20分ほど寝れるなら、寝かして欲しかった。なので、ナインはなりふり構わずに眠りに堕ちようとする。

「こら、出撃要請なの。町田市内に5体の下級オーガが迷い込んだから、ちゃっちゃとやってきなさい。防衛省も今はこちらに兵を送れないから、アンタが戦わないとこの街無くなるわよ。ひとりの兵

隊が寝坊したために町田が崩壊したなんて冗談、まったく笑えないからね」

弥生は、再びまどろみかけたナインの頬を3発ほどはたく。

「敵、それを早く言ってください」

弥生の言葉を聞いたナインは、ようやくにして飛び起きた。

「何言ってんのよ。さっきから地鳴りがしてるじゃないの。これ、あいつらの足音よ。てっきりそれを承知で寝てんのかと思ったわ」

「すいません、俺としたことが、油断しました」

彼は、弥生に一礼すると、ガレージの方へと足早に向かっていった。

「アンタ、そんなパジャマのまま戦うの？」

「時間がないのでしょう？なら、これで十分です」

ナインは、階段を降りながら答える。

「あ、あとナイン」

「はい？」

「私、今から仕事で、詩季も大学で授業だから、今日はアンタと西田だけでどうにかしてちょうだい。いいわね」

「了解です」

ナインの返事を聞いた弥生は、こなれた手つきで腕時計の時間を確認し、彼女も足早に階段を駆け下りて事務所を出る。

そして、事務所前に停めておいたタクシーに乗って、彼女はどこかへと行ってしまうのであった。

（三）

町田の街には、5体の餓鬼が練り歩き、人のいなくなった住宅街を踏みつけながら壊していく。

相変わらず、輝きを失っている目玉をぎょろぎょろさせて、獲物でも探しているのであろうか。

ナインはプロトオーガの中で気を静めていたところ、通信が入ってきた。

「おい、ナインよぉ、今日はてめぇと俺だけでやるぜ。しっかりついて来な」

仲間は西田のみである。はじめてナインが鬼と交戦した時よりも、敵の数は多いが、一応西田という頼れる仲間はいるので特に問題ない。むしろ、下等オーガであれば、ナインひとりで事足りるであろう。

「西田さんこそ、簡単にやられないで下さいよ。社長のためにもね」

ナインは、おじさんをからかうような口調で言った。先日、西田と和解していなければありえないような発言をしたのだ。

「てめぇ、こら、今ここでぶっ殺してやろうか、えぇ？」

西田は真っ赤になって銃口をこちらに向ける。仲良くなると、西田という人物は非常にからかい甲斐があって、おもしろい。しかしながら、今、ナインに対して銃口を向けている場合ではないであろう。機体の性能は間違いなく西田のロボットより下等オーガの方が上な

のだから。
ほら、5体のうち、1体が西田機の存在に気づいた。すると、仲間の異常を感知した他のオーガたちも、敵の存在を認識する。
さっそく、二体のオーガは忠実に本能に従って西田に飛び掛かる。
「うぉぁ」
西田はこれを避けきれず、二体の鬼にかみつかれてしまう。オーガたちは、顎を使い、ガリガリと西田機を攻め立てるのだ。しかし、西田のロボットは鬼の噛み付きぐらいでは壊れないほど硬く作られていることを西田は知っていた。つまるところ、装甲の硬さだけが取柄の西田のロボットは鬼にとってあまり美味しいものではなく、噛み砕こうにも歯が立たないのである。やはり、機体の性能以上に、西田の長年の経験が最後にものをいうのであった。
「やっぱり、てめぇらは馬鹿野郎だ、この俺以上にな」
西田は迷台詞を残し、そのロボットでようやく掴めるほどの片手投擲爆弾を一体の鬼の口内に押し込んで、二体とも殴り倒して後退する。それにしても、この男自分が馬鹿だと認識しているようである。数秒して、爆弾が爆発し、二体の鬼は仲良く砕け散った。人工筋肉が市街地に散逸し、赤い血を撒き散らした。西田もなかなかやるようだ。
「隊長に弾は節約しろと言われてるんだ。てめぇも見習いやがれ」
西田は、ナインのプロトオーガを指差した。きっと、日頃から弥生遼子は、あんたがいつ死のうが勝手だけど、弾は無駄にしないで、とでも西田に言っているのだろう。まあ、実際にも2つの爆弾が必

要とされたところをうまく1個で成し遂げられたのであるから、これを評価しないわけにはいかない。今だけは西田が勝利の余韻に浸ることを許しておこうと、ナインは考えた。しかし、その時である。

「あ、西田さん、前」

ナインは、抑揚のない声で西田に注意を促した。残った3匹の鬼が光球を西田に向けて発射していたのだ。しかし、これに彼は気づいていないようで、まともにそれを受けて西田のロボットは吹っ飛んでいった。そのまま2，3回地面にバウンドし、装甲をひしゃげていきながらも最後は止まる。結局格好のつかない彼の末路である。

「ナイン、てめぇ、さっさと言えや、ボケぇ」

とりあえずは生存しているようでなによりである。装甲の硬さだけが取柄というのは、形式的な形容詞だけではないようであった。

「さて、やるか」

西田がやられてしまった今、次はナインの番である。ナインは、今にも襲い掛かってきそうな3匹の鬼どもを一瞥する。どうやらあの連中は、自分の血が欲しくてたまらないらしい。

（動いてくれよ。俺のオーガ）

ナインはこの3日余り、余計な仕事もしてはいたが、オーガの訓練も欠かさなかった。ナインが思うに、もう下等オーガ程度なら余裕である。オーガの心を感じろ。そして、お前は私の心を感じるのだ。お前と私は一心同体。

ふと、自分の心が人間の体という束縛や限界性から解き放れたような感覚が私の心を突き動かす。そう、今だけは煩わしい人の体を捨て、私は鬼となるのである。今、この鬼の肌は私の肌であり、私の脳はこの鬼の脳なのだ。

精神球体が強く輝く。淡い薄緑の彩色。心の奥底の穢れた魂がカテーテルのようなものを通して、するすると抜かれていくような感覚がする。

そして、ナインの鬼はこの手を両刃剣に変え、鬼どもの中へ飛び込む。

「・・・」

残った3体の鬼の首は、その3秒後に市街地の宙を舞った。

（四）

しばらく倒れていた西田が、ようやくにして起き上がり、ナインの後ろまで重い鉄を引きずりながら歩いてきた。

「なんだ、オメェだけ居りゃあ十分だったんじゃねぇかよ」

たしかに、それは間違いないとナインは苦笑した。

「そんなことないですよ。西田さんが数を減らしてくれたおかげでこっちも助かりました」

かといって、あんたは不要でしたという旨の発言をすると、本当に落ち込んでしまうような気がしたので、ほめておくのが無難であった。

「お、そうか？やっぱ、おめぇはよくわかってるぜ」

と言う具合に円満に会話を終わらせることができるからである。ナインは、こういう彼の単純なところは決してキライではない。

「がははははははははは、ああっっ！！！」

高笑いをしていた西田の声が突然停止する。

（どうした？なにがあった？）

ナインは辺りを見渡すと、５０メートルほど遠くに西田のロボットは飛ばされていた。一体いつあそこまで移動したのだろうか。否、よく見ると、ボディに弾創が彫られている。そうか、これは敵の攻撃。とすると、敵はまだどこかに居る。しかし、敵影らしきものはどこを見てもない。

いや、強い殺気を感じ取れる。しかもこれは西田を狙っている。だが、ナインが気づいたときには遅かった。兇弾の雨が西田を貫く。

「にしださぁん！！！」

ナインは銃撃の雨の中、西田機を捨て身で運び出す。鬼の筋肉を抉り取るほどの弾丸の雨を抜け、ひとまず障害に囲まれた安全地帯に西田機を置いた、その瞬間オーガの身体の至る所から血が吹き出る。他方、西田のロボットは腕がもぎ取られ頭部は吹っ飛んで悲惨である。

「・・おい、てめぇ、俺のことなんざかまってねぇで・・さっさと・・・」

あぶないところであった、とりあえずまだ息はある。いや、この男の事だ、そう簡単にくたばるタマではない。むしろ、彼の死はそれだけで愉快な家族団欒の笑いのネタになるほどのものだからである。

「そこで待ってて下さいよ」

しかし、敵は一体どこから西田を狙ったのか。見渡す限り、それらしきものは存在しない。

「ナイン・・・、この攻撃は空から・・こいつ・・青鬼だ・・きぃつけろ」

青鬼だと。

確か以前に資料でみた羽の生えたオーガ。しかし、上を見たところで、それらしき物体を見ることはできない。

「もっと上だ・・、もっと上をみやがれ・・・」

この晴れた雲ひとつ無い晴天の一体どこに鬼が居るというのか？しかし、上空からの砲撃を現に西田は受けている以上、必ずどこかに居るはずである。

ナインはもっと視界の開けた場所へ躍り出て、鬼の目をとおして、何百倍という倍率の望遠を行った。

すると、高度１０，０００メートル上空で青き鬼と目があった。その時である。

「・・・っく」

左肩が吹き飛ばされる。肉片がぶちまけられ、血が吹き出る。どうやら、こちらに気づいたらしい。

とにかく、一箇所に留まるのは危険である。そう考えたナインは、一気に市街地を駆け抜けた。間一髪、足元に銃弾が打ち込まれる。しかしながら、逃げているだけでは永遠に勝つことはできない。また、高度１０，０００メートルに到達できるような武器も持ち合わせてはいない。とすれば、奴は無敵か？

いや、無敵の鬼などありえない。現に青鬼は誰かが倒しているではないか。ふと、レポートの記載を思い出す。レポートによれば、用いたのは実に１０機もの戦闘機であった。これらを用いて、いかに青鬼を倒したのか、その説明文を見たとき目を疑った。

すなわち、特攻である。

１０機もの戦闘機を青鬼に向けて特攻させたのである。当然、１０人いた戦闘機の操縦者は全員死亡。報酬として、これらを指揮していた某傭兵派遣株式会社の多数派取締役陣には3億円が与えられた。彼らは、従業員などを脅迫し、半ば強制的に即席の特攻部隊を作り出した。報酬は山分けにするとかして騙したのであろう。人件費を削減できるわ、報酬は出るわでさんざん甘い汁を吸ったのであろう。そのような、尊い犠牲のもと、はじめて青鬼の討伐に成功したのである。今では、自殺を教唆した、否、被害者をして殺人を実行したに等しいあのクズ経営者どもが青鬼退治の英雄である。

しかし、ナインなら、このプロトオーガなら、そんな悲しい結末になどさせない。絶対に青鬼を討ち、西田を無事につれて帰る。そして、弥生遼子代表理事に何気なく青鬼の亡骸を見せて、喜んでいただくのだ。

青鬼の弾丸がプロトオーガの右腕を貫いた。この白いボディから、限りなく黒に近い赤の血がドクドクと流れ出す。

（痛い・・・）

続いて脚を撃ち抜かれる。青鬼は、次第に失速してゆくナインをなぶるに快感を覚えているに違いない。

（プロトオーガ、お前が全ての鬼どもの基礎ならば、お前にも羽があるはずだ）

弾丸がプロトオーガの胴体、肩それぞれを貫いていく。

（俺はこんなところで負けるわけにはいかないんだ）

上空の青鬼は調子に乗ってきたのか、次々と弾を撃ち込んでくる。

（悔しくないのか、お前）

その時、プロトオーガ胸部のメンタルスフィアがより強く緑色の光を放った。

（五）

上空で空を飛べぬ鬼をおもしろおかしくいたぶっていた青鬼であったが、突然、地上の鬼が消えたことに気づく。北、南、東、西、というふうに辺りを探してみるもそれらしきものは見当たらない。ならば、あの鬼はきっと逃げたのであろう。そうにちがいない。ははは、腰抜けめ。おといきやがれ。

青鬼は長らく構えていた銃口をしまう。しかし、ふと違和感が突き抜けるのである。この高度１０，０００メートルからの大パノラマからであれば、たとえ時速３００メートルの速度で移動をしようがどこへ行ったのかくらいは目で追うことも十分可能であったからだ。それだけに、対象がふと消滅するという現象は異常であった。心当

たりがあるとすれば、そうであった。

まだ見ていない方角が一つだけ残っていた。

それは上方向である。そう自分よりも更に上空である。この鬼は空から地上を這いつくばる物の動静をつぶさに観察することには長けていたが、下から上に突き上げてくる物のそれを観察することは苦手であったのだ。まさか、あの羽も生えてないような鬼がここまで飛ぶなどありえるものか。ここをどこだと思っているか。高度１０，０００メートルの大絶空の世界であるぞ。ばかばかしい。

私こそ空の王者。晴天の支配者。そんなことありえるはずもない。よし、今から上を見てやろう。

（・・・・）

なぜ、見ないのだ。私こそ無敵の鬼。ちょっと後ろを振り向きさえすればそれで事足りるのだ。

見れぬ。

絶対に見れぬ。

蓋し。

見たら殺されるからだ。

「よう。ここまできてやったぜ」

声がきこえる。きっと友人の青ちゃんにちがいない。そうだ。そうだ。

あれ、そいや青ちゃんこの前死んじゃってねぇ？

ふと、我慢できずに、青鬼は振り向いてしまった。しかし、後ろにはだれもいない。何だ、ただの空耳であったか。まったく、焦らせ

てくれる。

「！！！」

いや、違う。なぜ私は落下しているのであろうか。この目に映るもの全てが、下から上へと吹っ飛んでいく。そうか、わかった。やられた。羽をもぎ取られたのだ。どんどん下へと堕ちていく最中で、その鬼はようやくその目にあってはいけないものを見たのだ。この絶対者を越える、絶対者を。この私が堅守していた絶対の教義（ドグマ）をより絶対の教義（ドグマ）によって塗り替えられたのだ。

私こそ天空の覇者である。

空での戦いで私が貴様に負けるはずなどない。私こそ最強。無敵。貴様はここから地上へ叩きつけられて死ぬがよい。

青鬼は堕ち行くなか、その忌々しい存在に砲台を向けようとした。しかし、其の、より絶対の何某かは、堕ち行く青鬼に追いついてきて、右腕を大きく振りかぶっていたのである。青鬼は最期に観た。悪魔のような羽。そして、自身が演じる悲劇の終幕を。

青鬼は銃を構える間も与えられず、悪魔の羽を持つ鬼によって一刀両断的に幕を下ろされたのであった。

第6話　約束

―東京陸運保険機構事務所―

ナインは、青鬼の討伐を成功させ、その残骸と西田機とを事務所となりのガレージに運びこんだ。
そのために、ガレージには新たな残骸コレクションが追加される形となった。

「おはようございます」

そんな中、ようやく大学でのお勤めを終えてきたのか、桐生詩季ときゅうすけが出社してきた。彼女らは走ってでも来たのであろう、詩季はだいぶ息が上がっていて、少し全身に汗が滲んでいる。

「ナイン君、青鬼を仕留めたんだってね。さっき社長から電話があったよ。おめでとう」

彼女は、やや興奮しているのか、過呼吸ぎみに途切れ途切れ言う。
そんな少女を見たナインは、慌てて走る彼女がつまずく光景を空想した。

「詩季はよくつまずくから、あまり走るな、といつもいっているだろう」

ナインは、彼女が自分の功績をたたえるために、わざわざ走って帰ってきてくれたことがうれしくはあったが、照れ隠しにあえて注意をした。

「うん、気をつける」

詩季は、小さく舌を出して反省した。

「それに比べて、この男は情けないわね」

弥生がすっかり呆れて、ため息をついた。この男とはもちろん西田である。西田は大げさに頭に包帯をまいて椅子に座っていた。弥生はガレージに横たわる西田ロボットの残骸をちらちら見ながら言う。

「あんた、マジで今月の給料から修理費引いとくから」

西田の怪我は大したことないのだが、ロボットを大破させて帰ってきたため、弥生の逆鱗に触れたようである。

「たいちょー。そんなことされると、俺3年は給料もらえないっすよ？かんべんしてくださいよー」

「はぁ？首にしないだけマシよ。ありがたく思いなさい」

西田は弥生に泣きつく。そんな西田に対して彼女は、まるで害虫をあしらうような取扱をするのだ。ちなみに、西田のロボットは現在の客観的な市場価値では１２００万円である。とすると、単純計算で西田の年収は４００万ということがわかる。なお、ロボットの価値とは昔に比べてそう高いものではない。なぜなら、ロボット産業には莫大な政府の補助金が出ているからである。

「西田さんかわいそ」

詩季はそのように言うも、無邪気に笑う。

「でも、本当に西田さん無事でよかったよ」

青鬼に蜂の巣にされた時はもう助からないものと思っていたが、この人のしぶとさはゴキブリクラスであることをナインは改めて実感するのだ。すなわち、頭部を失ったくらいでは、直ちに機能を停止することもないのである。彼の本質は、その屈強な肉体にこそあるのだ。

ふとそのとき、詩季がナインの袖を引っ張るのであった。

「この部屋、あと3時間はこの状態だから、外行かない？」

詩季は、前方のふたりのやり取りを指差しながら言う。ナインはそれもそのとおりだろうと思った。彼は先ほどからこの様子をただ傍観しているが、ふたりが口論を開始して既に30分を経過している。また、これが収まる気配も無い。そうならば、ここにいてもふたりの喧嘩を見ているだけで、時間の浪費以外の何ものでもない。ナインたちは、そろそろと忍び足でこの修羅場を後にし、町田の市街地へと赴くのであった。

（二）

―事務所向かいのカフェ―

ここは、よく機構の従業員が昼時や休み時間に利用する小さなカフェ。ここのマスターは古くからこの町田市で生まれ育った人で、鬼が来ようがなにが来ようがこの店だけは手放さないと決めているらしい。アルバイトなども現在はひとりもおらず、マスターひとりだけで切り盛りしているのであるが、その決意は岩より固く、今なお、こんな街でもしぶとく営業を続けられている。実際のところ、この

カフェもオーガに付け狙われて危ない時も多々あったが、お向かいである弊社もこの店がなくなるといろいろと不都合なので、ここだけは最優先で死守している。

中に入ると、葉巻の香ばしい香りとともに、挽きたてのコーヒー豆の濃厚な香りが客であるふたりを包み込んでくれる。カフェの内装は、ログハウスを意識しているのか、太く立派な黒塗り丸太を基礎として、檜の板で壁も床もできている。それに、緑色の観葉植物の展示もここのマスターのこだわりか。そのため都内にいながら、自然を感じることのできるここは、まさに都会のオアシスである。・・・というのは、町田がまだにぎやかであった数年前の話で、今はけっこう寂れてきている。

また、この店は原則として喫煙席であるが、例外的に禁煙席が1組分だけ置いてある。そのため、普段は圧倒的多数の喫煙者が一斉に煙を吐くので非常に煙たいカフェなのであるが、現在はもうすぐ夕方になる時間で、客もほとんどおらず、いつもの煙たさは全くなくなっている。

ナインも詩季も非喫煙者なので、空いている禁煙席に座ることにした。きゅうすけはいちはやく詩季の足元にぺたりと伏せては、いつものように休んでいる。

「おや、こんにちわ。桐生さん」

マスターが詩季に声をかけてくれた。意外にも詩季は常連でよくここに来るらしい。もっとも、ここの他に飲食店が近くにないというのも、ひとつのファクターと考えられなくもないが。

「店長、こんにちは。私、エスプレッソね」

マスターは詩季の注文を聞く前に豆の抽出を始めようとしていた。

詩季はここに来ると必ずエスプレッソを頼むのだそうだ。だから、マスターはいち早く顧客の要求に合った行動をとることができる。

「彼氏の君はどうする？」

マスターは、カウンターの向こうから、いたずらそうな顔で尋ねてきた。

「マ、マスタぁ！ナイン君は、そういうんじゃないんです！！」

詩季は急に立ち上がって、赤くした顔にあるさらに紅い目を開いて、慌てて訂正した。

「ああ、そうか。それは残念だ」

「もぉ」

彼女は、頬を膨らませて倒れこむように椅子に座った。

「えぇと。俺は、アメリカンで」

その間ナインは、なにも聞かなかったことにして、注文を考えていた。預金も資産もない人間なので、最も安価で、かつ量の多い商品を注文した。一応、弥生から5万円ほど給料の前借りをしているが、調子に乗って使っていると破産しかねない。

「それにしても、社長、あんなに西田さんのこと怒らなくてもいいのにね」

「ああ、一緒に戦っていたからわかるけど、彼はよく戦っていたよ。実際、西田さんが撃たれてくれたおかげで俺も敵が青鬼だって気づけたし」

「あはは、怪我の功名だね」

もとい、西田が生きて帰らなかったら、こんな笑い事にはならなかったであろう。損害が西田機だけであってよかったと、詩季の笑顔を見て改めて思う。

「ありがとう」

詩季はテーブルの下で脚を上下にじたばたしながら照れくさそうに何か呟いた。

「え？」

「ナイン君がいなかったら、西田さん死んでた。ありがとう」

死んでたって、さらりと言うものではないと言いたくなるような発言である。たまにこの少女は口が悪いようなのだ。まあ、それは自己中心的な悪意から来るものではなく、西田が死ぬことを想像すらできないから少し大げさに言っているのだろうとわかる。

「あの人も今の俺には大切な仲間だからな」

「うん、ふたりが仲良くなって私も嬉しい」

ナインが西田と目もまともに合わせられないほど忌み嫌われていたことは、ふたりの想像に新しい。

「お待ちどうさま」

ちょうど会話が途切れたところで、タイミングよく注文の品がでてきた。小さいほうのカップが詩季のエスプレッソで、大きいほうのそれが私のアメリカンコーヒーである。挽きたてのコーヒー豆の芳

醇な香りがナインたちを包んだ。彼はひとくちそれをすする。

「そういえば、ナイン君。社長から聞いてる？」

詩季はガラス製の小さな器に入っているミルクをコーヒーに混ぜ入れ、スプーンでゆっくりと攪拌させながら聞く。

「ん、なにを？」

「明日は事務所に来ないでって話」

ナインは、そんな話は全く記憶になかったが、どうせまたしょうもないことを考えているのだろうと、はなし半分に、コーヒーをすすりながら聞く。

「いや、聞いてないよ」

「私もさっき社長から電話がかかってきたときに直接聞いたんだけど、何でも会社説明会をやるとか言ってたよ」

ナインは口に含んだコーヒーを詩季の顔に向けて噴出しそうになった。

「あの人、一体なに考えてんだ？」

「きっと、景気よくなってきたから人手を増やしたいんじゃない」

「まあそうだろうな」

少しリアクションが大きすぎたことを恥ずかしく思い、照れ隠しにもう一度コーヒーをすする。希薄化された苦味が、口の中に行き渡ると、心なしか気分は落ち着いた。そうやって考えてみると、今日ナインが青鬼を倒したことが弥生にそれを決意させたことは想像に難くない。

「で、明日なんだけど、どうせ予定もないんでしょ？」
「まあな」

事務所にいられないのでは、読書にふけることもできないし、鬼に乗っていたら説明会に来た就活生を驚かせてしまうことは必至。よって、反論は不可能。

「じゃあ、うちの大学来ない？ナイン君の好きそうな本もたくさんあるの」
「いや、やだよ」

たしかに、大学といえばその蔵書の量は魅力的だが、異質な人間を排斥するような空間であろうし、なによりこの少女と行動を共にするのはなんだか照れくさい。

「大丈夫だよ、あそこは誰でも入れるし、ナイン君は好きなだけ本を読んでてくれればいいんだからさ。こんなとこに一日中いてもしょうがないよ」

ナインの心の中では、しばらく天秤が左右に揺れていたものの、彼女の説得により、ようやく一方に落ち着いた。

「わかったよ。そこまでいうんなら」
「おっけぇ、決まりね」

結局、いいように乗せられてしまったようだ。こうなってしまっては、詩季もなかなか引き下がるような性質ではないことも薄々わかっている。

「ところで、詩季の通ってる大学ってどこ？」
「え、東京大学だよ」
「そこって程度はいいのか？」
「一応、日本で一番の国立大学」
「本当か。詩季って実は頭いいのな」
「『実は』ってどういう意味？私そんなに頭悪そうに見える？」

詩季はふくれてしまったようである。しかし、ナインはこの少女が冗談の通じる相手ということを理解しているので、それが過剰なリアクションであることにも気づいた。だから、格別に慌てることはしなかった。

「ごめん。でも、日本一の大学ならいろんな本があるんだろ。楽しみだ」
「うん、そこは期待しててていいよ」

詩季はまるで自分の事のように胸を張って言った。それにしても、日本最大の頭脳を持つ大学の蔵書である。興奮冷めやらぬ気持ちを抑えることができない自分がいた。

第7話　仲間

―翌日、午前１０時頃―

事務所前には１００人程度のリクルートスーツを着た人間が集まっていた。弥生遼子は相対的に危険度の高いこのような事務所にはあまり人は集まらないであろうとタカをくくっていたが、完全に予想が外れたようである。自分もかつては就職活動を経験したことがあるだけに、皆必死であることを今更ながらおもいだす。たとえそれが火の中、水の中であっても、彼らは真新しいビジネス用バックを片手にいずこへとも赴くのだ。

「理事長ぉ、これじゃみなさん入りきりませんよ」

弥生の秘書である小柄の女性、田中愛は、あたふたしながら頼れる主人に泣きついてきた。

「しょうがないわね、これじゃあ入りきらないし。外でやりますか」
「そんなぁ、理事長、無理ですよぉ。私、３時間分のプログラムまで考えたんですよ。それも全部プロジェクターを使って実施すること前提なんですから。ほらぁ」

頼りない秘書は、会の進行をつぶさに記載したプログラム表を弥生に提示する。おそらく、昨日、弥生が説明会の構成を考えるよう彼女に突然指示したのであろう。秘書は無理難題を押し付けられたと思いながらも、徹夜で構成をねったのだが、弥生の気まぐれでその努力も水の泡である。この秘書はいまおそらく絶対に転職してやると決意しているに違いない。

「大丈夫よ、多分ほとんどの人が3分も経たずに帰るから。そのあとは『あいちゃん』、お願いね」
「りじちょぉ」

弥生の秘書、通称『あいちゃん』は、感激のあまり手に持っていた数枚の紙をぱらぱらと地に落とし、そのうえ涙しそうになった。やはりこの人はぬかりない。一生ついて行きます、とでも考えているはずだ。

「えー、みなさん、ようこそ弊社の会社説明会にお越しいただきました」

弥生は外に出て、拡声器を用い、形式的なあいさつをする。

「ただし、はじめに申し上げておきますが、弊社は主に鬼の討伐を業務としております。つまり、傭兵派遣会社みたいなものとご理解ください」

リクルートスーツの人の群れが一気にざわついた。話が違う。ふざけるな。そういった声すら聞こえてくる。しかしながら、もっともなことである。団体名だけみると、明らかに保険業務を目的とした団体であり、しかもまず潰れることなどありえない公益社団法人である。安定志向のなまぬるい人間が安易な気持ちでここにきたに違いない。また、そのような軟弱な連中が軍事などに携わるわけがない。もっとも、いくら弥生でもそれぐらいのことは重々承知しており、説明会を開くにあたってその旨を明記したはずである。それでもこれほどの数の輩が来てしまうとは、と嘆かざるにはいられないのであった。

「ですから、弊社の意向に添えない方はお帰りいただいて結構です」

弥生遼子は右手でさよならのジェスチャーをした。すると、リクルートスーツの集団はそのような弥生の言葉を聞いたのか、いや聞かないにしても一斉に踵を返して行ってしまった。

「理事長・・みなさん帰っちゃいましたけど」

頼りない秘書が不安そうに、帰っていく団体と弥生の表情を交互にうかがいながら言う。もう秘書はすぐにでも泣き出しそうである。しかし、弥生遼子は一斉に帰っていく集団をみてもなお、口元に笑みを浮かべていたのであった。

「いいえ、ちゃんと残ってるじゃない」

そこには3人だけ残っていた。ひとりは男。就活生とは到底思えないほど、リクルートスーツを着崩しており、短い金髪の色黒な男である。もっとも、背はあまり高くないが、見るからに好戦的なタイプなようだ。

2人目は少女。これは意外にも詩季より小さな少女である。色の薄い細くて癖のある長い髪の毛を、後頭部でまとめていて、ほとんどオールバックに近いが、前髪をちょっぴり真ん中だけ垂らしている。その点でいえば、髪型に独自のセンスを反映させているようだ。しかし、いかにも文化系といった感じを滲み出しているので、戦いには不向きに思える。仮に彼女が好戦的であるにしても、身体は枝のように細くて、この子のどこにあの凶悪な鬼と戦う力があるのか信じられないと考えるのが相当というほどに脆弱な子なのである。

3人目は、2人目に比べてもう少し大人びた少女。今度は、活発そうな少女である。年は臨時職員である桐生詩季と同じくらいか。腰まで届きそうな長い茶髪をふわふわさせている。また、女性にしては背が高く、細く伸びた長い脚が特徴であるので、スタイルのよさ

で言えばファッションモデルと比較しても何ら引けを取らないといえるであろう。また、黒いスカートからみえる細い足は、余分な肉が見当たらないほどにしまっており、相当に鍛え上げられていることと明白である。こちらは戦闘タイプと見ても失当ではないようだ。

「えーと、あなたたち3人だけね。じゃあ、これから会社説明会を行いますので、中に入ってもらえる？」

互いの反応を見ながら、3人はばらばらに頷いた。弥生は頼りない秘書を残して先に事務所の中へと入ってしまう。

「あ、どうぞ、みなさまお入りください」

なんとなく要領を得ない秘書はあたふたしながらも残った3人の志願者を中へと案内した。

（二）

「えー、ですからですねぇ、わが社は・・・」

事務所2階の会議室では、小さな秘書が三人の前で、プロジェクターを用いて、講演会を開いていた。ここはそこまで広い室ではなく、3人掛けの長机が3×3個ならんでちょうど良いくらいである。弥生は後ろで秘書の講義を腕を組んで眺めていた。よくもまぁ、昨日一晩でここまで演説内容を考えたものだと感心せずにはいられない。なぜなら、この秘書はすでに3時間近くもひとりで話しっぱなしなのであるから。こうして見ると、彼女の講義はわが社の理念や業務内容をよく説明できており、普通の会社説明会であればそれで必要十分の申し分ないものである。しかし、いかんせん、わが社の会社

説明会は普通ではないのである。

「くかぁー」

「すぅ、すぅ」

この3人のうち、小さい気弱な少女をのぞいて2人は爆睡しているのである。この小さな志願者だけは先ほどからずっと、秘書の話を食い入るように聞き入っており、時たま頷いたりもしていた。もはや、秘書の公演は、このひとりの少女のためだけになされていたのであった。このことをあの秘書は気づいているのか、気づいていないのか明らかではないが、少なくとも非常に活き活きとしゃべり通していることだけは伝わった。それだけに弥生は、この秘書が不憫で仕方なかった。弥生はすでに2時間48分前くらいから、もうやめていいわよ、と言いたかったのであるが、それを言ってしまうと彼女になんだか申し訳ない気がして、もう惰性に任せてしまっているのである。

「というわけです。長時間もの御静聴ありがとうございましたー」

秘書はおじぎをした。ひとりの少女だけぱちぱちと手を叩いた。

「やっと終わったか・・・」

弥生は秘書に絶対に聞こえないような声でつぶやいた。この秘書はよく気が回るし、決して無能というわけではないのだが、どうにも要領が悪く、空回りが激しいのである。

「さぁ、あなたたちもそろそろおきてちょうだい」

弥生は立ち上がって、寝ている二人をたたいて起こす。両者とも机

にへばりつけていた上半身を起こすと、大きくあくびをした。男のほうはまだ目じりをこすっているが、かまわず弥生は書類を3人に配布する。

「聞いてない人もいるけど、ここの仕事は今説明したとおりよ。それでもよければ、ここに署名してください。それで、あなたたちは採用だから」

3人は驚いた。特に、寝てしまった2人はあまりに長い会社説明であったとはいえ、爆睡したことに多少後悔したはずである。にもかかわらず、本当に採用してよいのかと、逆に訊きたくなってしまったであろう。

「ほら、どっちか決めてちょうだい」

どうやら本当のようである。この3人には妙な連帯感が形成されつつあるのか、それぞれ顔を見合わせては頷くと、ほぼ同時に書面にサインした。それを見て、弥生は少しだけ笑みをこぼした。

「はい、とりあえず内定おめでとう。これであなたたちも東京陸運保険機構の一員ね。まあ、みんなで自己紹介くらいはしておきましょうか。じゃあ、まずは君、お願い」

弥生は男の内定者を指名する。

「俺は、黒井　珀（はく）。まあ特に理由はないんだが、グレイって呼んでくれ。」

そういってグレイこと黒井は弥生を含め、他2人と握手した。このとき、弥生遼子は黒井の苗字に引っかかっていた。どこかで聞いた

ことがあるような気がしたのである。

「次は、アタシいいかな？」

背の高い元気そうなほうの少女が自己を指差していう。弥生は黒井という名に思いを馳せていたけれども、彼女によって思考が中断させられた。

「どうぞ」

「え～アタシは、辰巳　春樹。よろしくお願いしまーす」

3時間近く寝ていたせいか、妙に元気の良い少女であった。この事務所にはいないタイプの人間であり、弥生は従業員の多様性が広がったことに少し嬉さを感じた。

「最後は、あなたね。小さいお嬢さん」

そして、弥生は残った小さな少女に目を向けた。この中で唯一秘書の講義にじっと耳を貸していた変わった少女である。もっとも、変わり者はここにいる連中皆そうであるのだが。

「えっと・・・、わ、私、沖　まもる、といいます。よ、よろしくお願いします」

まもるという子はもじもじしながら、いじらしく自己を紹介してくれた。本当にこの少女は戦えるのか心配であったが、あれだけ講義を聴いていた上、最終的にここまで残ってくれていたのだから、やる時はやる子であろうと直感できた。

「はい、ありがとう。私は、ここの代表理事の弥生　遼子よ。早速、

明日からいろいろやってもらうけど、冗談抜きで覚悟はいいかしら？あなたたちは、いつ死んでもおかしくない仕事に携わるわけだから、生半可な覚悟で仕事してもらいたくないのよ」

内定の喜びで、若干浮き足立っていた若造どもに最後の釘をさす。3人とも、急に真剣な顔つきになった弥生の顔に少々面食らったが、決意をあらたにして言うのである。

「当然」

「私も大丈夫」

「は、はい。がんばります」

弥生は久しぶりに嬉しい気持ちになった。これほどに純真で真直ぐな若者が3人も自分の意向を汲んで、自分についてきてくれたのだ。もうこの国の若者にはへたれしか残ってはいないと思っていたが、まだ捨てたものではないのだ。

（三）

機構の事務所において会社説明会が開始される同刻である。

ナインと詩季は昨日の約束に従い、詩季の通う東京大学にいた。かつての東大は東京都本郷にメインキャンパスを置き、一般人もまたそのように認識していたのであるが、いかんせん現在ではその地区の危険度はBクラスであり、本郷での大学運営は事実上不可能であった。そのため、同大学はその全機能をより危険度の低い東京都駒場のキャンパスに移転させ、大学教育をなんとか継続していたのである。

ふたりは井ノ頭線の『東大駒場前』で下車し、そこから歩いて程なくして見えるキャンパスへと入っていった。キャンパス内は学生であふれかえっていて、人を避けながら進むので大変である。ナイン

ですら大変であるならば、盲目の詩季を誘導しているきゅうすけも一苦労である。これもおそらく、本郷にいた学生たちがみなここに詰め込まれてしまったからであろう。

「ナイン君、図書館はあっちだから」

詩季はある特定の方向を指差す。目が見えないのによく正確な位置関係を把握しているものだと感心せずにはいられない。もっとも、彼女は自己の不自由さを知識の量で補っていかなければやっていけないのであろう。

「あと、これ使って」

彼女は、自己の学生証を取り出し、私に手渡してくれた。一体何に使用するのであろう。

「それがないと図書館に入れないから」
「いいのか、そんなことして」
「それは、ばれたら怒られるけどね」

なるほど、不正も発覚しなければ、結局は無いことと同じということとか。

「OK、じゃあ、俺は行くけど、授業が終わったら連絡してくれ」
「うん。私、昼は多分、友達と食べるけど、ナイン君、お腹減った時のお金とかある？」
「大丈夫、そこらへんは適当にやっておくよ」
「わかった、じゃあまたね」

そういって、詩季はきゅうすけとともにキャンパスの奥へと行って

しまった。

（さて、あそこだな）

（四）

ナインは茶色い落ち葉ひしめく遊歩道を進んで、図書館内に入ると、そこにはゲートパスのようなものが設置されていた。しかし、詩季から借りた学生証を使用して、そこは難なく突破できた。カード上の権利者とカードの使用者との齟齬（そご）が著しいというのに、全く反応しないのではこのゲートパスもザルのようなものである。

図書館内は建物の外と比して、静まり返っていた。本棚などの他に、勉強机がいくつも並べられており、単純に読書をしたり、必死に筆を走らせたりしている学生もそこそこいる。

ナインは、思想・哲学などに興味があったのでそれに関わる本棚を探す。すると、今ではこのような分野もあまり人気がないのか、ずいぶんと奥のほうまで押しやられてしまっていた。ところが、奇遇にも同じような本を探している人間が近くにいた。ナインは自分とその人が同類のような気がしてやけに親近感が沸いてくるのであった。あなたも、これに興味があるのですか、などといって話しかけようと思ったが、あくまで私は部外者でありあまり目立った行動は好ましくないので断念する。また、その人は白髪まじりの頭に眼鏡をかけた中年の男で、学生ではなく教授かそれに準ずる者であることは明らかであった。であるから、あまり調子に乗ったことをして恥をかくのも避けようという心理も働いたのである。

ナインは、一冊、興味深そうな本を手に取り、その場を離れることにする。

ナインが去ったあと、その男、高橋教授は偶然にも居合わせた変わった学生がそこから離れていくのを見届け、思うのである。今時、

思想・哲学を学ぶ学生など極めて珍しいものだ、と。
否、それ以上の違和感が彼の心の奥底に引っかかっていた。

（彼に覚えがある。一体誰であったか。）

そう、あれはまだ本郷のキャンパスにいた頃である。教授という職業の性質上、星の数ほどの学生を相手にせねばならないことから、いちいち個々の学生の顔と名前など、覚えることすら煩わしいのであるが、彼にはなんとなく覚えがある。

（そうだ、思想・哲学だ）

丁度、今さっきまでそこにいた彼と同じく、記憶の中に埋もれかかっている彼も珍しく思想・哲学に傾倒していたのだ。そして、わが高橋の哲学ゼミによく顔を出していた。まだケツの青い餓鬼のくせに、しょっちゅう高橋の見解を批判しては反駁され、よく頭を叩かれていたあの学生。それでも、そんな熱意ある学生だったからこそ、高橋はその学生を内心気に入っていたのだ。

（―団堂―）

そうだ、そんな名前であった気がする。滅多に聞かない名前であり、かつ偉そうな名前であったから覚えている。しかし、いまそこにいた学生が彼であるはずがない。なぜなら、彼は既に1年前に死んでいるから。

高橋も一冊の本を選び出すと、少し違和感が残りつつもその場を後にした。

第8話　試験

東京陸運保険機構が3人の新人従業員を迎え入れた次の日の朝であった。

その事務所に付随する仮眠室こと喫煙所に寝泊りをしている新米のナインは、本日をもって新米ではなくなり、早くも先輩という身分に置かれることになった事実を知らないで、のんきに腹を出して寝ていた。しかしながら、社長である弥生遼子が、曰く『絶対に起きる目覚まし』を設置しているため、時間が来ると心臓が止まるほどの轟音をかき鳴らして睡眠妨害を開始するのだ。

「うわぁぁぁぁ」

これによって飛び起きるように、ナインの目が覚めた時点ではまだ午前8時であり、『社長の悪いいたずらか』と認識をすると、今起きる理由もないので、これから新人がぞろぞろと出社してくることも露知らず、ナインはそのまま二度寝を続けるようとするのであった。

「おはよーございまーす！」

すると、今度はドアが勢いよく蹴り破られるような音がすると共に、聞き覚えのない人間の非常識なほど煩い声が聞こえるのであった。ナインは二度寝を邪魔されたことからか、この朝の静寂をぶち壊す不届き者に怒りを覚え始めていた。

「あれぇ、おっかしいなぁ。誰もいないの？たしか社長は、必ず事務所に人間がいるとか言ってたんだけど。あのぉ！だ・れ・かぁ！」

それは合理的な疑いを差し挟む余地などなく、間違いなくナインのことである。それにしても、本当にこいつの声は聞くたびにいらいらする。宅配便なら宅配便でもっと社会通念上相当な時間を選んできてもらいたいものだ。

「ここかな？」

こちらの方に誰かが近づいてくる気配がある。すると間もなく、強引に喫煙所と事務所を連絡するための扉が強引に開かれる。そして、やや背の高い長い茶髪の少女がこちらにひょっこり顔を出した。

「ちわぁーっす。あのぉ、こんなところで寝てると、風邪ひきますよ」

そう、この少女は昨日入社したばかりの辰巳春樹という新米職員。おそらくは、お役所的色彩の強いこの事務所始まって以来のやんちゃ娘である。

「アタシは、辰巳春樹っていいます。よろしくおねがいしまーす、せんぱい」

とりあえず、あの狭い喫煙所にこのやかましい娘と一緒に居たくはなかったので、ナインは眠たい顔を引き摺って事務所に出てきては、パイプ椅子を並べた上で、彼女と向かい合って座る。

「じー」

辰巳は、死んだ魚のような目をしているナインを興味深そうにみつめていた。それに対抗して、ナインもこの失礼気まわりない少女を

適当に観察する。

それにしても昨日の会社説明会が、イコール最終面接試験であったとは全く予想もしなかった。しかしながら、昨日、弥生遼子に会った時、なぜその旨を知らせてくれなかったのか。答えは決まっている、単純にサプライズを狙っていたのだろう。もしくは、嫌がらせ。おかげで、睡眠に必要となる標準時間を著しく下回ってしまったのだ。

「ふわぁー、ああ、おれは、ないんね」

私はまだ寝たりなかっただけに、失礼だとわかってはいたが、人の出会いにおいて最も重要となる自己紹介の際にあくびをもらしてしまう。そのため、音の粒が大変聞き取りにくいような発音になってしまうのだ。もっとも、この少女は正しい所作云々など理解していないであろうから問題ないであろう。ほら、現に対面する少女は、依然として舐めくさったような笑顔でいる。

「せんぱい、なにが無いんですか？ひょっとしてまだ寝ぼけてらっしゃる・・？」

「いや、そうじゃなくて、俺の名前はナイン。エヌアイエヌイー」

「えぬあいえぬいー・・」

どうやらこの少女が私の名前を理解してくれるにはもう少し時間がかかりそうであった。辰巳は何か考えているのだろうか、ぼぅっとしている。その後、いきなりハッとしては言うのである。

「そっかぁ、せんぱいも偽名なんすねぇ。なんで男ってそういうの好きなんだろ。グレイもそうだし」

「俺は好きでこの名前を名乗ってるわけじゃないよ。記憶喪失で自

分の名前知らないんだ」
「あ、ごめんなさーい。そうとは知らずつい」
辰巳はばつが悪そうに口をつむぐ。
「それはいいよ。ところでグレイってのも、昨日入ったやつ？」
「そですよ。喧嘩っ早そうなメンズっすよ。そろそろ来るんじゃないかな？」
辰巳はきょろきょろと落ち着かない様子で出入り口の方を眺めるのである。
すると、ちょうど、ドアが静かに、かつ、ゆっくりと開き、敷居の外でなにやらもじもじしている小さな女の子が姿を現したのであった。少しだけ開かれたドアの隙間から中を覗き込んで、内部の状況をうかがっている。どうやら入ってよいのか悪いのかわからないらしい。
「おい、早く入れよ」
また、その少女のうしろのほうから粗雑そうな男の声も聞こえた。
「う、うん」
少女は、男に促されて慌てて中に入ってくる。すると、この空間に、新たに小さな女の子と、ナインのやや年下くらいの青年が入ってきた。おそらく、この男のほうがグレイであると推定される。
「あれぇ、あんたたち一緒に来たの？グレイってまもる派だったんだー。」

「ちげぇよ、こいつとは偶々一緒になっただけで、道に迷ったのかシラネェけど、おどおどしてたから仕方なく引っ張ってきてやったんだよ」

グレイは顔を赤くし、むきになって反論する。しかし、彼は言い訳が下手なのか辰巳はその揚げ足を取るように言うのである。

「あんたって、意外にやさしいとこあんじゃん」

と、辰巳はグレイを肘で小突く。

「てめぇ、ぜってぇゆるさねぇ！！」

グレイは顔を真っ赤にしながら、小突いてきた辰巳を軽く突き飛ばそうとするが、辰巳はこれを難なくかわし、グレイと一定の距離をおく。しかし、グレイは距離を詰めて今一度突き飛ばそうとするも、これもひらりとかわされる。そんなわけで、これがいたちごっことなり、事務所内ではある種の鬼ごっこが始まっていた。

「は、はるきちゃん、やめようよ。グレイも」

まもると呼ばれる少女はおろおろしつつ、仲裁に入ろうとするも、アクロバティックな動きをする2人には全くついてゆけず、その場で手をこまねいていることしかできなかった。

「はぁ・・・」

いままでの事務所の雰囲気とは打って変わって、本を静かに読みふけることもかなわなくなった予感がする。はたして、変化を疎ましく思うのは年のせいであろうか。

「こら、はるき、てめぇ、一回だけなぐらせろ」

ふと、ナインはドアが開かれたままの事務所の入り口の方向に人気を感じた。むしろ人気どころか凄まじい怒気を感じる。この感じはおそらく西田であろう。一瞬背筋が凍りそうになるのであった。

「おい、くぉら、貴様らぁぁぁぁ！！！！」

怒号か咆哮か、西田はけたたましい怒鳴り声を挙げた。弥生遼子というリミッターが無い時の今の西田はおそらく最強である。そのあと、散々暴れまわっていた辰巳とグレイが西田の鉄拳制裁をくらったのは言うまでもないことだが、なぜかナインまで巻き添えを食らうのであった。

（二）
午前9時頃

東京陸運保険機構の従業員があらかた揃ったのであった。今はもう、先ほどとは打って変わり、いつもの事務所の風景へと戻っている。蓋し、騒音の原因となった新人2人とナインがたんこぶをつくって部屋の隅に静かに座っていたからである。
他方、優等生であるまもるという少女は、すっかり詩季と打ち解けて、隣同士で談笑していた。まもるという少女の年齢は明らかではないが、仮に彼女のほうが詩季より年上であっても、外観上は詩季の方が姉である。

「じゃ、とりあえず、あんたたちもみんなの名前覚えたかしら？」

弥生遼子はまもると、隅でおとなしくなっている新人ふたりにきいた。

「はい」

おそらく、このふたりは西田のことしか覚えられなかったものと思われる。恐怖と関連付けられる記憶というものは誰しもが鮮明に思い出すことのできる性質のものだからである。

「オッケー。早速だけど、あなたたちにはそれぞれ戦闘用のロボットを貸しますので、実戦テストを実施しようと思います。覚悟はいい？」

「あ、社長」

グレイが頭にできたたんこぶを撫でながら、もう一方の手を挙げる。

「なに、グレイ？」

「俺、自分のやつ持ってるんすよ。実際、今日これに乗ってきてて・・」

「あら、そうなの」

「あ、あの、私も今日ここに来るとき、その、グレイにそれに乗せてもらったので、それ、見ました。」

まもるも、おそるおそる社長に進言し、緊張しているのか、やたらと指示語が多い供述ながらグレイの証言の信用力を高めようとした。他方、それを聞いた辰巳はやっぱりか、という顔をして笑いをこらえている。それを隣で横目に見たグレイは辰巳をにらみつけると、辰巳は口を塞いで押し黙った。

「それなら別に、そっちを使ってテストを受けてもらってかまわな

いわ。こっちも経費がうくし。で、それは今どこにあるの？」
「それなんすけど、勝手にガレージん中使わせてもらいましたよ」

グレイはガレージを指差していった。それに従い、弥生は傍にいた秘書にガレージを眺めることのできる窓にかかっていたカーテンを開かせる。すると、そこには彼女が見たこともないようなロボットで、どこかオーガを思わせるような黒いものが存在した。

「あんた、これどうしたのよ？」

弥生は軍事兵器に精通しているほうだと自負していたが、それでもこのロボットは今までお目にかかったことが無いだけにさすがの彼女も驚きを隠せなかった。

「おやじのところからパクッてきました」

グレイは悪びれもせず平気でいう。

（そうか、やはり）

弥生は昨日からずっと引っかかっていた黒井という名の真実を思い出したのである。即ち、黒井とはＢｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社の代表取締役会長の苗字である。とすれば、このグレイはその御曹司であるということが容易に判明した。そうでなければ、こんなロボットを簡単に盗めるはずもない。なお、Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社は重工メーカーで、最近はここの戦闘用ロボットの人気が高く、急速な成長を遂げている企業である。

「あんたＢＷ会長の息子だったのね」

ＢＷとは、Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社の略称である。

「まぁ・・」

「やばくね。グレイってボンボン・・・、あでっ！」

グレイにとっておそらく、『ボンボン』とはＮＧワードのひとつなのだろう。グレイは横にいる辰巳の頭をグーで殴った。

「えぇまあ。で、コイツは、なんか、おやじが新しく作ったやつで、型番号はＢＷ００１３、ゲイボルグっていいます。まあ、こきつかってやってください」

弥生はＢＷの型番号について、たしか最新のでも１２であったことを記憶していた。とすると、このゲイボルグという機体はまだ公にすらなされていない極秘中の極秘といったところか。それだけに、弥生は心が躍る。自称軍事マニアの血が騒ぐのである。弥生はＢｌａｃｋ　Ｗｅｌｌの何が好きかというと、その機体のデザインのスマートさであった。して、今回のこのゲイボルグという機体はおそらく名作中の名作となるであろう。ＢＷらしさを残したまま、オーガの滑らかな動きを実現すべく、人工筋肉を巧みに用いて、擬似的な鬼を人の力をもって作り出したのである。まさに科学至上主義の賜物。

弥生は早くあのロボットを間近でみたいという一心しかなく、実技テストのことなどとうにすっ飛んでしまっていた。

なので、秘書の田中が残りを引き継ぐこととした。

「えぇ、皆さん申し訳ありません。理事長は現在おとりこみ中なので私が進行役を勤めさせていただきます。」

ガレージへの窓ガラスに張り付いている弥生を横目に、秘書は紙をみなに配布した。

「これ、理事長が考えたテストなんですけど、てかこれもう、仕事ですね。つまり、『できるかぎり他のやつより多くの鬼を倒すこと』です。はい、じゃあ、みなさんガレージへ行きましょう。」

秘書は、バスツアーのガイドのように旗を掲げて、職員を誘導しようとした。

「あの、田中さん」

ナインは突然に挙手をした。

「はい、何でしょうナインさん」

「これ、新人のテストじゃなくて、俺たちもやるんですか?」

秘書は、数秒、偽りの笑顔を浮かべたまま意味不明の沈黙をする。

「・・・当然です。こんなところにいても人的資源の無駄遣いですよ。それと、わたくしのことは『あいちゃん』とおよびくださいね。ナインさん」

『あいちゃん』ことわが社の秘書は、皮肉にもまことにこやかな表情を維持したまま答えてくれた。それのために、ナインは居心地が悪い気分であった。

「他に質問のある方、いらっしゃいますか?」

秘書はきょろきょろ周りを見渡し、手を挙げるものの不存在を確認

すると、先んじて、事務所の入り口ドアを開いてくれた。

「ではみなさん。私についてきてください」

（三）

ガレージに着くと、そこには既に人数分のロボットに加え、グレイのゲイボルグ、さらにはナインのプロトオーガが並んでいた。

「えぇー、みなさん私の声が聞こえますかー。聞こえない方は、いま一歩前へとお進み下さい」

広いガレージで声が伝わりにくいのか、秘書はやや声を大きくして言う。

「ロボットの戦闘スタンスに関してですけど、格闘型、射撃型ならびに防御型のみっつがありますので、どれか好きな方をお使いください。もっとも、今日のテスト内容からすると防御型を選ぶ人はいないと思われますので、実質的には2択ですけど」

そういうと、秘書は横一列に並んだ同型のロボット6体を指差した。見る限りでは、右から3体が射撃型で、その横の2体が格闘型、残った一番左端の1体が防御型だとわかる。

「それでは皆さん、各自が選んだロボットに搭乗してください」

秘書が口火を切ると、みな一斉にそれぞれのロボットのもとへ歩いていった。当然、ナインはプロトオーガの下へいくと、誰かが後ろについてきた。ふと、後ろを振り向くと、そこにはグレイがいた。

「グレイか、どうした？」
「いや、朝ここに入って来た時からコイツを見ちまってさ。コイツ、あんたのだろ。いったい何なんだよ、これは？一見したところ、オーガのようにも見えるが、どうやってできてんだこいつ」

グレイはオーガの顔を見て、生唾を飲み込みながら言うのである。そして、好戦的な男の本能からであろうか、彼ですら畏れを隠しきれずにいる。

「わからない。グレイ、俺が記憶喪失だって聞いてなかったか？」
「そういやそうだったな」
「俺が目覚めた時にはもうコイツと一緒だったんだよ。だから、何にも知らない」

グレイはそんなナインの話をちゃんと聞いたのか、息を荒くも、ナインの鬼を見つめている。どうやら乗りたいのだろうか。そんなグレイをよそに、さっさとナインは自分の相棒の鍵を取り出しては搭乗口を開いて乗り込んだ。

「コイツには乗らないほうがいい。魂吸われるから。」

ナインは、グレイの返事を待たずして鬼の出口を閉じると、ナインの鬼は動き出した。
その様子をじっと見つめていたグレイは、何を思ったのかは知らないが、軽く頷き、自己のゲイボルグの下へ駆けて行った。

ナインはプロトオーガの目を通してガレージ内の様子を見る。今日のテストは新人の3人を含めて、私と西田、それに詩季の計6人がいるはずである。西田は相変わらず格闘型を選んだようだ。他方、詩季は射撃か。意外に辰巳も射撃である。完全に格闘でいくと思っ

ていたのだが、少し予想がはずれた。
となると、残ったまもるも射撃であるだろうから、わが社はやや射撃が多数派となりそうである。

「こらぁー」

いや、ひとりだけ防御型を選んでしまい、『あいちゃん』こと田中にどやされている馬鹿者がいる。

「あなた！わかってるんですか！これは遊びじゃないの！守ってばかりじゃ敵は倒せないの！！」
「あの、その、ですから、私は、これが一番向いてて、その・・」

そう、この誰よりも多く敵を倒さねばならないテストにおいて、防御型を選んでしまった馬鹿者とは、まもるであった。『あいちゃん』はむきになっているのか、目をありえないほど釣り上がらせては地団駄を踏んでいるのである。しかしながら、それならば始めから防御型など選択できないようにすればよかったのに、と思う。相変わらず、まもるはもじもじしてしまっているのであった。

「いいじゃないのよ、別に。やらせてあげなさい」

後ろから、弥生遼子がフォローに入った。秘書はすぐにこれに反論する。

「理事長、この子はテストなんて全然やる気が無いんですよ。だって、防御型には何にも武器なんて積んでないんですから」

秘書はまもるを指差しては、必死に弥生に訴えかけるのである。もちろん、その人差し指の先にいるまもるは怯えきっていた。それに

しても武器ぐらい積んどいてやれよ。

「この子がやる気が無いなんて聞き捨てならないわね。おそらく新人3人の中で一番やる気があるのはこの子よ。説明会であなたの講義を真剣に聞いていたのもこの子だけだし・・・。これ、言いたくなかったけど」

弥生は、頭に血の昇った秘書に、いやらしい目を向けた。

「は、たしかに・・」

秘書は昨日の説明会の時、他の2人が寝てしまったためにどうしようもなくなりそうであったところ、まもるだけが真剣に自分の話に耳を傾けてくれていたことで窮地を救われたことを思い出して、反省した。

「それにあなたも何か策はあるんでしょ。失望だけはさせないでね」

弥生は、相変わらずキザにまもるの肩に手をおいて、期待のことばをかけた。そして、そのままどこかへと行ってしまった。

「は、はい！」

まもるの返事はかなり、りきんではいたが、強い意志と自信が感じられたのであった。

そんな光景を見ていたナインは、こんなんで本当にテストになるのだろうかと憂鬱が晴れなかった。

第9話　試験－2

「これでみんな揃ったわね」

東京陸運保険機構の敷地内には、6体もの巨人がそろっていて、非常に壮観であった。その目の前には、試験監督官である弥生遼子代表理事と、田中愛秘書がちょこんと突っ立っている。

「あと、最後に連絡事項が一つ。試験時間は3時間。得点は、ここに持ち帰ってきた鬼の評価額の合計で競います。だから、極論すると、赤鬼を持ち帰ってきた人には２０億得点はいります。あと、機体の性能差も考慮して、ナイン君はマイナス９０パーセント、グレイはマイナス４０パーセント、まもるはプラス５０パーセントの補正を掛けさせてもらうわね。連絡事項は以上。はい、試験開始」

弥生が高出力のメガホーンで試験開始を宣言すると、みな一斉に市街へと飛び出していった。それにしても、ナインだけが法外な補正を掛けられてしまい、実に他の連中の１０倍もの鬼を狩らねばならないのであるから、とにかく、尋常でないスピードで捕獲対象たるオーガどもを見つけ出さなければ始まらない。

そこで、ナインは突然変異的に手に入れた『ｗｉｎｇｓ』プログラムを実行し、誰よりも早く鬼の下へと向かうのである。

「あ、せんぱい、そーゆーのズルいっすよ。アタシら空飛べないんすから」

辰巳は空を飛び立とうとしたナインを見逃さなかった。辰巳のロボットは左腕からワイヤーロープのようなものをナインのプロトオー

ガの腰部分に巻き付けた。そして、それが翼の力で一気に浮き上がると、ロープに引っ張られるように辰巳のロボットも宙づりになる。

「おい、こら、お前、なに勝手に人を利用してんだ」

「別にいいじゃないっすか。減るもんじゃないしぃ」

もうすでに現在、ナインたちはかなりの高度にいたため、さすがにここでロープを切って辰巳を地に落とすことは憚られる。

「しょうがない。絶対に墜ちるなよ・・」

ナインはため息をつくと、そのまま辰巳を吊るしながら目的地に向かうことにする。

「それに・・・」

辰巳は何かいいかけた。

「せんぱいの鬼の行くところって、強そうな鬼がいそうでわくわくするんですよね、くくく・・」

辰巳の発言を聞いて、ナインは背筋がぞっとした。この少女、恐ろしいほどの殺気を隠しきれないのだ。通信を通してでも、生暖かい殺意がじりじりと伝わってくる。それだけに、ナインは恐ろしくも頼もしい新人が入ったようであると、生唾を飲み、不安と安心が同居するような矛盾した感覚に陥った。

他方、詩季はまもると行動をともにすることとした。詩季は重い鉄の塊を一生懸命に動かして、大地を歩いているのに、それを横目にナインと辰巳が自分の上を軽々と飛んで行くのを見る。

「ナイン君、ずるい」

詩季は、頬を膨らませて言う。彼女は、なんだかいらいらしていた。

「しーちゃん、大丈夫。私たちは私たちでがんばろう」

意外と大人として成熟した思考を持つまもるが、詩季をなだめる。このふたりは今朝はじめて会ったばかりだが、気が合うのだろう、まもるは詩季のことを『しーちゃん』と呼ぶ仲になっていた。もう、どっちが年長なのかはさっぱりわからない。

「うん」

それにしても、このふたりのコンビネーションは戦闘において成立しうるものであろうか、はなはだ疑問である。なぜなら、詩季は詩季で身体的な障害があり、まもるはまもるでロボットの機能上、明らかに本試験の目的を逸脱しているからである。もっともそれは、焦らずとも彼女らが戦闘を開始すればおのずと明らかとなろう。

他方、グレイのゲイボルグは詩季たちとは別方向を走っていた。ただ、ゲイボルグにも飛行機能はついているのであるが、エネルギーの消費が激しいため地上を行くことにする。

「コイツの力、試す時がきたな。マジ、楽しみだぜ。ひゃっほぉーい」

グレイは涎がとめられないほどの興奮に酔いしれ、ぺろりと口の端を下でなめるのである。この男もまた非常に好戦的なタイプなのだ。グレイの実父はロボット産業の会長であるゆえ、小さい頃からグレ

イはロボットに乗り続けて大きくなったのである。そんなグレイがゲイボルグに出会ったのはつい最近の話であり、まるで初恋のような衝撃を受けては、その途端に駆け落ちしてしまったようである。こんな話を日々会社の後継者問題に悩まされている黒井会長が聞いたら激怒するに違いない。

しかし、盗ってしまったものは仕方がない。あとは、後先考えずに今を十分楽しめばいい。後悔する時間はまだたくさんある。

だから、グレイは加速する。誰よりも速く。誰よりも強い男になるために。

「いくぜ、ゲイボルグ！ひゃはははははっは！！！」

グレイは、強いエンドルフィンの刺激を受け、脳細胞をひっくるめて自身の全細胞を戦闘モードへと移行させた。

西田はひとり歩いていた。

（二）

ナインと辰巳は、危険度Ａランクとされる六本木に来ていた。すなわち、ここに来れば９９パーセント鬼と出会うことのできる恐怖のテーマパークである。現に着陸しようと下を見ると、餓鬼が何体もうじゃうじゃしていたのだ。おそらく、ここで自らの行動の指針でも話し合っていたのであろうか。もしくは、ディスコで踊っていたのか。

「あ、せんぱい、あざーっす」

辰巳はそういうとロープを切断し、重力に任せ、見つけた鬼の群れへと飛び込んでいった。

「あ、おい！」

あまりに突然の無謀な行為であったために、ナインはびっくりする。いくらなんでも、普通のロボットがあの数の鬼を相手にできるわけが無い。だから、ナインも辰巳を急いで追いかける。

べちゃ。

辰巳のロボットの着地予定地点に1体鬼がいたが、着地の勢いそのまま鬼を踏みつけにすると一瞬で肉塊と化すのであった。数十メートル以上もの高さから、2トンほどの鉄の塊が落ちてきたのだ。そのため、犠牲となったオーガは、熟れすぎたトマトのように、赤い果肉と血液を飛び散らせてしまっている。この盛大なる辰巳様の登場によって、まわりのオーガは一斉に彼女の存在に気づき、一瞬のうちに彼女のロボットはオーガの群れに包囲されてしまったのだ。

「あれ、思ったよりも多くね？」
「おい、辰巳・・！」

『馬鹿』とナインは思わずにいられない。もう脱出不可能な時点でそんなことに気づいても、もはや手遅れなのだ。しかし、まだ急げば間に合うかもしれないと、ナインは上空から辰巳を救出しようとした。その時である。

「ま、いいや。何匹いたって変わんねぇし」

辰巳から強烈な殺気が漂ってきては、ナインが近づくことすらはば

かれる空気が形成された。そのまま、辰巳のロボットは両手に二丁のショット・ガンを取ると、わらわらと密集してきた鬼に対し、近距離からそれをはっしゃするのだ。

「あはははははははははははは」

両手からほぼ同時に散弾が放たれると、辰巳を中心とした対角線上の双方の鬼の集団の上半身がまとめて吹っ飛び、肉片をとばす。

「しねしねしねしねしね」

あるいは、砕け散った肉がさらに砕け散り、ミンチとなる。一体全体、彼女は鬼の肉でハンバーグでも作るのだろうか、そんな疑問すら沸いてくるほどに粉砕が徹底している。

「しねよ。しね」

ショット・ガンの反動から立ち直ると再び、辰巳は間髪おかず、自己の軸を９０度回転させ、第１弾を逃れてより接近してきた鬼の群れへ散弾をぶち込む。

「しねやぁぁぁぁ！！」

すると、今度の被害者たる鬼たちはさらに至近距離から弾をその身に受けたためか、全身が砕け散り、肉片や鮮血をより上空へ高く舞い上げては、華々しく散るのである。

「ひゃはははは！！」

そして、辰巳はこれを？目標が失われる、もしくは？弾が切れる、

の少なくとも一方の要件を充たすまで続けるのである。もちろん、鬼も弱いわけではないので、隙だらけの辰巳を狙う危ない場面が多々あった。その場合、ナインが度々、ガレージから持ってきた、非オーガ用のライフル銃で援護するのである。

「せんぱーい、超きもちぃっすよ、これ！あはははは！！」

鬼の目、角、腕、様々な部位が宙を舞う。これはまるで謝肉祭である。日頃の鬼たちの業務に感謝し、神へ鬼の身体のパーツを一個一個お供え申し上げるのである。祭りの祭事を取り仕切るのは、鬼よりも鬼と化した辰巳である。ナインはその神官の下働きをする奴隷と言ったところか。

「まったく、お前、俺がいなかったらとっくに死んでるぞ」

ナインはぶつぶつ不平をもらしながら、迅速かつ的確に辰巳を襲う鬼を逆に襲う。

「あはははは！しんじゃぇー！！」

まるでややしぼんだ風船が破裂するような鈍い音を立てて、同じように肉が飛ぶ。その繰り返し。

そして、辰巳がトリガーを引いても弾が出なくなったことを確認すると、ちょうどまわりにいた鬼は全滅していた。辰巳は前述の？と？の要件を充たしたので攻撃を終了させる。

「はぁー、楽しかった」

辰巳は満足そうに、空になった2丁のショット・ガンを放り投げた。

「楽しかったって、お前、これ持って帰んないといけないんだけど・・・」

今日の試験は事務所に倒した鬼を持って帰るまでが試験である。しかし。

「あ、そっか。あちゃちゃちゃ・・・」

「あちゃちゃちゃ、じゃねぇよ。これもう持って帰るの無理じゃん」

おそらく辰巳とナインは３０体ほどの鬼をここで片付けたであろう。しかし、鬼たちの部位はばらばらに砕け散ってしまい、全部持ち帰るだけで日が暮れるうえ、仮に持ち帰れたとしてもこれではもう売り物にはならない。

「あ、でも、探せば多分まだ綺麗なのありますって、ほら」

辰巳は肉の山の中から、相対的に綺麗そうなものを取り出しては、こちらに向けてみる。しかし、外に出してみると下半身がなかったりする瑕疵物（かしぶつ）だらけであった。

「まぁいいや、とりあえず持って帰れそうなのだけでも持って、一旦帰ろう」

そういって、ナインも残骸の中を捜索することにした。

同じ頃、西田は北へ向かっていた。

（三）

他方、同刻、詩季とまもるのペアは神奈川県川崎市内に到着した。ここは、敵本隊のある横浜の北に位置し、町田に比べて危険度はＢランクと高く、鬼との遭遇率も高い。早速、彼女らは鬼の集団を前方に捕らえた。

「まもるちゃん、手はずどおりやれる？」

「うん」

ふたりはここまでに来る途中、何やら作戦を練っていたようで、互いに顔を見合すと、直ちにそれを開始した。

まず、まもるが機体のブーストを一気に噴出させると、装甲と盾の重装備によって堅牢な防御型はふわりと浮遊しては敵陣の１０メートル上空まで飛び、そこに滞空した。鬼たちもこれに気づくと、上にある鉄の塊を見上げるのである。鬼たちは、当然そこまで飛び上がることもできないので、まもる機に向けて光球を放つ。

その時、まもるは意識を研ぎ澄まさせていた。自機に攻撃が命中するのを、それまでひたすら静かに待つ。

「今」

光球の連弾がまもるに命中する直前、まもるは特殊な防御盾を展開し、バレーのレシーブのようにして見事に全弾はじき返す。何発かが鬼の方まではじき返され、これらは自らの生み主である鬼の頭部を抉り取り、恩をあだで返すがごとく殺した。

「すごい、まもるちゃん」

詩季も感心せずにいられない。まもるは武器を何ら使わずして、鬼を倒したのであるから。いや、それ以上に弾の入射角と反射角を精

密に計算し、全て受け流すことに成功したまもるの飛びぬけた集中力こそ、もっとも評価すべきである。

「しーちゃん、やって！」
「あ、うん！」

詩季もまた手はずに従い、それを実行する。詩季は建物の陰に隠れ、鬼に気づかれないようにしながら上空にいるまもる機をライフルで狙い打つ。
それにまもるが反射し、詩季の存在など認識すらしていない鬼のあほ面に命中させた。これは、いわゆる跳弾である。もっとも、詩季には跳弾の心得などなかったが、まもるの集中力と補完し合うことによりそれを可能にした。
ただし、鬼の攻撃も連射が続くと、さすがのまもるも受け流しきれずに機体に命中するが、防御型の装甲の前では大した損害にはならなかった。
とにかく、このふたりはまもるが敵の攻撃を一身に受け、それを反射させつつ、詩季が着実に跳弾で一体ずつ仕留めていくことで、多少時間はかかったが１５体もの鬼をほぼ損害０で全滅させた。

「やった、大成功だね」
「うん」

ふたりは一旦合流し、再びお互いの顔を見合わせると、鬼の残骸を持ち帰ることにした。

（四）

一方、グレイはどうなったかというと、横浜の本隊から１０キロメートル付近のエリアに到達していた。当然に鬼もうじゃうじゃいる

修羅場であり、上空には青鬼までいるようであった。

「くくくく、楽しませてくれよ」

ゲイボルグはバックに付着していた取っ手つきの剣状のものを手にすると、それは一瞬のうちに変形し、自身と同程度の大きさもある屈強なバスタード・ソードとなった。それを確認するのかしないのか、青鬼による上空からの砲撃によって、ここでの戦闘も口火を切ることになる。

「まずは、うざってぇてめぇからな」

実はこのゲイボルグという機体、今まで対応不可能であった青鬼にも対応できるよう設計された革新的なロボットであった。それすなわち、高度１０，０００メートルもの超飛行が可能な、人類初の人型ロボットなのである。それを可能にしたのは、鉄よりもはるかに軽いゲイボルグの全身を纏っている人工筋肉と、小型かつ高性能なジェットエンジンである。はからずも、弥生遼子の予想どおり、ゲイボルグはＢｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社の最高傑作なのである。

「ひゃはははははは！！！」

ジェットエンジンが轟音を立てると、ゲイボルグは跳ぶ。雲より高く、オゾンよりも高く。

上空に存在する青い鬼一点を目掛けて。

青鬼はゲイボルグを打ち落とそうとするも、下から突き上げてくる物体の動静を観察することは苦手なので、まずこれが音速で接近してくるゲイボルグに命中することもなかった。やむをえず青鬼はその場を離れようとする。

「逃げんなよ」

しかし距離を置きたい青鬼の意図に反し、ゲイボルグはそれを上回る速さで青鬼を追尾する。

「しねぇ！」

ゲイボルグの全長ほどの長さがある巨大なバスタード・ソードが、ジェットエンジンの勢いそのまま青鬼を串刺しにする。限りなく青い静脈血のような赤い血が吹き出ては、ゲイボルグの黒いボディを汚した。青鬼は串に刺さった蛙の干物みたいになり、そのまま機能を停止させていった。

「なんだよ、コイツ。全然、大したことねぇの。あひゃひゃひゃひゃ」

グレイは完全に機能を停止した青鬼を一瞥し、青鬼が突き刺さったままのバスタード・ソードを景気づけにぶんぶん振り回すと、地上に目を向けた。

「さて、今度はてめぇらだな。ひゃはははははは！！！」

グレイは地上の鬼目掛けて急降下した。

その頃、西田は戦っていた。

第１０話　『いつか』の可能性

試験開始から1時間３０分ほど経過した。この頃、六本木まで行っていたナインと辰巳が事務所に戻ってきた。また、ちょうどそこには、詩季とまもるペアが１５体分の綺麗な鬼の残骸を運び込んだ後であった。

「あれ、ナイン君も帰ってきたんだ。そっちはどう？」

詩季はロボットの手を振りながらきいてきた。

「どうって、おい・・」

どさっと、辰巳とナインが地上に放り投げたのは、ばらばらとなった鬼の頭だとか腕だとか、ほとんど評価点が０に等しいものばかりであった。

「なに、これぇ。全然ダメじゃん」
「いや、これは辰巳がなぁ・・・」
「せんぱい！あたしだけのせいにしないでくっさいよぉ！」

たしかに、辰巳の行動を制止しえたという点で、こちらにも落ち度は1割ほどあるのかもしれない。だが、たったの1割である。

「はいはい、わかったよ。喧嘩している時間が惜しい。辰巳、さっさと行くぞ」

ナインはいろいろと不満もあったが、ここは先輩として寛容さを見せることにし、さっさと辰巳のロボットの背中を押した。

「あ、せんぱい。その前にショット・ガンの弾・・」
「お前、もうショット・ガン使うな！」
ナインは思わず辰巳に突っ込みを入れてしまった。
「えぇ～、あれがないと盛り上がんないじゃないっすかぁ」
「お前に付き合わされる俺の身にもなれ、ばかやろう」
そういって、ナインと辰巳は一旦ガレージの中へ消えていった。それを見ていた詩季は、なぜか心の奥底では苛立ちを隠せないでいたのであった。
「もう、はるきちゃんたら・・」
まもるが辰巳の放置していった鬼の残骸を綺麗に片付けながらいった。
「しーちゃん、私たちも行こう？」
「・・・」
詩季はまもるの誘いに応えなかった。というより、正確には何も耳に入らなかったのだ。なぜなら、彼女は苛立ちを越えたすごく不安な気持ちに襲われたからであった。
「しーちゃん？」
まもる機が自分の前に立ったことで、ようやく思考が正常に戻る。
「あ、ごめん。もう行かないとね・・」

詩季は、気力なく応える。

「しーちゃん・・・」

まもるは、そんな彼女の気持ちを悟ったのか、その後は言葉を続けなかった。代わりに、ガレージのほうをぼぅっと見つめている詩季を見守っていたのである。

そうこうしているうちに、ガレージの中に入っていたナインと辰巳が外に出てきた。詩季はその声のするほうをみる。

「あーあ、マシンガンじゃいまひとつなんすけどねぇ」

「こっちも最大限譲歩してんだから、ありがたく使えよ」

「はいはい、わかりましたぁ。まぁ、マシンガンでもショット・ガンと同じような快感は味わえるし、いっかぁ・・」

「だから、それをやめろって言ってるだろ。まじで俺たち0点だぞ」

「ケチー」

詩季はその会話をずっと聞いていた。会話を聞くたびにいらいらするのはわかっていたが、聞かずにはいられなかったのだ。聞かないと不安で不安でつぶれそうになるから。しかし、話を聞けばさらに不安が募る一方で、かえって悪循環であった。

詩季はこの不安の元を断ち切るために、『ナイン君、がんばって』とか気の利いたことを言おう、言おうとするも、なぜか今は言い出しづらくて言葉が口をついて出てこない。他方のナインはというと、そんな彼女の気持ちなど露知らず、もう間もなく飛び立ってしまいそうである。そんな詩季を横目に見ていたまもるはナインに対して言う。

「あの、ナインさん」

もうこれから飛ぼうとしていたナインがぴたりと止まり、声のほうを向いた。

「どうしたんだい？まもるちゃん」

「しーちゃん、こんなに鬼を倒したんです。せめてしーちゃんよりはいい点をとってくださいね」

「まもるちゃん？」

ナインはどうやら困惑しているようだ。あのまもるからこのような挑戦ともとれることを言われるとは思ってもいなかったからであろう。

「ほら、しーちゃんに何か言うことはないんですか？」

「・・詩季、第1ラウンドは遅れをとったけど、次は負けないからな。そっちも無理はしないほどにがんばれよ」

これを聞くと、あれだけ詩季の心に蓄積されつつあった不安や苛立ちはきれいに吹っ飛んでいってしまった。詩季はいつもの彼女に戻っていうのである。

「あ・・う、うん、ナイン君も・・その、私に負けないように・・がんばってね」

「ああ」

それをきいたナインと辰巳は再び空へと舞い戻っていった。

「・・・」

まもるは自分の友人がいつもの詩季らしさを取り戻したことに胸を

撫で下ろすと、少しだけ微笑んだのである。

「まもるちゃん、ありがとう」

さすがの詩季も、まもるが気を回してくれていたことに気づいた。あの、恒常的におどおどしているまもるがナインを挑発するような態度にでるなど極めて異例の出来事であるからである。

「しーちゃん、私たちも行こう？」

まもるは、素直でない友人に対して、手を差し伸べてくれた。

「うん」

詩季は、うれしそうにその手をとった。

その頃、西田は鬼を運んでいた。

「俺も、誰かと組んでりゃよかったぜ・・」

一方、その頃のグレイはというと。

地上に降りて、ただひたすらに鬼をバスタード・ソードを用いてはぶった切っていた。この男も辰巳同様、鬼を持ち帰ることなど頭には全くなく、自己の欲望を充たすためだけにただ、剣を振るっているのである。

鬼が集まってきたら横一閃し、まとめて鬼を上半身と下半身とに分けるのである。基本的には、集まってきたら横一閃。集まってきたら横一閃の繰り返し。ときどき別の感触を味わうためか、頭部から剣を突き立て一刀両断したりするのである。そう、ここは横浜の青

いベイサイドとは対照的に、赤い血の海となっているのであった。

「なんかそろそろ飽きてきたな」

ゲイボルグに見合うような、心踊る相手を探していたグレイであったが、敵のあまりの弱さに無気力感を覚えるようになっていた。

（二）

そして、試験時間はあっという間に過ぎ去り、本試験は特に問題もなく無事に終了した。試験結果を心待ちにしていた弥生遼子は、実際に蓋をあけてみると、さすがの彼女もこれには唖然とした。

「なによ。これ！！ふざけてんじゃないの？」

ナイン　１００点。
辰巳　春樹　１００点。
西田　武彦　１億点。
グレイ　１億６千万点。
桐生　詩季　１億８千万点。
沖　まもる　３億点。

「なんでうちの稼ぎ頭であるアンタが最下位なのよ？」

弥生遼子はナインの胸倉をつかんでは上下左右にこれをおもいきり揺さぶる。

「いや、これには訳が・・・」

「言い訳なんかいいの！あんた減給処分ね！！」

そう言って弥生は、ナインを思い切り突き飛ばした。それにしても、『なんで』と、あなたが訊いてきたのだから弁解させてくれと反論することは、今の彼には無理であった。たしかに、いかなる事情があろうともナインが１００点しかとれないという事態は容易には想定し難いから、これほどまでに弥生が激昂するのもやむをえないであろう。

ちなみになぜ、ナインの点数がこれほどまでに低いかといえば、ペアを組んだ辰巳が後半戦においても、前半戦のショット・ガン同様、マシンガンで鬼の群れを粉砕してしまったためである。かといって、自分の仕事に集中してしまうと、すぐにでも辰巳は鬼に殺させかねない状況であったから、援護せざるを得ず、全く自分の仕事に首が回らなかったのである。しかもその上で、ハンディキャップとしてマイナス９０パーセントの補正まで掛けられてしまったのだ。

一方、グレイも同じような理由で、時間ぎりぎりまで鬼を切り続けていたはいいが、結局持ち帰れたのは最初に倒した青鬼だけだったからであった。そこから、ハンディッキャップとしてマイナス４０パーセントしてこの点数となった。

結局、一番点数が低いと思われていたまもるが抜きん出た成績で、堂々の１位となった。もっとも、プラス５０パーセントの補正はかかっているが。

（三）

本日の業務終了後、町田の空は、すっかり橙色に変わってきていた。ナインは弥生遼子に、はじめてこっ酷く怒られたため、自分もいずれは西田のような立場になるのではないかと不安で心が一杯であった。そんな陰鬱な気分の中、ひとり喫煙所のソファに横になってみても、全く寝付けそうにもなかった。かといって、本を読む気も起きない。

「最下位か」

別に成績の悪さに不満があるわけではなかったが、その理由を全く弥生に聞いてもらえなかったことが少し悔しかった。ナインはそれなりの働きはしていたはずだと思っていたからだ。とはいえ、辰巳に対して少し甘いところがあったので、そこは素直に反省すべきであろうか。これは、辰巳の実力を試す試験だったのであるから、今日、彼女のために自分がしたことはありがた迷惑的カンニング行為に準ずる行為であったのかもしれない。

すると、喫煙所のドアが静かに開いた。詩季である。

「ナイン君、今日の勝負は私の勝ちだね」

詩季はブイサインをして勝ち誇った顔をした。

「ああ、俺の完敗だよ。すっかり、後輩の尻にしかれてしまったな・・」

そういいながらナインは起き上がって、ソファひとつを詩季に譲る。

「結局ナイン君、春樹のいいなりになってたんだ」

詩季は、ナインのすぐ隣に開いたそこに腰掛けた。

「ふがいないけどそういうことだよ。あいつは本当に、猛獣みたいなやつだよ」

「春樹がそれ聞いてたら、怒るよ」

「絶対に言うなよ」

「うん」

そう言った彼女の顔は、悪意に満ちていて、今から３０分後に辰巳の逆襲がないか不安だった。

「まぁ、負けた理由は何にせよ、勝負に負けた以上、何かおごるよ。金ないけど」

「え、いいよ。そんなの期待してないし」

「俺、そういうけじめくらいはしっかりしたい性分みたいなんだよ」

「そこまでいうなら。でも、欲しいものなんて急に言われても困るなぁ」

詩季は記憶を搾るように考え込んでしまっているようだ。

「おいおい、なんか高いものとか考えてないか？」

「ううん、やっぱりそういうのとか全然いらない。だから代わりに、その・・」

詩季はまもるみたいに頬を赤くしてもじもじしてしまった。

「代わりに、いつかデートしよ！」

詩季は勢いに任せていってしまった。もともと肌の白い彼女は、林檎飴のようにまでなっていた。

「デート？」

ナインは思わず聞き返してしまった。というのも、ナインが彼女に何かを奢るという過程には、論理的にデートという行為が当然の前提に含まれていたから、その前提だけでいいと言われるとかえって何をすればよいか困ってしまうからである。しかし、ナインの目的も窮極的にはそれであった。だからこそそのために、こんな回りく

どい話を持ちかけたのである。

「あ、だめならいいんだ、別に・・」

詩季は、自分が何をやっているのかわからないのであろう、殊更に羞恥心を感じて今にも泣きそうである。

「わかった。今度いつ休みが取れるかわかんないけど、その時にでもしよう」

詩季の表情が一気に明るくなった。

「うん！」

このとき、ナインはこれでよかったと思えた。試験で悪い成績をとったおかげで、楽しい日がこれからも永遠に続くのだと思えた。だから、このときのナインは、その『いつか』が来ない可能性など、全く考えることもできなかった。

その喫煙所の外では、ドアの窓から見える詩季の嬉しそうな顔をみて、まもるも笑っていた。一時期は、泣きそうな位にまで沈んでいた詩季であっただけに、ここまで彼女を回復させた自分の腕に惚れ惚れしているのである。

「ま・も・る！」

「あ、はるきちゃん」

ひょっこりと辰巳がまもるの横に現れてきては、辰巳もまもるの視線の先をたどり、一緒に喫煙所の様子を窺うのである。

「やっぱ、詩季ってせんぱいに惚れてたんだぁ」
辰巳はいたずらそうにまもるに耳打ちした。
「はるきちゃんも気づいてたの？」
「明確ではないけど、女の勘ってやつ？」
「じゃあ、はるきちゃんの勘はすごいね」
まもるは軽く拍手するまねをして見せた。
「だとすると、今日アタシ、詩季に悪いことしちゃったかな」
辰巳は今日のナインとのやりとりを思い出しているのか、やや遠い目をして言うのである。まもるはそんな辰巳を見ては、喫煙所にいる詩季を指していう。
「でも、もう大丈夫みたいだよ」
「そっか。ならいいけど。ところで、アンタ実はやるのね。見直しちゃった。さては、あのプラス５０パーセントも計算のうちかい？」
辰巳はまもるの頬をつつく。
「う、うん」
「あら、あっさり認めんのね」
辰巳は、まもるの頬に指を突いたまま硬直する。そして、辰巳は悪戯半分に軽い気持ちでまもるの表情を覗くと、それを見てしまった辰巳は後悔した。そう、辰巳はまもるがニタリと凶悪な笑みを浮かべているのを見てしまったから。そのまま、まもるはいう。

「人間の思考パターンなんて手に取るようにわかるもの。所詮は合理的判断に基づく論理の連続に過ぎないから、ちょっとの計算で操ることすら簡単・・・ふふふふ」

辰巳はその時思った。この少女は今まで自分とはまったく別の人間だと思っていた。極論をいえば抽象的な一般人の不特定多数に含めてしまってもいいような種類の人間であったのだ。しかしながら、この少女も自分と同じ側の人間であることを今、確信したのである。蓋し、背筋が凍るような言葉を平気ではき捨て、暗黒の心を垣間見せたからである。そう、彼女もまた‘鬼’の適性をもっているのだ。

「あんた・・もしかして、いつももじもじしてんのも計算のうちってやつ？」

「そ、それはちがうよぉ。直そうと思っても直らないんだよ」

まもるはいつものまもるに戻っていた。

「あ、そ」

辰巳はしばらく眉をしかめて、この性悪女を観察していた。

第１１話　孤独の決意

その夜、各機に残っていた試験における映像データを見ながら、弥生遼子はひとり考え事をしていた。

『ひゃはははははは』
『しねしねしねしねしね』

弥生は、グレイがこの手の属性を有する人間であるということはある程度予想していたのであまり違和感はなかった。しかし、辰巳春樹の意外な言動には、同じ女として若干引きまくっていた。

「ふぅ」

弥生はセブンスターに火を点けては、煙をすぅーっと吐く。そして、映像があまりにもカオスを極めてきたため、自分も頭がおかしくなる前に、とスイッチを消した。

「にしても、どうすっかなぁ・・」

弥生は仰向けになるほど椅子の背もたれにどっかりと寄りかかると、歪んだ背骨がぱちぱちと音を立ててきもちがいい。そして、もう一度、セブンスターを吸う。

弥生は、憂鬱であるが故に考え事をしているわけでは決してなく、むしろ新人３人が予想以上に頼もしかったために積極的な策を練ろうとしていたのであった。性格上の瑕疵はたしかに問題ではあるが、戦闘に関してはこの３人は相当筋がよいというのは映像を見れば明らかである。これほどの戦力があれば、わが社の経営も何不自由な

く、順風満帆な人生を送ることも可能であり、現状維持のままでのらりくらりと受身的に依頼をこなしていけばこれほど楽な仕事もない。また、ここはそもそも、そういう団体であるし、弥生自身もこのまま行くほかはないと考えていたであろう。

ただ、彼女には古巣である防衛省の奴らに一泡吹かせてやりたいという強い希望があったのだ。しかも、これほどなまでに優秀な戦力が自分の手の内にあるのだ。これを利用しない手はない。このままやつらに媚びへつらえているだけ、というのは彼女にとって最も耐え難い事実でもある。やつらに自己の力量を見せ付ける方法はただ一つ。

「赤鬼の討伐」

弥生は天井へ向けて、煙の輪を浮かした。

しかし、あの子達にこんな危険な任務をさせてよいのであろうか。赤鬼の戦闘データ自体、全く残されてはいないのだが、防衛省の艦隊をいくつも沈めていることや、ここよりも大規模な傭兵派遣会社の部隊が殲滅されていることからもその強さはある程度、帰納的に求めることは可能である。しかも、敵が持つと考えられるプロトオーガの存在も懸念材料である。ただし、赤鬼は全国に9体配置されていることは既に明らかであるが、他のプロトオーガの存在自体は何ら実証されていない。ゆえにそもそも、そんなもの存在しない可能性だってある。しかしながら、ナインのプロトオーガが『9』の番号を付されていることからして、これも少なくとも9体いるはずである。このことを考えると、赤鬼の全国的な分布図はかかる数字と一致するのである。赤鬼に加え、こいつらまで出てきたとすれば、おそらく皆殺しに遭うことは確実である。それほどまでにリスクの高い任務なのだ。にもかかわらず、自分の汚名返上のためにあの子達を利用して許されるのだろうか。もっとも、あの子達の力を信じ

ていないわけではない。きっと赤鬼にも負けないはずである。

「ごめんね、みんな。悪いけど、利用させてもらうわ」

しかし、彼女の結論は決まっていた。やるかやらぬかで迷ったら、とりあえずやってみるが彼女の根本ルールである。弥生は心を鬼にして、それを決意すると、赤い火の元を灰皿に強くこすり付け、もみ消した。

（二）

次の日、弥生遼子は、従業員を会議室に集めては朝の定例会議を執り行おうとしていた。最後にグレイが眠そうな顔でのんびりと部屋に入ってきた事を確認すると、弥生は口を開いた。

「みんな、揃ったわね。これより会議を始めます」

弥生は緊張していた。果たしてこの連中が自分の案に乗っかってくれるのか不安であったからだ。その緊張が皆にも伝わっているのだろうか、普段は浮き足だっている者も真剣な表情になる。

「それでは、今日の仕事内容ですが・・・」

弥生はもったいつけると、参加者全員が息を呑むのである。弥生はもう後戻りはできないのだと自分に言い訊かせる。どうせやるなら早いほうがいいのだと自分の論を正当化するのである。

「我々は、横浜の本隊へと向かいます」

弥生は一瞬、参加者の顔が凍りついてしまったかのように見えた。

やはり、この提案、この時点で皆に提示するのは時期尚早であったか。

「社長、それってもしかして」

だれかが弥生に補足説明を求める。

「そう、今日の主要な任務は赤鬼の討伐です」

それを聞いた参加者たちは、一斉にため息をつくと、肩の荷を降ろすかのごとく緊張をほぐしていく。やはり、弥生は呆れられてしまったのかと感じていた。そうか、まあそれも無理もないだろう。なぜなら、あの赤鬼なのだから。しょうがない、今の発言は撤回することにしよう。彼女が一瞬、諦めかけたその時であった。

「やった！今日の任務やばくない？」

辰巳春樹が、隣に座っているものに対してうれしそうに同意を求める。

（え？やった、って？）

弥生は耳を疑った。辰巳は、この任務を遠足かなにかと勘違いしているのではないかとさえ思う。

「社長、すごい真剣な顔してたから、何言い出すのかって思ってたけど」

「そんなことか」

しかし、辰巳のみならず、他の連中までうれしそうな顔をしている

のである。

（え？そんなことか、って、あんた達赤鬼よ。未だかつて誰も倒した者がいないのよ。ここよりもはるかに規模のでかい軍隊ですら皆殺しに遭った凶悪な鬼なのよ）

「ゲイボルグの力を図るにはちょうどいいな、くくくく・・・」

グレイは、腕を組んで怪しく笑った。

（『くくくく』って、あんたも何笑ってんの？）

「まったく、社長も水臭いじゃないですか。俺たちが反対するとでも思ってたんですか？」

ナインの質問に対して弥生遼子は、おそるおそる頷いた。

「しゃちょ～、アタシはもう大賛成っすよ。赤鬼なんてロケラン＜注：ロケット・ランチャーのこと＞で粉々にしてやりますから」

辰巳は急に立ち上がり、大船に乗ったつもりでといわんばかりの態度で、自分の胸を叩いた。

「お前は、調子にのるな」

ナインが辰巳の頭をはたく。いつものどつき漫才が始まるのである。

「隊長がおっしゃるのであれば、俺はどこへでも・・・」

「おっさん、顔赤ぇぞ」

西田は顔を真っ赤にして、生意気なクソガキ、グレイの頭を殴打する。

「わ、わたしも、こわいですけど、賛成です」

「私も、ここのみんななら絶対勝てると思います」

まもるにいたっては少し恐怖心を抱いていはいるが、大人しいふたりの少女たちも同意見のようだ。

弥生は改めてこの仲間たちの頼もしさを実感した。彼女は何も迷うことなど無かったことを反省したのである。彼女はもっとこの仲間たちを頼り、信頼してよかったのである。弥生はもとより、誰かに頼るということは苦手で、それならば自分で全て背負い込むのがましであると考える性分であるから、ここまで誰かに頼ろうとしたことは今の今までなかったのだ。だから、彼らの頼もしさには気づけなかったし、そもそも気づこうともしなかった。

「ありがとう、みんな」

弥生遼子は柄にもなく、自分の被用者に対して小さく礼をいった。ついついそのような言葉が、口をついて出てしまったのだ。しかも、彼女は感激のあまり、目に涙を浮かべていることに気づいた。こんなに自分以外の他人を頼もしいと思ったことは生まれてこの方、一度もなかったからである。

「社長、私たちのこと心配して悩んでたんだ・・」

仲間たちはそんな社長を優しいまなざしで見守っていた。弥生は、すぐに涙を拭き去ると、いつもの表情に戻って言うのである。

「ごめんね、みんな。じゃあ改めて、ブリーフィングを始めるわね」

「了解」

会議参加者の表情も、承諾の意思表示を契機として、真剣な表情へと戻る。

「今回の任務は先ほど申し上げたとおり、横浜の山下公園付近にいるとされる赤鬼の討伐です。しかし、グレイが昨日、横浜周辺の鬼をかなり片付けてくれたようなので、任務は少しだけ楽になると思います」

弥生はグレイのほうを見た。

「ふん、あの程度、大したことないな」

そう言いつつも、グレイは少し嬉しいのか、満更でもないらしい。

「それで、具体的な役割分担について、説明をしようと思います」

弥生は、地図などの情報が記載されたプリントを全員に回した。

「昨日のテスト結果などから総合して、具体的な役割分担を決めさせてもらったわ。まずは、まもるね。あなたは防御型で出撃し、弾薬や電池パックなどの補給物資を死守し、かつ弾切れになった友軍機を援護すること。あなたはうちのライフラインそのものだから、重要な任務よ。よろしくね」

弥生は、優秀な彼女に対して、柔らかい表情で命じた。

「は、はい！」

しかし、自己に課された責務の大きさを感じ、まもるに緊張が走る。

「それで、詩季はまもるを援護しつつ、弾丸の交換などを補助してあげること」

「はい」

返事のあと、彼女はまもるの方を見て、互いに頷くのである。

「グレイは、主に青鬼を探知、発見し次第、これを専門に討伐していって。まあ、言わなくてもやるんだろうけど、余裕があれば地上の鬼の掃討をおねがい」

「了解」

グレイは、重々しい面持ちで自己の命を受け止める。

「西田は私とペアでやるから、あとで適宜指示を出すわ」

「了解です、隊長」

次に、弥生は辰巳の顔を見た。

「春樹はナインの援護をよろしく。今回は遊んだりしないようにね」

弥生は、鋭い目つきで、予め釘を刺す。

「あはははは・・・、りょーかい」

今回も遊ぶつもりだったのだろうか、彼女は照れくさそうな表情で頭をかいた。

「最後にナイン」

弥生はナインを見て言った。

「はい」

ナインは弥生の強いまなざしに劣らないよう、その目を見返して返答する。

「あんたは赤鬼の撃破よ。おそらく、赤鬼を倒すことのできる攻撃力を備えているのはあんたの鬼だけだから、ナインが本作戦の鍵。気合入れてやること、いいわね」

「了解しました、社長」

ナインは強く応えた。

「あ、しゃちょー。ちょっと、いいすか？」

辰巳が突然手を挙げた。

「なに？」

「もし、赤鬼よりも強いやつが出てきたらどうしますか？」

辰巳の発言により、一瞬、会議室の中が静止したかのような状態になった。しかし、弥生はさっさとこれに応答する。

「いい質問ね。たしかに、赤鬼のいる場所にはプロトオーガや赤鬼以上の鬼が配置されている可能性はある。仮にそれが出てきたら、本作戦は即刻中止よ」

「まじすか・・」

辰巳は、まるで遠足が雨で中止となったときの小学生のようにがっくりと肩を下ろす。

「ただね、これまで多くの部隊が赤鬼と交戦しても、今まで一度もそれが出てきたことはないの。しかも、赤鬼のいるところに指揮官がいるという説は、あくまで推測だし、何もない可能性だってある。だから、今回も出てこないものと思っていいわ」

「なぁんだ、それなら中止の心配はないですね。でも、もっと強いのがいるんなら、ちょっと戦ってみたいかも・・」

そして辰巳は、運動会が再会されるという朗報を聞いた小学生のように喜ぶのである。

「調子に乗るな、死ぬぞ」

そして、辰巳が暴走する前にナインが突っ込みを入れるのだ。

そのような微笑ましい光景を笑って見ていた弥生であったが、彼女じしん、自分の考え方もあくまで推測の域を出ない、ということを認識していた。万が一、敵が操るプロトオーガが出てきた場合、どのような結果になるのかはナインのプロトオーガを見れば一目瞭然である。記憶喪失で、よく扱い方が解っていないナインですら、あれほどの力を引き出すことができるのだ。百戦錬磨の乗り手が出てきた場合の結果は火を見るよりも明らかである。しかし、プロトオーガが他にも存在するというのもあくまで仮説である。とすれば、いつまでもこのような推測論を交し合って、何もしないのは相当でない。とにかく、今回は赤鬼を倒すこと、それだけを考えればよい、と弥生は自分に言い聞かせる。

「じゃあ、１０分後、一旦ガレージに集まって、それぞれの役目に合った装備を行います。それから横浜へ向かいましょ。みんな、絶

対に生きて任務を成功させてね」

第１２話　みんなとみらいで

―１時間２０分後、横浜みなとみらい―

ここはかつて横浜とよばれた場所。もともとはここにもシンボルタワーや大きな観覧車などの目立つ建造物をはじめ、非常な賑わいをみせた中華街があって日本でも指折りの華やかな街であったのだが、いまや鬼に占拠されその町並みは廃墟と化し、横浜というかつて隆盛を極めた地名だけが残っている死の街であった。粉塵が舞い、死者たちの邪気・瘴気が街全体を包み、まだ昼間だというのにどす黒い霧に包まれているように見える。
東京陸運保険機構の従業員はその横浜に到着し、６体のロボットとその正面に１匹の鬼を配置していた。

「これが今の横浜かよ、俺がガキの頃はけっこういいとこだったんだけどよ」

それぞれに内蔵された通信機から、西田の感傷にふれ、嘆いている声が聞こえる。

「ついにこの街を取り戻すときが来たな。まぁ、鬼どもは俺が全員叩き切ってやる」
好戦的なグレイは相変わらずの臨戦態勢で頼もしい限りだ。

「グレイ、あんた自分勝手な行動は慎みなよ」

辰巳が今にも飛び出してしまいそうなグレイをニヤついた声で牽制する。

「その台詞、そっくりそのままお前に対して引用する」
「そう、今回の目標はあくまで赤鬼の討伐よ。他の鬼とは必要以上に交戦しないこと。あと、グレイを除き、必ずペアで行動することも忘れないで。単独行動は危険よ」

隊長である弥生が最後の確認を行う。彼女の声を聞く限り、相当緊張しているようだ。

「詩季、平気か？」

ナインは、隣にいる詩季に声をかけた。彼女はいつもナインに対して心配しないように言ってくれてはいる。しかも、盲人とは思えない感覚も持っているのだから、ナインの心配など杞憂かもしれない。だが、やはり彼女が満足に戦えるのかどうか彼には不安なのだ。

「うん、問題ないよ」

そんな老婆心の塊のようなナインに対して、彼女は自信をもって答えてくれた。そこには、これ以上ナインに心配をかけさせたくないという彼女なりの配慮があり、ナインは少しだけ安心できた。

「はい、みんな。おしゃべりはもうお終い。前方３００・・・敵が見えたわ」

弥生は前方に餓鬼が無数にいることを確認した。さらに上空にも空を覆い尽くすほどのオーガの群れである。あれは飛行型の青鬼であろう。

「おいおい、青鬼１体ですら、強敵なのによ、あんなにいやがるじゃねぇかよ」

西田はつい最近、青鬼に殺されかけた経験を思い出しては緊張が走っていた。

「おいおい・・・おっさん、びびってんのか?ま、俺は遠慮なく行かせてもらうぜ」

グレイは西田をおっさん呼ばわりし、そのうえ挑発して先に行ってしまった。

「全く、ガキはいつも後先のこと考えねぇからよぉ」

西田はグレイの行動を冷静に評価するも、武者震いは隠せない。そんな彼の肩に、辰巳がそっと手をかけていう。

「おっさん、グレイは大丈夫だって。それよりおっさんも死なないでくっさいよ」

西田は辰巳にもおっさんと呼ばれる始末である。個人的にはまだぎりぎりお兄さんではないかと思っていただけに衝撃は大きい。女の子にまでおっさんといわれた男は、もはや二度とお兄さんの属性へと戻ることはないのだから。

「ほら、おっさん。突っ立ってないで行くよ」

弥生は西田とのペア。これはこれである意味心配の尽きない組み合わせだ。殊に、西田が弥生に見捨てられて還らぬ人となる可能性が極めて高い気がする。

「はい、隊長・・・」

西田は『おっさん』といわれたショックが抜けきっていないようで、下を俯いてとぼとぼ弥生の跡を追う。ところが、弥生のロボットはいったん立ち止まった。前を見ていなかったのか、西田は前を行く弥生にぶつかりそうになる。

「あと、ナイン。この作戦はあなたにかかってるから、絶対に振り向かないでただ赤鬼だけに集中しなさい」

それだけいって、弥生はブースターを吹かして、とっとと飛び去ってしまう。それを慌てて西田が追うことで、弥生・西田両名のペアは行ってしまった。

「じゃ、まもるちゃんよろしくね」
「うん、しーちゃん」

ふたりは互いを見合わせ、頷きあう。

「詩季、まもるちゃん、無理はするなよ」
「うん」
「はい」

そして、大人しい詩季、まもるペアも死と隣り合わせの戦線へ突入していった。

「じゃ、アタシたちもいきますかぁ。あ、せんぱい例によって、よろしくっす」

辰巳はワイヤーロープをナインの鬼に絡めてきた。

「ああ、しっかり捕まっていろよ」
「りょーかい。じゃあ、さっさと行きましょーか！」
「そうだな、このミッションは俺たちが鍵だ。俺たちが早く目標を達成しさえすれば、それだけみんなの危険も減る。そういうわけだから辰巳、さっさと終わらせて帰ろうぜ。ただ、今回はお前を助けてやれるかわかんねぇから、くれぐれも無茶すんなよ」
「はぁーい」

相変わらず辰巳は、わかっているのか、それともわかっていないのかよく分からない返事を返す。もっとも、彼女のそんな適当な態度がナインの緊張を若干緩和してくれた。
そしてナインは飛行プログラムを執行すると、鬼から悪魔の羽がその背中に生え、ふたつのオーガが大地を離れて宙に浮く。するとナインは、辰巳のロボットを引き上げながら横浜の中心街へと飛び立った。

ナインは空高く飛ぶと、まだ昼だというのに暗黒に包まれた横浜の街の全貌を見ることができた。街には鬼の群れなのか、蟻みたいな粒々の集まりがもぞもぞしていて気味が悪かった。また、建物の９割が瓦礫と化しており、人はもう一人もいないようだ。その暗黒の街のさらに上空には青鬼がおり、こちらを完全にロックオンしているようだ。が、あれはグレイに任すとして荒野と化した山下公園の方へと急ぐ。地図によれば、ちょうどそのあたりに横浜のシンボルタワーがあるとされているが、崩れかかっているのだろうか、それはやや斜めに傾いてしまっていた。

「あ、せんぱい、なんか撃ってきましたよ」
「わかってる」

当然に青鬼たちはこちらの侵入を妨げるため、ナインたちに集中砲

火をかける。東西南北、至る所からなされる十字砲火であった。そのうちの一発が辰巳を引っ張っているワイヤーロープをかすめる。

「あわわわ！せんぱい、マジで頼みますって。これ切れるとアタシ死んじゃうんすからね」

「下にいる鬼がクッションになるから大丈夫だろ。それより、近いぞ」

敵本営が近いのか、黒の瘴気が視界を遮るほどに濃度を増し、１０メートル先すらもまともに見ることができない。しかし、目指すべき方角ははっきりしていたので、かまわずに突き進むのである。黒の瘴気がある程度はれてくると、ナインたちは山下公園のベイサイドに埋め立てるような形で突き出ていた山下埠頭に何かを見ることができた。それはラグビーボール型の赤い巨大な浮遊物である。それはくるくると軸を中心としてゆっくりと自転しており、頂上にはアンテナのような角が生えているのであった。

「あれが、赤鬼？」

赤鬼。

いや、あれが鬼なものか。

鬼とはもっと人のような形をしているのではないか。

あれは鬼というより、要塞。そう、巨大な要塞である。

（まずい！）

ナインが一瞬、赤鬼の方から殺気を感じると、大量の光球が赤い表面装甲から放たれた。光の弾幕による一斉掃射である。光球の弾道軌道が緩やかなカーブを描きながら、それぞれ不規則にナインたちを襲うのである。それでもプロトオーガの機動力を活かしてこれら

を巧みに回避すると、光球は目標を失い、どこか適当なところではじけ飛ぶ。しかし、その衝撃が辰巳のワイヤーロープを大きく揺らすのだ。

「わわわ・・・」

辰巳は手をじたばたしてこれらを避ける。これでは思うように近づくことすらままならない。プロトオーガの速さを持ってしても、赤鬼の一斉掃射の中をかいくぐることは不可能。どうすればよいか。

「せんぱいはあいつを引きつけといてもらえますかね?そしたら、アタシがその間にロケランでアイツを粉砕しますよ」

今日はいつになく辰巳のロボットが重いと思っていたら、ロボットの全長ほどの大きさもある巨大なロケット・ランチャーを持ってきていたのだ。それだけではない。辰巳専用に特殊装備を施したのか、ショット・ガンをはじめとして歩く武器庫のようになっている。

「そうだな、任せる」

ナインは、少なくともこの動きづらい状況を続けるよりは良いと思い、辰巳を安全に着地させるため降下を開始する。

「よいしょ」

辰巳はある程度高度が低くなったことを確認すると、ワイヤーロープを切断し、地上に自己を投下した。

「おい、辰巳、無理すんなよ」

下方で、ずしりと重量のある着地音が鈍く響き渡った。もう、やる気になったあの少女を説得する方法はない。この弾幕を回避しながらあの装甲を貫く攻撃を実行するのも困難であるから、あの巨大なロケット・ランチャーの一撃を放つのが最適だ。しかし、火薬庫のようになっている辰巳のロボットに敵の攻撃が集中すれば、大爆発さえも引き起こしかねない。とすれば、自分ができる限り、あの鬼の注意をそらし、辰巳の攻撃にかけるしかない。

「もう少し近づくか」

近づけば近づくほど弾幕の密度が増してくる。しかし、そうでもしないと辰巳に攻撃が当たる可能性が増えてしまう。もうダメージはある程度許容せざるを得ないだろう。

「く・・・」

いったん、一発でも砲撃をもらうと、それだけで身体が重い鉄球にぶつけられたようになり、かつ、爆発する。また、バランスを崩したところに追い討ちの連撃をくらう。ただ、致命傷には程遠いので、もう少しだけ陽動に徹する。

辰巳は、ロボットの軸足に取り付けられているかぎ爪を大地に突き刺し、しっかりとランディングして、ロケット・ランチャーの高反動に備えていた。そのまま、コクピット内で精密射撃用スコープを目の前に持ってくる。

「せんぱい、その調子っすよ・・」

辰巳は、敵の急所を探し、一撃必殺を狙う。そこまでいかなくとも、そこそこの隙ぐらいは作りたい。

「よっしゃ、きたきた」

辰巳はロケット弾頭が派手に爆発するのを想像すると、にんまりと笑った。

「これはどうだ」

ナインは、非オーガ用のライフル銃を発射する。しかし、赤鬼は外見だけ見ても非常に硬く、かつ厚みのある装甲を持っている。蚊がとまったような威力でしかなさそうだ。その時、辰巳から連絡が入った。

「せんぱーい、一発ドカンといきますわぁ」

そういうと、後ろの方から巨大なロケット弾が勢いよく前方の球体へ飛んでいくのが見えた。弾頭の大きさからして、相当量の火力を搭載したにちがいない。

命中。

巨大な爆発が赤い球体を覆うと、黒い灰塵が空に舞う。はたしてこれは赤鬼に有効であったのか。次第に赤鬼のあたりの視界がよくなってくると、ナインは濃厚な殺気を直感した。

目。

大きな目。瞳を失った目。

あのラグビーボールの中心に目があった。あれはまずい。

とてもいやな予感が、ナインの心を突き動かした。異世界から膨大なエネルギーを取り寄せているのではないかというほどの、異常な力の流入が感じられるのだ。何かが来る。そう感じざるにはいられない。

「辰巳、避けろ！！」

「へ・・・？」

言うのが遅かったか、一瞬早かったか、どちらにしてもその目から破滅の光が放たれたのであった。ナインは、とっさにその機動力を活かして回避。しかし、その目に見つめられていた辰巳はどうか。その光は放射状に拡散し、周囲を強烈な衝撃波とともに吹き飛ばしては蒸発させていく。その光の通過コースに存在するもの例外なく跡形もなく消える。それが建物であろうが、ロボットであろうが、その場に居合わせた鬼であろうが、全てを押し流していった。

「おい！！たつみぃぃぃぃ！！」

ナインの叫びは、衝撃とともにかき消されていった。

第１３話　赤き守護者

ちょうどナインと辰巳春樹が空中を飛んでいる頃、詩季とまもるのペアは、ちらほらと襲い掛かってくる鬼を駆逐しつつ、みなとみらいを陸上移動し、山下公園にまもなく到着しようとしていた。到着予定地点の様子はいまいち黒煙でわかりかねるが、弾がたくさん飛んでいるのでナインたちは交戦に入ったのだろう。ちょうど、その時、ふたりを見つけたグレイがそこに降りてきた。

「わりぃ、燃料頼むわ」

ゲイボルグは青鬼の討伐のため飛び回っていたのであろう、エネルギーが残り少なくなっていた。まもるは、幾層もの装甲板をオープンすると、その中に大事そうに保管していたＢＷ社製エネルギーパックを取り出す。詩季は、まもるからエネルギーパックを受け取ると、ゲイボルグに詰め替える作業を行う。

「グレイ、バックパック開けてくれる？」

「あいよ」

グレイは自分のコクピットで何やらパネルを操作し始めた。すると、ゲイボルグの背中のバックパックがパカっと開く。

「グレイ、そっちはどう？」

詩季は、古いエネルギーパックを取り出しながら、グレイに問う。

「ああ、空の奴ならもう片付けたぜ」

「さすが、グレイとゲイボルグだね」

まもるは、詩季から古いバックパックを受け取り、自己の装甲内部にしまいこみながらいう。

「あんな奴ら、マジで大した事ねぇよ」

グレイは、照れ隠しにそうは言うものの、まんざらでもないような表情を浮かべた。

「あとは、ナイン君がうまくやってくれればいいけど・・・」

最後に、詩季はゲイボルグのバックパックを、車のトランクを閉めるようにバタンと閉じた。その時、山下公園のほうから強く、そして巨大な閃光がほとばしった。その衝撃波は、数秒してこちらにも到達するほどである。

「おい・・・やべぇぞ、あれ」
「まさか・・ナイン君・・」
「はるきちゃん」
「みんな、急ごう」
「うん」

今まで見たこともないようなとてつもない衝撃に不安を募らせる3人。しかし、ナインたちの無事を祈りつつ、彼らは赤鬼がいると思われる、山下公園へと急いだ。

（二）

ほぼ同刻、弥生遼子と西田武彦は特殊な任務をこなすため、赤レンガ倉庫に来ていた。

「隊長、こんなところで一体何をなさるおつもりで？」

弥生は応えない。正確には、いま自分の目的がよくわかっていないため、応えられないといったところか。代わりに弥生は、西田に問い返す。

「やっぱり、いないのかしら？」

「何が、でしょうか？」

「横浜を探索しても原型が残っている建物なんてここぐらいだったから、もしやプロトオーガでもあるのかと思ってたけど」

「たしかに、ここにもいないとすると、隠れるにしても他に適当な場所はないですからね」

西田の言うとおり、赤鬼の周囲3キロメートル圏内は、ここを除いて人工の建造物は瓦礫と化している。いわんや、プロトオーガをすっぽり格納することのできるような建物はないし、そういった基地らしきものもない。

「これは一体、何を意味するのかしらね」

弥生はその意味するところを考えても答えを出すことはできなかったので、すぐそこにいる西田にそれとなく聞いてみる。

「隊長、それってまさか・・」

西田が突然何かを閃いたようだ。

「何か、わかったの？」

「敵のプロトオーガが俺たちにおそれをなして逃げた！そういうことですね、隊長！！」

「あんた、マジで死んでいいわよ」

弥生はこの男に合理的な論理的推理を期待したことを強く後悔した。

「た、隊長が死ねというのなら・・・、御免！！」

西田は泣きながら腹を切る準備に入る。

「ちょっと、西田。ふざけてないで、あれ見て」

もはや西田に突っ込むのも面倒だった弥生は、さらに奥を探索すると、彼女にとって非常に興味深いものをみつけることができた。そう、弥生が指差す先には薄気味悪い研究室があった。なにやらそこは、薄緑色の淡い光があふれて、怪しい様子に包まれている。

「あれって・・、まさか鬼か・・」

いや、鬼がいるような音もないし、気配も無い。ふたりは、より入念に警戒しつつもさらに足を奥へと進める。電源などはかろうじて通っているのであろうか、端末などもつけっぱなしであり、つい最近まで誰かがいたようなぬくもりは感じられないでない。

「メンタルスフィア・・・」

大きな研究室の隅にある巨大な培養棟。ふたりは、そこに安置されている鬼の心の輝きを見たのであった。また、その培養棟には幾つものパイプが敷いてあり、どこからかエネルギーを受け取って醸成を促されているように思えた。

「しかも、メンタルスフィアが3つも・・」

さらに、その培養棟の中には精神球体が3つ存在した。なぜこのような場所に鬼の力の淵源たるメンタルスフィアがあるのか。先のなぞと相俟って、この3つのメンタルスフィアの存在がさらに真相解明を迷宮入りにさせるのであった。

「赤鬼のやつはこれでも守ってたんですかね？」

「赤鬼がいるのは山下埠頭よ。そこと此処とじゃ、場所的間隔が大きすぎるわ。とすると、単純に赤鬼がここを守っていたと即断することはできないわね」

もっとも、両地点は決して遠すぎるわけではなく、西田の考え方も成り立たないでない。しかし、仮に赤鬼がここの護衛を任務とするのであれば、なぜもっと倉庫に近い位置で任務にあたらないのかといった不合理な点が生じるのだ。

「だとすると、赤鬼は一体何を守っているんでしょうかね」

人はなにかの目的の下に行動をする生き物であると同様に、鬼にもなにか特段の目的があって行動しているはずである。しかし、それは全く不明なのだ。

「とにかく、ここをもう少し調べる必要があるみたいね」

弥生は知的興奮を抑えられずも、速やかに研究施設内の捜索をはじめた。

（三）

「辰巳！！」

ナインは巨大な衝撃波がすっ飛んでいった方へ目をやる。その時、通信が入る。

「へへ・・せんぱい、ロケランは無事っすよ。けど、ちょっとヤバイかな・・」

赤鬼の攻撃のおかげで、視界がよくなり、後方の辰巳機がよく見える。光の通過コースとそうでないところの明暗がくっきりわかり、辰巳はそのちょうど限界地点にいた。すなわち、ロケット・ランチャーを持っていた右半身は生きているが、左半身はごっそりと消失し、仰向けに倒れては動くことさえできずにいる。

あの状態の辰巳に対して、赤鬼の攻撃がなされた場合、彼女がそれを回避する術はない。したがって、辰巳は絶体絶命という状況にあるのは明白である。

「辰巳、いまたすけ・・」

ナインは赤鬼を背に、辰巳の方へ急降下する。

「くるんじゃねぇ!!」

しかしながら、辰巳はナインに向かって怒鳴り散らすように叫ぶ。

「アンタの任務はアタシの救出じゃない。逆にアタシの任務はアンタの援護なんだよ。それをアタシが足引っ張っちゃ、死んだ方がマシだ、ボケェ!!だから、アタシにかまわずそいつを殺せ!!」

辰巳は目が血走っていた。これは彼女が命を賭けてナインに与えたわずかな時間なのだ。にもかかわらず、かかる辰巳の努力を徒労に帰すような行為は状況を悪くするだけである。

（そうだ、俺は何をしているんだ）

ナインは辰巳の覚悟を愚弄するところであった。辰巳はいつもそういう思いで戦っているのだ。いつも、偉そうに先輩面して辰巳を注意していたが、何にもわかってないのはむしろ自分であったのだ。

「辰巳・・・、死ぬんじゃないぞ」

ナインは再び赤鬼に向かい直る。一刻も早く、射程範囲まで接近しなければならない。もう、チャンスは今しかない。これを逃せば、辰巳は死ぬ。これは、彼女がくれた絶好の時間。そう、強力な攻撃をすれば必ずそれだけのリスクが生じる。その攻撃が強ければ強いほど、その代償も大きくなるもの。この比例原則はたとえ外法であろうが例外なく適用される万能の摂理、あるいは真理である。したがって、今、奴は達磨であると同義。

「やれぇぇぇ！！なぁいぃぃんん！！！！」

力を解き放て。怒りの力を。貴様がいままで葬ってきた人々の無念もこめて。

『胸部大型波動砲発動要件をクリア』

いまは、チャンスをくれた辰巳を守るために。あの鬼を地の果てまで吹き飛ばすのだ。

「くらえぇぇぇぇ！！」

光の力は解き放たれた。先刻、赤鬼が放出したものとは比較になら

ないほどの分厚い力。それはもはや光の壁か。通過地点に存在するものを全てすりつぶし、破砕する大いなる怒りの力。
赤鬼の上空から繰り出されたその一撃は、赤鬼の巨体を一気に地に叩きつけ、その頑強な装甲を引き剥がし、毟り取って、内部から蒸発を促していく。赤鬼は完全にその光の中に包まれた。それはまるで光の牢獄であり、その中では火炎地獄による処刑が執行されているのだ。
やがて、光が消えると、変わりに黒い煙幕のような煙が赤鬼のいた地点を覆い隠すのである。

「やったのか？」

わからない。少なくとも、あの煙が仮に取り払われたことを考慮しても、あの巨大なラグビーボールのような体積には到底及ぶべくもないので、かなりのダメージを与えることができたのは間違いなさそうである。

「！！！」

何かが黒煙の中から飛んできた。赤い棒らしきものである。ナインは一瞬判断が遅れ、右の羽がそのままもぎ取られてしまう。ナインのプロトオーガはそのまま浮力を失い、地面に着地する。

「これが、赤鬼・・・」

しばらくして、塵が失せると、そこには非常に長く、かつ昆虫のような細い線状の腕を無数に持つ赤い人型の鬼が立っていた。先ほどに比べると明らかに非戦闘形態であると思われる。しかし、今、ナインの鬼から右翼を奪い去ったのはあの手に違いない。多少の攻撃などモノともしないこの鬼の肉を毟り取るということは、相当の強

さがあるのは明らかである。とすれば、これこそ赤鬼の真の姿であることがわかった。そう、それはまるで大樹のような鬼といってよい。赤鬼の背中に生えた無数の触手のような細い手は、幾重にも枝分かれし、まさに木の枝のように見えるのである。ただ、真っ赤な大樹などいままでお目にかかったことなどなく、神樹というには程遠く、妖樹のような邪悪さが満ち溢れている。

そうだとすると、なるほど、赤鬼の第一形態は単なるフィルターに過ぎない。前形態で敵を仕留めそこなった時に、変態して第二形態で確実に敵を排除する合理的な戦法。侵入者排除の合理主義者。それが赤鬼の真の強さ。

本当の恐怖はこれからはじまるのである。

第１４話　レッド・アーカイブ（前書き）

注：本章には残酷描写の記述があります。ご注意ください。

第１４話　レッド・アーカイブ

ナインが赤鬼に対し、胸部大型波動砲を発射した頃、辰巳のロボットは片足を失い、全く動けずにいた。立ち上がろうにも、無駄に積み込んできた重火器が重くて、どうしてもバランスを失ってしまうのだ。しかも、先ほどの攻撃の衝撃波によって頭部を裂傷し、血がたらたらと垂れる。だから辰巳は、動くのは半分諦めて、ナインが赤鬼に必殺の一撃を食らわせたのを見ていた。

「へへ、せんぱいも・・やりゃできるじゃないすか・・」

辰巳は一応、ナインのお膳立てができたことに満足すると、あたりをみわたす。

「まったく、アタシももう潮時か。こんな体勢じゃ反撃なんて無理だし・・」

結果に満足したのも束の間、気がつけば辰巳は餓鬼に囲まれていた。このままでは、いくら餓鬼であるとはいえ、身包みはがされて殺されるのは明白である。しかし、それも戦士たるものの本望であると、辰巳は腹をくくるのである。辰巳は過去に思いを馳せていた。あの忘れもしない去年の夏のことである。

あれは、あの頃話題になっていたアクション映画を見に、池袋へ友達と４人くらいで行ったときのこと。辰巳たちは、他の客のことなどお構いなく、ぎゃあぎゃあとわめいては物語のスリルを思う存分に楽しんだ。そして、興奮冷めやらぬ前に、帰りにはアイスクリームを食べ、百貨店では化粧品を買い集めたりしたのだ。あれは、とても楽しかった。こんな日がいつまでも続くのならそれはきっと幸

せなのだろうと、辰巳は自分にとっての喜びを見出していたのだ。
しかし、その時、突然鬼が現れたのだ。池袋の繁華街を踏み潰すように突如として、それらは現れる。道ゆく人々を踏みつけにし、建物を破壊していくのだ。あまりに突然のことだったので、皆、何がどうなっているのか分からなかった。今、自分が見ているこの光景は先ほどみたアクション映画の延長なのではないかというほどに、現実離れしている。しかし、その化け物は見境なく人を虐殺していた。人々の絶叫を聞けば、噴き出る赤い血をみれば、これが演出でも冗談でもないことがよく実感できる。
辰巳は友達の手をひいて必死で逃げた。もともと部活で陸上をしていた辰巳春樹は足が速かったので、全然追いつかない友達を引きずってでも逃げたのだった。こんなところにいたら殺される。そのことだけは、あの鬼の冷たい瞳を見れば明らかだったから。
ただ、彼女は死んでも見たくない物を目の当たりにしてしまった。それはこの世で最も汚いもの。排除すべき汚物。それは普段、誰かの手によって、どこかへ排除されてしまうので、一般人は想像もできないような恐ろしい光景である。
そう、それは友達の死に顔。いつもは化粧を塗りたくっているため見惚れてしまうほどかわいいと思っていた友達の顔は、目をあらぬ方向へ吊り上らせて、ひどく苦痛に歪められていた。それは目を背けたくなるほどの恐ろしいものだった。走るのに夢中であった辰巳は、突然自分の前にボールのような、しかし結構重いものが転がってきた。それが今手を引いている友人の頭であったのだ。それが信じられず、ふと、後ろを向いた辰巳は、今手を引いている友人の頭が無くなっていること、後ろに鬼がいたことを見た。それは自分が殺されるよりもよほど辛いことであった。心が一発で砕かれるような悪夢である。最高の一日が、一瞬にして最悪の一日へと変貌した。でも、辰巳はそれでも生き残らなければと、既に死んでいる友人の手を放してしまったのだった。そして、あとは必死に逃げた。

「悔しいよ・・、てめぇらに殺されるのは悔しすぎるよ・・・」

鬼たちは辰巳機ににじりよって今にも腕を振り下ろそうとしている。

「アンタたちも、すごく悔しかったんだろ？なのに、ごめんね、敵を討てないで、こんなところでアタシも死ぬなんて・・」

鬼たちは、辰巳へと一斉に食らいついた。

勢いよく血が噴出した。

あたり一面を鮮血が染める。

（へへ・・こんなに血が出てるよ・・・）

辰巳の視界一杯が赤い血で一色となった。

「おい、はるきよぉ、てめぇ何情けねぇこといってんだ？」

ゲイボルグ。グレイ。

銃の音？血が噴き出る。鬼どもの頭が吹っ飛ぶ。

詩季。まもる。

「はるきちゃん！！」

「はるき、今助けるわね！！」

（そうか、アタシはまだ生きてるんだ）

「あんたたち、マジで遅いのよ」

一瞬だけども弱気になった自分を振り払うべく、辰巳はあえて彼女らしい反抗的な態度を採る。

「はるきちゃん、これ使って」

まもるは、某菓子パン戦士ではないが、予備で持ってきていた、新しい脚部を取り出す。辰巳のロボットの左足部分は、かろうじて付け根の部分が残っており、古い脚部を取り外すことは造作もなかった。そして、付け根の部分に新しい脚部を接合する。

「サンキュー、まもる」

辰巳のロボットは再起動した。動作状況をチェックするため、辰巳はその場で飛び跳ねる。

「片腕はいる？」

「あぁ、別にいいや。右さえあれば十分」

そういって、辰巳はゆっくりと巨大なロケット・ランチャーを担ぎこんだ。

「てか、あれが赤鬼かよ」

グレイが指し示す方をみると、皆は第2形態に移行した赤鬼を見ることができた。無数の触手が上空へ向かってミミズのように動いており、嫌でも目に付く。

「あれぇ、あいつ形かわってんじゃん」

辰巳は、赤鬼がまだラグビーボール型であったことを思い出し、それと対比させていた。

「今まで見た鬼のどれよりも禍々しい鬼・・・」

詩季は、光学スコープを通してみると同時に、心にもその禍々しさを感じた。

「あれは、危険」

「でも、みんなでやれば勝てるっしょ！いくよ、あんたたち！！」

そうして、ここに集まっていた４機は赤鬼の方へ向かった。

（二）

「どうやって、こいつを攻撃すれば・・」

敵の触手は無数にあり、不用意に近づこうものならあの無数の触手による猛攻に遭うのが目に見えている。しかもその威力をナインは身をもって実証したので容易に攻め込むことはできなかった。すなわち、赤鬼には隙がないのである。波動砲を叩き込むにしても、エネルギーチャージがまだかかりそうである。しかし、赤鬼はゆっくり歩いて、ナインのところへとにじり寄ってくる。そして、数十本の手で突き刺そうとする。

「せんぱい、いきてますかぃ？」

後ろから辰巳の声がした。

「辰巳。お前、大丈夫だったか」

「アタシはあの程度で死ぬようなたまじゃないんで」

「さすがは辰巳だ」

「それよりもこういう奴はロケランでやっちゃえばいいんすよ！」

そういって、すかさず辰巳はロケット・ランチャーを発射した。触手などの体積を除く赤鬼の身体とほとんど同じくらいの大きさの巨大なロケット弾である。しかも、前形態のような頑強な装甲も見当たらない。したがって、これが命中すればひとたまりもないはずである。しかしながら、赤鬼はこれを避けようとしない。

「よっしゃ、めいちゅ・・」

ロケット弾が赤鬼に命中しようとしたその直前である。赤鬼の前に異次元への小さな穴のようなものが発生し、ずぶずぶとロケット弾はそこに吸い込まれていった。

「へ・・、何、今の？」

辰巳は、いやその光景を見た全員が自分の目を疑った。たしかにあれは直撃コースであったはずである。

「何で、何で、何で！！」

辰巳は気が狂ったようにロケット・ランチャーを連射する。しかし、同じ様に、全てのロケット弾は赤鬼に到達する寸前に異次元へと送られてしまった。

「何なのこいつ？マジできもちわりぃんだけど？なんだよこれ！！」

辰巳はこの不可解な生命体に吐き気を催し、鳥肌が立つような不快感に陥る。そのためか、彼女は重度なヒステリー状態になっていた。

「あれ？」

辰巳は続けてトリガーを引くも、もう反応はない。残念ながら弾切れである。このことを確認した辰巳はロケット・ランチャーを放棄する。

「てめぇなんかぁぁ！！」

辰巳はショット・ガンを右手に持ち、突撃する。

「おい、辰巳！！」

「これで十分だぁぁぁ！」

辰巳に無数の腕が襲い掛かるも、巧みにこれを回避し、あるいは避けきれない時はショット・ガンでこれを粉砕して強行突破する。

「しねぇぇぇぇぇ！！」

辰巳はとうとう赤鬼を素手で殴れる距離まで接近し、ショット・ガンを赤鬼に突き立てようとした。しかし。

ずぶり。

やはりショット・ガンの先端部分が異次元の穴に入ってしまう。この点、辰巳の主観ではもう赤鬼に銃を突き立て、弾を撃ちまくっているはずだが、外観上は先端部分だけが無い銃をただアホらしくチラつかせて脅迫しているだけにしか見えない。

「何で？さっきから撃ちまくってんのに、何でコイツ粉々になんないの？」

辰巳はやはり、赤鬼に向けてゼロ距離射撃を試みているようだ、しかし、ショット・ガンの先端が消えていることに何ら気づいていない。それだけ未知の能力の前に、彼女は当惑しきっているのだ。そ

の時、無数の触手が隙だらけの辰巳に襲い掛かる。

「何でなのよ！何で！」
「辰巳、うしろだ！！」
「なに？」

無数の触手が辰巳のロボットにまとわりついた。なぜか突き刺したりはしないが、辰巳のロボットを無数の触手で持ち上げて、逆さ吊りにする。

「何だよ、これぇ？無理無理無理無理無理無理！！」

しかし、よく見ると、赤鬼の触手を通して、薄緑色の光が辰巳の機体から鬼へ流れている。これは、おそらく物理的な攻撃ではない。メンタルスフィアをもつ鬼特有の精神吸収攻撃。実際に赤鬼は、辰巳の操縦席のところまで緑色の気体のような実体が無い物を送り込み、『しつもん』を始めたようだ。そして、それは辰巳の心に語りかけているのだ。貴女の心いただけますか、とかいって。

「来ないでよ！来ないでってばぁ！！」

辰巳の自我が強制的に開かれる。それはたくさんの玩具で一杯になったおもちゃ箱を、幼児がひっくり返すかのようにどばどばと記憶の欠片が掘り起こされているのである。辰巳は生まれてから今までに見てきた嫌なものを全て抉り出され、蒸し返され、強制的に見せ付けられていた。せっかくがんばって忘れることができたトラウマも全部そこにある。彼女が守れなかった、見殺しにした友人の死に顔も・・。

「●●ちゃん・・・、アタシを責めないでよ・・・」

そして赤鬼は辰巳の心の中へと一層侵襲し、土足で踏み荒らしては、魂を強制採取する。赤鬼は彼女の心の深層意識までもぐりこみ、彼女を知り、理解することでより効率的な精神の徴収が可能となった。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

辰巳の機体が強く痙攣している。おそらく、内部の操縦者である辰巳の手が尋常ならざるほど痙攣しているからであろう。

「はるき！！」

ゲイボルグが赤鬼のリーチ内へ飛び込む。そして、バスタード・ソードを振りかざし、辰巳に纏わりついてる触手を根元の部分から一太刀で切断する。これによって、触手が引っ付いたまま、辰巳のロボットは大地へと落ちた。

「おい、はるき、しっかりしろ、おい！！」

しかし、グレイは辰巳の身を案じている場合ではなかった。辰巳のメンタルポイントを十分に吸収したのか、赤鬼の触手の量が倍加する。グレイは、ぐったりしている辰巳を掴んでは、赤鬼のリーチ外へ放り投げると、間もなく襲いかかろうとしている無数の触手をぶった切る。しかし、処理速度は圧倒的に赤鬼の方が速く、叩き切れど、叩き切れど、触手は無限に沸いて出てくる。

「何なんだよ、コイツ・・・」

もうグレイの処理能力は完全に赤鬼に負けていた。赤鬼はグレイの死角で数十本の触手をひとまとまりにして用意する。それは巨大な

槍のようになり、先端は非常に鋭利である。そして、頃合いを見計らい、静かにゲイボルグの胸部を貫く。

「うわぁぁぁ！！」

赤鬼は槍をゲイボルグの胸部に刺したまま、それごと持ち上げ、他の触手による精神吸収攻撃をしかけようとする。しかし、ゲイボルグはまだ動き得たので、剣でこの槍を突き刺しては、切り落とす。ゲイボルグの胸に変な触手が刺さったままであるが、触手が減っている今が好機である。ゲイボルグは高く飛び上がり、墜落の勢いのまま本体を一刀両断する。

「しねやぁぁぁぁぁ！！！」

完璧に入った、とグレイは思う。なにせ、このゲイボルグの渾身の一太刀である。いかなる装甲をもってしても、この一撃に切れぬものはない。
とぷり。

「はぁ？」

グレイは戦意喪失したのか、なんとも情けない声を出す。なぜなら、赤鬼の頭から突き立てられたと思われるバスタード・ソードはゲイボルグの腕ごと、異次元の中へずぶずぶ入っていってしまったからである。必殺の一撃であっただけに、全く敵に通用しなかったショックが極めて大きい。そのため彼はすぐに動くこともできず、グレイは完全にまぬけな容態を呈してしまった。もちろん、赤鬼はこの隙を逃さなかった。完全に触手によって包囲されてしまったのだ。
もはやゲイボルグは、赤鬼の触手の檻の中に投げ入れられた哀れなこおろぎか何かにしか見えない。数本の触手が勢いよくゲイボルグ

のボディに突き刺さる。そして、まず腕をもぎ取るのである。また、足をねじり、いたぶるのに飽きたならば、あとはひょいとなげて、横浜の冷たい海に捨てたのだ。

「グレイ!!」

海にゲイボルグが落っこちる音がして、水柱が上がる。

あと、3体。

赤鬼はゆっくりと歩き始めた。

第15話　我思フ、故ニ我有

なぜ、自分の仲間がこうも虫けらみたいに扱われなければならない。なぜか。
答は明白である。自分が弱いからだ。

ナインは、本作戦中、周りに助けられてばかりであった。まだ、何ら主役としてふさわしいことなどなしえていないのだ。赤鬼の破壊という大役を引き受けておいて、多くの仲間の決死のアシストにもかかわらず、このザマである。だからこそ、そんな仲間たちに報いるためにも、彼は何かをしなければならなかった。なのに、この赤鬼に対して、手も足も出ないのだ。
ざっくばらんにいうと、ナインは怖かった。未知の鬼の強さがこれほどまででであって、まだまだわからないことだらけであるから怖くてたまらなかった。他方では、自分の弱さに腹が立って、はらわたが煮えくり返りそうであった。

そんなナインと、赤鬼との間に重厚な地響きを立てて、重々しい装甲に身を包んだ、まもる機が立ちはだかった。

「私たちの持つ武器では、あのシールドは破れません。でも、あなたのオーガならきっとこれを打ち破る力があるはずです。だから、私たちが隙を作るので、ナインさんは攻撃をお願いします」

さらに、詩季のロボットもまもると並んで、ナインの前に立ちはだかるのである。

「ナイン君なら、きっと倒せるよ。だから、私たちにまずはまかせて」

（無理だろ。ゲイボルグでも無理だったんだ。お前たちは確実にやられる。しかも、俺の鬼にはそんなやつを倒せるような武器なんかないぞ。なら、無理に戦う必要もないだろ。そんなことしてないで、早く逃げよう。だって、あいつ足遅そうだし、きっと逃げられる。お前たちまで失ったら、俺・・・）

「私はもう、黙ってることなんてできない！」

いつもは脆弱で、おどおどしているまもるが、多重シールドを張りながら、突撃する。彼女の声は、仲間を傷つけた邪悪な赤鬼への怒りからか、闘争心に打ち震えていた。

「赤鬼の恐ろしさを知ってしまったからこそ、ここで倒さなくちゃ」

同様にして、ナインや仲間を守るため、覚悟を決めた詩季もまもるのシールドを借りて行ってしまった。

そして、ナインのプロトオーガだけが、ただポツリと取り残されたのだ。

赤鬼は、攻め立ててくるふたりに対してミミズのような幾つもの触手を振るう。その触手は覆いかぶさるようにふたりに纏わりつくのである。

「こんなもの・・・」

「まもるちゃん！」

まもるがシールドを広げながら、詩季は迫り来る触手をマシンガンで後退させていく。突き刺そうという触手があるのなら、まもるが盾をもって立ちはだかる。しかし、基本的に対象に触れれば効果が

発動する赤鬼の触手の前にはシールドによる防禦など無駄な抵抗であった。

「きゃあ！！」

ふたりは無数の、かつ圧倒的な触手により、瞬く間に捕縛されてしまうのである。赤鬼は血液採取用のカテーテルのような触手を両機にぶすりと幾本も刺しこむ。すぐにそれが緑色になると、精神攻撃が開始されたことは明らかであった。赤鬼はふたりの魂を吸い尽くそうとしているのである。

「ナインさん！今です」
「絶対に・・負けない・・！！」
やめろ。
「ああっ！！」
もうやめてくれ。
「苦しい・・」
これ以上。
「むりむりむり！！」
俺の大切な人を傷つけるのは。
「ナイン君！！」
もうやめてくれ。

ナインは自分の鬼のメンタルスフィアを通して、ふたりの苦しみを痛いほど感じていた。それは、まだ子どもである彼女らにとって至上の痛みだ。そんな非道な攻撃をしていたら、ふたりとも精神を粉々に砕かれ、自我を失ってしまう。そうしたら、まもるのもじもじや、詩季の笑顔も永久に消えてなくなる。それだけは、やめてくれ。
ぽた。
ナインは泣いていた。悲しいからではない。悔しいから泣いていた。

あんなにも酷い敵が前にいて遺憾であるのに、自分が弱くてこれをぶつけることも叶わないから、代わりに涙としてあふれるのである。

「やめろ・・」

だが、ナインの気持ちなどお構いなしに、現実は残酷であった。そんなナインの目の前で、敵は好き放題に少女たちをいたぶり続けるのである。

「やめてくれ・・」
夢ならいいのに。
「お願いします・・」
かみさま。もしも願いが叶うなら。
「どうか・・」
あいつをすぐに殺せるところへ連れていってくれませんか？
「やめろぉぉぉ！！」

ナインの鬼はこれまで以上に強く、強く胸の精神球体の光を輝かせた。この上なく濃い緑のその光は、一瞬だけ碧く光ったような気がした。それと同時に、ナインの目の前にあるＯＳのディスプレイ画面に、突然、文字が表示される。

『プログラムの着床を確認しました』

急にほとんど使用することのないＯＳが起動した。そのまま画面が変わる。

『前方に対実無効シールドを探知しました。実体攻撃は全て無効化されます。したがって、本体は虚物化する必要があります。なお、虚物化によるコストは使用後、使用時に遡って清算されますので使

いすぎにご注意ください』

「なんだこれ？」

「ナイン、それで赤鬼を倒しなさい！！」

今まで見なかった弥生遼子から通信が入った。

「これは、いったい？」

「詳しい話はあと！とにかく、これはプロトオーガの新プログラムよ。使って！！」

彼女の言うとおりである。これをどうやって手に入れたかなんて今はどうだっていい。今重要なのは、赤鬼を倒すこと。それがナインに与えられた、唯一つのテーゼ。早く、一刻も早く、彼女たちを助け出さねばならないのだ。

「了解」

（待っていろ、みんな。今から俺が、俺の鬼がお前たちを守る）

「プロトオーガ、虚物化する」

ナインはメンタルスフィアの強い緑の輝きに全身が包まれると、プロトオーガは中のナインごと消滅し、あとは影も形も残らなかった・・。

（二）

（どこだ、ここ？）

ナインはよくわからないところにいた。いや、『いた』と言う表現はあまり適切でない気がする。なぜなら、自分の身体がないのだから、『いた』ということはおよそ観念できないはずである。とはいえ、透明人間になったわけでもないようだ。ここは明らかに今いた場所とは異なる。いや、『場所』という表現も必ずしも適切でない。ここは特定の場所ではないのだ。

そういうわけであるから、手を動かすことを意識しても手が動くようなこともないし、歩こうと思っても歩くことすらできない。しかし、何かを思惟することだけはできる。間違いなく自分という存在はあるのだ。

そうだ、たとえるならば、目を瞑ってみようか。そうすると、何も見えなくなり、視覚的情報は遮断される。さらに、耳をふさいでみよう。何も聞こえなくなるはずである。さらには、鼻を。ひいては自分の身体を全て取り去るのである。そうすると、自分の世界とはどうなるだろうか。この場合、自分がもはやどこにいるのかさえもわからなくなるから、なぜだか、何処へでも好きなところへ行ける気がしないだろうか。今、自分がいるのはそんな世界である。かといって、死んでしまったわけではない。

思えば、自分を構成する世界とは、自分が得られる情報に基づいて構成されるのだ。よく視覚を失った人が構成する世界は聴覚や触覚で見る世界になるとか言うだろう。極端に言えば、本能だけに従う野生動物が見る世界なども想像してもらいたい。このような動物は、獲物と宿敵と生存がその世界の全てであり、人間よりもはるかに狭い世界である。このように構成される世界に広狭があるとはいえ、人間も同じようなものであり、たとえ目の前に1億円が落ちていようとも、それを認識していなければ、それは自分の世界に存在しないこととなる。

だから、およそ生物一般というのは、主観と客観が邪魔をし合うことで、自分の世界を狭めているのである。すなわち、両者とは合わせ鏡のようなもので、主観的なものと客観的なものとが無限に反射

し合い、世界を形作っているのである。仮に、ある人間が、世界の果てを知っているとしよう。しかし、行きたいと思っても、そこへ当然に行けるものではない。なぜなら、身体という客観的に帰属せしめうるものの存在があるから、これを置いていけないのである。他方、世界の果てが客観的に存在しているとしても、それを知らなければ、人間はおよそそこへは行き得ない。こちらは、認識という主観的に帰属せしめうるものの限界が邪魔をしているためである。しかし、主観的にも、客観的にも帰属せしめうるような存在ではなくなった場合、その存在はどうなるか。主観的にも邪魔されることなく、客観的にも邪魔されることのない存在。もはやそれは、心的なものでもなく、物的なものでもないものにまで解消される。いわば、世界という書物の中に書き込まれた構成要素。世界というシステムを形作るプログラム。すなわち、記号的存在である。それこそが、心と物という二元的な呪縛からから解き放たれし、記号的存在形式。これが、ナインのプロトオーガに組み込まれていた外法プログラム、『虚物化』である。実体を記号形式へと換える、外なる世界からもたらされた、人智を超える禁断の能力なのだ。

この虚物化プログラムをもって、いままさにナインは、そのオーガとともに客観的な限界を超えてしまったのである。自分の世界は自分の認識だけがそれを構築しており、身体とか、物理的な重力とかいったものは一切取り払われてしまっているのだ。いうなれば、自分の思惟のみで作られる世界。これが虚物化により切り開かれた、新しい世界なのである。すなわち、世界との融合。

ナインは今、何処へでも飛べる。私はこの世界。この世界は私。望みさえすれば其処へすぐにでもいける。私は、この世界そのものなのだから。あの場所は自分の一部であり、自分の体はあの場所の一部でもある。だから、目を閉じて、行きたい所を想像し、再び目を開けるとそこにいるのだ。ナインはいま、そういう存在なのだ。だから、行かなければならない。あの赤鬼を倒すことのできる場所ま

で。実体が入ることのできない禁断の領域へ。

（三）

「ナインがきえた？」

そう、一旦メンタルスフィアが眩しく輝いたと思ったら、ナインは鬼と共に消えてしまったのである。もう何処にもいない。窮地にある味方を見捨てて、ひとり尻尾を撒いて行ってしまったようだ。

「そんな、ナインさん・・・」

まもるは絶望した。このまま、この化け物に魂を吸われ続けて死んでしまうのであると思ったから。しかし、この状況において、絶望どころか、希望で胸があふれている気違いがひとりだけいた。

「ナイン君はいるよ、まもるちゃん」

詩季は目をとじていた。赤鬼に魂を吸われつつも、意識を必死につなぎとめるのである。

「目を閉じるとはっきり見えるの。彼と、彼のプロトオーガ！」

詩季はその強い第６感で、この世界そのものとなったナインを、世界と同化したナインの存在をはっきりと心で見たのだ。ナインは皆の心の底流にしっかりと存在するのだ。皆がナインを認識する限りにおいて、彼はこの世界に間違いなく存在する。

「ナイン君！！」

『ギャァァァァッ！！』

突如、赤鬼は悲鳴を挙げた。どういうわけか、苦しみだしているのだ。いかなる攻撃をしても、傷ひとつ負わすことすらできなかった赤鬼が、苦痛を訴えているのだ。
するとこれにより、赤鬼の触手の力が急激に弱まり、捕らえられていたふたりは解放され、地に落とされた。

「助かったの・・？」

まもるは、なぜ自分が助かったのか、いまいちわからないでいた。

「まもるちゃん、あれ！」

詩季は赤鬼を指差した。

「あれって・・・」

まもるは信じられないものをみた。あれだけの攻撃を与えても全く破れなかった赤鬼の対実無効シールドの空間内に、どこからともなく手が2本生えていて、赤鬼の首を締め付けていた。あれは紛れもなくナインのオーガである。

「・・・・！！」

鬼の腕はそのまま赤鬼の首をへし折った。すると、その腕を基点として、肩、胸部といった順番でナインの白きプロトオーガが虚物化から戻り、次第に実物化し、その全体像を顕にする。

「お前は、お前だけは、許さない！！」

ナインはその手を両刃剣に変えると、一瞬にして赤鬼を八つ裂きに

した。

「消えろぉぉぉぉ！！」

いや、八つ裂きどころではない。切れるだけ切るのである。赤鬼は、ばらばらになって、細かくなったパーツが宙に舞う。

「いなくなれやぁぁぁ！！」

まだまだぶった切れそうなところは何度でも切る。もう二度と再生しないように。

すると、赤鬼の裂けた胸からメンタルスフィアの強い輝きを発見した。今にもはじけ飛びそうなほどの巨大なメンタルスフィアであり、一体、どれほどの人間の精神を吸い取ったのかは想像すら困難である。ところが、その時である。

『メンタルスフィア、探知。これよりキャプチャーに入ります』

新プログラムのためか、今までメンタルスフィアなど見つけてもうんともすんとも言わなかったＯＳが、これの捕獲作業に入った。すなわち、鬼の手が勝手に動いては、そのメンタルスフィアをもぎ取り、自己のそれにくっつけるのである。すぐに、赤鬼の巨大な精神球体はナインの鬼のそれへと吸収される。

「何だ・・・これ」

赤鬼の心がナインの心の中へも怒涛のごとくなだれこむ。死者たちの憎悪なのか、それとも赤鬼に吸収された人間の魂全部なのか、とにかくナインの心を食い破るほどの怨念の総量がナインの心を埋め尽くしていくのである。

「がぁぁぁ！！」

ナインは苦しんだ。自分の魂のキャパシティを超えるほどの人々の精神が次々と突き刺さるのである。それは、多くの人間に後ろ指を差され、攻め立てられるかのような苦痛である。うかばれない者たちの孤独な嘆きを、負のエネルギーをナインが一身で受け止めてしまった。

全ての光がナインの方へ吸収されると、赤鬼はそのまま動かなくなった。

「・・・」

赤鬼が機能を停止すると同じに、ナインの鬼もその場に倒れた。

「ナイン君！！」

ナインの意識は戻らなかった。

第16話　漆黒の監査人

公益社団法人東京陸運保険機構が、赤鬼討伐の任務を無事終了させてから3時間が経過した頃であった。

結論から言うと、任務は成功。赤鬼から強い精神攻撃を受けていた辰巳春樹は特設の診療所にて、未だ気を失っているも命に別状は無い模様。グレイのゲイボルグも海底から引き上げられ、搭乗者は無事。プロトオーガの搭乗者であるナインは、一応、生きてはいるが意識はなく、現在は死んだように眠っている。プロトオーガを全身にわたって虚物化させた代償があまりに大きかったのも一理あるが、それよりも過剰なメンタルポイントの吸収に主たる原因はあると思われる。他方で、他のメンバーについては、特に目立った外傷もなく、かろうじて健康といったところか。

現在、東京陸運保険機構の本作戦業務にあたっていた者たちはみな、横浜の赤レンガ倉庫内にある特設の診療所に集まっていた。

赤鬼は倒した。
未だかつて誰も成し遂げたことのない偉業をこの7人が見事にやってみせたのである。
しかし、それを喜ぶものは誰一人としてここにはいなかった。
なぜなら、全く勝った気がしなかったからだ。
赤鬼ですらこれほどの力を持つなら、この先は一体どれほどの化け物が出てくるのか不安で仕方なかったからだ。
最もねぎらってやりたい者が目を覚ましてくれないからだ。
そういうわけであるから、それぞれ胸に思うところは異なっているも、みな憂鬱そうな表情を浮かべているのであった。

ところで、ここは赤鬼と交戦した山下埠頭から程近い、赤レンガ倉庫の中である。赤鬼という、門番が倒れた以上、遂になんらかの動きがあるかと思われたが、全くその気配などない。というより、始めからプロトオーガといった指揮官隊など存在していなかったようなのである。だから、残っていた鬼も綺麗に消えてしまったし、増援が呼ばれる気配も無い。もっとも、このことは他のメンバーが赤鬼と交戦中に弥生遼子と西田武彦が赤レンガ倉庫を捜索中、何となく気づいていたとおりである。

また、赤レンガ倉庫に残されていたオーガの研究設備には、弥生と西田両名の捜索により、結局、人っ子ひとりいなかったことが明らかとなった。それにしても、後処理が甘かったのか、プロトオーガにとって重要なプログラムである、『虚物化プログラム』を端末から発見することに成功したのは奇跡とでも言うべきか。とにかく、本隊という虚構の部隊など、このようなところには無く、赤鬼はずっとこの無人の横浜を守っていたのだ、というのが現時点で考えられる最も合理的な結論なのであった。

弥生遼子は、いくつか簡易ベッドが置かれた、かすかにクロロホルム臭い部屋の中をだるそうな表情で眺めていた。その部屋では、2名の社員がそのベッドに倒れており、数名がそれぞれパイプ椅子に腰掛けて下を向いているのだ。このような光景を見ていると、弥生すらも弱気になってしまうのである。とてもではないが、『任務終了。お疲れ様。今日はパーッとやりましょう』などといった趣旨の発言をすることなどできない。かといって、気の利いた言葉をかけてやれるほど、彼女は気の回る人間でもない。だから、眠っているふたりが目覚めるまで、せめて黙っていることしかできなかった。

ところがそんな折である。突如、弥生遼子の携帯電話が振動したため、彼女は室外に出て、それに応じる。着信通知によれば、彼女が最も話をしたくない人間の名前が表示されており、さらに気分を悪くさせた。

「はい・・はい・・・」

しばらく弥生が黙って相手の話に耳を傾けている。相手が長く話しているのだろう。だんだんと、彼女の表情が不機嫌になっていくのがわかる。

「えぇ、わかりました。お待ちしております」

そういって、弥生は電話を切った。彼女は室に戻って言う。

「早速、防衛省が赤鬼の殲滅に気づいたそうよ。何にも言ってないのに、どうして気づくのかしら、あいつら。とにかく、こっちに奴ら来るそうだから」

何があってもいいように覚悟しておけ、とは言わなかった。というより、今はそれどころではなさそうだから、あえて控えたのである。しかし、ひとりひとり取り調べられるのは目に見えているであろう。とりあえず、この子達だけでも帰そうかと弥生は思った。しかしながら、物理的にナインを安静に搬送する手段はいまのところ無いし、そうなると詩季も絶対帰らないだろう。詩季も帰らないとなれば、まもるも帰らないだろう。そういう三段論法が成り立ってしまう。いずれにしても、足だけは速い防衛省の連中から手負いの我々が今更逃げるのも相当とはいえないだろう。

「社長・・・」

壁に寄りかかっているグレイが、珍しく話しかけてきた。

「俺のゲイボルグは、無事ですか・・」

グレイはいつもの生意気とさえ思えるような自信がことごとく消えていた。あれほど、派手に愛機が破壊されたのが相当ショックであったようだ。

「歩くぐらいならできるけど、うちではあれを修理することはできないわね。一旦、あなたのお父さんのところに持っていかないとどうにもなんないわよ」

「そうすか・・」

グレイは柄にも無く、首をうな垂れてしまった。

それにしても、例のゲイボルグは全く酷い有様であった。ボディは穴だらけであり、しばらく海底に沈んでいたためか、水圧で至る所がボコボコになってしまっているのである。にもかかわらず、グレイはほとんど無傷であったのは奇跡と言ってもいい。だから、彼も喜んでよいはずなのである。

「まもる・・？」

先ほどからずっと辰巳の手を握っていたまもるに対して、声がかかる。

「はるきちゃん！」

辰巳春樹が目をさました。

「ここ・・どこ？赤鬼は・・・？」

「ここは安全なところ。赤鬼はナインさんが倒したよ」

まもるが握っている辰巳の手に、まもるの涙が落ちた。まもるは泣

いていた。

「ばか・・・、何、泣いてんのよ・・」

「だって、はるきちゃん・・、はるきちゃんがぁ」

まもるは自分が何でこんなに泣いてるのかよくわからなかった。辰巳の苦しんでいたところを間近で見ていて、自分も同じような苦しみを味わったから、過度に感情移入してしまい、もう辰巳は元通りに帰ってこないとでも思ったのであろうか。そんなまもるを見た辰巳は、優しい表情で語りかけるのである。

「アタシ、怖い夢・・見そうになった。でも、まもるがアタシの手・・握っててくれたから・・なんか見なくてすんだみたい。ありがとね・・」

辰巳はまもるの小さな頭を小突く。

「うぇぇぇん」

まもるは辰巳の寝床に突っ伏して泣いた。

「全く・・アンタはもう・・」

辰巳は横で突っ伏しているまもるをよそに、他方のナインを見た。ナインは死んだように静かに眠り、その横では詩季がまもると同じように手を握って見守っていた。

「ナイン君・・・」

詩季は目が見えないから、具体的に今のナインの死んだような姿を

知ることはできない。しかし、彼の手から感じる脈動から、かすかにナインが生きていることを感じ、ただ祈りながら彼の目が覚めるのを待っていた。

詩季は、この時、赤鬼に立ち向かわず逃げればよかったと後悔していた。所詮、うちの会社は利潤追求型である。必ずしも赤鬼を倒さなければならない必要はなかった。海の中のグレイも簡単に助けられた。だから別に、無理にこれを倒さなくても良かった。

しかし、詩季はきっとナインが助けてくれると、直感的に思い込み、それを事実上強要し、結果的にはナインが生死の境を彷徨うようになってしまったのだ。これはきっと自分の甘えがもたらしたに違いないのだ。自分はいつもそうだ。そうやって、手を差し伸べられるとつい甘えてしまい、しまいにはとんでもない迷惑をかける。ただの足手まとい以外の何者でもないのだ。今回もナインにそれが災いしたのだ。

（ごめんね、ナイン君。もう甘えたりしないから。目を覚まして。お願い）

１０分後、海上から防衛省の主力戦艦『天竺』が３隻、元横浜港に着水した。

すぐに、防衛省の連中は船を降り、二手に分かれては、一方は赤鬼の残骸の調査へ、他方は弥生たちの下へと赴いた。

「いやぁ、弥生君、よくやってくれた」

どうやら、将校らしき人物が診療室に入ってきては、弥生に話しかける。その男は、立派な軍服に身を包み、勲章を幾つも付け、濃い髭を口元に蓄えているのであった。弥生はその人物の気配を察知するなり、顔に陰りが生まれた。そう、この男は弥生遼子の防衛省時

代の上官であった男であった。弥生にしょっちゅう嫌がらせをしていたこの男は、彼女にとってゴキブリ以下の存在であり、その嫌悪感は今もなお健在である。

「いいぇ、もったいないお言葉です。小田原次官『補』」

しかし、彼女はすぐににっこり笑って見せると、『補』の部分を強調した。それに小田原という人物は気づいているのか、機嫌よく話を続ける。

「いやぁ、我々の軍事力をもってしても倒せなかったあの鬼をどうやって倒したんだね？」

「彼らが頑張ってくれた、それだけですわ（おしえねぇよ、ハゲ）」

そういって、弥生は部屋の奥にいる少年少女たちを示した。なお、小田原は現在帽子を被っているため判明しないが、実は彼の前髪は著しく後退しているのである。

「キミィ、隠さなくてもいいんだよ。噂によると、オーガを使っているそうじゃないか」

弥生は思わず舌打ちしそうになった。どうせこの男の事だ、噂じゃなくて諜報部員でもよこして調べさせたのであろう。

「あれは、人工のオーガなんです。いわゆる不真正オーガなんですよ」

弥生は、いやみったらしい笑いを浮かべて、小田原の質問をなんとかかわそうとする。ちなみに不真正オーガとは、外形上オーガのようだけれど、オーガとしての定義にあてはまらないものをいう。メ

ンタルスフィアの無いオーガなどは、まさにそれである。

「ホントかねぇ。ちょっと見せてもらえんかね？」

やはり来たか。もとよりコイツの狙いはそれであろう。そして、あわよくばその鬼の横取りと言ったところか。もっとも、防衛省の連中がナインの鬼の存在を怪しむ場面は、今までも何度かあった。その度に弥生は情報操作に奔放していたが、今回赤鬼を倒したことで決定的に黒と判断されたようだ。

「小田原次官補、ちょっと見るのは私のスカートの中だけにしてもらえませんかしら、以前のように」

もっとも、現在、弥生は戦闘用スーツを着用しているためスカートなどはいていない。それだけに、弥生はオーガを貴方に見せるなどありえないことだと皮肉っているようだ。

「ははは！それもよいが、どうしても君の鬼が見たいのだよ」

弥生はオーガに負けたことが少しショックに感じられた。

「しかし、それは公権力の行使による私人のプライヴァシー権の侵害行為、すなわち国家賠償問題になりかねませんわ」

「かまわん。金など幾らでもくれてやる。それよりも私は鬼が見たい」

小田原はたまりかねたのか、鼻息を荒くして口調を強くして訴えてきた。

（もう潮時か。ごめんなさい、ナイン君。このハゲにひと目だけあ

なたの鬼を見せるわね。まぁ、ナイン君の鬼が仮に押収されたとしても、こいつらが動かせるわけないし、大丈夫よね）

「・・仕方ありません。ではこちらに・・・」

その時であった。

近くに落雷でも落ちたかのような轟音とともに、天が裂けた。

皆は外へ目を見やるのである。

その時、興味本位で外を見たものたちは、見てしまった光景に戦慄する。

天から悪魔が降臨したのだ。それは、世界から一切の余計な色彩を排除する黒で、美しいほどの漆黒の闇に包まれながら、天からゆっくりと堕ちていく悪魔である。

「黒い・・・オーガ・・・」

天を見上げている誰かがそういったのだ。弥生は、必死に自分の記憶の引き出しから黒いオーガのデータを検索する。しかし、黒いオーガなどデータにない。今まで誰も見たことのない新しいタイプのオーガである。そのため、この戦闘能力は全く未知数である。しかも、このオーガは赤鬼を倒した直後に現れたのだ。赤鬼を越える戦闘力を有している蓋然性（がいぜんせい）も認められる。だが、唯一この未知の敵を倒しうる、頼みのナインは気を失っている始末である。

弥生は、いま自分達が置かれている状況を全く呑めずにいた。というより、理解しないでいる方が、気が楽であったのかもしれない。よもやいないと思われていた本隊がやはり存在していたのであろうか。だとすると、致命的な誤算である。しかしながら、本隊が存在しているなら、なぜもっと早く登場しなかったのか、という重大な疑問も生じる。もう、彼女は何もわからなくなったので、思考を停止することにした。

「や・・弥生君、何なんだ、あいつは！私の艦の方へ降りていくぞ」

黒いオーガは3隻の天竺が着水している横浜港跡地へと降りていった。

「一体、何が起こるっていうの？」

弥生は足の震えを隠せなかった。

真上に黒い鬼を発見した天竺のブリッジは騒然としていた。

「何なんだ、あれは？」

「構わん、撃ち落とせ！機械兵も出撃させろ！我らの力を思い知らせてやるのだ！！」

天竺の主砲、並びに副砲が上空の黒いオーガに対して、一斉に火を噴いた。また、看板からはぞろぞろと機械兵が出撃し、マシンガンを片手に黒いオーガを狙い撃つ。黒いオーガの周辺には無数の弾丸が集中し、弾幕や黒煙などで黒いオーガは完全に見えなくなってしまっていた。

「どうだ、思い知ったか！！」

わが軍総出で集中砲火を決めてやったのだ、これであの鬼もひとたまりも無いはずである、と誰もが思っていると。

「なぜ？直撃のはずだ」

黒いオーガは黒煙の下からするすると抜け出してきた。黒煙よりもはるかにどす黒い漆黒のアウラを纏っているためか、傷ひとつ負っていない。

「ひるむな!!撃て!!」

もう、天竺と黒いオーガの距離とはほとんど無くなっていた。しかし、この連中は構わず撃ち続けるのである。跳弾が船体を傷つけようが、もうお構いなしであった。それほどまでに天竺はパニック状態にあった。

「うわぁ!!くるな!!」

だが、幾ら撃ったところで、黒いオーガは降下を止めることは無い。

「もうだめだ!」

黒いオーガは3隻の天竺のうち、1隻の看板に舞い降りた。

「今しかない!」

黒いオーガが降り立った天竺の隣にあった天竺が、ちょうどその主砲を黒いオーガへ向けていた。

「貴様はこれで終わりだ。天竺の主砲の威力、受けてみろ」

「馬鹿、やめろ!!」

しかしながら、その主砲の先には、黒いオーガのみならず、別の天竺のブリッジもまた含まれていた。そんなことには気づかず、主砲

が火を噴く。

「あ」

黒いオーガは難なくその弾をかわすと、その後ろにあった天竺二のブリッジがまるごと吹っ飛んでいった。

「もう・・おわりだ・・」

天竺二の船員は戦意喪失していったのである。それを察してか、黒いオーガは彼らを苦しまずに葬ってくれるつもりである。黒いオーガを纏わりついていた漆黒の闇が、その胸部に集中する。それは、黒の瘴気の塊であり、冥府からもたらされた闇の力である。

「うわぁぁぁぁぁ！！！」

いま、その闇が放たれた。海を切り裂いて、風までも吹き飛ばし、地平線へ向かって闇は直線状に放出され、その闇にふれたもの全てを消滅させる。その破壊力の源は、おそらく呪いの力か、死者たちの負の力か。海も風も光も、生とし生けるものを全否定する力。あらゆる有体物の活力を枯渇させ、その実体の維持構成を困難たらしめるのである。黒いオーガが乗っかっている天竺二のブリッジ部分はその暗黒の闇の中へ堕ちていき、塵ひとつのこらなかった。

「にげろぉぉ！！」

最後に残った天竺二がスクリューを巻き上げて、逃走の意思を見せた。それを黒いオーガは逃さない。直線状の闇の塊を、逃げた天竺二の方へ向けるのである。それは単なる闇のレーザー的なものではなく、もはや闇の巨剣である。おそらくは全長1キロメートルほどもある

超巨大な剣なのだ。弧の長さは円の中心から遠ざかるごとに倍加することから、円の中心たる黒いオーガは多少、剣を横へ持っていくだけで、すぐにその剣は天竺に追いつくことができる。しかし、中心から遠いところにいる天竺がこれを回避するためには、黒いオーガの何百倍もの労力で逃げなければならない。それは無理。結果、すぐに闇の巨剣に追いつかれた天竺の艦体は剣にふれていった部分から漸次消滅していく。

「あああぁぁぁ！！」

艦の最も重い部分が消滅したためか、バランスを失って一気に転覆する。もっとも、完全に艦が転覆する前に、船体は巨大な闇の剣に包まれ、天竺は跡形もなく消滅した。そして、程なくして闇の巨剣もまた消えうせるのである。

防衛省海自第3艦隊、全滅。

黒いオーガは自分と同じものを感じ取ったのだろうか、赤レンガ倉庫の方へと身体を向けたのであった。

第17話　あの頃の笑顔のままで

「わ・・私の艦隊が・・全滅だと・・」

小田原は背骨を抜かれたかのように、すっかりへ垂り込んでしまった。

「社長、こっちに向かってきます」

おそらく、あの黒き鬼のねらいはナインとプロトオーガである。だからこそ、同属の匂いでこちらに気づいたのである。

「どうすれば・・」

事前にあの鬼の戦いを見て、弥生遼子はまず我々に勝ち目がないことを悟った。とすれば、ここはもう逃げる以外の手段は無い。しかしながら、問題はプロトオーガの搬出である。操縦者であるナインの意識が回復しない以上、これはうんともすんとも言わないのが現状である。したがって、何体かでこれを担いでいく必要がある。ただ、そうなった場合、あいつから逃げ切れるのか。

無理。

のろのろ動いているだけの赤鬼とは異なり、黒いオーガのあの細身からして、これは相当な速度で移動することも可能なのは明らかである。完全な戦闘タイプの鬼である。

「ちっ・・！」

その時、グレイがどこかへ走り出した。

「あ、グレイ！」

グレイは廊下を駆けながらいう。

「俺が時間を稼ぐから、あんたたちは急いでナインを連れて脱出しろ！」

「馬鹿！アンタ死ぬ気？ゲイボルグは戦うことはおろか、歩くので精一杯なのよ」

「考えはあるさ」

そういって、グレイは見えなくなった。

（二）

ナインは、夢の中にいた。

ぼろいエアコンが今にも爆発しそうなほど必死に稼動して風を送っている。それと、外からは油蝉がジリジリと鳴いている音がする。今は夏なのであろうか。

そんななかで、ナインは半そでに少し汗を滲ませながら、リースのシールが貼り付けられている新しいパイプ椅子に座っている。そこは、小さな教室か。室の中央には長机を幾つか並べて、四角形を構成しているのである。またそこには、ナインを含めて９人の学生らしき者たちが、全員の顔を見合わせて座っていた。

「『先生』、物理属性と外法属性との区別が、少し難しいので教えていただけませんか」

ひとりの学生が、『先生』と呼ばれる年長の学生に問う。

「よかろう。まずそもそも、『属性』とは、その効果発生手段によってふるい分けられることは理解しているかい？」

「はい。『属性』が手段、『方法』が効果であると理解しております」

「そう、今の段階ではそのような理解で十分だ。『属性』も『方法』も、我々が日常的に使用するそれとは、意味の乖離が生じているから混同してはいけない」

「はい、先生」

質問をした学生は、深く頭を下げた。いくら先輩後輩の関係であるとはいえ、そんなに頭を下げる必要はあるのだろうかと思う。それはまさに、治者と被治者の関係にも似ている。いや、教祖と信者といってもよさそうである。とにかく、年下の学生の方は、『先生』と呼ばれる男を、熱狂的に尊敬しているのは明らかである。

「しかし、属性を区別するための『手段』を何と捉えるかという点でも、困難が生じているから、『手段』の解釈いかんによっては、属性の分類を間違えてしまうこともある。君の見解がいかに論理的に筋道だったものであろうとも、外法効果が発生しないのでは何の価値もないのだよ。けだし、外法は真理を常に審理するゆえ、外法が其れを偽と認むれば外法要件を充たすことはないのだから」

「はい、肝に刻みもうしあげます」

「自分の解釈が誤っていたことを実戦で気づいても遅い。それは、君にとって死を意味する。だからこそ、外法の絶対的な体系的論理の集積を自らの手で見出していかねばならない。ならば、日頃から、外法に触れていなければ、それも到底かなわぬ」

「はい。先生」

「・・・が、両者の分類をよく知っている。聞いてみるといい」

奥にいた『先生』がナインを示してくれた。それに従い、教えを受けていた学生もナインを見る。

「『先生』も、よろしかったら教えていただけませんでしょうか」

その学生は、ナインに向かってそういった。ナインは、なぜ自身が『先生』などと呼ばれているのか、理解に苦しんでいた。しかし、相手の学生はやたらとニコニコして、教えを待っている。それにしても、一体何なのだこの人間たちは。そろいもそろって、いかれた人間ばかりではないか。ホワイトボードをちらっとみると、『外法学ゼミ』と大きく汚い字で書かれており、怪しげなゼミ活動を繰り広げている。一体、こいつらは何を真面目に勉強しているのだ。黒魔術か、もしくはそれに類する何かか。何よりも、普通でないことを普通にやっているこいつらの行動が気持ち悪い。

「先生？」

もう一度、ひとりの学生がナインに呼びかけた。気づけば、そこにいる連中はノートを開いては、メモを取る準備万端で待っていた。

「え、何だっけ？」

「外法属性と物理属性の分類でございます」

「外法属性・・」

ナインは、記憶の中で救いようの無いほど複雑に絡まった糸が、少し解けるような気がした。

（三）

グレイは急いでゲイボルグのところへ向かう。先の戦闘によりグレイの心と体はボロボロであるはずなのに、グレイの気分は蒼天のように冴え渡っていて、なぜこんなにも自分が気力にあふれているのか、わからなかった。彼も、もちろん、あの黒い鬼の兇悪な力をその目で見ていたはずである。しかし、彼には妙案が芽生えつつあったのだ。それは、倫理も条理をも超えた恐ろしい妙案であった。

（今の俺の力では、あのクラスのオーガには、足元にも及ばないのはわかってる）

それは、赤鬼の奇妙奇天烈な能力によって、いやというほど思い知らされた。いわんや、完全なる戦闘型である黒オーガは、今のゲイボルグなど瞬殺であろう。

（ならば）

俺が、鬼になればいいだけのことだ。

自分をより強くするため、グレイは魂を鬼に売る覚悟はできていた。最強だとタカをくくっていたこの自分が、敵に対して傷ひとつ負わすこともできず、完膚なきまでに叩き潰されてしまったのだ。それがどれほど自分のプライドを傷つけたことか。とにかく、もう、あんな惨めな思いはしたくなかった。だから、自分がどうなろうと構いはしない。もっと強くなることさえできるのならば。

「ゲイボルグ！！」

グレイは倉庫に置いてあるゲイボルグに対して、叫んだ。ゲイボルグはもちろん応えることはなく、広い倉庫の中で自分の声の反響だけしか聞こえてこない。ゲイボルグは胸部をごっそり失い、左腕を失い、頭部裂傷、それに至る所が穴だらけとなっていてグレイにとっては目を背けたくなるほどの悲惨な光景であった。

「すまねぇな、少しだけ我慢しろよ」

グレイはゲイボルグに乗り込む。一応、まだ動力は生きており、弥

生のいうとおり、動くだけであれば何とがなりそうであった。ぐにゃりとひねられた足を引きずりながら前へと進む。

「たしか、地下にメンタルスフィアがあるっつってたな」

グレイは倉庫の右側に機械運搬用のリフトを見つけると、それを操作する。グレイはゲイボルグごと地下へ向かうのである。

「もう少しの辛抱だ・・」

そう、彼は、メンタルスフィアをゲイボルグに移植することを思い立ったのである。そうすればきっと、自分も鬼の力を得られるはずだと。

「あれか」

グレイは薄緑色に光る培養棟を発見する。すぐにそれをぶちこわすと、中から、液体とともにメンタルスフィアが流れ出てきた。そう、これが鬼の心である。これを見ていると死者達の心の声調が自分の心へ響いてきて、グレイですら気味が悪いと思うのである。

「これで、俺も・・・」

グレイは内心ためらいを隠せ無かった。実際に、メンタルスフィアによる精神吸収は、辰巳のそれを見てしまうと自分も無事では済まされないと悲観的になったからである。

「どうせこのままじゃ、いずれ死ぬんだ」

それよりも、グレイは強くなりたかった。誰よりも。どんな鬼より

も。もちろんナインのオーガよりも。

ゲイボルグはそれを右手で掴むと、ちょうどその心臓部分に空いていた穴の部分へとメンタルスフィアを押し込んだ。

その時、グレイの心と、メンタルスフィアが結びつき、それは強い輝きを放ったのである。そう、グレイは鬼の心に選ばれたのだ。

（なんだ・・・これ・・・）

グレイは自分の心に何かが取り付けられたような感覚を味わいつつも、同時に懐かしい気分に浸っていた。

（この感じ、まさか・・マコか。マコなのか？）

マコとは、グレイの唯ひとりの大切な妹であった。病気がちで、ほとんど外に出れない体質であったが、生きていればちょうどまもると同じような感じに育っていたかもしれない。しかし、彼が横浜にまだ住んでいたころ、鬼の襲撃に巻き込まれ、死亡したのだ。グレイは妹を守れなかったのである。自分だけがおめおめと生き延びてしまい、それが生涯グレイを苦しめ続けていた。

（間違いない、マコだろ。寂しくなかったか？）

グレイの目には妹の姿がはっきりと映っていたのだ。もうその笑顔は未来永劫戻ることは無いと諦めていた。いつも勉強勉強と煩い親父に疲れ果てていたグレイをいつも笑って支えてくれたグレイにとっての希望そのものだった。誰よりもグレイのことを理解してくれていたかけがえの無い妹である。はからずも、このようなところでその笑顔を見ることができたグレイは、自分の目の前に現れた妹の幻影を抱きしめた。そして、そのままグレイの心は、どこかへ飛ば

されるような感覚になった。

（四）

グレイは、気づけば3年前の横浜・山下公園にいた。
横浜の海からくる、からっからの潮風がなんとなく傷だらけのグレイにとってヒリヒリとさせるも、心地よい。青い空に青い海、横浜のランドマークタワーや遊園地も全てもとのまま。あの頃の思い出のまま、手付かずに保存されていたのである。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

気づけば、グレイの手には車椅子の手すりがひかれていた。そこにはグレイの妹が座っていて、日焼けしないための麦わら帽子を深々とかぶってる。そして、グレイと目が合うと、妹は優しく微笑むのである。

「悪い。潮風が気持ちよくてさ。もういかないとな」
「変なお兄ちゃん」

そして、潮風に長い髪をなびかせながら、妹はまた、グレイの目を見て優しく微笑んでくれた。

「うっせぇな、さっさと病院に行くぞ」

グレイは照れてしまい、妹と目を合わせずにそういった。

「こんな日が、いつまでも続くといいのにな・・」

ふと、妹が、下を向いてどこか切なそうに無理して作った笑みを浮かべてつぶやく。

「いつまでも、お兄ちゃんと、こうやって散歩できたらいいのにな」

グレイは、妹の悲しげな顔を見た。妹の表情は、もうこんな日々が続かないことを予め知っているのかのようであった。

「お前には、寂しい思いなんてさせねぇから安心しろ」

グレイは完全にそっぽを向いてそういった。しかし、心だけは、ちゃんと妹を見据えていた。

「だから、お前は、絶対に笑ってろ」

それを聞いた妹は、グレイの方を見て、にこりと笑ってくれた。

「お兄ちゃん、ありがとう」

グレイの心は、元の場所に戻った。もう妹はどこにもいない。しかし。

（もうずっと一緒だ。もうお前に怖い思いなんてさせやしない。お前を泣かす奴がいれば俺が叩き切ってやる。だから、ずっと一緒だ）

マコがあの頃の笑顔のままグレイに寄り添ってくる感じがした。

（マコ、一緒に行こう。どこまでも）

ゲイボルグが永遠に失われてしまったと思われていた妹を、メンタルスフィアを通して、会わせてくれる。もう2度と妹を殺させやしない。妹は俺が守る。

（お兄ちゃん、ありがとう）

妹がグレイに向かって、あの頃の笑顔のままで、もう一度だけ、最高の笑顔でにこりと微笑んでくれた。

『ゲイボルグ』ハ其ノトキ『鬼』ト化シタ。

第18話　変化する世界

グレイがゲイボルグとともに地下に降りている頃である。弥生遼子はグレイの考えというものに賭け、従業員の皆を連れて、赤レンガ倉庫を離れようとしていた。

「ナイン君は、オーガの中に入った？」

弥生は、意識の無いナインを抱きかかえてオーガの中へ入った西田に問う。彼女がこのように考えたのも、これから何があったとしても、プロトオーガの中が一番安全であろうし、ナインが目を覚ました場合、すぐに行動することもできるからである。

「完了です、隊長」

西田は、オーガから降りて、自分の機体の中へ入っていった。

「じゃあ、できるだけみんな遠くへ！」

弥生遼子たちは赤レンガ倉庫を後にした。

「あとは、グレイなんだけど・・・」

弥生は、隊全体の共通利益のため、グレイを置いて逃亡する選択をしてしまったことを後悔していた。グレイにどんな妙案があろうとも、あのオーガに勝てるはずはなかったからである。しかし、こうなっていしまった以上、弥生はグレイに賭けるしかなかった。
その時、弥生はリフトを使わずに地下から影を縫うように跳んでいったものを見た。それは、ゲイボルグかと思われるが、紛れもなく

鬼そのものであった。胸の部分に輝くメンタルスフィアを見れば、一発でわかる。

「グレイ・・、あんたの考えたことって・・・」

弥生は悪い予感がしていたのであるが、まさかグレイが鬼と化すとは思いもよらなかった。しかし、動くことさえ困難であったゲイボルグが強大な死者たちの力を借りて蘇ったのだから、最善の一手といえば最善の一手であったのだ。

黒いオーガは赤レンガ倉庫に到着すると、その建物を庇うかのように自己と同じような黒い鬼がいることを確認したのである。その鬼は巨大なバスタード・ソードを大地に突き立てて、胸部を緑色に輝かせている。なぜか、その鬼は体中が穴だらけで、左腕も無く、満身創痍であるのに随分と立派に大地を踏みつけているのである。

「ここから先へは、一歩も行かせねぇ・・」

ゲイボルグは右腕の人工筋肉、いや、もう鬼の腕そのものと化してしまった生きた腕が通常の何倍にも膨れ上がる。そして、自身の大きさほどもある巨大なバスタード・ソードを大地から引き抜いては右腕だけでそれを振りかぶる。

「俺はもう、何も怖くない」

ゲイボルグは全身からメンタルスフィアの緑色の光をもらしながら、咆哮する。巨大なバスタード・ソードと見合うぐらいの巨大な太い腕が、地面と平行に水平方向に真直ぐ伸びる。

「お前が一緒なら」

ゲイボルグは、もはや存在そのものが兇器と化したような巨大な右腕を後ろにひくと、黒いオーガを目がけて跳んだ。緑の光が残り火のようにゲイボルグの通過点に置かれていく。

「お前さえいれば」

ゲイボルグは巨大な右腕をバスタード・ソードごと、地面に叩きつける。強烈な衝撃波とともに大地が割れる。だが、黒いオーガには当たっていない。そのため、隙だらけとなったゲイボルグの左側へと、黒いオーガは風のように回り込んだ。

「俺はどこへでも飛べる！」

しかし、グレイに隙など無かった。無いはずのゲイボルグの左腕が突然復活していたのだ。ただの人工物にすぎないゲイボルグが自己再生できたのも、鬼の力を得たためであろう。いや、それだけではない。外法の力を借りたグレイは、自分の魂を生贄にもう一本、右のバスタード・ソード並みの巨大な剣をマテリアライズすることまでやってみせたのである。

「お前がいつまでも笑っていられるように」

『・・！！』

そう、完全に隙だらけであったのは黒いオーガであった。ゲイボルグの巨大な剣になぎ払われる。

「お前が寂しくならねぇように」

ゲイボルグは両腕の大剣を構える、敵がひるんでいる今のうちに敵を仕留めるために。脚部を膨張させ、一瞬でバスタード・ソードの間合いに黒いオーガをいれこませてしまうのだ。続いて、両腕を極端に巨大化させるのである。

「この街を・・」

ゲイボルグの右腕により放たれた一撃。黒い鬼の左腕をぶった切る。それに続く左の一撃。しかしながら、これは、黒いオーガが丹精をこめて創った、濃密な闇の壁の前に阻まれる。さらに、グレイはとどめとして叩き込んだ一撃で敵を仕留めきれなかったため、黒いオーガにその反撃を許してしまう。

すなわち、黒の鬼に纏まりつく漆黒の闇は一層強くなったのである。何処へまでもほとばしってくる濃密な殺気は威圧感にさえ感じられる。そして間もなくして、ゲイボルグの周辺の空気が全てどす黒くなる。これはまるで、横浜に偏在するすべての闇を、結集しているのではないかと思われるほどである。同時に、死者たちの呻きや渇望が、心へ鈍く響くのである。

そして、あの鬼に閉じ込められていた闇の巨剣が解き放たれる。グレイは、ジェット・エンジンを用いて上空に飛翔する。だが、鬼はゲイボルグを逃がさない。黒い鬼はほんの少しだけ剣を上に立てるだけでゲイボルグを滅することができるのだから。

「これ以上・・」

ゲイボルグは闇の巨剣にのまれる。脚部の先端部分からその構成力を枯渇させられていく。からからになり、ボロボロになり、何もかもが死んだ世界の灰となっていくのである。だが、グレイは、ゲイボルグの全身が闇に包まれる前に上空へ逃げることができた。すると、急に闇が消滅する。

「・・・！！」

黒のオーガは速かった。完全に読まれていた。もう避けられない。
ゲイボルグはほとんどぼろきれの様な下半身と上半身を切断される。
次に、右腕も切断される。さらには、左腕も切断される。すると、
ゲイボルグはばらばらと墜落していった。

「マコ・・・。俺も、今から逝くよ。ずっと、お前の隣に・・・」

（二）

ナインは、消えてしまいそうな意識の中で、声を聞いた。なんだか
それは、自己の魂を引っ張るような声である。

『助けて・・・』

声の主はとても小さな声で、しかし、必死にナインに語りかけよう
としていた。

（俺・・助ける・・何を・・）

『・兄・・・を助けて・・・』

ふと、ナインの目の前にはとある光景が現れたのである。どこであ
ろうか、横浜か。倉庫があって、その付近にゲイボルグがバラバラ
にされて落ちている。その上には、おぞましいとさえ思えるほどの
闇を纏った黒いオーガ。見たことのないタイプの鬼である。

（あれは・・グレイ？）

ゲイボルグは手も足も失い、もう動くことはできない。しかし、兇悪さを滲み出している黒きオーガは確実にグレイもろともゲイボルグの息の根を止めようとしていた。

『このま・・お兄・・が死・・・』

声の主はおそらく、泣いていた。でも、ナインはどうしようもなかった。身体を動かすことすらできなかったためである。

『私・・魂を使・・・。・・ちゃん・・助・・』

それは、願いである。きれいで、純粋な光のような願い。その時、ナインの目の前は強い緑色の輝きに溢れていた。すると、酷く疲弊していたナインの心が充ちていく感じがした。ナインは、自己の魂が気力に満ち溢れてきていた。もはや、深く深海に沈んでいた意識が急激に上昇し、すぐにでも目覚めることができるほどの意識レヴェルまで回復する。

（そうだ・・急いで、グレイのところへ・・・）

ナインはこの光景がある場所へ赴くことだけを意識した。世界は再びナインと融合するのである。仲間を助けるために。

（三）

黒いオーガは、再び地に降り立った。今度は、ゲイボルグに止めをさすために。ゲイボルグはもう動くことはほとんど不可能であったが、鬼と機械の折衷的存在であるゲイボルグが気に入らないのであろう、黒いオーガは躊躇しない。瞬く間に切断された左腕を自己再生し、そのうえ右手に、闇を元素としてマテリアライズした黒塗りの剣を手にする。

「・・・」

しかし、止めをさそうとした腕に力が入らない。

「ナインの・・鬼？」

グレイは、燃え盛る焔のような怒りの塊をみた。黒い鬼の後ろにはいつの間にかナインの鬼がいたのだ。おそらく、赤鬼のときのように虚物化を応用した空間移動であると思われる。

ぼと。

黒いオーガの右腕は切り落とされていた。しかし、黒い鬼はひるまない。すかさず、背後にいる敵に上段回し蹴りを放つ。

「無駄だ」

だが、攻撃が命中する寸前、ナインの鬼における攻撃命中部分だけが虚物となり、消滅。そのまま回し蹴りは空を切る。その後、再び実物に戻ると、黒い鬼の首を掴み、大地へ叩きつけた。

「・・・」

黒い鬼は、全身の闇を胸部に集中させる。どうやら至近距離から闇の巨剣で吹き飛ばしてしまうつもりらしい。これなら虚物であろうが何であろうが、跡形も無く死の灰へと分解されるのだ。敵は首を押さえつけたことで動きを封じたと安心しきっているはずである。

したがって、これを避けることは不可能。

闇が放たれる。

『ありがとう』

『お兄ちゃんをお願いします』

ナインは、一切の闇を払い去るほどの眩しすぎる少女の微笑みを見た。

闇の剣が空を切り裂いた。

「グレイ！！お前は、こんなところで死ぬんじゃねぇ！！お前の守りたいものは何だ！！」

ナインは叫んだ。自分を助けてくれた少女のただひとつの願いをかなえるために。

「お前たちは死なせねぇぇぇ！！」

プロトオーガが、その心を強く輝かせる。

『外法属性反射シールド、展開します』

突如、ナインの全身を覆うように虹色の壁が現れる。

外法属性反射シールドとは、当該攻撃方式の攻撃能力を排斥し、それを相手にはじき返す、外法の盾。そのうえで、排斥した攻撃方式の攻撃力を攻撃側に与えるのだ。それを念頭に置いた上で、闇の剣は外法属性攻撃方式である。この規則にしたがい、黒い鬼の放射した闇の剣が外法属性反射シールドにあたったことで要件を充たし、その効果として黒い鬼の闇の剣が還ってくる。

『！！！！』

つまるところ、黒い鬼が地面に叩きつけられたまま、そのすぐ上にいたナインは、闇の剣の直前に、外法反射シールドを展開していた。

闇の巨剣は、地面とシールドとのほんの数メートルの空間の中で、本来1キロメートルほどの大きさがあるにもかかわらず、何処へも放出できないので行き場を失い、超高密度の暗黒の牢獄となる。黒い鬼はそこから逃げることすらできず、それに埋もれていった。この闇の巨剣は威力が大きいだけに、反射によるダメージはきわめて大きいものとなる。そして、この闇はふれたもの全ての構成力ないし結合力を奪い、分解する力。黒い鬼は自らの闇の中に、その身を粉々に砕かれていったのである。

闇は、その源を絶たれたため、次第に消えていき、後には瓦礫ひとつ残らなかった。

「グレイ！」

ナインは、グレイの下へ駆け寄る。

「マコ・・、何でまた俺の前から消えちまうんだよ・・。ずっと、ずっと一緒だって言っただろ？お前が消えることなんてなかったんだ、今も昔も」

「グレイ・・・」

「俺が守ってやれなかった」

グレイは、極めて気の強いほうの人間であるが、声を聞いただけでわかる。ぐしゃぐしゃに泣いていた。ナインは、こういう場合にどういう対応をするのが最善であるかわからなかったが、少なくとも泣いていることには触れないこととした。

「お前の妹と話をした、メンタルスフィアを通して」

「・・・」

グレイは応えない。おそらく妹は無念のうちに滅して逝ったとでも

考えているのであろうか。苦しみのうちに逝ったとでも考えているのであろうか。

「最後は、ちゃんと笑っていたよ」

「・・・」

グレイの涙が、一瞬、止まった気がした。

「グレイをよろしくって、そして、お前の無事を喜んでいた」

そして、グレイの涙は再び止め処なく流れ出すのである。

「あいつは、いつもそうだった。病気がちで、なんにも楽しいことなんて知らないんだよ。だから、一番苦しいはずなのに、俺の心配ばかりして死んじまったんだ。こんなダメな兄貴なのに・・。もっと、自分の心配でもすりゃいいのに・・・」

「・・・」

ナインは応えなかった。お前は立派な兄貴だ、と言いたいところだが、ナインがこれを言っても仕方ない。

「ナイン・・、俺は戦う。あいつが守った俺の命と、このゲイボルグで」

グレイの涙はいつの間にか止まっていた。そして、手足を失った格好のつかないゲイボルグの中で、グレイは最高に格好いい兄としての決意を述べるのである。

（四）

暫くすると、仲間たちがナインとグレイのところへ駆け寄ってきた。

「グレイぃー！」
「ナイン君！」

ナインとグレイはそれぞれの機体から降りて、皆と無事の再会を待っていた。

「ほんとに、ナイン君も目を覚まさないし、見たこともない鬼がでてくるし、もう生きて還れないと思ったわ。とにかく、ふたりともご苦労様」

弥生遼子が柄にもなく、ふたりをまとめて抱きしめた。

「社長、ちょっと恥ずいっすよ・・」

グレイは小麦色の肌をやや赤く染める。

「それとグレイ、あんたは無茶しすぎよ。今回は無事だったからいいものの・・」

弥生は改めて一歩後退して、グレイを細い目で凝視した。

「すいません、社長。以後、気をつけます」

弥生は、あのグレイが素直に反省の言葉を述べたため、少々面食らったが、何か彼に重大な心境の変化があったのだろうと、ため息をつくことで許してやった。

「それにしても、あんたぶっ飛んだこと思いついたわねぇ。これどうすんのよ？」

弥生は、ばらばらになったゲイボルグをちらちら見ては憂鬱そうに言うのである。

「このゲイボルグは、あいつが守ってくれた俺の剣です。俺はこいつと一生付き合っていくつもりです」

グレイは、輝きの衰えないゲイボルグのメンタルスフィアを見つめながら、自らの決意をいう。きっと、彼はそこに妹の姿をみているのだろう。

「ん、『あいつ』？」

弥生は怪訝そうな顔をした。

「ゲイボルグに住み着いていた、俺の守り神・・っすかね」

弥生はグレイの言っていることがいまいち、呑み込めなかった。しかし、グレイはそれでよかった。この広い世界に自分さえそれを理解していれば事足りるからである。

「まぁいいわ。とにかく、近いうちにゲイボルグをあんたの実家に持っていきましょう。そこで修理しないことには、ゲイボルグも使えないからね」

「了解」

グレイはゲイボルグのためならどんな命令にも従うので扱いやすい。

「あと、ナイン。あんたも大丈夫なの？」

「えぇ、大丈夫です。心配かけて、すいませんでした」

ナインは頭を下げた。自分のせいで皆を危険に曝したことを申し訳なく思っていたためであった。

「何、頭下げてんのよ、ばか」

弥生は笑いながら言う。ということは、頭を上げろということなのだろう。

「でも、本当によかった」

詩季は涙を少しだけ浮かべていう。

「ふふ、しーちゃん。ずっと、ナインさんの・・・」

詩季は、有無を言わさずにまもるの口を塞いだ。だが、まもるの言わんとしていることはナインにもよくわかっていた。ナインは魂の彼岸の中で、彼を必死に呼び続けていた声を聞いていたのだ。今思えば、あれは詩季の声だったのだろう。

「ありがとう、詩季」

ナインは心からの感謝の気持ちを表す。

「そ、そんな、大したことなんてしてないって・・」

照れくさいのか、詩季は必死でごまかそうとしていた。

「そうそう、しーちゃんはずっと、ナインさんの手をにぎ・・・」

まもるが、詩季のいう『大したこと』の内容を人指し指を立てて説明しようとしたところ、再び口を塞がれる。それにしても、まもるは攻める時は攻めるタイプなのだ、とナインは感心していた。

「アタシは、せんぱいは必ず生きて還ってくると思いましたがね」

そんな口の塞ぎあいをしているふたりをよそに、辰巳がナインの前に現れる。

「辰巳、お前こそ大丈夫か？」

ナインは、間近で辰巳が赤鬼の強烈な精神攻撃を食らっているのを見ていたことを思い出す。

「ええ。みんなが、アタシを守ってくれたから、心がやられなくて済んだのかな」

辰巳はそこで口論をしているふたりの少女を含めて、皆をみつめるのである。

「え～、ゴホン。少しよろしいかな」

すると突然、和やかな空気を引き裂くかのように聞き慣れない人間の声がした。声の方を振り向くと、軍の将校らしき中年男性、小田原が立っていた。近くにいた弥生の表情が一気に陰る。

「いやぁ、先ほどの戦いを見させていただいた。非常に素晴らしい戦闘能力だ」

小田原はひとり拍手をしながらナインの近くまでのし歩いて来る。

「申し遅れた。私は防衛省の小田原次官である」

弥生はちゃんと『補』をつけろと思った。

「君かね、この鬼の搭乗者とは？」

小田原はナインを見て質問する。後ろで、弥生がごめんのジェスチャーをしているようだ。どうやら、ナインがこれを処理するほかないらしい。おそらく、本件の一部始終は見られているであろうから、嘘をついても無駄であろう。

「えぇ、まぁ」

「やはり！あなたはまさに日本国の救世主！どうか、どうか私ども防衛省に是非ともそのお力をお貸しいただきたいのです！」

小田原は急に腰を低くし、頭を何度も下げ、ナインに頼み込む。

「あの、一体？」

ナインは状況がよく読めず、弥生のほうを見る。『コ』『ト』『ワ』『レ』そのように弥生の口が動いたように思えた。

「どうか、お願いいたします」

小田原は将校のような偉そうな風体にもかかわらず、土下座まで始める始末である。ナインはこういう人間の態度に弱いようで、彼の意思を制圧するには十分すぎる方法であり、小田原がナインに対してとった行動は恐喝に近かった。

「もう少し、考える時間をくれませんか」

その時、後ろにいた弥生はナインのはっきりしない態度にがっかりしていた。他方、小田原は土下座していて、その表情は明らかでないが、笑いは隠せなかったであろう。

この時、東京陸運保険機構のそれぞれは自分の周りの環境が大きく変わるような予感をせずにはいられなかったが、具体的にどう変わっていくのかまでは全く読めず、不安を募らせていくのであった。

そう、赤鬼の破壊にはじまり、プロトオーガの虚物化、ならびに新たな鬼、『黒鬼』の出現により、事態は一介の公益社団法人では到底収まりきらないところまで来てしまったのである。しかし、これは世界の変革の予兆に過ぎないのだ。

第１８話の２　本当は保険屋（前書き）

今回は、本編には直接関係しないサブストーリーです。

第１８話の２　本当は保険屋

―東京陸運保険機構事務所―

「ですから、こちらの保険契約書に記載されていますように、弊社が扱っている保険事故は巨大動物災害に限られております。もっとも、通常の損害保険にもご加入されるのであれば、保険料は１０パーセント引きで一本化できる保険商品もございます」

ナインは、顧客である運送会社の男に対してパンフレットを片手に契約書の内容を説明していた。相手方の中年男は、複雑な料金体系とにらみ合いをしつつ、少しでも保険料を値切ろうと頭を抱えているようだ。

ところで、なぜナインがこのような仕事をしているのかといえば、機構の主たる事業である保険事業において人手が足らず、暇なこの男が狩り出されたためである。しかも、さらに理不尽なことに、弥生遼子が2時間で数十枚とある契約条項を頭に叩き込むように指示し、タイムアップとなると直ちに彼は実務へと放り込まれたのである。

しかしながら、意外にもけちな顧客と対等に渡り合えることに、彼は奇跡を感じていた。もしかしたら、記憶を失う前、彼は保険屋に勤めていたのかもしれない。

「うちは、おたくの運送保険にも加入しているんですよ。もう少しまけていただいてもいいんじゃないですかね？」

「さすがにこれ以上は譲歩できませんよ。この時点で、本来の保険料の３割引きなんですから。しかも、この現在価格でさえ、民間の保険屋ではここまで安くはなりませんから。これはいい買い物だと思いますけどね。年間たったの１６万円で、事故発生時の損害が全

額填補されるんですから。御社さんですと、仮に事故を起こした時、いったいどれほどの賠償責任を負うんでしょうかね」

「う～ん。たしかになぁ」

顧客の男は、頭を１８０度ほどかしげて悩みに悩みぬいているようだ。現に、この客は紙に穴が開くほど契約書をにらみつけているが、どうにも結論が出ないようである。

それにしても保険屋とは、見た目ほどにマジメな商売ではない。いま自分がしていることは、客の窮地につけこみ、危機を煽り、商品を売りつけ、保険料をむさぼるのであるから、詐欺や恐喝に近い。もっとも、ちゃんと資格のある保険屋であればこのようなことはしないであろうが・・。なにせ、状況が状況であるからやむをえない。自分にはこのようなやり方しかできないのである。

「わかりました。買いましょう・・・」

散々悩み続けた結果、客の男は遂に観念したようだ。男はなんだか、吹っ切れたように強張っていた肩の筋肉をほぐした。そして、そのあと、彼は晴れ晴れとしたからっからの表情で、契約書に力強く署名押印したのであった。

（二）

「ありがとうございましたぁ」

客がようやく帰っていくのを見送ると、しばらくして、弥生遼子がインスタントコーヒーを煎れて、ナインにカップを渡してくれた。

「ナイン。あなた、けっこうやるわね。もしかして、同業者だったとか？」

「それ、ほめているんですか?ずっとお客さん騙している気がして、気が気じゃありませんでしたよ」

弥生からカップを受け取り、ナインは熱いコーヒーを少しだけすすった。インスタント特有の安っぽい渋みが口の中に広がる。

「それは騙してるんじゃなくて、駆け引きっていうの。営利目的である以上、多少詐欺まがいのことも当然必要なんだから。私なんて、もっとひどいこと、しょっちゅうやってるわよ。それに、客だって説明事項を隠すためにいろんな汚い手を使ってるんだから、おあいこよ」

「そういうものですかね?」

「そういうものなの!この世界、クソ真面目なやつほど生きていけないわよ」

ナインは、やたらと渋いコーヒーを再びすすった。

「それで、ナイン。コーヒー飲んだら、この書類持って町田駅で佐伯さんっている弁護士を拾ってきて。多分、そろそろ彼、駅に着いてる頃だから」

そういって、弥生は、まだコーヒーを飲んでまったりとしているナインに、書類の束を渡そうとした。

「弁護士って、何かあったんですか?」

ナインは、書類を受け取らず、怪訝な表情を浮かべる。

「あのね、この前保険金請求してきた奴が、どうも保険金詐欺の疑いが濃厚なのよ。それで、話がこじれていくうちに訴訟になっちゃ

ってね。だから、はい」

弥生は、書類を押し付けるように彼に差し出した。

「はあ・・・」

まだ休みたいのにと思いながらも、ナインは彼女から分厚い書類を、渋々受け取った。

「こんな、訴訟までやるものなんでしょうか？払ってしまえばいいじゃないですか。どうせ、弁護士費用も訴訟費用も馬鹿にならないんでしょう？」

「保険屋たるもの、勧誘する時は丁寧かつ優しくが基本だけど、払う時となれば別よ。なめられたら、割のいい保険屋と思われて、変なやつばっかり契約しにきちゃうからね。だから、少しでも保険金支払額を下げるために、いかなる手でも尽くさないとダメなの。それがたとえ、損だとわかっていてもね」

弥生は、人差し指を立てて、すばらしき保険屋の理念を語り始める。

「それ、保険屋としてはともかく、人としては最低ではありませんか？」

「最低って、聞き捨てならないじゃない。あ・・・てか、ほら。もう佐伯さん来てるんだから、いつまでもコーヒーなんて飲んでないで、さっさと迎えにいってきなさい」

弥生は、少し大人げなかったと反省しつつ、ナインに対して、離席を促す。

「はいはい、わかりました」

「はいは一回よ」

ナインは、弥生に尻を叩かれるように追いやられ、彼は手にしていたコーヒーを机の上に置いて慌ててドアノブに手をかけた。

「あと、佐伯さんとの用事が終わったら、帰り際に東流運送の社長のところに行って、トラックの車検証のコピーをもらってきてもらえる?あそこ、トラックの故障を隠している疑いがあってね。義務違反を暴いてやるのよ」

「はいはい・・・」

ナインはため息をつきながら、気のない返事をした。

ちなみに、これらの雑務はすべて弥生遼子代表理事直属秘書の田中愛がすべき業務なのであるが、毎日こんなことをしていて気が狂わないのかと思う。

そのため、ナインは、あの秘書をこれからは尊敬のまなざしで見つめていこうと思うのであった。

第19話　サヨナラ

―東京陸運保険機構事務所―

赤鬼討伐作戦があった日の3日後である。ナインは仮眠室で自己の去就を未だ決めかねていた。

もちろん、この3日間で、小田原次官補は執拗にナインに対して防衛省に来るよう幾度となく働きかけてきた。時には、『娘です』とか言って、まだ幼い少女を事務所に連れてきては、『この子の未来のためにも』とか言って泣き落としの作戦に入るのである。終いには、まだ拙い字で書かれた『おてがみ』まで送られる始末である。

そこには当然、小田原の娘なる少女の切なる願いが記載されていた。

ナインは、いたいけな少女の気持ちまでを利用する小田原のことは完全に嫌っていたが、自分の力が各方面から求められていることは事実である。あまり、世界のためとか、そういった大層な理念を掲げるようなことはしたくなかったが、日々、鬼に襲われかねない状況の中でびくびくとしている子どもたちを助けてやりたいという気持ちもないわけではない。

ふと、その時、仮眠室の扉が開く。

「まだ悩んでんのね」

弥生遼子であった。ナインが本も読まずにただぼうっとしている様子を察した彼女は、ナインが思いをめぐらしているということを直感したのである。

「そりゃ、悩みますよ」

「あんたがきっぱりと断らないからよ。あいつは可能性がある限り、どんな手でも使ってくるわ」

弥生は、壁に寄りかかり、大きくため息をついた。ちなみに、『あいつ』とはもちろん、小田原のことである。

「すいません・・」

「まぁ、あんたは甘いからね」

弥生は、もう仕方ないか、とでも言うようにボソッと言う。
「どうすればいいんだろうな・・」
弥生は応えない。代わりに、胸元からタバコを取り出しては火を点ける。
「うちはあんたがいなくても何とかなるわよ。人材の取引ってわけじゃないけど、ナインがうちから防衛省に行けば、対価として莫大な金が入るみたいだし」
弥生はそういって、煙をすぅーっとはく。
「でも、正直心配なんですよ。あの黒い鬼がまた出てきたらと思うと」
ナインはそういうと、弥生はナインを細い目でにらみつけた。
「私たちの心配なんていいの。あんたは今、自分がどうしたいのかをしっかりと見極めて、それを選択しなさい」
「自分のやりたいことですか・・」
「それに、あんたが防衛省に行ったからって2度と会えなくなるわけじゃない。一緒に仕事をすることもあるだろうし、プロトオーガならすぐにここへ来れるでしょ」
そういって、弥生は深くタバコを吸う。
「たしかに・・」
そう、たとえ何処にいようとも虚物化すれば、ナインは一瞬でここへ戻ることができるのである。
「とにかく、明日もあのハゲがくると思うから、そこで白黒はっきりしてもらうからね。もうあのハゲを見るの、我慢ならないのよ」
そういって、弥生はタバコを灰皿に押し付けた。
「わかりました」
それを聞くと、弥生は行ってしまった。
（詩季、俺はどうすべきなんだろう）
その頃、詩季は自分の部屋にいた。彼女は親元を離れて、安い事務所近くのマンションの一室を借りていたのである。盲人である彼女

が比較的危険な町田に住むのは不合理とも思えるが、防衛能力の高い事務所が近くにあるのでそこまで危険というわけではなく、存外、最善の選択なのかもしれない。

「・・・」

詩季は、点字の書物をその触覚で解読するのである。これに慣れてくると、案外、目で追うよりも速く本が読めたりするのだ。ただ、点字の本は分厚くて、扱いづらいという欠点がある。

その時、きゅうすけが、走ってくる気配がした。口にはブルブルと振動する携帯電話がくわえられている。

「きゅうちゃん、ありがとう」

詩季は、本を置き、きゅうすけから携帯電話を受け取る。

「はぁい、もしもし」

『詩季、ナインだけど、今からちょっと会えないか』

「ナイン君？」

詩季には電話の向こうのナインの口調が、どこかおどろおどろしく感じられた。そのため、彼女は、ナインに何かあったのだろうと具体的にではないが、嫌な予感をせずにはいられなかった。

「おじゃまします」

ナインから連絡があった後、暫くしてナインが詩季の部屋にやってきた。玄関では詩季ときゅうすけが出迎えてくれた。

「ごめんね、うちまで来てもらっちゃって」

「いや、近いから大丈夫」

詩季の部屋は、およそ事務所から歩いて3分のところにある。むしろ、エレベータを待っている時間の方が長いのではないかと思うくらい近かったのだ。

「あ、とりあえず上がって」

詩季はＬＤＫのやや小さな部屋の奥へと行ってしまった。ナインも靴を脱ぎ、それに続く。

「何にもないけど、気にしないで」

彼女が言うとおり、詩季の部屋は白一色の家具で統一されていた。絵画や花、写真といった、目で見て楽しむようなものは一切存在しない。寝るところと、本棚、机など、必要最低限のものしかないのだ。無論、テレビのようなものも取り払われているのである。それは、彼女には物の色などを感じることができないからであろう。それにしても、病棟のような冷たい感じのする部屋なのである。

「立ってないで座ったら？いまお茶煎れるから」

詩季はキッチンの方へ向かう。

「そんなの俺やるって・・」

「大丈夫よ、これくらい。毎日やってるから」

キッチンの方で、食器のぶつかる音がするが、彼女の意思を尊重し、ナインはその場に座り込む。

「それより、はなしって？」

蛇口をひねったのか、水がシンクにはねる音がする。

「ああ、防衛省への転職の件だよ。どうしようかなって思って」

「どうするもこうするも、ナイン君がしたいようにすればいいんじゃない？」

詩季は茶の用意をしながら、淡々と弥生と同じようなことを言う。

「そりゃそうだけど」

「だから、大事なのはナイン君の気持ちなんじゃないかな」

「俺の気持ちか・・」

ナインは天井を見ながら、自分の考えを整理する。防衛省に行けば、当然に今よりも多くの鬼と戦う機会が増えるであろう。また、日本全国をまわり、様々な地域で自分の力を活かすこともできるようになる。こういった社会貢献も、ナインは嫌いではなかった。しかも、これはおそらく自分にしかなしえないことでもある。

「俺は、防衛省に行くべきなのかもしれない。もっと、自分の力を有効に使わなければいけないんだと思う」

「じゃあ、そのとおりにすればいいんじゃない」

詩季はやはり淡々と言葉を続けた。

「でも、詩季を置いていけない。詩季が心配なんだ。詩季が行くなと言うなら、俺はここに残る」
ナインがこのように言うと、詩季の手元がいったん止まったようだ。しかし、すぐに食器のぶつかる音が聞こえ始め、言葉を続ける。
「私は大丈夫。それに、みんなだっているし。ナイン君が心配することはないよ」
「そうは言ってもさ・・・」
「じゃあ、どう言えばいいのよ?」
詩季の口調が急に強くなった。
「どういえばって、俺はただ詩季が心配で・・」
「私を、お荷物みたいに言うのはやめてよ・・」
詩季は震えるような口調でそういったため、ナインは動揺を隠せなかった。彼は、詩季を怒らせてしまったのか、と思い彼女の表情を覗うも、詩季は下を向いていて表情はわからない。
「詩季・・?」
「私、ナイン君の足を引っ張ってばかりだからさ・・。あなたの足かせになるのは、イヤなの・・」
「詩季・・、俺はそんな・・」
「だって、そうでしょ。私もみんなみたいにもっと強かったら、ナイン君は迷わずに行けたはずだもの。私なんて、お荷物なんでしょ」
「・・・・」
防衛省へ行くべきだが、詩季が心配だから行けないというナインの論理によれば、詩季の指摘はもっともだった。だから、ナインは何も言い返せなかった。
「ごめんなさい。今日はもう帰ってもらえる」
詩季は相変わらず下を向いたまま、途切れそうな声で言った。ナインは、何も考えることができず、言われるがままに、ただ立ち上がり、玄関の方へ向かう。
「おじゃま・・しました・・」
ナインが玄関の扉を閉める音を聞くと、詩季は我慢していた涙を流

した。もう、ナインには甘えないと決めたのだ。でないと、自分に対して甘いナインはどんどんと落ちぶれていってしまう。しかしながら、ナインがそのようにくすぶっていて良いはずがない。もっと多くの人々のために彼はより広い舞台へ旅立つ必要がある。にもかかわらず、自分が存在するために、せっかくのナインの晴れ舞台を台無しにするのは我慢ならなかった。

「ナイン君・・」

詩季は、ナインが意識を失った時、自分のナインに対する感情をはっきり認識した。彼を愛してしまっているのだ。故に、詩季は愛する者の邪魔をすることだけはできなかったのだ。

「ごめんなさい・・」

しかし、自分のした選択が最もナインのためであると思いながらも、詩季の涙は止まらなかった。ナインとは離れたくないという甘すぎる自分もいたからである。いや、終わってみて考えると、自分の中の多数意見はどちらかといえば後者であったと思われる。本当はナインに対して、ロマンチックな発言を期待していたのだ。しかしながら、理性と感情の葛藤は、自分が素直になれなかったうえ、正面きってナインの防衛省への異動を妨害するようなこともできなかったため、かろうじて理性が勝ったのであった。そして、負けた感情の方はその行き場をなくし、止まらぬ涙となって溢れ出るのである。また、詩季はこんな時にふと、『いつか』のデートの約束まで思い出したため、虚無感が一層残った。

詩季の手元には、煎れかけの湯飲みがそのままふたつ、並んでいた。

「くぅん」

そんな主人の悲しい気持ちを察したのか、忠犬きゅうすけは、詩季の足元に寄り添ってきては、彼女を慰めていた。

その翌日、弥生遼子の下には一通の退職届が提出された。もちろん、これを届け出たのはナインである。弥生がこれを受理すると、ナインは公益社団法人　東京陸運保険機構を正式に脱退するのであった。

はかないほどの短い期間であった。

附録　外法学入門（前書き）

本章は、物語と直接関係はありませんが、読者様が本編をよりよく理解できるよう、専門用語の解説を載せました。今後、専門用語が当然のように使用されますので、ひととおり目を通して頂くことをお勧めいたします。

附録　外法学入門

今日は、事務所の会議室に従業員の一同が集まり、弥生遼子による『外法学入門講義』が行われていた。

「社長、これマジでやるんすか？」

「アタシ、勉強は無理っすよぉ」

辰巳とグレイはそういって、だらだらと机にへばりついてしまった。

「今から教える知識は、あんたたちがこれから上級の鬼と戦っていくうえで必要不可欠だから、やんないとダメよ。まあ、死にたいのなら別だけど」

「はぁい、わかりましたぁ」

辰巳は、だらしなく返事した。

「じゃあ、さっき配ったテキストの3ページ目を開いてもらえる」

弥生がそういうと皆、該当ページを開く。そこにはこのような記述があった。

1　物理と外法

物理とは、物理法則が適用されるものをいう。これに対して、外法とは、物理法則を無視し、外法規則が適用されるものをいう。

両者の区別は、属性の区別において重要である。

2　実物と虚物

実物とは、現実に存在するもの一切のことをいう。平たく言え

ば、実体があるものを実物という。

これに対して、虚物とは、実体として現実に存在しないものと定義する見解もあったが、虚物には可視的なものや、触覚で認識できるものもあるので、この見解によると虚物に含めることのできない領域が生じてしまう。そこで、積極的に定義することは不可能であるとして、虚物を実物でないものと消極的に定義する消極説が通説である。

この2者の分類は、後述の属性とならんで、攻撃能力や防禦能力にかかわってくる。

3　属性

属性とは、対象へ攻撃をいかに到達させるのか、という手段に着目した分類である。

属性には、『物理属性』と『外法属性』がある。

物理属性は、物理法則にしたがった攻撃手段のことである。他方、外法属性とは、外法規則にしたがった攻撃手段のことである。

したがって、一見、魔法のような攻撃手段であっても、それが物理法則にしたがってなされる限り、それは物理属性である。その逆も然りである。

なお、属性とは、実物や虚物よりも下位の概念であり、実物にもかかわらず外法属性ということも当然にありうる。

4　方法

方法とは、攻撃にいかなる効果を付するかという、効果に着目した分類である。

現実には、人をナイフで刺せば傷害あるいは死という効果が当然に生じるのであるが、外法学においてはそのような常識的な結論が生じるとは必ずしもいえない。たとえば、人をナイフで刺しても、病気が治るとか、ノイローゼになるとか、ここでは当然にありうる結論である。すなわち、ナイフで刺すという行為は属性に関わる領

域であるのに対し、傷害ないし死亡という結果は方法の領域であって、両者を考えるにあたっては、完全に論理法則や因果関係を切断して考えねばならない。だからこそここで、『方法』として、効果を独立に論じる必要があるのである。

方法には、『物理方法』と『精神方法』がある。もっとも、客観方法と主観方法と呼んでもよい。

物理方法は、物的なものに対する攻撃方法である。これに対して、精神方法とは、心的なものに対する攻撃方法である。精神吸収攻撃は後者に含まれると解される。

5　攻撃の種類

攻撃を構成する要素としては、大きく分けて属性と方法のふたつがある。外法学における攻撃は、必ず何らかの属性と方法に属している。そして、その種類はまず、属性によって分類され、さらに方法によって分類されることにより、その性質が決定される。

そのため、単純に考えて、４通りの種類が存在する。

すなわち、物理属性物理方法攻撃、物理属性精神方法攻撃、外法属性物理方法攻撃、外法属性精神方法攻撃の４つとなる。

6　攻撃能力

攻撃能力とは、攻撃による効果を対象に与え得る、攻撃手段としての資格をいう。

攻撃能力が否定されると、いかに攻撃力が高かろうとも、攻撃を与えることができないで排斥される。これは、攻撃能力が手段にかかわる要件であって、効果発生前の手段の適否の段階で攻撃が排除されてしまうということの帰結である。

攻撃能力を否定する方法としては、各種属性攻撃無効シールド、各種属性攻撃反射シールド、各種属性攻撃吸収シールドなどがある。

このことから、攻撃能力と密接に関係があるのは攻撃の属性であるが、実物による攻撃一切を無効にする対実無効シールド、その

逆の対虚無効シールドなどもある。いずれも属性とは無関係である。

7　攻撃力

攻撃力とは、その攻撃に付された効果のことである。

攻撃能力が認められてはじめて、攻撃の効果として攻撃力が対象に現れる点で、攻撃能力とは混同しないように注意したい。

攻撃力の場合、攻撃能力のようにそれがあるかないかで決せられない。ここは、量の問題である。

攻撃力を減殺する方法としては、各種方法攻撃ガードバリヤがあり、効果を弱めることができる。

「あの、社長」

突然、辰巳が挙手をした。ところが、彼女の目は死にかけているようである。

「はい、なんでしょう」

「全然わからないです」

「わからないじゃなくて、死ぬ気で理解しなさい」

「そんなぁ、こんなの誰も分かりませんって。ねぇ、まもる?」

「え? 私は、よくわかったよ。はるきちゃん、本当に戦うことしかできないんだね」

まもるは、辰巳に対して嫌味ったらしい笑顔をふりまいた。

「まもるのくせに、アタシをコケにするなんざ１００万年早いんだよ!!」

当然に辰巳はぶちぎれて、まもるの胸倉を掴み上下に大きく振った。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

「こら！辰巳春樹、やめなさい」
「ちぇ」
辰巳は、掴んでいたまもるを突き飛ばした上、彼女に対して舌をだした。

「あと、来週にテストをしますが、これで合格点に満たない者は、『あいちゃん』と一緒に残業を無給で手伝っていただきます」

それを聞いた辰巳は、一気に青くなってしまった。完全に血の気が引いてしまい、失神しそうになる。

「マジすか？社長、それだけは勘弁してくださいよ」

辰巳が弥生に泣きついた。

「私は知らないわよ。お友達と協力したら？」

辰巳は、先ほど自己の暴行の対象となった、まもるを見る。

「グレイ、わからないところある？」
「おう、助かるぜ、まもる」

そして、まもるは辰巳をニヤニヤした顔で見ていた。やられた、このアマァァァ。まさに江戸の敵を長崎で討たれたのである。

「まもるさま、私が間違っておりました。どうか、教えを乞いたく存じます」

しかし、背に腹はかえられないと、辰巳はまもるに対して土下座をしたのである。

「しょうがないなぁ、はるきちゃんは。グレイ、どうする？」

この女、なぜそこでグレイに同意を求めるんだ。

「どうすっかな、なんかおごってくれるんじゃね？」

この男も、棚から牡丹餅の分際で、ふざけたことを抜かしやがる。

本当に、こいつら性格最低だ。

「はるきちゃん、おごってくれるんだ。何にしようかな」

おい、おごるなんてひと言も言ってねぇよ。

「５００円までにしてください」

しかし、拒否はできなかった。テストがおわったら、覚えていやがれ。

「おいおい、ワンコインじゃ、せいぜい吉野家がいいところだぜ」

お前、本当に黙れ。このシスコンが。

「でも、あんまり高いところいくとはるきちゃんかわいそうだよ」

金がない辰巳にとって、その発言は助かるが、同時に辰巳が貧乏人ということを前提としている点でむかつく。

「本当に勘弁してください。まもるさま。ごめんなさい」

辰巳は引き続き土下座した。

「うそだよ、はるきちゃん。ほら、みんなでコーラでも飲みながら、勉強しよう」

そういって、まもるは手を差し伸べてくれた。

「まもるさま・・」

辰巳の目には涙が浮かんでいた。ちなみに辰巳は、ココ・コーラが大好きである。このとき、辰巳の目にはまもるが、ココ・コーラに見えていた。

「うん、行こう」

「はい！」

そういって、３人は会議室を出て行って、近くのコンビニへと向かっていった。

「はぁ・・」

最後にひとりのこった、弥生遼子は大きくため息を吐いた。

＞ｉ７５３１―１１９９＜

注：挿絵はゲイボルグ・Ｄです。

第２０話　ネゴシエーション

―？？？―

そこは、どこかの地下であろうか、日の光も全く到達できない暗黒の空間であった。しかし、メンタルスフィアの薄緑色の淡い光が、その空間においては白熱灯のような役割をしていたので、ところどころ様子を窺うことはできる。ただ、その光に照らされているものは全て緑に見えてしまうので、ほとんど黒と緑で支配された怪しい世界なのであった。また、そこは巨大な講堂かなにかであろうか、とんでもなく広い空間がドーム型の円形に広がっており、天井もきわめて高い位置にある。

「我が学徒達よ、よく集まった」

ふと、静寂を破って、ひとりの男の声が講堂の中に響き渡った。

「おはようございます、先生」

まるで小学校の朝礼会のように、何人かの『学徒』と呼ばれる者たちの挨拶が、一斉に講堂に響いた。

「さっそくだが、本題に入ろう。諸君らも周知のとおり、先日、横浜の『ユグドラシル』が破壊されたようだな。偵察に向かわせた『ベルセルク』を通して判明した。もっとも、ベルセルクも帰ってこないことからして、あれも破壊されたというべきか・・」

その広い講堂の中心には、暗くてよくわからないが、なにか巨大なものが鎮座していた。そこからは、淡い薄緑色の光がゆっくりと脈

打つように存在しているのを見て取れる。また、その物体が前に差し出した手のひらの上に、ひとりの男が分厚い本を読みながらくつろいでいるのである。

「はい、先生。ベルセルクの破壊も確認されております。また、ユグドラシルの対実無効シールドを人間の兵器が破ることは不可能です。したがいまして、ユグドラシルを破壊したのは裏切り者の『奴』によるものでしょう」

講堂の中心からみて、北西方向にある薄緑色の輝きを持つ巨大な物体から若い男の声が響いた。

「おいおい、あまり私の友人のことを『奴』などと呼ばないでくれたまえ。君の気持ちもわかるが、彼の意思も尊重してあげる必要もあるだろう」

『先生』と呼ばれる人物は、やさしく甘い声で若い男を諭す。それを聞いた男は、『先生』の気分を害したことを心より反省したのか、地面にへばりつくような体勢になって言う。

「申し訳ありません、先生」

先生は、ひどく自省の念に駆られてしまっている男を一瞥して言う。

「しかしながら、君の言うこともっともだ。ユグドラシルが破壊されるとなると人間の精神をこちらに転送できなくなってしまう。彼の意思を尊重するあまり、ユグドラシルが全て破壊されてしまうというのも本末転倒か」

「先生・・。私たちはいつでも出撃する準備を整えております」

南西の方角から、教養にあふれた青年が極めて腰を低くし、『先生』に申し上げる。無論、その後ろには巨大な物体。

「あの方も、我々とは目的こそ違えど、目指すところは同じであると思っていましたのに、これではただの妨害工作ですね」

北東の方角からも、高貴な少女の高い声が響く。この少女もまた、メンタルスフィアが輝く巨大なモノを背にしていた。

「先生、いかがいたしましょう？お申し付けがあれば、私が直ちに彼を始末しに参りますが・・」

「そうだな、彼には悪いが、あまりに我々の邪魔ばかりするのであれば、死んでもらわねばならないな」

中心にいる『先生』と呼ばれる男は、そういって、本をぱたりと閉じ、ゆっくりと立ち上がった。

「先生、そのお役目は是非わたくしめが」

「いぇ、わたくしこそが」

「何を。貴様らではなく、わたくしこそが相応しい」

四方から、我こそはという名乗り上げがすさまじく、暗い静寂に包まれていた講堂はバーゲンセールの会場のように怒号の飛び交う修羅場と化した。また、広い空間であるだけに、大きな音はただでさえよく響くのである。

「静粛にせよ」

たまりかねた『先生』は、子弟たちにそう告げた。すると、合戦場ではないかと思うぐらいの喧騒は、すぐに静まった。

「皆でかかればよい」

『先生』は尋常でない殺気を講堂全体にふりまき、静かにそういった。

「彼ははからずも私の友人だからな。君達が単独でかかるならば返り討ちに遭う可能性もある。であるから、皆で行き、徹底的にあぶり出し、追い詰めて殺せ」

「はい、先生」

子弟達はそれぞれの位置で跪き、自らが受けた命の重圧をひしひしと感じて、頭を上げることすらできずにいた。

「それと、彼は殺してもよいが、彼の『アニミスト』は取り返さねばならない。『アニミスト』は絶対不可欠というべきものではないが、あれの有無は我々の命題遂行に大きく関わるからな。したがって、完全にあれを破壊することは避けるのだ」

「わかりました、先生」

子弟達に、再びことばの重圧がのしかかる。彼らは未だ、頭を上げることすらできずにいる。

「では、わが学徒達よ、行くがよい」

『先生』は細長い右腕をなぎ払い、声高に命じた。

「はい。朗報をご期待ください」

そう言うと、講堂の全体に散らばっていた巨大な物体は次々と厳か

に消えていった。それによって、いくつかあった緑色の光が消え、講堂の中は極端に暗くなる。ただ、講堂の中心に一点だけ光源が残っていた。

（君はなぜ今になって、私の邪魔をしようとする。かつて、君が切望した世界がもう目の前にあるというのに。なぜだ）

『先生』は悲しい目をして、唯ひとつ残された淡い一筋の光を見つめ続けていた。

（二）

―多摩地区―

弥生遼子とグレイこと黒井珀は、東京都の西端にある多摩地区を訪れていた。なぜ、彼女らがここにいるかというと、目的はいろいろとあるのだが、大掴み的に言うとＢｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社の代表取締役会長と会うためであった。

かつて、Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社は東京の大オフィス街、大手町にそれは巨大なビルを所有していたのであるが、なんせこのご時勢である。あの付近のビル街は、徹底的に鬼に破壊され、同社は比較的安全な多摩地区を本拠とすることにしたのであった。ちなみに、現在ではこういった選択をやむを得ずにとることとなった企業は極めて多く、過密都市と過疎地域の逆転事象が起きつつあるのだ。たとえば、東京の山手線内側など、ほとんど人が住んでおらず、逆に山梨県や福島県などの地方に異常な人口の過密状態が生じてしまっている。

Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社の本社ビルは、小田急多摩センターのにぎやかなビル街にあり、その中で最も背の高いのが、今からふたりが

立ち入ろうとしているビルであった。それは、太陽の光をガラス張りの壁面に一身に受け、光の反射によりきらきらと輝いているのである。また、見下されるように立っている辺りの背の低いビルも、その光の恩恵を受けて輝いていた。

「それにしても、すごいビルね。うちとは比べ物になんないわ」

弥生は、平べったい自分の事務所と比較して、その格の違いを感じ、内心緊張が生まれていた。

「ここに来るのも久しぶりだな」

グレイも天へと伸びる巨大なビルを見上げては、頭の上がらない父親の顔でも思い出しているのか、息を呑むのである。

「あんた、別について来なくてもよかったのよ。ゲイボルグ盗んできたんじゃ、怒られるの目に見えてるでしょうに・・」

弥生は眉をしかめながらいった。正直なところ、商談中に親子喧嘩でも勃発して、交渉決裂にでもなったらと思うと笑えないのだ。

「まあ、そういったところも清算するためですよ」

グレイはビルの天辺を見上げながら、腹をくくったような表情でそういった。そんなグレイの表情を見た彼女も、グレイにつられて腹をくくったような気分になり、なんとなく落ち着いてきた。

「わかったわ。じゃあ、行きましょ」

ふたりは、弥生を先頭にして、グレイを引き連れるような形で、B

ｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社本社ビルのエントランスゲートへと向かった。

（三）

Ｂｌａｃｋ　ｗｅｌｌ社のロビーに入ると、まるで一流ホテルの待合室にでも訪れたかのような光景が広がった。巨大すぎる吹き抜けの天井には、豪勢なシャンデリアが垂れ下がり、柔らかなクッションが張り込まれたソファーが並ぶのだ。しかも、ロビー中央にはミニ日本庭園というべきものがあり、その小さな池には高価な鯉が優雅に遊泳している。

弥生は、そんな光景に目を奪われながら、受付けの方向を無心に歩く。

「おや？これは、これは・・・坊ちゃま。坊ちゃまでありませんか！！今までいったいどちらにいらしてたのですか？それに、お隣のお連れの方は？」

ふたりはビルのエントランスを通過するなり、間もなく従業員の質問攻めに遭う。一介の従業員とはいえ、このロビーに見合う、高級なスーツを召していて、もはや品のよい執事に見えた。反面、このような光景に慣れきっているグレイは、彼に会ったことによって一気にだるそうな顔になる。

「あぁ・・・。そんなことより、親父いる？ちょっと前にアポ取ってただろ？俺さ・・今日はその件でここに来たんだ」

これを聞いた使用人は相槌を打つ。

「とすると、お連れの方は東京陸運保険機構の弥生様ですね」

「え・・えぇ」

その従業員は、弥生に対して深深と、礼のこもったお辞儀をする。
反対に弥生は、グレイがとんでもないところの御曹司であることを改めて認識し、ただただ狼狽するばかりであった。

「お待ちしておりました。これより、わたくしめが会長室へとご案内いたします」

使用人は、ふたりに先んじて前方にあるエレベータへと向かった。
ふたりもこれに続く。

「塩野、親父はやっぱり怒ってるか？」

グレイは塩野と呼ばれる使用人に問う。

「家出のことですか。いつもどおりの反応をなさっていましたよ」

塩野は笑って答えてくれた。

「マジかよぉ」

グレイは苦虫をすりつぶしたような顔をして嘆いた。

「坊ちゃまは相変わらず会長が苦手なようですね」
「まあな・・」

このやりとりを見ていた弥生は、ゲイボルグ盗難事件がふたりの笑い事で済んでいることからして黒井家では日常茶飯事の事件なのであろうと考えた。
そうこうしている間に、エレベータが一階に降りてきた。

「さぁ、どうぞお乗りください」

ふたりが先に、無駄に広いエレベータに乗ると、塩野がそれに続く。エレベータのスイッチは６０階まであり、相当高いビルであることが分かった。ちなみに塩野は最上階である６０階のスイッチを押す。そして、ドアが閉まると、エレベータはものすごい速さで、かつ静かに上昇した。

エレベータが動き出してから、数秒沈黙が続いていたが、塩野が急に口を開いた。

「それにしても、坊ちゃまがこんなにお綺麗な女性をお連れするなんて、この塩野、大変驚きました」

「ちげぇよ、社長はあくまで社長だ。俺は、一介の従業員として社長のお供として来ただけだからな」

「おや、坊ちゃまがご就職なされたとは知りませんでした」

「ああ、家出の後に就職したから、誰にもいってないんだ」

「そうでしたか。弥生様、どうか坊ちゃまをよろしくお願いいたします」

塩野は弥生に向かって、何度もお辞儀をする。

「いえ、グレ・・珀君にお世話になってしまっているのは私のほうですよ」

弥生はいつもの癖で、グレイと言いそうになったが、慌てて修正する。

「弥生様も坊ちゃまのことを『グレイ』とお呼びになるんですね」

しかし、塩野はそれに気づき、笑って応えてくれた。

「えぇ、彼がそう呼ばないと怒るので・・」
「ちなみに『グレイ』というのは、今は亡きお嬢様が・・」
塩野が人差し指を立てながら『グレイ』の由来を説明しようとした。
「塩野、叩き切るぞ。てかもう６０階に着く」
グレイは顔を真っ赤にしていうのであった。そして、グレイの言うとおり、ちょうどエレベータは６０階に到着した。
「坊ちゃま、失礼しました。さぁ、どうぞお降り下さい」
ふたりがエレベータを降りた後、塩野もそこから降りて、ふたりの前を行く。すると、すぐに『会長室』が発見できた。
「どうぞ、こちらです」
そして、塩野が会長室への扉を開いてくれた。
「会長、東京陸運保険機構の弥生様をお連れしました。あと、坊ちゃまもお連れしたのですが、宜しかったでしょうか・・」
部屋の奥には、黒井会長が立っていた。あまり肉付きはよくなく痩せ型で、白髪だらけではあるが、グレイと同じく黒光りするような色黒の肌なのである。また、非常に貫禄が感じられ、豪腕な社長像そのものといった感じの男であった。
「珀・・、なぜお前が？」

しかし、よもやグレイが来るとは予想もしていなかったのであろう、さすがの黒井会長も客人を前にしても驚きを隠せなかった。

「それより・・。とにかく、弥生様、遥々ご足労いただき、申し訳ございません。ささ、どうぞお座りください」

黒井会長は革張りの高級ソファを指して、着席を促す。

「失礼します」

弥生は一礼し、そのソファへと腰かけた。グレイもそれに続く。最後に、弥生達のソファとは反対側にあるソファに黒井会長が腰をかけた。

「本題に入る前に、なぜ、あなたが珀を連れていらっしゃるのでしょうか？」

「親父、俺は弥生さんのところで働くことにしたんだ」

グレイが割って入るように応えた。

「そういうことでしたか。東京陸運保険機構様が、突然に商談をなさりたいと仰られたのも納得がいきました。ところで、弥生様にはこの馬鹿息子が迷惑などをかけておりませんか？」

「いいぇ、彼はよく働いていますよ」

弥生がこういうと、黒井会長は安堵したのか、大きなため息をついた。そして、グレイの方を見ては、強い目つきで言った。

「珀よ、就職が決まったなら決まったで、報告くらいせんか！馬鹿者！！」

「だって、ゲイボルグ盗んだ後だったから、言い出しにくいだろ」
「全く、お前というやつは、身体だけ大きくなって、中身は何ら変わってないな!!」

黒井会長は上半身を乗り出して、グレイの頭を殴る。

「ってぇな。わかってますよ、そんなこと」
「お前は何にもわかっていない！」

弥生を差し置いて、ふたりで親子喧嘩を始めてしまった。彼女が予想したとおり、やはりこのような結果になってしまったようだ。本当にこんなんで商談は上手くいくのだろうか?ほら、もう、お互いにほっぺたの引っ張り合いになってしまい、見るに耐えない状況である。

「あのぉ、そろそろ本題に入りませんか?」

たまりかねた弥生がふたりの中に割って入ると、黒井会長は顔を赤くしてかしこまってしまった。

「ゴホン・・。申し訳ありません、弥生様。見苦しいところをお見せしてしまいましたな。いい加減、本題に入りましょうか」

弥生は、豪腕で知られる黒井会長が、まさか息子の扱いにこれほどまでに手を焼いていたとは思っても見なかったので、この男が近しく思えてきた。たしかに、彼女もこのビルに来た時から、豪腕の黒井会長という幻影に緊張せずにはいられなかったのであるが、今ではもう彼女は、すっかりとくつろいでしまっている。これなら思った以上に交渉も上手くいきそうだと思えた。

「さっそくですが、御社の新製品であるゲイボルグをうちで使用させていただきました。もちろん、搭乗者は彼ですが。それにしても、非常にすばらしい製品であると思います。あとこれは、ゲイボルグの戦闘データです。宜しければお納めください」

そう言って、弥生は大きな封筒を黒井会長に手渡した。

「これは、面目ありませんな。ゲイボルグの実戦データに関しては、私どもも何一つ行ってませんので、非常に助かります。喜んで、後で拝見しましょう」

「そちらの資料に詳細は書かれておりますが、ゲイボルグの実力を目の当たりにして、私どもは御社の技術力を非常に評価しております。そこで、御社と機構とで、共同して新型兵器の開発をしてはいただけないでしょうか?」

「新型兵器・・といいますと?」

黒井会長は、眉をしかめた。しかし、弥生は関係なく話を続ける。

「会長もご存知とは思いますが、わが社は日本で唯一赤鬼の討伐に成功しています」

「はい、新聞で読みました。そのような方がわが社に来られると言うので、私も緊張していたのですよ」

「したがいまして、オーガに関するデータはどこよりも豊富に存在するのがわが社の強みでして・・」

それを聞いた黒井会長は大きく目を開いた。

「弥生様、新型兵器とは・・まさか・・!!」

そう、ゲイボルグの人工筋肉の技術と豊富な鬼のデータとが有機的

に結びついて、黒井会長は弥生の結論を待たずしてそれに気づいたのだ。

「そうです。真正オーガです」

弥生はその切れるような目を光らせ、微笑むように言った。

「そんなことが、可能なのでしょうか？」

黒井会長は身の毛のよだつような恐ろしさを感じつつも、好奇心から弥生の話にのめりこんでいく。それは、肝試しをするかのような怖いもの見たさに近いといえる。

「この資料を見て下さい」

弥生は、予め手元に用意しておいた写真付きの資料を、黒井会長にも見えるようにテーブルの上に置いた。

「これは、ゲイボルグですね」

黒井会長はルーペを手に取り、目を細めながら、写真内容をつぶさに観察する。たしかに、そこには赤鬼にやられてボロボロになったゲイボルグが写されていた。足も胴体も、ことごとく破壊され、とてもではないが、ゲイボルグは立ち上がれるような状況ではない。しかし、そのような身体であるにもかかわらず、ゲイボルグは立っていた。しかも、その胸にはオーガの証たる緑色の光が強く輝いているのだ。

「これは・・・」

写真が映し出す怪異を目の当たりにし、黒井会長は戦慄する。

「そう、このゲイボルグ、もう‘鬼’なんだよ、親父」

グレイはテーブルの上にあった茶菓子をつまみながらいう。そんな息子が、どや顔で放った言葉が決定打となったのだ。

「まさか・・」

黒井会長は顔の表面に冷や汗を滲ませてきた。なぜなら、この話が全く嘘とは思えず、完全に信用している自分がいて、恐怖を覚えたからである。このゲイボルグの尋常ならざる右腕。そして、胸部のメンタルスフィア。この緑色の輝きこそが、人工物と真正オーガとの決定的な差である。まさか、自分のゲイボルグが鬼になるなど、にわかに信用できないが、この写真を見る限りでは信用しないわけにはいかない。

「このことから、人の手によって、真正オーガを作ることは可能なんです。会長」

黒井会長は、弥生の言葉が耳に入っているのであろうか、何度でも鬼と化したゲイボルグを見る。仮に、こんなことが可能であるとして、これは人の業を越えすぎている。余りに恐ろしすぎるのだ。しかし、これが成功すれば、この国の歴史そのものを変えることすら可能である。

「たしかに、私の考えていることは恐ろしいことでしょう。私のことを軽蔑してくださっても結構です。しかし、我々人間は鬼の力を借りなければ、生き残ることができないのは確実です。どうか、お力添えをお願いします」

「親父、俺からもお願いします」

ふたりは立ち上がり、黒井会長に頭を下げた。

「頭をお上げください」

黒井会長は、落ち着いた声でそういった。言われるがままにふたりは頭を上げると、黒井会長が手を差し出していた。彼は、浮いた冷や汗をハンカチで拭い、腹をくくったように、やけに穏やかな表情を見せたのだ。

「いいでしょう。私も、鬼どもに一泡吹かせてやりたいのですよ。やつらに大切な娘を奪われてしまいましたからね。だからこそ、私も心を鬼に売ろうではありませんか」

そういって、彼は弥生の前に右手をもっと突き出してきた。弥生はその手を取った。

「会長、ありがとうございます」

「親父、ありがとう」

こうして、弥生のおそるべき交渉は成功した。

第２１話　消えていく存在

ナインは、神奈川県横須賀市の自衛隊基地にいた。

ここは海に面している大規模な基地であり、何隻かの大型航海用戦艦が停泊できるよう、巨大な着水用ドックも建造されている。ガレージなども、東京陸運保険機構とは比べものにならないほど広く、ロボットをはじめとする武器が充実している。また、軍人寮も相当数設置されていて、もう喫煙所での難眠生活はなくなった。さらに加えて、図書館などの娯楽施設もあり、ナインが暇を潰すのに困らないところであった。

ナインがはじめてここに連れられてきて、既に2週間が経過し、彼もいい加減、この基地の仕組みを理解してきた。彼は、特別待遇者、すなわち特使ということで、外国の高級官憲と同等の扱いを受けられることを約束され、実際にもこのような重要人物を専門として宿泊させるＶＩＰルームを使用することが認められている。また、彼の生活リズムもこれまでとはがらりと変わった。朝・昼・晩と規則的に栄養価の高い食事が運び込まれ、その合間に各地の鬼を討伐に行き、空いた時間は図書館にこもり、深夜眠くなったら自分の部屋で寝る、ということを機械的にこなすだけなのだ。身体および精神衛生上の環境といえば、以前よりはるかによいはずである。

読書中にもかかわらず、そのすぐ隣でタバコをスパスパ吸っていく人もいなければ、元気が有り余りすぎて世話を焼かせる人もいない。しばしば、腹が減っていないかとおすそ分けに来るお人好しなんてもってのほかである。

たしかに、今の生活は快適だ。全く苦しいわけではない。ただ、ナ

インの心の中にぽっかりと大きな空洞ができてしまい、その快適さが余計に彼の心の虚無感を煽るのである。しかも、ここには自分を知る人間がひとりもいないのだ。さらにいえば、自分も含めて、ナインという人物のアイデンティティを証明できる人間がいない。ここにいる人間はナインに興味があるのではなく、あくまでプロトオーガの一部分であるナインとして見ているに過ぎないのである。したがって、一定の業務さえこなしてくれれば、あとはどうでもよい存在なのだろう。

だから、ナインは今、自分という存在が消えかかっているのである。そのうち、彼のことを覚えていてくれた仲間たちも彼のことを忘れていくのだろう。その時、彼は一体何者になるのであろうか。きっと、道端に落ちている石ころと同じ社会的意義しか有していないだろう。客観的には存在しているけど、誰も認識してはくれないのである。せめて、自分だけでも、ナインを認識できれば違うのであろうが、記憶喪失の彼にはそれすらも叶わないのである。これこそ、孤独による恐怖というものであろう。これほどまでに恐ろしい心理状態は、そう無いのかもしれない。

（あんな別れかたなんか、しなければよかった）

いまさらながらに思うが、ナインは詩季に相談しに行った時、自分の選択の責任を全て彼女に押し付けてしまっていたのだ。要するに、詩季が心配だから云々というのは嘘っぱちであり、自分はよい人間という体裁だけ保ちつつ、重要な選択からは逃げようという自己の防衛本能の発現にすぎず、彼女に対する心配などというのはいい口実でしかなかったのだ。その結果、詩季を追い詰め、傷つけてしまった。

だから、もっと自分がきっぱりと選択をしていれば、今日そちらは

どうだったか、などと気軽に連絡することもできたはずだ。しかしながら、あれから彼女から連絡は一度もなかった。ナインのことを最もよく理解してくれていたあの少女がいなくなることは、ナインを全否定するに等しい。けだし、ナインは詩季の認識があってはじめて今の自分を照会することができたからである。

人はひとりでは生きていけないのだ。誰かに映る自分の像を見て、自分を確認していくことしかできないのだ。ナインはそう強く感じざるにはいられなかった。

（詩季、今の俺は君にどう映るのだろう）

鬼のパーツに過ぎなくなっていくのであろうか。防衛省という組織の端末でしかないのだろうか。自分がどんどん失われていく気がして非常に恐ろしい。

（詩季）

本当に、ナインをナインとして評価し、ナインとしてナインを繋ぎ止めてくれるのは彼女だけなのだ。

『本基地内に敵機が侵入しました。速やかに迎撃に向かってください』

そんな彼の憂鬱をよそに、基地内の緊急警報が鳴り響く。鬼が来たのだ。ナインはあまり戦いたい気分ではなかったが、仕事だから、自分は所詮プロトオーガのパーツだからと割り切って、出撃した。

（二）

ナインが外に出ると、基地の敷地内は騒然としていた。鬼とロボットの軍団が銃弾や光球を乱発し、至る所が炎上しているのだ。また、あちこちにはロボットや鬼の残骸が散在してしまっている。とはいえ、このような光景はこの基地にいる限りよくあることなので、特に珍しいわけでもないのだが。

ナインは、虚物化するのも面倒だったので、走って鬼どもの間合いに入っては、次々と頭から順調に消していくのである。それはもう作業である。命のやり取りなどとは程遠く、ロールプレイングゲームで金や経験値を稼ぐときのように、思考を働かせる余地などなく雑魚敵をただ機械的に意味もなく倒していくだけなのだ。

「あれ？」

ふと、ナインは前方に見慣れない鬼が3体いるのをみた。それぞれの形は異なっていて、全部見たことのない鬼なのである。

（あれはたしか）

しかし、ナインは基地の最新資料で、最近ここら一帯を暴れまわっている新型のオーガ3体の映像を見たことを思い出した。その資料によれば、コードネームはそれぞれ、炎鬼・雷鬼・風鬼であった。炎鬼とは、真ん中の橙色の鬼で、燃えるようなその身体を見れば、容易に判断できる。雷鬼とは、ナインから見て左の黄色い鬼で、稲妻のような刺々しい身体が特徴的である。とすると、消去法で右の水色の鬼が風鬼であろう。おそらく、いずれも上級オーガであり、ナインが直々に相手をするに相応しいのはこの3体であろう。もっとも、まわりの友軍は餓鬼どもの対応だけで精一杯であり、手助けしたいのもやまやまなのではあるが、今はそれをすべきではない。

「行くぞ、プロトオーガ」

だが、どんな敵であれ、虚物化の能力を得たこのプロトオーガの敵ではない。

ナインは、プロトオーガを虚物化すると、あの3体の鬼のうち、炎鬼の背後に回りこんだ。

「隙だらけだ」

ナインは、一気に炎鬼の首を落とそうとした。しかし。

「く・・！！」

横にいた風鬼がアンテナを張っていたのか、ナインの手は、これによって阻まれる。風鬼はその名のとおり、風のような身のこなしでナインの攻撃をすばやく妨害するのだ。続いて、雷鬼がその胸部にもつエネルギー体から、光の波動を放出する。

「こんなもの」

ナインは、とっさに外法属性反射シールドで、光の波動の攻撃能力を奪う。そして、そのエネルギーを返戻するのである。雷鬼は自己の攻撃を一身に受けている。だが、炎鬼の攻撃を忘れてはならなかった。炎鬼は外法属性でもなんでもなく、隙だらけのナインの懐へ入り込み、プロトオーガの右腕を掴む。

「なんだよこれ」

すると、プロトオーガの右腕は勢いよく炎上する。たまりかねたナインは、虚物化して後退する。しかし、炎は一向に鎮火する気配が

なく、このままではプロトオーガの全身を焼き尽くしかねない。

「くそ」

しかたなく、火達磨となった右腕を切り離す。切り離した途端、地に落ちた右腕は火柱を上げてしまうほどのエネルギーを放出した。もう少し、判断が遅れていたら、ナインも無事ではすまなかったはずであった。

「3体を相手にするのはきついか」

背後から意表をつくといった薄っぺらい戦術はこの鬼たちには無意味なのである。その意味では、かつてない強敵の出現である。知恵を持たないはずである鬼が、コンビネーションによって攻撃防禦を行うとは、ナインにとっても厄介である。

だが、この鬼たちの強みは、まさにそのコンビネーションである。まずはどれかを破壊すれば、かなり戦闘は有利になるはずなのだ。おそらく、この中で司令塔的な役割を果たしているのは風鬼であろう。あれがいる限り、容易に攻め込むこともできない。また、連中の攻撃方法をとっても、馬鹿の一つ覚えのように外法属性反射シールドを張っているだけでは、物理属性攻撃を防ぐことができない。その逆も然りである。炎鬼が物理属性で攻め立てて、雷鬼が外法属性で攻め立てるのだ。

せめてグレイでもいてくれれば、かなり楽に攻め込むこともできるのだが、そのような仲間など今はおらず、自分だけでどうにかするしかなかった。

だが、最近は機械的な作業しかしていなかったナインにとって、切り口を探すパズルのようなこの戦闘はおもしろくもあり、ワクワクしている自分もいるのである。

「久しぶりにおもしろくなってきたな」

とりあえず、失くした右腕を自己再生することにする。右腕の分を再生するのは少々、精神に大きな負荷がかかるが、片手だけでどうにかなるような相手ではない。

その間にも3体の鬼は、フォーメーションを維持しながらナインとの距離をどんどん詰めてくる。

そのうち、炎鬼がものすごいスピードで突っ込んでくる。あの腕に掴まれると厄介なことになるので、どうしてもこれを回避する必要がある。そこでナインは虚物化によって、これを緊急回避する。この時点において、ややフォーメーションが乱れたので、後方の2機の方へとまわりこむ。まずは、風鬼をたおすべく、これの頭部を破壊する。しかし、風鬼の危機管理能力はかなり高度である。まるで、虚物探知センサーでもついているのではないかと言うほど、反応が早い。いや、風のような鬼であることからして、風を支配しているのだ。そのため、急に質量のある物が出現することで当然に風の流れが変わるから、それをもとに出現場所を割り出すこともできるのであろう。

したがって、ナインの攻撃は、この風鬼によって完全にガードされる。また、ナインには隙が生まれた。近くにいる雷鬼は、当然にこの隙を逃さないはずである。そう、このままでは、連中のコンビネーションにまんまとはめられてしまう。ナインはそのように考えて、逃げようとした矢先である。

「動かない！！」

プロトオーガの全身を、ショートしているような鋭い感覚が走り抜ける。ナインの意思伝達が思い通りに伝わらない。やられた。雷鬼に高圧電流を流し込まれていたのだ。これは致命的な隙である。そして、すぐに風鬼の反撃を食らうことになる。まさに巨大なかまい

たちである。それはプロトオーガの身体が切り刻まれるほどの威力。

「うわぁぁぁ」

まず、右腕が吹っ飛んでいく。次に、左腕もぶった切られてしまった。さらには、炎鬼による攻撃もすぐに控えていた。

しかし、間一髪でナインは虚物化し、離脱することができた。それにしても、こんなことを何度も続けていれば、いずれはやられてしまうであろう。しかも、消耗戦ならば数で勝る敵のほうが圧倒的に有利である。ナインは猫の手も借りたいほど切羽詰っていた。

（待てよ、猫の手か）

ふと、ナインは今、切り落とされたばかりの腕に目を向ける。それぞれは少し遠くの地点に落ちてしまっているが、燃え尽きているわけではないのでまだ利用価値はあった。これをどうにか動かせないか。

（虚物化してみよう）

ナインは遠くに落ちている腕に、自分の肩を接合するイメージをした。すると、遠くにある腕を自由自在に動かすことができた。ナインの思惑通り、これにまだ十分な利用価値があるようだ。

ただ、自分のやろうとしていることが、ちゃんと実現できるのだろうか。ちなみに、いまより、この落ちている両腕を遠隔操作して戦うのであるが、それは容易なものではないのである。たとえば、自分の５０メートル前方に、自分の命令を必ず聞くＡとＢが、自分の方を向いて立っていると仮定しよう。また、Ａは自分から見て右前方、Ｂは左前方に立っている。この場合にＢにＡの右腕を掴ませるとき、自分はいかなる命令をすればよいか。答は簡単で、左にいる

Aの腕を掴め、といえばよい。

とはいえ、実戦においてこのように左右の観念が、こちら側とあちら側で反転するのは厄介なのである。なぜならば、この反転原理に加え、対象の移動が加わると、その正確な判断は途端に難しくなるからである。しかも、ナインの目の前にはAとBのような者ではなく、不規則にかつすばやく動く敵が3体もおり、それを上手く処理していくためには、脳が焼切れるほどの事務処理能力が必要となってくる。

しかし、ナインはこういったことはなぜか得意であった。なぜか、普段は一般人も使うことがない脳の使い方も、彼は日頃から練習していたのかのように自然と使えるのである。そう、これはただのパズルである。とりあえず、だめもとでやってみるしかない。

ナインは、落ちている腕を2本とも虚物化し、連中の付近に送り込む。まずは、1本の腕が炎鬼におそいかかった。だが、例によって、これは風鬼によってガードされる。

「今だ」

しかしながら、一本目の腕は囮である。すかさず、風鬼の死角から隙だらけの風鬼を2本目の腕が襲う。鬼の指ならびに手のひらなどの筋肉を異常なほどに膨張させ、そしてしっかりと風鬼の頭を掴み、思い切り握りつぶす。

頭がつぶれ、風鬼は行動を停止し、その場に倒れた。

司令塔を失った今が好機である。ナインは本体を一気に、雷鬼の上へと送り込むのである。ナインは、全く彼の存在に気づいていない雷鬼の頭を目がけて、かかと落としを決める。

すると雷鬼は、竹のように縦に裂けてしまった。

残りは、この中における攻撃の要、炎鬼である。

しかし、もうこの鬼を守ってくれるような仲間はいない。そこでナインは、今、何となく思いついた必殺技で終わりにしようと思うの

であった。
すなわち、どこからともなく、様々な方向から炎鬼に襲い掛かり、その右腕および左腕を締め上げていく。そして、最後に本体が2本の足で胴体を締め上げて固定して、巨大なY字を構成して準備完了である。ナインは完全に炎鬼の動きをロックしたのだ。
これは、最近暇つぶしに見ていたプロレスの記憶を契機として何となく思いついたものである。別に、大層な技ではないのだが、虚物化を利用するとあっさりと決まってしまうので、案外使える技である。
それはよいとして、準備は完了したのだ。あとは市中引き回しの刑の要領で、いろいろな方向へ、対象を引っ張るだけなのだ。右手を掴んでいる左手はより右へ。左手を掴んでいる右手はより左へ。胴体を絡め取っている本体は、とにかく下へ。
べちゃ。
炎鬼は、3方向からの牽引力に耐え切れず、みっつに分かれてしまった。まるで、双方から水風船を引っ張って破裂させたかのように、中身がぶちまけられてしまったのである。ナインの右手には、上半身の大部分が、左手には右腕だけが、本体には下半身がそれぞれ掴まれていたのであった。
ナインは、それらをさっさと放棄すると、身体のパーツを本体へと帰還させた。

「しんどかったな」

さすがにナインも、上級のオーガを3体も相手にし、虚物化を使用しすぎたため、身体の疲弊が激しかった。
周りを見ると、ほかの友軍はまだ交戦中であるが、下火になりつつある。おそらく、あと数分もすれば、餓鬼も片付くであろう。そう思ってナインは、いち早く、帰って睡眠するべく帰路へと赴くのであった。

第２２話　新たな力

―東京都町田市―

弥生遼子宛てに、なんとも巨大な郵便物が届いていた。それは、どれほど巨大かといえば、縦３０メートル、横１０メートル、高さ５メートルほどの巨大な長方形の箱である。また、郵便物を包装している箱ですら、家が一軒建てられそうなほど高価な箱であった。この依頼人はＢｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社である。そう、以前に頼んでおいた新型オーガの雛形が到着したのだ。

「さすが、ＢＷ社だわ。仕事が早いわね」

ガレージに納入された巨大な包装物を眺め言葉をもらす弥生の表情は、宝石箱を見つけた少女のようにきらきらと輝いている。

「隊長、早速開披作業に入ります」

西田は、準備よく、すでに作業用ロボットに乗り込んでいた。

「よろしく」

それを聞いた西田は、包装物のキーロックを解除し、箱を開披する。すると、中から濃密な白い煙とともに、緑色の光が漏れてきた。

「すごい・・・」

それは、弥生ですら驚きを隠せなかった。そこには紛れもなく『オーガ』がいたのだから。

「隊長、随分と可愛らしい鬼ですね」

だが、西田の言うとおり、外見上その最新型オーガは眠れる少女にしか見えなかった。本当にこの新型が十分な戦闘能力を備えているのかどうかは検討の余地がありそうだ。しかし、機能上は間違いなく鬼なのである。

「あんた、これが可愛らしいなんてよく言えるわね。ナインのプロトオーガにあった、プログラムをふんだんに取り入れた超兇悪な鬼なのよ」

「この娘っこがですかねぇ」

西田は、目を幾ら凝らしても、これにあのプロトオーガに匹敵するような力があるとは思えなかった。それほどまでに、巨大なマネキンにしか見えなかったのだ。むしろ、パリ・コレとかに出場させた方が、経済的効用を果たすのではないかとすら思えてくる。

「それで、これには誰を乗らせるつもりなんですか？」

「ああ、少なくともアンタをこれに乗せる気はないから安心して」

弥生は自分で言っておきながら、この巨漢が、あの可憐な新型に乗っているのを想像しただけで吐き気を催したのである。

「一応、Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社には、３体分の発注をかけているから、３人の女の子たちに乗せるつもりなんだけど、これは誰がいいのかしらね」

弥生は、事前の要望書において、戦闘用・援護用・防禦用を希望していた。ちなみに、本日届いたのが援護用に設計したものである。

もっとも、この3類型を企画した段階において、誰をどれに乗せるかは既に決着していたのである。

そのとき、誰かがガレージに入ってきた。

「社長、ここにいたんですか。探しちゃいましたよ」

その人物とは、いままさに弥生遼子がこの届け物に乗せてしまおうと考えていた人物なのである。なんといいタイミングでやってきたものなのだろう。

「詩季、あなたいいところできたわね」

弥生は、今ガレージに入ってきたばかりの詩季の方へずかずかと迫ってきた。

「あの、社長。なんだか怖いです」

弥生は、異常なくらいにこにこしていた。なぜなら、早くこの新型の力を試したくて、鬼狩りをするのにうずうずしていたから。かかる彼女の気分を鋭く察してしまった詩季は、何となく怯えてしまっていた。

（二）

「詩季、気分はどう？」

詩季は、鬼の操縦席に座っていた。以前、ナインにプロトオーガに乗せてもらったが、構造はそれと酷似しており、球体を形作っている。盲人である彼女は、専用のヘルメット型光学スコープをすっぽりとかぶり、この鬼の目を通して周囲の環境を眺めていた。

「大丈夫です」

この鬼には、メンタルスフィアを積んでいるので、精神的に鬼とリンクしてこれを稼動することができる。そのため、今まで自分が使用していたロボットなどとは異なり、ペダルだとか、ボタンだとかが一切なく、かえって落ち着かなかった。反面、この席に座った瞬間から、自分の心に何かが刺さっているような不快感を避けることができず、また、するすると心の沈殿物を吸われているような、なんとも言えない感覚が不連続的に生じていた。

「じゃあ、そのままゆっくり歩いてみて」

（歩くって、どうするんだろ）

いつもなら操縦桿を握りながら、アクセルとクラッチの両ペダルを踏んだり足を離したりの混合動作で簡単にロボットを動かすことができるのだが、ここにそういうものはないから、歩けといわれても何をすればよいか全く見当がつかないのだ。とりあえず、何もない以上、彼女は普段自分がその足で歩くような要領でやってみる。すると、不思議なことにこのオーガは自分の意志と連動して歩いてくれた。もっとも、一方では自分も球体の中で歩いてしまった。

「社長、歩けます」

詩季は、ぎこちなくはあるが、このオーガが意思伝達をするだけで簡単に動けたことに感激した。

「あんたも歩いちゃってるけど、そこは慣れだと思うから」

「はい」

詩季は、再び歩こうとする。今度は自分もつられて歩いたりしないように気をつける。そのためには、自分の身体を取り払わなくてはならない。いま、自分の身体はまさにこの鬼なのだ。そして自分は、この鬼の意思そのもの。

そう思いながら歩くイメージをすると、鬼は流暢に歩いた。非常に上品かつ可憐に。その所作は、人工物とは到底思えないほどである。

「いいわ、その調子よ」

詩季は、なんだかうれしくなってきた。それは、まわりの風景も見ることができて、かつ自分の足で何不自由なく歩くことができたから。まるで、目が治った自分がここにいるかのようなのである。彼女はいま、身体という余分なしがらみから解き放たれて、うれしくてたまらないのだ。

「ちょっと、詩季。何処行くの？」

詩季は、うれしさのあまり、弥生の静止を無視して外へと赴いてしまった。

「まったく、しょうがない子ね」

弥生は、鬼がガレージを出て行くのを見ると、ため息をついた。

（三）

詩季の鬼は、ものすごいスピードで町田市の崩壊しかけている大地を走っていた。それは、音速に近い速さである。景色が一瞬で過ぎ去っていってしまうほどである。

「あはははは、すごい。すごい」

崩れかかっているビルや、屋根を吹き飛ばされた家屋が前に見えても、1秒足らずのうちに見えなくなってしまうのである。
ふと、前方に餓鬼が数体いることにきづいた。

「えへへ、遊んであげるね」

音速の速さのまま、餓鬼の胸部へと、その細い華奢な手を突き刺す。手は貫通し、鬼のメンタルスフィアを抉り出して、機能を停止させてしまうのである。そして、詩季もそこで走るのを止め、自分を包囲している鬼と対峙する。

『プログラムから、何か好きなの使っていいわよ』

弥生からだ。すかさず、詩季はプログラム検索エンジンから、『ｃｈｏｐｐｅｒ』を選択した。すると、詩季の鬼は背中に付いていた羽のような飾りを手にして、巨大なハサミを構成するのである。
そして、詩季はそれを踊るように振り回す。くるくると回りながら、近くにいる餓鬼どもを切り刻んでいく。それは地獄の舞踏会である。

「この子、すごく強いんだね」

詩季のオーガは、餓鬼の返り血をたくさん浴びながら、可憐に舞う。飛んだり、跳ねたり、回ったり。それは詩季の喜びの表現なのだ。
もっとも、それを受忍せねばならない鬼どもはたまったものではない。

『ちょっと、詩季。近くに例の黒鬼がきてない？そこは危険よ、戻

ってきて』

弥生がそういうと、本当に黒鬼ことベルセルクが、詩季の鬼の舞踏に誘われて遊びに来ていた。

「君も遊んでくれるの？」

だが、詩季は弥生の忠告を聞かなかった。

ベルセルクは、有無を言わさず、遠距離から闇の巨剣を発動する。

詩季は避けなかった。これによって詩季のオーガは、一瞬で冥府魔道の力に溶け込んでしまうものと思われたのだ。しかし、その闇の剣は、詩季の鬼の前に出現した時空の穴に吸い込まれてしまう。すなわち、それは外法属性攻撃無効シールドであり、闇の巨剣の攻撃能力は奪われてしまうのであった。

ベルセルクは、すぐに剣を消滅させ、接近戦に持ち込んできた。疾風のような速さで、詩季の鬼に切りかかる。

『詩季！！』

ベルセルクの一太刀は、上半身と下半身のまっぷたつコースを完璧に通っていく。これにより、詩季の鬼はふたつに分かれてしまうと思われた。

ばりん。

しかし、詩季の鬼は全くの無傷であった。代わりに、ベルセルクの腕が粉々に砕け散っていた。

「えへへ、ごめんね」

そういうと、詩季のオーガの胸で燃えているメンタルスフィアが強く輝く。すると、一瞬のうちにベルセルクは氷結してしまったのだ。

しかもその氷は、直ちにベルセルクの全身にまで及び、全く動かなくなってしまった。

「あはははは、ばいばーい」

そして、詩季の鬼はその巨大なハサミでベルセルクの氷像を叩き割った。これにより、ばらばらに氷が散ってしまった。

「はぁ、きもちいなぁ」

詩季がコックピットの中で仰向けに倒れると、そのオーガも彼女につられて、その場に仰向けに倒れこんだ。そして彼女はそのまま、空を見上げていた。

『あんた、そんなにMP使って大丈夫なの?あんたの精神がどれだけの負荷に耐えられるかなんて全然わからないんだから、下手したら死んでたわよ』

「全然大丈夫です。それどころか、すごく気持ちい」

こんなにいい気分になったのは、何年ぶりだろう。自分も強大な力を手にしたのだ。どんな鬼とも対等に渡り合えるほどの力を。だからもう、ナインの助けなど不要である。自分でどうにかなる。

(ナイン君・・・)

ふと、詩季は鬼に精神を吸われたこともあってか、自分の心がすごくスカスカで充たされない感覚に陥る。そして、その次に強烈な寂しさと虚しさが彼女を襲った。

「さみしいよ・・」

気づけば、彼女は嗚咽を漏らしながら泣いていた。所詮、これは鬼の力を借りた幻惑に過ぎないのだ。はかない夢であった。それだけに夢から覚め、現実の残酷さに直視した彼女は、酷く悲しかった。

『ほら、早く戻ってきなさい。あたたかいコーヒーでも飲みましょ』

弥生は、詩季の気持ちを察して、優しく語りかけた。

「はい・・」

詩季の鬼は、立ち上がって、ゆっくりと帰っていった。

（四）

―神奈川県横須賀市自衛隊基地―

突如、ナインの室内に敷かれた緊急呼出装置がわめきだした。ナインは、仕事が入ったのだろうと思い、それに応じた。

「はい、何かありましたか?」

『昨日も申し上げましたが、ナイン様には予定通り、これより大阪へ向かっていただきます。１０分後には、３番滑走路の大型輸送機に搭乗なさっていてください』

相手の話者は淡々と辞令だけを述べると、すぐに回線を切った。

（１０分ってことは、あまりのんびりしていられないな）

ナインの部屋から滑走路まで直線距離にしても相当の距離があった

ので、ナインは足早に出かけていった。

3番滑走路に到着すると、大きな輸送機と人が数人すでに集まっていた。あまり見知った顔の人間はいない。そもそも、この自衛隊というのは兵隊が多すぎて、ナインと組まされる者は毎回ころころと変わり、非常に流動的であった。今回もまさにそれで、新しい仲間たちと任務に当たるのであろう。だから、ナインもいちいち仲間の顔と名前を覚える必要はなかった。もっとも、それはナインと組まされる者もそうであろう。

ナインは、輸送機の前で集まっている人々を無視して、さっさとそれに乗り込んでいった。

機内を見渡すと、『大型』という割に、乗務員席はそう広くなかった。これは、人よりも兵器を大量に搭載するためであろう。観光バスみたいな席の配置がなされていて、人がふたりすれ違えるほどの通路が2本、縦に伸びているのである。外に人が結構いたから、中はガラガラかと思っていたが、意外にもすでに座席はいっぱいいっぱいの状態であった。自分のオーガで虚物化して行ければ最も楽なのだが、大阪という場所はナインの認識に無いのでこれは無理なのだ。仕方なく、ナインは広そうな座席を見つけて、そこに座るのである。

離陸の2分前になると、それこそ、ほとんど座席は満席に近くなり、人々がうっとうしい。ただ、文句は言えないので、ナインは個人的に持参した本を手に、それを読み始めた。

「あのぉ、隣、いいですか?」

ナインは自分だけの閉鎖的空間を確保するために、2席占領していたのだが、それも女性の声によって破られてしまった。

「すいません、どうぞ」

ナインは、慌ててその人のために席を空けた。

「ありがとう」

女性はそう言って、ナインのとなりに座った。ちらっと、その人を横目に見ると、丹念に梳かれた綺麗な長い黒髪が特徴的なのである。そして、それとは対照的な白い肌に加えて、深くて赤黒い目。まさしく自分の記憶の中にいる何人かの特徴と極めて類似していたのだ。

（詩季？）

そう認識すると、緊張なのか、恥ずかしいのかよくわからないが、ナインの心臓は非常に速く脈打ちだした。そして、全く落ち着きがなくなってしまい、そのような心理状態を紛らわすために再び本を読み始める振りをする。しかし、字面をただ絵本のように眺めているだけで、内容は全く頭に入らなかった。

（なぜ、彼女がここに？）

いるはずはない。というより、少し冷静に考えれば、隣に座っている女性は、詩季とは異なり目を開けている。また、犬も連れていない。しかも、こんなにグラマラスな体型ではなかったはずだ。そう考えると、だんだんと精神の平静を取り戻してきた。

（しかし・・）

再び、ナインはその女性を横目に見る。それにしても、雰囲気や特徴は詩季のそれと一致しすぎている。ふと、隣の女性がこちらに気

づいた。ナインは慌てて視線を前に逃がす。

「あの、あなたも本が好きなんですか？こんなむさ苦しい所で珍しいですね」

隣の女性はナインが読んでる振りをしている本を見ては、話しかけてきた。たしかに、自衛隊といえば、戦うことだけに命を賭けているような連中しかいないのが通常であり（中には軍事マニアもいるであろうが）、本を読んでいる人間はそれだけでだいぶ異様な存在なのである。

「えぇ、本は好きですよ」

この女性が隣に座ったせいでかなり面食らってしまったナインであったが、こういう話題は大好きだったので、快く応えた。

「ちょっと見せてもらってもいいですか？」

そういうと、女性は前のめりの姿勢になって、本の表紙部分を覗き込む。ナインは、彼女が見やすい位置に本を持っていく。

「へぇ、プロ倫ですか。マックス＝ウェーバーの有名な著作ですよね。私も学生の時に読みましたよ。なつかしいなぁ」

「本当ですか？」

「えぇ、1年生の時に先生がとにかく読めってきかなかったから、必死で読んだの」

「あはは、これは・・（中略）・・なんですよね」

「ごめんなさい。もう内容はほとんど頭に残ってないの。だから、あなたの議論にはついていけそうにないわ」

「いけない。ついつい僕の悪い癖で・・」

ナインは論理展開に夢中になり、周りが全く見えていなかったことを反省する。

「でも、あなた、すごく頭がいいのね。一応、私も東大出てるけど、あなたには勝てる気がしないわ」

例の少女も東大生だったな、とナインは思う。

「東大ですか。あそこには、以前、図書館に忍び込んだことがあります」

「忍び込んだって・・、あなた、それほどの頭脳があって東大に入らなかったの？」

ナインは、大学生であった頃の記憶など、とうに失ってしまっているので当惑した。

「えぇ、大学には行ってないです」

大学に行った記憶がない以上、これで通すのが最も安全と考えたのであった。

「もったいないわね。あなたなら、今頃、学者にでもなれていたのかもしれないのに」

「実は僕もいずれはなりたいと思っていたんですよ」

ちなみにこれは、最近ナインが抱いている野望のひとつであった。

「変な人ね。なんでこんな軍隊なんて入ろうとしたの？」

「えぇと・・」

ナインは少々弱っていた。ここに来るまでの経緯が非常に複雑であったから、説明が面倒なのである。

「俺、例のプロトオーガの操縦者なんですよ。それで、強引に引き抜かれたのかな・・」

それを聞いた隣の女性は、いきなりはっとしたのである。

「じゃあ、やっぱり君がナイン君ね！」

隣の女性は非常にうれしそうにナインの両手を強引にとって、ブンブン上下に振る。

「あの、なんで僕の名前を？」

これを聞いた女性は、我に返ってナインの手を放した。

「ああ、ごめんなさい。私は、桐生　亜季」

「桐生って・・あなたは」

「そう、詩季は私の妹よ。あなたのことは妹から毎日聞いているわ、ナイン君」

ナインはこの女性が詩季に重なっていた訳がようやく理解できた。そして、急にナインは亜季を前にして申し訳ない気持ちになり、目を合わせられなくなった。

「あれ、どうしたのナイン君？いきなりしょぼくれたりして」

「毎日連絡をしているということは、僕が詩季のことを傷つけてしまったことも知っていますよね」

「えぇ。ナイン君、あの子を泣かしたそうね」
「はい・・・」

と言いつつ、ナインは『あれ、泣かしてなくね?』と疑問をはさむ。

「でも、私は怒ってなんかないわ。だって、あの子もナイン君と同じことを考えていたと思うから。だから、必ずしもあなただけに非があるわけではない」
「亜季さん、それってどういうことですか?」
「それは、私が言うべきことではないわね。自分で確認してみたら?」

そう言って亜季は、携帯を貸してくれようとした。航空機内での電波使用は禁じられていたから、というのも一理あるが、それとは無関係にナインは受け取れなかった。

「そんな、いまさら・・」
「フフフ、ふたりとも素直じゃないのね」

亜季はにやにやして、小さくつぶやいた。

「・・・」

ナインは、亜季が悪戯そうに言った言葉が心に突き刺さって痛かった。

「それにしても、ナイン君って本当に妹の叙述どおりの人だったからびっくりしたわ。偶然を装ったつもりでも、実は、君を見たときからすぐにピンと来たの」
「なんだ。亜季さんも、人が悪いですね」

「あら、騙すつもりなんてなかったわ。一応、人違いでないように人物の同一性があることの担保くらいはとっておきたかったし」

とは言いつつ、この人は本当のことを言っていない気がする。おそらく、詩季をダークサイドに堕としたヴァージョンがこの人なのだろう。あの少女には絶対にないような腹黒さがこの人にはあるのだ。あらかじめナインが記憶喪失であるという予備知識を持って、どんな反応をするのか、当初から試していたに違いない。

「ごめんなさいね。あなたを突っつくと、なんだかおかしくて」

亜季は、そう言いつつ、本当にナインを突っついてきた。

「それにしても、亜季さんも軍関連の仕事なんですね？」

「うちは家族みんなそうなの。変な家よね」

息子全員が軍人であるならば、今時珍しくもなんともないが、娘がふたりとも軍に携わるというのは、やはり珍しい。しかし、ジェンダーの観点から変とは言うわけにはいかなかった。だからナインは、はにかんだ表情をみせてごまかす。

「亜季さんもやっぱり、ロボットに乗るんでしょうか？」

「一応、技能はあるけど、主に作戦司令部で頭を使うのが私の役目かな」

「亜季さんって、すごい偉い人だったんですね」

「それを言うなら、あなたの方が偉いわよ。ナイン君は特使なんだから」

それは横須賀基地にいたときの異常な取扱から明白であった。

そんなやりとりをしているうちに、艦内放送が鳴りたてる。

『みなさん、本隊は３０分後、作戦エリアに到着します。作戦内容は予めお知らせしたように、大阪の赤鬼討伐です』

ナインは赤鬼と聞いても全く動じなかった。赤鬼を前にして恐怖に震えていたあの頃が懐かしいとさえ思えてきた。もう、赤鬼など、ナインの敵ではないのだ。

第２３話　ギヴ・アンド・テイク

―大阪府吹田市―

赤鬼ことユグドラシルの存在ポイントからおよそ7キロメートルほど離れた地点に、ナインを含む赤鬼討伐部隊を乗せた大型輸送機は着陸した。この吹田市も、例によって鬼どもによる損害が極めて深刻であり、かつてのような活気ある町並みとはうって変わり、風塵が舞う音くらいしか聞こえてこない。それどころか、いたるところで砂漠化現象も起こっており、砂ばかりが舞う様子はなんだか寂しい。

「みなさん、聞こえますか?赤鬼の討伐はナイン特使のプロトオーガをメインにして行います。したがいまして、みなさんはナイン特使の援護をして、一刻も早く作戦ポイントまでプロトオーガを護送することを最優先でお願いします。また、プロトオーガの破壊はわが軍の敗北を意味しますので、敵の攻撃をできる限りプロトオーガに寄せ付けないようにしてください」

オペレーターの的確なナレーションが聞こえてくる。そして、まわりの友軍も必死になって、自己に与えられたミッションの最終確認を行っているのであった。

それにしても、ナインは周りの必死さが、少しおかしくて笑いそうになった。なぜなら、３０秒もあれば十分にユグドラシルを破壊してここに還ってこれるからである。そう、こんな楽勝な任務を完了するに、援護なんてもったいないのだ。まるでこれは質の悪いデモンストレーションなのか、それとも単なる余興としてのエキシヴィジョンなのかとさえ思えてくる。もっとも、ユグドラシルを倒すためにこれだけの人が集まったのだから、もう少し盛り上げるような

演出をした方がいいと思われたが、それ以上にナインは早く帰りたかった。だからナインは、ここにいる人たちが面倒ごとに巻き込まれる前に、さっさと倒してこようと考えた。

（赤鬼はあそこにいるのか）

ちょうど、ユグドラシルのいると思われる辺りを、ズームして観察する。そして、しっかりと場の状況を頭に叩き込み、認識する。そのまま、得られた視覚的情報を基に世界を構築するのである。

「さっさと行って、おわらせよう」

ナインは、周りがまだ上層部からの最終注意事項を聞いているにもかかわらず、いち早く虚物化により消えてしまった。

先ほどナインが頭に叩き込んだ地点まで、プロトオーガが一気に瞬間移動すると、ユグドラシルの第一形態、すなわち赤いラグビーボールを前方に確認できた。また、ここは鬼だらけであり、完全にナインは包囲されていた。どうやら彼は、とんでもないところに出てきてしまったらしい。他方、周りの鬼たちも、突然の敵の出現に腰を抜かしているようである。しかし、ナインにとって、それもどうでもよいことである。

（本当は倒した方がいいんだろうけど、今は赤鬼のところまで行ってしまおう）

ナインは、今度、ユグドラシルの周辺の世界情報を認識する。無論、そこまでさっさと移動するためである。周りの鬼たちが一斉にナインに食いかかろうとするが、それもどうでもよい。

「じゃあな」

再び、ナインは消えてしまった。そして、一斉に鬼たちの腕は空を切り、血しぶきも、悲鳴も何も起こらないのである。鬼たちはまるで、狐に化かされたかのように首をかしげるのであった。

ナインは、赤鬼と呼ばれ人間から恐れられるユグドラシルの目の前に現れた。改めてこの巨体を間近で見ると、壮観である。しかし、そんな呑気なことを考えている場合ではない。ナインの存在を探知したユグドラシルは、すぐさま臨戦態勢に入る。

「やるか」

もっとも、ユグドラシルの内部へ虚物化により侵入できればよいのだが、ナインはその内部情報を一切持っていなかったので、直接攻撃によって侵入するしかなかった。そこでナインは気合を溜め、ユグドラシルの外殻の内部に潜入するべく、手拳でこれを打ち破ろうとする。プロトオーガの右腕が、3倍ほどの太さに膨れ上がると、その手を振り上げたまま突撃する。

「はっ!!」

プロトオーガはユグドラシルの堅固な装甲を見事に砕いて、自分が十分に通り抜けられるだけの穴を作成することに成功する。そしてナインは殴打の勢いのまま、赤鬼の内部に転がるように入っていく。ラグビーボールの中は、ユグドラシルの木の枝のような触手で一杯だった。その赤い触手は血管のように外壁に這っており、全身の力が抜けるような気色悪さが感じられる。しかし、ナインはその触手の迷路の中心に、本体があることを確認、認識する。

「あの中まで行けば終了か」

ナインは、再度、消滅。しかし、すぐに本体を触れる距離に実物として出現する。ユグドラシルは覚醒していないのか、ナインが目の前にいるにもかかわらず、うんともすんとも言わないのである。まるで眠っているかのようであった。

「悪く思うなよ」

寝首をかくようなことは少々、ナインにとって性に合わなかったが、任務だからと割り切って、一瞬でその首を切り落とした。

（二）

―３０秒後―

「みなさん、作戦の概要は以下のとおりです。では、御武運をお祈りします」

これから恐怖の赤鬼討伐に乗り出そうと、大阪に集まっていた集団は緊張のあまり胸が張り裂けそうになっていた。あの赤鬼を倒したプロトオーガがいるとはいえど、苦しい戦いになるに違いない。少なからず犠牲者が出るに違いない。そう、ほぼ全員が不安を募らせていたその時であった。ナインが集団のところに突然戻ってきた。

「うわぁぁ！！」

何人かが、突然ナインに背後を取られたため、絶叫する。それと同時に、反射的に銃をナインに対して向けるのである。

「おや、特使ではありませんか、びっくりさせないで下さいよ」

そういって、銃を下ろすのである。ちなみに、ナインはこの連中に虚物化プログラムのことは言っていないのである。別に、このことは暴露してもよかったのであるが、説明するのが困難であるうえ、言う機会がそもそもなかった。

「任務は終了です」

「は？」

ナインは無感情にそう告げた。みな、ナインの言っていることが全く理解できず、唖然としている。

「赤鬼は、もう破壊しました」

まだ、ここにいる連中は思考停止しているようだ。まるで脳死でもしているかのようにピクリとも動かないのである。だが、だれかがようやく口を開く。

「そんなばかな」

「ここに着いてまだ、1分くらいしか経ってないのに」

ひとりが口火を切ると皆、一斉に声高に反論するのである。意気込んでいたところ、すっかり出鼻をくじかれたため、その気持ちの行き場を失っているのであろう。

「信じられないかもしれないけど、倒したのは事実なんです」

本当は、ユグドラシルの首でも持ってこれたら一番よいのだが、プロトオーガの所持品などに虚物化の効力は及ばないらしい。したがって、虚物化によって帰還したナインは、何も持って帰れなかった

のである。そのため、ナインは赤鬼を倒したという事実を立証することはできなかった。

「えぇー、みなさん。お静かに」

議論が過熱してきたところ、亜季が突然、皆に聞こえるようマイクを使ってそう言った。

「桐生中佐！」
「中佐！！」

すると、特にうるさかった男性兵を中心に、次々と皆が静まっていくのである。とはいえ、亜季は中佐であったのかと、ナインは驚きを隠せなかった。

「特使の仰ることは事実です。なぜなら、プロトオーガには、いわゆる瞬間移動の能力が備わっていて、３０秒もあれば作戦を完了することも可能だからです」
「そうだったのか」
「なんだ・・」

亜季の証言により、強く反論していた男たちを中心に冷静さを取り戻していく。そして、次第に皆がナインの言葉を信じるようになっていった。

「中佐、それならばなぜ、そのことを仰らなかったんでしょうか？」

ひとりの男が、とても申し訳なさそうに亜季に対して、問う。

「ごめんなさい。このことを上層部が全く信じてくれないまま、作

戦を指示したためなの。皆には多大な迷惑をかけましたね」

そういって亜季は、皆の前で深く頭を下げたのである。

「頭をお上げください」

「それならしょうがないですよ」

「一生ついてまいります」

むさくるしい男を中心に、亜季に対して忠誠を誓いはじめたのであった。

（三）

そのあと、ナインは亜季のところへ向かった。

「中佐、すいません。僕が勝手なことをしたために、お手数をおかけして・・」

「ナイン君ったら、なに急にかしこまってるの？亜季でいいわよ」

亜季は、ナインの亜季に対する呼称が急に変化したことがおかしいのか、くすくすと笑う。

「すいません、亜季さんが中佐だなんて思いもよりませんでしたから・・」

「そうだったの。まあ、あんなこと、お手数でもなんでもないから大丈夫よ」

「それなら安心しました」

そういって、ナインはため息を吐いた。しかし。

「ただ、勝手な行動は控えて欲しいのは事実。気をつけてね、ナイ

ン君」

曲がったことは許さないのがこの家族の特性なのか、亜季は、言うとおりに安心しようとしていたナインの顔を上げさせて、厳しい表情で言った。

「はい・・」

ナインは、少ししょんぼりとしてしまうのである。そのようなナインの気持ちを察したのか、亜季は柔らかい表情に戻って続ける。

「とはいえ、みんな無事に任務を終えることができたし、私個人としてはあなたの働きを評価しているわ」

「もったいないお言葉です。僕はただ、執行機関のひとつにすぎませんからね。本当にすごいのはこのプロトオーガですよ」

そういって、ナインは自分のプロトオーガを指差す。

「そんなことないわよ。あなたがいればこそ、なんだから」

亜季は、ナインの背中をポンと押してくれた。

「それにしても、亜季さんはなぜ、虚物化のことを?」

「実は、妹から聞いたの。私も最初は信じなかったけどね」

亜季はぺろっと舌先を出しては、悪戯そうな顔をする。

「でも今回、プロトオーガが突然消えたり、現われたるするのを見て確信したわ」

「そうだったんですか・・」

ナインは亜季の妹のことを思い出し、少しだけ悲しい顔をした。亜季は、そんなナインの表情に気づいてか、別の話題を持ち出す。

「そういえば、これから本隊は淡路島の基地まで行って休憩するんだけど、知ってる？」

「え、知りませんでした」

「もう、ちゃんと人の話は聞かないとだめよ」

「すいません」

「だからね、今日は私たち、そこでお泊りってわけだから」

ナインは下着の代えなど、全く持ってきていないことに気づく。しかし、一日くらいならどうにかなるかと考えた。

「それで、今日は偶々、その基地に防衛大臣が来てるから、ナイン君は気に入られるようにがんばってね」

亜季は相変わらず、ナインを突っつくようにおもしろがって言うのである。それにしてもナインはこの時点において、なぜ彼女があえて『気に入られるように』と言ったのかを理解できずにいた。

（四）

―淡路島特別営設基地―

ここは、大阪の西にある基地で、横須賀の基地に比べたらはるかに規模の小さいところであった。本当に休息を目的としたような基地であり、実質的には基地ではない。もっとも、ガレージや武器倉庫なども存在するため、ホテルと言うには程遠いのではあるが。

そのため、今回ばかりはナインも、横須賀とは異なり、数人の共同

室で寝泊りすることになりそうである。いびきがうるさい人間と一緒にならなければ良いが、とナインは気をもんでいた。
もう夕食も食べ終わり、夜もふけてきて、ナインは読書でもしようと思っていたそのときであった。ふと、ナインの携帯電話が振動した。おそらく、誰かからの電話であろう。

「はい、もしもし」
『ナイン君、亜季です。大臣があなたのことを呼んでるんだけど、今から来れないかしら?』
「大臣が?なぜ僕なんかを?」
『あなたに会いたいそうよ』

ナインは、亜季が電話の向こうで悪戯そうな笑みを浮かべているだろうことは、容易に想像できた。なぜなら、そういうときは、決まって彼女はそういう口調になるからである。

「はい、わかりました・・」

ナインは、抽象的危惧感を感じつつも、渋々了承するのであった。

ナインは、すぐに大臣が滞在しているとされる部屋へと赴いた。どれほどすごい部屋なのだろうかと内心ビクビクしていたが、着いてみるとナインたちが使っている部屋と変わらなかった。そのためか、少し緊張はほぐれ、自然に扉をノックすることができた。

「ナインです」
『はぁーい』

扉の向こうから、亜季の妖艶な声が聞こえてきた。

「待ってたわよ」

亜季が扉を開けてくれた。

「失礼します」

ナインは、何で大臣の部屋に亜季が一緒にいるのかを疑問に感じたが、そのまま中に入ることにした。

「防衛大臣。ナイン特使をお連れ致しました」

ナインは、亜季に連れられて、部屋の奥へ招かれると、そこには背の高い中年の男性がいた。髪型はオールバックで、白髪も多少は混じってはいるが、基本的には黒髪である。なによりも、頬骨をそぎ落としたかのような年期の入った顔つきはどこか、厳かさや誇りを感じさせざるを得ない。

「君が、例のプロトオーガの操縦者、ナイン君か」

防衛大臣とさせる、中年の男はナインの顔をまじまじと見つめて訊いてきた。

「はい、おっしゃるとおりでございます。大臣」

ナインは、前方の男に対して敬礼する。しばらく、軍隊に身を置いていたためか、自分よりも偉そうな人を見ると、つい反射的に敬礼してしまうようになっていたのである。

「君は、どこかで・・」

ふと、大臣は何かを言いかけて、眉をしかめてしまった。それは、デ・ジャヴュにも似た感覚であり、ほとんど明確な根拠は存在しなかった。ただ、あいまいな像が彼の深層意識の中で揺らいでいたため、少し気にはなったのだ。しかし、やはり気のせいに過ぎないというほどのものだったので、大臣はそれ以上追憶することをやめた。

「いや、すまない、ナイン君。自己紹介がまだであったな。私は桐生　憲次郎。防衛省で閣僚をやらせてもらっている」

桐生？この人もまさか。

「亜季、ご苦労だった。もう休んでいいぞ」

「はい、お父様」

亜季は、ふたりに対して深く礼をして、部屋から静かに出て行った。

「お父様ということは・・大臣が亜季さんのお父上だったんですね」

ナインは、大臣が桐生と名乗ったこと、ならびに亜季が大臣に対して、お父様と言ったことから合理的に推論した。

「そして、詩季の父でもある。君のことは娘からよく聞いているよ」

その台詞、ナインは亜季からも聞いていた。詩季があまりにも自分のことを家族に言いふらすがために、ナインは照れくさくなっていた。

「それは恐縮です」

「いわゆる記憶喪失、だそうだな。そして、鬼を持つ身でありなが

ら、鬼と対峙する存在。はたして君は、一体何者なのか、個人的に興味がある」

桐生大臣は、ずっとナインの目を見続けていった。

「それは、僕自身もわかりません」

ナインは、気づいたら自分の鬼と一緒だったのだ。そして、なぜにこれほどまでの鬼を有していたのかは、彼にとって見当も付かなかった。

「まあ、それはともかく。うちの小田原が執拗に君を引っ掻き回してしまっていたようだな。こんなところにまで来させてしまい申し訳ない」

「いいえ、僕は自分の意思でここに来ましたから・・」

ナインは、とっさに大臣から目を逸らして、そういう。

「それは、本当かね？」

そして、いきなり目を逸らしたナインの態度を不審に思った大臣はさらに問う。

「え？」

「いや、もちろん、君ほどの戦力がうちに加わってくれることは大いに喜ばしい。しかし、君の意思に反してまでそれを強制したくはないからな」

「意思に反しているなんてことは・・」

今度は、大臣と目を合わせてそういった。

「ならば、なぜ君の目は輝きを失っているのか?」
「俺の、目・・?」

ナインは近くにあった鏡で自分の顔を見た。たしかに、桐生防衛相がいうように、あまり活力の感じられる表情とはいえない。

「そう、私が娘から聞いているのとは異なって、今の君の目はくすんでしまっているのだよ」
「そんなはずないですよ。僕は、自分の意思で来たのですから」

そうだ、たしかに詩季に行けと言われたからここに来たのかもしれない。しかし、最終的には自分の意思でここに来たはずだ。だからこそ、ナインは一度も町田市に帰ることもなく、ここに居続けて任務を全うしているのではないか。

「そうか、それが本当に君の意思ならば何も言うまい。しかし、これだけは君に聞いておいて欲しい。ただこれは、あくまで詩季の父親としての言葉であり、軍人としては決して許されない言葉だから、すぐに忘れてしまってかまわない」
「何でしょう」
「詩季を守ってやってほしいのだ」

大臣は、窓の外に目をやり、まるで独り言を装うかのようにぼそりという。

「大臣、恐れながら申し上げますが、そもそも僕がここに来たのは、あなた方が引き抜いてきたからですよ」
「たしかに、それが防衛省の意思表示である。だからこそこれは、軍人として許されることのない言葉なのだ」

防衛大臣、いや、今ここにいる桐生憲次郎という、ひとりの父親としてのこの男は、再びナインに向き直る。そして、その目をしっかりと見据えて言葉を続けるのである。

「失明してしまったあの子に、私は光をあててやることすらできない。私の力では、あの子を苦しみからから解き放ってやることができないのだ。だからせめて、あの子が選んだナインという光を遮らないことが、私の唯一つのなし得ることなのだ。だから、ナイン君、詩季を守ってやってほしい」

桐生防衛相は深々と頭を下げた。

「俺が・・詩季の光・・」

「あの子は、他人に気を遣わせてしまうことを何よりも嫌うから、少し素直になれないだけなのだ。本当は君に守ってもらいたいに決まっている。だから、君のいるべき場所はここではない。帰るべき場所がちゃんとあるはずだ」

それを聞いてナインは、ようやくあの時の詩季の気持ちを理解した。なぜ、彼女は泣きそうな声で、ナインを防衛省へと行かせたのか。そうだ、彼女はナインが詩季に対して気を遣っているのではないかと考え、あえてあのような態度にでたのだ。そうでもしなければ、ナインに迷惑がかかるとでも思っていたのであろう。

（馬鹿やろう）

何が迷惑なものか。ナインをナインたらしめてくれている光を守ることの何がいけないのだ。ナインには詩季という光がなければ、途端に自分の世界を見失ってしまうのだから、これを守るのは当然で

ある。それは、東京陸運保険機構を離れてからというもの、身にしみて感じていたことだ。だからこそ、詩季のことを守りたい。そうしたいのだ。その結果、自分が怪我をしてもいい。生死の境を彷徨ったって全然いい。たとえ詩季が自分をお荷物だと思い込んでいたとしても、ナインはそれを背負いこんでいきたい。全くもって、重いなどと思ったこともない。むしろナインにとって一番つらいのは、自分すらも見失ってしまうほどの窮極の孤独である。

そもそも、誰かに迷惑をかけないで生きていくことのできない人間なんて存在し得ない。だからこそ、迷惑をかけた分だけ、逆に何かで助けてあげながら生きていけばいい。詩季のような子であればなおさら、他人に頼ってもいいのだ。すなわち、ナインにとっての詩季は、光を照らし、自分に途を示してくれればよい。それだけで、彼にとって十分な見返りだ。ナインの魂はそれで安らぎを得ることができるのだから。

（馬鹿やろう）

そして、一番の馬鹿やろうは自分自身だった。はじめから気づいていたはずである。そんな簡単なこと。あの時、ナインは素直に詩季を守りたいと言っていればよかっただけの話なのだ。なのに、社会的な体裁などを気にして、回りくどい言い方をしてしまい、彼女を傷つけたのだ。

ナインの目には、強い意思の光が灯った。

「大臣、すいません。俺、防衛省を辞めます」

「本当かね、ナイン君」

「はい」

「ありがとう。どうか、娘をよろしくお願いします」

大臣は、一国の防衛を任されたトップとしての権威も誇りも、全て

捨て去って、詩季の父、桐生憲次郎として、深く頭を下げた。

「はい、必ずや成し遂げて見せます」

ナインは駆け出していった。プロトオーガのもとへ。一刻も早く、自分のいるべき場所へ。

ナインが出て行ったあとで、桐生防衛相はいう。

「亜季・・。私は、軍人として最低の人間だ・・・」

すると、とっくに部屋で休んでいると思われた亜季が、ひょっこりと姿を現した。

「お父様、そのようなことはありません。私は、誰よりもお父様を誇りに思っていますし、誰よりも国のために命を削ってきていたことも知っています。だから、大切な娘をひとり守るくらい、いいではありませんか」

「そう言ってもらえると、助かる」

「私とて、あの子の幸せを願うのはお父様に劣りません。それに、あの子のいる東京陸運とこれから協力していけば同じ結論も出せますから」

「ああ、ありがとう」

亜季は、自分の父を強く抱きしめた。

（五）

―東京都町田市―

東京の空は、すっかり暗く沈んでいた。大量の粉塵が空を舞ってい

るためか、夜空に星は輝かない。ただ、薄気味悪い満月だけが、太陽の光をもらい、強く輝いていた。今宵はきっと何かが起こる。そう感じずにはいられないほどの怪しい夜なのだ。

「メンタルスフィアがやたらと暴れまくりやがる」

町田市の上空１００メートル弱の地点に、プロトオーガがいた。そう、ナインの乗るプロトオーガと全く同じである。しかし、そのメンタルスフィアを中心に纏まりついている薄緑のアウラは、憎悪と執念に燃え、純粋なる悪意によって研ぎ澄まされているのである。その点において、このプロトオーガはナインのそれとは相反するものであった。

「『アニミスト』か・・。くくくく・・」

操縦者は、引きつるようなおぞましい笑みを浮かべていた。その瞬間、プロトオーガの周囲はどろどろに溶解した殺気で充たされたのであった。

第２４話　第８の執行官

―東京陸運保険機構事務所付近―

辰巳春樹は、まんまるい満月のためなのか、すこぶる機嫌がよく、仕事が終わってから事務所の近くのコンビニでコカ・コーラ１点とチューインガム１点を購入した。そして、ただなんとなくその帰り道における公道上でコカ・コーラを片手に、鼻歌を歌っていた。

「るんるんるーん」

今日も彼女は、仕事でたくさんの鬼を狩った。ＢＷ社との共同で作った新型は、まだ未完成ながら、従来のロボットなどとは比較にならないほど強い。そのおかげで、今日は一段とよい仕事ができたのである。といっても、会社側からすれば、彼女の暴走を助長しただけの結果になり、直接利益に結びついているわけではない。しかしながら、彼女はまるで水を得た魚のようにその戦闘能力を開花させているのは事実である。

辰巳にとって、このコカ・コーラは仕事のあとの自分自身へのご褒美である。炭酸が喉を通るときの、喉をヒリヒリさせるこの刺激がたまらない。

「ぷはぁぁぁ！！うめぇ！！」

明日は、もっと、このコカ・コーラが美味しくなるはずだ。そう思うと、なんだかわくわくしてくるのである。成人したら、これがキリン・ビールになるのだ。

「なんだ、まだ今日の仕事が残ってるじゃないのさ・・」

ところが、そのような彼女のご機嫌をぶち壊すものがあったようだ。
辰巳は、今この町田市で発生している異変に気づいてしまったのである。実際にも、猛烈な殺気が辰巳にまでびりびりと到達している。それはまるで、コカ・コーラを頭からぶっかけたような感覚なのである。そして、辰巳は目を凝らしてみると、暗くてよくわからないが、遠くの方に緑色の光だけは確認できた。
辰巳は急いで事務所へと戻った。

（二）

「社長、なんかヤバイのがきてますよ」

辰巳が、弥生遼子にこの事実を急いで伝える。すると、弥生は特に慌てる様子を見せなかった。

「そんなこと、アンタがコーラ飲んでる間に気づいてたわよ」

「へ？」

すると、弥生はガレージ内の４体の新型兵器を顎で示した。

「『鬼女』たちが、ただならぬ様子を見せてくれたから、嫌でもわかったわ。もうみんな集まってるから、アンタもさっさと行ってきなさい」

そう、なぜ弥生が危難の接近を知りえたのかというと、彼女のいうとおり、『鬼女』と呼ばれる新型兵器３体とゲイボルグのメンタルスフィアが叫ぶように異常な輝きを放っていたからである。

「了解！！」

辰巳は、風のようにガレージへと向かって行った。

辰巳春樹が到着することで、ガレージにようやく４人の従業員が集結した。

「はるきちゃん、遅いよぉ」

沖まもるは準備万端といった感じで、無数のシールドの殻に覆われた防禦型新型オーガ『鬼女メイデン』の前に立っていた。かなりの重装備であるため、新型のなかで最も巨大な鬼である。その厳重な装甲の中から、淑女のようなメイデンの顔がひょっこりと出ている。なお、シールドの中にいるメイデンはそこまで大きくない。

「はるき、着替えてる時間ないよ」

桐生詩季は、私服の辰巳を咎めた。それに対して、皆は準備よく戦闘用スーツに着替えている。また、詩季の後ろには、この中では相対的に小さい『鬼女アリス』がいる。その外見はまさに名前のような女の子なのである。メイデンと比較すると、アリスはその身にはほとんど鎧のようなものを纏っておらず、洗練された人工筋肉の華奢な肢体をスラリと伸ばしているのである。

「さっさと、行こうぜ」

グレイは完全に強化されたゲイボルグ・ディアボリカ（以下、ゲイボルグ・Ｄと略す）に搭乗していた。ちなみに、名前を変えたのは、週刊マシーナリーという雑誌で、ゲイボルグが一般発売に向けて公開されたため、それとの区別をはかろうとしたからである。従来のデザインは少し物足りない部分もあったが、このゲイボルグ・Ｄは

黒い烏（からす）のような羽を肩から下げている。その外見はもはや漆黒の堕天使のようであり、胸に輝く薄緑色のスフィアと相俟って妖しく美しい。

「ごめーん、みんな」

そして、辰巳も自分の新型オーガである『鬼女セアト』の下へ、慌てて走る。セアトは中間的な大きさであり、ゲイボルグに倣って、完全な戦闘型である。それは、見ているだけで身が切り刻まれてしまうような毒々しいフレームであり、高機動力を追求したため、余分な肉はほとんどそぎ落としている。

「じゃあ、いくよ！あんたたち！！」

遅れてきた辰巳が号令をかけると、皆、次々と外へ出撃して行った。

（三）

プロトオーガに乗る男は、なにかの動きをキャッチした。

「やっと、気づいたか。おそらくあの中に奴がいるはずだが・・」

そう、この搭乗者は自分に近づいてくる４機の鬼を探知したのだ。それにしても下等な鬼のくせに、この執行官クラスの最高の鬼にたて突くとは、それだけで虫の居所が悪い。

「なんだこいつら？」

しかし、４機とも、メンタルスフィアの反応が大したことないのである。これは、明らかに自分の乗る鬼のそれとは異なるものである。ということは、全て紛い物であって、『奴』はいないのではないか、

ということに男は気づいた。

「まあいい。奴を殺す前の余興だ。全員ぶっ殺してやるか」

しかし、敵であることに変わりない以上、この４体を生かしておく理由も見出せなかったので、男は余計なことを考えないことにした。そして、この鬼のメンタルスフィアは邪悪な、かつ濃厚な光を全身から放つのだ。それと同時に、どろどろの殺気が周囲にばら撒かれる。

ふと、誰よりも先行していた辰巳は、いち早くことの異変に気づけた。

「あれって、プロトオーガ・・」

自己の視界に映っていたのは、かつて自分と共に戦っていた戦友プロトオーガであった。間違いない、あの白い肌に加え、屈強な肉体。まさしくそれは自分の記憶にあるプロトオーガそのものである。

「ナインさんが帰ってきたの？」

ついで、この事実に気づいたまもるが、安心したような気持ちになる反面、警戒心もまた存続するような感覚に陥る。彼女から見ても、あれはたしかにナインの鬼である。しかし、それが何であるか具体的にはわからないが、この状況があまりに不自然であったため、警戒を解くわけにはいかなかったのであった。

「あれはナイン君じゃない。あんなの、ナイン君じゃないよ」

他方で詩季は、ドスの利き過ぎで、身体が切り刻まれそうなほどの殺気が、ナインの発する雰囲気とは相反することを明確に認識した。それほどまでに、前方にいる鬼は憎しみに満ち溢れた極悪のアウラをムラムラと放ち、ぶち撒いているのである。

「さすがは、詩季・・。せんぱいのことは何でもわかるのね」

辰巳が目を細めて詩季をからかった。

「あんな奴のことなんか知らない」

しかし、詩季は顔を真っ赤にしては、むきになって抗議した。

「おめぇら、ふざけてる場合じゃねぇ。あれがナインじゃねぇなら、こいつはとんでもねぇ相手ってことだからな」

グレイは冷静な意見をもって釘を刺した。皆、緊張のあまり冷や汗が流れてくる。

「こいつ、ナインの鬼よりはるかに強ぇから・・」

グレイは、前方にいる鬼のメンタルスフィアの質的・量的な強さ、また尋常でない殺気から、そう直感した。そして、明らかにこの強大な敵は、グレイたちをねらっているようである。

「詩季とまもるは、後方から援護だ。はるきは俺と一斉に敵を畳み掛ける。いいな」

ただ、こちらにも新型のオーガが4体ある。グレイは、上手く畳み掛けることができれば、たとえプロトオーガであろうとも、撃破す

ることは可能であろうと結論した。

『ＯＫ』

全員の合意を聞くと、ゲイボルグとセアトは、プロトオーガに向かって突撃する。

ところが、壁でもあるのではないかと思えるほどの濃密な殺気のせいか、できればあのプロトオーガの近くに行きたくない。好戦的なふたりであるが、それほどまでに恐怖を抱いていた。しかし、まだ恐怖があるうちはよいほうである。自分がまともな精神の持ち主であることが確認できるから。このプロトオーガの間合いに何らの考えなく踏み込む奴は、勇者でもなんでもないただの馬鹿なのだ。

そのため、一定の間合いまで詰めると、ふたりともそれ以上進まなかった。その時、誰かが口を開く。

「へぇ。お前ら、変わった鬼もってんだな」

なんと、プロトオーガの搭乗者が話しかけてきた。

「鬼がはなしかけてきやがったぞ」

オーガとは、戦うだけしか能のないゴリラのようなものだと考えていたため、敵のほうからコミュニケーションをとってきたことにグレイは驚きを隠せない。

「ああ、そういやお前らシラネェのか。執行官クラスの鬼には人間が乗ってるから、冥土の土産に覚えておくといいぜ」

鬼の操縦者はつばを吐き出すかのように言って、４人を挑発する。

「なめんじゃねぇよ」

辰巳は、既に勝つことを前提に話を進めている鬼の操縦者に完全になめられているのが気に食わなかった。だが、そんな辰巳の挑発も無視して、敵のオーガは話を続ける。

「ついでに、俺の名前は『エイト』で、この鬼が『アザゼル』だ。覚えとけ」

エイトと呼ばれる男は、自己紹介と同時に、一礼した。

「ところでよぉ。あいついねぇの？」

アザゼルがきょろきょろと辺りを見渡す。

「あいつ？」

「アザゼルとそっくりなやつだよ。もちろん、知ってるよな」

「そんなやつ、ここにはいねぇよ」

グレイは吐き捨てるように応えた。

「あ、そ」

エイトは、グレイの言葉で気分を害されたのか、大量の邪気がアザゼルの周囲に結集を始めるのである。

「じゃあ、てめぇらを拷問して吐かせるしかねぇな」

そして、大量に集められた邪気を自己の殺気にまぜて、ぐにょぐにょにして放った。一瞬、ふたりはあまりの恐ろしさに身が凍りつい

た。エイトという男はどれほど邪悪な人間なのであろうかと、想像すら困難を極める。
しかし、その隙が命取りとなる。アザゼルは瞬時に虚物化し、凍りついてしまっているゲイボルグの背後に瞬間移動する。アザゼルの両手が狙うは、ゲイボルグの右腕および左腕。というのも、拷問するといった以上、すぐに殺してはつまらないから、まずは敵の行動を封じるのである。
エイトは、まずは一体目を取ったと思った。

「なに？」

だが、いつのまにか、ゲイボルグの腕とアザゼルの腕との間には対実無効シールドが張られていた。そこに、アザゼルの腕は入り込んでいく。

「グレイ、油断しちゃだめだよ」

メイデンのシールドの一部分がゲイボルグに張り付いていたのだ。そのおかげか、致命傷を避けることができた。

「油断したフリをしてやったんだよ」

どうやら本当にそうらしい。なぜなら、グレイはカウンターを叩き込むために、ゲイボルグ・Dの右腕に暗黒のエネルギーを結集していたからだ。それは全てを枯渇させる地獄の黒炎なのである。

「しねぇぇぇぇ！！」

そして、ゲイボルグの右腕から闇の巨剣が放出される。冥界の力がアザゼルを包み込む。だが、瞬時にアザゼルは虚物化により、どこ

かへ逃れる。

「ち、野郎はどこいった？」

ゲイボルグは闇の剣を消し、アザゼルを探す。

「はるき！８時の方角！！」

詩季は、そのずば抜けた第６感で、容易にアザゼルの位置を探知した。そのまま、アリスのメンタルスフィアが強く輝く。

「ちっ・・」

アザゼルの両腕がいきなり氷結した。アリスによる外法属性物理方法攻撃である。アザゼルの腕は芯まで氷結してしまい、せっかくセアトを背後から貫こうとしたのに、これでは逆に自分の腕が粉々になってしまう。そのため、エイトに一瞬の迷いが生じる。辰巳はその隙を逃さない。

「あはははは、セアト！！あんたの番だよ」

セアトは、リボルバー式の大型銃を手にもつと、それをアザゼルに向けた。そして、ためらうことなくその弾を放つ。

「そんなチャカなんぞ、アザゼルにはきかねぇんだよ」

そう、物理方法ガードバリヤがアザゼルを纏っているため、通常兵器などはこれにかすり傷ひとつ負わせることなどできはしない。しかし、残念ながら、セアトのリボルバーは特殊である。その弾丸には、外法が仕組まれており、一切の物理法則を無効化するのである。

いや、無効化などといったレヴェルではない。むしろ物理法則を反転させ、空気抵抗による摩擦や重力などのマイナス因子を全てプラス化させるのである。したがって、距離が進めば進むほど、その弾丸の威力は驚異的なものとなるのである。なお、外法規則が適用される間の射程距離は短いという欠点はある。

「紛い物の分際で・・」

弾丸はドリルのように螺旋型に激しく回転しながら物理方法ガードバリヤを破り、アザゼルの腹部を粉々に吹っ飛ばした。そこから、どぼどぼと赤い鮮血があふれでる。

「やった！クリティカルヒット」

辰巳はリボルバーを人差し指でくるくる回し、調子に乗る。

「まだだ、はるき。油断すんじゃねぇ」

再びグレイは、冷静にいった。そう、彼のいうとおり、アザゼルから放たれる威圧感は、一向に弱まる気配がないのである。いや、むしろ、それは先ほどよりもはるかに強まってきている。

「結構やるなぁ、おめぇら。いいチームワークだ。手下共じゃあ、到底まねできねぇな」

そう、エイトの発言からすると、まだまだ余裕を滲み出しているのである。明らかに上から目線の発言であった。

「まったくよ、『鬼化』しねぇと勝てねぇんじゃあしょうがねぇな」

「鬼化だと？」

「オメェら、『鬼化』シラネェの？」
「知るかよ」
「まあいいか。てめぇらの強さに免じて教えてやるよ。現形態ってのは、あくまで基本でな、いわゆるエコノミーモードなんだ。それが・・」

そういいながら、アザゼルのメンタルスフィアが何倍にも膨れ上がる。また、筋肉も膨張し、変化の兆しをあらわにしている。外法の世界から、膨大な量のエネルギーを取り込んでいるのか、大気がわなないてしょうがない。

「鬼化すると・・」

アザゼルは完全に巨大なメンタルスフィアに包まれる。それはまるで、夜の東京に突然現れた太陽であり、あたりに緑色の閃光を眩しく放つのだ。しかし、次第にそのメンタルスフィアが元の大きさへと収縮していくと、そこには『鬼化』を完了したアザゼルがいた。

「こうなっちまうんだよな」

もうこのアザゼルは、プロトオーガとしての前形態の原型をなんらとどめていなかった。これはもはや修羅の象徴ともいうべき、極悪の悪魔である。人間の皮膚を全部引き剥がしたかのような赤い肉。そしてなんといっても、肩の部分から生えた巨大な2本の腕が特徴的である。

「じゃ、手加減して悪かったな。これからはマジでやる。死ぬ気でこいや」

ここにいる4人は、生きた心地がしなかった。いったい、どれほど

外なる世界からエネルギーを取り寄せてきたのであろう。敵の強さがおかしすぎるのだ。これが、プロトオーガの真の恐ろしさなのである。グレイは思った。この４人でも、絶対に勝てない。

「姿が変わったから何だよ！！」

しかし、辰巳はリボルバーをアザゼルに向けて数発放った。

「はるき、馬鹿！」

「今は、てめぇなんぞに用はねぇ」

他方、アザゼルは虚物化し、あっさりと回避してしまう。そのため、ここらを覆っていた殺気が完全に消失してしまう。

完全にセアトは無視された。辰巳は、侮辱されと感じ、怒りが爆発しそうになる。

「まずは、てめぇな」

アザゼルが実体に戻ったことで、いきなり兇悪な殺気がこの世界に生まれた。それは、背後から突然驚かされるというレヴェルではない。本当に身が凍り、心臓が止まりかねないほどぞっとするのである。

「まもるちゃん！！」

そう、アザゼルはメイデンを狙っていた。このチームにおける防禦の要であるメイデンが最も邪魔なのだ。

「シールド防禦」

瞬時にメイデンは、自己とアザゼルとの間に幾重ものシールドの層を構成する。しかし、アザゼルはそれもお構いなしに肩に生えた巨大な腕を振りかぶった。まずは、対実無効シールドを通り抜けてしまう。

「わりぃな、この腕って虚物なのよ」

そして、合計8枚も張っていた物理方法ガードバリヤを次々とぶち破ったうえで、メイデンのボディにまで到達し、物理効果を生じさせる。

「きゃあああ!!」

8枚の物理方法ガードバリヤにより、物理効果を相当減殺してもなお、メイデンははるか遠方へとふっとばされ、アーマーがばらばらに砕け散っていく。

「まもる!!」

ゲイボルグが上空からバスタード・ソードを振り下ろしつつ急降下する。

「あめぇな。そんなんじゃ、アザゼルの肉は切れねぇぜ」

バスタード・ソードが右の巨大な腕を切り落としにかかる。しかし、切り落とすとまではいかず、完全に受け止められてしまった。

「くそが・・」

「じゃあな」

アザゼルは空いている巨大な左腕でゲイボルグを掴み取り、勢いよくその左腕ごと大地に叩きつける。その結果、ゲイボルグは大地にめり込むような形になり、肢体の節々をあらぬ方向へ曲げられ、動かなくなってしまった。

他方、アザゼルの肉に、弾丸が食い込んでいた。セアトのリボルバーである。弾丸は次々と肉を掘り起こし、その身体を侵襲する。

「てめぇの相手は、アタシだ！！」

「てめぇに用へねぇっつったろ！！」

突如、アザゼルの右腕が消えた。

「はるき！！上！！」

「・・・！！」

そう、アザゼルは右腕だけ虚物化し、セアトの上に置いておいたのだ。そして、そのままげんこつの要領でぶん殴る。セアトは勢いよく地に叩きつけられる。そのまま、セアトは動かなくなり、アザゼルに食い込んでいた弾丸の勢いも死んだ。

「あとは、お嬢さん、あんただけだ」

アザゼルは、ただ残ったアリスに向かってゆっくりと歩き出した。

「おとなしく、奴の居場所を教えてくれりゃ、殺しはしねぇよ」

「絶対に教えない」

こんな奴にナインの居場所など教えるものか。鬼に屈するくらいなら死んだ方がマシなのだ。

「あんまり女をいたぶるのは趣味じゃねぇけど、どうしてもいわねぇなら遠慮はしねぇ」

アザゼルはさらに足早に、アリスの下へと接近する。詩季はどんどん近くで見えるアザゼルのおぞましさを体の髄からひしひしと感じていた。特に鬼の放つ威圧感に過敏な彼女は、人一倍にそのおぞましさを感じてしまっているのだ。そのおぞましさといったら、すぐにでも前言を撤回したくなるほどである。しかし、自分で決めたのだ。もう、ナインには迷惑などかけないと。だから、絶対に逃げるわけにはいかない。

「アリス、行くよ」

鬼女アリスは、詩季に応えるようにメンタルスフィアを膨張させ、周囲に強烈な烈風を巻き起こす。

「やる気満々って感じだな。もう命は保障できねぇぜ」

アザゼルは、一瞬で離れたところから、巨大な右腕を伸張させて、アリスを突き刺そうとする。それは、矢のような速さでアリスを襲い、とてもではないが回避できない。

アリスは、物理方法ガードバリヤを何重か張っていたが、その攻撃力はあまり減殺されないで、アリスの身体へ到達する。

「きゃあ！！」

それは、アリスの右腕が肩から下にかけて吹っ飛んでいくほどの威力である。鮮血を周囲に撒き散らして、その少女のような容貌を汚していくのである。だが、詩季も負けてはいられない。尋常でない長さまで伸びきったアザゼルの右腕を氷結させるのだ。

「ち・・」

すかさず、アリスは左手に巨大なハサミを手にとり、その右腕を思い切り叩くのである。すると、氷結した右腕が粉々に砕け散る。

「虚物化を強制解除する氷か。厄介だな」

しかし、アザゼルにとってはそんな腕の1本や2本を再生することなど朝飯前である。すぐにアザゼルの右肩から、泡のようなものが無数に発生し、その泡で巨大な腕を再構成するのである。

「だが、それだけだろ」

アザゼルはそのまま右腕でアリスをなぎ払う。竹のように軽いアリスは左方向へと飛んでいってしまう。

「もう、アンタじゃ無理だ。早く吐いちまえよ。殺しはしねぇからよ」

アリスが倒れている地点まで、アザゼルはにじり寄ってくる。

「嫌・・」

そういって、アリスは敵の右腕を再び氷結させた。もともと気の長いほうではないエイトは、いい加減堪忍袋の緒が切れてしまった。

「このアマ！しつけぇんだよ！！」

アザゼルは、倒れているアリスの左腕に、巨大な左腕をハンマーの

ように思い切り振り下ろす。
　べちゃ。
アリスの左腕は原型がよくわからないほどに潰されてしまった。

「次は、てめぇの腹いくぞ」

アザゼルは、巨大な両腕をアリスにチラつかせ、威嚇しながらどんどん距離を詰める。この兇悪な鬼が近づけば近づくほど、詩季はそこからムラムラと発せられる瘴気に心が破壊させそうになる。

（怖いよ・・）

詩季はこれほどまでに悪意に忠実な存在など見たことがなかった。足の震えが止まらない。こんなところで死にたくなかった。ナインに対して、謝ってすらいないのに、こんなところで死ぬのはあまりに無念である。それゆえに、怖くて涙が止まらない。

（ナイン君・・）

だめだ。彼に助けを求めないと自分でそう決意したのを忘れたのか。なのに、いまさら何を考えているのであろうか。だから、絶対にこんな奴に負けるわけにはいかない。例え肉体が切り刻まれようと、この心だけは折ってしまうわけにはいかない。

「自分で決めたんだもん。ナイン君には迷惑かけないって決めたんだもん」

詩季は涙や鼻水をたらしながら、怖さで感覚の失った腕に力を入れながらなお、立ち上がろうとした。彼女はもうどうしようもないほどにまで、へっぴり腰を決めていたが、それでもかろうじて立って

いた。

「ナイン君が、頑張れるようにしてあげなきゃって決めたんだもん」
「健気なお嬢さんだこと」

アザゼルは、短い方の腕でアリスの顎の部分を掴み、持ち上げる。
その上、巨大な腕を逆立てて、今にも襲い掛からんと筋肉をひどく膨張させている。

「絶対に言わない！！」
「死ね」

アザゼルの左腕が勢いよく飛んできた。
アリスは、何かに勢いよく飛ばされる。
同時に、何か身体の部位のようなものが宙を飛んでいったのが見えた。
その時、アザゼルはその動きをいったん停止させた。
その次に、詩季は誰かの声を聞いた。

「すまない」

そして、アリスとアザゼルとの間に、よく見知った鬼が左腕をうしなってもなお、アリスを庇うように立っているのをみた。

「怖かっただろう、詩季。すまない」

詩季は、なぜ自分が謝られているのか理解できなかった。

「これからは、もう何処にも行かないから」

そして、詩季はようやく認識した。その者の存在を。その者の名前を。

「だから・・」

詩季はずっと待っていた。会いたかった。優しくして欲しかった。ずっと自分の傍にいて欲しかった。だからこそ、今、その名を呼ぶのである。

「ナイン君」

詩季は、安心したのか、嬉しいのか、怖いのかもう何がなんだかよくわからないのだが、涙だけが止まらないのである。だが、ナインが自分のもとに帰ってきてくれた、それだけは真実なのだ。あんなことを言って、遠ざけてしまったにもかかわらず、ナインはちゃんと帰ってきてくれた。

「俺は、ここに帰ってきた!!」

「ナイン君!!」

そして、詩季は其の愛おしき名をもって、叫んだ。

第25話　アニマ

「詩季にこんなことして、ただで済むと思うな、てめぇ」
「待ってたぜ・・・」

エイトは、ようやく待ち焦がれていたものに出会ったのである。自分と同じ鬼の登場を、心から待っていた。血が騒ぐ。アドレナリンが異常に分泌される。修羅の域にまで到達して、ようやく味わうことのできる戦いの悦び。いま、それがここに列をなすのである。

「アニミストォォォ！！」

エイトは叫んだ。殺したくてたまらなかった、至高の敵である。そうだ、それはナインの鬼。

（それにしても久々に帰ってきたと思えば、なんだコイツは？）

ナインは今さっき、町田に戻ってきたばかりである。すると、帰宅早々、弥生遼子に出撃命令を言い渡されたのだ。早速ここまで来て見ると、とんでもないオーガがいて、ここに来るなり左腕を吹っ飛ばされたのだから、彼もよく状況が呑めていない。しかも、中に誰か乗っているし。ただ、ナインの鬼の腕を一撃で断絶させるほどの威力であるから、この鬼が只者ではないことだけは容易に判明する。

「これは、ナイン君と同じプロトオーガなの、気をつけて」

同じといわれても、全然外見が違うではないかと疑いをはさむ。しかし、鬼に人間が乗っている点や、少なくとも実力的には自分の鬼と同じかそれ以上である点から、どうやら詩季のいうことは本当の

ようだ。とすると、遂に執行官クラスが動き出したのだ。

「戦いの前に、お前何者だ?」

ナインは、素朴な疑問をぶつける。すると、エイトは酷く面食らった。

「あんた、よもや俺のことを忘れたとは言わせねぇぜ」

エイトは非常に息の荒い声で言う。

「悪い、忘れた」

「ざけんじゃねぇ!!さっさと、鬼化しろ!!そして、俺と戦え!!そんな状態のアンタを斃したところで、おもしろくもなんともねぇんだよ!!!」

エイトは、怒号のような声で怒鳴り散らした。そのうえ、両肩の巨大な腕をおったてて、ナインを威嚇する。

「鬼化?何だそれ?」

これを聞いたエイトは唖然としてしまった。

「あんた、マジで覚えてねぇのかよ」

「俺は記憶喪失なんだよ」

エイトは、完全に出鼻をくじかれてしまった。せっかく立てた、両の腕もへなへなと降りていく。これから至高の悦びが待っていたはずなのに、その興奮もいまでは何処吹く風か。

「あーはっはっはっは！！こいつはいいや！！最強のアニミスト様が記憶喪失だとよ！！ちゃんちゃらおかしいや！！」

エイトは気が触れたかのように大声で笑い出した。彼は、ナインに対して過度な期待を抱きすぎていた愚かな自分を、心の底からあざけ笑ったのである。

「あーあ、くだらねぇ。こんな奴もう殺す価値もねぇ。しかし、先生の命を遂げるなら、今が絶好の機会だしなぁ・・・」

アザゼルは、ナインの鬼を一瞥した。

「まあいいや。あんたとりあえず死ねや」

エイトは、急に強烈な殺気を放ちながら、ナインに対して巨大な右腕も同時に突き刺すのである。他方ナインは、とっさに虚物化し、アザゼルの背後に回りこむ。

「虚物化ね。一応、それはできるのか。でもよぉ、そういう戦法は俺たちに通用しないっての」

エイトは完全にナインの行動を読んでいる。すなわち、アザゼルは空いている左腕で、後方に現れたものを思い切りなぎ払うのである。しかし、飛んでいったのは、先ほど切り落とされた腕だけであった。本体はどこかというと、色んなところにいた。

まず、ナインの鬼の片腕が、アザゼルの巨大な腕のうち一本を縛り上げる。他方、ナインは切り落とされた腕を自己再生し、別の方向からもう片方の腕も捕縛する。極めつけは、プロトオーガの両足がアザゼルの腰部を締め上げ、絞め技の条件が整う。あとは、本体がこれを思い切り引っ張るのである。これにより、アザゼルの両腕は

根元から引きちぎられたのであった。

「なんだ、結構やるじゃねぇの」

だが、エイトは余裕であった。腕が2本取られたとはいえ、この程度の損傷など致命傷には程遠いのだ。もしこの男の力が、今の攻撃でフルパワーだとしたら、もう勝負はついたも同然である。基本的にプロトオーガ同士の戦いは、先に操縦者たる執行官を殺したほうが勝ちなのだ。だが、今のような攻撃では、このアザゼルにダメージを与えることができても自分を殺すことなど絶対にできない。

「け・・・」

エイトは、なんだか情けなくなって苦笑した。そして、アザゼルは直ちに引っこ抜かれた2本のうでを虚物化させるのである。

「これでもくらいな!」

ナインのオーガの周囲から、何処からともなく2本の腕が空間を裂いて勢いよく飛び出してきた。上からも、下からも、左からも、後ろからも。もぐらたたきのように、次から次へと、腕が飛んでくるのである。アザゼルは逃げ出す暇さえ与えず、ナインをただひたすらにボコボコにするのである。

「ひゃはははは!!手も足もでねぇかよ!!」

「うわぁぁぁ」

どこからか飛んできた巨大な腕に殴られて、プロトオーガは倒れそうになると、倒れようとしている方向からさらに腕が飛んでくる。その繰り返し。もう、ナインの鬼の全身は肉を砕かれ、手も足も曲

げられ、戦闘能力を失いつつあった。

「つまんねぇ」

エイトは、遠くの本体から、巨大な両腕にただいたぶられているナインのプロトオーガを傍観していた。

「どうしてこうなっちまったのかよぉ」

アザゼルは最後の一発の代わりに、一本の腕でナインの鬼を掴んでは投げ、大地に叩きつけた。そして、アザゼルは、ナインの傍へと移動する。

「なぁ、本当に俺のこと忘れちまったんですかい？俺は、俺を裏切ったアンタを完全に凌駕したうえで、ぶっ殺して復讐をはたしたかっただけなんだよ」

エイトは、ふと懐かしい気持ちに襲われて、過去を思い出していた。

まだ、彼が学生だったころ、自分に外法のいろはを叩きこんでくれたのは、この男だった。この男は、エイトにとってかけがえのない師であったのだ。しかし、この男は仲間を裏切り、ひいては弟子である自分まで裏切ったのだ。許せなかった。自分の信じていたものを全て引き剥がされたのだから。

「昔みたいに俺をぶん殴ってくださいよ、先生！！」

そして、エイトは悲しかった。心のどこかではまだ、この男を尊敬していたから。何か理由があったに違いないと思いたかった。なのに、自分を裏切ったことすら忘れ、自分すらも忘れられたことが、

彼にとって非常に悲しかった。

「せん・・せい・・？」

気が遠くなってしまっているのか、ナインは薄れいく意識の中でその単語を口にした。

（せんせい）

ナインの深層意識の中で、濃霧にかかったようなあいまいな像が揺れていた。ただ、その像は自分のことを『先生』と呼んでいるのであった。

「アンタはこんなもんじゃねぇだろ！もっともっと強かっただろ、団堂先生！！」

（団堂）

ナインは、その言葉を認識すると同時に、消えかかっている自我と自分の中の何かが入れ替わっていくような精神状態となり、何もかもが闇に飲まれていったのであった。

（誰か・・・助けて・・・）

（二）

最後の力を振り絞って起き上がろうとしていたプロトオーガであったが、ついには、糸を切ったように停止した。どうやら精神の負荷をかけすぎて、中の人間が死んだのだろう。

「あっけねぇな」

エイトは、とんだ無駄足であったものだと思いつつ、だるそうにナインのオーガを持ち上げてみた。

「何だ・・・？」

だが、ふとその時、エイトは尋常ならざる殺気を感じた。今まさに自分が触っているオーガの顔が愉悦に浸っているようなおぞましい笑顔を振り撒いた気がしたのだ。まるで触ってはいけないものに触ってしまったかのようで、あまりに気味が悪く、エイトはとっさに持ち上げていたプロトオーガを振り放すのだ。

それは、逆切れされて驚くようなレヴェルではない。誰よりも好戦的な男であると自負していた彼であるが、一発で心が砕かれるようなぞっとする悪寒を味わったのである。喉はいっきに渇き、汗が滝のように流れ出てくる。そう、彼はとんでもないものを呼び覚ましてしまったのである。

「アーハッハッハッハッハッハ！！！！！」

ナインの鬼は満身創痍のその身体で、ゆっくりと立ち上がった。怪しい叫びが天にとどろくのだ。

「これは・・」

エイトは、この男をなぜ早く殺さなかったのかと今更ながらに後悔した。あれから十分な訓練を積み、外法を修め、たといアニミストであろうと負けない自信はあった。だが、いったい何なのだこの恐怖は。これではまるで、わが師を前にした時の恐怖と一緒ではないか。だからこそ、師はこの男に一目置いていたのだ。まさに、外法において天賦の才を持つ男といわれる所以。

「アニミスト、其ノ能ヲ我ノ為ニ呈セ！！ヒャハハハハハ！！！」

ナインの鬼がもつメンタルスフィアは異常であった。いつもは、薄気味悪い緑色のそれが、目を塞ぎたくなるような青色に光り輝きだしたのだ。そして、その光の内部にある何かが、高速で回転を始める。それはまるで、ナインの中に強大な鬼の心がのたうちまわっているようなのである。

そして、一瞬のうちにナインの鬼で『鬼化』が始まる。ナインのプロトオーガは無数の泡に包まれる。あかい泡。あおい泡。くろい泡。色々な泡が、発生しては、鬼の身体を包み込んだ。

「アニミスト・・・」

無限の泡で包まれたナインの鬼は、一斉に泡を吸収すると、すぐに『鬼化』を完了させる。そこにいたのは、『アニミスト』と呼ばれる、ナインの鬼に潜んでいた悪魔である。いや、あるいは、ナイン自身の深層意識に霧散していた『アニマ』、すなわち人間精神の淵源が解放されたのかもしれない。

「憐、受刑者ヨ。汝八ノ執行人ヲ冠セラルルト雖、此処デ処断ス。ギャハハハハハ！！！」

アザゼルも相当極悪な呈を表していたと思う。だが、この『アニミスト』は悪とか善とかいった価値基準で評価できるような代物ではない。すなわち、アニミストそれ自体は正当なる存在であり、邪悪なる存在でもある邪神であった。いうなれば、混沌が最も似合うオーガである。

「これが・・アニミストなのか・・・？」

アニミストの瞳が、前方のアザゼルを捉えた。絶対的強者が、憐れな獲物を索敵したのである。あとは、狩って、殺すだけ。

それと同時に、アニミストの鋭い眼光を通して、死者たちの怨念がエイトの心にも届いてくる気がした。膨大な量の呪いが、一斉に彼の心を地獄へ引き摺り下ろそうとする。

「ネクロマンサー・システム・・・」

エイトは知っていた。事前に先生から聞いたことがある、アニミストの絶対的な強さの秘密。他のプロトオーガには存在しない、アニミスト独自の力の源泉。それをネクロマンサー・システムと呼んだ。もっとも、これの詳しい機能は彼にはわからない。先生が重要なシステムであると、口をすっぱくして言っていたのだ。とにかく、その脅威のシステムが完全に目覚めてしまっている。

怖い。怖すぎる。あの威圧する眼光に見つめられてからというもの、憎しみの力とはこれほどにおそろしいものなのかということを実感する。情けないことに足の震えが止まらない。無数の怨念に責めたてられているこの惨めさを、誰かに知って欲しい。

「先生・・・、俺」

「ニルヴァーナ、アザゼルヲ截断シ且ツ破砕セヨ」

アニミストは、エイトがいわんとしていたことを聞かずして、ニルヴァーナと呼ばれるアニミストの物理属性物理方法攻撃を実行する。ニルヴァーナとはアニミストの背後に浮いている3つの巨大な宝玉のことのようだ。

その3つの宝玉は巨大な槍に再構成され、瞬く間に虚物化し、消え

る。そして、瞬く間にアザゼルの腹部を貫いていたのであった。しかし、それだけではなかった。突き刺さったニルヴァーナはアザゼルの腹に突き刺さったまま何倍にも膨れ上がり、その肉をミシミシと、なんとも痛々しい音を立てながら引き裂いていく。

「先生。あんたやっぱすげぇや・・」

ニルヴァーナは勢いよく破裂した。それにより、アザゼルの上半身はふっとんで下半身が分断され、肉塊と血の雨を降らせた。最後に、ある程度の原型を保っている上半身が大地に落ちてくる。そして、アザゼルはそのまま動かなくなった。

「ナイン君の鬼・・・なんていう強さなの・・」

詩季は、二人の戦いを遠くの方で見ていたため、詳細は不明だが、あのアザゼルを一撃で葬ったところだけはしっかりと見ていた。

「あ・・」

すると、『アニミスト』はその場で倒れた。青いメンタルスフィアの輝きが通常の緑色に戻っていくと、本体もまた元のプロトオーガに戻っていってしまった。
詩季は、アリスの腕を右手だけ自己再生し、立ち上がる。そして、ナインのところまで、重い身体を引きずって歩く。

「ナイン君、大丈夫?」

詩季は、倒れているナインの鬼に声をかけるも、反応がない。

「アリス、お願い」

詩季は、アリスのもうひとつのプログラムを起動させた。それは、自分の精神を対象に分け与える効果がある。
アリスが、ナインの鬼を優しく撫でると、その手を通じて、ナインにもメンタルポイントが供給される。

「私には、こんなことぐらいしかできないけど・・」

その時、ナインの鬼の腕がかすかに動いた。

「うっ・・・」
「よかった、まだ意識がある」

アリスは、精神の供給をやめ、鬼の顔をぺちぺちと叩く。

「し・・き・・」
「ナイン君」
「俺は・・、いったい・・」
「いいの、今は何も言わなくて」
「へへ・・俺・・帰ってきた・・」

ナインはかすかに笑っていた。

「うん。おかえりなさい」

もう夜も深くなってきていた。しかし、今宵の空は大気に舞う塵が消え去ったためか、珍しく星が無数に輝いていて、妙に明るかったのである。ふたりは、それぞれの鬼の目をとおして、何もしゃべらずにその綺麗な星空をただ見上げていた。

―深夜零時―

一体目の刺客アザゼルを葬った、公益社団法人東京陸運保険機構の従業員たちは、全員無事に事務所へと戻ってくることができた。特に、ずっと気絶していた3人は、なぜ自分たちが生きているのかすらわからないでいた。むしろ、あのアザゼルという鬼の襲撃は夢であったのかと思うほどである。しかし、ガレージにその残骸が転がっているところをみると、今日の出来事はやはり現実のものであったと実感せずにはいられないのだ。

とりあえず、積もる話もあるだろうから、皆、それぞれの鬼から降りて事務所へ集まることにした。

「本当、今日はみんな大変だったわね」

弥生遼子が、心からのねぎらいの言葉を述べる。いつかこの日が来るとは思っていたが、まさか今日であったとは思いもよらなかったためである。しかし、過程はどうあれ、全員無事に帰ってきて来れたのが、彼女はうれしかった。

「まったくっすよ。アタシのセアトが手も足もでないんすからね」

とはいいつつ、辰巳はあの恐怖と強さを楽しんではいたようだ。

「敵のプロトオーガの力がこれほどなんて、思いもよらなかったからね」

まもるも、今では安心しきっているのか、妙に落ち着いてしまっていた。

「それにしても、ナインはよくあいつを斃したよな」

グレイは、ナインに向かって聞く。ナインは、正直とまどっていた。気づいたら敵が死んでたから、どうやってアザゼルを斃したのかも覚えてなかったからである。しかし、そんな空気を辰巳が壊してくれた。

「そうだ、せんぱい。いつのまにか帰ってたんだもん。マジでタイミングよすぎ」

辰巳はナインに抱きついた。

「よう、辰巳。いい子にしてたか？」

「ナインさん。おかえりなさい」

まもるも、うれしそうな表情を浮かべて一礼した。

「ただいま、まもるちゃん」

「でも、せんぱい。どうして帰って来れたんですか？」

辰巳は、依然としてナインにくっついたまま訊く。

「ああ、俺、防衛省辞めたんだ」

「まあ、あんたはやっぱ、そうなると思ってたわよ」

弥生は、そういうも、うれしそうな表情をしてくれた。

「あと、はるきちゃん」

「なに、まもる？」

「そろそろ離れた方がいいと思うよ」

ナインに抱きついていた辰巳は、自己の背後に強烈な殺気を感じていた。いや、正確には自分に向けられているのは、可愛らしい嫉妬心で、このアザゼル級の殺気は抱きついているナインに向けられているのだ。

「あははは・・。ごめんね、詩季」

そういって、辰巳はそろそろとナインから離脱する。

「ふん、ナイン君の馬鹿」

「そうことじゃないって。ていうか、いいじゃないかこれくらい。世界的にみれば珍しくないだろ」

「ここは、日本です」

そういって、機嫌を損ねた詩季は外へと行ってしまった。

「おい、詩季。全く、なんなんだよ」

ナインは、外に行ってしまう彼女を見届けつつ、頭を掻いた。

「ふふ、しーちゃんったら、まだ素直になれないのね。ナインさん、早く追いかけてあげてください」

まもるは、うれしそうな顔をして、ナインに道を示してくれた。

「しょうがねぇな」

ナインは、足早に詩季を追いかけていった。

すると、詩季は事務所の玄関を出てすぐのところで、珍しく目を開

いて夜空を見上げていた。彼女はいったい、その見えぬ目を開き、何を見ているのであろうか。

ふと、詩季はナインが近づいてきたことに気づき、ふたりの目が合う。ナインは、久しぶりにその吸い込まれそうな赤黒い瞳をみて、何も考えられなくなる。

「どうしたの、ナイン君。そんなところでぼーっとして。こっちくれば?」

気づけば彼女は、目をいつものように閉じていた。

「そうだな」

ナインは、詩季のすぐ隣に立った。そして、彼女と同じように夜空を見ていた。

「・・・」

ふたりは、あれ以来直接会うことがなかったから、照れくさくて言葉が口をついて出てこなかった。お互いに、いろいろと言うべきことがたくさんあったはずなのに、頭の引き出しから取り出せないでいるのである。しかし、すぐに思いついた簡単な言葉はあった。

「ごめん」

「ごめんなさい」

ふたりの思考過程は全く同じであった。互いに顔を見合わせて、苦笑せざるを得ない。

「なんで、ナイン君が謝るの?酷いこと言ったのは、私なのに」

「いいんだよ。自分なりのけじめだから」
「そうなんだ」

ふたりの心を氷結させていたものが、次第に解けていく気がして、急に話したかったことがあふれてきた。

「でも、本当に防衛省辞めちゃっていいの？」
「独りになって気づいたんだ。過去を持たない俺は、自分の力で自分をつなぎとめておくことができないけど、詩季ならばそれができる。俺がナインでいられるのは、君のおかげだってね。だから、詩季が隣で笑っていてくれているだけで、俺がどれほど助けられているのか知れないよ。だから、俺はここがいいんだ」
「ナイン君・・」
「人は、過去を参照しながら、現在の自分の位置を知る。それは未来の自分さえも同じ。過去があるから、人は希望を抱くことができる、どこかの本にそう書いてあった。だから、唯一俺の位置をよく知っている詩季がいないと何もかもが見えなくなるんだ。そんなかけがえのないモノを守ることに、迷惑なんて消極的な感情が入り込む余地はそもそもなかったんだよ」
「ナイン君・・」

詩季の目から、突然に涙があふれる。

「どうしたんだよ。別に泣かなくてもいいだろ」
「ううん、こんなに人に必要とされたことなんてなかったから、すごく嬉しいの」

詩季は、目をこすって涙を拭いた。

「そうか」

ナインは、それだけ言って、後は何も言わなかった。

「ねぇ」
「どうした」
「どれくらい、私のこと必要？」
「何かに例えればいいか？」
「そうじゃなくて」
「そうじゃないのか」
「態度で」
「態度？」
「うん」
「何をすればよいのだ」
「たとえば、その」
「うん」
「キスとか・・」
「キスって」
「・・・」
「言ってはずかしいだろ」
「言わせたのはナ・・！！」
「・・・」
「・・・」
「これでいいか」
「うん・・」
「ところで」
「え？」
「お前ら、いつから見ていやがった」

ナインは、玄関の扉に隠れて見ていた3人の気配に気づく。ナインは、不覚にも見られていたことに気づかず、顔を赤くする。他方、

詩季は冷やかしに遭っていることすら気づかず、ひとり夢見心地の気分に浸っていて周りのことなど、どうでもよくなっているようだ。

「せんぱい、やっちゃいましたね」
「ナインさんたら、うふふふ」
「へへ、顔真っ赤じゃん」

3人は、急いでその場から散っていった。

「こら!!」
ナインはそういって、3人を追い掛け回しに行ってしまったのである。
ひとり残った詩季は、自分の唇に人差し指をあて、満足そうにそれを愛でていたのであった。

第２６話　陰謀と逃亡

「率直に聞くけど、今のわが社の状況をどう思う？」

改めて弥生遼子は従業員をオフィスの一室に集めて、異例の深夜会議を開始することとした。今日、東京陸運保険機構で起こったこの事件は明らかに不吉な未来の予兆であり、従業員の中に現状況を楽観視するものなど誰一人としていなかった。そのために、こんな時間にもかかわらず、急遽会議を開かざるをえなかったのであった。

「完全に俺たちは、鬼どもの逆鱗に触れてますね」

グレイは、早速そのように結論付けた。おそらく、この結論は全くそのとおりである。

「ついに、プロトオーガが動きましたから」

まもるも、あのとき感じた恐ろしさを噛み締めながら追憶する。

「そんで、明らかにせんぱいを付け狙っていた。どう考えてもアウトじゃないっすか」

辰巳は、ガムを噛みながらも、冷静に応えてくれた。

「追手は必ず来ると思います」

詩季も、今日起こった出来事を総括し、個々の事情を総合的に判断した結果、追手が将来において現れることを具体的に予期できた。

「で、最初の社長の問に答えるならば、今のわが社の状況は、極めて危険な状況にあるといえそうですね」

そして、ナインが最終的な結論を導出した。

「そうね、鬼女やゲイボルグの酷い有様を見ると、敵プロトオーガクラスの実力は半端ではないもの。これが2体以上になって攻めて来たら、もうお手上げかもね」

弥生は、相変わらず大きくため息をついた。

「でもよ。こっちにはアザゼルを斃したナインがいるじゃねぇかよ」

「それは・・」

グレイの発言を聞いて、ナインはとまどっていた。なぜなら、気づいたらアザゼルがコクピットをもぎ取られて完全に機能停止していたからである。だから、ナインは自分がいったいどのようにして、あのアザゼルという兇悪な鬼を斃したのかわからないのである。さらにいえば、また今度、プロトオーガの襲撃があった場合、これを斃せる自信も全くなかった。

「グレイ、ナイン君はやっとのことでアザゼルを斃したんだよ。しかも、偶々ナイン君にとって戦いやすい相手だった、というのも要因としてあったんだと思う」

詩季は、そんなナインの気持ちを察してか、フォローに入ってくれた。というより詩季は、あの時に見たナインの本当の姿のことを、今のところは自分の心の中だけにしまっておきたかった。これをナインに対して言ってしまうと、ナインがナインでなくなってしまう気がしたからだ。だから、あの時に見た、満月の下で輝いていた青

い光や、黒い邪神のシルエットも封印しておくのであった。

「じゃあ、次にプロトオーガクラスがでてきたら、2体まとめてはおろか、1体だとしても勝てないこともありうるわけか」

グレイは、うまく詩季の思惑通りの思考ルートに誘導されていった。

「うん。だからなるべく、プロトオーガクラスとは交戦しないのが得策だと思う」

「でもさ、逃げててばっかじゃきりないじゃん」

辰巳が、ガムでフーセンを膨らましながら突っ込んできた。

「はるきちゃん、しーちゃんはただ逃げればいいと思ってそういってないと思うよ。それに私たちはまだ強くなれるから、きりがないなんてことはないよ」

「まもるの言うとおり、あんたたちの鬼女もゲイボルグ・Dも未だ発展途上なのよ。いずれは虚物化プログラムや、それよりも強力なプログラムも積むことができるかもしれない。とすれば、プロトオーガクラスと戦っていくのは、その後がベストなのよ」

「なるほど」

辰巳は、フーセンガムをしぼませたり膨らませたりを繰り返しながら、そういった。

「そうだとすると、どうやって追手をかわしていくかがネックになるわけか・・」

グレイは、天井を見上げながらそういう。なにか逃亡ルートでもか

んがえているのであろうか。

「今、この瞬間に現れてくるかもしれないしね」

辰巳はまもるの耳元でそうささやいた。それを聞いたまもるは、ブルブルと身体を震わせ怯えてしまう。

「はるきちゃん、そういうこと言うのやめてよぉ」

「けけけけ」

まもるは、辰巳に泣きながら抱きついた。

「まもる、今から敵が襲ってくる確率は、レートの低い宝くじなみに低いから安心していいわよ。なぜなら、敵がすでにここの位置を把握しているなら、私たちは今頃襲撃されているだろうからね。でも、敵は一向に来る気配はない。裏を返せば、ここは敵に知られていないということになる。そして、日本全土というのはかなり広いから、ここが発見されることもそうそうないわ」

「俺の勘だけど、あのエイトって奴、味方に頼るようなタイプじゃなかったよな。だから、ここの場所を誰にも教えなかったんだと思う。そういうわけだから、今すぐ殺されるってことはないだろ」

グレイも、辰巳のいやがらせに見かねて、まもるを安心さすべく、自分の考えを述べた。

「はぁ〜、びっくりしたぁ。もぉ〜、はるきちゃんのせいだからね」

まもるは、顔を真っ赤にして怒り出した。よほど怖い思いをしたのだろう。

「でも、時間はやはり多くないですね。俺たちの力をさらに強化できるだけの時間を作るには、この町田市はベストではないですよ」
「戦艦みたいなのがあればいいんですけどね」

詩季は、この金の無いわが社においてあり得ないと思いながらも、ぼそりとつぶやくのである。

「戦艦か。ひょっとしたら、安上がりで、かつ最強の戦艦が作れるかもしれないわね」

弥生は、考えるポーズをとった。彼女は思考を始める時、いったん髪の毛をかきあげて、手をあごの下に持ってくる。

「持って帰ってきたアザゼルって、メンタルスフィアついてたわよね？」
「はい」
「ふふ、なんかいけそうな気がしてきたわ」
「社長、今度は戦艦ですか・・」

もう従業員は、この人の発想に誰も驚かなくなっていた。そう、弥生は戦艦型のオーガを作ろうとしているのであった。おそらく、安い輸送機かなんかを購入して、アザゼルと合体でもさせるのであろう。

だが、それはかなり妥当な案であると思われる。戦艦型オーガであれば、この事務所に比べてはるかに安全であろうし、逃亡も簡単であるから。もっとも、それが成功するかどうかは別に考慮を要するであろう。

「オッケー。ある程度は、議論も固まってきたし、会議は終わりにしましょうか。それで、あんたたちはこれから家に帰るの？」

弥生は、3人の悪餓鬼どもに訊く。

「あ、いけね。アタシもう終電無いわ」

辰巳がそのようにいうと、町田市に住んでいない3人が次々と名乗り出てきた。

「しょうがないわね、あんたたち今日はうちに泊まっていきなさい」

「マジすか、社ちょ～」

辰巳が、まもるの手を取ってはしゃぎだした。手をブンブン振らされているまもるは困惑してしまう。

「本気っすか？女ばっかりのところで俺は泊まれないっすよ」

グレイは、なにやら顔を赤らめ、声が裏返っていた。

「なに恥ずかしがってんのよ。別に、部屋なんてたくさんあるし、平気よ」

弥生はそんなグレイの様子を見て、微笑みながらいう。

「そうだよ、グレイ。一緒に泊まっていこうよ。事務所もナインさんが寝るところしかないんだから」

まもるは、グレイの手を引っ張って、誘ってくれた。

「あー、わかったよ。ただ、俺はさっさと寝るからな」

グレイは、まもるに弱いらしく、渋々了承するのであった。

「グレイ、今夜はオールね！野球拳とかやろうぜ！」

辰巳は、お泊り仲間が増えたのがうれしいのか、グレイの肩をバンバン叩く。

「ふざけんな！叩ききるぞ」

グレイは顔を真っ赤にして、辰巳の手を払った。

「ちぇ・・。ノリの悪いやつ」

辰巳は、吐き捨てるように言った。

「いや、春樹。早く寝てよね、明日も仕事だから」

そんな辰巳の態度を見かねてか、弥生はついついやんちゃ娘に突っ込みを入れてしまった。

「詩季は、どうすんの？こんな時間だけど、ひとりで帰れる？」

「はい、すぐそこですから」

「そう。じゃあ、ナイン。留守はよろしくね」

「おつかれです」

そういって、弥生家へと向かう４人は、残るふたりに対し別れの言葉を告げ、ぞろぞろと事務所を後にした。そのため、事務所はナインと詩季のふたりきりとなり、急に静かになってしまった。もっとも、外からはまだはしゃぐような辰巳の声がかすかに聞こえてくる。

「詩季、もうこんな時間だし、家まで送るよ」
「大丈夫。ナイン君も疲れてるでしょ？」
「疲れてないよ。さっさと行こうぜ」

そういって、ナインは玄関のドアに手をかけた。

「それなら、私もここに泊まる」
「おいおい」
「だって、あと4時間もすれば、またここに戻ってこなきゃいけないし、それに・・」
「それに？」
「もっと、ナイン君と一緒にいたいの」

詩季は、照れくさそうに、もじもじしながら言った。それをみたナインは、ため息をつく。

「わかったよ。ただ、詩季が寝るところあるのか？」
「私、座って寝るからいいよ。それに、社長の椅子って結構ふかふかしてて気持ちいいんだよ」

そういって詩季は、社長の高価そうな椅子に座り、くつろいで見せた。

「そうか。悪いな」
「私が無理言って残っているんだから、当然だよ。ナイン君はいつもどおりゆっくり休んでて」

そして彼女は、ナインに早く休むように促した。もうこうなってしまった詩季をとめる術をナインは知らないので、その言葉に甘えて喫煙所へと向かう。

「じゃあ、おやすみ」
「おやすみなさい」

―山梨県甲府市―

ナインたちがアザゼルを斃した日の夜が明け、辺りには少しずつ太陽の橙色の光が差しつつある。しかし、時間的にはまだ早朝であり、目覚めているものもほとんどおらず、うす暗いオレンジの世界には静寂がたちこめているだけであった。

甲府市は、近年になって、急激な人口増加をはたして発展したためか、いつの間にか次世代的な大都市となっていた。それはもちろん、鬼の出現のために崩壊した東京都の代替都市としての役割を担うこととなってしまったからである。

さすがに、大量の鉄道網の建設というまでには至らず、かつての東京都のような入り組んだアンダーグラウンドが存在するわけではないのだが、それでもここ3年で異常な発展を見せていた。とりあえず、マンションを片っ端から建造していって、星の数ほどの人間をここに押し込んでしまっているのである。

そもそもここに住んでいる人間は、鬼に知能は無く、こんなところまで攻めては来ないだろうとタカをくくっており、ここは絶対の安全地帯であると勘違いしているようである。もっとも、それは政府の情報統制やマスコミの適当な推測が主たる原因なのであるから、必ずしも彼らに非があるわけではない。ただ、彼らは今から、それらの誤った情報を安易に信じてしまったことを強く後悔することとなろう。

甲府市の上空、鬼を発見する。それは、ナインの鬼であり、アザゼルのようでもある、第3のプロトオーガであった。

「そう、エイトは死んだの」

そこには少女が乗っていた。酷く、悲しみに打ちひしがれてしまっているようだ。というのも、この少女はさきほどから俯いてばかりであったからであった。

「彼、何処で死んだかわかる?」

少女は、何かを媒体として、誰かと会話をしていた。相手の声はここからでは全く聞こえてこない。

「彼らしいわね。ひとりで行っちゃうなんて。そのせいで、彼が何処で死んだかはわからないんだ・・」

少女は涙を流した。自分にとって大切な人間であったのだろうか。声も出さずに静かに涙をただ流していた。

「ありがとう、ファイヴ」

そのまま少女は、下を向いたまま暫くの間、黙ったままだった。そして、気持ちが落ち着いたのか、涙を拭くと、少女は前を向いた。

「この街を全部壊せば出てくるかな?」

前を向いた少女の瞳は狂気に駆られていた。そこには人としての温かみを微塵にも感じられないのである。まるで機械のように忠実で、冷たい目である。

「いくよ、アルビオン。エイトの敵を討たないとね」

少女がアルビオンと呼んだ鬼は、甲府市の人口密集地域へと急降下

した。

―公益社団法人　東京陸運保険機構事務所内―

ナインは、昨日の戦闘もあり、かつ深夜遅くに寝たので、朝８時になってもまだ寝ていた。もちろん、ここに戻ってきた以上、なつかしの喫煙所での難眠生活に逆戻りなのである。だが、それでいいのだ。この狭苦しさこそが、彼にとって最高の居心地のよさであったから。

しかしながら、今日はやけに外が騒がしかった。群集がうようよしているのではないかと思えるほど、足踏みだとか、私語だとかがごちゃ混ぜになって聞こえてくる。

「ちょっと、ナイン。起きなさい」

弥生遼子が、ナインの毛布を引き剥がした。それによって、中途半端に目覚めていたナインも上半身をゆっくりと起こす。

「どうしたんですか、社長。今日はなんか騒がしいですよ」

ナインは、目尻をこすりながら、寝ぼけ半分で訊く。寝癖もひどく、髪の毛もボサボサであった。

「これ見てもらえる」

しかし、弥生は眠そうなナインをよそに、朝刊の第１面をナインの目の前に提示した。

「あの、これがいったい？」

「いいから、この写真を見て」

そういわれてナインは、新聞の一面を飾っている大きな写真をうつろな目で見る。しかし、そこに映っている映像を見て、ナインの目は完全に覚めてしまった。

「プロトオーガ・・」

そう、そこには業火に包まれる街の風景とともに、ナインの鬼とそっくりのプロトオーガが写されていた。ナインは、弥生の手からその新聞を取ると、食い入るようにその記事にも注目した。

『本日未明、未知の鬼が山梨県甲府市を襲撃する大虐殺事件が発生。犠牲者は、少なくとも3百万人か』

3百万人という数字は、かなり大規模な都市をひとつ破壊しなければ、到底到達し得ないような数字である。これは、早朝におけるたったの数時間の間に起こった、かつてない大惨事であった。

「なんですかこれ?」

ナインは、その数字があまりにも現実離れしていたため、何も考えられないのだ。十数人が死亡したという事件ならかなりリアルなイメージがわくのであるが、３００万人という数字にもなると、もはや冗談のような気がしてしまい、むしろ事件の重大性を正確に認識できないのである。

「私が知るわけないでしょ。事務所に着くやいなや、外はもうマスコミ連中で一杯だったんだから。そのせいで、塀を越えて裏口から入らざるを得なかったんだからね」

そういいながら弥生は、塀を越えるときに作ってしまった、スーツの汚れを泣きそうな顔で払っていた。

「じゃあ、さっきから外で騒いでいるのって、マスコミ連中ってことですか」

ナインは、喫煙所の小さな窓から、ちらっと外を見ると、事務所前の公道に無数のカメラマン及びマイクを手にした報道陣が列をなしているのを見た。それにしても、この人たちは一体、いつからここにいたのであろうか。何人かは椅子まで持ってきていたり、塀によじ登ろうとしている建造物侵入未遂の者までいる。とにかく、人もまともに歩けないぐらいに、公道を報道陣が埋め尽くしていた。

「でも、何でうちにこんな報道陣がきているんですか？」

「この記事読んでみて」

弥生は、読めばわかるとでもいうように、数ページ紙面をめくって特定の記事をナインの前に差し出した。

『この未確認の鬼は、東京都町田市を拠点とする公益社団法人東京陸運保険機構によって所有されているとの目撃情報も多数寄せられる』

「これって、もしかして俺たちが疑われているんですかね」

「そのようね」

考えてみれば、ナインがここに来て結構な時間が経つが、人口は極端に少なくなった町であるとはいえ、もう近所ではナインの鬼も有名な鬼であった。したがって、写真をみれば周辺の人は誰でも、お隣さんの鬼ではないかという判断は容易になしえた。もっとも、近所の人はナインの鬼もただの新型ロボットか何かぐらいにしか看做していなかったから、これまで全く気にも留めなかったのである。しかし、そんな鬼が人を襲うものであると知った途端に、このニュ

ースを見た近隣住民の誰かが、報道機関に情報を売ったのであろう。そして、3百万人もの人間が犠牲になり、かつ大都市をひとつ破壊するほどの大事件である。この事件の犯人として最も有力なナインの鬼が疑われるのも当然であった。

「この記事なんて酷いわよ」

そういって、弥生は別のページを開いてくれた。

『一連の鬼騒動は、東京陸運保険機構の犯行によるものか』

「『犯行』よ。『犯行』。もうすでに、色眼鏡で見られてるわ。完全にマスコミは私たちを犯罪者にしたてあげたいようね。むしろ、私たちはその逆だっつぅのに・・」

弥生は、苦虫を噛み砕くかのように悔しそうな顔をした。鬼ではなく、人間によるこのような一手により、自分たちが社会的に抹殺されかねない状況に立たされるとは思いもよらなかったからである。実際に、ナインがマスコミ連中の呼び声に耳を傾けてみると、『出て来い、カルト集団』だとか、『反逆者ども、早く大量破壊兵器を出しやがれ』などと叫んでおり、完全に犯罪者扱いなのである。また、彼らに訳を説明したところで絶対に引き下がることもないであろう。彼らが望んでいるのは、大衆が喜びそうな特ダネだけなのだから。たとえば、『事件関与の鬼、同社事務所より発見』といった記事が書けるまで帰らないであろう。だからむしろ、このような状態で外に出れば、ナインたちは怒号の集中砲火、ならびにカメラのフラッシュを只々浴びせられるのも明白である。

「ただ連中は、うちが本当にプロトオーガを所有していることの裏づけが取れていないからまだ穏便だけど、あれを見られたら終わり

ね」

「たしかに」

ガレージの壁をひとつ隔てたところには、彼らにとって犯行関与に関わる致命的な証拠物があるのだ。あれを押さえられたら、確実に史上稀に見る凶悪犯罪者扱いだ。おそらく、日本史の教科書においてナインたちは、最悪のテロ集団として後世まで語り継がれていくに違いなかった。

「でも、本当に怖いのはそれじゃないのよ。そもそもこの事件は、アンタをあぶりだすために鬼どもが謀った可能性が高い。マスコミを利用すれば、アンタの位置を知ることなんて朝飯前だからね」

「そんなばかな・・」

「そうね。普通じゃ考えられないわよ、そんなばかな話。アンタをあぶりだすために３００万人の人間を犠牲にするなんてこと。でも、それほどまでに奴らはアンタを殺したいんだと思う。だから、この３００万はその意思表示とみるべきね。そしてもう鬼はここへ向かっているはず」

そう、すでに１０００万を超える人間を犠牲にしている鬼どもにとって、３００万という人間を殺すのに造作は無かった。そして、ナインの殺害が連中の至上命題なのであれば、喜んでそれも成し遂げてしまうはずである。

「それじゃ早く対策を打たなきゃ。みんなはもう出社してますか」

「えぇ、そこでテレビを見ながらイラついてるわよ」

それを聞いてナインは喫煙所から出て、オフィスで甲府市大虐殺のニュースを見ている仲間たちを見た。外がマスコミにあふれている状況にもかかわらず、一応、全員が集まっているのは不幸中の幸い

といったところか。それにしても、詩季がここに泊まったのは結果的にはよかったのかもしれない。目の見えない彼女が、あのマスコミの濁流のようなインタヴューを避けてここまで来るのは無理だからである。

『今、我々は事件に関与した鬼がいるとされる、東京都町田市に本拠をおく東京陸運保険機構の前に命がけの潜入を試みております。門には、屈強な門番が数人配置されており、我々は中にも入ることができません。また、中から従業員が出てくる気配もありません』

そのように端正な顔立ちをした女性のニュース・キャスターが報道をしている。この映像には、今まさにナインたちが篭城を決め込んでいる事務所が映し出されていた。本当にすぐそこで生中継をしているらしい。ちなみに、数人いる門番の中には西田がまざっていて、口を固く一文字に結んで立っている。このようなかたちで、テレビに映る知人を見たくはないものだ。

「あ〜、むかつく」

気づけば、テレビに食いつくようにニュースを見ている辰巳がうなっていた。

「マジ何なんだよ、この女。勝手なことばかりベラベラしゃべりやがってよぉ」

辰巳は、テレビ画面に映ったニュース・キャスターに対して、唾でも吐きかけてしまわないかと思われるほどご立腹である。

「はるきちゃん、もう鬼関連のニュース見るのやめようよ。テレビ東京だったら経済系のニュースとかやってるから」

このままニュースを付けっぱなしにしていると、本当に辰巳はテレビをぶっ壊しかねない状況だったので、まもるがチャンネルを変えようとする。

「アタシ日経平均とかよくわかんないからヤダ」

そういって、辰巳はまもるからリモコンを強取した。まもるは泣きそうな顔になる。

他方、グレイはグレイで、相変わらずマイペースにあくびをしてくつろいでいた。例え何があっても、ゲイボルグで叩ききってしまうつもりなのであろうか。この男に関しては、もう少し危機感を持ってもらいたいものだ。

「はいはい、とりあえずアンタたちよく聞いて」

弥生が、うるさいくらいに手を叩いて、皆の注目を集めさせた。

「つい数時間前の会議で、まだ時間はあると言ったけど、事情が変わったわ。すぐに動きましょう」

「動くって・・」

誰かがキョトンとした顔でそういった。

「まず、最優先でナインは虚物化して、どこか人目のつかないところへ隠れていてちょうだい。それから他のみんなもすぐに出撃できる準備をしといて！！」

「もうですか？」

「プロトオーガが来るわ、急ぎなさい」

皆、なぜ今発たねばならないのか、その理由はわからなかったが、プロトオーガという言葉の重さだけは理解できた。そのため、弥生が真面目な表情でその言葉を発すると、どうやらプロトオーガが来るらしいと直感し、ここにいる全員に緊張が走ったのである。

「よし、準備しよう！！」

（二）

弥生の予想は、見事に当たっていた。あらかじめ『鬼化』を済ませていたプロトオーガが、空路より東京都町田市を目指していたのである。この鬼は、アルビオンの本当の姿である。その姿はまるで、大鷲のような巨大有翼生物を思わせる鬼である。身体は比較的小柄であるが、その分、巨大な翼を大きく広げているのである。アルビオンは、接近戦に特化したアザゼルと比較すると、若干物足りないような気もしないでない。しかし、ものの数時間で首都をひとつ破壊したその戦闘能力からして、外見など全く当てにはならない。このアルビオンも間違いなくアザゼルと同程度の力を有していた。

「なんだ。すぐ近くにいたのね・・」

この鬼の執行者は、マスコミの情報をもとにナインの位置をある程度割り出したのである。ただ、マスコミの情報だけでは町田市のどこかまでは特定できなかったので、商業登記などを調査して東京陸運保険機構の具体的な場所を調べざるを得なかった。そのため、やや時間がかかってしまったようだ。

「さて、もうすぐ目標地点ね。首を洗って待ってるがいいわ」

執行者である少女は、狂気にそまった恐ろしい眼で遠くを見つめて

いた。

（三）

「見ろ、ガレージから何か出てきたぞ！」

マスコミ連中のうちのひとりが叫び声を挙げた。すると、それと同時にカメラのフラッシュが途切れることなく閃光を放つのである。

「なんだアレ？鬼なのか？」

先陣を切って、報道陣の前に姿を現したのは、辰巳春樹の駆る鬼女セアトであった。

「こいつはスクープだ。連中、こんな兵器まで隠し持ってやがった」

カメラマンは、何度もセアトの容貌を容赦なく撮影する。

「はいはい、どいて～。仕事の邪魔だよ」

辰巳は、行く手を阻むように控えている報道陣の集団に対し、気にも留めずその巨大な足を歩かせる。すると、危険を察知した集団の一部は、そそくさと逃げていく。

「春樹、あんまり連中を刺激しないで。あとあと面倒だから」

セアトには、弥生遼子も同乗していて、噴火寸前の辰巳に対し、冷静に横槍をさすのである。

「だって、こいつらマジむかつくんですもん」

辰巳は、頬を膨らませて、報道陣を指差して言った。

「ところで、ここに未確認の鬼がいるというのは本当ですか？」

「一連の鬼による事件も、あなたたちが関係しているのでしょうか？」

記者のうちの誰かが、大きな声でセアトに質問する。辰巳は、根も葉もない仮説を立てられ、犯罪者を扱うかのような質問をされているのがどうも気に食わなかった。

「相手にしないでさっさと行きましょ」

いらいらしてきた辰巳の気を揉んで、弥生はそう促した。と、そのときであった。

「これからどの街を破壊しに行くんですか？」

ふと、まだ大学を卒業して間もないくらいの青臭い男が、生ぬるい学生生活のノリで、ふざけて聞いてきた。そのへらへらとした言葉がやたらと辰巳の耳に入り、彼女は完全にぶち切れた。

「おい、てめぇ。もいっぺん言ってみろや、ああ？頭ぶちわってやろうか？」

セアトは、その男に対して巨大なリボルバーの銃口を向けると同時に濃厚な殺気を直接的に与えた。すると、ふざけて言ったつもりであった男は、びっくりして、その場で腰を抜かした。しかも、辰巳の放つ強烈な殺気にやられ、男はとてつもない恐怖に襲われて小便をもらした。

しかし、その間にも他の記者たちは、そのような辰巳の吐いた脅迫

文言や、意思制圧行為などをしっかりとカメラや録音機に収めていた。

「何やってんの、春樹！銃をしまいなさい！」

「社長！こいつらいっぺん痛い目みないとわかんねぇんだ！だから、アタシは・・」

弥生は、辰巳の頬を思い切りはたいた。辰巳は、じぃんとして感覚が無い頬を手で押さえて、それ以降、口を動かさなかった。

「あんたの気持ちは痛いほどわかるわ。でも、連中の挑発に乗るのは、それこそ連中の思う壺だわ。こいつらは、そうやって私たちにとって不利な情報ばかり集めて、おもしろおかしくして記事にするのが仕事なんだから」

弥生は、明日の朝刊、いや今日の夕刊には、セアトの脅迫行為の様子が1面を飾っていることだろうと思い、頭をかかえた。

「社長、すいませんでした・・」

辰巳は、弥生や仲間たちに迷惑をかけたと認識する。そのうえでこれを反省し、銃を納めた。そのとき、まもるから通信が入る。

「社長、こっちは準備完了です」

「おねがい、まもる」

「はい」

すると、ガレージから鎧を一切纏っていない状態の鬼女メイデンが出てきた。代わりに鎧はどこかというと、ゲイボルグ・Dを覆い隠すかのようにくっついていたのであった。なぜこのような手段を採

ったのかというと、取引先に迷惑をかけるわけにはいかなかったからである。ゲイボルグは、既に一般公開されているとはいえ、発売前である。にもかかわらず、東京陸運保険機構がこれを所有していることがマスコミに明らかとなれば、こことＢｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社に繋がりがあることを感づかれてしまう。そうすると、Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社にまで疑念が飛び火しかねないのだ。あと、付随的な理由としては、ゲイボルグ・Ｄが運搬しているアザゼルの残骸を隠しながら運び出す意図もある。

「今度は、３体もでてきたぞ！全部見たことのないやつだ！！」

相変わらず、フラッシュが途切れ目無く光っている。
最後にガレージから出てきた鬼女アリスが、ガレージの扉を閉める。
カメラマンたちは、そういったしぐさのひとつひとつを映像化していったのだ。

「じゃあ、西田。まだ事務所に残ってる人を急いで退去させて。多分、うちらはしばらく帰れないと思うから、留守もよろしく」

『了解です。隊長。どうか、お気をつけて』

それを聞いて、弥生は通信を切った。
そして、４体の鬼たちは、宙に浮く。

「空を飛んだぞ！逃げる気だ！」

そう感づいた報道陣は、急いでこれらを追いかける準備をする。実に手際よく、機材などを車に詰め込んでいくのだ。
しかし、鬼たちはそれよりもはるかに速いスピードで、空を駆けて、北へと向かっていった。とりあえず、マスコミ連中は完全に撒いた

ようだ。

「じゃあ、予定通り、ナインの待っているところまで行きましょう」

たしかにマスコミは撒いたが、弥生にとってはこれからの行動の方がむしろ気がかりであった。この先何がどうなるのかはまったく予測できないのである。もうとっくに、公益社団法人東京陸運保険機構の事務所は見えなくなっていった。

（あそこに帰れることは、もうないのかもね・・）

弥生は、途端に足元が崩れ去るような感覚に陥った。あそこは疲れたときに羽を癒す場所であったから、今まではそこを基点に十分な活動をすることができたのだ。しかし、今となって自分は、根を失った草と同義である。だから、弥生はどうにも不安であった。

「社長、どうしたんですか？いつもの社長らしくないっすよ」

辰巳は、もうけろっとして、横にいた弥生に声をかけた。

「心配しなくても、社長はアタシが守りますよ。だから社長は、いつもみたく偉そうにしてなきゃ」

「私って、そんなにいつも偉そうにしてる」

辰巳は、言わなくていいことを言ってしまい、笑ってごまかそうとする。

「社長、私も社長やみんなのためにがんばりますから」

詩季が、通信で割り込んできた。

「りじちょぉ～。私も一生、理事長に尽くすと決めたんです。ですから、どこへとも付いていきます」
「『あいちゃん』、あなたもきたの？」

弥生の秘書である『あいちゃん』は、詩季のアリスに乗せてもらっていた。彼女も間接的にアリスのメンタルスフィアに触れているため、心が吸われて気持ち悪そうだが、それだけに秘書の必死の決意を感じる。

「そうだぜ、社長。一宿一飯の恩義っす。近寄ってくる奴は叩ききってやります」

メイデンの鎧に包まれて息苦しそうなグレイが、格好のつかない様子でいう。

「私たち、みんな未熟者ですから、社長がしっかりしてくれないと困るんです」
「まもる・・」

まもるの言葉で、弥生は自分がこの会社のリーダーであったことを自覚させられた。自分がしっかりしなければ、この子たちを導くことなどできやしない。

「あんたたち・・」

そうだ、公益社団法人東京陸運保険機構はここにあるじゃないか。あの事務所は単なる箱なのだ。そもそも、ここは社団法人だった。すなわち、組織を構成する『人』があってはじめて法人格が与えられる存在である。本来ならそれで必要十分であったのだ。そして、

自分のまわりにはこれだけ頼もしい『人』が社団性を維持してくれているのだ。だから、公益社団法人東京陸運保険機構はここにある。ここが、自分の帰る場所だ。

「じゃあ、気を取り直して、ナインのいる八王子山林地帯へ行きましょう」

『了解』

第27話　インファント・エクゼキューター

弥生遼子たちが、町田市の事務所を離れて数分が経ったころであった。それでもまだ、半数くらいの報道陣が事務所付近に残っているようである。この者たちはこれから事務所の連中が帰ってくることを期待しているのか、あるいは侵入でも試みているのか、マスコミの執念は半端ではないようだ。もっとも、あきらめてカメラを車に積み込むなどして、だらだらと帰還する準備を始めている者もいる。

「おい、なんだあれ？」

カメラマンの男が、西の空から大きな鷲がこちらに接近していることに気づいた。

「鳥か？いや、あれは・・」

しかし、それは鳥にしてはあまりにもでかすぎるものであった。それは報道陣たちに近づくにつれ、像が次第に大きく見えるようになってくる。その物体が事務所の上空に到達する頃には、体長が２０メートルほどの大きさであった。改めてそれを近くでよく見ると、鬼の身体に巨大な翼がついているのである。すなわち、これは、プロトオーガ・アルビオンである。

「ここがそうね。しかし・・」

アルビオンは、辺りを見回すも、アニミストらしき存在はおろか、その仲間すらも発見できなかった。

「こいつも、連中の仲間なのか？」

報道陣たちは、またまたスクープだといわんばかりに、急いでしまいかけていたカメラを慌てて取り出し、フラッシュをその鬼に対して、浴びせまくるのである。報道陣たちは、こんな鬼もいままでみたことが無かったため、少々興奮気味なようだ。

「五月蝿い蝿ね」

アルビオンに乗る少女は、フラッシュの光が気に食わず、まるで汚いものでも見るかのように吐き捨てた。とりあえず不快の源を排除

するべく、彼女はいっそのこと、ここにいる連中を始末してしまおうかと考えた。しかし、連中はマスコミである。まだ利用価値がありそうだった。そこで少女は、いいことを思いついたのだ。

「報道陣のみなさん。ご安心ください。私は、ある傭兵会社に所属するもので、未確認オーガの討伐に参りました」

少女は、性格を反転させたかのように、透き通った優しい声で報道陣に語りかけた。そのため、報道陣連中も一瞬、戸惑ってはいたが、すぐ少女の会話に応じる。

「未確認オーガの討伐ですか。見たところ、そちらの兵器は我々のデータベースにも無い、全く新しいもののようですが・・」

「はい、これはわが社が開発した新型兵器アルビオンといいます。このアルビオンならば、あの未確認オーガの討伐も可能です。ですが、困りましたね。討伐対象が何処へ行ったのかも知れないのでは、日本の安全を守ることも到底かないません」

「はい、まったくそのとおりですね」

「ですから、我々とあなた方で、これから協力してはいただけないでしょうか？もちろん、未確認オーガの情報だけを提供していただければ結構です。そして、目標討伐の折には価値ある情報の提供をお約束しましょう」

予想外の来客にはじまり、予想外の提案をもちかけられ、報道陣たちは取り留めのない情報処理をするだけで頭がパンクしそうになっている。そのため、彼らは互いのツレと顔を見合わせてぶつぶつと相談をしだす。そのうち、ある記者が少女の提案に応えた。

「そりゃあもう、我々も事件の解決を願って止みませんから、そういうことでしたら喜んで提供しますよ」

前の記者の発言が起爆剤となったのか、次々と提案を受け入れる声がする。

「いやいや、この件はウチがもらう。あんたたちはすっこんでろ」

「ふざけるな！俺だ！」

記者たちは、このアルビオンが特ダネのなる木にも見え出したのだ

ろう、醜い欲望をむき出しにしてこぞってその翼の下に集まりだした。

「情報提供をしていただけるのであれば、どの社であっても結構です。ただ・・」

「ただ・・？」報道陣たちは、アホ面を下げて、食い入るように聞く。

「首謀者の正体をお教えするのは、最も早く目撃情報を提供していただいたところにしましょう」

「なるほど」

報道陣連中は、そろって相槌を打った。

どこの会社よりも、一秒でも早く、空前絶後のスクープを国民に提供して、彼らの知る権利に資する。それこそが彼らの使命であり、悦びなのだ。だからマスコミへの宣戦布告とも取れる、その少女の言葉によって火がつかない記者などいない。案の定、彼らは記者としての名にかけてどの社よりも目撃情報を取得することに情熱を燃やし、意気込みだすのである。早速、それぞれの車に乗り込み、取材に出かけてしまうのだ。

少女の思惑通り、うまくマスコミを乗せられた。これならば、すぐに有力な目撃情報も出てくるに違いない。そのように少女は感じた。マスコミは敵に回せば厄介だが、味方に抱き込めばこれほどまでに頼りになるものは無いのだ。そう、連中は情報に対して非常に貪欲だから、全国に網目のような監視を張り巡らせ、対象を封鎖・管理にいたるまで丁寧にしてくれる。

「それにしても、馬鹿な連中。大量虐殺の犯人が目の前にいるのに、欲望に駆られて何もわからないなんてね」

少女の口元から笑みがこぼれる。こらえようとしても、どうしても口元が緩んでしまうのだ。これは非常に滑稽なのである。

（お前たちが追跡し、国民の審判にかけようとしているのは、まさにこの国を守ろうとして勇敢にも戦い続けているこの国の希望なのにね。それを、お前たちが本当にあだなすべき敵に組したうえ、そ

の希望を消し去ろうとしているのだから愚か以外の何者でもないわ）

少女は改めて、アホ面を垂れ下げて欲望をむき出しのまま群がってきた記者たちを思い出し、ついに笑いがこぼれる。

「あはははは!!ばぁか!ばぁか!ほんと、ばか!!」

少女は笑いが止まらなかった。この国の人間は、本当に愚者しかいない。それを再確認できた。そうだ、もうこの国は一度、滅ぶべきなのだ。たるみきってしまったうえ、なにもかもが末期的な症状になってしまったこの国を立て直すことはもう不可能である。少女は、いくら大学で政治学を学ぼうと、経済学を学ぼうと無駄であることに気づいてしまった。

『破壊』

それこそが、この国を救う唯一の特効薬であった。膿を出すだけでは足らないのだ。何もかもをその本質的構造から塗り替えていくほどの徹底的改革をしないでは、この国を変えることなど不可能である。そして、破壊のあとに世界を再編していく役目を担うのが、選ばれた天才集団である我々の役目なのだ。

「チャプター9の適用までもう間もなく・・」

全てはこのためにある。我らの計画成功の暁には、崇高な精神と知恵を持つ、すばらしい日本人だけの最高の国ができあがるのだ。それこそが、わが師の描いた理想郷である。それをあの男は・・。

「許せない・・」

それだけではない。あの男は、愛おしき有能なるエイトを無残にも殺した。絶対にあの男だけは生かしておくわけにはいかない。必ず八つ裂きにして、わが師の前にその首を献上する。そうしなければ、チャプター9を心から喜んで迎えることなど到底できないのである。

「団堂ぉぉぉぉぉ!!!」

少女は、あの男のふざけた顔を思い出しては、絶叫した。

―八王子山林地帯―

ナインは、弥生遼子に虚物化して人目のつかない場所へ行けといわ

れたので、とっさに思いついたこの八王子山林地帯に瞬間移動した。
ここは、記憶を亡くしたナインが倒れていたところであり、彼にとっては生まれた場所そのものである。そして、盲目の少女にはじめて会ったのも、この場所であった。
あたりを見渡してみると、本当に自分が目覚めた場所と同じ位置に来たようであり、ところどころ木が折れてしまっていたり、大地がへこんでいたりと以前の戦闘のぬくもりが残されたままである。もっとも、ナインにとってそこまで過去の話というわけではないのであるが、なんだか懐かしくて感傷的になってしまう。
（それにしても、みんなは大丈夫だろうか・・）
弥生が、プロトオーガが来る蓋然性のことを非常に懸念していたから、事務所を脱出する前にそいつと交戦していたら非常に危険である。だが、弥生からは何があっても絶対に事務所に戻るなと忠告を受けている。
（本当に、無事なのかよ）
しかしながら、その忠告はナインにとって非常に厳しい忠告であった。少しだけでいいから、事務所周辺の様子を窺いに戻りたい。
「ん？」
ふと、その時、ナインは草を踏みつける音を聞いた。誰かきたのか。
それにしても、なぜこのようなところに？
「へぇ、何かいるかと思えば、鬼か」
それは子どもだった。
何だただの子どもか、という議論ではない。まだ、１５歳か、もしくはその前後の小さな男の子である。男の子のくせに髪の毛は細くて綺麗な黒髪である。まあ、どこにでもいる風体であるといえば、そうなのかもしれない。だが、普通ではない。この子が山登りに来たにしても、それをするには明らかに不適切な服を召している。しかも、引き込まれそうなほどのカリスマを漂わせている、なんとも不思議な少年である。そもそも、子どもがこんなところに独りでいること自体が普通ではない。まさか、カブトムシでも取りに来たわ

けではなかろう。
「子どもがこんなところに何の用だ?」
ナインは、子どもならまあいいだろうと、つい声をかけてしまった。
「わ、鬼がしゃべった!」
子どもは表面上、驚いたしぐさをしたが、多分心の底からとはいえない。まるで、鬼の中に人がいることを知っているようであった。
「まさか、お前・・」
鬼の中に人が乗っていることを知っている人間は限られているはずである。とすると、この少年もプロトオーガの執行官なのか。
「何、お兄ちゃん。僕の顔に何かついてる?」
たしかに、この少年をプロトオーガの執行官であると仮定すると、このようなところに少年が不自然にも存在することの説明ができる。しかし、この少年はプロトオーガを持っていないし、そもそも殺意がまったくないのである。そのうえ、全くといっていいほど隙だらけであり、本当に顔に何かついてるのかを必死になって探しているのだ。
「いや、なんでもない」
とりあえず、降りてみようか。
そう思って、ナインは少年の下へと降り立った。
「お兄ちゃん、こんなところで何やってたの?」
少年は、生意気そうな顔に笑みを浮かべて訊いてきた。
「それはこっちの台詞だ。ここは危ないぞ、早く帰ったほうがいい」
「うん、知ってる」
本当に何を知ってるのか問いただしたくなるほど、少年はにこやかに応えてくれた。
「それよりさ。お兄ちゃんの名前はなんていうの?」
この少年、なかなか嫌な質問をしてくるな。ナインと答えたら、きっと変な名前とかいってからかってくるにちがいなかった。しかし、適当な名前をいうのも信義にもとる。そういう大人の汚い部分を、子どもに見せるのはよくない。

「俺は、ナインだ。変な名前だろ」
ナインは、先に釘をさしておき、変な名前といわれるのを予防しておく。
「お兄ちゃん、ナインっていうの？あのね。僕は、ノイっていうんだ。なんとなく、僕らの名前似てると思わない？」
変な名前である点は、よく似ている。
「そうだな。俺たち、仲良くなれるかもしれないな」
「うん、本当だね。じゃあナイン、今から僕と友達になってよ」
ノイは、ナインの手を引っ張ってきかなかった。
「わかった。わかった」
こんなところで泣き喚かれたら、たまったものではないので、ナインは渋々、ノイと友達になってしまった。それにしてもこんな時に、なんて面倒くさい子どもなのだろうと思う。
「やった。これで僕とナインは、はれて友達になったってわけだ」
ナインは、子どもというのはこんなに面倒なものだったかと思いを馳せた。
「友達になったからには、絶対に友達のお願いは聞かないとだめだからね。いいね、ナイン！」
「はいはい・・」
ナインは、もうどうとでもしてくれと惰性にまかせてしまった。
「じゃあ、早速、ナインにお願いがあります」
「なんだい？」
「あれに僕をのせてよ」
ノイは、ナインの鬼を指差して言った。
「だめだ、あれは子どもの遊び道具じゃない」
ナインは、ノイのお願い第1号をきっぱりとはね除けた。
「ナイン、友達のお願いは絶対だぞ。ルールは守らないとダメだって」
再びノイは、ナインの腕を引っ張ってきかなくなった。
「鬼に乗るのは、そういう次元じゃねぇんだよ。あいつは乗り手の

魂を吸うんだ。お前も魂を抜かれて、心神喪失にでもなったら、親御さんが心配するだろ」
「僕、お父さんもお母さんもいないもん。だからナインだけなんだ。一生のお願いだよぉ！」
本当に、一生のお願いといってくる奴のお願いに限って、どうしようもないお願いなのだ。とはいえ、この少年は誰かによく似て、一度決めたらテコでも動かなそうである。
「たく・・。わかったよ。じゃあ、乗れよ・・」
ナインは諦めざるを得ず、このわがままな少年を鬼にのせることにした。
「やった」
ノイは、飛び跳ねて喜んだ。

「へぇ、鬼の中ってこうなってるんだ」
ノイは、プロトオーガの操縦席内を丹念に観察しだした。ナインは、この少年がはしゃぎ散らすのではないかと気を揉んでいたが、中に入ると、意外とおとなしくなったので安心した。
「これは、コントロールパネルだね」
そういって少年は、ナインの膝上に乗っかって、コントロールパネルに手をやった。
「おい、それは触るんじゃない」
ナインは、ノイを抱き上げて、コントロールパネルから遠ざけた。
「ケチぃ。いいじゃん、そんぐらい」
そういって、このガキは騒ぎ始めるのである。あまり広くない操縦席で子どもに喚かれるとたまったものではない。
「わかった、わかった。だが、その代わり、俺が操作するからな」
「うん、じゃあそれでいいよ」
ナインは、こんなものを見て、何が面白いのかさっぱりわからなかったが、見るだけでこのガキが満足するならやむを得ないだろうと、パネルの操作を始めた。

「あ、その項目なに？」
「これか？」
ノイは、子どもがいかにも飛びつきそうな項目である、『ｗｅａｐｏｎｓ』を指差した。というか、このガキはｗｅａｐｏｎｓなんて単語をいつ習得したのだろう。
まあ、そんなことはどうでもいいとして、該当項目を開くことにする。すると、そこには『ｓｗｏｒｄｓ』と『Ｃ．Ｒ．Ａ．Ｉ．Ｎ．Ｅ．（胸部大型波動砲）』しかなかった。
「なにこれ？武器なんて全然ないじゃん」
ナインは、気にしていたことを子どもに指摘されて、少々傷つく。
「俺もまだ使いこなせてないんだよ」
「ふぅーん」
ノイは、画面に浮かび上がった、ふたつの項目をただじっと眺めている。
「どうする、動かしてみるか？」
そういって、ナインは鬼の手を、グーとかパーとかにしてみせた。
「ああ、もういいよ」
「なんだ、もういいのか」
それにしても変なガキである。普通のガキなら、動かす方に興味がそそられて然るべきであろうが、ノイはコントロールパネルを見ただけで満足してしまったようなのだ。
「うん、ありがとう。ナイン」
それを聞いてナインは、『ｅｘｉｔ』のボタンを押した。

ナインとノイが、プロトオーガを降りると、突然にナインの携帯電話が振動を始めた。弥生遼子からである。
「悪い、ノイ」
ナインがそういうと、ノイは気を遣って、ナインとは距離を置いてくれた。
「はい、社長ですか」

『もしもし。もうすぐそっちにみんな着くと思うから』
「よかった」
それを聞いて、ナインは安堵した。
『そっちは大丈夫？変わったことはない？』
「変わったこと、ですか・・」
変わったことといえば、非常に変わったガキがいたことぐらいである。そう思って、ナインは、ノイの方へと目をやる。
「あれ？」
さっきまでそこにいた小さな少年はどこにもいなくなっていた。一体、いつの間に姿を消したのであろうか。どこかへ移動するにしても、草の根を踏みつける音でよくわかるはずであったが、そのような音も聞こえない。まるで、ノイという少年は、はじめからこんなところにいなかったかのように、消失してしまったのだ。
『ねぇ、どうしたの？なんかあったの』
ナインは十秒ほど思考停止していたらしく、心配になった弥生が聞いてくる。
「いえ、すいません。何も無いです」
『そう、ならいいけど』
弥生は、心のどこかで不自然なナインの応対を疑いながらも、この男が何も無いという以上、それ以降は聞かなかった。
「はい、お待ちしております」
ナインがそういうと、電話は切れた。
（ノイ・・。お前はいったい・・）
ただの子どもでないことだけは間違いない。しかも、鬼に乗せろと言ってきたにもかかわらず、別に動かさなくてよいと言い、武器情報だけ見て降りてしまった。このことからあの少年は、プロトオーガの内部的な情報を探っていて、それを目的にナインに接触したものと考えられる。
（まさか・・）
やはり、あの少年はプロトオーガの執行官なのか。いや、だとした

ら、とっくに隙だらけのナインは殺害され、プロトオーガも強取されていたに違いない。ナインの弱点を探して、後の戦闘を有利にしようなどといった、回りくどい戦術など全く合理性が無いのだ。しかし、突然にナインの前にひとりで現れ、突然に消えてしまったことから、執行官と考えなければ説明がつかない。だとすると、ナインはなぜ生かされたのか、疑問は尽きなかった。ナインはただ、キツネにでも化かされたかのように呆然と立ち尽くすのであった。

―???―

そこは、どこかの空である。地上からは非常に高い位置にあるのだが、そこにはひとりの人間の影が浮いていた。

「ナインこと団堂先生か。みんなから聞いていたのと全然違って、面白そうな人だね」

それは、ノイという少年であった。無邪気な笑顔を浮かべて、ひとり宙に浮いているのである。とんでもなく高いところから、もはや小粒と化した人間の街を見下ろしているのだ。

「ただ、彼は記憶喪失なのかな。まったく、『先生』はあの時、どれだけナインを痛めつけたのか知れないよ」

ノイは、自分の師がナインをどれほど痛めつけたのかを想像し、小刻みに笑う。

「でも、一度会ってみてよかったよ。そう思わないかい？アーリマン」

すると、はるか上空に巨大な物体が実物化して現れた。そう、ノイはその上に立っていたのだ。

「あと、今日、僕が黙って『学校』抜け出してきたこと言っちゃだめだからね」

次第に巨大な物体の全貌が明らかになってきた。ノイがアーリマンと呼ぶのは、巨大なオーガであった。ナインのプロトオーガの5倍以上もの巨体を持つ、ユリの蕾のようなオーガであった。花弁の一枚一枚が身を硬く覆うようになっていて、現在見る限りでは、手や

足はなさそうである。それが、静かに上空を滞空しているのであった。

「はたして、チャプター9はどうなることやら」

そして、かすかに笑い声を残したまま、ノイとアーリマンはどこかへ消えていった。

第２８話　戦艦引渡作戦

暫くすると、公益社団法人東京陸運保険機構の従業員たちが、ナインの待つ八王子山林地帯の奥深くにある特定のポイントへとやってきた。ナインが見る限り、鬼女アリス、鬼女セアト、鎧のない鬼女メイデン及びなんだかよくわからない鉄の塊（ゲイボルグ・Ｄ）が過不足なくそろっており、安堵した。

「待たせたわね」

皆がそろったところで、それぞれは自己のオーガから降りて、互いの表情を確認しあうことで、その無事を実感できた。それにしても、なぜか田中愛、いや『あいちゃん』まで付いてきていたのは驚いた。

「心配しましたよ」

ナインは、仲間に目立った外傷がないことを見て、しばらくぶりに笑顔をつくることができた。

「ただ、面倒なのはこれからよね」

弥生遼子は、ナイフを刺すような声で突っ込みを入れる。そう、ナインたちはいつまでもこんなところにいるわけにはいかないのだ。食料を確保しなければならないのはもちろんだが、いつ執行官クラスのオーガに襲われたとしても、まともに渡り合えるほどの実力を今のうちに備えておかなければならない。そのためには高度な設備が絶対不可欠である。

しかしながら、ナインたちは、プロトオーガだけではなく、厄介なマスコミにまで追われる始末である。まさに八方塞りの状態であっ

た。

「これから俺たち、どうすればいいんでしょうね」

ナインは、仲間たちの無事に安堵したのも束の間、より深刻な問題を認識し、不安になった。

「とりあえず、ここにくるまでにみんなと考えたことだけど、やはり移動も容易で設備もある戦艦を手に入れなきゃね」

「でも、そんな戦艦を私たちに売ってくれるメーカーなんてありますか？」

桐生詩季は、やはり不安そうな顔でわが社の社長に訊く。彼女の言うとおり、公益社団法人東京陸運保険機構は、マスコミの報道によって、本件虐殺事件の事実上の被疑者となっている。そのため、会社名義で戦艦を購入しようものなら、ほぼ確実に国外逃亡などと罵られ、だれも売ってはくれないであろう。

「ひとつだけあるわ」

しかし弥生は、きっぱりと断言する。

「やっぱ、ウチですか？」

グレイは、相変わらずあくびをしながら口を挟んできた。

「そう。Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社しかないわ。あとは、怪しいブローカーとかもあるけど、問題外でしょ。ただ、あそこは造船が専門じゃないから、戦艦なんてあるのかしらね」

「たしか、グループの子会社にひとつだけ、造船メーカーがあった

ような・・。親父に掛け合ってみますか？」
「グレイ、お願い」

グレイは、弥生に頼まれると、すぐに携帯電話を取り出し、父親に電話をかける。
黒井会長は、なかなか出ないようで、数秒間、皆が緊張する中、電話の呼び出し音だけが静かに鳴っていた。

『おお、珀か』

突然、電話が繋がったようだ。

「親父、ちょっと頼みがあるんだけど・・」
『そんなことより、なんなんだ、あのニュースは？お前たちは、無事なのか？』

黒井会長は、グレイに発言権を与えることなく、親として子を心配した。自分の息子が就職した会社が、大量虐殺に関与していると取沙汰されているのであるから、当然といば当然である。

「ああ、だから今、逃げてるところだ」
『本当に大丈夫なのか？』
「ああ、まあ所詮はマスコミだろ。いざとなりゃ、叩ききるまでさ」

グレイは、自信満々にそういう。

『いや、私がいっているのはそういうことではない、つい先ほど、新たな情報が入ってな。救世主だかなんだか知らんが、新型オーガがお前たちの討伐のため、マスコミと手を組んだようなのだ』
「なんだって？」

ついさっきまで自信満々であったグレイは、一気に慌てふためいた。

『この業界でオーガタイプを作っているメーカーはウチだけなのは知っているだろう』

「ああ」

『もちろんその新型オーガはウチの商品などではない。そして、テレビに映っていた映像から、その新型はメンタルスフィアを付けていることからして明らかに真正オーガだった。だとすると、わかるな？』

「つまり、鬼どもがマスコミと手を組んだってわけかよ」

グレイがぼそりと言った発言を聞いて、皆は表情を凍てつかせた。

『おそらくそうであろう。ところで、そこに弥生さんはいるのか？』

「ああ、ちょっと待ってくれ」

グレイは、そういって、弥生に電話に出るよう指図した。これを見た弥生は、急いでグレイから電話を借りる。

「はい、弥生です。お電話代わりました」

『弥生様、お怪我はないでしょうか？』

「今のところは、皆、問題ないです。それよりも、そちらに迷惑はかかっていないでしょうか？」

『いえ、今のところは。弥生様が特段のご配慮をなさったからでしょう』

特段の配慮とは、ゲイボルグ・Ｄを隠して運搬したことである。

『それに、あなたは息子が仕える主ですから、我々はいかなること

があろうともあなたを信じています』
「そういっていただけると助かります」
弥生は、黒井会長の言葉を聞いて泣きそうになった。

『ところで、我々にも何か協力できることはありますか？』
「実は、そのために電話をさせていただきました。聞いたところによると、造船会社を１社、子会社として傘下に入れているとか・・」
『えぇ、小さい会社ではありますが、たしかにありますよ』
「規模の大小は問いません。戦艦を一隻いただけないでしょうか？もちろん対価は支払います」
『そういうことでしたら、お安い御用です。しかし、引渡し方法などはいかがなされますか？なるべく早いほうに越したことはないでしょう』

そう、一番の問題はそこだ。戦艦なんて巨大な物体が工場から搬出されたとなれば、嫌でも目に付く。そして、戦艦は国外逃亡を容易にするため、おそらくマスコミは、だめもとでもそれを追跡するに違いない。そして、その戦艦のたどり着く先に、我々がのうのうとしていることを突き止められたのであれば、Ｂｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社と東京陸運との関係が明るみになるのも時間の問題であった。また、その戦艦の特徴は、しっかりとカメラに撮影され、鬼どもの手に渡り、すぐにでもあぶりだされてしまう。

「そうですね。やはり御社とウチの繋がりが明るみにならないよう、人が誰も寄り付かないようなところで、かつその会社の最寄の地点がよいかと思います」
『私も同感です。ちなみに、その会社は、商号を株式会社Ｂｌａｃｋ　Ｐｅｒｌといって、本店所在地は三重県にございます』

弥生は、それを聞いて、頭の中に日本地図を張り巡らせた。そして、引渡し場所として最も適当な、？引渡しを見られる心配のなく、かつ？三重県からなるべく近くにある絶好の地点を探るのである。

「あるじゃない」

そう、愛知県名古屋市である。そこは、鬼の出現によって、完膚なきまでに壊滅させられたかつての大都市のひとつである。そこであれば、鬼はごろごろいるが、マスコミはおろか人すらもいないはずである。それならば、仮にマスコミにつけられたとしても、鬼どもが寄り付かせないおかげで、これらを振り切ることが可能である。

「では、詳しい引渡し方法については、後ほどメールにてお送りいたします」

『わかりました。どうか、お気をつけて』

弥生は、それを聞いて、電話を切った。

ただ、ひとつ問題があるとすれば、どうやって安全に引渡しを完了するかであった。おそらく、『債務の履行地は名古屋市です』とすれば、誰もそのような債務を履行したがらないであろう。そうなると、理論的には、マスコミに顔を見られても差し支えない使者を、Ｂｌａｃｋ　Ｐｅｒｌ社へ送り、その者をして、戦艦の操舵をさせ、皆の待つ名古屋に到達させて引渡しを完了するしかない。とりあえず、東京陸運保険機構に関連するモノが、その戦艦に乗り込んでいるところを見られなければよいのであるから、必ずしも引渡義務の履行者が売主でなければならないものではない。

しかし、そこでまた問題が生じる。すなわち、誰か戦艦を操舵できるものはいるのであろうかという問題である。

「この中で、戦艦を操舵できる人っている？」

弥生は、だめもとで訊いてみた。これがだめなら、万事休すである。まず、頼りになりそうな男連中から、挙手はない。

「あの・・」

ところが、小さくてわかりにくいが、かろうじて挙手をしている人間がひとりだけいた。その者は背の高い３人に取り囲まれながらも、やっとの思いで顔を出す。

「『あいちゃん』？」

弥生は驚いた。普段は要領の悪いダメな秘書との烙印を押していたが、この秘書がよりにもよって戦艦の操舵技能をもっているというのだから、驚かずにはいられないのだ。

「私、これでも航空業界志望だったんです。ですから、戦艦操舵士１級の資格を持っているのですよ」

いつもは頼りない秘書が、小さな身体で偉そうに胸を張り出した。

「ただ、身体が小さくて採用されなかったんすかね」

辰巳が、自分よりもひとまわり小さい年上の秘書に対して、ぼそりと言った。

「ムキー！！」

『あいちゃん』は、顔を真っ赤にして怒り出した。それをまもるが、

後ろから押さえつける。『あいちゃん』は、辰巳に向かって、足をジタバタさせていた。

「じゃあ、『あいちゃん』。これから、あなたにはすぐ三重県まで行ってもらいます」

いつのまに書いたのか、弥生は公益社団法人東京陸運保険機構代表理事による委任状を『あいちゃん』に手渡して、命じた。

「いまからですか？」

秘書は、唐突に渡された重々しい委任状を見ては、弥生に聞き返した。

「そ」

代表理事は、理不尽にも、秘書に対して笑顔で頷いた。

（二）

ナインは、なぜか『あいちゃん』とともに、三重県へと向かわされた。どうやら、貴重な操舵士の護衛を任されたようである。ナインのプロトオーガなら、虚物化し、人目を避けながらこれを護衛することができるし、『あいちゃん』をより安全かつ迅速に護送できるのである。ちなみに、同乗者にも虚物化が適用されるかについて、以前、ウサギでその実験をしたところ問題がなかったので、多分『あいちゃん』も大丈夫だろう。

「ナインさぁん、大丈夫ですか？」

秘書は、この得体の知れない鬼に対して警戒心を抱いているようで

ある。

「いまから虚物化しますけど、気持ち悪いのはあっという間なんで」
「虚物化って、体がなくなっちゃうアレですよね？私、ちゃんと元に戻るんですか？」

秘書は、顔を真っ青にして訊いてきた。

「この前、ウサギで実験して大丈夫そうでしたから、安心してください」

他方、ナインは笑顔で答えた。ただ、たしかに、人間で実験するのは『あいちゃん』がはじめてだったので、１００パーセントの自信は彼にもない。

「私をウサギと一緒にしないでください」

秘書は、ナインを細い腕でぽかぽか叩き始めた。

「同じ哺乳類です、多分。行きますよ」

ナインはそれを無視して、ためらいもせず虚物化プログラムを執行した。プロトオーガの中にあるもの全てが、物でも心でもないものへと還元される。

「いやぁぁぁぁぁぁ！！！」

すると、絶叫している間に、秘書はまわりの風景が一瞬にして様変わりしたことに気づいた。

「って、あれ？ここどこですか？」
「とりあえず、大阪府吹田市です」
八王子から行くよりも、ここからの直線距離のほうが三重県にあるＢｌａｃｋ　Ｐｅｒｌ社に近かったためである。もう少し、近いところがあればよいが、残念なことにナインはここ以外は知らないのだ。
「じゃあ、どんどん行きましょう」
ナインは、空路から、目標ポイントへと向かうことにした。

（三）

他方、弥生たちは、戦艦の引渡しポイントである愛知県名古屋市へと向かっていた。彼女らの任務は、安全に戦艦を着陸できるポイントを確保することである。また、マスコミに入り込む余地を与えないために、鬼を倒しすぎることもご法度であった。鬼を全滅させてしまったら、何のためにこのような面倒くさい方法にしたのかがわからなくなってしまうためである。
「多分、私たちが、名古屋近辺に付くころには、ナインたちも戦艦を手に入れていると思うから、作戦はそこからね」
「了解」
「久しぶりに暴れまくれるぞぉ」
辰巳は、血が騒いでしょうがなかった。
「はるきちゃん、作戦が第一だからね」

辰巳は、毎度、作戦を忘れて遊んでしまう節があったことを思い出し、まもるが咎める。

「そうよ、今回は私たちもかなり切羽詰ってるから、命令違反・作戦違反は許さないわよ」

弥生は、隣で操縦する辰巳に対して、笑顔で言った。それだけに『許さないわよ』の内容とは苛烈を極めるのであろうと、辰巳は感じた。

「それと、絶対に戦艦は守ろうね」

詩季は、念のためにそういう。着陸ポイントを死守するだけではダメなのだ。最終目的は目的物の受領なのであるから。

「守るための戦いか。そういうのもたまにはいいのかもな」

グレイは、亡き妹を思い出しては、そうつぶやいた。

「じゃあ、みんなとばすぜ～！！」

辰巳はそういって、とんでもない速度で、セアトを誰よりも先行させた。

第２９話　戦艦引渡作戦１２

―三重県四日市市―

ナインたちは、Ｂｌａｃｋ　Ｐｅｒｌ社の本店所在地があるとされる、三重県四日市市のとある工業地区に来ていた。ここは、あまり鬼の襲撃の影響を受けていないためか、崩壊しそうな建物とか陥没してしまっている道路などはあまりみられない。そのため、街行く人々も、世間で鬼が暴れまわっていることをまるで存ぜぬかのように、平和そうに生活をしているのである。もっとも、関東圏内における山梨県甲府市で起こったような現象は、ここでも発生しているようだ。すなわち、愛知県が崩壊した東京都にあたるので、そこからの避難民が大勢この三重県になだれこんできているのである。

「目標はこの辺りですね、ナインさん」

小さな秘書、『あいちゃん』は、代表理事から譲り受けた地図データをナインの前に提示してくれた。どうやら、目的地は近いらしい。

「少し、降下してみますか」

ナインは、着地地点として適当な場所を探知するため、地上の様子が見える程度に、高度を下げることにする。さらに加えて、ある程度の高さからでも、地上の様子を細かく窺えるよう、鬼の視力を倍化させていく。

「えぇと、これがあっちで、これがそれだから・・」

秘書は、地図と鬼の目に写された像を照らし合わせて、目標を探す。

「あ、ありましたよ、ナインさん。あの建物です。看板にちゃんと『株式会社Ｂｌａｃｋ　Ｐｅｒｌ』と書いてあるでしょう」

『あいちゃん』は、ある大きな工場を指し示した。たしかに、それはナインの目的地に該当する建物であるようだ。

「ただ、あそこは人も多そうですから、このまま降りるわけにはいきませんね。どこかに、プロトオーガを隠せる場所でもあればいいんですけど」

そういって、ナインは近くに、人の立ちよらなそうな場所がないかを探る。すると、当該工場からおよそ1キロメートルほど離れた場所に、木がたくさん生い茂ったエリアがあるのを発見できた。少し歩くことになるが、仕方ないであろう。

「じゃあ、あの地点に降りましょう」

そして、ナインは着地点の世界情報を集め、瞬間移動の準備をした。

「またですか。いつ自分が消えてしまうかもわからないですから、毎回冷や冷やするんですよね・・」
「でも、鬼に食われるのとどっちがいいですか？」
「そりゃもう、鬼に食われるよりはましですけど」
「それなら、早く行きましょうよ」
「はいはい。わかりましたぁ」

秘書は、観念し自分が消えてしまわないよう、目を閉じて祈りを始めた。ナインは、この人が消えるはずなんてないのに、と苦笑した。なぜなら、そもそも虚物化状態は、認識のみによって立脚している

ので、消えたくないと自分を必死に維持している人が消えるなどありえないからである。
そして、気づけば、ナインたちは木陰の下に来ていた。もちろん、臆病な秘書は消えてなどなく、ナインが声をかけるまで目を閉じて祈っていた。

（二）

プロトオーガを置いてきた場所から、徒歩で２０分ほど歩いたところにＢｌａｃｋ　Ｐｅｒｌ社の巨大な造船工場があった。巨大な造船工場といっても、無駄に敷地だけが広いといった感じで、すっかりさび付いてしまったプレハブの建物ばかりが並んでいる。しかも、建物のガラス窓は、堆積した汚れでくもってしまっており、相当古い工場であることが窺える。

「こんなところに戦艦なんてあるのでしょうか？」

頼りない秘書は、ゴミ処理場のような工場を見渡しては不安になってきた。

「あ、従業員の人かな」

ナインは、作業服を着たひとりの男を目撃する。

「すいません」

ふたりは、その男の下へと駆け寄った。

「あの、社長室はどこでしょうか？」
「社長は私ですが？何か御用でしょうか」

その男は社長と名乗った。それにしても、この男は非常にやせ細っており、剃り残した無精ひげまでだらしなく残して、社長としての威厳を微塵も感じないのである。まるで、突き飛ばしたらそれだけで倒れてしまいそうなくらい、ひょろひょろとした男であった。もっとも、この男が社長とされているのは象徴的な意味合いがあるに過ぎず、事実上の経営権は、親会社であるＢｌａｃｋ　Ｗｅｌｌ社が選任した取締役たちによって担われているのであろう。

「あの、僕達は戦艦を受領しに来た者です。本社から連絡が来ていませんか？」

「ああ、たしかアーリー社様でしたね。会長から伺っております」

もちろん、アーリー社とは、偽名である。弥生遼子がメールで黒井会長に指図しておいたのだ。

「それで、目的物の方は・・」

「ええ、用意しております。こちらにどうぞ」

そういって、ひょろひょろの社長は、疲れた顔に精一杯の笑みを浮かべて、奥の巨大なガレージへとふたりを案内してくれた。

（三）

「これが、俺たちの戦艦か・・」

そこには、あまり立派とはいえない大型航空輸送機が用意されていた。とはいえ、オーガを５～６体分を収容可能な格納庫と、乗務員にとって必要となる最低限度の設備があるので、今のナインたちにとっては十分すぎる戦艦であろう。ただ、対空砲なども一切付いておらず、装甲も薄いため、本当に物を運ぶだけの戦艦であるようだ。だから、これを『戦』艦と呼ぶのは不適当であろう。

「あの、中を見てもいいですか？」

ナインは、少し遠くで秘書と商談中のＢｌａｃｋ　Ｐｅｒｌ社の社長に対して訊いてみた。

「ええ、どうぞ」

社長は、かすれた声で承諾の返事をしてくれた。ナインは早速、その中に入ることにする。

「格納庫の中は、このようになっているのか」

ナインは、この輸送機の格納庫内部の情報をしっかりと自分の頭の中に叩き込んだ。これで、プロトオーガを、この輸送機に積み込む条件は整った。あとは、プロトオーガのところへと戻り、虚物化による瞬間移動をすればよい。

ナインは、見学のために輸送機に入ってから１０秒もしないうちに降りてきて、秘書に声をかける。

「たな・・、『あいちゃん』。僕、ちょっと行ってきますね」

「ええ、どうぞ」

ナインは、商談の方は秘書に任せて、いちはやく自分の鬼のところへと戻ることにした。社長は、そんなナインの不審な行動を疲れた目で不思議そうに見ていた。

「それでは、社長。交渉は成立ということでよろしいでしょうか？」

疲れていたのか、ぼぉっとしていた社長は、秘書の声でふと我に返

る。

「ええ、私どもは既に本社から立替払いを受けておりますので、すぐにお乗りになられるのであれば、それで結構でございます」

社長は、それにしても変な客が来たものだなと考えていた。無料で送達するというのに、今から乗って帰るなどと言って聞かないなんて。そんな客を彼は今まで目にしたこともないのだ。しかし、本社からは十分に立替払いを受けていので、債権回収のめどが立たなくなるような危険はないからと、深くは考えなかった。

「では、契約書にサインをお願いします」

社長は、少しくたくたな契約書を取り出した。

「えぇと・・、株式会社アーリーっと。それで、代表取締役江藤太郎・・」

『あいちゃん』は、サインをしつつも、今現在、自分の足は完全に犯罪に浸かっていることを認識していた。このように文書の名義を偽ることは、私文書偽造罪である。さらに、必然的にこの偽造文書を使用することになるので、同行使罪も間もなく犯す予定である。秘書は、心の中で、自分を大事に育ててくれた両親へ懺悔していた。そう、全ては理事長のためである。あのお方のためならば、手を血で染めることも厭わないのだ。だからこそ、許してくださいと祈っていた。

秘書は、改めて自分の前にいる男を見る。今にも寝てしまいそうなうつろな目をしているし、立替払いも受けているのであるから、虚偽名義に利害を持たないであろう。そのように『あいちゃん』は、自分に言い聞かせたのだ。絶対に、手が後ろに回ることはない。多

分。

「では、これで契約成立です」

（四）

一方、弥生遼子たちは、名古屋本隊の少し手前の戦線に到達していた。遠めに見ても、名古屋市は鬼の集団によって埋め尽くされており、まるで芋を洗うような鬼の密集地帯となっていた。そのため、前方は一面の緑の光によって満ち満ちているのであった。この点、東京もそこそこ地獄であったが、ここはもっとひどいことがうかがえる。もう、完全に防衛の対象としては看做されておらず、国家から見放されてしまった可哀想な都市であった。

しかしながら、それだけにこの名古屋市は東京陸運保険機構にとって、人間の入り込む余地などない絶好のポイントであった。

「社ちょぉ、鬼がいっぱいっすよ」

辰巳春樹は、まるで宝石箱を見るかのように目を輝かせていた。

「とりあえず、ナインたちから連絡があるまで我慢しなさい」

そう、戦闘は必要最低限でなければならない。あまりに早く交戦を始めても無駄であるばかりか、鬼を必要以上に破壊してしまうことになる。

「みんな、最後にもう一度、作戦内容を確認しよう」

桐生詩季は、緊張した声でそういった。

「私が、メイデンで着地ポイントを確保すればいいんだよね」
まもるが息を呑み、いう。
「そいで、俺とはるきが、ポイントに近寄ろうとする敵を・・」
「粉砕する！！」
グレイが、言いかけたところを、辰巳が代わりにいう。
「粉砕はともかく、私がまもるちゃんの援護だね」
「うん、しーちゃん。頼りにしてるよ」
詩季とまもるのコンビは、いつものように互いに顔を見合わせた。
「それで、後はナインが・・」
弥生は、何かをいいかけたが、噂をすればナインからの作戦開始を告げる連絡が入ったようである。
「よっしゃ、行くよ。あんたたち」
辰巳は、セアトのメンタルスフィアを覚醒させ、いち早く鬼の群れの中へと飛び込んでいった。
「おい、はるき。先走るんじゃねぇよ」
ゲイボルグ・Dも、セアトに続き、敵陣の中へと飛び込んでいった。
「じゃあ、私たちも行こうか」
「うん」

大人しい女子ふたり組は、最後に敵陣へと突入していった。

（五）

―名古屋市上空―

いちはやく、戦線に突っ込んでいった辰巳春樹は、誰よりも早く着陸ポイントの上空に到達した。そこから地上をみれば、満員のライヴ会場のように鬼どもが敷き詰められており、輸送機などとてもでないが着陸できそうもない。また、上空にも飛行型の鬼が大量に飛び交っている。

「餓鬼はもちろん、青鬼や黒鬼。それに、あれは新型の炎鬼かしらね。油断は禁物よ」

隣に乗っている弥生遼子が、念のために釘を刺した。もっとも。この少女が言葉を素直に聞くのであればよいのだが、期待はできなかった。なぜなら、彼女の顔を見ればわかるように、もう鬼を虐殺することしか頭になく、たとえ理事長の言葉といえど、全く耳に入っていないからである。それに加え、今朝のマスコミ騒動で、相当な鬱憤が蓄積しているのであろう。いくら弥生といえ、今の辰巳を止めることはできなかった。

「じゃあ、まずは着地ポイントにいるあんた達のどてっぱらに風穴を開けてあげるね」

セアトは、巨大な銃器をマテリアライズする。これは、広範囲を対象にする、グレネード・ランチャーである。そして、照準を着陸ポイントにわらわらと密集している鬼どもに向けるのである。

「これ一回使ってみたかったんだよね。非人道的兵器、その名もク

ラスターランチャー」

クラスター爆弾は、無駄に戦火を拡大させる非人道的兵器であるとして、国際法規では強く禁止されているものであるが、このセアトのクラスターランチャーはまさにそれをモデルにしている。その意味では、国際条約違反の兵器である。しかし、対象が鬼であるならば、人権擁護団体からの圧力もないであろうし、国際司法裁判所にチクられることもないであろう。そもそも、ここに人間の目撃者もいない。だから、心置きなく、これを使用できるのである。

「てめぇらは苦しみながら死ぬといいわ」

辰巳は、ためらいもせず、非人道的兵器を自分の真下にいる鬼どもへとぶち込んだ。核となる大きな弾丸から、次々と、小型の爆弾が発射されては、広範囲に物理的な効果を生じさせていくのである。小型の弾には外法が仕組まれているのか、何かに着弾したとたんに、炸裂もしくは炎上する。炸裂した爆弾は、さらに小さな弾丸と化してあちこちを飛び回る。そして、地上にいる鬼たちは、至るところから飛び交ってくる無数の弾丸によって、肉片を散らしながらばたばたと倒れていく。他方、焼夷弾を含む小型爆弾は、鬼の生死を問わず、その身を焼き尽くす。まるで跳弾と炎上の二重奏曲を奏でているようであった。

「えげつねぇ、攻撃だな」

気づけば、ゲイボルグ・Dも、セアトに追いついてきていた。

「アンタだって、似たようなもんでしょ」

辰巳は、にやりとして言った。

「俺は残骸のあと処理ぐらいはしっかりやるさ」

クラスターランチャーの範囲内にできあがった地獄絵図を見ながら、グレイは言い返した。

「まあ見ててみ」

ゲイボルグ・D　は、非人道兵器の傷跡が生々しい場所へと急降下する。かろうじて残っている鬼が、一斉にゲイボルグ・Dに襲い掛かる。

「オメェら全員、冥府へと消えな」

ゲイボルグ・Dはその右腕に結集した暗黒の邪気で、巨大な闇の剣を前方へと放出した。すると、その射程内にいる鬼は、まだ動けるかどうかを問わず、見も心もボロボロに枯渇させられ、地獄の底へと引きずりこまれてしまうのである。しかし、ゲイボルグは依然として敵に包囲されており、横からも後ろからも、敵はどんどん迫ってくるのである。

「そんなに死にてぇかよ！！」

他方、ゲイボルグ・Dは、自己を中心として、闇の巨剣を反時計回りに一周させるのである。次にこれに触れていった鬼から、その身を砕かれていき、粉塵となって消滅していくのだ。そして、巨大な剣が一周するころには、ゲイボルグ・Dを中心とした半径1キロメートル圏内は、綺麗に鬼がいなくなっていた。その部分だけ、不自然なほどに鬼がいないので、まるで絶海の孤島のようである。

「まもる、着地ポイントは完成だ。あとは、確保を頼むぜ」

「うん」

すると、ゲイボルグ・Dと入れ替わるように、鬼女メイデンと鬼女アリスが、綺麗な更地となった着地ポイントに降下する。そして、メイデンは自己のシールドの4分の3ほどを周囲に向けて射出し、結界を創造する。その結界は、半径50メートルほどの大きさがあり、結界の外壁のいたるところにいくつものシールドが巡回しているようだ。

敵の攻撃は、当然に結界の中にいるメイデンに対し、集中的になされた。無数の光球や、弾丸が飛び込んでくる。しかし、そのほとんどの攻撃は、攻撃能力が奪われるか、もしくは攻撃力がゼロ以下にまで減殺されるかで、メイデンまでに届くことはない。

「ふふ・・、今度は私の番ね・・」

まもるは、前方にいる鬼の塊をロックオンする。すると、メイデンの胸当てに、外界から流入した膨大なエネルギーが集結する。大型外法エネルギーランチャーである。平たく言えば、戦艦の主砲のようなものである。

「発射します」

メイデンに結集した巨大なエネルギー弾が勢いよく射出される。それは、巨大なエネルギー球体であり、大地を削り取りながら、雪だるまを転がして粉砕するがごとく、次々と前方の敵をすりつぶしてゆく。球体は、どんどん遠くへ飛んでいってしまい、次第に見えなくなってしまった。また、その通過点には、大地を削った跡以外に何も残らないのである。

「まもるちゃん、上から来てるよ!」

詩季は、上空から紅蓮の炎に包まれた鬼が急降下してくることを認めた。そして、その燃えるような拳でメイデンの結界を突破する。他方、アリスがそれを迎撃する。すなわち、はさみ型物理属性兵器ｃｈｏｐｐｅｒをふりまわして、その拳を受け止める。それによって炎鬼が数秒ひるんでいる隙に、氷結攻撃の要件を充たしてしまうことにする。

対象を氷結するにあたっては、アリスの封印された眼球で氷結対象を見ること、またアリスから一定の範囲内にいることが必要である。あとは、外法属性攻撃の一般的要件である必要なメンタルポイントを供することも当然に加わる。もっとも、対象は現在、アリスのはさみが届く位置にいるので、射程の要件はほとんど無意味である。アリスは、目隠しを解き放ち、その呪われし眼球で森羅万象あらゆる存在を絶対零度の力で滅するのである。炎鬼は、まずアリスに見つめられた燃える腕を単なる氷塊に変えられ、そのまま肩、胸と順次凍らせていく。これだけ凍らせれば十分であった。

「しーちゃん、ありがとう」

炎鬼のうしろにはメイデンがいた。その手には、巨大なエネルギーソードがある。本来、広範に外へと広がっていく性質を持つ外法エネルギーをゼロ収縮させ、ひとつの方向のみにそのエネルギーを結集し、大型の剣とするのである。メイデンはそれを氷結した肩の部分から叩き込んで、胸部ごと粉々にする。

「ホラホラ。あんたたち、そんなやつに時間食ってちゃダメだって」

辰巳が上から降りてきては、ふたりのやり方にケチをつける。セアトは、両手に銃器を携え、肩部・胸部の砲門を全開にしていた。

「はるきちゃん、それダメだってばぁ」

まもるは、辰巳を咎めた。どうやら、はた迷惑なことをやらかすらしい。

「大丈夫、大丈夫。社長もダメとは言ってないし」

「もう勝手になさい・・」

弥生は、半ば自棄的になっていた。

「じゃあ、行くぜぇぇぇ！！」

まずは、肩に内蔵されたミサイルポットを景気づけに連射し、胸部からは速射砲のような小型エネルギーマシンガンを連射する。このとき、セアトは特に照準を定めることはしなかった。適当にやっても誰かしらに命中するからである。

他方、両手の銃器のうち、右手に持っているのは西部式のショット・ガンか。つまり、銃身を一回転させれば、その遠心力で弾丸が装填されるタイプである。左手に持っているのは、先ほどのグレネード・ランチャーであるようだ。ちなみに、このグレネード・ランチャーも、ショット・ガンと同じ装填方式である。

セアトは、ショット・ガンとグレネード・ランチャーをほぼ同時に発射する。しかし、両者は通常の弾などではない。いずれも物理属性攻撃と外法属性攻撃との併合兵器である。ショット・ガンからは緑色の毒液のようなものが飛び散っていく。グレネード・ランチャーからは、透明なガラス玉のようなものが一発発射された。

ショット・ガンから飛び出たものは、溶解液のようなものである。通常の散弾に加え、付加的効力として銃創部分から装甲を侵略し、溶解させる。そのため、ショット・ガンの範囲にいた鬼の群れは、身体の部位を吹っ飛ばされたばかりでなく、その部分から解けてし

まうのである。
他方、グレネード・ランチャーから放出されたのは、濃縮された外法エネルギーの塊である。先ほどメイデンが主砲を使用したが、あれの簡易型である。弾丸通過コースにいる敵を雪だるま式に巻き込んですりつぶしていくパワー型の兵器である。また、相当量の外法エネルギーが濃縮されていることから、厳密に命中しなくとも、そのエネルギーが持つ引力によって近くにいる鬼どもは、次々とそれに吸い込まれていってしまう。

「おらおらおらおら！！」

次に、セアトは両手の銃器に弾をこめるため、銃身を一回転させる。そして、ほぼ同時に、弾が装填されたような音を聞くと、今度はまた別の方向に向けて、弾丸を発射する。

「おいおい、これじゃあ、ナインが来る前にあいつぶっ倒れちまうよ」

グレイは、上空の敵を倒しながら、辰巳の暴走に呆れていた。もちろん、辰巳が倒れる要因とは、敵の攻撃ではなくて、自身の無茶によるＭＰ切れである。

「お？噂をすれば・・」

空にいたグレイは、巨大な影がこちらに高速で接近してくることを捉えた。ようやく目的物が到着したようだ。

「待たせたなみんな」

ナインと田中愛は、引渡しの目的物を持ってきたのだ。

「よし、はるき。第2段階だ。目的物を死守すんぞ」

そういって、グレイは先に戦艦の護衛のため、すっとんでいった。

「えぇ～、もう終わりかよ」

辰巳は、不満を撒き散らしながら、砲門を閉じる。そして、グレイに続くのであった。

第３０話　戦艦引渡作戦ー３

名古屋市上空、地上はもとより、この空における敵機の数量も半端ではなかった。そのため空は飛行型の鬼によって覆いつくされ、日の光もまともに到達しないほどである。そのような状況の中、ナインが駆るプロトオーガに護送されながら、田中愛こと『あいちゃん』が操舵する輸送機は、着陸ポイントに向けて強行突破を試みていた。

「ぎゃぁぁぁぁ！！ホントに死ぬ死ぬぅぅ！！」

無駄に大きいこの輸送機は、当然に空の鬼どもにとっては格好の的であり、敵の集中攻撃の只中にあるのもまた当然であった。それにしても、まさかこれほどの修羅場であるとは、この臆病な秘書も予想すらしておらず、彼女は極度の恐慌状態に陥っているのである。そのため、わんわん悲鳴を挙げて泣きながらも、一生懸命に輸送機を運転していた。

「田中さん、その調子です」

とはいえ、さすが一級操舵士の技能を持つ者である。相当程度の訓練を積んだのであろう、混乱状態であるにもかかわらず、よく敵の攻撃を避けながら進んでいる。その怯えきった表情とは裏腹に、手足が機械のように的確かつ迅速に動いているのであった。

「田中さんじゃなくて、『あいちゃん』ですぅぅぅ！！」

また、秘書は混乱状態にあるか否かを問わず、ナインに対して、いつもの突っ込みを入れるのを怠らなかった。どうやら田中と呼ばれることを条件に、反射的に突っ込むようプログラムされているよう

だ。

「あ、『あいちゃん』。前・・」

ナインがそういうと、黒いオーガ、ベルセルクが冥府のエネルギーを輸送機ブリッジへと向けて放出していた。

「ぎゃあああああ！！！」

回避不可能。秘書は、死んだと思った。そして、背の低さのために最終面接で自分を落とした某航空会社の人事担当、ここに就職したこと、及びこの作戦に関与した従業員の全員（特に代表理事）を呪った。

「あれ？」

しかし、直撃のはずであった黒い剣が自分に突き刺さることはなかった。ナインが、うまく外法属性攻撃反射シールドで防禦をしてくれていたのだ。そして、反射した冥府のエネルギーは全て、発動者である前方のベルセルクが代わりに受ける。結果として、そのベルセルクは粉々になって地上の土へと還っていた。

「ナインさぁん」

秘書は、ぐしゃぐしゃな声で命の恩人の名前を呼んだ。そして、感激のあまり、ハンカチで涙をふくのである。

「まだ、たくさん来てますよ」

しかし、安心するのはまだ早い。敵は無数に存在する。ナインの処

理能力がそれに追いつくはずもない。また、プロトオーガには広範囲の敵を一斉排除するような武装も今のところないから、完全に受身の戦略をとらざるを得ないのである。

「青鬼のライフルはそれほど怖くないが、黒鬼の攻撃は危険だな」
「あわわわわ・・、もうだめですよぉぉ」

気づけば、ナインたちは完全に敵に包囲されていた。この状況で、一斉掃射などされれば、せっかく運んできたこの戦艦も完全にアウトである。

「ナインよぉ、随分と苦戦してんじゃねぇか。手伝ってやるよ」
「田中せんぱいも生きてますかぁ」

さすがにナインも冷や冷やしてきたところ、頼みの伏兵であるゲイボルグ・Dと鬼女セアトが、間一髪で到着した。ゲイボルグ・Dは、輸送機の左翼方面を取り囲んでいる鬼の群れを暗黒の剣でまとめて排除し、他方、セアトが右翼方面の鬼をグレネード・ランチャーとショット・ガンの連射により、一掃する。

「ナイン、『あいちゃん』、ご苦労様。あと少しよ」
「りじちょぉぉ・・」

小さな秘書は、代表理事弥生遼子のねぎらいの言葉を聞くと、自己の生存を実感してはこの理不尽な役回りを押し付けられたことも忘れ、うれしさのあまり涙した。
そして、弥生の言うとおり、目標地点がはっきりと見えてきた。一箇所だけ、鬼が存在しない更地がくっきりと見て取れるのである。また、そこには結界が張ってあって、アリスとメイデンが目的物の到着を今か今かと待ちわびているのであった。

「では、みなさん。行きますよぉ」

田中は涙を拭くと、今回は珍しく、頼りない秘書があれくれ部隊の音頭を取った。そして間もなく、輸送機のブースターを噴出させて一気に加速する。

「田中せんぱい、なんか気合いはいってんじゃん」

「辰巳さん！私は『あいちゃん』です！あなた、今日二回目ですよ！」

「へいへい・・」

辰巳春樹は、しっかりと数を数えている秘書に呆れ、適当に返事をするも、内心では秘書が意外にも頼れることを知り、うれしくはあった。それゆえ、次からは『あいちゃん』と呼んでやろうと思ったのである。

「俺も『あいちゃん』には負けてらんねぇな」

グレイは、自分でそう言ってみたものの、柄にもなく女性を『ちゃん』付けで呼ぶのは恥ずかしかった。

「ふふ、黒井さんにそう呼ばれると、変な感じがしますね」

そして、秘書も同じような感情を抱いていたようであり、恥ずかしいと思っていたことを指摘される。

「今の俺は、グレイだ。田中さん」

グレイは、わざとそのように呼ぶと、やっぱりこっちの方がしっく

り来ると確信したようだ。

「ムキー、だから私は・・」

「『あいちゃん』。無駄話はあと！前にたくさんのお迎えがいるわよ」

そんな口論をしている間にも、敵はチームを組んで前方に立ちはだかっていた。

「ぎゃあああ！！どうしよう！どうしよう！！」

秘書は余所見をしていたのか、急に慌てふためきだすのである。やはりこの秘書は頼りないな、と皆が再認識するのである。

「『あいちゃん』は、アタシたちが死んでも守りますから、さっさと行ってくっさいよ」

「しょうがねぇ。次、生きて会えれば『あいちゃん』って呼んでやるか・・」

相変わらず、好戦的なふたりは挑発的な言葉を吐く。しかし、かえってこのような言葉が、秘書にとって頼もしく感じられた。

「はい・・、絶対にこの艦を届けます」

その秘書の言葉を受け取ったふたりは、前方の群れの中へと飛び込んでいく。

「ゲイボルグの秘剣、その身に焼付けな」

ゲイボルグ・Dは、巨大なバスタード・ソードに闇の力を大量に注

ぎ込んで、正真正銘の闇の剣としてしまうのである。すなわち、これによってゲイボルグの大剣は物理属性と外法属性との併合兵器となった。また、広範囲に分散してしまう冥府の力を一点に留めることで、バスタード・ソードの攻撃力を飛躍的に増強させ、かつエネルギーコストを抑えることができるゲイボルグ・ディアボリカの奥義である。

「ひゃはははははは!!!ゲイボルグ、あのクソどもを切り刻んじまいな!!!」

ゲイボルグ・Dはメンタルスフィアを覚醒させると、旋風のごとく敵チームの只中へとその身を投げ込む。

そして、あとは敵の群れを切り刻むだけである。濃密な闇を纏ったバスタード・ソードを一振りすれば、何体かの鬼がスパッとふたつに分断されてしまい、そのうえ漆黒の炎が燃え移り、瞬く間にその身を地獄の黒炎で焼き尽くす。

「あははは!グレイ、ひとりだけずるいぞ。アタシもまぜな!!」

さらに、そこにはセアトも介入し、全身の銃器で蜂の巣にする。

「ここでずっと、暴れていたいぜ」

「ほんと、アンタたち、マジ最高だわぁ」

セアトは、胸部のマシンガンを撃ちっ放しにしながら、両手の銃器で鬼の群れを粉砕・溶解させ、次々と墜落させていくのであった。

（二）

「ふたりとも、きりのいいところで戻ってきてくれ」

輸送機を直接護衛しているナインは、上で遊んでいる連中に通知した。すでに輸送機は結界の中へと到着しようとしていたので、護衛はもう必要がないのである。このことは、ミッションの終了を意味し、すき放題暴れていたふたりはがっかりしたようであった。

「ナイン君、『あいちゃん』。お疲れ様」

桐生詩季は、ようやく到着したふたりを出迎えてくれた。

「おふたりとも、もう大丈夫です」

そういって、沖まもるは、輸送機が入れるだけの穴を結界に開けてくれた。その中に、大きな輸送機がずぶずぶと入っていく。

「はぁぁぁ、こわかったぁ」

ようやく安心できる結界に到着したため、秘書は大きくため息をついた。あいかわらず結界の外では、弾丸などが飛び交っているも結界がほとんど防いでくれている。

「これで作戦は終了っすね」

上空でどんぱちやっていたセアトとゲイボルグ・Dも、追撃してくる敵を追い払いながら、結界のところまで戻ってきた。

「じゃあ、メイデンの結界を維持しつつ、みんな輸送機の中へ入ってちょうだい」

『了解』

従業員の皆は、口々にそれを了承した。

すると、輸送機の搬入口がゆっくりと開き、ようやく中に入れるようになる。外に、メイデンのシールドを巡回させたまま、5体のオーガは順序良く輸送機の中へと入っていくのである。

「OK、みんな入ったわね。『あいちゃん』、出発していいわよ」
「了解です、理事長」

秘書が承諾すると、輸送機の搬入口は再び閉じられる。そして、結界に守られたまま、さっさと離陸してしまうのである。敵は、これを逃すまいと次々に攻撃を仕掛けるが、相変わらず結界によって阻まれては、それらも攻撃能力を失っていく。そのため、秘書は平常心を維持でき、自己の技能を最大限に発揮しながら戦線を離脱していった。

（三）

「作戦終了よ。みんな、お疲れ様」

従業員たちは、それぞれのオーガから降りて、足早に輸送機のブリッジへと向かったのである。そこに皆が集まったところで、弥生は改めてねぎらいの言葉を述べた。

「にしても、アタシたちの戦艦っすよ、しゃちょぉ！」

辰巳は、新しいおもちゃを手に入れた子どものようにはしゃいでしまっている。

「これも『あいちゃん』のおかげですね」

詩季は、引き続き輸送機を操舵している秘書に向かって笑いかける。

これに対し、秘書は余所見をできないので、詩季に向けて親指を立てて返事に代えた。

「中の施設もすごくいいですよ」

いつの間に探索をしたのか、まもるはこの輸送機を気に入ったようだ。

「まもる、なに先に探険してんだよ。あたしが先だろ」

「はるきちゃん、そんなの聞いてないよぉ」

「うるさい、うるさい！まもるのくせに！」

「ひどいよぉ・・」

辰巳は、いわゆるジャイアニズムを発揮しては、まもるのくせにという理不尽な理屈をこねて、彼女の頭を叩いた。

「コラ、辰巳。あんまりまもるを虐めるんじゃない」

ナインが、両者の間に入って仲裁する。そのため、代わりにナインが辰巳にぽかぽか殴られる羽目となった。

「それで、これから何処にいくんすか、俺たちは」

ひと騒動を巻き起こしている連中をよそに、グレイが冷静に問うのである。

「そうね。本作戦で、弾薬とかも結構使っちゃったし、色々と買い物したいのよね」

「食料とかも、全然ないですよね」

詩季がそういうと、朝から何も食べていないことに気づき、皆、一斉に空腹感に襲われた。あちこちから、腹のなる音も聞こえてくる。

「とりあえず、どこかで食事にしましょう・・」

弥生は、いつまでも従業員の腹のなる音を聞いていられないと思い、まずは食事をすることとした。

「でも、日本で降りれそうなところなんてないから、どこかの国に降りるしかないわね」

「国外逃亡ですか」

「まあ、それは否定しないけど。でも、この国は今、領空の監視もほとんど機能してないから、逃亡なんて簡単よ」

弥生の言うように、現在の日本国は外患に対抗するだけの軍事力をほとんど持っておらず、国内の対応だけで手一杯であったから、領空・領海の監視機能はほぼ形骸化していたのである。

「ただ、渡航先によっては不法入国ですよね」

詩季は、冷静に意見を述べる。出るのは簡単でも、入るのはやはり難しいのだ。現在これほどまでに国内の問題に頭を抱え、まともな出入国管理ができなくなっている国は日本くらいであり、他の国は依然として自国の領土を侵すものに対しては、厳しい目を光らせている。再三の警告を無視して領土侵犯を犯すものなら、直ちに撃ち落とされかねないであろう。

「心配しないでいいわよ。私を誰だと思ってるの？これでも元は防衛省にいたから、結構近隣諸国の国防当局の人に顔は知れてるの。訳を話せば、多分入れてくれると思う」

「そっか、さすが社長！」

弥生は早速、暫く使っていなかった、古い友人の番号へと電話することにした。すると、間もなく電話が繋がった。

「アンニョンハセヨ」

弥生は、韓国語でなにやら交渉を始めたようだ。ここにいる他の連中は、彼女が一体何を話しているのか、全くわからない。

「マジで社長がいて助かったぜ」

グレイは早く食料にありつきたいのであろうか、弥生を心から感謝しているようである。

しばらくすると、弥生はうれしそうな声調で別れの言葉を述べ、電話を切った。

「ＯＫ、韓国が入国を許可してくれたみたい。というわけだから、『あいちゃん』。ソウルに向かってもらえる？」

「はい、理事長」

秘書は、さっきから腹を雷の音のようにゴロゴロと鳴らしていたので、顔を真っ赤にしていた。

「『あいちゃん』。今日は好きなものおごってあげるから、もうひとがんばりしてね」

弥生は、やはり肝心なところで頼りない秘書をほほえましく思い、笑いかけた。

「すいません、理事長」

秘書は、恥じらいながらも、いまは本場の焼肉のことしか頭になかった。

「じゃあ、ソウルにつくまで、せんぱいはアタシと一緒に艦内の探険っすよ」

「俺も腹へってるから、動きたくないんだけど・・」

しかし、ナインは反論を聞き入れてもらえず、辰巳に引っ張られては、どこかへと行ってしまった。

「きゅうちゃんも、もう少しでゴハンだから我慢してね」

詩季は、空腹に耐えかねている愛犬を優しく撫でた。それを見ていたグレイとまもるも、なんとなく手持ち無沙汰だったので、犬のところでしゃがんでは、一緒にこれを撫で始めた。当の本人は、これを甘んじて受けつつも、不機嫌そうに伏せているばかりであった。

第３１話　異国の地で（前書き）

本章には、おまけとして、鬼女メイデンの画像がアップロードされています。

第３１話　異国の地で

―大韓民国首都ソウル―

公益社団法人東京陸運保険機構は、韓国の領空に入ると出迎えに来てくれた同国の国防当局に誘導され、ソウルの飛行場に着陸することができた。輸送機の窓から見えるソウルの市街地は、背の高いビルが幾つも立ち並んでおり、崩壊しかけている街などもなく、日本とは違って平穏である。このようなコンクリートジャングルの街なみは、日本人の記憶から既に消えかけているのだ。

「ここがソウルか」

早速、異国の地に降り立ったナインは、活気に満ち溢れているこの国の雰囲気が日本のそれとは違うことを感じた。この国の人間は皆、鬼などに悩まされることなく平穏無事に充実した毎日を送っているのであろう。そのため、街から強いパワーを受け取ることができるのだ。

「あ～、やっと飯が食える」

グレイは、空腹が限界に来ているのか、異国に来たことを感動する余裕は全くないようだ。

「社長、早く行きましょうよ」

詩季もテンションが上がっているのであろう、弥生の腕を引っ張る。

「私は、ちょっとやることがあるから、あんたたちだけで何か適当に食べてきて」

「社長、何か食べないとだめっすよ」

辰巳が珍しく正論をいうのである。

「大丈夫よ。ああ、そういえば、あんたたちここの通貨持ってないでしょ？カード貸してあげるから、これ使いなさい」

そういって弥生は、秘書にクレジットカードを預けた。

「今日は、私がおごってあげるから、好きなもの食べてきていいわ。それで、会計のときに『あいちゃん』が適当にサインしといてね」

「わかりました、理事長」
秘書は、大事そうにクレジットカードを袖下にしまいこみながらいう。
「社長、ご馳走になります」
まもるが、弥生に向かって、ぺこりとお辞儀した。
「よぉし、じゃあ、シジミ食いに行こうぜ」
辰巳が我先にと駆け出した。
「はるきちゃん、それチヂミだよぉ」
「ああ、それそれ」
辰巳は、わかったのか、わかってないのか、適当に返事して先に行ってしまった。
「もう、はるきちゃんったら、先に行っちゃったよ・・」
まもるも、この国に来るのがはじめてであっただけにはしゃぐ辰巳の気持ちがわからないでもないが、彼女が迷子になってしまわないか心配した。
「ったく、しょうがねぇ奴だ。俺があいつマークしてっから、お前らは後からついてきてくれ」
そんな辰巳の幼い言動を見かねたグレイは、彼女を追いかけて行ってしまった。
「じゃあ、私たちも行こう」
「ああ。社長、行ってきます」
そうして、残った4人もソウル市街地へとゆっくり歩き出した。
どんどん遠くへ行ってしまう連中を見届けると、弥生がひとり残された。
「さて、あいつらが帰ってくる前に仕上げとかないとね」
弥生は、軽く身体を伸ばして深呼吸すると、輸送機の中へと戻っていく。そして、胸元のポケットからセブンスターを取り出しては、ふと火をつけることをためらった。
（ここ禁煙だっけ?まあ、自分の艦だし、全面喫煙でいいか）
そう考えると、彼女は改めてタバコに火をつけ、それを口にくわえ

ながら格納庫へと向かう。
弥生は、早急にこの輸送機を実戦にも用いることのできる戦艦へと昇華させる必要があると考えていた。だからこそ、本場の焼肉などを仲間たちと食べたかったのではあるが、時間的なゆとりのある今のうちにこの作業を完了させることを優先したのだ。ここは日本と海を隔てた国とはいえ、いつまた鬼どもの襲撃があるかわからない。そのことを考慮すると、この輸送機ではあまりに心もとないのである。
弥生は、格納庫に到着すると、作業机に置いてあった、読みかけの分厚い本を手に取った。それは、怪しい出版社から出ている怪しい著作である。すなわち、『外法学概論』である。外法学は、学界において法学や経済学などのように確固たる地位を得ているわけではないが、根強い研究者も少数ながら存在するため、そこそこ大きな本屋にいけば容易に教科書を入手することができる。もっとも、価格は1万3千円もした。研究対象が外法であるが故に、このようなめちゃくちゃな本に1万3千円も出すのは大金をドブに捨てるようなものである。実際、これを買う時に、店員に変な目で見られたのを記憶している。
しかし、実際にナインの鬼を具体的素材にしてこの本を紐解くと、案外荒唐無稽なものとはいえなかった。いかように研究したのかは知れないが、外法学の理論がしっかりと解説されており、弥生にとっては1万3千円を支出してもなお、お釣りのくるような代物であった。なんせ、これを元に作成された鬼女は、すでに億単位の仕事をこなしてくれている。
（精神球体の章は・・）
弥生は、目次から該当する章を探し当て、ページを半分ほど一気にめくる。
『精神球体（メンタルスフィア）はC類型虚物である。したがって、人間がこれに触れることはおよそ不可能である。もっとも、媒介物に寄生させ、外法物として可触できる状態とすれば、これを制御することは可能である』

『精神球体の寄生は、次の要件を充たした場合に生じる。まず、精神球体を実質的に支配しうる状況にあることを要する。基本的には自分で持つことが必要であるが、補助器具で持っていてもよい。次に、寄生させる対象を指定する。この場合、精神球体が心を自動的に解析してくれるので、口に出す必要はない。最後に、精神球体の尋問に応じ、そのうえでこれに認められることを要する。なお、尋問の内容は個々人や具体的な状況などによって異なるため、一概に言うことは不可能である』

（手順は大丈夫ね）

弥生は、作業の手順を確認し、本を元の場所に戻した。そして彼女は、プロトオーガにキャプチャーしておいたアザゼルのメンタルスフィアを解凍するため、そのプロトオーガに乗り込むことにする。一応、プログラム等の調整のために彼女もプロトオーガに入るための鍵を持っていたのだ。

（ええと、リリースするためには・・）

弥生は、タッチパネルを操作すると、すぐにメンタルスフィアを解凍する項目にたどり着いた。

（それにしても、このプログラム。買ってきたあの本と怖いくらいに一致しちゃってるのよね。もしかしたら、プロトオーガを作ったのはあの本の作者かしらね。著者は、団堂　曹士（そうし）だったかしら）

弥生は、このような分野を研究する人間が一体どのような人物なのか興味があったので、以前にこの著者の経歴を洗ってみた。すると、弥生でも畏れ多いほどのとんでもない天才であることはまずわかった。彼は当然のように東京大学法学部に入学し、その代における主席クラスの成績であったようだ。さらに彼女が驚いたことに、この本を執筆したのは著者が大学2年のときである。いずれは、霞ヶ関のトップエリート官僚として、国政運営に多く携わることが期待されたのだろう。しかし、この本を出版した直後、留学先のドイツ・ベルリンで死亡したようだ。それにしても天才とは、どうしてこのように早死にする人間が多いのだろうと少し嘆いたのだ。

（仮にまだ著者が生きていれば、ナインと同じくらい・・）
弥生は、そのように考えた途端、おそろしい推理をしてしまった。
くわえていたタバコを下に落とし、なぜだか体中の血の気が引いていくのである。
（ナインは記憶喪失で、しかもプロトオーガを始めから持っていた。また、本人は気づいていないが、潜在的に外法を巧みに使いこなしている・・）
弥生は、少し考えすぎだと頭を横に振った。しかし、本能が推論を止めようとはしなかった。
（でも、そう考えると全て筋が通る気がする。実際、団堂の死亡原因はよくわかってないから偽装の可能性だって十分ある。だとすると、ナインが団堂曹士・・）
そこまで推理したところで、弥生は思考を中断した。
（もうやめよう）
弥生は、これ以上余計なことを考えると、ナインをナインとして見れなくなる気がしたのだ。いまのところあの男はナインであって、それ以上でもそれ以下でもない。よく働いてくれるが、優柔不断でただの優しい青年でしかないのだ。それで十分だ。ナインはナインでいればよい。あんなおそろしい本を書くような人間などであってはならないのだ。
「仕事しなきゃ」
弥生は、自分の頬を2，3発強く叩いて、気分を変えることにした。
そして、先ほどから操作を中断していたタッチパネルのリリース項目を選択する。
すると、『寄生媒体を思惟してください』という文字が出てきた。
このプログラムは、機械的に外法学概論に記載された手続を自動的に行ってくれるのだ。弥生は、この文言にしたがって、この輸送機を対象として想像してみた。
『対象を確認しました。メンタルスフィアが尋問を開始します』
そして、弥生の意識はどこかへと飛ばされていった。

―ソウル市街地―

辰巳はひとり、ソウルのにぎやかな繁華街を歩いていた。通行人が道を敷き詰めてしまうほどいて、ここを通り抜けるだけでも大変であったが、その分たくさんの店が軒を連ねていてウインドウショッピングには飽きない。しかも彼女は、この街が持つ活気に元気付けられ、どんどん街の奥へと進んでしまうのである。

「こういうにぎやかな街は何年ぶりだろ」

辰巳は、日本から出たことがなかったため、日本とはまた違った韓国の街の雰囲気に刺激を受けていた。日本のようにチェーン店ばかりの風景もなく、どこか古めかしい商店街のような町並みがかえって新鮮であった。彼女にとっては、まさに何もかもが新しい発見の連続であり、よい意味でのカルチャーショックとなっているであろう。

「ここ、お漬物屋さんかな」

辰巳は、漬物を販売している露天商を覗いた。何人かの客が試食をしており、自分もできるのでないかと考えたからである。

「こんちわ」

辰巳が元気よくそういうと、漬物屋の中年女性はちょっと驚いた顔をした。彼女にとって、日本語はもちろん聞きなれないものであったが、さすがにこんにちはの意味くらいは知っていたらしく、辰巳が日本人観光客であることに気づいたようだ。

「@@@××××」

その女性は、辰巳が聞き取れない言葉を発しながら、大きな壺に入った赤い漬物を指差した。

「そっか、日本語じゃないんだよね。これを食べていいのかな」

辰巳はその壺の中を言われるがままに覗き込むと、辛そうに熟成されたキムチを発見した。

「うわぁぁ、からそぉ」

辰巳は、辛いものがあまり得意ではないので、十字架を目にしたヴ

ァンパイアのように反射的に逃げてしまった。
「あれは、食えねぇな・・」
やんちゃ娘は、試食できなかったことにつき、柄にもなく肩を落としてはとぼとぼと歩き始めた。
「ありゃ」
自分の腹が鳴ったことで、仲間と食事に行く予定であったことを思い出す。しかし、見渡せど、見渡せど、多数の通行人の波であり、仲間たちが何処にいるのかを発見するのは困難である。
（まもるにでも電話すっか）
辰巳は、迷子になったことをまもるに伝え、迎えに来てもらうなど屈辱以外の何ものでもなかったが、背に腹は代えられない。
「あれぇ？つながんない」
なぜか、まもるの携帯には繋がらなかった。あの女のことだ。辰巳が迷子になって困っていることを見越して電源をわざと切っているのだろう。
「じゃあ、グレイっと・・。うわっ！」
辰巳は、突然、通行人の波にもまれて一瞬よろけてしまった。そのため、携帯を地面に落としてしまった。しかも、後続の通行人に蹴られて、遠くの方へ行ってしまった。
「ったく、あんにゃろう」
しかし、人通りの多い道の真ん中で、漫然と突っ立って携帯を操作していたにもかかわらず、自分に非があるとはこれっぽっちも思わない辰巳である。
「可愛らしいお嬢さん。この携帯電話、あなたのでしょう？」
不機嫌度が頂点に達しようとしていた辰巳であったが、親切な拾い主の顔を見て、逆にご機嫌度がマックスになった。
（あら、いい男）
辰巳は、目をとろけさせ、数秒間思考停止状態に陥った。その男は、背が１８０センチメートルを超える長身で非常に良い体型をしていて、かつ美形である。しかも、サラサラなミディアムロングの茶髪

が清潔感を滲み出している。
「あの、違うんですか？」
しかし、男の再度の問いかけにより、辰巳は我に返る。
「あ、あ、あ、ありがとうございます。私の不注意で落としてしまって・・。とても助かりました」
そして、普段は絶対に使わないような言葉遣いで応えるのである。
「いえいえ、困っているお嬢さんを助けるのは当然の義務です」
「あの、日本語を話せるんですか？」
辰巳は幸福感に包まれながらも、自然と会話をしていたことに気づくと、柄にもなくいじらしそうに尋ねるのである。
「ええ、日本には数年留学していましたから」
「あの、もし宜しければ、ソウル飛行場までご案内いただけないでしょうか？お恥ずかしいことに、道に迷ってしまって・・」
「本当に可愛らしいお嬢さんですね。喜んで承りましょう」
そういって、男は辰巳の右手を取り、軽くキスをした。辰巳は、いつもならこのようなキザな振る舞いに批判的であったが、やはり場合によってはいいものだなと夢見心地である。
「では、参りましょうか。ここは人のとおりが多いので、前方にはお気をつけ下さい」
「は、はい」
辰巳は、返事をしたものの前を歩く男に夢中になり、前方に対する注意を払う気などは毛ほどもない。
「そういえば、自己紹介がまだでしたね。僕は、リーといいます。お嬢さんもよろしければ、お名前を教えてくれませんか？」
「はい。私は、辰巳春樹です」
「春樹さんですね。よい名前です」
「えへへ、リーさんこそ」
「この国の人間は、リーという人間ばかりですよ」
辰巳は、適当な評価をしたのをすっかりリーに見透かされ、笑ってごまかした。そんな彼女を見たリーは、軽く微笑んでくれた。

「あの、リーさんはお仕事とか、何をされているんですか？」
辰巳は、話題を変えようとして、ありきたりな質問をした。
「僕ですか。なんていえばいいんだろう。カテゴリーとしては、パイロットでしょうかね」
「本当ですか？私も実はパイロットなんです！！」
辰巳は、リーがパイロットであると聞いて心の底から熱いものが溢れ、反射的にそういった。すると、リーは鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしてしまった。それをみた辰巳は、しまったと思い、あわてて両手で口を紡いだ。
「嘘です。嘘です。今のは冗談・・」
辰巳がパイロットなんて知れたら完全に引かれるに決まっている。そうすれば、慣れない言葉遣いで、せっかく今まで可愛らしい女の子を通してきたのに、全てが水の泡となる。
「あははは、隠さないでいいですよ。むしろ僕はそれを聞いてうれしいですから」
しかし、リーは意外にも親近感を抱いたようであった。逆に辰巳は拍子抜けしてしまうのである。
「変じゃないですか？私みたいなのがパイロットなんて・・」
「確かに、春樹さんがパイロットだったなんて驚きましたけど、全然そんなことはないですよ」
「本当・・？」
辰巳は、やはり柄にもなく目をうるうるさせて訊く。こんな自分を仲間たちが見れば、一発で呆れられるほどの猫かぶりである。
「本当ですよ。それに、春樹さんをよくよく見ると、僕と同じ人間であるような気がしてきます」
リーは、辰巳の目をみつめて言った。そのため、彼女は極度に緊張してしまっていた。
「そ、そんな。リーさんを私と一緒にするなんて、とても畏れ多い・・」
辰巳は、なんだか小さくなってしまって、リーから目を逸らす。

「僕も社会的な体裁がありますから、普段は気取った身のこなし方をしています。しかし、僕も本当はもっと本能的なんですよ。貴女もきっと、そういう人なんでしょうね」
辰巳は、猫をかぶっていることも見透かされて、顔が真っ赤になった。そのため、普段からもっと礼儀正しくしておけばよかったと、いまさら後悔した。
「だから、僕達は同じ側にいる人間なんでしょうね」
とはいえ、この男が別にそれでよいと感じているようだったので、辰巳は後悔することをやめた。
その時、前方に見知った人間の姿が見えた。そう、グレイである。よりにもよって、こんな時にあの男がいたのだ。しかも、こっちに気づいた。最悪だ。もう終わった。短い幸福だった。さようなら。私の王子さま。
「お～い、はるき！！ひとりでつまみ食いしてんじゃねぇよ！みんな待ってんだろぉ」
辰巳は耳まで真っ赤になっていた。今のグレイの発言は１００パーセント、リーの耳に入っているであろう。今の発言には、良くも悪くも辰巳のありのままの人格がよく現れているだけに、悪気のないグレイであったが、彼に全てをぶち壊されたのだ。そのため、彼女はグレイを蜂の巣にしたくなった。
「春樹さん。ここで、どうやらお別れのようですね」
「そんな、リーさん！私、あんな男知りません！人違いです」
「隠さなくてもいいですよ。大方、あなたはここに来てはしゃいでしまい、迷ってしまわれたのでしょう。それくらい、始めからわかっていましたよ」
「リーさん、それは・・」
はじめから辰巳はこの男の掌で踊らされていたと思うと、否定も肯定もできなくなった。
「でも、貴女とはまたいずれどこかでお会いできると思います。その時を楽しみにしていますよ。可愛らしいお嬢さん」

そういうと、リーはお化けのようにドロンと、人ごみに紛れて消えていった。
するとすぐに、グレイが辰巳のところに駆け寄ってきた。
「おい、はるき、今の男は・・いてっ！」
辰巳は、射程内にグレイが入ると、その頭をすかさずグーで殴った。
「アンタが余計なことというから、全部台無しよ！どアホ！！」
そういって、辰巳はずかずかと先に行ってしまった。
「ったくよ、せっかく迎えに来てやったってのに、なんなんだよ」
グレイは、不機嫌に戻っていく辰巳を、頭を撫でながら見送っていた。

＞ｉ７７４６―１１９９＜

第３２話　束の間の余暇

弥生遼子は、西新宿のとあるショット・バーにいた。ここは、西新宿のビル街を縫って入っていったようなところにあり、夜になるとおそろしく静かになるので、落ち着いた時間を過ごすことができる。もうラストオーダーの時間を過ぎているのだろうか、カウンターには彼女とバーのマスターくらいしかいないのである。

「あれ？私なにやってんだろ？」

弥生は今の自分が置かれた状況が全く読めないでいる。しかも、なぜこんな締めつけられるような紅色のドレスを着ているのか。普段は黒のスーツに身を包んでいるだけに、こういったドレスは全く着慣れないのだ。

「弥生さん、大丈夫ですか？」

マスターが心配そうに訊いてきた。たしかに、そういわれると、体がだるくて大丈夫とは程遠い体調にある。きっと、飲みすぎたのだろう。

「本当に、どうしてこんなにだるいんだろう・・」

弥生は、カウンターに突っ伏してしまった。どうしても体が言うことを聞いてくれないのである。

「もう、辻本さんは来られないのではないですか？あの人は、とても忙しいひとですから。今日も何かあったのですよ」

マスターは、洗浄したカクテルグラスの水滴を丁寧にふき取りながら、弥生にぼそりと言う。

「辻本さんって、幸治さんのこと？」

弥生は、いきなり起き上がり、マスターを問い詰めたため、彼は怪訝そうな顔をした。

（そうか。これは、あの夜だわ・・）

もう3年前になるのか、忘れもしない夜だった。あの時も、弥生はこういう感じでだらだらと、辻本幸治を待っていた。しかし、待ち

人は一向に現れなかった。
辻本は、弥生の防衛省時代の先輩にあたる人間であり、この日、彼女に大事な話があると言って、ここに待たされていたのである。ところが、約束の時間になっても彼は弥生のもとに来ることはなかった。だから、次の朝、仕事であったときには、文句を言ってやろうと心に決めていたのだ。女を数時間も焦燥に置くことがどれほど罪深いことなのか、その身をもってわからせてやる。そう思っていた。だが、そんな弥生の矛先は、生きている辻本に及ぶことはなかった。次の日、辻本は、変わり果てた姿で発見されたそうだ。おそらく遺体は修復不可能なほどにまで壊されていたのであろうと思われる。彼もまた、鬼の襲撃の果てに殉職したらしい。最後まで、未知の生命体との死闘を仲間とともに続けていたが、当時の兵力で鬼に勝るわけもなく、奮闘もむなしくやられてしまったのだ。
弥生は、辻本の遺体が入っていると思われる棺桶に向かって、怒りをぶちまけるしかなかった。泣きながら、何度『馬鹿』という言葉を吐き出したかわからない。あとで、遺族に聞いた話だが、辻本の遺品には、４カラットのダイヤの指輪がケースの中に大事そうにしまってあったそうだ。
（いま、深夜１時をまわったところか・・）
これが、あの時の追憶であるとすれば、いまから辻本の下へ行けば彼は助かるかもしれない。
「行かなきゃ！幸治さんが！！」
弥生は、飛び出していった。マスターが後ろの方で何か言っているが、気にしない。なぜか、さっきまでのけだるさは綺麗さっぱりと消えていた。
（たしか、あの時の事件は六本木だったはず）
弥生は、すぐにタクシーを拾い、六本木へ向かうよう指図する。
「六本木ですか？あそこは今、有事でして近づけませんよ」
「ギリギリのところまででいいわ。運賃も好きなだけ出す。急いでちょうだい」

弥生は、すごい剣幕で迫ったようで、運転手はまるで銃でも突きつけられたかのように抑圧されてしまい、ついに観念して車を走らせた。

六本木に近づいてくると、いよいよ戦火が酷くなってきていた。いつ鬼と遭遇してもおかしくないような危険な場所にまでやってきていたのだ。

「お客さん、私はもう限界ですよ」

「ここで十分よ、ありがとう」

そういって、弥生は財布からありったけの札を取り出しては運転手に渡し、車から降りて戦火の中へと飛び込む。

六本木の街は、ビルが崩壊し、あちこちで炎上も見られる。もう、とっくに深夜をまわっているが、まだなんとか生き残っている兵もいるようで、銃声は途切れることがなかった。なんにせよ、この先には日本の行政機構の中枢を担う霞ヶ関があるのだ。だから、ここを鬼どもに突破されるわけには行かなかった。

（あの人は、こんなところで戦っていたのに、私は・・）

ここは地獄であった。人が火傷や裂傷などの痛みでうめく声しか聞こえない。しかも、生きている兵も逃げることは許されていないため、あとは足掻くだけ足掻いて死を待つだけである。もちろん、白旗の意味がわかるような相手でもない。そんな絶望的な世界であった。

（私は、あの人に守られていたんだ。今まで、ずっと）

弥生は、走った。走りにくいハイヒールを捨て、邪魔なドレススカートを引きちぎり、走った。これが夢であってもいい、タイムパラドックスが起こらなくてもいい。ただ、最後に生きているあの人に会いたかった。

「幸治さん！！」

タバコの吸いすぎなのか、息が切れて仕方がない。大声を搾り出すのもやっとのことである。

「り・・こ」
その時、弥生はいくつものロボットの残骸の下から、かすかに自分の名を呼ぶ声がするのを聞いた。
「幸治さん！」
弥生は、返事をして自分の位置を知らせつつ、辻本の居場所を探す。
「遼子・・」
まちがいない、辻本の声である。おそらくあの残骸の下であろうか。
「あれは・・」
辻本がいた。やはり残骸の下敷きになっている。弥生は、その場所へと駆け寄った。
「幸治さん、いま助けるわ」
「馬鹿、どうしてこんなところに来た？」
辻本は、激痛をこらえ、絞り出すような声で言った。
「あなたを助けるためよ」
「いいんだ、俺はどちらにせよもう助からない。それに上の残骸が崩れて降ってきたら君も死ぬぞ・・。早くここから去れ」
辻本のいうように、彼に堆積している残骸は不安定で、今にも崩れてきそうである。
「嫌よ！あなたをここに置いてはいけない！私もここで一緒に・・」
「馬鹿やろう！！君は生きるんだ！！ここで死ぬなどということは許さない！！」
辻本は、精一杯の声で怒鳴った。
「幸治さん・・」
「いいか遼子、よく聞くんだ。鬼どもの野望は絶対に阻止しなければならない。そのためには君をここで失うわけにはいかないんだ」
「鬼の野望・・？」
「それは、『チャプター９』と呼ばれるおそろしい計画だ」
「『チャプター９』？」
「それは・・・世界を、っく！！」
激痛が走ったのか、辻本は一瞬、意識が飛びそうになってしまった。

「幸治さん!!」
痛々しい辻本の容態を見ていられず、弥生はやはり彼に近づこうとしたが、辻本はそれを目で制止した。
「大丈夫だ。とにかく、君はそれを阻止してくれ、遼子。君のような有能な部下ならば、きっとできるはずだ・・」
とはいうものの、辻本の口調が次第に弱くなっていた。それはまるで、いよいよ死を覚悟した老人のようなのである。
「そんな、私だけに押し付けるなんてずるいわ」
それだけに弥生は、生を放棄しようという辻本が許せなかった。悔しくて、悲しくて、涙が止まらなかった。
「そんなことはない。俺は、ずっと君のそばで見守っているさ」
「嘘!そんなの嘘っぱちよ!!」
「約束するよ・・。そして、遼子・・。愛して・・」
その時、不安定だった上の瓦礫が辻本にふりかかった。そして、彼のいいかけた言葉と共に、彼の肉体は瓦礫の中へと還っていった。ただ、最後の辻本の顔は、笑っていた気がした。死への絶望ではなく、残された者へ希望を託したことで、彼は自分の役目を終えたのである。
「馬鹿!馬鹿!馬鹿!」
そして、今度は棺桶ではなく、崩れた瓦礫に向かって、ただひたすらに気持ちをぶつけたのであった。

気が付けば、弥生は、ナインのプロトオーガの中にいた。悲しい夢のあとにふと目覚めたような気分である。その証拠なのか、彼女の目じりには涙が通ったあとが残っているのであった。
(そうか、これが『尋問』なのね・・)
弥生は、涙のあとをこすっては消して、『尋問』が成功したのかを確認することとした。そのために、まずはプロトオーガを降りる。
(特に、何も変化はないようだけど・・、失敗なの?)
プロトオーガを降りて、ガレージの内装を確認するも、これといっ

て目立った変化はない。
「ん？外がうるさいわね」
しかし、なにやら外が騒がしい。数人が口論するような音もしくは野次馬がわめいているような音が聞こえてくるのである。そのため、弥生も急いで輸送機から降りることにした。
「あの？何かありました？」
「リョーコ、コレドシタ？」
知り合いの国防当局の人間が、輸送機を指差してはたまげた顔をした。弥生は、その指の先をたどると、ありえない光景を目にした。それはなんと、メンタルスフィアの寄生が成功したようで、ブリッジの部分が緑色に輝いているのである。しかもそれだけではなく、アザゼルの強力なメンタルスフィアを寄生させたためか、それが輸送機に取り付いてしまったかのように全体を赤い肉が覆いつくしていて、明らかに戦闘的な輸送機になってしまっていた。まさにこれは戦艦形態をとるオーガと呼ぶに相応しいものであった。
「成功したのね・・」
とりあえず、めちゃくちゃ強そうな戦艦が完成したようなので、弥生はガッツポーズをとった。
そんな喜んでいる弥生を横に、飛行場の警備員や管理人などはびっくり仰天である。突然にただの輸送機が、気味の悪い戦艦へと様変わりしたものだから、その変化を目の当たりにした人たちが腰を抜かすのも当然であろう。
まず弥生は、そこで驚いている人たちに、害はないことを説明しておく必要があるだろう。果たして鬼のことをよく知らない韓国の人たちが弥生の説明を聞いて納得してくれるのであろうか。まだまだこなすべき問題はあるが、とにかく今はうれしかった。そのひと言に限るであろう。
（幸治さん。ありがとう・・。今まで守っていてくれて）
弥生は、しばらく戦艦のメンタルスフィアの輝きを見つめていた。

辰巳春樹と別れたあと、美男子リーは携帯電話で誰かと話をしながら繁華街を北に向かっていた。
「ファイヴか、どうした？」
『どうした、ではありませんよ、トゥワイス。シックスがアザゼルのメンタルスフィアの再活性を捉えましてね。どうやら、そちらの方で反応があったとか。今から我々もそちらへ向かいますが、貴方も何か変わったことがありましたか？』
「ああ、特にない。あえて言えば、可愛い子を見つけたこと・・くらいかな」
リーは、前髪をかきあげて、少しニヤついて応えた。
『そういうところは貴方らしいのかもしれませんが、もう少しマジメにおやりになったらどうです？チャプター9まで、あまり日はないのですよ』
通話相手の口調は強かったので、リーは耳を電話から遠ざける。
「別にそう焦ることもないだろう。それとも、ファイヴは先生が、彼に劣るとでも言いたいのかい？」
『それはもちろんあり得ませんが、少しでも先生の不安材料は取り除いておきたいのです』
それを聞いたリーは、深くため息を吐いた。
「はいはい、わかったよ。とにかく、何かあったら連絡するから。それでいいよな？」
『ええ、頼りにしていますよ、わが同志。すぐに到着すると思いますが、そのときにこちらからも連絡します』
それをきいて、リーは携帯電話を切って、鞄にしまった。
（まったく、ファイヴは心配性だな。なるようにしかならないだろうに・・）
リーは、負けのリスクのないゲームというものが嫌いであった。理由は単純でつまらないからである。敵が雑魚ばかりにもかかわらず、圧倒的な力を振るっていくような一方的なゲーム展開など、彼にとっては何の価値もないのである。

しかし、今日は久しぶりに刺激的な出来事があった。リーは、それを思い出すことにしたのだ。

（辰巳春樹か・・。相当、精神球体にとりつかれているのか、鬼のにおいを滲み出していたな）

鬼の執行官だからこそわかる、特異な人間が持つ鬼の適性である。それを持つ人間がたまに現れるのだ。しかしながら、そんな稀に見る鬼の適性者の中でも、頭ひとつ分際立っていたのがあの少女である。あれほどの適性は、日常的に外法に触れていなければ到底身につかないものである。とすると、最近現れたという、執行官の紛い物に乗っているというのは紛れもなく彼女であろう。

（ふふ、楽しみにしているよ。戦場で貴女と出会うことを・・）

ナインたちは、無事に辰巳春樹と合流して、６人でソウル飛行場から歩いて程無くのところにある焼肉料理屋に入っていた。ここは、繁華街の端の地点に位置しており、通行人は中心街に比べてまばらであったが、それでも店内はサラリーマン風の男達で混雑している。ナインは特に食べたいものなどはなかったが、一部の者による熱狂的な押し通しを受け、焼肉を食べることとなったのである。

「それにしても、辰巳。何だか機嫌悪そうだな」

ナインは、自分の右斜め前にどっかり座っている辰巳の表情が、やけに膨れてしまっていることに気づいた。

「別に、なんでもないもん」

辰巳は、アタシに構うなとでも言わんばかりにそっぽを向いてしまうのである。

「おい、グレイ。お前が迎えにいった時、あいつになんかやったんだろ？」

ナインが、左横の席に座っているグレイに対して、耳打ちする。

「ちげぇよ。あいつと再開した頃にはもう、カンカンだったんだからよ。それで、俺の顔を見るなり、殴ってきやがったんだから。わけわかんねぇよ」

グレイは、膨れている辰巳をちらちら見ながら、ナインに耳打ちした。
「ギロ」
他方、辰巳はそんなグレイをにらみつけた。
「あははは・・・」
さすがのグレイも、怯えてしまっていたようで、辰巳に関する話題は慎みながらやめることにしたのだ。
「ほら、春樹。いつまでもぶすっとしてないで食べようよ。おいしいよ」
詩季は、十分に火が通った肉を示して言う。
「お腹へってないもん・・」
とはいったものの、詩季が示したうまそうな肉をちらちら見ているので、意地を張っているのは明らかである。ただ、どうしてそこまで意地を張っているのかは、彼女にもよくわからなかった。
「辰巳さん。お腹が減っていないにしても、次にいつ食事ができるかわからないんですから、少しだけでもたべましょう」
秘書の田中も、自分のために確保していた肉類を辰巳の皿に分け与えた。しかし、彼女は、食べるという行為をなしうるだけの活力がなかったようで、全く口が開かないのである。
「はるきちゃん。お肉とってあげるから元気だしなよ」
そういって、まもるは焼きすぎにより炭化寸前の肉ばかりをつまんでは、辰巳の前に置いた。その肉を辰巳は、じっと見つめる。いつもなら、まもるにこんな仕打ちを受けたならば、直ちに彼女をぶっ飛ばしているところだが、いまの辰巳にそんな元気は全くなかった。
「しーちゃん。今日のはるきちゃん、絶対におかしいって」
「うん」
辰巳の左隣に座っていたまもるは、目の前に座っている詩季の隣へ行き、耳打ちする。
ふたりは、改めて辰巳の表情をみると、ぶすったれた表情はいくらか緩和されたものの、どこか遠くをぼんやりと見つめてまるで恋す

る乙女のようであった。
「はぁ・・」
恒常的にポジティヴなパラダイムを持つ彼女であるだけに、ため息をすること自体が前代未聞なのである。そうだとすると、辰巳にため息を教えるような原因となりうるのはひとつしか考えられなかった。
「春樹。もしかして、男とか？」
それを聞いた辰巳は、顔を真っ赤にした。そのうえ、らしくもなく下を向いてしまうのである。また、彼女は肯定も否定もしようとはせず、そのまま黙ってしまった。
「やっぱり」
ふたりの少女は、互いに顔を見合わせた。
「だとすると、グレイが殴られたのは、彼がはるきちゃんを邪魔したからってところかな」
「グレイも、もっと気を遣ってあげればよかったのにね」
「黒井さんは言葉遣いが悪くても、人の痛みがわかる人だと思ってましたのに」
女性陣は、口々に耳打ちをしながらグレイの方をちらちらみる。グレイはそれに気づいているのか、ただ黙々と焼けた肉を白米の上にのせて食べ続けていた。
「はるきちゃん。社長に時間をもらって、あとで私も一緒にその人を探してあげるから、今はちゃんと食べようよ。食べないで死んじゃったら、会える人にも会えなくなっちゃうよ」
「そうそう、運命って結構あるものなの。私とナイン君だって、運命に導かれるように出会ったんだから」
そういって、詩季は赤くなって、しあわせそうな表情を浮かべた。
もちろん彼女も、運命などという実証不可能な根拠を持ち出すのは正しい説得方法といえないことは十分承知していたが、自己の体験を持ち出すことでなんとか主張を補強したのである。しかし、恋する乙女と化している辰巳にとっては、運命という言葉ほど説得力の

ある言葉はないであろう。
「ほんとにアタシ、また会えるかな?」
辰巳は、上目遣いで詩季に問いかけた。
「うんうん」
ふたりが同意すると、だんだんと辰巳の顔が明るくなった。
「そうだよね。あの人も、また会えるっていったし」
「うんうん」
「嫌われてなんかないんだ」
「うんうん」
すると、辰巳はひとりで頷いては、増強剤でも注入されたかのように、いつもの表情へと戻っていった。
「よぉし。なんか安心したら、急にお腹減っちった。とりあえず、肉でも食うか」
辰巳は、元気を取り戻し、まもるが取ってくれた肉を食べた。
「うげぇ・・。なんだこれ、もう炭じゃん!まもる、てめぇ!!」
そういって、辰巳は身を乗り出してまもるの頭をぶった。
「うぇぇん。ごめんなさぁい」
なにはともあれ、辰巳がいつもの調子に戻ったようなので、全員は安堵した。
「詩季もあまり食べてないんじゃないか?何か別に頼むかい?」
ナインは、右に座っている詩季も、肉を2~3枚と野菜類しか食べていないことに気づく。そのためか、思いのほかテーブルは6人席にしては寂しかった。まもるもあまり食べる方ではないし、辰巳に関しては炭化物を除いて何も口にしていない。だから、実際のところ、ナイン・グレイ・田中の食卓になっていたのだ。
「じゃあ、このコムタン・スープっていうのもらおうかな」
「OK。辰巳も、何か食べるだろ?」
「アタシ、シジミ食べたい」
辰巳は、今までの反動からか、テーブル上に置いてあった肉をありったけほおばりながら応える。

「チヂミな。いい加減に覚えろよ」
そして、ナインは暇そうにあくびをしている店員を呼び、コムタン・スープと海鮮チヂミを指差して、注文を伝えた。
「それにしてもよ、マジな話、これからどうすんだよ。俺ら」
グレイは、お茶をすすりながら訊いてきた。
「日本に帰っても、仕事なんてまともにできないだろうし、ここにいても鬼なんていねぇからな。せっかくのゲイボルグも腐っちまうよ」
「社長のことだ、おそらくマスコミを利用した執行官を討伐するはずだろう」
「でも、そいつは日本の救世主になってるって話じゃねぇか。そんなやつ倒しちまったら、余計に俺らの印象が下がるぜ」
「確かにな」
ナインも、熱いお茶をすすりながら深く考え始めた。執行官からいつまでも逃げるわけにはいかない。かといって、救世主と崇められているプロトオーガを倒してしまったら、それこそ日本で自分たちがいられるところなどなくなってしまう。
「でも、グレイ。消耗戦になれば、私達がもっと不利になるのは明らかよ。しかも、戦い方によっては、敵がペテン師だってことも明らかにできるかもしれない。少なくとも、ずっとこうしてくすぶっているよりはいいと思う」
詩季がナインの横から身を乗り出して、グレイに言った。
「なるほどな。まあ、俺は社長の命令さえあれば、なんだって叩ききるまでさ」
そういいながら、グレイは大きな牛カルビを箸で突き刺して、口に放り込んだ。
と、その時であった。ナインの携帯電話に着信が入ったようだ。どうやら弥生遼子からのようである。
「ナイン！急いでこっちに戻ってきてちょうだい！！」
弥生は声を荒げていった。このことから何かよからぬことが起ころ

うとしていることに気づいた。
「どうしたんですか？」
「プロトオーガよ。しかも2体いるわ。急いで！」
そういうと、すぐに電話は切れた。
「プロトオーガが来ているらしい。急いで戻るぞ！」
ナインは、呑気に食事中の仲間達に弥生の言葉を告げた。すると、仲間達は互いに顔を見合わせて頷くと、一斉に立ち上がった。

第３３話　ソウル攻防戦

焼肉屋を後にした６人は、人通りの多いソウル繁華街で通行人を巧みに避けながら、ソウル飛行場へ向けて走っていた。もっとも、目の見えない詩季をここで走らせるのは困難なので、ナインが彼女を背負って走っているようである。そのためか、彼らを見る人々は次々に後ろ指を差すような目でその集団を見ている。

「えぇ～ん。海鮮チヂミぃ～」
「最初にぐずってたからだろ。がまんしろ」

辰巳春樹は、注文だけして食べ損ねた海鮮チヂミを名残惜しんで、小さくなっていく焼肉屋を振り向いて見る。そのような、彼女をナインは咎めて、前方へ向き直らせる。
焼肉屋と飛行場はそれほど離れていなかったためか、ナインたちはすぐに戻ってくることができた。

「案外早かったのね。目標は、韓国領空内に侵入して真直ぐにこちらに向かっているわ。急いで準備して」

飛行場の入り口付近で弥生遼子が、６人を迎えてくれた。彼女のいうとおり、鬼はまだここに到着していないようで、嵐の前の静けさといわんばかりに静かである。

「あれ、何？」

ふと、まもるが走りながら鬼と化した戦艦を指差した。まるで、アザゼルの赤い肉を装甲に移植したような禍々しいものが置いてある。

「あれは、あんたたちがメシ食ってる間に完成した、わが隊の戦艦よ」

弥生は、自慢気に正体不明の物が何者であるかを紹介してくれた。

「わぁ。すげぇ」

確かに禍々しい点は否定できないが、味方の兵器である以上、その禍々しさは強さの表現でもありかえって辰巳には頼もしいとさえ思えた。

「さすが、社長。仕事が早いですね」

詩季は、弥生に向けて親指をたてる。

「当然よ。さて、無駄話はこれくらいにして、急ぎなさい」

弥生がそういうと、全員は搭乗口から戦艦内へと駆け込んでいった。

（二）

数分後、五体のオーガと1隻の戦艦型巨大オーガが所定の位置に付くと、まもなく南東の空から2体の巨大な影と、数機の戦闘機と人型ロボットがこちらに近づいてくることを見て取れた。戦闘機やロボットは、おそらく韓国軍の兵器であり、領土侵犯者を排斥するために、攻撃を行っているようである。しかし、侵犯者は物理属性攻撃無効シールドを展開しているのか、全ての物理属性攻撃はこれによって無効化されてしまう。そのため、韓国軍の攻撃を毛ほどにも気にかけず、むしろこれらを完全に無視して進行していた。

『そこの2体、これ以上の進行は止め、即刻退去しなさい』

ある兵隊が、メガホーンを使って、英語・中国語・日本語などの各言語で、そのような趣旨の呼びかけを繰り返す。しかし、それでも2体の侵犯者は進行を全く止めようとはしない。

『しかし、なんだこいつら?我々の攻撃が全く効いていない』

韓国軍兵士は、銃弾の一切が空間の中に吸い込まれる光景を目の当たりにして、手に汗を握るような想いであった。

『韓国軍、聞こえますか?あの2体は我々が応戦するので、一旦退避してください』

弥生が無線を使い、韓国軍兵士たちに注意を向けさせた。その声に導かれるように、彼らはさらに飛行場にいる6体の異様な兵器群を目の当たりにすると、もう何が何だかわけがわからなくなってしまう。

『アルファチーム。あれは日本軍の特殊部隊だ。後は彼らに任せて退避してくれ』

韓国軍司令官らしき男が、重みのある声で命令すると、交戦を続けていた兵たちも納得したのか、次々に戦線を離脱していった。そして、2体の侵犯者たちだけが残り、いよいよ公益社団法人東京陸運保険機構の部隊の目の前にその姿を現した。

まず一体目は、巨大な翼をもつ人型のプロトオーガ、アルビオンである。2体目は、今まで現れなかったタイプであり、アルビオンの3倍ほどの巨体を持つ翼竜のようなプロトオーガである。また、ずっしりとした恐竜のような下半身から生えた、人型のほっそりとし

た上半身が異様といえば異様である。

「やっとみつけましたね。シックス」

「えぇ。しかも、人間のくせにエイトのアザゼルをあんな風に使うだなんて許せないわ。絶対に皆殺しにしてあげるから」

シックスと呼ばれる少女は、怒りのあまりそのグレーの瞳が狂気に染まって、もはや人の目ではなくなっていた。

「我々はエイトのように優しくはありませんよ。行きましょう。わが化身、アヴァター」

2体のプロトオーガは、突撃してきた。

「ファイヴは、まわりの雑魚をお願い。私はアニミストをやるわ」

「わかりました。シックスも気をつけて」

それをきくと、アルビオンは巨大な翼をはためかせ、ナインのプロトオーガに向かって急降下する。

「ナインさん！」

まもるが危機を探知すると、急いでメイデンのシールドで援護をさせる。

「ふん、そんなもの、何も無いのと同じよ」

アルビオンは、何体にも分身しては、敵の注意を撹乱する。そして、それらの分身があらゆる方向からナインに襲い掛かる。他方、ナインのプロトオーガはメイデンのシールドで全身を保護され、全く隙

はないように思われた。しかし、アルビオンの分身には実物ばかりでなく、虚物のものも含まれており、攻撃の性質を多様化させることでメイデンのシールドを全く無効化してしまうのである。

「ぐわぁぁぁぁ！！」

ナインは、それを一身に受け、遠くへと吹っ飛ばされる。

「ナイン君」

詩季は、ナインを助けに向かおうとしたが、その時に猛烈な殺気を感じた。

「おっと、あなた方の相手はこの私がつとめて差し上げましょう」

巨大な翼竜が、いつの間にかアリスの背後にそびえたっていた。

「ち・・」

そして、その巨大なプロトオーガ、アヴァターは、すかさずその尾でアリスを地に叩きつけようとする。

「そんな、トカゲみてぇな尻尾。俺が叩ききってやる」

寸前のところで、ゲイボルグ・Dがアリスの前に割って入り、漆黒の炎を纏ったバスタード・ソードでこれを受け止めつつ、切り上げた。すると、すぱっと尻尾は切断され、上空へと吹っ飛び、紫炎につつまれて消えていった。

「ほう。そんな真似ができるのですか」

アヴァターの執行官であるファイヴという男は、感心してその光景を見ていた。しかし、切れた尾もすぐに再生してしまう。

「まだまだ。今度はセアトよ」

鬼女セアトは、アヴァターの上空からグレネード・ランチャーとショット・ガンを連射する。アヴァターに、透明なガラス玉のような高エネルギー体と緑色の溶解液が雨のように降りかかる。

「いい攻撃ですね。しかし・・」

ところが、その弾丸の雨はアヴァターに着弾する寸前のところで、弾丸を纏っていた外法エネルギーが剥ぎ取られ、次いで実弾が光の粒子に分解され、アヴァターに吸収されていく。これは、攻撃吸収シールドである。しかも、外側から内側に向けて外法属性、物理属性の順で重畳的に吸収シールドを展開していた。

「いい攻撃であるだけに、逆効果です」

アヴァターに膨大な量のエネルギーが注入されてしまったようだ。上半身のアヴァター本体の筋肉がやけに膨張をはじめた。

「同時にふたつの属性シールドを張っているというの?そんなの、どうやって攻撃すればいいのよ」

シールドを扱い慣れているまもるにとって、いや、シールドを扱い慣れているからこそ、このアヴァターの防禦能力の恐ろしさに平伏しそうになる。

「そう。あなた方にこのアヴァターの障壁を破る術はありません。この滅びの風に包まれて、どうか大人しく死んでください」

そして、アヴァターはたっぷりと吸収したエネルギーを解き放った。アヴァターを中心に光をともなった衝撃波が外へ外へと何もかもを押し流していく。その光はあまりに眩しくて、何もかもが見えなくなっていく。

「詩季!!」

ナインは、幸い先ほどの突撃で相当遠くへと飛ばされたので、アヴァターの攻撃を免れられたが、巨大な爆心地にいたアリスを見て、まず叫んだのである。

「あなたに余所見などしている暇などあって?」
「女・・」

ナインは、声のする方を振り向く。すると、先ほどナインに向かって突撃してきたアルビオンを見とめた。

「あなたを殺す前に聞きたいことがあるの」

シックスは、抑揚の無い声で淡々と尋ねる。

「何だ・・」
「なぜ、エイトを殺したの?」
「奴が俺を殺しに来たからだ」
「そんな理由で?」
「それで十分じゃないのか」
「十分?」

シックスは、ナインを鼻であざけ笑う。

「俺は俺の生きる権利を守った。それだけだ」

「まず、あなたは前提から間違っているわ。あなたに生きる権利など無い。あなたにあるのは、死ぬという義務だけ」

「そんなこと、お前に言われる筋合いは無い」

ナインは、相手の言い分を切り捨てるように応える。

「不合理よね。生きる権利のない人に、あの人の無限の可能性を無残に抹殺されるというのは。なぜそんな不合理な結果が許されるのかしら？」

「不合理なのはどう考えてもお前らだろう」

「なぜ・・？なぜ・・？なぜ・・・？」

シックスは、ひとりぶつぶつと自問自答を始める。

「・・・！」

ところが、アルビオンの覇気の無さが、急に威圧感へと転化されたため、ナインは本能的に生命の危機を感じた。

「なぜ、お前のような生きる価値もないクズ野郎が生き残るために、彼が殺されなければならないのよぉォォ！！！」

アルビオンは、猛烈な雄たけびを挙げながら、分身して突撃する。

そして、両手には鞭のような細い武器を手にして、四方八方からナインを捕縛しようとする。

（ここは虚物化して・・）

ナインは、世界と融合を果たそうとした。

「逃がさない。お前だけは逃がすものかぁぁぁぁ！！」

しかし、虚物化ができない。これは、ナインのプロトオーガの周囲に対虚無効シールドという、特殊なシールドを張られていたためである。

「捕まえたぁ」

ナインは、3体の分身が放り投げた鞭に手足を絡め取られてしまった。しかも、この鞭はかなりの強度であり、全くちぎれない。そのうえ、虚物化によって離脱することも不可能である。

「さて、お前の魂を吸い取って、廃人にしてあげる」

ナインのプロトオーガに絡みついた3本の鞭は、毒蛇のようにすると表面を移動して、メンタルスフィアに噛み付く。これは、物理属性精神方法攻撃か。

「なんだこれ・・・うがぁぁぁ！！」

そして、3本の蛇は鬼のメンタルスフィアを通して、勢いよくナインの精神力をまるでポンプのように効率よくナインの心からくみ上げていく。

「うふふふ・・。エイトの苦しみの分まで、たっぷり苦しみながら死になさい」

シックスは、うっとりとした目でその光景を眺める。この拷問じみた攻撃方法は、本当にたまらない。身動きひとつできない哀れな奴隷が断続的に挙げる悲鳴もまた心地よい。さらに精神力を４０パーセントほど吸い取ってしまうと、一般的には人間の廃人化が進行するのであるが、これまた快感なのである。どんどん人間としての理性を剥ぎ取られていき、人間の頭がおかしくなっていく様は、麻薬中毒者を檻の外から傍観するに近い狂気のスペクタクルである。この男もすぐにラリって、涎をだらだら垂らして、ひいては糞尿まで垂らし、命だけはと自分に対して媚びへつらうのだ。そのような人間の野性を目の当たりにするのは実にクセになる。

「がぁぁぁぁぁ！！」

「あなたもいい声を出すじゃない。でもこんなものでは済まないわ」

精神吸収が進むと、もうじき社会性と合理性に塗り固められた人間の外壁が瓦解してパトスをむき出しにした『サル』が現れるのだ。『サル』の喘ぐ声はほんとうにたまらない。そして、ゆくゆくはお前も『サル』として死んでいく。お前のような、傲慢な知識人が『サル』同然となるのは、死よりも耐え難い屈辱であろう。

（それにしても、なぜこの男は鬼化しないのであろう）

もう生命の危機はすぐそこまで来ているというのに、この男はいつまでも基本形のままなのだ。出し惜しみなど、この状況では無意味であろう。あるいは、別の目的があるのか。

（まさか！？）

鬼化は、メンタルスフィアに認められた執行官でなければなし得な

いもの。すなわち、アニミストに鬼化できるのはこの男しかいない。とすると、このままこの男を始末してもアニミストは手にはいらないどころか、永遠に闇の中である。もっとも、アニミストなど無くとも計画が無になるわけではなく、著しい支障が生じるだけであるから致命的というわけではない。にもかかわらずこの男は、それだけのために死ぬつもりなのだろうか。

いや、やけに悪知恵ばかりはたらくこの男に限って、そのような不合理なまねはしない。もしや、我々が知らない重大な事実ごと道連れに死を選ぶつもりなのか？

「なぜ、鬼化しないの？」

シックスは、一旦、精神吸収を取りやめた。

「はぁ、はぁ、はぁ・・」

ナインは、相当程度の精神力を吸われて、答えられないほどに疲弊していた。

「このままでは、無意味に死ぬというのに、なぜ？一体、お前は何を企んでいる？」

シックスは、憎き敵をいつでも殺せる状況にありながら、これを殺せないでいるため非常に動揺していた。だが、その動揺を隠そうとして、できる限り声に抑揚が現れないように淡々と尋問する。

「はぁ・・。さぁな・・。なんでかな・・？」

しかし、ナインは相手の心に生じた大きな変化を見逃さなかった。だからあえて、挑発的な態度を採る。

「貴様ァァァ！！」

だが、そのナインの挑発的言動はシックスの堪忍袋の緒を切断するに十分であったようで、逆効果を生じさせてしまったようだ。

（もういい。この男が何を隠していようがどうでもいい。その精神をからからになるまで吸い尽くして、殺してやる）

そして、再度、シックスは精神吸収を開始した。

「ぐわぁぁぁぁぁ！！！」

「やっぱり、これがいい。お前がこわれるまで、ずっと遊んでいてあげる」

シックスは、男に悲鳴を挙げさせることを止められなかった。これこそが彼女を興奮させてくれる。

「あああああ！！！」

「うふふふ・・」

「あへあへあへはえへへへ・・」

そろそろ頭がおかしくなってきたようだ。これからがおもしろくなる。この男にも、人間社会とのおわかれのじかんがちかづいているのだ。野蛮な哺乳類となり、狂気の乱舞を踊るがいい。

「叫べ、喘げ、馬鹿！！」

と、その時であった。

「・・・！！」

強烈な悪意。刺し殺しかねないほどの殺気。絶望的なまでに圧倒的なプレッシャー。これらの精神的な負荷が一挙に暇もなく、シックスの心を押し潰そうとする。

突如、アルビオンの背後に巨大な影が出現したのだ。それだけで、シックスは心が凍りつき、冷や汗が滲んでくる。

『そのぐらいにすれば？シックスねぇちゃん』

シックスは、後ろを振り向いた。そこには、アルビオンすらも威圧するほどの邪気を放つ、巨大な悪の結晶体が浮いている。鋼鉄の花弁を幾重にも貼り付けたような巨大な蕾。空に咲く、魔性の妖花。

そう、これこそは、最凶のオーガ、アーリマンである。

「ナイン、そのぐらいにしろとは一体どういった趣旨かしら？」

しかし、シックスは次第に平静を取り戻し、アーリマンの執行官であるノイに対して切り返す。ちなみにナインとは、ノイのコードネームである。いなくなった9番目の執行官の後釜として抜擢されたのがこの少年のようだ。

『そのままの趣旨だよ。もっといえば、それをやめようと言っているの。わかるよね？』

「お前、我々を裏切るのか？」

『裏切っているのは、僕じゃなくてねぇちゃんの方じゃないかな。アニミストを失うことが先生にどれほどの迷惑をかけるのか、頭のいいシックスねぇちゃんならもちろんわかるよね』

「くそ！！」

シックスはそういって、ナインに唾を吐きかけるようにしながら精神吸収を解いた。彼女は自分のしていることが、先生の命に抵触していることを認識していただけに、第三者にそれを咎められると反論ができない。

『にしても、団堂先生。ひどいやられようだなぁ』

ノイは、アーリマンの目を通して、心がボロボロになったナインをまじまじと眺めた。もう、ぐったりとしているようで、新手がきたことにも全く気づいている様子は無い。

「しかし、ナイン。この男を野放しにしておくわけにもいかないわよ」

『それはもちろんだね。でも、団堂先生はこのままじゃ、絶対にアニミストを出してくれないよ』

「なぜそういい切れるの？」

『だって彼、記憶喪失だから』

「記憶喪失？」

『うん』

「あははははは！それ本気で言ってんの？お前も冗談がうまくなったわね。あははは！！」

『そういうわけだから、アニミストはでてこないの』

「ざけんじゃねぇよ！じゃあ、コイツ生かしたところでアニミストはどうせ出てこねぇだろが！！やっぱりいま、コイツはここで殺す」

シックスは、改めて精神吸収を再開しようとした。

その時である。

アーリマンから無数の太い触手が伸びて、シックスのアルビオンを完全に包囲する。

『慎め、シックス。ここで俺が、貴様を殺してもいいんだ』

そして濃密な殺意と共に、あの明るい少年から発せられたとは思えないほどの冷たい声が、シックスの心につきささる。そのために、やむなくアルビオンはそこにぴたりと停止せざるを得なくなった。

「く・・、アーリマン・・！！」

シックスは、悔しさで歯軋りをするほどであった。

『うん、それでこそシックスねーちゃんだね。アルビオンごときが僕のアーリマンに敵うはずないんだから』

アーリマンは、伸ばした触手を自身の体に戻していくと、ノイは、ニコニコとした表情に戻っていた。

そう、ノイの言うとおりアーリマンとは高等執行官であり、シックスの下級執行官であるアルビオンとは一線を画す、上級のプロトオーガなのだ。しかもこのノイという餓鬼は、あとから入ってきたくせにえらく先生に気に入られたうえ、瞬く間に高等執行官としてのポストを彼に与えられた天才中の天才である。それだけにシックスは、この餓鬼が大嫌いであった。

『もちろん、僕もねぇちゃんに無理強いをするような理不尽なことを言うつもりはないさ。だから、こういうのはどうかなと思って、わざわざ来たんだよ』

「なんだそれは？」

『こういうことだよ・・』

ノイの口調が怪しくなると、巨大な蕾が開花して、それはまたまた巨大な蝶の羽のようになる。そして、アーリマンは、ナインのプロ

トオーガに向けて、何かを放ったのだ。しかし、それは物理的・精神的に害を及ぼすものではない。

（おねぇちゃんには悪いけど、まだ先生には死んで欲しくないんだよね。団堂先生を超えるのはこの僕じゃなきゃダメだから）

『オッケー。これで僕のやりたいことは終わりだから、あとはねぇちゃんが好きにするといいよ。じゃあね！』

そういって、アーリマンはどこかへ消えてしまった。

「あいつ、一体何をしに来たのよ」

シックスは、消えていくアーリマンを見届けると、再びナインのほうへ向き直った。思わぬ邪魔が入ったが、すぐに帰ってくれたのであとは思う存分にこの男をなぶり殺しにできる。

「え・・・？」

しかし、シックスは、いまさらながらにあの子どもがナインにしたことが、ようやくわかった。おそらく、何かのプログラムを送信したのである。いわば、この木偶人形がアニミストになるための起爆剤をセットしに来たのである。

そう、この青いメンタルスフィアこそ、最高執行官の証である。理性も何もかもが剥ぎ取られたこの男であるが、そのような焼け野原同然となった心の深層意識に、ひそひそとくすぶっていた動物の本能の基礎であるアニマが覚醒したのだ。しかもこの男は、事前に理性だとか社会性だとかが失われているがために、覚醒しようとしている野性は、通常よりも露骨で情熱的である。

「あのクソガキィィィィ！！！」

むざむざアニミストを目覚めさせ、自分だけ逃走してしまうとは、してやられた感が残る。しかし、これで確信した。あのガキは裏切り者だ。絶対に弾劾してやる。いい口実ができた。

とはいえ、奴を弾劾するにも現状を乗り切らねばならない。目の前のアニミスト前段階は、無数の泡に囲まれて、まもなくアニミストとなろうとしている。それにしても、アニミストはこれほどの強さを持っていたのか。明らかにアルビオンの潜在能力をはるかに超越している。

（勝てない・・。逃げるか？しかし、この男を背に逃げるなど言語道断だ。ファイヴと協力をすればあるいは・・）

「ファイヴ、聞こえる？」

『・・・・・』

繋がらない。まさか、相手は紛い物の雑魚集団だ。ファイヴのアヴァターに限って、あんな連中に後れを取るはずもない。むしろ寝てても勝てる相手だ。しかし、現に繋がらないということは、こちらと同じように異常事態が発生したことは確かなようである。

「うふふ・・。おもしろいわ。もとより、そのつもりでここに来たのだから。このアルビオンが相手になるわよ。アニミスト」

シックスが覚悟を決めるとまもなく、アニミストが現れた。黒と白の混沌の邪神である。ひれ伏したくなるほどの強烈な威圧感を前にしてはとてもではないが、まともな精神では耐え切れない。

「エイトの仇。ここで討つ！！」

シックスは、決死の覚悟でアニミストへと飛び込んでいった。

第３４話　覚醒の妖魔

恐竜のようなプロトオーガ、アヴァターから放たれた巨大な衝撃波が消え、周囲の眩しさも落ち着いてくると、ソウル飛行場の広大な敷地も一瞬で焼け野原へと変わっていた。アスファルトで舗装された綺麗な地面もすっかり引き剥がされて、寒々しい不毛な土地が顔を出している。

「少し、やりすぎてしまいましたね」

ファイヴは、少々興奮気味に力を解放してしまったため、必要以上に周囲の環境を破壊してしまったことを嘆いた。もっとも、嘆くといっても、事後的に若気の至りを笑い飛ばす程度のものではあるが。

「まぁ、いいでしょう。敵はもう虫の息・・」

気を取り直したファイヴは、自分に対峙する身の程知らずな虫けらどもを見渡した。焼け野原となった大地に、ぽつりぽつりと残骸のようなものが転がっている。この滅びの風に呑まれた哀れな虫けらたちは、手足などもふっとんでいて、立つことさえできないでいるのだ。

「あとは、確実に息の根を止めればいいだけです」

そしてファイヴは、まず一番近く地面に横たわっているゲイボルグ・Dを標的として、止めを刺しに向かう。

「待ちな！アンタの相手は、このアタシだ！！」

怒鳴り声と同時に、数発、弾が放たれる。辰巳春樹の乗る鬼女セアトは、いまだ健在であったようだ。どうやら上空にいたおかげで、間一髪衝撃波から逃れることができたようである。
面倒なことに一匹だけ仕留めそこなって、ファイヴにとっては、そのセアトがうるさいハエか蚊に思えて仕方が無かった。

「貴女の攻撃は、このアヴァターには無意味だということがわからないのですか」
「無意味かどうかは、やってみねぇとわかんねぇだろうが！！」

ただ、辰巳自身も、いつまでも同じ攻撃をしていても相手に吸収されてしまうので、新たな攻撃手段に訴えかけねばならないことを強く認識していた。知らなかったとはいえ自分のせいで、敵をアシストしてしまい、味方が無残にも傷ついてしまったのだ。ここは自分が命に代えても、味方を守っていかなければならない。

「おもしろい。いったい貴女がどういう手段に出るのか、ゆっくりと拝見することに致しましょう」

そういって、アヴァターの上半身である本体は、腕を組んで高みの見物を始めるのである。

「余裕ぶっこいていられんのも、今のうちだ！ばぁか！！」

セアトは、強大な外法エネルギーを爆発的な推進力へと転化させ、アヴァターに急接近する。それは、音速を超え、目にも留まらぬ速さとなる。

「そういう魂胆ですか。頭の悪い人の浅知恵のように思えます」

ファイヴは、救いようの無い人だと呆れかえってお手上げ状態であった。この女は、おそらく各種属性攻撃吸収シールドの中に侵入して、直接攻撃に踏み切るつもりなのであろう。しかし、そのような浅はかな考えでは、このアヴァターに傷ひとつ負わすことなど到底不可能である。というより、その策に出た時点において、このアヴァターの術中にはまっているのだ。

「出なさい。グラヴィディ・アクス」

すると、アヴァターの本体は、全長５０メートルほどもある巨大な斧をその手に顕現した。

「へ、そんな斧でアタシをぶった切れると思うな！！」

他方、辰巳はその斧が巨大である故に、容易に避けることができるであろうと考えた。だからこそ、怖れることなくそのままの速度でアヴァターの懐へ飛び込むのである。

「やれやれ、貴女は何かを勘違いしておられるようだ。この斧は、ただの外法媒体物です。貴女の考えているように、私はこれを振り回す気など全くないのです」

そういって、セアトが接近しているにもかかわらず、アヴァターは巨大な斧をかざしているだけで何もしようとはしなかった。見るからに隙だらけなのである。

「んだと？・・・ってあれ？」

もう少しで吸収シールドの範囲内に入ることができると思ったところで、辰巳は違和感を感じる。ただ、その危険探知はあまりにも遅

すぎたようだ。

「かかりましたね」

ファイヴは、口元を引きつらせて笑う。

「体が、重い・・」

驚異的なスピードで接近を試みたセアトであったが、急にその身体を自由に動かすことができなくなった。いや、動かせるのであればまだ良い。もはや腕を挙げることすらも苦悩を伴う状態である。

「コレは重力結界です。動くことすらできないでしょう」

ファイヴが説明するや否や、重力結界の射程内にいたセアトは、その異常重力によって大地に叩きつけられた。それはまるで大地に強力な磁力でも仕込まれているのではないかとさえ思えるほどの力であり、立ち上がることすらも困難を極める状態である。

「あ・・あ・・。くそが・・・・」

辰巳自身も異常重力の影響下にあるため、操縦席の床部分に這いつくばるように倒れてしまう。また、それだけではなく、強烈な重力の力は体内の物へも同様に及び、臓物が腹の肉を破り割いて地に落ちてしまいかねないほどであった。

「ああ・・!ああ!!」

そのうえ、横隔膜もまともに上下できないので、息もほとんどできない状態にあった。このままでは、セアトが潰れる前に辰巳の方が

ぺしゃんこになりかねなかった。

「敵とはいえ、貴女も女性です。いつまでもこの苦しみに耐えることはできないでしょう。すぐに楽にして差し上げます。ですからご安心ください」

アヴァターは、のっしりと近づいてきて、巨大な斧を手にとった。すぐに楽にすると言っている割にはその気があまり無いようで、行動はやけにゆっくりである。要するに、苦しませながら殺したいというのが、この男の本音であるようだ。

「あああ！！！」

声を発するにしても、苦しそうに涎をたらしながら喘ぐことくらいしかできない。

「ふふふ、苦しいでしょう」

ファイヴは、手にした斧をセアトに振り下ろすことも無く、ただその光景を傍観していた。

「苦し・・・、うげぇぇぇ！！」

臓器がひとつつぶれたのだろうか、血反吐を吐くようになってきた。セアトの操縦席内は、赤い血で汚くなった。

「あああああああああ！！！！」

内臓損傷の痛みで、ただ叫び散らす。しかも痛みで悶えるにも、両手足を革ベルトで強く押さえつけられているかのようであり、激痛

を紛らわすためにじたばたすることすら許されない。

「嫌だよ・・。死にたくない・・・。誰か、助けてよ!」

これは、身体を縛られたまま、体内の臓器を一個一個潰されていくような卑劣さ極まる拷問に等しい。このような苛烈な仕打ちを、まだ少女のような辰巳が耐えられるわけもないのである。現に彼女は、からだ全体が苦痛に満ちてきたため、いよいよ自分にも死が迫ってきていることを具体的に認識した。そうすると、恐怖で頭の中が真っ白になってしまっていた。

「やめて・・。もう、やめて・・。痛い・・死んじゃう。ママ。パパ・・、助けて。ぐへッ!!」

そして、もう一度、大量の血を吐き出した。辰巳は、操縦席の中で、干上がった魚のようにぴくぴくするだけである。

「ああ!!本当に愉快です!!貴女のその無様な格好!!地に這いつくばりながらも、生にしがみつこうとする惨めさ!!」

ファイヴは、辰巳の行動にあわせてぴくぴくしているセアトを見て、大爆笑を始めた。もうこの男は、止めを刺す気など毛頭ないらしい。ゆっくりと、この女が潰れていくことを見物するだけなのだ。

「ママぁ・・。ぱぱぁ・・」

辰巳は最後に、遠い海の向こうにいる両親の笑顔を思い描いては、ホームシックになってしまった子どものように泣いていた。だが、涙が出るだけで、自分の吐き出した血だるみに身体を横たわらせている以外になにもできることはなかった。もう、そのまま死を待つ

しかないようであった。

（春樹さん・・。春樹さん・・。こんなところで死んじゃってもいいんですか？）

ふと、気のせいなのか、辰巳の頭の中にどこかで聞き覚えのある声が響いてきた。

「アタシ・・・お迎え・・・」

ついに死神でも来たのではないかと思えてくる。もしくは、見殺しにした友達が手招きをしているのであろうか。もしそれならば、それでもいいのかなと辰巳は思ってしまっていた。

（今回は特別です。ゲームを楽しくするために、貴女に力をあげましょう）

だが、やはり声が頭の中に響いてくる。消えそうな意識の中でも、辰巳は誰かが自分の耳にささやいていることをはっきりと認識できたのだ。

（貴女もこれで、偽りの鬼女から、真の鬼になれるはずです。それは、貴女にとって、きっと楽しい世界の幕開けですよ）

すると、セアトのＯＳが、何かのプログラムを受け取った。そのプログラムは、辰巳が特になにをするでもなく自動的に執行される。

（さあ、お目覚め下さい。貴女はメンタルスフィアに選ばれた、正統なる執行官です。存分にその力を使いなさい）

たちまちに操縦席内を異世界から取り入れてきた狂気が充たしてしまった。辰巳は、邪悪な瘴気の塊に飲まれて見えなくなってしまう。むしろ、それに飽き足らず、膨大な量の外法エネルギーはその行き場をなくして、セアトの全身を覆い尽くすほどである。

「これはいったい？何が起こっている！？」

膨大な外法の力を認識したファイヴは、自分の目の間で起きようとしている前代未聞の出来事に当惑していた。

「まさか、紛い物の分際で鬼化しようというのか？」

このメンタルスフィアの異常活性は、まさに鬼化の前触れである。しかし、鬼化は選ばれた執行官にのみ与えられた、特別の秘儀である。こんな紛い物などが断じて到達してよい領域などではない。

「な・・、なんということだ・・」

アヴァターの重力結界によって押しつぶされていたはずのセアトが、その力を押し返してなお、立ち上がったのだ。

「あーはっはっはっはっは！！！行くよ、セアト！！！」

死にかけていたはずの辰巳が、まるで鬼にでもとりつかれたかのようになり、異常に元気よく叫んだ。そして、黒い瘴気につつまれたセアトに異変が生じる。すなわち、右腕がありえないほどにまで巨大化し、木の枝のような翼が背中に勢いよく生えた。また、体中をピンク色の筋肉が覆い、もはや鬼女などではなく異形の悪魔であった。

「信じられない。こんなのありえない・・。なぜ、コイツが？」

そして、ファイヴは痛感していた。あの紛い物から発せられる異常な瘴気が、このアヴァターにも匹敵する力を持っていることを。いや、それ以上かもしれない。彼は、あの紛い物のいったいどの部分に、これほどの力が眠っていたのか理解できなかった。

「あーあ。やってくれたね、アンタ。口ン中が鉄臭くてきもちわりぃんだけど」

辰巳は、口の端に垂れている血を舌で一蹴しながらいう。

「それに、マジで痛かったわ、アレ。百万倍にして返してやるよ。観念しろや、ガリ勉野郎。あーはっはっはっはっはっは！！！」

辰巳は、大声で笑い飛ばした。

「鬼化したからといって、調子に乗らないで頂きたい。貴女にアヴァターの障壁を破る術はないのだから」

ファイヴは、鉄壁の二重吸収シールドがある以上、やはり自分が負けるはずは無いと確信していた。だからこそ、彼は強気でいられたのである。

「ああ、それね。そんなのこうすりゃいいじゃん」

セアトは、巨大な右腕をアヴァターに向けて、伸張させた。それは鋭利な槍のようになり、アヴァターを串刺しにしようと、ものすごいスピードで伸びていく。

「それでは無意味と何度も言っているでしょう?それがな・・・・・」

すっかり安心しきっていたファイヴは、不測の事態に気づくことができなかった。あの明らかに物理属性である攻撃は、物理属性攻撃吸収シールドによって攻撃能力を完全に奪われるとタカをくくっていたのだ。ところが、そうなることはなく、その巨大な槍はアヴァターの上半身付け根部分を貫通していたのだ。

「吸収シールドが適用される前に、攻撃の属性を変えちゃえばいいんじゃん。簡単なことだろ?」

辰巳のいうように、彼女は、確かに物理属性攻撃を行ったのであるが、外法属性吸収シールドを突破した直後に、攻撃の性質を外法属性に変えたのである。そのようにして辰巳は、セアトの攻撃を到達させることに成功したのだ。

「貴様が、属性の転換を知っているはずなど!!仮に知っているにしても、一朝一夕でモノにできるような技術ではない!!それをなぜ貴様が・・」

「アタシ、天才だからさ」

アヴァターの防禦能力は一見完璧のように見えるが、実は属性の転換という攻撃方法を知っている者にとっては、裸同然であった。無論、ファイヴ自身も属性の転換を知っていないわけではないのだが、この紛い物がその技術を持っているなどということは夢にも思わなかった。一見、頭の悪そうな女だが、本当に戦闘の天才なのかもしれない。

「これで、吸収シールドは無効化した。あとは、思う存分、アンタ

をぶっ殺すだけね。けけけけけけけけ」

辰巳は、奇妙な笑いを挙げるとともに、突き刺したままの右腕をドリルのように反時計回りに回転させる。すると、アヴァターの肉を掻き出しながら、右腕は勢いよく抜けていった。

「調子に乗りすぎです。たかがアヴァターの吸収シールドを破っただけで、私に勝てると思ったら大間違いです。第5の執行官の恐ろしさは、これからが本番なのですから」

ファイヴは、闘争心に火がついたのか、巨大な斧を手に構えて上空へと飛翔した。

「そうそう。そうこなくっちゃ。せっかく手にしたこの鬼の力。雑魚相手に使ったんじゃもったいないからね」

「貴様が、この私を雑魚呼ばわりするなど！！」

「ま、いいや。アンタが雑魚かどうか、このアタシがためしてやるよ。かかってきな」

セアトは、その巨大な右腕をかまえる。他方でファイヴは辰巳に言われるまでも無く、セアトに向かって、その巨大な斧を振り下ろしつつ急降下するのであった。

第35話　R and J

強烈な衝撃波を受けて、暫くの間、横たわっていた詩季であったが、ようやくにして意識を取りもどした。ただすこし頭がぼぉっとしていて、現状がよく飲み込めていない。とりあえず、自分が鬼女アリスの操縦席の中にいることから、彼女はまだ戦場の只中にいることを思い出し、席に戻るためゆらりと立ち上がる。

（いったい、今、どうなっているの？）

詩季は、自分が置かれた戦況を確認するために、アリスの目を通して世界を見る。すると、巨大な敵、アヴァターと極めて禍々しい風体をもつ謎のオーガが戦っていた。あのオーガは今まで見たことも聞いたこともないものであったが、どこかセアトを思わせる雰囲気を残していた。

（まさか、春樹・・。どうして、あんな力を？）

間違いない。人の雰囲気を感じることに長けていた詩季は、あれが間違いなく辰巳春樹の駆るセアトであることを確信できた。しかしながら、あの少女がなぜあれほどの力を持っていたのかまでは、詩季の理解の範囲を超えていた。

（春樹・・・）

詩季は、仲間の強大な力を前にして頼もしいと思う反面、あの呑気な辰巳春樹が辰巳春樹でなくなるような気がして怖かった。

（とりあえず、今はみんなを助けなきゃ）

詩季の心を覆っていた不安については今のところ傍らに置いておくとして、近くで横たわっているメイデンを救出することにした。比較的、自分のアリスにダメージが少ないのは、まもるが身を挺して守ってくれたためであろう。

「まもるちゃん！！」

詩季は、アリスの手を通して、まもるに自己の精神を分け与える。

「ん・・」

メイデンが少しだけ動いたようだ。
「しーちゃん・・。敵は・・？」
まもるも、とりあえず意識を取り戻したようで、ゆっくりと起き上がった。
「春樹が、ひとりで戦っているの」
「はるきちゃんが？」
詩季の言葉を聞いたまもるは、突然、びっくりした様に飛び起きた。
そして、彼女は遠方で戦っている2体のオーガをまじまじと見た。
「あれが、セアト・・」
まもるはあの異形の悪魔と化したセアトが辰巳春樹の乗るセアトであるとは信じられなかった。確かに、かつての面影は残っているが、あれがセアトであるとはヒントでもない限り気づかない。
「私たちも、戻ろう」
「う、うん」
詩季は、唖然としてしまっているまもるを、現実に呼び戻し、自分の仕事を再開することにする。
「そういえば、ナインさんは？」
アヴァターは巨大であるだけに嫌でも目に付くが、その仲間であるアルビオンは比較的小さくて戦闘開始早々に、ナインと共にどこかに行ってしまったから、辺りを見渡すだけでは容易に発見できなかった。
「ナイン君は、きっと大丈夫。今はグレイを助けなきゃ」
「そうだね」
詩季は、そう言ったものの、ナインの存在がかなり希薄化している気がして不安であった。そうであるからこそ、彼女は彼が大丈夫であると自分に言い聞かせるしかなかった。

セアトとアヴァターとの戦闘は、熾烈を極めていた。いったいこの戦闘にどれほどの外法エネルギーが用いられているのか、計算することが困難なほどの闘いである。本来この地球上にあってはならな

いエネルギーが膨大な量となって一箇所に結集しているだけに、この戦場は不安定になりつつある。下手をすれば、次元の裂け目でも生じて、時間の流れさえも変えかねない。

「ちょこまかと!!」

アヴァターは、敵の虚物化を防止するために対虚無効シールドをセアトに密着させているのだが、にもかかわらず敵は機動的にかつ臨機応変に対応するので、攻撃が当たらない。

「オラオラ!!さっきまでの勢いはどうした!!」

そして、アヴァターは巨体であるだけに、じりじりとセアトの攻撃を受ける。しかも敵は小物であるにもかかわらず、強烈な一撃を叩き込んでくる。まさに、蝶のように舞い、蜂のように刺すごとくである。

「私は、貴様など認めない!!この私こそが、鬼に選ばれた戦士!!貴様などに、負けるわけがない!!」

アヴァターは、グラヴィディ・アクスと称される巨大な斧をセアトに向ける。そして、その先端部分に付いた黒曜石のような漆黒の宝玉からマイクロ・ブラックホール弾を数発はなった。それらは、空間を歪ませながら通過点にある一切のものを捻じ曲げて、目標を追尾する。

「憑いてくんなっての!!」

避けども、避けども、幽霊のように憑いてくる弾を五月蝿く思う辰巳である。

「貴様は、これから逃げられるわけがない。大人しく圧縮されて死ね!!」

マイクロ・ブラックホール弾のうちひとつが、セアトの右腕を捕らえる。それは、ガリガリと肉を削るような凄まじい音を立てて、腕をあらぬ方向へと曲げるに曲げて、そのままその腕を切り落とす。

「いい様だ!!この私にたて突いたこと、肉塊となって後悔するがいい」

さらに、多数のマイクロ・ブラックホール弾がセアトに襲い掛かる。

「はるきちゃん！！」
だが、寸前のところで、メイデンの張った外法属性攻撃無効シールドが、その攻撃能力を奪ってくれた。
「まもる、起きた？」
「起きた？じゃないよぉ。今、すごく危なかったんだよ」
「へへへ、わりぃわりぃ」
辰巳は、へらへらと笑った。もっとも、セアトの変貌を受け入れられずにいたまもるは、そんないつもどおりの辰巳を確認して、少し安心した。
「どいつもこいつも、この俺の邪魔ばかりしやがって！！」
吹き飛ばしたはずの邪魔なハエが現れては自分の攻撃が妨害されたので、ファイヴの怒りは頂点に達しようとしていた。当初、丁寧な言葉遣いを心がけていたこの男のイメージは完全に崩れ去ってしまっていたのである。
「貴様は、引っ込んでいろ！！」
まずファイヴは、自分の攻撃を邪魔してきたメイデンに対象を変更することにした。そのため、虚物化してメイデンの背後に瞬間移動する。
「消えろぉぉぉ！！」
そして、巨大な斧をふりかぶって、邪魔なハエを一刀両断としようとする。
「アンタの相手はアタシだろ？まあ、２対１になっちゃってるけどさ」
辰巳は、メイデンのタマをとりにくるであろうと予想していたので、アヴァターの出現ポイントに向けて、巨大なリヴォルヴァーを全弾打ち込んだ。アヴァターの防禦を突破するために、外法属性吸収シールド突破後、直ちに属性を転換して物理属性吸収シールドを突破することも怠らない。それゆえ、外法規則の力を借りた魔弾と化した弾丸が、最終的にアヴァターに６発襲い掛かるのである。
「ぬわぁぁぁぁ！！」

アヴァターは、巨大な斧を振りかぶっていた右腕を打ちぬかれる。外法規則により、摩擦力や重力を吸収して絶大な攻撃力を得た弾丸が、一瞬にしてその腕を吹っ飛ばしたのだ。さらに、他の弾丸もアヴァターの腹部に喰らいついて、巨大な下半身と本体とを切断した。まだまだ弾はアヴァターに襲い掛かる。今度は、その本体を潰そうとしているのだ。

（死ぬ？この私が、こんなところで？こんな下等な人間どもの手によって？）

ファイヴに、この弾を回避する術はなかった。

「死ね」

辰巳は、この一撃で詰んだと思った。ところがその時であった。空間を切り裂くようにして、リヴォルヴァーの弾がその中に呑まれていってしまう。

「ち、そんな技隠してたのかよ・・・って、なんか来る？」

辰巳はいち早く強大な存在の出現に気づいてしまった。彼女の一撃が次元の裂け目に呑まれてしまった直後、切り裂かれた空間から弾丸と入れ替わるようにまた新しいオーガがでてきたのである。

「アスラ・・。トゥワイスか・・」

そこには、千手観音を思わせるような無数の細い腕を生やした、割と小柄なオーガがいた。その名も、高等執行官アスラだ。ただ、観音さまと呼ぶには程遠く、灰色の細い肉体と戦いと血に飢えたような眼光は、死の最前線にのみ生まれいずる修羅そのものである。

『ファイヴ・・。こっぴどくやられているね。大丈夫か？』

そのアスラと呼ばれるオーガは、セアトを背にしてアヴァターの前に立ちはだかった。突然の来訪者を前に、辰巳は状況がよく読めなくなっていた。そのため、来訪者は隙だらけであるにもかかわらず、撃ち落とすことさえできずにいた。

「貴方に心配されるほどのものではありませんよ・・」

ファイヴは、下等な人間に劣ってしまったことをこの男に見られたために、恥辱の思いに耐えかねていた。だからせめて、強がりを言

ってやり過ごすのである。
『無理しなくていい。彼女、強かっただろ？俺だってそう思うさ。君が負けるのもむしろ道理だよ』
この男の発言からすると、おそらくはふたりの戦いは始めから観戦されていたようである。ファイヴは、どうやらこの男のおもちゃの力量を測るものさしとして、利用されていたらしいということに気づいた。だとすれば、あの下等な人間が鬼化して、このアヴァターを凌駕したことも頷ける話である。
「トゥワイス。やはり貴方が一枚かんでいたようですね。貴方のしたことは、先生に対する明らかな背任行為です。こんなことをして許されるとでも思っているのですか」
『だからこうして助けに来たじゃないか。それに、これもよりよい世界を作るために、必要なことなのだよ。多数派による意見というものは常に正しいように思えるが故に盲目的なんだ。俺たちに反対する有力なマイノリティ集団を叩き潰してこそ、俺たちは真理の王国へと到達できる。そう思わないかい、ファイヴ？』
「これがそのよりよい世界のために必要なこと・・ですか」
ファイヴは、自分の酷い有様を指差して、この男の不合理かつ価値基準不明な思考パターンにすっかりと呆れ返っていた。
「まあいいでしょう。このことは先生に報告させていただきます」
『ああ、勝手にしてくれ』
それを聞くと、アヴァターは虚物化して戦線から離脱していった。あとに残されたのはアスラと、アヴァターの残骸である。
「さて・・」
トゥワイスは、セアトに向き直った。前方の相手は戦う気満々なのであろう、殺気がびりびりと到達してくる。もっとも、このような刺激的な殺気は、彼にとってむしろ心地よい。つまらない日常とは異質な空間に自分が置かれていることを実感できるからである。
「てめぇ、何ものだ？」
「・・・・」

アスラからは何の反応もない。ただ、それはぼぉっとセアトの様子を観察しているだけである。

（ふふふ、春樹さん。思った以上に覚醒を果たしましたね。あのアヴァターを撃退するとは）

セアトよりにじみ出る修羅の匂いも、まったく申し分ないものである。

「ま、待て！！」

アスラは、再び踵を返してセアトから離れていこうとする。無論、辰巳の制止にも全く応じようとしない。

「まてっつってんだろ！！」

セアトは、リヴァルヴァーでアスラの足元を狙い撃った。アスラは敵を背にしているにもかかわらず余りに無防備であった。そのため、辰巳はこのような相手に対して、いくらなんでも急所を狙うのというのはさすがに忍びないであろうという思慮がはたらいたのだ。しかし、そのような彼女の配慮も無駄であったようだ。先ほどのように、アスラがその細い手を一振りするだけで空間が裂け、その中に弾丸が入り込んでいってしまったからである。

「アタシたちを殺しにきたんだろ？戦えよ！！逃げるな！！」

辰巳は、鬼のくせに味方を逃がして、自分も逃げていくこのアスラの行動が理解できず、イラついていた。そのうえ、この鬼が明らかにアヴァターを凌ぐ力を持っているということも直感的に理解していた。だから、この鬼がひと暴れするならば、ここにいる辰巳たち全員を殺すことも十分可能である。にもかからわず、戦闘をせずに帰ってしまうということは、辰巳にとって情けをかけられたに等しいのである。

「シカトしてんじゃねぇよ！！」

セアトは、猛スピードで逃げ行くアスラを追尾する。直接攻撃に踏み切るようだ。

（やれやれ・・）

トゥワイスは、まだ辰巳を戦うに値しないと思っていただけに、武

器を取るのは面倒であったが、このままセアトを放置すると自分が帰れないと気づいた。
（殺さない程度に・・な）
アスラは、無数の手を使い、小さく円を描くかのようにそれらを動かす。すると、瞬く間にセアトの周囲の空間に幾つもの裂け目が生まれては、セアトの肢体ごと裂いていくのである。
「な・・・・！！」
切り裂かれた空間は、すぐにあるべき姿の戻ろうと強力な原状回復能力を発揮させる。その力によって、セアトの手足はどこかへぽんぽん吹っ飛んでいった。
「コレが避けられないようでは僕には勝てませんよ、春樹さん。あせらずとも、チャプター9の時に再び合間見えることになります。それまで、楽しみはとっておくことにしましょう」
「その声・・リーさん？何でリーさんが、それに乗ってるの？」
辰巳は、会いたかった男の声をこんなところで聞いたがために、頭の中が真っ白になってしまった。
「言ったでしょう。僕はパイロットだと。具体的には、このアスラの執行官ですけどね」
「嘘だ！！嘘だぁ！！」
辰巳は、あの優しい爽やかな男性がプロトオーガの執行官だったなんて信じられなかった。
「あなたが鬼に乗っているなんて！！」
今、まさに自分に対して牙を向いたなんて信じられなかった。
「あなたがこんなところにいるはずない！！」
あのクソ憎たらしい鬼どもの執行官であったなんて信じられなかった。
「嘘だといって、リーさん！！」
この人が自分の友達を殺し、自分から幸せを奪っていった人間だったなんてありえなかった。
「リーさん！！！」

だから、これは何かの悪い夢だと一生懸命に否定した。だが、手足を失って、推進力まで殺されてしまったセアトは、重力に逆らうことはできずどんどん落ちていった。そして、次第にトゥワイスのもとに彼女の叫びは聞こえなくなっていた。

「また、会えますよ。それまで生きていてください」

そういい残して、アスラは空間の裂け目とともにどこかへ消えた。

第３６話　ｄｕａｌｉｓｍ

弥生遼子と田中愛が乗る戦艦は、アヴァターの衝撃波により飛ばされて以後、暫くのあいだ沈黙をしていた。衝撃波によってかなりの距離を引きずられたらしく、艦体が大地を削ったあとが長く尾を引いているのである。もっとも、艦体に致命的な外傷はなく、航空能力が奪われてしまったわけではない。

「いてて・・」

弥生遼子は、転倒して意識を失っていたが、ようやくにして目を覚ました。頭をぶつけたためか、鈍い痛みがする。頭から液体が滴る不快感がしているため、少し流血もしているようだ。しかし、あれほどの膨大なエネルギーをくらっていたにもかかわらず、こうして生きていたことはむしろ感謝すべきであろう。鬼となる前のあの輸送機であれば、搭乗員もろとも塵ひとつ残らずに消し飛んでいたに違いない。

「一応、生きているようね」

弥生は、いま現在、自分が戦艦のブリッジにいることを認識した。操縦席には操縦桿を握ったまま秘書が気絶している。ただ、シートベルトを着用していたためか、弥生のように転倒するということはなかったようだ。なら気絶するほどのものでもないだろうと突っ込みを入れたくなるが、あれほどの眩しい光と衝撃波の二重奏である。本能的に死を確信し、苦痛に襲われる寸前に意識という電源を落としてしまったのであろう。いわば秘書は、ショック死の一歩手前である。

ということで、秘書はなんともないようであるから、改めて弥生は

辺りを見回した。

「何、あの青い光・・」

弥生は、強く輝く青い光を見た。その発光源には見たことのないオーガもいる。なんとも奇妙な光景であるものだ。彼女はまだ意識が十分に覚醒しきっていないのだろうと思い、強く目を閉じて自分の顔をはたく。そして再び目を開いて、前方の光景を見るのである。

「やっぱり、気のせいなんかじゃない」

しかし、結果は同じであった。襲撃してきたオーガのうち一体と、青いメンタルスフィアを持つ未知のオーガが戦っているのだ。青いメンタルスフィアなど、弥生が知る由もない。あれは本来、薄緑色の弱弱しい光を放つに過ぎないものではなかっただろうか。なのになぜ、あのような目を背けたくなるような威光を放っているのだろう。

また、それ以上に彼女の目を引くのは、青い光の源たるあのオーガである。白と黒が織り成すその身体は、善良なるものと害悪なるもののとのカオスを思わせる。神々しくも醜い、優しくも卑劣な、存在そのものが矛盾しているオーガなのだ。

「あれがまさか、ナインのオーガ・・」

そしてあの矛盾に満ちたオーガは、敵のオーガと相対している以上、姿は変われどナインの鬼であると結論せざるを得ないのだ。

「ナイン、あなたはいったい何者なの・・」

もちろん、答など誰も提示してはくれないのである。弥生は、向こ

うで煌く青色の威光をただ眺めて、その戦いを見守ることしかできなかった。

（二）

最高執行官『アニミスト』。その強大な力の淵源は、青きメンタルスフィアに求められる。このおぞましき身の毛のよだつような青の輝きは、数えきれないほどの生命体を生贄にし、その魂の土壌の上に醸成されたのである。その土壌には無残にも圧殺されてしまった生物たちの苦痛や怒りが肥溜めのように蓄積され、絶えずアニミストの動力源となっているのである。いわば、アニミストに向けられた憎悪を再構成し、純度の高いエネルギーに転換して循環利用するものといえる。だから、このアニミストは、生きとし生けるものを殺せば殺すほど、そしてその殺戮対象に憎まれれば憎まれるほど強くなる。まさに、外法の執行者の長としてこれ以上に相応しい存在はないであろう。

「団堂ぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

シックスは、身も心もボロボロにやつれてしまっていた。このアニミストというオーガは、彼女の想定していたものとはまるで異なり、はるかに強大な力を持っていた。軌道の読めない攻撃や、予測不可能な攻撃からはたとえこのアルビオンでも、直撃を回避するだけで精一杯なのだ。また、前形態と比較して、か細くなってしまったあの腕から繰り出される一撃も極めて痛いものである。いったいどうして、あの細い腕からこのアルビオンの防禦を突破し、大損害を生じさせることができるのであろうか。それゆえ、ある一定の距離まで両者の間合いを詰めることすらできず、シックスはまともな攻撃を敵に叩き込むことができないでいる。

「くやしいよぉぉぉぉぉ！！ちくしょぉぉぉぉぉ！！！！」

シックスは、あのふざけた男が、この敬虔で忠実な自分を軽く凌駕し、絶望のどん底に突き落としているのが、悔しくてたまらなかった。必死でもがき苦しんでいる彼女は、まるであの男に見下されている気がしてならないのだ。

シックスは、少し遠くにいるアニミストを見る。現在はいたって静かにしており、攻撃のそぶりは見せていない。まるで、大仏のように優しく世界を見つめているだけなのだ。しかし、アニミストの異常な静けさからして、かえってシックスの警戒心は深まるばかりである。この透き通るような無心状態は、外道の王者であるからこそなし得る領域である。不用意に攻撃を仕掛けるのならば、自分の命はない。

「来た」

ついにしびれを切らしたのか、アニミストが動き出した。背後に攻撃の気配がある。それはなぞの宝玉であり、アルビオンに対して体当たりを目論んでいるようであった。ただ、機動性に関しては絶大な能力を持つアルビオンであるから、何とかこれを回避する。

（またこの攻撃だ・・。虚物化を封じているというのに、いったいなぜ私は背後を取られる？）

しかし、そのなぞの宝玉を回避したと思った矢先であった。アルビオンの右腕が切り落とされる。

「あああああ！！！！」

今度は、別方向から、なぞの宝玉を棒状に伸ばしたようなものが襲

い掛かっていて、これによってアルビオンの腕は切り落とされたようである。切断部分から血液が滝のようにあふれ出る。とはいえ、ひるんでいる場合ではない。相手は、すぐそこにまで飛びかかろうとしてきている。次は、シックスの命をとりに来るつもりだ。

「ちくしょぉぉぉぉ！！！なめんなぁぁぁぁ！！！」

アルビオンは、断末魔の叫びを挙げる。それは、地獄の苦しみから抽出される哀れな受刑者たちの叫びの塊である。その叫びは、いったいどれほどの残虐な仕打ちを叩き込めば、これほどに恐ろしい叫びを挙げることができるのであろうと思わざるにはいられないほどのものである。おそらく、現世では何者も出すことのできない音に違いない。存在してはいけない音色。すなわち、禁断の唄である。そして、その断末魔の叫びは、空間を歪めるほどの音波となってアニミストに襲い掛かる。その音に触れたアニミストは、自身の身体をボロボロにされた。まるで、巨大なハンマーか何かで打ちつけられたかのように、身体が粉砕されるのだ。

「ははははははは！！！ざまぁぁぁ！！！」

シックスは、風化した岩石のように砕かれていくアニミストを見て、いい気分に浸るのである。

「もう一度、食らわせてあげる」

アルビオンは再度、断末魔の叫びを挙げる。今度は、音波を一点に集中させ、アニミストを一気に砕くつもりらしい。一方、敵はこれを避ける気がないのか、全く動こうとはしない。そのため、アニミストは甘んじて、腹部にその直撃を受ける。結果として、アニミストの腹部は、押しだるまのように吹き飛ばされてしまい、上半身と

下半身がふたつに分かれてしまったのである。

「てまどらせやがって！これで終わりよ！！」

アルビオンは、アニミストにとどめの一撃を刺そうとした。ところが、そのような致命傷を受けてもなお、アニミストは攻撃の意志を弱めることはなかった。むしろ、最後の一撃を受けてあげたといわんばかりであり、熱風のような殺意がシックスに襲い掛かってきた。アニミストの上半身と下半身の切断部分に、魔方陣のような紋様が発生して、光の文字を描き出す。すると、アニミストの全身が強く煌き、そこに外なる世界から膨大なエネルギーが怒涛のようになだれこんできたのだ。

「なんだ？何をするつもりだ？」

シックスは、なにやら空間が軋むような感覚を肌で明瞭に感じ取ってしまう。それだけに、彼女でも何かが来ると具体的に予測できてしまうのである。とはいえ、それは彼女にとって、嫌な予感以外のなにものでもないのであるが。

「化け物・・・」

アニミストの切断部分にできた魔方陣は、まるで地獄への門（デモンズゲート）である。そしてそこから、変な化け物が門を突き破って、この現世に生れ落ちようとしているのだ。現に、化け物の手か何かが、もぞもぞと外の世界に出ようとあがいているのである。

他方、アニミストがその化け物の出生を助けるため、自己の手を門の中に突っ込んでは、その化け物を一気に引きずり出す。

すると、変な蛸のような、単細胞生物のような、訳の分からない巨大生命体が出てきた。それは、この世の生物ではない。また、神話

にものぼることのないような醜い存在。人の観念を超えた外道。まさに外なる世界にのみ生息する、この世界にいてはいけない矛盾（パラドクス）。アニミストは、このようなものを現世に呼び寄せてしまったのだ。

「ｏａｉｈｇｏａｉｈｇｉｌａｈｇｏｉａｕｈｇｏ」

その生命体は、なんとも知的に言葉らしいものを発しているが、現世に生きる人間にとってまるで意味不明である。しかもその醜い醜態に似合わず、理性的であるが故に余計気味が悪い。

「何をする気だ！！団堂！！」

シックスは、人智を超えたアニミストの能力の前に、自身の心に芽生えた恐怖を隠せなかった。死など、とっくの昔に覚悟していたはずである。しかし、さすがにそれにも許容範囲というものがあって、死を超えた恐怖まで覚悟していないことはもちろんである。いったい、このアニミストに殺された場合に自分が体験する恐怖や苦悩とは、いかほどのものであろうか。想像してもし足りないほどである。特に、あの奇妙な生命体は、自分を異世界へ連れ込んで、無限の恥辱や苦痛を与えるに違いないであろう。

「そんな豚野郎で、私を斃せると思うな」

だが、そのような恐ろしいことになる前に、あの生命体を殺してしまえばいいだけの話である。だから、シックスは気持ちを落ち着かせて、改めて攻めるのである。あの奇妙な物体が何であれ、一瞬にして灰塵に帰してしまえばよい。

「ｏｂｄｓｏｂｉｕｓｏｄｆｕｂｓｏｄｆｕｂｓ！！」

他方、その生命体をアニミストが片手で掴むと、それはばたばたと暴れだした。しかし、アニミストはそれを気にも留めないで、後方へと大きく振りかぶる。

「隙だらけだ、馬鹿！！」

アニミストは、あの化け物を飼い馴らそうとしているのだろうか、攻撃してくれとでも言わんばかりの隙が生じている。これで終わりだ。その豚野郎ともども消え去るがよい。

アルビオンが咆哮する。断末魔とともに滅びの唄が天空に響き渡る。透明な矢のようなその音の粒は、アニミストを貫こうと襲い掛かる。しかし、アニミストはそんなアルビオンの渾身の一撃を豆鉄砲くらいにしかみなしていないようだ。この致命的とさえ思える大きなモーションは、あくまで必殺の一撃を叩き込むための前置きに過ぎなかったから。この時点において、シックスは死んでいるのだろう。だから、アニミストは振りかぶった化け物を、思い切りアルビオンに向けて投げつけた。

「え・・・」

アニミストに降りかかろうとした音波は、全てその化け物の巨体が被る。しかし、投擲の勢いは全く衰えないままアルビオンに化け物は襲い掛かった。その蛸のような無数の触手を伸ばし、球体のような体の中心には大きな口が開いて、獲物を捕食せんとするのである。

「こないで・・。こないでよ！！」

アルビオンは、完全に攻撃態勢に入っていたため、カウンターとして投げられたこの化け物を回避するには、敵の攻撃を認知するのが遅すぎたのだ。まさか、あれを投げてくるとはここにいる誰が予想

しようか。しかも、でかいくせにかなりの速度で来る。したがって、回避不能であった。

「きゃぁぁぁぁぁ！！！」

アルビオンは、無数の触手によって捕縛され、その手足や翼を絡め取られてしまうのである。しかも、触手の先端ごとにも醜い口がついており、その貪欲さは火を見るよりもあきらかである。

「いや！！いやぁぁ！！！」

アルビオンは、その醜い化け物に様々な方向へと引っ張られることによって、瞬く間に四散する。肢体は細かくパーツに分断され、翼ももぎとられ、各触手がそれらを求めて一斉に喰らいつく。アルビオンもおそらく人間の肉でできているのであろう、赤い血が大量に噴出し、化け物に降り注ぐ。しかし、貪欲で、食することに夢中なこの化け物は、ただひたすらにアルビオンの肉を喰らうだけだった。

「嫌嫌嫌嫌嫌！！！！！」

シックスの悲鳴は、止まらなかった。近くで見れば見るほど、この化け物の醜さをリアルに実感できた。それだけに、恐怖は絶頂を迎える。しかも、本体の巨大な口は、彼女を食べる気でいるようで、臭い息を吹きかけ、むごたらしい口内を覗かしている。いったい、あの中に入ってしまったら、自分はどうなってしまうのか。輪廻転生から除外され、無限地獄を、自分の魂が消えてなくなるまで歩かされるに違いない。

「先生、助けてください！！ファイヴでもいい！！誰か！！誰か！！きゃあああああ！！」

そんな呼び声に反応したのか、アニミストが全身を補修しては、化け物の食卓に近づいてきていた。そして、その手には剣状に変形させたニルヴァーナを手にしている。

「いやぁぁぁぁ！！！エイトォォォ！！！」

『ごめん・・・』

アニミストはその剣で、いままさに食われようとしている直前のアルビオンの胴体を、化け物ごと突き刺す。

「ｂｘｏｉｕｂｏｘｕｂｉｚｄｆｙｕｂｏｉｄ！！！！」

化け物もなにか言葉を発したようだ。だが、それも束の間、突き刺したニルヴァーナが次第に巨大化して、化け物ごとアルビオンを包み込んだ。

「団・・・」

そして、その巨大化した剣は、一瞬のうちに収縮してしまうと、その範囲にあった物体の全てを消滅させた。

（三）

アニミストは、着地すると途端に、その胸の輝きを緑色へと戻してしまう。すると、白と黒の身体は徐々にその体の中へと吸収されてしまい、もとの基本形の姿へと戻っていってしまうのであった。

「俺は・・・」

ナインは急に目が覚めたようになり、意識が飛ぶ前と意識が戻った後の変わり具合を比較して、状況が一変してしまっていることに気づいた。確か、自分は翼の生えたオーガに猛烈な攻撃を受けていたはずである。しかし、少し疲れたことを除いては、いたってからだは無事なものといえる。

「またこの感じだ」

これは、アザゼルと戦ったときと同様であった。自分の中のなにかが目覚めては、自分の心を支配し、その器たるからだを操作するのである。そして、自分が目覚めたときには全てが終わっているのだ。おそらく、自分の前人格が戻っているのであろう。きっと、何かがトリガーとなって本当の自分が目を覚ますのだ。

「そういえば・・」

ナインは、アルビオンの攻撃を受けて、精神が壊れていく最中、巨大なオーガを見た気がした。いくら薄れゆく意識の中であっても、あの凄まじい力は嫌でもかんじることができた。しかし、その像は極めてぼやけているためか、そもそもオーガであったかすらも疑わしい。

「ナイン!!大丈夫なの?」

そのようなことを考えているうちに、弥生から通信が入った。よく周りを見渡せば、結構近いところに彼女の乗る戦艦はあった。とすると、彼女はこの戦いの一部始終を見ていたのかもしれない。

「社長。俺は何をしたんですか?」

ナインは、知りたかった。自分が一体どういった存在なのか。どんな恐ろしい力を持っているのか。

「俺が知らない俺は、一体何をしたんですか？」

「・・・」

弥生は、少し黙っているようであった。言葉を選んでいるのであろうか。なんせここからでは彼女の表情は伺えないので何ともいえない。

「今、私も意識が戻ったばかりだから、何も見てないの。ごめんなさい」

「そうですか・・」

ナインは、彼女が本当のことを言っていないと思えた。しかし、あの弥生がそういっている以上、彼はそれ以上のことを聞けなかった。今回のことと前回のことを線で結べば、自分の真の本性がこの心の奥底に眠っていることがいよいよ実感できる。やはり、ナインはナインなどではない。なら自分はいったい何なのだ。この器に一時的に住まわせてもらっている、かりそめの魂に過ぎないのだろうか。来るべき時が来れば、自分はこの肉体の主たる意志によって、その深層意識の中へと囲い込まれ、その中に霧散して最終的には消滅してしまうのであろう。そうしたら、この短い期間ではあるが、積み上げてきた大切な思い出や、愛する人のことも、なにもかもが無くなってしまう。

ナインは、ただひざを突いて、呆然と立ち尽くしていた。

第37話　エンクロージング

公益社団法人東京陸運保険機構の本拠地が、戦艦に移ったために、従業員たちにはそれぞれ戦艦に付属する個室が割り当てられるようになった。ところが、その個室というものがかえって裏目に出てしまうことになる。つまり、自分のテリトリーができてしまうとどうしてもそこに引きこもりたくなるのが人間の性質のようで、先日の戦いで精神的に参ってしまった連中は、誰とも会おうとせずに独り物思いにふけってしまうのであった。

（俺は、消えたくない）

記憶喪失の青年ナインもそのひとりであり、個室に設置してあるベッドに横たわって、考え事ばかりしていたのだ。

ナインはそもそも、なくしてしまった自分の記憶を探すために、こうして日々がんばってきた。記憶が無くなる前から一緒にいたプロトオーガと一緒に戦い続けていればいつか記憶が戻ると信じていたからである。

しかし、自分の症状とはどうやら単なる記憶喪失とはわけが異なるようである。ナインという人格そのものについては、そもそも記憶喪失でもなんでもなく、それで完成したひとつの人格であることに何らの間違いは存在しないのだ。ただ、ナインはこの身体の主人格から、予備的に住まうことを許された存在にすぎないので、主人格に劣後するという点では不完全な存在であろう。その証拠に、何らかのきっかけで主人格が目覚めた時、自分はナインでなくなってしまうのだ。それこそ、この身体にふたりの人間の精神が宿っていることの裏づけであろう。

（もう、記憶なんていらない。俺はこのままがいい。こうしてみん

なを守っていきたい）

ナインは寝返って、ふるえる右手が自分のものであることを確かめて、強くこれを握ると、身体を小さく丸め込んでしまった。

『ナイン君。いる？』

ふと、ステンレス製の扉を向こう側からノックする音が聞こえた。高い音が部屋中を響き渡る。

「詩季か？」

ナインは起き上がって、扉の向こうにいる人に尋ねた。

『うん。ちょっといいかな？』

「大丈夫。鍵はあいているよ」

ナインがそういうと、ゆっくり扉が開いて、外から詩季がおそるおそる顔を覗かせてきた。

「よう。早く入れよ」

「う、うん」

ナインが催促したことで、詩季は小走りにナインの傍へ行き、ベッドに腰掛けた。そして、詩季は、座って下を向いたまま口を開かなかった。

「どうした？緊張なんかして」

数秒の沈黙に耐え切れず、ナインは口を開いた。

「違うの。ナイン君、あの戦いのあと、すごく元気がなかったから、どうやって対応してあげればいいかわからなくて・・」

ナインは、独りにしてくれという態度をあからさまに採っていたから、彼女も近寄りがたかったのであろう。とはいえ、彼女のことであるから元気のないナインを放置しておくわけにもいかず、とりあえず励ましに来た、といったところであろうか。

「そうか、ありがとう」

ナインは、詩季の閉じられた目を見て、感謝の言葉を小さく述べた。

「いいの、お礼なんて。それより、なんか辛いことでもあったの？よかったら、私に話して。誰かに話すことで、結構楽になったりするから」

「本当か？」

「うん」

自分の心の動きを他人に明かすのは、ナインにとって小恥ずかしいものであったが、せっかく手間を焼いて来てくれた彼女を見ていると、何もないと言って帰してしまうのも忍びなかった。

「詩季も知っているだろうけど、前回アザゼルと戦ったとき、俺、いつの間にかあいつを倒していただろう？」

詩季は、小さく頷いた。

「あれは俺の主人格のせいなんだ、確信はないけど。でも、あいつが目覚めると俺は消える。そして、いつか俺は、ナインは、この世

界から消えてしまうんだ。そう思うと、怖くなって・・」

ナインは、なんだか情けなくなってしまい、詩季の顔を見れなくなっていた。だから、彼は、ただ視線を床に落としていた。

「ナイン君・・・」

詩季は、そんな弱弱しいナインを暫くみつめていたが、突然に、彼を自分の胸の中に抱き寄せた。

「詩季・・・」

彼女の突然の行動に、ナインは少しとまどった。だけど、詩季の暖かでゆったりとした鼓動のリズムが次第に心の落ち着きを取り戻していく。

「あなたは消えたりなんかしない。だって、私がずっとあなたをつなぎとめているから」

盲目の少女は、母のような優しい微笑みとともに、今にも消えてしまいそうな心を持つ青年を一層強く抱きしめた。それは互いに不完全な部分を補完し合う様である。

「あなたが私を命がけで守ってくれているように、私もあなたを命がけで守りたいの。だから、絶対にナイン君を消させはしない」

「詩季・・・。ありがとう」

ナインは、顔を上げて、自らも強く、その愛すべき少女を強く抱きしめた。

（二）

「エイトのみならず、シックスも死んだか・・」

真っ暗な講堂の中心で、『先生』は分厚い本を紐解きながらつぶやいた。しかしながら教え子がふたりもこの世から消えたのにもかかわらず、この男はいたって無関心を貫いていた。この男にとっては、教え子のことなどよりも本の趣旨を読み解く方がよほど大事らしい。

「それだけではないのです。しかも、トゥワイスが敵に協力をしていたようです。先生、どうかあの叛逆者に厳罰を」

ファイヴは、なによりも自分に泥を塗ったトゥワイスが許せないでいた。あの男さえ邪魔しなければ、あのような下等な紛い物に負けることもおよそありえなかったはずだ。しかも、トゥワイスの介入は、ファイヴがシックスに加勢することまでも、間接的に妨げる原因となっていた。とすれば、トゥワイスはアニミストと共同してシックスを殺したに等しい。それゆえに彼の怒りは頂点に達しようとしていたのだ。

「ファイヴ。君の言いたいことはわかった」

先生は、そういいつつも、相変わらず本を読みふけっており、ファイヴの言い分を理解したとは到底思えない。そのため、ファイヴは怒りの矛先を鞘に収めることができなかった。

「先生！！」

ファイヴはこの広い講堂で怒鳴り散らしてやりたい衝動に駆られた。

しかし、そんなことをすれば先生に対して失礼極まりないので、やりたくても容易にできるものではない。だから、自分の言い分が全く通らない苛立ちを必死に抑えて、ファイヴは先生にできる限り強く呼びかける。

「ファイヴ・・。五月蝿い・・・」

ふと、ファイヴからみて左の方で控えている小さな女の子が不機嫌そうにいう。暗くてよくわからないが、ややボリュームのあるボブヘアで、気弱そうな少女である。その少女も先生と同じように、読書中であり、ぎゃあぎゃあ喚いているこの男に我慢できなかったようだ。

「フォース。私は、先生のために申し上げているのです。あなたに五月蝿いなどといわれる筋合いはありません」

「だって・・・五月蝿いんだもん・・・・」

フォースと呼ばれる少女はファイヴに怒られてしまったので、ふてくされてしまう。しかし、面と向かって反論すれば口論は泥沼化することになりかねなかったので、気弱な少女は小声で不満をつぶやくにとどめた。そのかすかな反論を、地獄耳の彼は聞いたのだろうか、ファイヴは血相を変えてフォースをにらみつけた。

「ファイヴ。先生のためとかいって、論点をすりかえるのは止めろ。どうせお前の私情だろう」

今度は、ファイヴの右側に控えていた青年が口をはさみだした。その者は、長身で細いフレームレスの眼鏡をかけた知的な男である。なにより、オールバックの黒髪が特徴的なのだ。性格的なタイプとしてはファイヴと同類か。

「サード。私にはそのようなつもりなどありません」
「ふん、まあいい。どちらにせよ、団堂にやられる奴が間抜けだったのだ」

サードは、鼻でファイヴを笑い、眼鏡の位置を直す。

「サード。それが死にゆく同志へ向ける言葉ですか！！」
「弱さこそが罪だ。もともと俺たちはそれを大原則としている以上、敵に遅れをとった者を哀れんでやる義理はない。そうじゃないのか、負け犬」
「貴様！！」

ファイヴは頭が真っ白になり、サードに銃口を向けた。すかさず、サードもファイヴに対して銃口を向ける。

「やめろ」

だが、先生は強烈な殺意をふたりへ向けてはなった。すると、両者は途端に萎縮してしまい、即座に銃を仕舞いこんだ。

「トゥワイスの件については、彼のことだ、自分の後始末くらいは自分でするはずだろう。そして、そこから彼が何かを得ようとしているのだ。ならば、強いて彼の行ったことを咎めることに合理性はない。また、サードも殉職したシックスに対して、そのような言葉を向けるものではない」
「申し訳ありません。先生」
「ご無礼をお許しください」

殺気立っていたふたりは、膝をついて、先生に対して頭を下げた。

それを一瞥した先生は、放っていた殺意をすぐに消してしまうのである。他方、後ろの方でそ知らぬ顔をして様子を窺っていたフォースも、少しびくびくしてしまっている。

「それにアニミストの件については、既に手を打ってある。ナイン（ここでは少年ノイのこと）の希望もあって、少し複雑な筋道をたどらなければならないが、今頃、彼が手回しをしているであろう」

「それをお聞きして、このファイヴ、安心申し上げます」

ファイヴは、ひとまず先生が自分の言い分を理解してくれたことで、落ち着きを取り戻した。

「そして、ファイヴよ。お前は先刻の戦闘で、相当量の精神を費消しているはずであろう。ひとまず戻って休んでよい」

「畏れながら申し上げます。アヴァターの回復も完了し、私自身もいたって健康であります。したがいまして、私もいますぐにセヴンと合流し、その任務をこなしたいと存じております」

「そうか。ならば好きにしろ」

「承知いたしました」

ファイヴは、立ち上がって、先生に一礼する。そして、暗い闇の中に紛れてどこかへと消えていった。

「せんせい・・・。宜しいのでしょうか・・・？」

フォースがおそるおそる、小声で訊く。

「ファイヴはお前たちに劣るものの、忠実で優秀だ。好きにさせてやればよい。それよりも私は、お前たち高等執行官があまりに勝手気ままに動くことが気がかりだな。もっとも、チャプター９の性質

上、自由な主張や行動は望ましいとさえいえるのかもしれないが」
「申し訳ありません・・・・」
フォースは、心の奥底になにかやましいことでもあるのであろうか、ただでさえ小さい身体をさらに萎縮させてしまうのであった。
「まあよい、それでこそ私の腹心の部下だ」
先生は、サードも一瞥した。
「滅相もございません」
一瞥されたサードは、その長身を跪かせていう。しかし、視線を完全に下に落としている彼の表情や感情は、全くわからない。忠義を示しているのか・・・それとも、何かをたくらんでいるのだろうか。いずれにしても、先生はそんなサードに背を向け、立ち上がる。
「さて、私もそろそろ仕事に行く時間か。サード、フォース。留守を頼んだぞ」
「行ってらっしゃいませ」
「わかりました・・・」
それをきくと、先生は暗黒の中へと溶け込んで、そのまま消えてしまった。

（三）
―東京都国立市警察庁臨時庁舎―
プロトオーガの執行官たちから先生と呼ばれるこの男は、高級な黒

いスーツを召して、警察庁の前に来ていた。ちらほらと仕事を終えた公務員の退勤が始まる夕方ころであったので、かろうじて紅い日の光も残っている。そのおかげか、普段は闇に包まれているこの男の全貌が明らかになった。

なんといっても特徴的なのが、見つめられただけで切り裂かれてしまいそうな鋭い目つきである。それとともに放たれる、彼特有のすさまじい魅惑のヴェール。他方、この男は長身であるとはいえ、体格はあまりしっかりしておらず、むしろ華奢といってもいいであろう。しかも、漆黒の長髪からのぞかせる白い肌はあまりエネルギッシュとはいえない。だから、この男が、鬼どもを動かしているリーダーであるとは、誰も信じないであろう。しかし、彼が常に放つカリスマには誰もが屈服せざるを得ないものがある。まさに、この男こそ指導者となるべく生まれたに違いない。

「先生。お待ちしておりました」

先生を見つけた官僚のうちひとりの男が、すぐさま出迎えに上がる。

「セヴンか・・・。早速、案内してもらえるかな?」

「はい。よろこんで」

先生は、口元をすこしにやつかせた。なぜならば、国内の警察権力を取り仕切る警察庁は、すでにこの男の手に落ちているに等しかったからである。特にこの警察庁は、先生が放った諜報部員が幹部官僚としてすでに数人跳梁しており、あとは官房長官に退場願うだけなのである。

(四)

「お久しぶりです。西條官房長」

官房長室の扉がノックもなく開かれると、先生は中にいる人間に対して、紳士的な一礼をする。対する礼を受けた西條と呼ばれる男は、思わぬ来客が突然に訪れてきたため、絨毯の上に腰を抜かしているのであった。長いこと警察庁のトップとして甘い汁を吸い続けていたこの男は、だらしのない膨れた腹を突き出し、前髪の後退により広くなった額からは脂汗が噴き出ており、見るに耐えない。

「お前は、袴田(はかまだ)!!なぜ貴様がここにいる?」

西條官房長は、まるで亡霊でも見るかのように、顔を引きつらせてしまっている。まさにこの男の放つ殺意にやられ、恐怖に歪んでしまっているようだ。

「ふふふ。なぜ殺したはずの貴様がここにいるという問に変えた方が宜しいのではありませんか。官房長」

袴田と呼ばれた『先生』は、そんな官房長を涼しげにあざ笑う。

「そんなことはどうでもいい!」
「ちなみに、団堂も生きております。もっとも、彼は私と別の途を歩むことになりましたがね」

それを聞いた西條は、一気に顔が青くなってしまった。

「団堂も・・!!貴様、こんなところまで来て、一体なにがねらいだ?」
「ええ。単刀直入に申し上げましょう。日本全国の警察権をこの私に委譲していただきたく、参りました」

袴田は、胸に手を当てて、再度、一礼する。

「ふざけるな！そんな頼みがきけるはずないだろう！おい、寅島、この男を叩き出せ！！」

西條は、袴田の隣にいる官僚の男に強く指図する。国家の警察権を掌握するこの聖域において、とんだ狼藉を許しているにもかかわらず、何らの必要な処置を採ろうとしない部下を怒鳴り散らしているようだ。

「官房長。今の貴方に拒否権はありませんよ」

しかし、その寅島と呼ばれる官僚は、眼鏡をはずして、地に這い蹲る官房長を蔑むように言う。残念ながら、寅島とは袴田にとっては潜入中の腹心の部下、セヴンであったのだ。無論、西條は今までそんなこと、露ほどにも知らなかった。

「寅島、貴様まで・・・」

「そういうことです、官房長。貴方はただ、大人しく我々の指示に従ってくれればそれでよいのです。それに貴方には・・・それは可愛いらしい娘さんがいらっしゃいましたね。我々の指示に従わない場合は、彼女に危険が及ぶだけです。確か、名前は・・」

袴田は、わざとらしく、天井を見上げながら言う。

「袴田ぁぁぁぁぁ！！」

西條は耐え切れず、袴田に対して隠し持っていたハンド・ガンを向けた。それと同時に、袴田の横に控えていたセヴンもサイレンサー付きのハンド・ガンを取り出して、静かに官房長の手元を打ち抜く。

「ぐあっ！！」

これによって、西條の銃は弾き飛ばされてしまった。しかも、西條は手の肉を多少えぐられて、顔を苦痛に歪める。

「ふふふ、無駄な抵抗はよしてください。先に貴方を殺してもいいのですよ」

「くそが・・・」

「本来ならば、憎き相手である貴方は、私の手によって殺されてしかるべきでしょうが、それでも交渉に応じていただければ、貴方とその家族の安全は保障するといっているのです。少しばかり、私の寛大さに感謝して欲しいものですね。官房長」

西條は、袴田にとどめのひと言を喰らうと、肩ががくりと落ちてそのままうなだれてしまうのであった。

（五）

―東京地方検察庁特別捜査室―

東京地検において第一線で働く若いエリート検察官、半田俊郎は、一連のオーガによる内乱事件の捜査を朝から晩まで進めていた。そして、永きにわたる捜査の末に判明したのは、この被疑事件の首謀者のひとりが、団堂曹士という人間であるという事実。

もちろん、外法学で有名なこの男は有力な容疑者に早くから昇っていたはずである。ところが、この男の身元を洗ってみると、団堂曹士はすでに死亡したとある。そのため、普通であれば、その事実が判明した時点において、この容疑者を捜査対象から除外するのが当然の対応なのだ。しかし、外法学が強く絡むこの一連の事件である。外法学者のひとりを殺すことなど、外法を用いれば用意になし得るであろう。そのような事情と自己の勘から、この男の死は偽装であ

ることは容易に判断できた。
実際に、団堂が死んだとされるドイツ・ベルリンの捜査当局に問い合わせて、事件記録を照会しても団堂の死亡を裏付ける確たる証拠を発見することはできなかった。そうだとすると、団堂の死は偽装であることをいよいよ確信したのだ。

「団堂はどこかで必ず生きている」

そして、近々問題となっている公益社団法人東京陸運保険機構。おそらくあそこに団堂が潜んでいるに違いない。

「そして、その兇悪犯人を検挙するのは俺だ」
「検事、気合入っていますね」

半田のパートナーである検察事務官の女性が熱いお茶を置きつつ言う。彼女は、この検事がもう何時間も証拠資料等とにらめっこをしているので、過労にならないか心配しているのであろう。

「なんせ、歴史的な大事件だからな。これを解決したとなれば、俺は英雄になれる」
「ほんとに、検事って子どもっぽいところがありますよね」

事務官の女性は、このパートナーをほほえましく思い、くすくす笑う。

「男ってのは、みんなそういうものだ」
「はいはい」

半田は、美人の事務官に子ども扱いされたため、顔を赤くした。

「とにかく、まずは東京陸運保険機構の事務所をガサ入れする必要があるな。至急、裁判所へ行って、捜索差押許可状の発布を受けてきてくれないか？」

半田は、数枚の資料を頼れる事務官に渡して、腰を低く命ずる。

「わかりました、検事」

半田は、数枚の資料を携えて、魅力的な尻を振りながら部屋を出て行く事務官の後姿を見届ける。

「団堂。必ず貴様を追い詰めてやる・・」

半田は、そういいながら、団堂曹士の顔写真が写されている紙を思い切り握りつぶした。そのくしゃくしゃになった表面から、若干顔が異なっているも、ナインの面影が強く残る男の顔がかろうじて見えるのであった。

第３８話　ただそれを信じたくて

突如、机の上に置いてあった弥生の携帯電話が、地鳴りのようなやかましい振動音を鳴り立てながら光りだした。どうやら誰かから緊急の連絡が入ったらしい。

「うるさいなぁ」

椅子に座った状態で仮眠をとっていた弥生遼子は、その五月蝿い音によって睡眠を中断させられる。そのため、彼女はやや目覚めが悪く、乱雑に電話に出る。

「はい。代表理事」

弥生の口調は、仮に電話をかけた理由がくだらないものであったならば、即刻電話線をぶった切りかねないものである。

「あぁ!?事務所!?新聞は間に合ってるって、いつも言ってるでしょ」

弥生はやはり寝ぼけているのだろうか、相手の言いたいことがよく伝わっていないようなのだ。

「ふんふん・・・」

しかし、だんだんと思考力が通常のレヴェルまで回復してきたのか、落ち着いて通話に応じるようになってきた。

「なんですって・・?」

しかし、弥生が落ち着いていられたのはほんの数秒にも満たなかった。次第に彼女の表情が青ざめていくのがわかる。

「地検が事務所を強制捜査・・・」

弥生は、衝撃の事実を伝えられて、完全に目を覚ましたようである。そして、本能的に現状をうまく逃れるためのあらゆる手段を頭の中で考え始めた。事務所に致命的な証拠を残してこなかったか。事務所に残してきた西田は余計なことをしゃべっていないだろうか、云々。とにかく、いろいろな不安要素が彼女の頭をよぎるのである。そのようなことで数秒沈黙してしまった弥生であるが、話し相手から呼びかけられたのか、急に我に返って会話に戻る。

「それと、被疑者は誰よ?」

そういって問いかけると、相手からはあいまいな返答しか返ってこないようである。

「心当たりのない人間?いいから教えなさい」

弥生はいらいらしながら自らが望む答を待つ。

「団堂曹士ですって?」

弥生はいよいよ心臓が高鳴るのを隠せなかった。

(団堂)

団堂曹士なる人物は、この東京陸運保険機構に存在しないはずであ

る。そのことは、機構の人事権を掌握している彼女が一番良くわかっている。実際、彼女もそのような名前の人物を雇った覚えなどない。だから、そんな無関係な人物の事件を捜査するために、機構の事務所が捜索されることなどおよそありえない。

しかし、現に東京地検は、機構が、団堂に強くかかわっていると踏んで、強制捜査に踏み切っている。しかも有罪率９９パーセント以上を誇る、あの東京地検がなんとなく強制捜査に踏み切ったりはしない。彼らは相当な嫌疑が存在しないかぎり、下手な捜査を仕掛けてくることはないのだ。

にもかかわらず、東京地検がこの団堂曹士という人物を突き止め、この人物が東京陸運保険機構との関連性を見出し、遂には強制捜査に及んだという事実は、相当な嫌疑あることを逆説的に語っている。

（団堂、プロトオーガ、そして東京陸運保険機構）

これらみっつの情報が弥生の脳内で有機的に結びつき合い、ひとつの結論を導出する。

（地検はおそらく、ナインのことを団堂曹士と考えている）

弥生はふと、先の戦闘において、ナインのプロトオーガが青い光を放ち、天下無双の力で敵のプロトオーガを圧倒していたことを思い出す。

（あの時、ナインは団堂曹士になっていたとでもいうの？）

弥生は、合理的な疑いを差し挟む余地がないほどの確信を抱いてしまった。まちがいなく、ナインはこの事件の鍵を握っている団堂という男なのだ。

「とにかく、事実はわかったわ。なにかあったら、また連絡しなさい、西田」

弥生は、通話を終えてさっさと携帯をしまうと、身だしなみは酷く乱れていたが、慌てて自分の部屋を飛び出した。

（東京地検が動いた。とにかく、今は日本がどうなっているかを知ることが大事ね）

何よりも情報が大事であると考えた弥生は、ブリーフィングルームへと向かうことにするのであった。

（二）

戦艦アガメムノンのブリーフィングルームには、グレイ・辰巳・まもるの3人がすでに集まって、テレビを見ながら、なにやら話し合いをしていた。

「うぅーん・・・」
「きもちわりぃ・・」

しかし、そのうちのグレイ・辰巳のふたりは、何やら気分が悪そうに、ソファの上で仰向けになってグータラしていた。たまらず、まもるがふたりのところに駆け寄る。

「ふたりとも・・大丈夫?戦艦に乗るの初めてだから、船に酔ったの?」

まもるは、心配そうな表情でふたりの顔を覗き込み、それぞれの額

に濡れタオルを置いていった。

「まもる、そういうオメェは大丈夫なのかよ・・・？」
「今のところはね。でも、そんなに揺れが酷いわけでもないのに、おかしいなぁ・・・」
「そぉなんだよね・・。車酔いとかとはちょっと違う・・・このキモわるさ・・。なんつぅか、押さえ込んでいるものが飛び出しそうなんだけど、飛び出せなくて、身体の中ぐるぐる回ってて・・・」
「はるきちゃん・・、なんなのそれ？」

まもるは、辰巳がふざけているようにも思えてきてため息を吐いたが、どうにも彼女が苦しむ様子に嘘はないみたいだ。辰巳が、仮病を使ってでも、まもるにかまってほしいと考えている・・そんなわけはないだろうし、そもそも彼女は演技がニガテだ。そうだとすると、彼女の症状には、本当に異常があるのではないかと疑うようになる。

「はるきの言うことは確かだぜ、まもる。なんか、うまくは言えねぇけど・・・とにかくぐるぐる回ってて、地に足がついてねぇんだ・・・」
「本当に、ふたりとも大丈夫？」

まもるは、このふたりが同じ症状に悩まされるという異常性がひっかかっていたが、やはりただの船酔いだろうと、彼らの気を紛らわすためにテレビのチャンネルを変えた。
いくつかのチャンネルを何気なく変えていくうちに、まもるは見知った名前を、そこで目にする。

「まさか・・・うちの事務所が強制捜査？」
「マジ？なんで？」

まもるの呟きを聞いて、辰巳が飛び起きる。続いて、グレイもまた、ダウンしている場合ではないと、起き上がった。

「まあ、プロトオーガも目撃されているから、いつ強制捜査をされてもおかしくはないんだけど」

「でもよ、どうしてこんなタイミングで？」

「さあ・・わからない・・・」

まもるは、ぞくぞくと事務所に踏み込んでいく捜査員たちの映像を、立ち尽くしながら見ていた。

するとそのとき、よいタイミングなのか、弥生遼子がブリーフィング・ルームに駆け入ってきた。

「あんたたち、テレビ見てる？」

「ええ・・・。社長、最悪の展開になってきました・・」

まもるは、気が重くなっているのであろうか、弥生に対しても、元気なくテレビの画面を示した。

『ついさきほど、東京都町田市にある公益社団法人東京陸運保険機構の事務所に、東京地検特捜部が捜索に入りました。これはそのときの映像です』

映像によれば、空の段ボールをかかえた捜査員たちが続々と機構の事務所内部へ、ずかずかと入っていくのがわかる。それを横で西田が指をくわえて見ているという、なんとも情けない映像である。

一方で、映像はスタジオの方へと戻されると、そこには見知ったアナウンサー2名と、複数のコメンテータが座って、論議を開始する。

『ところで、昨日、韓国ソウルで大規模な戦闘があったそうですね。例の特殊部隊の方が1名、命を落とされたとか・・』

『はい。どうやら東京陸運保険機構がソウルに逃亡していたようで、彼らの反撃にあって死亡したものと思われます。しかしながら、この事件についてソウル当局に問い合わせると、機構は韓国の安全のために戦ってくれたと言っているので、こちらと話が全くかみ合わない状況にあります』

『そうですか。しかし、真実はひとつですからね。機構は、韓国上層部と通謀しているとも思えます。とにかく、いま言えることは、安易な推測に流れるのは危険ということでしょうかね』

テレビの中で、４０代くらいの女性アナウンサーと政治評論家らしきコメンテーターがなにやら議論をしているのである。それにしても、なにゆえこの場における議論というものは、根拠のない空論ばかり持ち出して無意味な議論ばかりするのであろうか。弥生を含む、テレビの前の４人は、行き場のない怒りに打ち震えていた。

「チャンネル変えようぜ」

グレイは、これ以上同じ番組を見続けることができないようで、さっさとチャンネルを変えてしまう。しかし、どの番組も同じようなニュースばかりであり、グレイはいくつものテレビ局をたらい回しにあっている。

「ち・・ろくなのやってねぇ」

グレイは、『強制捜査』という文言を目にすると、直ちにチャンネルを変えていった。

「ちょっと、グレイ!!今のチャンネルに戻して!!」

だが、弥生はひとりとんでもない映像を目にしたため、思わず叫んだ。

「すんません。えぇと、これか・・」

そういって、グレイは一個前のチャンネルに戻す。

「これって・・・」

そして、弥生の見たものを、この部屋にいる全員が目にして驚愕する。

『東京地検によると、この写真の人物が一連のオーガ襲撃事件において中心的役割を果たした煽動犯であるとされ、急遽、指名手配されるに至りました』

「なんてこと・・」

『容疑者の名前は・・』

「団堂・・曹士・・・」

そう、そこには事件の首謀者である男の顔写真が大きく映されていた。それは、多少相違点はあるものの、紛れもなくナインである。そして、その顔写真の下には、容疑者団堂曹士というテロップが張られている。

「ナインさんが容疑者って、どういうこと?」

「それに、団堂って・・?」

「ナインが、少なくとも、一連のオーガ事件に関係していることは間違いないようね」

この衝撃の事実を目の当たりにした3人は、口々に思ったことを述べていく。まだ被疑者段階であるとはいえ、マスコミに報道された人間はほぼ１００パーセント、有罪判決を受ける。そうだとするならば、この報道がなされた時点において、ナインが少なくともこの事件に関与しているであろうことは確実であった。

「うそだろ？せんぱいが・・・」
「事件に関係してんのか・・・」

火のないところに煙は立たない。だから、そんなはずないと思っても、その思いもすぐに打ち消されてしまう。
よくよく考えれば、ナインがプロトオーガなんていうものを持っていること、それ自体がおかしいのだ。そんな疑問に全く気づかなかった。いや、気づかなかったのではない。目を瞑っていたのだ。ナインは人を殺せるような人間ではないし、何よりもプロトオーガの戦力が魅力的だった。だから、そのような疑問には、あえて目を瞑っていたのだ。しかし、冷静になって、ことの本質を見抜けばナインという人間が、一体何者であるのか見えてくる。

（そうだよ・・・。ナインは、君達が考えているような人間なんかじゃない。自分の利益のためならば、平気でヒトも殺すよ）

ふと、ふたりは、そんなおそろしいことを考えた。まるで誰かが、心の中でささやいているかのように、ふと心にすりこまれた、ひとつの考え方。悪魔のような、なんとも甘美な響きだ。

（だってねぇ。オーガを作って、世界にばら撒いたのもナインなんだからさぁ。君達も家族や友達を奪われているよね。あれは、みぃんな、ナインの仕業なんだ。すごいよね。すごいよね。彼は、数えきれないヒトを殺したんだよ。あはははははははは）

心の中の自分が嗤う。いや、それとも誰かが、心の中で嗤っているのだろうか。それは、いずれにしても悪魔が、馬鹿みたいに嗤うようなのだ。

（それなのにね、記憶喪失とか言っちゃって、君達と仲良くしているんだからお笑いだよね。でも、そんな裏切り行為をされた君達は、笑えないか・・・。君達がすべきは、自分の悲劇を笑うことではない。ナインという男を憎むこと。憎しみを研ぎ澄ませて、増幅させること。そうでしょう？なら、君達は、自分がどうするべきか、わかるでしょう？）

悪魔のささやきは、それに耳を傾ける者の心をついに融解させた。

「あのナインが全ての原因なのかよ」

「ははは。意味わかんねぇ」

辰巳は、考えるのをやめてボソッとつぶやいた。その時の彼女の目からは狂気の炎がかすかに宿っていた。

「よく考えれば、簡単なことだよな。なんであいつが、プロトオーガを持っていたのか。事件の首謀者だからだろう。裁判なんかやるまでもねぇ」

「ちょっと待って、グレイ！私たちが機構に入ったときからプロトオーガはあったし、あのナインさんがまさか悪い人だなんて想像もしなかったから、特に気にしなかったけど、これだけ情報があればナインさんが関係者であるのも間違いないと思う。だけど、まだ首謀者と決まったわけじゃないよ！！」

まもるは、暴走するグレイの推理を止めようとする。しかし、そん

なまもるを他所に、辰巳が口を開いた。

「あはははははは。アタシたちはずっと、鬼どものボスと一緒に戦っていたのかよ」

「ちょっと、待って。ナインは、少なくとも私たちの味方よ。そんなナインをあんたたちは疑う気？」

「社長、そういう問題じゃないんすよ。俺がここにいるのは、何よりも妹を殺した鬼どもに復讐するため。そして、ナインが首謀者だとすれば、ナインが妹を殺した張本人ってことになっちまう」

「グレイ！！」

弥生は、絶叫するように彼の名を呼んだ。その先を口に出してはいけない。その先を言うと、もう後戻りができなくなる気がしたのだ。

「俺だって、ナインのことは信じたい！！でも、これだけネタがあがってくると、自分をごまかすことなんてできねぇ」

グレイは、心の中で葛藤が起こっているのであろうか、頭を両手でぐしゃぐしゃに揉み解すしぐさをする。

「ほんと、なんでアタシの信じた人ってみんなそうなのかな。どいつもこいつもふざけやがって・・・」

「はるきちゃん・・」

まもるは、虚ろな目でどこかを見つめている辰巳を心配した。まもるは彼女の中で、何かが弾け飛んでいるような気がしてならなかったのだ。

「何より、殺さなけりゃならねぇ仇が、すぐそこにいたのに気づかなかった自分が情けねぇ。なんで、はじめにプロトオーガを見たと

きに気づかなかったんだ!!」
「そうだよ・・。ナインは、アタシから全てを奪っていったクソ野郎なんだ。アタシは、そのクソ野郎を血祭りにするためだけに生きてきたんだ。早く殺さなきゃ」
「アンタたち、それ本気で言ってんの?」
弥生は、耳を疑った。ついさっきまで、かけがえのない仲間だと思っていた人間を殺すなどということは冗談としか思えないのだ。とはいえ、全く笑えるような冗談ではない。
「もちろん、本気です。俺もそのためだけに生きてきたんだ」
グレイにとっては当然のごとく、冗談ではなかった。
「はるきちゃんもグレイも変だよ!ナインさんは、首謀者かもしれないけど、少なくとも私たちの知っている彼は優しい人だった。短い間だったけど、思い出もいっぱいあった。そういうことも、全部捨てちゃう気なの?」
まもるは、泣きそうになって問い詰めた。
「思い出・・・?」
そんなまもるの必死の説得に触発されたのか、辰巳は一瞬、とまどいの表情をみせた。おそらく、ナインと一緒に助け合ったことや、遊んでいたことでも思い出しているのであろうか。
「そうだな、あいつのプロトオーガは強ぇからな、いっぺんマジで戦ってみたかったっけ」
「それアタシもだわ。あはははは」

しかし、彼らに残っていたナインとの大切な思い出はその程度のものしかなかったようだ。

「あぶねぇな。その夢かなえる前に、あいつ殺しちまうところだった。教えてくれてありがとうな、まもる」

「そういう意味じゃない！！みんなおかしいよ！」

まもるは、自分の友人の異常性を必死に訴えようとする。

「でも、ナインの顔を見た途端、アタシあいつを殺しちゃいそうだわ。できればしばらく消えていて欲しいんだよね」

「だったら、警察に突きだしゃいいんじゃねぇの？そうすりゃ、うちの身の潔白を立てられるしな」

「それいいじゃん！！」

良い策がうかんだふたりは、ハイタッチをしだした。

「というわけで、社長。直ちにナインを警察に突き出したほうがいいんじゃないっすか。さもなければ、俺か春樹のどちらかがナインを殺すことになるんで」

「あんたたち、こんなことをして許されるとでも思っているの？」

「許されないことをしたのは、あの男っすから。ていうか、今、殺さないだけマシじゃないかなぁ？」

「グレイ、いい加減にして！！」

まもるは、怒鳴り散らすように叫んだ。

「まもる。ふたりとも本気よ」

弥生は、このふたりの狂気を目の当たりにして、本当にナインを殺しかねないと確信した。だから、今にも泣きそうなまもるを押しのけて、ふたりの前に出る。

「わかった・・。ただこの私を脅迫した以上、あんたたちへの信頼は消え失せたわ。したがって、現時刻をもって、辰巳春樹及び黒井珀の両名を解雇処分とする。ナインを追い出したのを確認したら、即刻消え去りなさい」

「へぇーい」

気のない返事を聞いた弥生は、そのブリーフィングルームから退出した。まもるも彼女に追随するようにその部屋から出てくる。

「社長・・。こんなのひどすぎます」

まもるは、弥生の表情をうかがう。弥生は平静を保っているも、心の中は煮えくり返りそうなほどに怒り狂っているに違いない。

「・・・」

案の定、弥生は何も応えようとはしない。

「はるきちゃんも、グレイも、どうして・・」

まもるは、急に悲しみに襲われて、その場に立ち尽くした。そんな彼女を、弥生は振り返ってみる。

「まもる。あれが、メンタルスフィアに心を飲まれた人間の末路なの。憎しみに溺れ、人の心を失い、ゆくゆくは何も見えなくなってしまう。そして、最後に鬼そのものになってしまうのよ。よく覚え

ておいて」

弥生は、怒りを必死に押さえ込みながらも冷たくそういうと、ナインの部屋へ向かって、再度歩き出した。

「社長・・・」

（三）

弥生は、ナインの部屋の前に来て、立ち止まる。

（本当にこれでいいのだろうか）

確かに、あのふたりのめちゃくちゃな要求が許されるようなものであるわけがない。しかし、だからといってそれが不合理であるとまではいえないのもたしかである。実際、東京陸運保険機構は、マスコミ・検察・鬼の3者から、かなり追い詰められている状況にあり、ナインを売って身の潔白を証明すれば、会社全体としての利益は大きい。

だが、そのような貧乏くじを引かされるナインはどうだ。ただでさえ、人を信じやすい性格の男であるから、相当に傷つくはずであろう。

（でも、このままじゃ、ナインはあのふたりに殺されてしまう。そうなるよりは、はるかにマシか）

弥生は、そうやってあのふたりのせいにすることで自分の論を正当化した。もう、お手上げ状態の彼女にとって、それが一番楽なのだ。

「ナイン。入るわよ」

言うと同時に、弥生は扉を開いた。

「あ、社長」

そこには詩季がいた。今ナインに起こっている劇的な状況を知らないで、彼女は幸せそうに、そばで寝ているナインを優しく見つめている。

「どうしたんですか、そんな怖い顔して？」

彼女は、ナインを起こさないように、小さな声で聞いてきた。

「・・・・」

弥生は応えられなかった。いまから自分がしようとしていることは、詩季にとっても残酷な仕打ちを与えることになるからである。しかも、まるでわが子を愛でるかのように母なるまなざしを送る詩季の様子を見ていると、なおのこと事情をいうことはできない。

「社長？」

詩季もそんな弥生の心境を察知したのか、不安感が募っているようだ。

「ごめんなさい。ナインに話があるの。だから、詩季は外してもらえる？」

弥生は、詩季の顔を見て言えなかった。下を向いて、震える声を押し殺すように言う。

「は、はい」

詩季は、弥生の不可解な態度に首をかしげつつも、慌てて立ち上がって、弥生と入れ替わるように出て行く。

「あ、社長。ナイン君、いろいろと悩んでたみたいですけど、何があってもみんなを守るって。元気が戻ったみたいです」

「そう・・」

詩季は笑顔をつくってポジティヴな情報を与えたが、かえってそれは弥生の表情を暗くさせた。

「すいません。もう行きますね」

詩季は、喜ばない弥生に後ろ髪を引かれながらも、自分の部屋へと戻っていった。

（ごめんね。詩季）

（四）

ナインは、八王子山林地帯に来ていた。というのも、弥生遼子が、ここである人物からブツを受け取って欲しいとナインに頼んだからだ。そのため、プロトオーガを使い、虚物化の瞬間移動により、ここに到着する。相変わらず、この山林地帯には人の気配はなく、以前来たときの状態がそのまま保存されて残っている。

（それにしても、ここにはよく来るな）

ナインは、プロトオーガを背もたれにして、日が沈み行く空を見上げていた。もっとも、木々に囲まれたこのエリアは、既に夜ではないかというほど暗くなっている。

（こんなところで待ち合わせるなんて、よほど大事な物なんだろう）

ナインの周囲はおどろくほど静まり返っていた。まるでこの世界には、自分とこのプロトオーガしか存在しないとさえ思えてしまう。

（何かくる）

しかし、上空がざわめきだしたようだ。これは、ヘリコプターのブレードが回転する音だろうか。その音はだんだん大きくなってくる。おそらく、ヘリがこの近くに向かってきているのだろう。

次第にヘリにより発生する上昇気流が、木々をざわつかせて、落ち葉を空へと舞い上げる。

（例の人物が到着したのか）

モーターの非常に大きな回転音とともに、木の葉の隙間からヘリがその顔をのぞかせた。それと同時に、強烈なスポットライトの光がナインの目に突き刺さる。そして間もなく、ヘリからロープ製の梯子が投下され、数名の人間が続々とそれをつたって降りてきた。

「君は、機構の者か？」

体格のよい、戦闘スーツに身を包んだ男が、ナインの前にたって問いかける。

「はい。とすると、あなた方が理事の言っていた人たちですね」

「そうだ」

男は、無愛想に肯定した。

「にしても、これが例のオーガか。怖ぇ顔してやがるな」

男は、ナインの後ろに控えている巨大なプロトオーガに目をやった。また、彼に引き続いて降りてきた連中も、プロトオーガに目を奪われてしまっている。この光景を見ていたナインは、この男がなんとなく胡散臭い匂いを出していたことを感じた。

「それより、渡したいものとは？」

「ああ、これだ」

ナインの目の前の男は、なにやら紙袋のようなものをナインに差し出す。そして、ナインはそれを受け取ろうとした。

「え・・」

だが突如、鍵がかけられるような軽い金属音が響く。そして、ナインの手首を冷たい感触が締めつけた。ナインは、いやな予感がして、とっさに身をよじろうとする。

「被疑者確保！！」

しかし、抵抗しようとしたナインの片腕は、思い切り引っ張られたうえ、足をかけられてしまい、男の柔道技が綺麗に決まってしまうのであった。そのままナインは、大地に叩きつけられる。抵抗できなくなったナインは、いよいよ両腕に手錠がかけられる。

「これは一体、どういうことだ!!」

地に這い蹲るナインを見下すように立っていたひとりの男が、ナインの抗議を無視して逮捕状を呈示してきた。それを見たナインは、ようやく自分が置かれた状況を飲み込めた。この連中は捜査機関だったのだ。しかし、もう身動きすら取れない状況でそれに気づいても、全くの無意味である。

「団堂曹士。貴様を内乱首謀の容疑で逮捕する。もっとも、お前には黙秘権と弁護人選任権がある。これらを行使することはお前の勝手だ。だが、俺たちが優しい取扱いをするだなんて思うなよ」

男は、淡々と手続的事項の説明をする。

「ふざけるな!俺が一体、何をしたっていうんだ!!」

「それはこれから明らかになるだろうよ」

ナインの身体を押さえつけている男が、いっそう強く地面に彼を押さえつけながら応える。

「俺は、仲間を守るために戦っていたんだ!お前たちに逮捕される筋合いはない!!」

ナインは、苦痛に顔を歪めながら叫ぶ。

「仲間・・か。ひとつお前に教えておいてやる。お前の居場所を我々に教えたのは機構の代表理事、弥生遼子。お前が守る仲間ってやつだ」

「何をいっている!!彼女がそんなことをするはずがない!!」

「驚いているのは我々も同じだよ。まさか、重要人物から直接声が

かかるとは思いもよらなかったからな。それに奴の情報がなければ、こんなところにお前を捕まえに来るわけがないだろう」

「そんな・・。社長が、俺を売った・・」

信じたくはなかったが、この男の説明が最もよく筋が通っている。そうなると、この男の発言を真実と受け止めざるを得ないのだ。

「そういうわけだ。ご愁傷様」

頭が真っ白になっていくナインに対して、男は吐き捨てるようにいった。

「詩季だ。彼女なら、俺の無実を証明できる！」

それでもナインは足掻いた。自分の信じたものを信じ続けたかったから。

「残念ながら、全員一致でお前を売ったみたいだぜ。だから、機構は本件となんら関係が無いということにしてくれってよ。まるで、トカゲの尻尾だな」

全員一致でナインを売った。それはどういうことか。詩季も反対の意思表示を行わなかったということだ。

「でたらめを言うな！！」

「詩季といったか？お前に操られていた被害者だとか言ってたぜ。つくづくひでぇ言われようだな」

男のとどめの一撃で、ナインは絶望の底へと突き落とされた。反面で、男は憎たらしい笑顔を浮かべていた。

「嘘だ！！」

あの詩季までもが、自分を捨てた。ナインに進むべき途を示してくれた彼女が。自分を見失っていたナインを救い出してくれた彼女が。

「本当にこいつはめられたんだな」

割と小柄の男が、かったるそうにナインを見下しに来た。

「まあ、こんな奴、哀れんでやる価値もねぇがな」

捜査官の男たちは、地に這いつくばり、仲間にまで裏切られた、この哀れな犯罪者をあざけ笑った。

（だって、詩季は俺に言ってくれたじゃないか。俺をずっとつなぎとめていてくれるって。たとえ俺が、自分を消してしまいそうになっても、命を賭けて守ってくれるって。だから、俺は、君を信じたし、心から愛おしいとさえ思えた。なのに、それさえも嘘なら、俺の信じたものは、一体、なんだったんだ、詩季。君がいてくれたから、俺は俺を見失わないですんだんだぞ。君が俺を裏切ったとすれば、俺はどうすればいいんだ。俺は、一体、誰なんだ）

ナインは全身から力が抜けていった。もう、抗う気力もなければ、生きる気力もなくなってしまった。それは、根を奪われた草のように、根底からその支持基盤を揺るがされるものである。

「なんだこいつ？今度は、動かなくなっちまったよ」

ためしに、ひとりの男が足でナインの腹を乱暴に突いた。しかし、

ナインは感覚がないのか、全く反応しない。

（許せない・・）

しかし、絶望の最底辺に到達したナインは、再度、上昇を始める。行くところまで行ったら、あとは上るだけしかない。しかし、その上昇先は、かつてのナインへと向かうものではない。

「俺を、俺を裏切りやがって!!ちくしょおおおおお!!ふざけやがって!!貴様ら、全員ぶっ殺してやる!!!」

ナインの中にあった大切な仲間たちへの思いは、おどろおどろしい底なしの憎悪へと変わっていた。今の彼を支えているのは、仲間への信頼などではなく、かつての仲間への深い憎しみであった。

「この俺を謀りやがって!!貴様らは、絶対に俺が殺す!!絶対に!!!!!」

もうそこには優柔不断で、お人好しで、なおかつ読書好きなナインという男は存在しなかった。そこにいるのは、ただの鬼である。憎しみに支配され、完全に心が狂気に染まってしまった、憐れな鬼だったのだ。

第39話　フラッシュ・バック・メモリーズ

―東京陸運保険機構戦艦ブリッジ―

「社長!!答えて下さい!!私に隠していることを全て、話してください!!」

先ほど、団堂曹士こととナインが逮捕されたとのニュースを見た詩季は、珍しく弥生遼子に問い詰めていた。他方で弥生は、彼女を真直ぐに見ることができないでいる。

「ナイン君が、逮捕されたってどういうことですか!!」

かたくなに応えようとしない弥生に対して、詩季は必死に食い下がった。

「・・・」

「しーちゃん・・、社長は仕方なく・・」

傍に居たまもるがフォローに入ろうとする。

「仕方なくナイン君を売ったっていうの?会社のため?お金のため?」

しかし、その言い訳がましいフォローは、かえって詩季に油を注ぐようなものであった。

「ごめんなさい。それしか方法は無かったのよ」

「私なんかに謝らないで!!それじゃあ、ナイン君はあんまりだよ。彼は、命をかけてみんなのために戦っていたのに、どうしてそんな酷いことができるのよ!!きっと、今頃、悲しくて泣いているわ・・」

「しーちゃん、私だって、止めようとした・・」

「だから?止めようとしても、実際にそれができないんじゃ、やってないのと同じだよ!!」

「ごめん・・。しーちゃん・・」

詩季はこの連中にいい加減、愛想を尽かしては、突然、駆け出すように出て行こうとした。

「詩季、何処へ行くのよ？」
「ナイン君を取り戻しに行きます。彼を助けなくちゃ」
「無茶だよ、しーちゃん！！」
「まもるちゃん、止めないで。私、ナイン君と約束したんだ。ナイン君が迷ったときも、絶対に私が彼をつなぎとめるって。だから、行かないといけないの。それがたとえ、兇悪犯罪者であると罵られても、私の命の危険があるにしても」
「しーちゃん！！」
まもるは、だんだんと遠くへと行ってしまう詩季の後姿を見送っていた。それにしても彼女は、詩季の強硬な姿勢に驚いてしまい、何もできずにいた。
「社長、私・・・」
「行ってきなさい。そして、詩季を助けてあげて」
「は、はい」

―都内某所、A級犯罪者特別隔離施設―
ここは、地下にある秘密の牢獄である。日の光も達しないじめじめした空間の中で、鋼鉄の分厚い壁が在監者の行く手を阻んでいる。ただでさえ脱出不可能なその檻の中で、ナインはさらに、手足を鉄パイプの椅子にくくりつけられて、身動き不能な状態にされていた。また、身包みはがされ、ぼろ雑巾のような布をパンツ代わりにはかされてはいるが、ほとんど裸に近い。しかも、彼の身体はボロボロの状態であった。この状況から察するに、この部屋は拷問部屋なのであろう。この国ではもちろん拷問を禁じているが、実際のところ、秘密裡でそれはなされていたのである。ただ、千万人を超える犠牲者を出した大事件である。真相解明のため、犯人と思われるこの男を拷問することは比例原則に反するものでもなく、凶悪犯罪者の人権侵害程度は許されていいのであろう。
「寝てんじゃねぇよ。他の協力者は誰だ？」
随分と修羅場をくぐってきたような大男が、ナインの顔を覗き込み

ながらいう。
「・・・」
ナインは応えない。彼はまるで、目を開いたまま寝てしまっているようである。
「おい、起きろやコラ！！」
「っく・・・」
その大男は、鞭でナインのわき腹をはたく。はたかれた部分にじわりと血が滲む。
「さっさとゲロッちまえよ」
男は、にやけた顔で言った。
「・・・もう終わりか、デク人形」
このような状況において、ナインは相手を挑発する行動に出た。しかも、ボロボロの体とは対照的に、その眼光だけはやけに鋭かった。そこには果てしない執念の焔が宿っていたのだ。
「てめぇ、調子に乗ってんじゃねぇぞ！！」
男はもう一度、苦痛をその身に叩き込もうとした。
「川園、それくらいにしろ」
ところが、スーツに身を包んだ髪の長い男が現れては、大男の動きを言葉で制止した。その男は、冷徹そうな表情の眉間にしわを寄せている。感情を正しく制御出来ないこの大男と対比してしまうと、後ろの男は機械のような人間に思えて仕方がない。
「半田検事、しかし・・」
川園と呼ばれた大男は、後ろの半田に向き直って言う。
「ただでさえ俺たちは違法捜査にどっぷり浸かっているんだ。これ以上の拷問は貴様の首が飛ぶことになるぞ」
「でも、コイツは拷問でもしない限り、口を割りませんぜ」
「どうせこの男は、身体的苦痛などでは口を割らん。自白を取る前に殺してしまうさ」
「く・・、わかりましたよ」
そういって川園は、半田と位置を入れ替わるように、拷問部屋から

出て行った。怒鳴り声が響いていたこの部屋も、このふたりだけだと急に静かになってしまう。
「貴様が、団堂曹士だな」
半田は、椅子に縛り付けられてぼろ雑巾のようになってしまっているナインを一瞥した。
「団堂曹士？人違いじゃないのか」
ナインは身に覚えのない名前を聞かされて首をかしげた。
「残念ながら人違いではない。これを見ろ」
そう言って半田は、一枚の個人データカードをナインの前に呈示した。そこにはナインの顔や氏名、住所、前科、学歴などが綿密に記載されていた。
「これが・・俺なのか・・？」
ナインは、その個人データカードを食い入るように見る。拷問が開始されてもう数時間が経過したが、ようやくにしてナインがはじめて驚きの表情を見せたのだ。このカードの呈示という行為は、川園の拷問よりも彼にとって強烈な打撃なのであった。
「そうだ。貴様の名前は『団堂曹士』。年齢は２２歳。身分は東京大学法学部の学生。前科はおろか補導暦すらも無し・・」
半田はカードの内容をさらっと朗読すると、それをしまった。
「待て、俺の本当の名前は、団堂曹士というのか？」
「これ以上は言わせるな。それは貴様が一番よくわかっていることだろう」
「あんたはなぜ俺の過去を知っている？」
「俺はこれでも検察だ。捜査対象の過去を洗うぐらいできるに決まっているだろう。もっとも、貴様の情報工作には手を焼いたがな。さて、今度はこちらの質問に答えてもらおうか、団堂」
「・・・」
このような形で自分の過去を知ることとなったナインは、なんとなく腑に落ちない部分があった。だが、半田はそのようなナインの態度など気にも留めないで、言葉を続ける。

「ここにお前の所属していた外法学ゼミ構成員の写真がある。もうひとりの首謀者は誰だ?」

半田は、なにやら9人の学生が集まった写真をナインの前に突き出した。その写真はぼろぼろで、色彩も劣化しているが、内容を判別できないわけではない。そこには、右端にナインが立っており、6人の男子と2人の女子がいる。

「なんだよこいつら・・・」

そこには小さな教室の中に、9人の学生がそれぞれ怪しい笑顔を浮かべている。無論そこに映っている自分もそうである。その学生たちの後ろにあるホワイトボードには、大きく外法学ゼミと汚い字で書かれていて、皆でしたり顔をしているのだ。

(なんで、俺はお前らの顔を知っているんだ)

ナインの頭の中には、記憶が失われる以前の情報がフラッシュバックして戻ってくる。この脳細胞に粉々になって残っていた記憶の破片がシナプス信号を一斉に発生させて、相互に結合するのだ。ナインの脳が爆発的に活性化し、情報の氾濫が発生する。そのため、頭が割れるように痛い。

だがナインは、全てを思い出した。この写真に写っている、あの男も、この女もみんな知っている。こいつらは、かつての仲間。この日本を復活させようと集まった同志たちである。

(栄人、美菜、悟、リー・・・)

そして、ナインは何をしたかったのかを思い出した。外法を修め、プロトオーガをつくり、下等オーガの集団をこの世界にばら撒いたのも、全てはこの目的のため。この計画を実行するに必要な代償となる人々の心を集めるため。

「チャプター9・・」

ナインは、焦点の合わない虚ろな眼で、つぶやいた。

「チャプター9?それは何だ、団堂!!」

半田は、ナインがぼそりとつぶやいた言葉を聞き逃さなかった。

「チャプター9は、世界の構造そのものを改正する外法規定・・」

ナインは、心其処にあらずという感じで、半田の問に反射して答えた。
「世界の構造を改正するだと？それはいったいどういうことだ」
半田は、すさまじい剣幕でナインのところへ問い詰める。
「チャプター９により、現世界は倒産する。そして、俺たちは新しい世界を作ることができる・・・」
「世界の再生。それが貴様の目的ということか！！そのために、この世界を犠牲にする、そういうことか！！」
半田は、ある程度、そのチャプター９という計画の恐るべき実体を理解し、より強く詰問する。
「再生？勘違いするな。俺は、こんな世界、混沌の底に沈めてやるだけさ。チャプター９でな。ぶっ壊してそれで終わりだ。ひゃははははは！！！！」
半田は、ひとりいびつな笑いをするナインを無表情で傍観していた。
「残念ながら、貴様はもうここから生きて外に出ることはない。これで貴様の野望は終わりだ、団堂」
「それはどうかな・・？」
「何？」
「来い、アニミストォォォォ！！！」
「・・？」
半田をとてつもなく嫌な予感が襲う。のっぺりとしたべたついた感触が、半田の周囲に纏わり憑くのである。おそらく目に見えない、人智を超えた何かがいる。ナインがその嫌な予感の発生原因であることは、半田でも容易に判明できたようである。
「やむをえない。死ね、団堂！！」
半田は、とっさに身の危険を感じた。この男は何かとんでもないことを成そうとしているのだ。だから半田は、ナインに対して、ためらうことなくハンド・ガンを取り出して、引き金を引く。
「消えた・・？」
ところが、幾重にも椅子に縛り付けられていたナインは、どこかへ

と一瞬にして消えてしまうのである。彼を狙ったはずの弾丸は、空を切って、椅子の背もたれにめり込んでいた。

「団堂!!何処へいった?」

『アニミスト。手始めにこの監獄を破壊しろ』

半田は、天から邪悪な声を聞いた。それと同時に、大地が大きく揺らぐ。牢獄の天井が軋みだす。おそらくこの近辺に、巨大な質量が突如現れようとしているのだ。

「ぐわぁぁぁ!!」

半田は、強烈な衝撃波によって吹き飛ばされる。それは、牢獄の天井をも引き剥がして、この暗い空間に晴天の空を覗かせてくれた。また、その天井にできた穴からは、眩しい青空とともに、おそろしい邪神、アニミストの姿を見ることができた。

(あれは、一体、なんなんだ・・)

半田は、薄れ行く意識の中で、アニミストのおそろしい姿を目に焼き付けていた。化け物はその腕を巨大化させ、大地に向けて叩きつける。

閃光が走った。その次に激震が起きて、最後に衝撃波が周囲の建物等を押し流していく。それはまるで核爆弾でも落ちたのではないかというほどの衝撃であり、辺りの全てを破壊する。

『・・・』

アニミストは飽き足らなかった。今度は、あの密集地を破壊しようと、動き出すのであった。

鬼女アリスと鬼女メイデンの両機が、日本上空を東京方面へ向けて移動していた

「しーちゃん!今、ニュースが入ったんだけど、これ見てもらえる?」

「これは・・・」

まもるから転送されてきた画像データによると、そこにはプロトオーガ・アニミストが盛大に暴れている様子が見て取れた。このオー

ガは、アザゼルと戦った時に、詩季が目にしたナインのプロトオーガの真の姿である。

「ナイン君・・」

「これがナインさんのプロトオーガの鬼化？」

それは白と黒とに彩られた、偉大なる魔神である。対立する二つの極限のいずれにも組しない、あいまいな存在。神のような悪魔のような魔性に、見るものの心を魅了して滅ぼそうとする。詩季にとって、そのアニミストが破壊の限りを尽くしているこの光景は、ナインの心が壊れてしまったことの表象に感じられた。信じていた人々、守りたかった人々に裏切られて、疑心暗鬼になった末、遂に彼は心を失ってしまったのだ。

そして、それは力のない自分自身が生み出した結果である。なんと、彼に寂しい思いをさせてしまったのだろう。彼の味わった絶望を思うと胸が張り裂けそうになる。

「待っていて。いま、助けてあげるから!!」

おそらく、彼は自分たちを赦しはしないだろう。しかし、彼を憎しみから救ってあげられるのは自分しかいない。しかもこれ以上、彼に罪を重ねて欲しくない。たとえ、自分の身が切り刻まれようとも、彼の笑顔を取り戻したいのだ。

「私が、あなたを・・」

とにかくいまは、1分1秒でも早く彼に会って、独りではないことを伝えたい。だから詩季は、アニミストの元へと急いだ。

第４０話　盲目のシキ

―東京都荒川区―

渾沌の最高執行官アニミストは、大きな市街地のあるこの東京荒川区で破壊の限りを尽くしていた。その悪魔にも似た兇悪なオーガは、鉄筋コンクリートの建物が密集するエリアに飛び込んで、いくつかの建造物を崩落させる。

「ヒャハハハハハハ。消えてしまえ」

アニミストは、胸に埋め込まれた青い焔を覚醒させ、周囲に衝撃波を巻き起こす。いくつもの青白い雷鳴が、大地を隆起させながら、周囲の物を岩盤ごと持ち上げて粉砕する。

「逃がすか」

蟻塚が掘り起こされたみたいに、崩壊した住処から、住人たちがぞろぞろと飛び出していく。
アニミストは家屋をなぎ倒し、ビルを切断し、逃げまとう人々の逃げ場を封じていく。

「うわぁぁぁぁぁ」
「ママぁぁぁぁぁ」

殺人マシーンと何ら変わりない、このおぞましいオーガを目の当たりにして、人は絶叫せずにはいられない。白黒の鎧を全身に纏うこのオーガは、まるで狂った道化師のよう。そして、猛獣のようなその強い眼光に見つめられたら最後、生を放棄するのが相当であると

解さざるを得なくなる。

「あなた方は、まだ生きることを望みますか？」

だが、団堂は優しく彼らに声をかける。

「オーガが、しゃべった？」

「た・・たすけてくれ」

追い詰められた人間たちは、アニミストを前に媚びへつらう。

「もし宜しければ、この私があなた方を世界で一番安全な場所へお連れしましょう」

再び、団堂は天使のような口調で語りかける。だが、その声の発生源がこの悪魔では、胡散臭さがぬぐえきれない。依然として、集団は怯えきってしまっている。

「どうか、この子だけは・・・」

「もちろんです。私があなた方をお救い致します」

「よかっ・・・」

だが、その瞬間、大地の下にはべらせていたニルヴァーナが、大きく口を開いて集まっていた連中を丸呑みしてしまうのであった。彼らの悲鳴ごと、ひと口で消し去ってしまうのだ。

「これでお前たちは、このネクロマンサー・システムの円環の中で、未来永劫生きていけるだろう。チャプター９の影響を受けることもないのだ。感謝するがいい。あーっはっはっはっは」

アニミストのネクロマンサー・システム。死者たちの情念を肥やしへと換える、禁断のエネルギー精製装置。団堂は、久しぶりに力を取り戻したことが何よりもうれしくて、特に珍しいわけでもないのだが、高笑いしていた。

「何か来るな」

アニミストは、多数の反応を検知する。アニミストの出現を知った防衛省の自衛隊がすぐに駆けつけたのだ。自衛隊は間もなく到着して、アニミストを包囲する。

「自衛隊か、懐かしいな」

団堂は、見覚えのある鉄の塊どもを一瞥する。以前、彼は自衛隊にいたからよくわかるが、どれも取るに足らない雑魚どもである。無能な人間どもによって作られた、ただのガラクタ。それが、高度な外法技術の集大成である、このアニミストに対峙しているのだ。

『見たことのないオーガだ』

『ひ、ひるむな』

アニミストが纏う邪悪な魔性に魅入られただけで、兵士たちは小便を漏らしそうなほどに恐怖した。彼らも伊達に毎日戦っているわけではない。毎日戦っているからこそ、このオーガの恐ろしさがよく分かってしまうのだ。彼らにとってはまさに、神の御前で告白をさせられているような威圧感である。

「久しぶりだな、自衛隊の諸君。俺は、団堂曹士。かつてはナインと呼ばれていた男だ」

団堂は、声高に怯えすくみあがっている連中に、名を名乗った。

『貴様が団堂か。』

『ナイン、貴様。裏切りやがって。オーガに乗っている奴だからおかしいとは思っていたんだ。やっぱり敵だったのか』

それぞれの軍人はこのアニミストに乗っている男が、かの指名手配犯であることを知って、さらに格別の戸惑いをみせる。特に、ナインのことを知っている者にとっては、この男に対する疑念で一杯であろう。

「お前たちの安い魂。チャプター9を発動するための糧として少なからず利用してやるよ」

団堂は、周りを取り囲む連中へ殺意を放つと、アニミストの背後にある3つの宝玉、ニルヴァーナを全て槍状に変形させ、臨戦態勢に入る。

「ニルヴァーナ。この馬鹿どもをぶち殺せ」

そして、戦いの火蓋は切って落とされた。一斉に3本の槍はアニミストの周囲を飛び交う。予測不可能な軌道を描きながら、それらは自由気ままに上空を交差する。

『うわぁぁぁぁぁ!!!』

爆発。

『何だ?一体、どこから・・・ぎゃっ!!』

爆発。

『あああああ！！！！』

無駄な銃声。後に爆発。

アニミストの周りにいたガラクタは、戦場を飛び交う3本の槍によって、次々にエンジン部分をくり抜かれ、エネルギーの反応を起こし、至るところで爆発がする。その爆風に乗って、機械の部品がふっとんでくる。果たしてこれが戦いとして成立しているのであろうか。一方的な虐殺ではないだろうか。

「ギャハハハハ！！そうだ、もっと俺を憎め！死して俺を呪い殺すほどにな！！」

アニミストは、ただその場に突っ立って、ニルヴァーナの虐殺行為の一部始終を傍観していた。本体はなにもせずとも、可視不能の速さで突撃する槍が自動的に掃除してくれているのだ。

『た、たすけてくれぇぇ！！』

気づけば、アニミストの足元に、のこのこ一機のガラクタがやってきて、助けを乞うのである。どこから持ってきたのか知らないが、完全に白旗を揚げて、降参の意思表示をしているのだ。

「ははははは！！貴様はどうしようもねぇやろうだな。いいだろう、特別扱いだ。俺に勝ったら、生かしてやる」

『そんな・・』

「こい、ニルヴァーナ」

団堂がそういうと、3本のうち2本の槍が、アニミストの両手に収

まる。そして、今度はそれが剣状に変形する。

「覚悟はいいか？貴様も軍人なら、最後まで戦え」

アニミストは、そのガラクタから５０メートルほどの距離を置いてやる。

『あああ・・・』

相手の男は、完全に頭が混乱し始めているようだ。

「しねぇぇぇ！！！」

『ぎゃあああ！！！』

前方のガラクタは、マシンガンを照準も定めずに連射する。もっとも、それは的をちゃんと狙えてはいるが、物理属性攻撃無効シールドによって、完全に攻撃能力を阻却されてしまう。だからアニミストは、全く損害を気にしないでそのまま対象へ向けて直進した。

『来るなぁぁぁ！！！』

「あーはっはっはっはっはっは！！！！」

アニミストは、腰を抜かしてしまった相手を、ただひたすらに切り刻んだ。両手の剣で丁寧に丁寧に、鉄の塊を切り刻んでいく。あえてニルヴァーナからにじみ出てくる外法エネルギーを使わずに、団堂は、純粋に物理属性攻撃だけで破壊を楽しむのだ。なぜなら、その外法エネルギーを解き放ってしまうと、すぐにこのガラクタが灰塵になって消えてしまうので、おもしろみがないからである。この臆病者に、圧倒的な暴力をその身をもって体験させ、いつ死ぬとも知れない絶対的恐怖のもとにおいてやる。

『やめろぉぉぉぉ・・・ぐへぇ！！』

搭乗者の身体にニルヴァーナが刺さったようだ。どうやら完全に殺してしまったらしい。

「もう終わりか・・」

最後の余興が済んだところで辺りを見回すと、もう生き残っている兵士は誰一人として存在しなかった。とっくに仕事を終えたひとつのニルヴァーナが、手持ち無沙汰になってしまい、ただ辺りを回っているだけである。

「これだけの人間を殺して、これっぽっちか・・」

団堂は、アニミストにキャプチャーされた人々の精神の量を確認していた。

「規定値まで集めるのも時間がかかるな・・。ん、何か来る」

アニミストは、レーダーでふたつの友軍アイコンを探知した。しかし、そのアイコンが示すものは登録時において友軍気であったにすぎないものであるから、今はもう襟元を分かつ敵同士であってもおかしくはない。

「来たぁ。鬼女アリスに、鬼女メイデン」

アニミストは、そのふたつの敵影の方を見た。団堂の表情はニタリとして、愉悦に歪んだ。

『ナイン君、もう止めて！！』

アリスが、アニミストの近くに猛スピードで突っ込んできた。

「ククク・・・。会いたかったよ、詩季」

この世で最も殺してやりたい女が来た。会いたかった。そして、死よりも辛い苦痛を与えて、悲鳴を挙げさせ、じっくりなぶり殺しにしたかった。自分の心を奪っておきながら、いとも簡単に自分を裏切り、絶望の淵へと貶めた張本人。そんな女が、よもや自分から出向くとは思いもよらなかったから、うれしくてたまらないのである。

「ナイン君、帰ろう？」

アリスは、手を差し伸べる。しかし、団堂にはその手が地獄からの手招きに見えて仕方なかった。

「俺をナインなどという名で呼ぶな、裏切り者がぁぁぁ！！」

団堂は、そういって、アリスの手を取る代わりに、彼女に対して鋭い刃を向けた。そして、彼の持ちうる精一杯の殺意を放つのだ。愛情として蓄積していたものを全て憎しみに転化させた、悲しい殺意である。それは、何も信じられなくなった団堂のその心をドロドロにして、表現したような精神の波動。

『ナイン君！！』

詩季は、それでも団堂に対して、手を差し伸べた。やはり、彼は誤解している。自分はこんなにも彼のことを愛しているのに、彼を傷つける気なんてないのに、彼は何も見えなくなってしまっている。

それが彼女にとって、とても辛かった。心が痛くて、悲しくて、切なくてたまらない。

「俺は、お前だけは赦さない！！俺の心を・・散々弄びやがってぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

アニミストからニルヴァーナが飛ぶ。そしてそれは、一直線にアリスに突き刺さろうとする。

『しーちゃん！！』

しかし、メイデンのシールドが割って入り、その攻撃を無効化してくれた。

「鬼女メイデン。まもる、貴様ァァァ１！！」

『ナインさん、もうやめてください！！ナインさんは、しーちゃんのことを誤解しているんです』

「そうやって、俺の油断を誘うんだろうが！！邪魔なんだよ、消えろぉぉぉ！！」

団堂は、彼女の説得に対して、全く聞く耳を持たなかった。どうせ今回もまた裏切られるに決まっているのだ。だから、殺意の赴くままにアニミストの細い右腕を伸ばす。そして、それは白き巨鳥のごとく、メイデンの喉笛を目がけてすごい速さで飛んでいく。

『メイデン、耐えて！！』

メイデンは、前方に物理と外法の両属性無効シールドを展開することによって、備えた。しかし、それもアニミストを前にしては、属性の転換によって、あっさりと突破されてしまう。あとは、各種攻

撃ガードバリヤを何重にも張って、攻撃の到達に備える。

『きゃぁぁぁ！！！』

しかし、アニミストの攻撃の威力は凄まじかった。まもるは、全精神力をもって、防禦に徹したにもかかわらず、かなりの致命傷を被ることとなる。

『まもるちゃん！！』

『しーちゃん、大丈夫・・。私はまだ戦える』

『もういいの。まもるちゃんは早く逃げて。もう十分だから。まもるちゃんの気持ち、よくわかったから』

『嫌！！私は、しーちゃんを守るんだもん！！』

「いや、お前はこれで退場だ。まもる・・」

『え・・？』

いつの間にか、周囲には3本のニルヴァーナが槍となってメイデンを囲っている。

「死ね」

『いやぁぁぁぁ！！！』

それらは、メイデンを3方向から串刺しにした。それはまるでアイアンメイデンさながらに、自らの鎧という棺の中で、刺殺刑をなされたのだ。鎧の中に溜まった血が溢れて出てくると、メイデンはとうとう動かなくなる。

「さて、今度はお前だ、詩季。死ぬ前に言っておきたいことはあるか？」

メイデンが地に倒れるのを見て、アニミストは、その左腕をアリスに対してむけた。
それを見て、彼女は一瞬面食らってしまうが、それでもけなげに言葉を返す。

『うん、いっぱいあるよ。だから、最後まで聞いて欲しいな』

詩季は、アニミストから発せられる瘴気をその身に受けてもなお、いつもと変わらぬ口調で返事をしたのだ。

「・・・・」

団堂は、彼女がいたって普通の対応をしていたので、かえって拍子抜けしてしまう。何を考えているのかは知らないが、この状態のままでは全然満足できない。自分が受けた絶望と同じくらいの恐怖を与えて、この女の泣き喚く声を聞かなければ全然足らないのだ。だから、団堂は余計にいらついてしまう。しかし、それでも彼女は手を差し伸べる。

『私・・・守ってあげられなかった、ナイン君のこと』
「何だと?」
『ごめんね。あなたのこと、守ってあげられなくて』
「なにをいまさら・・・。そんなの最後の命乞いにしか聞こえねぇよ!!」

アニミストの黒い左腕が伸びる。それは矢のようなスピードで駆ける龍のようであり、対象へ咬みつくのだ。そしてあっという間に、アリスの右腕を奪っていった。なぜならアリスは、その攻撃に対して防禦も回避もしようとはしなかったのだ。

『私を殺すことで、ナイン君の気が済むのなら、私の命をあげる。それが、あなたを守るために私ができる最後のことだから』

詩季は強い決意を持って、その紅き目を開き、今の団堂を直視する。その上でアリスは、アニミストの前に立ちはだかった。

『しーちゃん、死ぬ気なの？ダメよ！！しーちゃん！！』

「ふざけるな！！お前は、俺を裏切ったんだ！！俺の心の中に土足で入り込んで、俺を支配して、最後には捨てたんだ！！いまさら、俺に優しくするんじゃねぇぇぇぇ！！！」

アニミストは、その腕を大きく振りかぶって、綺麗な流線型を描く。そして再び、アニミストの右腕が伸びるのである。

『メイデン！！しーちゃんを守って！！』

アリスとアニミストとの間にメイデンのシールドが幾つか入り込んできた。しかし、相変わらず、とんでもない威力は皮のようなシールドをばりばりと引き剥がして、アリスに到達した。しかし、アリスは全く防禦行動に入ることはなかった。

『くっ・・・』

今度は、アリスの左腕が奪われてしまうのである。

攻撃の衝撃によってアリスは地に倒れる。そんな様子を団堂は、したり顔で見下していた。だが、アリスはふらふらしながらも、立ち上がる。アリスはすでに両手を失い、満足に動くこともできなくなった。そろそろ、怖くて声も出なくなっているはずだ。おもしろくなるのはこれからだ。これからじっくりいたぶってやろう、と彼は愉悦に浸っているときであった。

『ナイン君、本当にごめんね』

だが、憎きこの女は悲鳴を挙げるどころか、ただ自分に対して謝罪の言葉しか述べなかった。団堂にとって、この不可解な矛盾挙動を理解できず、かえって苛立ちが増加する一方であった。

「俺を、ナインと呼ぶなぁぁぁぁぁぁ！！！」

アニミストは、両腕に剣となったニルヴァーナを携えて、アリスへと近接する。アニミストの主力兵装であるニルヴァーナを手にしたということは、徹底的に詩季を殺しに行くことの意思表示に等しい。

『メイデン！！しーちゃんを守ってよ！！メイデン！！！』

メイデンは、どんどん残り少なくなりつつあるシールドを、アリスに与えた。幾つもの盾が、アリスに密着し、鉄壁の結界を生み出すのである。

「詩季！！俺は、お前を信じていたのに！！！うおぁぁぁぁぁぁ！！！！」

団堂は目にも留まらぬ速さで、剣を柔いアリスの体に突き刺した。もうシールドなどは関係ない。このニルヴァーナを前に、どんな盾もベニヤ板同然。したがって、アニミストの攻撃の前ではシールドなんて、あってないようなものである。

「お前だけは、お前だけは・・・」

団堂は、何度も何度も、同じような攻撃を繰り返していく。アリス

は、ついにその肢体を切断され、もう立ち上がることすらできなくなる。だが、団堂が聞きたかったこの女の悲鳴は挙がることはない。泣け。叫べ。命乞いをしろ。そんなクソやろうをじっくりいたぶるのが最高なのだ。そして、この女はそのような残虐刑に値するクソやろうであったはずだ。

「なのに、何で!!何でだ!!!うおぉぉぉぉぉ!!!!」

団堂は、怒りなのか、憎しみなのか、愛情なのか、よくわからない感情にただふりまわされていた。しかし、いまの彼はまちがいなく、詩季を殺すであろう。それほどまでに、アリスを切り刻んでいるのだ。そんな中でも、詩季は団堂に優しく語りかけていた。

『覚えてる?ナイン君。私たちがはじめてキスした日のこと。忘れてたら、ちょっとショックだなぁ』

詩季は、小恥ずかしそうに、あの時のことを回想していた。顔を少し赤くして、その唇に人差し指を当てるのである。

「この女を殺せぇぇぇ!!アニミストォォォォ!!!!」

団堂も良く覚えている。いじらしそうに詩季はキスを求めてきた。あの時の気持ちは本当だった。自分をつなぎとめてくれている唯ひとつの存在であるこの少女が、愛おしくてたまらなかった。この人のために戦っているということは、彼にとって喜びであった。いくら傷ついても良かった。詩季がずっと笑っていてくれるなら。

『でも、あのとき、ナイン君は私に言ってくれたよね。私が笑っているだけで、ナイン君にとって、すごい助けになってるって』

詩季は、団堂に向かって問いかけた。あの時の情景が鮮やかによみがえるのだ。見つめあった熱い視線も、高鳴る心臓の鼓動も。あの時の気持ち全てが、彼女の大切な宝物。あの時の言葉の全てが、彼女にとって想い出のアルバム。思うだけで心が温かくなれる。それらは彼女にとって、誰かを愛した証。

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れぇぇぇぇ！！！！」

しかし、彼は、アリスをただぶん殴ったりして返事に代えた。詩季に記憶を喚起される度に頭が割れるように痛くなるのだ。これ以上、しゃべらせると自分が壊れてしまう。この女は、他の連中と結託して自分を売った。そんなクソやろうであればよい。これ以上、苦しませるな。

『あのとき、私、すごくうれしかった。今まで人の役にたったことのない私が、だれかにとってかけがえのない存在になれたから。人に世話をかけてばかりの私が、とても活き活きできたんだぁ。これって、すごいことなんだよ』

「うおおおおおおおおお！！！！！！！」

アニミストは、白と黒のボディにアリスの紅い返り血を浴びながらも、ただひたすら、アリスを切り刻んだ。その腹部を切り刻み、内蔵を潰し、再生不可能な状態にまでする。もう団堂は何も聞きたくないのだ。いまさらそんな話、聞いたってしょうがない。お前は、ただの裏切り者。それ以下でもそれ以上でもない。だから、裏切り者のままでいてくれ。もう、戻れないんだ。もう俺はただの人殺しに成り下がってしまった。そして、今度はお前を殺そうとしている。だから、いまさら戻れないのだ。

『このままじゃ、しーちゃんが、しーちゃんがしんじゃうよ。もっ

と、シールドをだしてよ。ねぇ、メイデン、助けてよ』

まもるは、自分の無力さに耐えかねて、涙をだらだら流している。このままでは大切な友達を失ってしまう。しかも、そのなによりも大切な親友が、愛する人の、まさにその手によって殺されようとしているなんてあんまりだった。そんな結末、酷すぎる。ただでさえ、目が不自由で、人並みの幸せも掴むことができない彼女なのだ。せめて、彼女が手にした唯一の幸せだけでも守ってあげたかった。しかし、もうメイデンからは一枚もシールドは出てこなかった。

『だからナイン君。私、あなたに会えて、とっても幸せだった。優柔不断で、鈍感で、いつも本ばっかり読んでて、でも優しくて』

「やめろおぉぉぉぉぉぉ！！！これ以上、俺の心の中に入ってくるんじゃねぇぇぇぇ！！！」

団堂は、心の中によみがえってくる記憶を、叫ぶことでもみ消しにする。

『私がいなくなっても、必ず、この世界を守ってあげて。おねぇちゃんや、おとうさん。社長や、西田さん。グレイに春樹にあいちゃん。それと、私の親友のまもるちゃんも』

『メイデン、しーちゃんを助けてよ！！！ねぇ！！』

「我ァァァァァァァァ！！！！」

アニミストの一撃でアリスの頭が破裂する。もう原型は留められていない。

『ほんのちょっとだけでいいの。みんながもっと、人を思いやりながら、助け合って生きていける世界。みんなが、生きててよかったって思えるそんな世界。これが私の願った世界。きっと、ナイン君

なら作っていける。だから、約束だよ。私が見れなかった世界を、ナイン君が私の代わりに見ないとダメだから。ナイン君は絶対に生きなきゃダメだから！』

「俺はぁぁぁ！！！！！」

「ナイン君、大好きだよ」

最後に、団堂は、愛した彼女の笑顔を見た気がした。

「うおぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

アニミストは、右腕を巨大化させて、最後の一撃を放つ。そのとき、団堂の頬を涙が伝った。

（俺、なんで泣いているんだろう。これを望んでいたんじゃないのか、俺は。あんなに殺したかったんじゃないか。なのになぜ、俺は泣いているんだ）

『しーちゃん！！いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

アニミストの右腕が炸裂した。何もかもを吹っ飛ばしてゆく。詩季との楽しかった思い出も。彼女と未来を誓い合った約束も。あふれ出る涙を吹き飛ばして、乾かして。何より大切な、彼女までも。

（ああ、君とはじめてあの山の中で出会って、一緒にいろいろ話したよな。カフェにも入ったりしたし、一緒にお前の大学にも行った。そういや、テストの時、俺、負けたんだよな・・・。あの時、社長に怒られたの、結構傷ついたんだぜ）

分厚い閃光がアニミストの周囲を包んだ。光の世界に包まれたことで、ようやく団堂と詩季は一緒になれた気がする。その閃光は、全

てを洗い流していく。団堂を覆い隠していた心の闇をかき消す光となったのだ。詩季は、最後に約束を守ってくれた。彼女は彼をつなぎとめてくれた。
やがて、閃光がなくなってくる。不思議と、団堂の心は落ち着いていた。

「詩季！！」

しかし、前方の光景を見ていてはそう落ち着いてはいられない。団堂は、心臓がドクドクしているのを感じながら、アリスの肉片の中を見渡した。おそらくコクピットブロックであるとされる箇所を覗く。そのひしゃげた球体の中から、めちゃくちゃになってしまった女の子の遺体が確認できる。

「俺は・・・俺は・・・・・」

これは何かの間違いだ。あの壊れた肉片が、彼女なのか。

（俺ハ、詩季ヲ殺害シタ）

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

団堂は、ただ絶叫した。それは、信じたくもない光景であったのだ。

第41話　chapter 9

かつてナインと呼ばれていた男は、心の奥底に眠っていた、団堂曹士としての記憶を完全に取り戻した。かといって、ナインという人格は霧散してしまったわけではない。その人格は、彼が団堂に戻った今もなお、脈々と生き続けている。そう、団堂はナインのまま、かつて彼が持っていた全ての力・知識を取り戻すことができたのだ。彼の頭の中には、外法典の条文が網羅的に記憶されているし、最高執行官アニミストを用いる方法も知っている。ただ、その代償は、彼にとって余りに大きなものであった。

「俺は、なんていうことをしたんだ」

悪い冗談であって欲しいと、もう一度、団堂は目の前の光景を見た。しかし、切断された腕や、大量の血だまりに浮いている綺麗な黒髪。そして・・・。

「うっ・・・！！」

団堂は、ひどい嘔吐感に襲われた。口からあふれ出る汚物をコクピットの中にぶちまけてしまう。愛していた人のあんな姿を見るなんて。もう、原型なんてないのだ。

「俺が、彼女を殺した・・・。俺が、俺が、俺が・・・」

その折、かろうじて動きえたメイデンが、よろよろとそのぼろぼろの体を引きずって現場に歩いてきた。

『ははははは。嘘だよね。こんなの。返事をしてよ、しーちゃん』

メイデンは、アリスの近くへ行き、その傍でしゃがみこむ。そして、残骸の中をひたすらまさぐる。乱暴に、肉片を掻き出して、自らが捜し求めているものを取り出そうとしているのだ。

『しーちゃん、みーつけた。あははは、さっきまでしーちゃん、元気だったのに、終わってから見ると、ばらばらだね。ははは、しーちゃんのまほうつかいめ』

まもるは、何かを見つけると、そこで手を止めて、ぶつぶつと言う。

『しーちゃんが死んじゃった。しーちゃんが、しーちゃんが・・・』

生き残ったまもるも、目の当たりにしてしまったこの光景を見て、心が砕かれてしまっていた。

「まもる・・・。俺は・・・」

『いやぁぁぁぁぁぁ!!!しーちゃん!!どうして!!どうして、しーちゃんがばらばらにされなければいけないのよ!!!』

まもるは、絶叫した。親友の遺体という客観的な証拠を目の当たりにして、いよいよ詩季の死を受け入れたのだ。しかも彼女は、心が張り裂けそうな精神的苦しみにより、のたうち回っているようである。

「まもる・・・」

まもるは、アニミストの方をにらみつけた。

『団堂ぉぉぉ!!!貴様は、殺す!!必ず、殺してやる!!てか、

今、死ね。クソ！！ゴミ！！カス！！』

団堂は、あのまもるから、これほどの呪いの言葉を吐きかけられるとは夢にも思わなかった。そのため、彼の心にショックが走る。

「まもる、俺は・・・」

『ごめんね、しーちゃん。悔しいけど今のメイデンじゃ、この馬鹿を殺せないの。だから、もう少しだけ待ってね』

「まもる、ちがうんだ」

『うるせぇんだよ、カス！！すぐに殺しに行くから、首洗って待ってろ！！』

まもるは、それだけ言うと、メイデンと共にどこかへと行ってしまった。

「俺は・・・」

アニミストは、膝を突いてしまった。そして、その状態のまま暫く硬直する。

（二）

『ふふふ、団堂。ご苦労だったな・・』

だが、一難さって、また一難である。今度は、新しいプロトオーガが出てきた。それは、アニミストと同じく、白と黒とで構成されている。しかも、胸元で輝く青き輝きこそは、最高執行官の証である。ただ、厳重な装甲によって覆われているので、その実体は謎に包まれている。

「・・・・」

アニミストにとって、おそらくは最強の敵であるこのプロトオーガがいるにもかかわらず、団堂は何も感じなかった。

『どうした、団堂？悲しみに打ちひしがれているなどお前らしくもない』

「・・・・」

団堂の耳には、彼の言葉など全く届かない。

『まあよい。ちょうどよく、アニミストもいることだ。早速、チャプター９にとりかかろうではないか』

『はい、先生』

すると、その最高執行官の周りに、何体ものプロトオーガが現れる。このうち、１体は、団堂も一度見たことのあるアヴァター。

団堂は見たことのないものであるが、以前に辰巳春樹が交戦した高等執行官アスラ。

アルビオンと比較的に類似しているものの、それとは決定的に異なるこうもりの様な翼からヴァンパイアを思わせる、夜の悪魔アバドン。

そして、巨大な身体をもつ蕾形の大型オーガ。高等執行官アーリマン。

そのアーリマンをさらに超える巨大さを持つ、山のような大巨人がいる。その体長は、１００メートルを越し、まわりのプロトオーガが小粒にしか思えないほどの超巨大オーガ、高等執行官アトラス。

どこまでも長くのびる蛇のような胴をゆらゆらと空にうかせて、此の上空を自由に揺らめいているのは、高等執行官アーミタイル。

そして最後は、青き心の光を持つという以外、ほとんど実体が不明

なオーガ、最高執行官アムネシアである。

『アニミストか』

アーミタイルに乗る冷血漢、サードが上空から地に膝をついているアニミストを見下ろしている。

『団堂先生・・・久しぶり・・・・』

巨大なアトラスに乗る少女、フォースもまた、同じように高いところにあるアトラスの目を通して、アニミストを見下ろしていた。

『先生、なんかおもしろくなってきたんじゃない？』

さらに、アーリマンを駆る少年、ノイもまた、団堂の姿をみて愉悦の表情を浮かべた。

『ふふ、おもしろくなるのはこれからだ』

そして、その雰囲気からして明らかに他とはずば抜けた能力を有するオーガ、アムネシアに乗るのは、先生と呼ばれる袴田　馨（かおる）である。この男が、アムネシアを飛翔させることを合図に、周囲の様子が一変する。

あたりは急に静かになる。また、空中のアムネシアを中心に、高等執行官たちがそれを取り囲むようにして、同心円状のサークルを構成する。すると、それぞれのプロトオーガに埋め込まれたメンタルスフィアが共鳴を始める。

『外法典第９章の規定に基づき、我々はこれより、此の世界の破産宣告を申し立てる。その理由は以下に述べる。すなわち、此の世界

は、すでに債務超過の状態にある。激増し飽和状態にある人の精神を、この世界が受容し、維持することはもはや不可能なのだ。よって、われら申立人は外法典第９章の適用を申請する』

袴田は、天に向けて訴えた。大地がわななきはじめる。それとともに、ここにいる８体のプロトオーガが保有する、全メンタルスフィアが一斉に覚醒するのだ。

『では、まず此の世界を清算段階へ移行させてもらおう。再生計画は、同法２５６条の規定に基づき、申立人が思惟した再生計画に沿って行うものとする』

袴田の陳述中、膨大な量のメンタルポイントがそれぞれの精神球体から飛び出てきて、サークルの中心に集まっていた。そしてそれは、巨大な緑色の球体を形成して、上空へと昇っていく。

もちろん、アニミストからも大量の精神力が強制徴収されているが、団堂はただ放心状態であり、それを妨害しようとも、協力しようともしないのだ。彼はただ、今から起きようとしていることなどそっちのけで、下を向いて自問自答を続けていた。

『フハハハ、どうだ、団堂。これから再生計画が始まる。世界を支えている構成要素が次々と消えていくのだ。常識も、普遍的法則も全てが消えていくぞ。このチャプター９によって、世界はドラスティックな変化を遂げる。すばらしいではないか、フハハハハハハ！！！』

「・・・・」

周りの連中は明らかに興奮しているのであるが、団堂だけ取り残されてしまっている。すばらしいなどといわれても、彼にとってはもはやどうでもよいことなのである。

『さぁ、みなのもの。待ちに待った、チャプター9適用開始だ。我々が、世界を変える時がきたのだ。よりすばらしき、理想の世界へな！！』

天空に打ち上げられた巨大な精神球体が弾けとんだ。人々の魂の結晶であるこの巨大な塊が、チャプター9の代償として消えていく。これは世界の崩壊が始まる合図である。もっともそれは、まるで高層ビルから数本ある主柱のうちの1本をするっと抜き取るがごとくの破壊であって、目に見えて何かが音を立てて粉々になるような類型の破壊ではない。いわば、因果性の抹消なのである。特定の存在物そのものを因果律から消去してしまうのだ。チャプター9はこれを繰り返して、最終的には何もかもを破壊する。

チャプター9適用を承認完了。現時点をもって、世界は破壊されたのであった。

（三）

チャプター9の儀式を執り行っている地点の上空である。そこには、桃色をした兇悪なオーガが浮遊していた。

「なんかおもしろそうなことやってるかと思って来てみれば、プロトオーガがたくさんいるじゃん」

それは辰巳春樹の駆る、鬼女セアトである。プロトオーガが8体も集結しているという、極めて異様な光景を前にして、彼女はやけに興奮していた。

「あれが、リーさんのプロトオーガ」

その集団の中に、忘れもしない想い出のプロトオーガ、アスラがい

ることを確認する。あのオーガに関しては、辰巳は個人的にいろいろと決着をつけておきたい事があったのだ。

「ナイン、いや、団堂のオーガもそこにいるはず」

アヴァターとアスラを除いて、どれも見たことのないものばかりであったが、長いこと共に戦った団堂のオーガである。姿が変わったとしても、感覚でそれがここにいることは辰巳にもよくわかるのだ。

「なるほど、あの白黒のオーガがそうか。なんかちょっと、仲間はずれにあっているみたいだから間違いないわ」

懐かしい団堂の雰囲気を放つオーガがひとつだけあり、他と距離を置いていることから容易に判明できた。

「めちゃくちゃ強そうじゃん。今のセアトじゃ、ちょっと勝てそうにないか」

辰巳は、アニミストの瘴気に魅入られると、頭をボリボリかいた。

「でも、早く戦ってみたい。楽しみにしてるわ、団堂。あははははは！！！」

笑いだけ残して、セアトはどこかへと消えていった。

（四）

チャプター９の適用は、まるで何事もなかったかのように終わってしまった。世界の破壊というが、具体的に一体何があったのか、全

く分からないほどである。だが、それも当然である。因果の抹消ゆえに、その破壊に誰も気づくことはできないのだ。抹消されてしまったものが何であったかさえわからない。そもそも、そんなもの、はじめからなかったものとして世界は正常に動いているのだから。現に、辺りを見回しても、適用の前後を通してその風景に変化は全くない。だが、そうやって、世界は破滅の道をひた走っている。

『団堂、チャプター9が始まったぞ。これから、再生計画に沿って、債権者たちがこの世界の覇権を争うことになる。世界の支配権を与えられるのは、最後に残った債権者ただひとりだからな。そして、神は裏切り者の君にもその権利を与えてくれたようだ。感謝するがいい』

「俺は、そんなものいらない」

『そうか。ならばここで君を殺そうか？私にとっても、競合する債権者は、少なければ少ないほどいいのでな』

「そうしてくれ。俺はもう、生きる必要はない」

『ならば、望みどおりにしてやろう』

アムネシアは、その右手で、アニミストの頭部を掴む。

『・・といいたいところだが、お前を殺すのはもっと相応しい相手がいる』

袴田がそういうと、アムネシアはアニミストから手を放して、向こうへと行ってしまう。

「ま、待て！！」

『団堂、いまの君は殺す価値もないのだよ。せいぜい立ち直って、生き残ってくれたまえ』

袴田は、振り向くこともせず、そういってどこかへと消えてしまった。それに続いて、他のプロトオーガたちも消えてしまうのだ。ただ、アーリマンだけがそこに残って、膝を突いている弱弱しいアニミストを見ていた。

（恋人を失って、悲しみに打ちひしがれているのかな、団堂先生？その代わりに、アニミストの力を完全に引き出せるようになったみたいだけど、こんな状態のアニミストと戦ってもおもしろくないよな）

ノイは、拍子抜けした表情で団堂を見つめていた。アニミストは、目の前に敵がいるにもかかわらず、逃げようとも、戦おうともしないで膝を突いてしまっているだけなのだ。全くの隙だらけであり、今なら簡単に彼を殺しうる。

（でも、団堂先生ならきっと立ち直るよね。先生は、強い人だから。そのとき、僕も全力で戦ってあげるよ）

ノイは、根拠はないがこの男の性格上、すぐに立ち直ると思い、消えていってしまう。

（きっと、僕を殺しにきてね、団堂先生。僕、待っているから）

そして、この場にはアニミストと、アリスの残骸だけが残された。詩季はもう何もしゃべらない。もう彼に笑いかけてくれることもない。だから、ただ風の吹きすさぶ音しか、団堂の耳には入ってこなかった。

「詩季。俺は、お前の跡を追うことくらいしかしてやれない」

そう考えた団堂は、アニミストから降りて、アリスの残骸の辺りへと向かった。

（ここにいる）

そきほどメイデンが掘り起こしておいてくれたおかげで、団堂はすぐに彼女の遺体を見つけることができた。彼女の顔だけは、綺麗に残っているのが、せめてもの救いだった。

「ごめんな、詩季。なんで俺は、お前を信じてやれなかったんだ。お前が、俺を裏切るはずなんてないのに。俺は、馬鹿だよ」

団堂は、血まみれの彼女の上半身を抱き寄せた。彼女は安らかに眠っているようで、表情が一切変わることもない。

「まもるに言われたよ。死ねって。だから、俺も今から死ぬよ。それが、俺にできる懺悔だから」

団堂は、こめかみにハンド・ガンを突きつけた。

「心配するな。すぐに、行くさ」

「わんわんわん！！！！」

そのときだった、コックピットの中から勢いよく犬が飛び出してきた。そして、団堂のハンド・ガンに噛み付いて、それを持っていってしまうのだ。

「きゅうすけ・・・」

きゅうすけは、くわえた銃を捨て、ゆっくりと団堂の元に近づいて

きた。

「お前、なんで邪魔するんだよ!!」

きゅうすけは、何も応えないで、団堂ににじりよって来る。

「俺は、お前の主人を殺したんだ!憎いだろう、憎くてたまらないだろう!ならなぜ、俺の邪魔をする?それとも、お前が俺を噛み殺してくれるのか!」

きゅうすけは団堂の足元までくると、そこで立ち止まって、彼の顔を見上げた。

「ほら、殺せ!!お前にはその権利があるんだ!俺の首を噛み砕いてくれ!」

団堂はしゃがんで、きゅうすけの前に、その首を差し出した。

「くぅーん」

だが、その首に牙が立てられることはなかった。きゅうすけは、ただ、団堂の顔をなめまわしただけである。

「きゅうすけ。お前、こんな俺を赦してくれるのか。お前の主人を殺した、この俺を」

団堂は、どうしようもないほどに情けなくなって、涙を流した。それを、きゅうすけは丁寧に拭いてくれるのである。

「俺は、どうすればいいんだ」

答の代わりにきゅうすけは、団堂をしっかりとみつめ続けている。

「詩季・・・」

おそらく、きゅうすけは彼のことを激励しているように思えた。しっかりしろ、お前はこんなところで死んでいい人間ではない。そんなふうに、きゅうすけが言っていると思えたのだ。さらにいえば、それは死んでしまった詩季が、きゅうすけの身体を借りて団堂に伝えようとしているメッセージなのである。

「そうだな、お前は最後に言っていた。この世界を守ってくれって。お前の作りたかった世界を創ってくれって。なのに、俺は、お前の死を無駄にするところだった」

団堂は、涙を拭いて立ち上がった。

「俺はまだ死ぬことは赦されないんだ。袴田・・・、お前の望む世界など創らせてたまるか。お前の考えている世界は、人間が生きる気力を失っていく死んだ世界だ。そんなの、詩季の見たかった世界じゃない」

袴田は、以前から団堂に言っていた。彼が望む世界を。袴田の望む世界とは、極刑をもって人々を支配し、国民を日々競争させるのである。その結果として、エリートとそうでないものとに国民を二極化させ、エリートのみが幸福を享受し、そうでないものは破滅するという苛烈な競争社会である。たしかに、この慢性的な日本を再生させるには有効であると思われる。かつての団堂も、そんな袴田の意思に賛同した。だが、詩季という少女に会って、もっと大切なものを知った。東京陸運保険機構に入って、いろんな人が居ることも

知った。この世界の人間を二極化して平坦なものに押し込めるなど、決してできないのだ。
だから、袴田の求める世界は、詩季が願った世界とは相反するものである。そんなもの、断じて赦すわけにはいかない。

「チャプター9を生き残るのは、俺だ。そして、俺は、あいつの願った世界を必ず創って見せる。必ず」

団堂の目には、強い意思の焔が宿っていた。その視線の向かう先は、相棒、アニミストである。これを駆り、全てのプロトオーガを破壊して、袴田の野望を打ち砕くのだ。

「きゅうすけ。お前も一緒に行こう。お前が居てくれると、心強い」
「わんわん！！」

きゅうすけは、団堂の足元に擦り寄ってきた。

（詩季、俺は生きるよ。お前がつなぎとめてくれたこの命で）

第４２話　第１次再生計画

２１１０年１２月。チャプター９の適用が開始された。
この制度の窮極にある目的とは、まさに世界の構造を作り直すことである。もちろん、旧制度と新制度とは非両立の関係にあり、チャプター９によって新制度が設立されたならば、旧制度は消滅しなければならないのがこの制度において避けることのできない最大の問題である。そのため、旧制度を成り立たせていた個々の構成要素は、全て消滅することとなる。

「ナイン・・・。いや、もう、団堂曹士というべきかしら」

団堂は、弥生遼子の下、すなわち機構のプロトオーガ級戦艦へと帰還していた。つい先ほどまでの団堂は、この女も必ず殺してやろうと決意していたのだが、もうその気も全く失せている。

「ええ、団堂で結構です」

団堂は、気前よく応える。もっとも、好きな方で呼んでもらっても、彼にとって不都合はない。彼は、ナインであると同時に、団堂でもあることに変わりないのだから。

「曹士、ごめんなさい。私が、あなたにしたこと、謝って済む問題ではないわよね。だから、殺したかったら好きにするといいわ」

そういって弥生は、団堂にハンド・ガンを渡そうとした。ところが、彼はその手を突き返す。

「もういいんです。俺は、もう誰も憎しみたくない。そのせいで、

俺は、大切な人を殺してしまったから」

団堂は、自分の手の平を見つめた。彼には、その手に誰かの血がへばりついて映っているように思えてならなかった。

「詩季を殺したのは、あんただけじゃないわよ。私も同罪」

弥生は、団堂の気を察して、その痛みを分かち合う。彼女も、先ほど詩季の変わり果てた姿を目の当たりにして、嘆いたひとりであった。自分を呪いつけるような言葉を、彼女は何度も自分に対して吐いていたのだ。

「でも、あいつの死を悲しんでいる暇はありません。チャプター9の適用が始まりました。このままだと、恐ろしいことになります」

「その恐ろしいことって？」

「簡単に言えば、この世界の人間、全員が死にます」

「なによそれ、冗談でしょ？」

「チャプター9の目的は世界の改正です。そうなると、旧世界の人間は必然的に消滅することになりますからね」

「なるほど・・」

弥生は、団堂の表情を覗き込んできたが、彼の真顔を見る限りでは、それは冗談などではないということを理解してくれたようだ。

「それと、すでにチャプター9の犠牲者はすでに相当数出ていると思われます」

「どういうこと？」

「順を追って説明します。適用が開始されたからといって、直ちに世界がぬりかわるわけではありません。手続の重い制度なので、一定の緩衝期間が設けられます。それが、第1次再生計画です」

「第1次再生計画・・・。それと、相当数の犠牲者にどんな関係があるというの？」

「緩衝期間であるとはいえ第1次再生計画の段階においても、次々と世界が縮小されていきます。これは、チャプター9の申立人によって、進行具合を自由に設定できるのですが、それがいかなるものにせよ、多少なりとも犠牲者は発生することになります。今回の場合、申立人袴田は、まず『20歳以上の人間の消滅』を計画に入れていたと思います」

「20歳以上の人間の消滅？それって、80パーセント相当の人間を消去したのと一緒じゃない！あれ、20歳ってことなら、私も消滅していてもおかしくはないわよね？」

弥生は、目をぎょっとさせて、自分の足元を見た。

「いいえ、これには例外があります。袴田は同時に但書を設けて、『債権者にあたる者、又は30歳に満たない者で、存続させるに足る相当な理由のある者は消滅しない』としています」

「そうだとすると、私は、その但書のおかげで生かされている、というわけね」

弥生は、そっと胸を撫で下ろした。

「はい。厳密には、社長はこの戦艦の執行官ですから、『債権者』に該当するわけです。外法学の定義では、処分可能な魂を保有するもののことを『債権者』と呼んでいるんです。オーガの執行官であれば、膨大な人間の魂や精神を管理しているわけですから、当然といえば当然です」

「あら？私のこと、存続させるに足る相当な理由のある者とは言ってくれないのね」

「いえ、個人的にはそう思いますけど、それについての評価をする

前に、社長はたしか、３０歳を超えて・・・、痛っ！！」

弥生は、団堂の頭を思い切り叩いた。また、彼も頭をさすりながら、つい口を滑らせてしまったことを反省する。なお、債権者にあたる場合、年齢の要件はかからない。

「・・・私のことはともかくとして、西田なんかはもう、消えちゃってるわけか。あいつ、３０歳超えてるし、執行官でもないから」
「はい。間違いありません」

団堂は、弥生の表情に陰りを見つけたが、適当に嘘をいったところでぬか喜びを得させるだけである。だから、あえて断言した。

「でも、『あいちゃん』が残っていたのは、奇跡かしら」

弥生は、操縦席にいる田中に対して、冷めた視線を送った。よもや、このヘタレ秘書が存続させるに足る相当な理由のある者であるとは、全く思えないからである。

「それで、私たちが生き残るためには、結局どうしたらいい？」
「申立人袴田を殺すことが必要で、かつ、それで足ります」
「なるほど、最後の標的はあんたの最大の敵ってことね」
「はい。ただ、奴がどこにいるのかは、よくわかっていません」
「そう、困ったわね・・・、あら？曹士、ちょっとごめんなさい」

弥生の電話が鳴ったようである。

「亜季！あんた、無事だったのね。いったい、どうしたのよ？」

弥生は、桐生亜季が消えていなかったことを知って喜んだ。しかし、

彼女から連絡があるときは決まってよからぬことが起きるという経験則が存在したから、同時に不安も募る。

『先輩、横須賀基地が、現在オーガの襲撃を受けています。しかも、どういうわけか、兵力が１０分の１以下にまで減っていて、全然持ちません。どうか、助けていただけませんか？』

「亜季さん！」

弥生の電話から、聞き覚えのある者の切羽詰った声が聞こえた。その声を聞いた団堂は、反射的に駆け出した。

「ちょっと、曹士！」

「すいません、先に行っています」

団堂は、弥生の静止を聞き入れずに、そのまま飛び出していってしまう。

（亜季さんは、あいつにとって、誰よりも大切な人なんだ。彼女だけは、絶対に俺が守る。これができなければ、俺が生きる意味は無い）

団堂は、走りながら、ある外法規定を脳内に呼び起こす。

それは、顕現的虚物化という外法技術である。すなわち、自己とは区別された特定の客体に対して、虚物化を促すものであり、もっといえば、召喚に近い。ここで団堂が虚物化を促したのは、もちろん、相棒アニミストである。もっともここで、アニミスト全体を実体化させると、戦艦の廊下が潰れてしまうので、コクピット部分だけを顕現的虚物化する。あとは、そこに自分が入り込み、コクピットごと虚物に戻れば搭乗完了である。

「行くぞ、アニミスト！」
「わんわん」

アニミストは応えなかったが、コクピットに居座っていたきゅうすけが、代わりに吠えてくれた。

「きゅうすけ。お前も力を貸してくれ」

―横須賀基地―

日本の最重要防衛機能を陥落させるため、この基地には多数の下級オーガが集まっていた。人間の兵器を超える性能をもつオーガに対しては、数的有利で迎え撃つ必要があった日本軍であるが、チャプター9の影響でかなりの兵力が消滅してしまい、今やそれもかなわない。
そのような圧倒的不利な状況であるから、基地の機能を十二分に発揮することもできず、オーガの軍勢は留まるところを知らない。残された兵士たちも、もはや基地にまで防禦を及ぼすどころではなく、広大な敷地と防衛装置を備える横須賀基地であるが、カノン砲や地対空ミサイル発射装置などはことごとく破壊されてしまっている。

『中佐、お逃げください！』

桐生亜季は、自らもロボットを駆り、戦っていた。しかし、その損傷は著しく、これ以上の交戦は不可能という段階にまで来ている。

「私がここで逃げたら、消えてしまったお父様に申し訳が立ちません。それに、あの子にも・・」

彼女の父、桐生憲次郎は第1次再生計画の消滅要件に該当してしまい、突然にして消滅した。それは、彼女にとって理不尽以外の何者でもなかった。こんなことが可能なのは、外法の力以外に考えられない。父は外法を操るオーガによって殺されたのだ。それが、彼女にとってどうしても赦せなかった。他方で亜季は、存続させるに足る相当な理由のある者として生き延びたのであろう。

『わかりました。それならば、最後までお供いたします』
『私もです、中佐』
「ありがとう」

そういって、2体のロボットが、亜季のロボットを庇うようにして躍り出る。

(それにしても、なんていう数なの？おまけに、後方に控えている2体は高みの見物か。私たちも随分、なめられたものね)

そう、オーガの群れの奥にはさらに、プロトオーガ、アヴァターとアバドンが控えているのだ。彼らは、基地の制圧を手下に任せて、何もしていない。彼らからしてみれば、いつでもこのような貧弱な基地など壊滅可能なのである。しかし、それではあまりに早く決着がついてしまうから、気まぐれで人間たちを生かしておいて弄んでいるに過ぎないのである。だからもう、これは戦争などではないのだ。もはやただのゲームである。

「でも、私たちが逃げたら、誰も彼らを止めることができない。だからせめて、最後まで戦います」

亜季は強い決意を持って飛び込んでいった。

『中佐、危険です！！』

前方には黒いオーガ、ベルセルクがいる。それは旋風のように、のろい人間のロボットを翻弄する。

「あの子だって、がんばっているの！私も、負けられない」

亜季は、ベルセルクの動きを落ち着いて捉え、マシンガンを命中させる。しかし、その闇の力を前に、弾丸など、攻撃力をいとも容易く奪われてしまう。

『中佐ぁぁぁぁ！！』

「きゃぁ！」

亜季のロボットは、護衛の体当たりによって飛ばされる。

「古田中尉！！」

体当たりした護衛のロボットには、ベルセルクの回し蹴りが叩き込まれる。それによって、上半身と下半身が綺麗に分断させられてしまっていた。

『中佐、必ず生きて・・・』

そして、ベルセルクのとどめの踵落としである。斧と化したその細い足の強烈な一撃は、コクピットごと、ロボットを潰す威力である。

「中尉・・・。なんてこと・・・」

亜季は、自分の無力さを悔やんだ。皮肉なことに彼女の中佐という

エリート勲章など、いまはもう何の価値もない。それどころか、自分の無能さの箔つけに一役かっているとさえ言ってもいい。

「私に、もっと力があれば、中尉はこんなところで死ななかったのに・・」

亜季は、黒いオーガをにらみつけた。そして、マシンガンを構える。こんな兵器など無力であることは重々承知している。だが、何もしないわけにはいかないのである。

「もう、鬼でも何でもいい。私に力を下さい!!」

その時である。白と黒の槍が3本ほど、戦場を飛びまわった。それは、赤い宝玉の輝きを残しつつ、縦横無尽に駆け回る。

「これは?」

そして、そのうちの1本が、亜季の前方にいるベルセルクの腹を貫通して、上半身を消し飛ばしていった。

「亜季さん!!」

見たことのないオーガである。しかし、自分の名前を呼ぶ聞き覚えのある声。

「ナイン君?」
「はい!あなたを助けに来ました」
「ナイン君、助けてくれるの?」
「はい。あなたたちは下がっていてください」

亜季は、かつてのナインと同じ雰囲気を感じることができて、喜びの表情を浮かべた。

「ニルヴァーナ！前方の集団を一気に消滅させる」

団堂がそういうと、３つの槍は、アニミストの下へと戻る。すると、こんどは非常に細かい弾へと分裂を開始し、同じような弾丸が無数に作られる。

「吹き飛べぇぇぇぇぇぇ！！」

そして、無数の弾丸と化したニルヴァーナは、前方の大軍勢へ向けて一斉に放たれるのである。それはまるで巨大な雹（ひょう）が空から降りそそいでくるような光景である。一個一個の粒が、敵に喰らいついて、吹き飛ばしていく。しかも、それが広範囲に拡散し、この戦場に生き残っているあらゆるオーガに喰らいついていくのである。

「これが、ナイン君の本当の力なのね・・」

亜季は、前方のオーガたちが、ばたばたと倒れていく光景を見て、圧倒されていた。まさにこれこそが力なのである。世界を変えていくほどの大きな力。

「来る！」

だが、アニミストの一斉射撃をぬって、２体のプロトオーガが接近する。今まで手持ち無沙汰にしていたあの２機が、ようやくにしてその重い腰を上げたのだ。

『待っていた！お前を待っていたぞ、団堂！！シックスの仇だ！！』

復讐に燃えるファイヴは、殺意をむき出しにして襲い掛かる。

『団堂。貴様は此処で死んでもらう』

そして、アバドンに乗る男、セヴンもそれに続く。

「アヴァター、それにアバドンか。ちょうどいい、ふたりまとめてこい」

『執行官2体を敵に回して、よくそのような減らず口が叩けるものだ』

セヴンは、低い声でそういうと、アバドンの両手から鋭利な爪を伸ばした。

『団堂、我らのコンビネーションを知らないわけではないだろう？お前は、私たちに勝てないのだ』

そういって、アヴァターは手に持っている巨大な斧からマイクロ・ブラックホール弾を数発発射した。それを、アニミストは巧みに回避していく。

『甘いぞ、団堂!!』

しかし、影から忍び寄るようにして、夜の悪魔アバドンは、アニミストの背後に実体化する。

「ち・・」

アバドンは、その長く伸びた鋭い爪で、アニミストの肉を切り裂こ

うとする。団堂は、これを直ちに、大剣としたニルヴァーナによって受け止める。

『後ろがガラ空きだ』

だが、アヴァターが瞬時に虚物化による移動で、現れる。いまや、アバドンとアヴァターでアニミストを挟み撃ちにしているようである。

『死ね！』

アヴァターがその斧で一刀両断にする。しかし、手の空いているニルヴァーナが盾状になり、それを確実に跳ね返す。

「隙だらけなのはお前らなんだよ」

アニミストの肩にある、第３、第４の腕が伸びては、両機を力任せにぶん殴るのである。それによって、アヴァター並びにアバドンは、地に叩きつけられる。

『く・・』

しかし、両機は直ちに体制を立て直した。

「ファイヴ、セヴン。お前たちも強くなったな」

団堂は、かつての教え子の成長を感じて、なんだか懐かしい気持ちになった。

『貴様に言われたくはない！』

もっとも、教え子の連中は団堂がかつての恩師であることも忘れているようである。彼らからすれば、この男を先生と呼んでいた過去を抹消したくてしょうがないほどである。

「だが、もう遊びは終わりだ。これで俺がお前たちに教授するのも最後にしよう。死ぬ気でこい・・・」

アニミストからとてつもない殺意が溢れ、辺りは渾沌に包まれる。

『これが・・。アニミストの力なのか?』

ファイヴは、恐れを隠せなかった。なんだかんだで、この男は唯一、袴田に対抗しうる存在であることを再認識したのである。

『団堂、やはり貴様は危険だ。命に代えても此処で貴様を止める』

そのときセヴンは、死を覚悟したのである。彼はあくまでチャプター9を、全て滞りなく完遂するためだけに存在するのであるから。

第43話　the pledge

横須賀基地を埋め尽くしていたオーガの集団が一掃され、ここにおける戦場の関心は専ら団堂の駆るアニミストに対して向けられると、桐生亜季はすっかり部外者として戦場の枠外に押しやられてしまっていた。今にも崩れてしまいそうなロボットに乗ったまま、彼女はただ呆然と団堂曹士の戦いを見守っていた。

この男こそ、彼女にとってかけがえのない唯ひとりの妹を殺した男である。しかし、それと同時にこの男は、その大切な妹が命を賭けて守った男でもある。本来ならば、複雑な感情が亜季の中を交錯するはずなのであるが、不思議なことに彼女は冷静な目で団堂を見つめていた。というのも数時間ほど前に、彼女のもとへと妹からの最後の電話が入ったからである。

内容は、謝罪であった。

『ごめんね、おねぇちゃん。私、最後の仕事に行ってきます』

妹は、仕事に行く前に、決まって電話ないしメールによる出発の意思表示をしてくれる。心配性の姉を安心させるには、定期的なコミュニケーションがいたって有効であることを妹は認識しているのだ。だから今回も同じように、電話が来たのである。しかし、その内容はいつもの定型文のように、形式めいた出発の意思表示とは全く異なっていた。だから、そこには妹の強い覚悟が現れていることを姉は直感したのだ。

『団堂・・いえ、ナイン君を助けに行くの？』

もしやと思い、亜季はおそるおそる尋ねる。

『うん』

だが、妹は躊躇することなく答えた。

『しぃ、やめなさい。彼はもう、誰の手にも止められないわ。留置所から脱走して、見たことのないオーガに乗って東京中を暴れまわっているのよ』

そのとき、姉は団堂が脱獄し、その団堂の駆るアニミストが荒川区近辺から綿密な破壊活動を開始しているという情報を掴んでいた。当然に、そのような危険な場所に妹を向かわせるはずもなかった。

『私のせいなの・・・。きっと、ナイン君は私に捨てられたと思って泣いている。だから私は、死んでも彼を取り戻さなければならないの。もちろん、ナイン君が私を赦してくれる保証はないよ。ナイン君、私に乱暴するかもしれない。ひどいことを言うかもしれない。でも、私は彼を助けたい』

『本気なの・・・しぃ？』

亜季は、半ば自棄的になってしまう。こうなってしまった妹を止める術は存在しないことを姉はよく知っているからである。

『まったく、昔からあなたは、一度決めるとテコでも動かなくなるから、止めたところでどうせ行ってしまうのでしょう。でも、しぃはそれでいいの？本当にそれで幸せなの？』

さらに亜季は、妹と会話することもこれで最後になるであろうことも直感していた。だから、言っている途中からとてつもなく悲しくなってくる。

『おねぇちゃん・・・』

亜季は、心の動揺を必死で隠すが、感覚の鋭い妹にはそれも筒抜けのようであった。

『おねぇちゃんね、あなたが何て不運な子なのだろうと不憫でしかたないのよ。なのにそんな辛い役回りを、あなたがひとりで負う必要なんてない』

姉の心の内を妹は黙って聞くと、数秒間沈黙してしまう。どうやら言葉を選んでいるらしい。

『ううん、私は幸せだよ、おねぇちゃん。今までも、そしてこれからも。これも、おねぇちゃんがいてくれたからだよ。だから、私は全然大丈夫。むしろ、ここでナイン君のところへ行かなかったら、きっと後悔すると思うの』

妹は、全然悲しんでなどいなかった。むしろ、彼女から発せられる

声の活き活きとした感じと言えば、かつてないほどのものである。
それにもかかわらず、姉である自分が泣いてしまってどうするのだ。
そう思って、亜季も心を決める。
『馬鹿な子ね・・。必ず、ナイン君を取り戻すのよ。桐生詩季の名に賭けて。じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい』
そして亜季は、いつもと同じように妹を送り出す定型文を述べた。
『うん、ありがとう。おねぇちゃん。行ってきます。そして・・・』
『・・・・』
『さようなら』
そして、それが亜季の聞いた妹の最後の言葉であった。
現在、妹の所在がどうなっているのかは、まだ誰からも聞いてはいないが、状況から察するに、もうこの世にはいないだろう。団堂がこうして生きているのに、彼女がいないという状況はそれこそ異常なのである。仮に生きているのであれば、一緒にここへ来たに決まっているから。
だが、それでよい。これが妹の望んだ結果なのだ。幸福の価値を何処に見出していくのかは人それぞれである。彼女は、その魂の命ずるままに散っていったのだ。そして、妹の願いどおり、こうして団堂はあの頃のナインのまま、ここに戻ってきている。妹の祈りが通じたのだ。これだけで天命冥利に尽きるというものだ。それだけではない。妹の助けた彼は、団堂曹士としての力を取り戻し、いままさに亜季のことを助けに来てくれているのだ。妹は、結局のところ、ナインを取り戻すことはもちろん、窮極的には姉のことを助けたかったのである。いつも目の不自由な妹を守っているのは自分であると思っていた亜季であったが、実際、亜季は彼女に守られていたのだ。
だから、亜季は団堂を憎みはしない。彼こそは、死んだ妹の遺志を継ぐ者。妹がその命を託して、つないだ願いなのだ。そこにはいまもなお、妹の魂が息づいているのだ。
(そうよね、しぃ。まだ、あきらめるのは早いわよね)

団堂曹士。彼こそが、滅びへと向かいつつあるこの世界の最後の希望。あの碧き輝きは、絶望の淵から生まれいずる一筋の救援光なのである。確実な滅びの運命を決定付けられてしまっていた人間たちに最後の足掻きをあたえるのだ。

（しぃは、本当にすごい人を目覚めさせてしまったのね。だから、安心していいわ。彼が、必ずこの世界を守ってくれるから。あなたの見たかった本当の世界を、守ってくれるから）

そうして、亜季はもう一度、アニミストを見る。カオスの権化ともいうべき異形のオーガ。しかし、其処から放たれる威厳は、愛する家族を身を粉にして守る父のような厳しさと優しさに満ちている。アニミストはもはや邪神ではない。闇をかき消す焔のような怒りそのものである。熱き血潮を表象したようなこのオーガは、まさに鬼神である。その圧倒的な怒りの力で、森羅万象あらゆる物体を灰塵に帰すのだ。

「行くぞ！アニミストォォォォ！！」

亜季の胸に団堂の咆哮が響き渡った。

他方、相対する2体のオーガ、アヴァターにアバドンも、天に咆える。憎たらしい最大の敵を排除するために。

「次元解放。エネルギー流入開始。法３１４条、要件１クリア。同要件２クリア。行けるか、アニミスト？」

３つのニルヴァーナが、アニミストの胸部メンタルスフィアへと集結した。それら３つの宝玉が、本体へと更なる力を注入する。アニミストの全身が青き焔に包まれる。自分へ向けられた死者達の怒りを再構成し、至高のエネルギーへと転化することで絶大な破壊力を得るのだ。冥府の怨念を一身に背負うこのアニミストであるからこそ生み出せる、圧倒的パワーである。

「ＯＫ、上等だ。アニミスト、ネクロマンサー・システム、ハイパーバースト。『Ｒｅｑｕｉｅｍ　Ｃ．Ｒ．Ａ．Ｉ．Ｎ．Ｅ．』を執行する」

団堂は、冷静に手続を処理していく。すると、アニミストの胸部か

ら、許容不能な量のエネルギーが噴火する。著しい空気の歪みによって、それにいち早く気づいたセヴンは、いったんそこから逃れようとする。セヴンの怒鳴るような、あるいは叫ぶような声が、空を木霊する。しかしながら、それを言い終えるや否や、極太のレーザー状のエネルギーが一瞬にして辺りを埋め尽くす。それは天から投げられし光の剣である。それは相当な大きさのある剣であり、発射元のアニミストの5倍もの太さのある超巨大レーザーなのであった。まさにアニミストと団堂が背負っている死者たちの怒りの総量が、この光の剣を形作っているのであろう。

『がぁぁぁぁぁぁ！！だ、団・・どぉ・・・・』

アヴァターは逃げ切れなかった。アヴァターのその分厚い鉄壁を楽々突破して、その巨体は光の剣によって包まれていく。

『ファイヴ！！うぉぉぉぉ！！』

他方、とっさの判断で致命傷を避けたアバドンも、付随する波動に呑まれ、その悪魔の翼を奪われてしまう。最高執行官との格の違いを見せ付けられるとともに、翼を奪われたアバドンは戦意を喪失せざるを得ない。数秒前と比較して、明らかに手足がひょろひょろに感じられてしまうし、長く伸びた爪もだらしない。

だが、そんな状況に置かれたアバドンに対し、追い討ちをかけるように3本のニルヴァーナが接近する。翼を失い、満足な飛行もままならないため、アバドンに逃げ場はない。どうやら、詰んでしまったようだ。

『よく聞け、団堂。お前は確かに強い。しかし、その程度の実力では、先生はおろか、高等執行官にすら勝てないだろう。彼らが来る前に、せいぜいもっと強くなっておくんだな。フハハハハハ！！』

現状に諦めてしまったセヴンは、狂気に駆られるように言葉をつなぐ。

「忠告ありがとう。セヴン・・」

団堂が言い終えると、一斉にニルヴァーナはアバドンに突き刺さっていく。大量の血が噴出し、辺りを赤く染める。それは空に舞う一

輪の薔薇のように花開いていく。
「新しい世界で、また会おう」
そして、ニルヴァーナがエネルギー収縮を引き起こして、小さなブラックホールのようになり、周囲の物を見境なく次元の穴へと呑みこんでいった。当然に、その中心にいるアバドンも全てを呑み込まれて完全に消滅した。
他方、ちょうど良いタイミングで、極太のレーザーも落ち着いてきて、攻撃の結果が明らかになりつつある。その直撃を徐に受けてしまったアヴァターも、アバドン同様、綺麗に消滅してしまっていた。
「終わったか」
団堂は、静かになった戦場を見渡しては、一息ついた。そして再び空を見ると、向こうの方から、機構の旗艦が近づいてくることを視認できた。
『曹士、もう片付いたの？』
弥生遼子からの通信である。彼女はまだ、団堂が交戦中であると思っていたのであろうか、戦場が綺麗に片付いてしまっている状況を見て、拍子抜けしてしまっている。
「はい。桐生中佐も無事です」
団堂は、生き残った集団を指差した。
『わかったわ。ひとまず、彼女と合流しましょう。伝えなければならないことがあるからね』
弥生は、暗い顔をして言う。その伝えなければならないこととは、もちろん、妹の死についてである。
「はい」
団堂は、亜季に殺されるかもしれないという不安があった。しかし、それも受け入れるつもりである。自分はそれだけのことをしたのだから、死んで当然であるし、その覚悟も決まっている。だが、できればそうならないことを願っていた。まだ、やらなければならないことがたくさんあったから。

団堂と弥生は、亜季を中心として生き残った防衛省の人間たちと合流した。焼けて崩壊してしまった基地の中でも、比較的見通しのよい場所に彼らは集まっていたのである。

「みんな、大丈夫？」

弥生は、先立って、やつれきってしまっている軍の連中にねぎらいの言葉をかける。他方、その連中は、弥生と団堂を見るなり警戒心を解くことはなかった。特に団堂に限っては、連中は鋭い目つきで彼のことをにらみつけているのである。

「団堂。貴様、どういうつもりだ。お前のせいで、俺たちは・・・」

そのような趣旨の言葉が、連中から口々に飛び交ってくるのである。他方、団堂は甘んじてその言葉を受け止めて、何も言わなかった。

「皆さん。おやめください」

しかし、亜季が連中を代表して前に躍り出ると、飛び交っていた文句は収まってしまった。

「亜季さん・・」

亜季は、真剣な表情で団堂の前へ歩み寄る。そして彼女は、団堂の正面に立ち、頭ひとつ分高いところにある彼の目を見た。彼女と目を合わせた団堂は、独特の深い赤の瞳に吸い込まれそうになる。

「久しぶりね、ナイン君。いえ、今はもう団堂曹士君ね」

亜季は、風でなびく前髪を抑えながら、団堂を直視する。彼女は、もう全てを理解しているように団堂は思えた。それならば、早く自分のことを殺人鬼、鬼畜生などと言って罵ってほしかった。この女性にそんな綺麗な目で直視されることは、団堂にとって、かえって辛い時間であったからである。

「亜季さん。そんなことより、俺は・・・」

団堂は、申し訳ない気持ちと自己に対する嫌悪感で一杯になり、目を合わせられなくなった。

「言わなくても分かっているわ。あの子はもう死んでしまったのでしょう？」

亜季はやはり、淡々とした口調で問う。それは何もかもを悟った人

間が発する、落ち着いた口調である。それゆえに、彼女は既に問いの答を知っているのであろう。
「・・・はい、俺が殺しました」
「そう・・。わかったわ」
亜季は、静かに目を閉じた。
「本当に申し訳ありません。俺のことを殺したいのであれば、今ここで俺を・・・」
団堂が言っている途中で、亜季は思い切り、彼の左頬を右手で平手打ちにした。
団堂は少しよろめいては、驚いた表情をして、亜季を見つめ返した。
「ごめんなさい、曹士君。でも、簡単に殺してくれなどとは言わないで。あなたは、あの子が命を賭けて守った人なのよ。なら、私があなたを殺せるわけがない。そんなことをしたら、あの子が報われないもの」
「亜季さん・・」
団堂は、亜季の気持ちを理解し、熱く血の騒いできた左頬の痛みを改めて実感した。
「あなたは生きなければならないの。生きて、生きて、死よりも辛い戦いに臨まなければならない。どれほど傷を負ったとしても、どれほど人に憎まれようとも、あなたはそういった苦しみと向き合っていかなければならないの。それが、あの子を殺したあなたに科せられた罰なのだから」
「俺の、罰・・・」
団堂は、熱くなった左頬に手をあてがって、亜季の言葉に耳を傾ける。
「そして、この世界を救えるのもあなたを置いて他にはいないわ。だからこそ、あの子は団堂曹士に全てを賭けた。あなたは、あの子にとっても、私にとっても、希望そのものなのよ」
そういって、亜季は団堂の両手を取った。死者たちの血でべっとりとしたその手を、亜季はためらうことなく強く握り締めるのである。

「・・・」
「団堂君。あなたは、この世界の全てのためにその身を粉にして戦いなさい。それで私はあなたを赦します」
「亜季さん・・・。こんな俺を・・・」
団堂は、亜季の強いまなざしをもう一度見る。その真剣な目から放たれる赤き色彩は、見る者の心の穢れを浄化するほどである。
「厳しいことを言ってごめんなさい。本当は、あなたも私と同じくらい悲しくてしょうがないでしょう?それなのに、団堂君ひとりだけに責任を押し付けるようなことをしてしまって・・・」
「構いません。是非やらせてください。そのために、俺とアニミストはここにいるんです。悲しむのは、全てが片付いてからで十分ですから」
団堂は、彼女に握られたままの手を、逆に自分から強く握り返して迫る。そんな勢いに押されて、亜季は愛らしい笑顔を浮かべた。
「無理しないでいいのに。今だけは特別に、私をあの子だと思って、私の胸の中で泣いてもいいのよ?」
そういって亜季は、1歩、団堂に近づいてきて、抱き寄せようとした。
「な、なに言ってるんですか?そんなことできませんよ」
しかし、団堂は驚いて3歩ほど後ずさりしてしまうのである。
「あら?残念・・。やっぱり団堂君はあの子のじゃなきゃ・・・嫌なのね」
亜季は、いやらしい上目遣いで団堂を見つめる。
「いえ、そういうわけでは・・」
対して、団堂はあからさまに慌てふためく。
「うふふふふ」
亜季は、不敵な笑みを浮かべた。
「コラ、亜季。曹士をいじめるのはやめなさい。用件が済んだのなら、次の話に入りたいんだけど」
そして、ちょうどいいタイミングで、弥生がいらいらした表情でふ

たりの間に割って入る。
「あ、先輩。申し訳ありません。ついつい、あの子が羨ましくなって、調子に乗ってしまいました」
亜季は顔を赤らめて、浅く一礼した。
「ほんと、あんたは相変わらずね・・」
弥生は、眉をしかめながら後輩の不可思議な挙動をみつめる。
「先輩も、お元気そうでなによりです」
そんな姉貴分である弥生の不機嫌をよそに、亜季は再び一礼した。
「私のことはどうでもいいんだけど・・あんたたち、これからどうするつもりなのよ?あんたさえよければ、ウチで保護してもいいけど」
そういって弥生は、後ろにとめてある機構の戦艦を指差した。
「先輩、よろしいのですか?それは非常に助かります。横須賀基地はもう使い物になりませんので、先輩の艦なら兵士たちも安心して休息を取ることができるようになります」
「いいのよ、あんなに大きいのに、私たち3人だけじゃ寂しいからね」
弥生は、にぎやかだった頃の機構を思い出しているのであろうか、暗い表情を浮かべていた。
「先輩、いろいろとご迷惑をおかけします」
そして亜季は、深くお辞儀をするのであった。

沖まもるは、ひとりで鬼女メイデンを駆り、東京都にある日比谷公園に訪れていた。霞ヶ関の官庁街からほど近いかつての日比谷公園は、都民はもちろんのこと、時には役人たちの憩いの場として広く利用されていた清閑で自然豊かな場所であった。しかし、現在では桃色をした呪いの霧に包まれ、死者が練り歩くような修羅の世界と化している。しかも、無数の下級オーガの死骸が大地に横たわっているが、これはメイデンによって惨殺された者たちのようだ。
「足りない。足りない。こんなんじゃ全然足りない。団堂のあのオ

ーガを斃すには、これっぽっちのメンタルスフィアじゃ全然足りない。もっと、大きなメンタルスフィアを取り込まなきゃ、団堂を血祭りにあげることはできない」

まもるは、メイデンの出力の低さゆえ、ぶつぶつと不満を漏らしていた。

「もっと、たくさん殺さなきゃ」

まもるは狂気に奪われた瞳で、前方を見る。そして、獲物を求めて霞ヶ関を通過し、桜田門の方へと向かう。

「なんだろう?あの巨大な建造物・・・」

ところが、ある程度の歩を進めると、霞ヶ関の崩壊した官庁街を見下ろす巨大な建造物を目にした。それは、１００メートル以上はあり、非常に不自然な形で、崩壊した街の真ん中に聳え立っているのだ。

「ちがう、あれはオーガ」

だが、メイデンのメンタルスフィアが強く共鳴している。あんな巨大なものを同じオーガとは思いたくもないが、メイデンがしきりに警告を促している以上、あれは第一級の危険なオーガとみて間違いないのである。

「ちょうどいいわね。あいつのメンタルスフィアをもらえば、団堂に勝てるわ!」

あの巨大なオーガからは、桁外れのエネルギーを感じられるのである。もし、あの膨大なエネルギーを自分のものにできれば、団堂の乗るオーガにも十分に対抗できる。そう思ったまもるは、真っ先にその建造物の元へと駆け寄ることにした。

第４４話　激動の大巨人

日比谷公園を抜けて、霞ヶ関の官庁街を通過すると、日本国天皇の城である皇居を守るように、桜田門が厳格に構えている。桜田門は数年ほど前の建て替えにより、鋼鉄の堅牢な門へと変わっており、決して名ばかりの門ではない。もちろん、現在の皇居に天皇家は誰一人として残ってはいないので、現在は全く門として機能していない。この辺一帯は、ユグドラシルを始めとする尖兵隊による襲撃を集中して受けたため、人の住むことのできない地獄へと変えられてしまったからだ。だが、不思議なことに、桜田門だけは綺麗に残されており、誰もいない皇居を孤独に守り続けているのであった。その堅牢なる桜田門の手前、山のようにずっしりと構えた巨大なオーガがいた。それは高等執行官アトラスである。地面を這いずり回っている手下のオーガなどとは比べ物にならないほどの巨体であり、その太い腕一本で、下等オーガのプレス加工が可能である。また、その巨大な足に踏みつけられたのならひとたまりもないであろう。それにあの血の通わない虚ろなひとつ目。その意味では、いままでで最も鬼らしいプロトオーガといえる。

「これも読んだ・・・。飽きちゃった・・・」

しかし、これに乗る執行官のフォースは、ふっくらしたボブヘアの小さな女の子である。しかも、その身には涼しげな水色のワンピースを召している。また、コクピットの中は本で散らかっていて、終いには腰掛け部分にピンク色のクッションまでおいてある始末である。そのため、とてもプロトオーガのコア部分であるとは思えず、完全に女の子のプライヴェート・ルームとなっている。その意味では、質実剛健なイメージの名の下にある大巨人、アトラスの執行官として、この少女は最も似つかわしくない。

突然、アトラスが何かに気づいた。ＯＳが、特異なメンタルスフィアを検知したらしい。

「なにかくる・・・」

それは地上を移動しているようだ。アトラスの目は上空１００メートル地点にあるので、大地の様子を窺うのは少し骨の折れる作業である。しかし、アトラスの目に対象は映った。それは人間の作りし、不完全なオーガ。分厚い鎧に身を包んだ、真正オーガの紛い物。

「ここまで来れた、ということは・・・そこそこ強い、かな。アトラス・・？」

この桜田門周辺には、ベルセルク級の下等オーガをこれでもかというほどにばら撒いていたのであるから、並みの兵器ではここまで来ることすらかなわないであろう。しかし、あの紛い物はここにいる。それは、一定程度の強さの証明である。

「いくよ、アトラス・・」

アトラスは起動した。その巨大な両腕を天へと掲げて。

まもるは、前方の巨大物体が動き出したのを確認する。どうやら気づかれたらしい。

「これも、プロトオーガなのね」

彼女も始めはただの建造物ではないかと目を疑ったが、燃え上がるように輝くメンタルスフィアを目にすると、あれがオーガであると

思わずにはいられない。そもそも、戦艦ですらオーガとなりうる時代である。１００メートルを超す、超巨大オーガがいてもなんらおかしくはないのだ。

「いくよ、メイデン。早速、あいつを殺す」

メイデンは飛翔した。アトラスの頭部にあたる高さまで。その間に、外法エネルギーランチャーに必要なエネルギーをチャージする。一気にその頭を潰して、機能を停止させるのだ。このオーガはただ大きいだけの木偶の坊。メイデンでも十分に斃せる。

「発射」

メイデンの胸部には、巨大なエネルギー球体が形成される。これだけでかいエネルギー弾であるうえ、的もでかい。精密射撃などせずとも、これをはずす余地はまずない。だからまもるは、ためらうことなくその頭部目がけて、必殺の一撃を叩き込む。

「死ね！」

だが、その体長１００メートルもある超巨体は、一瞬にして消える。そのため、巨大な外法エネルギー弾は、目標を失い、どこかへと行ってしまった。

（こいつ、この巨体全てを虚物化できるの？）

さすがのまもるも、虚物化という選択肢を考えてはいなかった。そもそもこれほどの質量がある巨体を消すということは不可能であると思っていたから、検討の余地もなかったのだ。

「いきなり随分なご挨拶ね・・・・。紛い物さん・・・・」

フォースは、ニコリと笑った。だが、そんな彼女の満面の笑顔を、まもるが見ることはない。アトラスは、既にメイデンの背後にいるのだ。しかも、アトラスのその巨大な腕がメイデンの真上にある。

「無礼な人は、さようなら・・・・」

フォースは、まもるに向けて手を振った。最初で最後のお別れの合図である。それと同時に、アトラスの巨大な腕が振り下ろされて、メイデンを大地に叩きつける。それはまさに、大地を砕く鉄槌である。アトラスがメイデンごと大地を粉砕すると、大地震が発生し、巨大な衝撃波とともに辺りの建物を揺るがす。

「もう終わり・・」

フォースは、霞ヶ関にまたひとつ作ってしまった巨大クレーターを眺めて、暇つぶしが終わってしまったことを少しだけ嘆く。アトラスの鉄拳はシンプルだが、下級執行官ですら一撃で粉砕できる攻撃力があるので、ましてやそれ以下の紛い物が生きているはずなどなかった。もう少し手加減をして、遊んでいればよかった。フォースは、そのように後悔したのであった。

「つまんないの・・・・」

フォースは口を尖らせてすねた。

気づけばまもるは、暗闇の中にいた。

周りを見渡したところで黒一色の暗黒の世界である。

何も見えないし、何も感じない。闇が何もかもを喰らっていってしまうのだ。

（私、死んでしまったの？）

しかし、死んでしまった人間が自分に死んだかどうかを訊くことはおよそ考えられないであろう。自分はまだ自分を意識できる。自分の心の動きを実感できる。

ところが、暗い闇の世界に放り投げられていたと思っていたまもるの前に、ある人間の姿が映し出される。

（何で、よりにもよって貴方なの？）

まもるの目の前には、彼女が大嫌いな養父の姿があったのだ。

幼い頃より両親を亡くし、身寄りのない彼女を引き取ったのが、遠い親戚にあたるこの養父である。引き取ってくれたこと自体、感謝していないわけではないが、なにせこいつは最低の男であった。

まもるは、両親からかなりの財産を相続していたので、始めのうちは養父に可愛がってもらってはいた。たまに訪れて来る、養父と内縁関係にある女も、彼女の面倒を見てくれていた。

もっとも、それはまもる自体が、お金に見えたからであろう。実際に、養父は親権を濫用し、まもるを代理して、相続財産を勝手に処分し、金に換えては博打に明け暮れていたのだ。

もちろん、そんな浪費生活がいつまでも続くわけもなく、ほどなくしてまもるの相続財産も底を尽き、養父には煩わしい養子の扶養義務だけが残ったのだ。もともと定職にも就かず、のらりくらりとやってきた養父は、金の無い苛立ちを虐待という形でまもるにぶつけるようになる。また、はじめは優しかった内縁の女も、同様にまもるを虐げ始めた。

この連中は、ろくに養子を養うこともせず、しかもその養子を酷使

しては金を稼がせ、その金もろくでもない使途へ消していってしまう。しかも、逆らえば殴られた。そんな毎日だった。
そのため、学校にも満足に通うことができず、友達もいない。なにもかもが腐った世界であった。

（何で、私だけ・・）

横を通り過ぎる同い年くらいの女の子が、優しそうな母に手を引かれていて、とても羨ましかった。
彼女の楽しみといえば、養父が使い終わったマリファナの残りを使用して現実逃避することと、寝る前に養父と内縁の女を殺すシーンを思い浮かべることだけであった。

（おとうさん。おかあさん・・）

まもるは、貧乏でも、普通の幸せが欲しかった。優しい父と母がいて、学校に行けば友達がいて、そういう誰もが享受するはずの普通の生活が欲しかった。
だからある日、まもるは、養父と内縁の女を殺害することを計画した。
方法は単純に放火である。ふたりが2階の寝室で寝静まったあと、一階のリビングに2リットルほどのガソリンを撒いて、火をつけるだけだ。何においても計算高いまもるは、証拠を残さない。確定的な殺意と、その強い覚悟は、彼女を躊躇わすこともなく、計画を狂わせることもない。さらにおそろしいことには、彼女は自分の焼け焦げた死体が必要だったので、適当にそこらへんにいたムカつく少女を殺して、自分の代わりに燃やしたのだ。
次の朝、これによって彼女の思惑通り、この事件は一家全員が死亡した不幸な失火であるとして処理された。ただでさえ忙しい警察は、

放火事犯であるといえない限り、検視が困難な焼死体をわざわざ調べることもない。外形上、親子3人の遺体が消失した家屋からちゃんとでてくるのだ。だから、まもるが訴追を受けることもない。仮に訴追されるにしても、当時13歳で刑事未成年である彼女は、責任能力が阻却され、無罪であるし、せいぜい少年事件として処理されるにすぎない。もっとも精神上問題有りとして、数年間、精神病棟に押し込まれる危険はあったが、今の生活よりははるかにましである。

そのあとの彼女は、沖まもるという偽名を使って、偽りの世の名を必死に生きた。だが、すでに本当の地獄を経験した彼女にとって、この世の中はそう辛いものではなかった。自分が生きるだけに必要な金は簡単に稼ぐことができる。しかしながら、必死に生きても、彼女のもとに幸せが舞い込むことはなかった。幸せは金では買えないのだ。

そして、まもるが18歳になって、はじめて親友と呼べる人と出会えた。

その人は、桐生詩季といった。

彼女は、まもるにとって光そのものであった。3人もの人間を殺め、家を燃やし、名前を偽り続けた大罪人であるまもるを、彼女は温かく接してくれたのだ。こんなまもるを、まるで自分と同じように大切に扱ってくれる。

彼女がいたから、まもるは毎日が楽しかった。これが幸せというものなのだと、彼女は理解した。

しかし、それも長くは続かなかった。団堂曹士が、大切な親友を殺したから。

あの男は自分から幸せを奪ったのだ。

足掻いて、足掻いて、ようやく手にした一筋の幸せを、あの男がぶち壊しにした。

これでまた、昔の孤独な自分に逆戻りだ。もう、自分を幸せにしてくれる人は誰一人としていない。

（また、養父のところにいた惨めな自分に戻るのは嫌・・・）

この手で殺した、養父の憎たらしい顔が浮かぶ。地獄の底で、今の自分をあざけ笑っているのだ。ざまぁみろ、と。

（ふざけるな。私は、アンタなんかのところに行くもんか。団堂を殺して、しーちゃんの無念を晴らさなきゃいけないのに、こんなところで死ぬもんか）

まもるは、ここで養父の待つ地獄へ落ちる気はさらさらない。行くなら、親友の待つ天国がいい。そのための翼が、この鬼女メイデンである。

（メイデン・・・。私に、力を貸して。団堂にも負けない力を・・）

そのとき、まもるの心が完全にメイデンと融合する。

彼女の心の奥底に潜んでいた、醜悪な鬼が覚醒した。

「死んじゃったの・・・？」

アトラスの鉄柱のような巨大な右腕は、地面にできたクレーターに数秒間食い込んでいた。あれから全く反応がない以上、敵はペラペラになってしまったのだろう。いくらオーガを真似たところで所詮は紛い物である、この高等執行官の敵ではない。

「え・・・？」

だが、大地に叩きつけたはずのアトラスの腕が、持ち上がっていくような感覚がする。

いや、それどころか、この巨人アトラスがフォースに警告する。危険であると。

「しーちゃんの復讐を果たすまでは、ここで死ねないの・・・・」

下から声が聞こえてくる。まさか、プロトオーガですら耐えることのできないアトラスの一撃である。まして、紛い物が生きているなどありえなかった。

「団堂をこの手でぶち殺すまで、アタシは死ねねぇんだよ！てめぇ

なんかに、やられてたまるかぁぁぁぁ！！！！」
まもるの叫びが響き渡った。それと同時に、アトラスの巨大な右腕が砕け散る。
「アトラスが・・・」
フォースは信じられなかった。一体あの紛い物のどこに、この高等執行官に傷を負わすほどの力を持っているのか、まったくもって理解できない。
「メイデン。あなたの本当の力を、私に見せて！」
まもるがそういうと、メイデンのメンタルスフィアが青い光へと変わる。あれこそは、高等執行官を超える強大なオーガであることの証。
「まさか・・・」
そして、メイデンはその重々しい鎧を解き放つ。すると、中から美しくも恐ろしい聖女が姿を現すのだ。解き放たれた鎧は、メイデンの剣へと変わり、あるいはその周りを巡回する僕となる。
「紛い物なんかじゃ、ないのね・・・」
だが、フォースはおもしろいことになってきたものだと、内心わくわくしていた。生ぬるいままチャプター9が終わってしまうのでは、自分がここにいる意味がない。こういった番狂わせがあるからこそ、外法学は奥が深いのだ。
「いいよ・・。全力で戦ってあげる・・・」
アトラスは、破損した右腕を自己修復し、巨大なバズーカ砲のようなものを手にした。それは、アトラスの右腕全体を覆い尽くすほどの装置であるのだが、どのような攻撃がそこから繰り出されるのかは明らかでない。
「そういえば・・自己紹介・・・まだね・・・。私・・・フォース。そして・・・この子は、相棒のアトラス・・・。よろしくね・・・」
そんなことを言いながら、フォースは巨大なバズーカをメイデンへ向ける。
「私は、まもる。そして、この子は相棒のメイデン。死ぬ覚悟はい

い？」
対して、まもるも、アトラスに右手の武器を向ける。
「うん・・・。大丈夫・・・」
フォースは、即答する。チャプター9で生き残ることができるのは、袴田だけであるから自分は結局のところ滅ぶ予定であり、いまさら命を惜しいとも思わない。なら最後に、ひと暴れできるというのは、フォースにとってこの上ない幸せなのである。
「じゃあ、行くよ。フォース！」
メイデンは、身軽になった身体を天へと飛翔させる。
「いいよ・・・。まもる・・・」
フォースは、にっこりと笑った。

第４５話　鋼鉄の聖女

其処は草原が果てしなく広がる大地。地平線の彼方まで、緑色の大草原と青空だけが続いている世界。そんな広大な大地に、１体の巨人とひとりの少女が向き合っていた。
そよかぜが花びらを舞い上がらせながら、草原をくるくると駆け回る中で、巨人は、少女に問う。

「君は、ボクを使って、何をしたいの？」

少女は答えない。その問に対する明確な答を、少女は持っていなかったから。
だから、巨人の問いかけは、風と共に少女の横をただ通り過ぎ去っていくのであった。
しかし、答える代わりに少女は友達の巨人を見つめ返す。兄のようで、弟のようで、父のようでもあるその巨人を、少女はただじっと見つめるのだ。
もはや瞳を失ったその虚ろなひとつ目に、いったい何が映っているのかは少女には理解できない。もっともかくいう少女も、それと同じくらい、自分の心や気持ちというのも理解できないから、彼女も人のことを言える立場にない。
だが、少女は巨人のことが大好きだった。それだけは誰にも否定できない真実であった。だから、少女は巨人に笑いかけた。
巨人は相変わらず虚ろな目のままで、無反応である。魚のように死んだ目をして立っているだけ。

「私・・最初はどうでもよかった・・・」

チャプター９の結果がどうなろうと、少女にとって特段の利害はな

かった。少なくとも、孤独な自分ごと、この世界が消えてしまえさえすればそれでよかったのだ。それが、少女の最終的な願いであり、そのあとに来る世界の変革は少女にとって付随的なものに過ぎなかった。

「でも、アトラスが教えてくれた・・・」

だが、今はそんな少女の心に、純粋な欲望の欠片が生まれつつあった。

自分が望む世界がちゃんとあったのだ。

それは、御伽噺の中だけにしか存在しないような世界。

全てがハッピーエンドの予定調和にある、夢のような世界。

世界は花や木に囲まれていて、たくさんの動物たちも野原を駆け回っているのだ。しかも、そこに住む住人はみなおおらかで、楽しい人たち。朝から晩まで口笛を吹きながら羊を飼い、夜は皆でキャンプファイヤーを囲み、踊ったり、謳ったりする。それはまるで、この少女が幼い頃に絵本で見た世界そのもの。

そこは、文明が生み出した資本主義という欠陥だらけのシステムから完全に解き放たれている。さらにはそこに異文化との外交という軋轢も存在しない。ひとつの小さい集落こそが、その世界の全てである。これこそはまさに回帰的原始世界というべき夢のファンタジー世界。

過去に置き忘れ、長いこと冬眠していた人間の本性に基礎付けられるノスタルジアこそが人類普遍の最高価値なのだ。最高の価値とは民主主義でも、平和主義でも決してない。

―調和―

そう、ここでは便宜的にこれを調和主義とでも称しておくとして、これこそが停滞してしまったこの社会を根底から揺さぶるに必要な基本原則である。人間はあくまで自然の一部であり、世界を分類してしまう理性などというものはここには存在してはならない。世界

の調和をことごとく分断し、破滅させてしまうから。
人間は、その本能や感情に従って行動すればよい。それこそが、その小さいコスモロジーの内部にあるひとつの歯車として、人間に求められるただひとつの役割なのだから。

少女は、そんな世界を胸に抱いた。

「袴田先生・・・ごめんなさい・・・あなた・・・もう邪魔・・・・・」

袴田の世界などくだらない。欺瞞と世俗にまみれた劣悪な世界である。
彼の世界は、厳格に機会の平等を貫く世界であり、時には隣人同士で蹴落としあいが生じかねない闘争世界である。そのうえ、闘争の勝敗を決めるのは、人間の観念により作り出された財の総量ということになるだろう。それならば、俗の域を全くでないのであり、チャプター9を実行する意味がない。
そんな男にこの世界を明け渡すくらいならば、このアトラスを駆り、自分が最終の債権者となるしかない。そして、袴田にはここで退場してもらうのである。

「そのまえに・・・あの子を斃さないとね・・・・・」

巨人はゆっくりと頷いた。

皇居外苑付近において、山のようなオーガと非常に小さな聖女が戦っていた。もっとも、聖女が小さいのではなく、相対するオーガの方が桁外れにでかいだけである。

「エネルギー流入開始。同時に、ゼロ収縮開始。出力安定・・」

聖女メイデンの右手には、大きなエネルギーソードが形成される。異次元から流入した外法エネルギーに秘められるあらゆる移動可能性を、ある特定の方向のみに１００パーセント向かうようにする。それによって、膨大な量のエネルギーが一点のみに向けられるから、純粋なエネルギーソードを作り出せるのである。

「行くよ」

新生メイデンの碧きメンタルスフィアが燃える。すると、虚物化の外法技術を会得したのだろうか、一瞬にして、アトラスの喉笛にたどり着き、エネルギーソードを突き刺すのだ。

「・・・・・」

だが、アトラスの装甲表面には無数の対空砲が備え付けられており、敵が現れることを条件に、すぐさま反射的行動にでるのだ。レーザーの雨が、メイデンを襲う。

「簡単に攻めさせてはくれないのね」

「うん・・・ごめんね・・・」

しかもこの対空砲火は、あらゆる属性・方法によって侵入者を撃退せんとする。そのため、メイデンの周囲を舞うシールドによってしても、これを全て防ぐことは不可能だ。

「でも、それがどうかして?」

だが、そのようなダメージなど、この聖女の前では大したものではない。多少の肉を切らす代わりに相手の骨を断てればよいのだ。
メイデンのエネルギーソードが一瞬にして火を噴いたように巨大化する。それは巨大なアトラスを十分に貫き得るほどの大きさにまで膨れ上がったのだ。ただ一点のみにしか向かうことのできなかった膨大なエネルギーたちのフラストレーションが、ついに爆発したのである。
アトラスの喉笛から背中までを、巨大エネルギーソードが貫いていく。

「あはははははは。すごいよ、メイデン。いったい、アナタ、どうしちゃったの」

まもるは、うれしくてたまらなかった。つい最近まで、プロトオーガに歯が立たなかったこのメイデンが、これらと互角以上の戦いができるようになったのだから。
傷ひとつ負わすのが困難であるプロトオーガに、攻撃を到達させ、そのうえで多大な損害を生じさせているのだ。これがうれしくないはずがない。こんな自分でも、プロトオーガを斃し得るのであるから。そのためか、まもるは、早く次の攻撃をしたくてうずうずしている。

「その程度なの・・・まもる・・・」

だが、そこにアトラスの本体は存在しなかった。アトラスは、その装甲のうち一部を犠牲に空虚なハリボテを作成し、身代わりとする。
メイデンが破壊したのはこの外殻にすぎない。

「今度は、私の番ね・・・」

アトラスは、バズーカと融合したような右腕を構え、メイデンのはるか後方に出現する。すると直ちに、そのバズーカのような武器が桃色に輝く威光を放つ。それと同時に、アトラスの中にいるフォースが愉悦に浸った気がした。べたつくような嫌な感じが、まもるの肌をそわそわさせて仕方がないのである。

そしてまもなく、衝撃とともにこの皇居周辺を漂っていた濃密な同色の霧を吹き飛ばし、光差す途がアトラスとメイデンをつなぐ。

「まもるは、その子を使って何をしたいの・・・？」

ミラーボールのように周囲を満遍なく照らしていた桃色の光が、轟音を立てながらメイデンという唯一点を目指してゼロ収縮する。もちろん、光の絶対量があまりに多すぎるため、唯一点のみに光が収まるべくもなく、アトラスの腕よりも大きい光の筒となってようやく落ち着くのだ。そして、その光に触れるものを全て朽ち果てさせる。まさにそれは、巨人アトラスにふさわしい、光の巨剣である。アトラスの右腕は、兇器そのものと化したのだ。

「きゃあああああ！！！」

光り輝く天の川にも似た、その強大なつるぎは、メイデンをすりつぶしていく。肉を浄化し、血を沸騰させ、生命の根源を否定する巨大な力。この高等執行官アトラスに秘められた、圧倒的パワーが炸裂したのだ。

「まもるには理念がない・・・チャプター９はイデオロギー同士の戦い・・・世界を創っていこうとする強い意思だけが全て・・・・・でも君にはそれがない・・・」

さらにアトラスは、その巨体を宙へ持ち上げる。１００メートルも

の超巨体が、重力法則に逆らって天を舞うのだ。他方で、その右腕の剣には、メイデンが突き刺さったままである。
それにもかかわらず、ある程度の高さまで来ると、アトラスは急降下する。そのままアトラスは、剣を大地に突き刺そうとしているのだ。想像を絶する質量を有する巨体が落下するのだ。その時に生じる重力加速度をアトラス固有の攻撃力に乗じた場合、その破壊力はいかほどのものであろうか。

「まもるは出直して・・・」

大地に剣が突き刺さると同時に、磁気嵐が発生する。土地が勢いよく隆起すると、衝撃波が周囲に拡散し、大地に埋まっている巨大な岩盤を持ち上げて、それを粉砕する。皇居そのものが吹っ飛んでしまうのではないかと思うほど、大地がメリメリと引き剥がされていく。
無論、この強大なジェノサイドの中心にいる敵が生きている可能性など、万に一つもありはしない。いかなるものであろうとも、例外なく塵となって、大地へと還るのだ。

「まもる・・・楽しかった・・・」

フォースは、大地の破片が宙に舞う、濃密な桃色の光の中心を見て笑う。

「チャプター9・・・？なにそれ、おいしいの？」
「え・・・？」

だがフォースは、激動の世界の中で、聞こえるはずもない声を聞いた。敵の声をはっきりと聞いた。
アトラスの巨大なエネルギーソードをもって、その全体重をもって、

アトラスの最大出力による大災害をもたらしたというのに、敵はまだ生きているのだ。

（この子、アトラスの攻撃を耐えたというの・・・）

小隕石が衝突したかのように穿たれた大地。大地が一部、ごっそりと抉り取られているのだ。だが、それにもかからわず、粉塵のはれゆくさきには、忌々しい鬼女が仁王立ちする。

ありえない。ありえるはずもない。これは、下級執行官ですら蒸発させる一撃なのだ。これをまともに喰らって生きているはずがない。しかし、前方の鬼女は、その両手で、アトラスの大剣を受け止めていたのだ。１０倍以上もあるこの巨体を、その華奢な身体だけで受け止めているのだ。

フォースは、いったん、メイデンに刺さろうとしている剣を引き抜いて、これと距離を置くことにする。対して、メイデンは、服についた汚れでも払い落とすかのようにして、余裕綽綽、体裁を整えるだけである。

「さっき、アナタ、私にチャプター９はイデオロギー同士の戦い・・。そう言ったわね」

「それが・・・何？」

「アナタたちがやろうとしていること、それがチャプター９ってことは、なんとなく気づいてはいたけど・・・、それっていったい何？アンタたちは、いったい何を目的にチャプター９を引き起こそうとしているの？」

「団堂先生・・言ってなかった？」

「あの野郎が言うわけないだろ」

「随分と彼のこと・・嫌っているのね・・・」

「そんなこと、アンタには関係ないだろ」

「そう・・まあいいわ・・。チャプター９とは、この世界の倒産手

続をいうの。わかりやすくいえば、会社を倒産させると、その法人格が消滅するでしょ。チャプター9は、会社の倒産とパラレルに考えてくれればいいわ」

「要するに、世界を滅ぼすつもりね」

「そういうありきたりで無目的なものとは一線を画するものよ・・チャプター9は・・。終わりは、始まりのためにある。新たに生まれた新世界で、再生を担っていくのもチャプター9の役目・・・。私の理想はそこにある。チャプター9で、私にとって、すばらしい世界を創っていけるのだから・・・。一応ね・・、そのメイデンに乗るまもるにも、これに参加する権利がある・・・そして、チャプター9を生き残ったものには世界のルールを定めることができるとされるの・・どんな願いでも叶うのよ・・・」

「どんな願いも・・・」

願いが叶う。

その魔法のような甘い言葉は、すぐさま、まもるの思考を溶解させる。

（私の願い・・。決まっている）

自分が切望する願いを認識した途端、彼女は、急に動悸が強くなり、興奮を始める。

「死んだ人も生き返らせられるっているの?」

「うん、まもるがそういうルールにしたいなら・・・」

フォースはゆっくりと頷いた。

「そうなんだ・・。しーちゃんが生き返るのね」

「うん・・・規定上は問題ない・・・」

「しーちゃんと私だけの、幸せな世界を創れる。それって、すごくいい！」

まもるは、コクピットの中で飛び跳ねそうになった。

「でも無理・・・君はここでアトラスに食べられちゃうから・・・まもるの夢は、ここでおしまい・・・残念でした・・・」

フォースがそういうと、メイデンの身体に突き刺さろうとしている剣は、さらに膨大な量の外法エネルギーを外部から調達し、倍加する。それはまるで、天を焦がす火柱のように、大地から空へ向けて燃え上がる。一気に出力が向上し、メイデンの腕を吹き飛ばすほどの威力となる。それによって、メイデンのボディに剣が突き刺さるのだ。

「それに・・まもるの世界は最低・・・そんな世界を創って誰が喜ぶの・・・？そのお友達も喜ぶの・・？」

「うるさい！！」

「・・・・」

「お前に、私の苦しさが分かる？はじめての信頼できる友達なのよ。その子が私の目の前で殺されたの。しかも、その子が一番大好きだった人に・・・。私は、その子の幸せな顔を見ているのが好きだった。私と同じくらい辛い思いをしてきたのに、真直ぐに生きているあの子が好きだった。その子と、また一緒になれるの。そのためなら、こんな世界、片っ端からぶち壊してやる！」

メイデンは、できる限り多くのシールドを前方一点に集め、桃色の光の途を逆走する。一気にアトラスの元へと駆けるのだ。

「そんなのただのひとりよがり・・・そんなの誰も望まない・・・

望みたくもない・・・あなたの欲望に付き合わされるお友達も可哀想・・・」

「うるさい！うるさい！お前なんかに、私の気持ちがわかってたまるか！しーちゃんは、生き返りたいに決まっている！お前みたいなやつが、しーちゃんを騙るな！」

突如として、アトラスの右腕が切り落とされる。巨大な構造物が、ゆっくりと陥落していく様子は、ビルの倒壊にも似ている。

「ひとつ、忠告するわ・・・死んだ人は、あくまで死んだ人・・・必ずしもそこに同じ魂が宿るとは限らない・・・下手をすれば、最悪の世界が、まもるに待っているかもしれない・・・」

「それでも私は、可能性がある限り、なんだってする。もう一度、しーちゃんと一緒になれるなら！」

メイデンは、さらにアトラスの真上に飛んだ。

「メイデン、ファイナル・バースト・モード・・・」

「馬鹿な子・・・」

メイデンは、ありたっけのシールドや装甲を胸部に集める。そして、それらを再構成し、巨大な砲台へと作り変えた。

「ブラック・マリア、発射・・・」

聖女の青い心の光に、暗黒の力が結集する。すると、大巨人の心が急にわななきだした。およそ阻却することが不可能な攻撃能力に加え、計測不能なほどの攻撃力を感じる。それは、この巨大なアトラスの耐久能力をゼロにしてもなお、有り余るほどの力を秘めている。

「何・・・この力・・・・」

フォースにとっては信じられない出来事だ。自分は、まぎれもなく鬼どものヒエラルキーの高層部に君臨する高等執行官である。にもかかわらず、この高等執行官を易々と凌駕する存在などありえないのだ。それが最高執行官でないかぎりは・・。

「さようなら。フォース・・・」

「そう・・・アトラス・・・私のことを見捨てるのね・・・・あの子の方が気に入ったの・・・・」

巨人は最後にゆっくりと頷いた。

そして、メイデンの巨大な砲台から、ものすごい量の黒い泡が、すごいスピードで放出される。すると、それは直ちにアトラスとメイデンとの間に、黒い泡の架け橋を形成する。無数の大きな泡だけで作られた、黒くて異様な橋である。それはまるで、天空にかかる暗黒の天の川。闇の水泡で生まれた川の流れ。

巨大な黒い泡の群れは、アトラスの全身を包んでいく。まるで泥水を上からどっぷりとかけられたようになり、全身は黒一色となる。その中では、溶解もしくは圧縮などが起こっているのであろうか、外からは全く明らかではない。大巨人の咆哮も含めて、その黒い泡の中に閉じ込めてしまっているのだ。

しかしながら、いずれにしても、泡たちはみるみるアトラスの肉を吸収し、その体積を小さくしていっているのは外形上明らか。アトラスという巨大な存在が消滅しつつあることだけは、どうにも確からしい。

泥の山が、まるで雪崩のようにすそを伝って、頂上から崩れていく。しばらくすると、それは広大な湖のようになってしまうのだ。もっとも、湖というには、あまりにも黒くて気持ちが悪いものであるのだが。

「あーはっはっはっは。斃しちゃった」

まもるは、高笑いしながら、その黒い泡の溜まったところへ向かう。すると、メイデンの接近に反応して、役目を終えた泡たちが、メイデンの身体にずるずると引き寄せられては、そこに吸収されていってしまう。みるみるうちに、メイデンも黒い聖女に変貌させられてしまうのである。

「くくくく・・チャプター9ね。これに生き残れば願いが何でも叶う。いいこと聞いちゃった」

つい先ほどまでメイデンであった黒い塊の中から、強い青い光が瞬き始める。それと同時に、黒い固まりは巨人の外形に再構成されていく。また、肉を割くようなみしみしとした痛々しい音が聞こえると、肉を突き破って何かが次々と出てくる。どうやら、アトラスの力を承継したメイデンに変化が生じているらしい。

その肉体から生えたのは、なんと巨大な腕と足である。もっとも、アトラスほどの巨大さはないが、それでもメイデンは、何もかも粉砕しかねないほど巨大な手足を手に入れたのだ。

次第に、黒い泡は完全にメイデンの内部に吸収されてしまい、中にいる聖女本来の姿がようやく現れる。基本的には、もとのメイデンの身体を媒介としているので、美しい聖女の顔は残されている。だが、これが纏う新たな鎧はあまりに兇悪な漆黒の鎧である。

もう聖女などとは呼びたくもない。どちらかといえば、これは魔人である。

「すごい・・・これがプロトオーガ、アトラスの力なのね」

まもるは、改めてその巨大な右腕を見つめる。それだけで、彼女は

このオーガの得た桁外れの力を実感することができた。あまりに感動的であり、その指を動かすしぐさひとつでさえ、しびれてくる。今までのメイデンにはなかった、圧倒的攻撃力をようやくものにしたのだ。

「これなら団堂に勝てる。行くわよ、アイアンメイデン。団堂をぶち殺して、しーちゃんとの世界を創るの」

アイアンメイデンは、桃色の霧に紛れながら、どこかへ消えてしまった。

第４６話　形だけの同盟

―北海道札幌市―

季節はもう冬の本番となり、この北海道の風景はすっかり極寒の豪雪地帯らしいものとなってしまっている。ふわふわとした白い雪が、砕かれたままとなっている建物の瓦礫に次々と降り注ぐ。ただでさえコンクリート片ばかりで敷き詰めたような大地の上に、さらに満遍なく大量の雪石が覆いかぶさっているので、札幌の大地はまさに白銀の墓標へと変貌させられてしまっているのだ。

そんな豪雪荒れ狂う白い世界を、無数のオーガが練り歩く。この者たちは寒さを感じないのであろうか、一糸纏わず、ふっくらした雪の大地に大きな足跡を残しながらゆっくりと歩いているのだ。

そう、ここは北海道札幌転送ポイントである。人々の魂を送信するユグドラシルがひとつ置かれるオーガたちの拠点なのだ。外は氷点下の大冷界であるため、ユグドラシルはあたたかな外殻の中に閉じこもり、その中で自分の仕事をせっせとこなしていた。

―だがしかし―

突如、せっせと稼動していたユグドラシルが木っ端微塵に爆破される。周辺の雪を吹き飛ばし、あるいは蒸発させ、ユグドラシルのあった部分だけ大地がはげてしまっているのだ。

「ご苦労だった。グレイ・・」

爆破地点では、消えてしまったユグドラシルの代わりに、ゲイボルグ・ディアボリカが現れる。黒き不真正オーガ、ゲイボルグは白銀

の銀世界において、その黒き翼をはためかせ、巨大なバスタード・ソードを携えていたのだ。

「こいつぁすげぇや。サードの旦那。俺のゲイボルグがここまで強くなったのはアンタのおかげだぜ」

「礼には及ばん。お前と私は、今や盟友となったのだ。その盟友に対して、わが力を分かち与えることは至極当然だろう」

すると、爆心地の上空から蛇のように長い尾を持ち、上半身に悪魔の身体を持つ邪悪なオーガ、高等執行官アーミタイルが現れた。地球を一周してしまいそうなほどに長いその尾は、永遠の生命力を感じさせる。それゆえ、このアーミタイルの力の源とは永遠なのであろう。

「でも、本当に驚いたぜ。敵の中にも叛逆者がいたなんてな。首謀者は、袴田とかいったっけ。そいつ、今頃はびびってるぜ」

グレイがそういうと、サードは鼻で笑う。

「ふん。袴田は、私以上にいかれた男だ。私の裏切りもまた、ひとつのデモンストレーションとして楽しんでいるのだろう。それに、やつのアムネシアは、その実態を知れんからな。相当に手ごわい男であることだけは確かだ」

「へぇ。変な奴だな。まあ、どんな奴だろうと、俺と旦那が組めば敵じゃねぇさ」

「そうだったな、グレイよ。この世界を奴の手から救うためには、どうしてもお前の協力が必要なのだ。頼むぞ、義弟よ」

サードは、街頭演説でもするかのように、拳を前に突き出して熱のこもった声で訴えかけた。

「わかってるさ、旦那。俺は、団堂とそのアニミストさえ殺せればいいんだ。そのあとは旦那の好きにしてくれていいからよ。俺はどこへでも付いて行くぜ」

ゲイボルグ・Dは、アーミタイルのところまで行き、その肩に手をかけた。

「期待している」

サードは、コクピットの中で、ひとり怪しい笑みを浮かべていた。

（くくくく。もうすぐ俺の野望が実現する。邪魔な団堂と袴田のふたりを排除し、俺が最後の債権者となって世界を支配する時がもうすぐそこまで来ているのだ）

サードは、憐れで愚かな自分の操り人形を一瞥する。

（それにしても、ちょうどいいところに利用価値のある馬鹿が迷い込んできたものだ。これは神のお告げに違いない。俺こそが世界を支配する者に相応しい存在なのだと。だから、グレイよ。せいぜいお前は俺のために、こき使われて最後には死ね。くくくく・・・）

（二）

―プロトオーガ級戦闘用中型艦アガメムノン―

東京陸運保険機構がこの戦艦を手に入れてからというもの、休む暇もないくらいの戦闘や事件の連続により、弥生遼子は疲弊しきっていた。比較的働きづめの生活に慣れている彼女でも、このままでは

いずれ過労で死ぬ具体的危険すら感じていた。現在の彼女は常に死と隣り合わせであるし、このアガメムノンの維持コストとして少しずつ執行官である弥生の精神は吸われているのだ。

しかしながら、団堂曹士が自分の下に帰ってきてくれたことで、ようやくゆっくりと落ち着くことのできる時間ができた。

また、チャプター9の適用が開始されたことにより、およそ8割の人間が削除されたため、世界の交通・通信などのあらゆるインフラは機能停止に陥ってしまっている。しかしながら、それがかえって、機構にとっては非常に動きやすい状況を生みだしてくれているのだ。

それゆえに、弥生は今まで考えようと思っていたが、なかなか決まらなかったこの艦の名前を決めることができた。

それは、プロトオーガ、アガメムノンである。もっとも、この名前の由来について特段の理由はない。ただなんとなく、これがよかったというだけの話である。

ただ、これもアガメムノン自身が、弥生にそうさせたのかもしれない。今や、弥生とアガメムノンは心を共にする仲なのである。

（それにしても、あいつら何やってんのかしらね）

もちろんあいつらとは、首にしてしまったグレイと辰巳春樹のことである。あと首にした覚えなどないのに、出て行ったきり戻らなくなった、沖まもるも同様である。

現在、このアガメムノンには30人ほどの自衛隊兵士を匿っているので、以前よりはるかに人口が増加しているのは間違いない。しかし、それでもあの3人がいた頃の方が断然、にぎやかで楽しかったものだと今更ながらに後悔する。たったの3人ではあったが、強烈なキャラクターを持つ連中であった。

（いずれにしても、あいつらは曹士のことを殺しに来るはずよね。だとすると、次に会う時は、敵同士ってことか）

一刻も早く、チャプター9を阻止せねばならないのに、どうしてかつての仲間同士で争い合わねばならないのだろう。そう思うと、弥生は非常にやるせなくなる。このようなときこそ、みなで団結し、窮地を乗り切らねばならないのに、これではなんとも不毛な結果ともなりかねない。なぜこんなにも人間は愚かなのだろう。

（でもそれが、オーガに見初められてしまった者たちの悲しい末路なのね）

そして、弥生はタバコに火をつけた。

（三）

団堂は、アニミストの内部に座り、ひとり目を瞑って考え事をしていた。ここは、現世界に最も近い異世界というべき場所であり、外界から完全に遮断された閉鎖空間のようである。そのため、外の音は何一つ聞こえず、極めて静寂な空間なのである。

（辰巳も、まもるも、グレイも、みんないなくなってしまった。それに加え、袴田を斃さなければならない。俺にそれができるのか・・・）

弥生から全てを聞いた。辰巳とグレイは、急に人が変わったようになり、機構を離れていったのだ。彼女いわく、その様子はまるで、オーガの心たるメンタルスフィアによってとりつかれてしまったようであった、と。

団堂自身も、その感覚をよく知っている。現に彼も、このアニミストに心を食われ、憎しみで何も見えなくなってしまっていたから。

連中もあの時の自分と同じ精神状態に陥っているのであろう。

（もし、あいつらが俺の前に現れたとして、俺はあいつらと戦えるのか）

できれば戦いたくはない。確かに元はといえば、チャプター9を袴田と共謀した自分にこそ非がある。彼らはその犠牲者なのだ。恨まれて当然である。しかも、長く一緒に戦ってきた仲間たちだ。向こうにはこちらと戦う理由があるにしても、こちらには向こうと戦う理由はない。

（だけど、それでも俺はあいつらを倒して、袴田を止めなければならない）

亜季の言葉を思い出す。自分は彼らに殺されて当然の人間ではあるが、そのような条理をも超えてやらねばならない大義が団堂にはあるのだ。どれほど憎まれようとも、どれほど罪を重ねようとも、やり遂げなければならない大義がある。それを邪魔する人間がいるのなら、容赦はしない。たとえそれが、かつての仲間であったとしても。

（だが、このアニミストで袴田に勝てるのか？）

団堂が、袴田の下を離反したとき、彼のアムネシアと剣を交えた。だが、勝てなかった。どういった戦いであったかはよく覚えていないが、負けたことは事実である。そして、記憶を奪われ、気づいたら八王子にいたのだ。アムネシアには、どうやら記憶を破壊する作用があるらしい。それだけは、記憶を失ったという事実から導ける情報である。

（あとは、アスラに、アーミタイル。それと、アトラスか。まだまだ斃さなければならない敵は多い）

ふと、団堂は、チャプター9の適用のとき、ひとつだけ見たことのないオーガがいたことを思い出した。

（おそらくあれは、俺の後釜として補充されたやつだろう。俺の後継者とはいえ、並の執行官ではなさそうだったな。気をつけないと）

団堂は、不安と自信が同居する中、自分がやるべきことを真直ぐに見据え、考えることはもうやめることにした。そして、ゆっくりと目を開く。

すると、アニミストの前に、綺麗な黒髪の女性が立っていることに気づいた。宝珠のような赤黒い瞳を開いて、こちらを見ているのだ。

「亜季さん、いたのなら声くらいかけてくださいよ」

「・・・・・」

亜季は何か口を動かしているようだが、中に全く届いてこない。

「あ、そうだった」

団堂は、アニミストの聴力を制限していたことに気づいた。そのため、慌てて外にとびだすのである。

「すいません。アニミストの中にいると何も聞こえなくて・・・」

「もう、ひどいわよ、団堂君。私だけひとり、声をだして、馬鹿みたいだったのよ」

「予め言っておくべきでしたね。ところで、どうかしましたか？」

団堂がそういうと、亜季はもう一歩だけ彼に近づく。すると、団堂

は彼女の香水だろうか、落ち着いた香りを感じた。

「いえ。特に用があるわけではないけど。団堂君、もう何時間も閉じこもっているから、少し心配だったのよ。あなただけに相当な重荷を背負わせてしまったのではないかって」

それにしても、今日の亜季は、なんとなくそわそわしていて様子がおかしいことに団堂は気がついた。何かあったのだろうとは思いつつも、普通に応対することにする。

「そんなことですか。僕なら大丈夫です。執行官の悪い癖で、よくコクピットの中に引きこもってしまうんですよ」

「団堂君は、嘘が下手なのね。とても疲れた顔をしているわ。どうせ、ずっと考え事でもしていたのでしょ？」

亜季は、団堂の顔にひんやりとした右手をあてる。そのうえ、彼女はじっと団堂の目をみつめてくる。それが彼にとってなんとなく照れくさかったが、振り払うわけにもいかなかったのでそのまま触れられたままにしていた。

「俺、そんなに疲れた顔してますか？」

団堂もまた、亜季のことをみつめる。すると、どうしてもこの亜季という女性があの少女に重なってきてしまうのだ。団堂は気持ちの高ぶりを感じつつ彼女を抱きしめてしまいたい衝動に駆られるも、他方で、これは幻にすぎないと受け入れざるを得ない切なさを感じていた。

「うふふ。本当に嘘が下手なのね」

「すいません・・」

「いちいち謝らなくてもいいの。それ、君の悪い癖よ」
「すいません・・」
「だから、すいませんは禁止」
「・・・」

団堂は、再三の注意に反してＮＧワードを言いそうになったので、今度はあえて口を紡いだ。そんな団堂の様子を見た亜季は、後ろ髪引かれながらも彼を後にしていく。

「それでいいのよ。とにかく、団堂君が元気そうでよかったわ」
「いえ、こちらこそ心配かけて、す・・・」

団堂は、同じ過ちを犯す前に再び口を紡ぐ。

「うふふ。邪魔して悪かったわね。じゃあ、がんばって・・・」
「はい」

団堂は亜季に対して返事をし、再びアニミストのところへと戻ろうとする。しかし、彼がゆっくりと、2～3歩、前進したその時である。

ぎゅっと、団堂を背後から亜季が抱きしめていたのだ。

「亜季さん。どうしたんですか？」

団堂は、急に慌てふためいて、背後の様子を窺おうとする。

「団堂君、お願い。今はこのままでいて・・」
「亜季さん・・・」

団堂は、亜季の言葉に少し嗚咽が混じっているのを感じて、彼女に何があったのかをなんとなく悟った。だから、あえて後ろを振り向くのをやめ、彼女の言われるがままにした。

「さっきね、あの子の遺体を見に行ったわ。それで、お別れをしてきたの・・・」

やはりそうかと、団堂は思い、やるせない気分になる。

「覚悟していたはずなのに・・・。とてもじゃないけど、耐えられなかった。あの子の死を直視するのは・・」

亜季は、目一杯強く、団堂の身体を強く抱きしめた。それは団堂にとって、心に突き刺さるほど痛いものである。

「団堂君。私なんかよりも、あなたが一番辛いはずなのに、どうしてあなたはまだ戦えるの？」

「・・・」

「もう戦う必要なんてない。辛いならやめてしまってもいい。あなたの心まで壊れてしまったら、私はあの子に何ていえばいいの？」

団堂は、しばらくヒアリングに徹すると、数秒間だけ黙っていた。そして、優しい顔つきになって、亜季のほうを振り向いて言う。

「辛くなんてないですよ。だって、俺が戦い続けている限り、あいつはいつまでも生き続けてくれているんです。だから、俺はいつまでも戦える。あいつを、もう二度と殺すわけにはいかないから」

「団堂君。あなた、かっこつけすぎよ・・・」

そういいつつ、亜季は団堂の背中でわんわん泣いていた。それにし

ても、気難しいところは姉妹でそっくりである。

「でも、あの子があなたのことを好きになった理由がよくわかる気がするわ。私も、団堂君のこと、好きになっちゃいそう・・・」

亜季は、すぐに泣き止んで、突然に衝撃的な言葉を団堂の耳にささやいた。それによって、団堂は心臓の鼓動が途端に強くなってしまう。

「亜季さん、それ本気ですか？たしかに、亜季さんはとても魅力的ですけど・・・。そんなことをしたら、あいつが化けて出てきますって」

団堂は、彼女の方を振り向いて、必死に欲望を包み隠す。どうやら、所詮は彼もただの男の域を出ないようで、満更でもないらしい。

「あら、やっぱり団堂君は、しぃ一筋なのね。あの子の姉としてはうれしいけれど、ひとりの女としては悔しいわね」

「ははは。すいません・・・」

「すいませんは、ダメよ」

団堂は、冥界から放たれる嫉妬の焔を畏れつつも、亜季なら赦されるかなと、勝手に安易かつ都合のいい解釈をしてしまうのであった。

第４７話　わが理想

―東京大学本郷キャンパス―

団堂曹士は、自分の雇い主である弥生遼子から、大仕事の前の最後の休みであるからどこか好きな場所へ行ってこいと休暇を命じられた。そのとき、彼は弥生からお小遣いとして１万円の交付を受けた。彼は受け取った１万円の絵柄をじっと眺めながら、果たしてこれからどうしようかと思慮にふけってしまう。団堂にとって、これといって休暇を取りたい理由もなく、その必要性もなかったからだ。しかし、滅多に休みなど与えない人使いの荒い彼女のせっかくの申し出であるからと、団堂はこの機会を積極的に利用することにした。そして、そんな団堂が結局訪れたのは、彼にとっての母校である東京大学であった。もっとも、ここにどうしても来たかったわけではない。ただ、なんとなくである。相棒アニミストと一緒に空を飛んでいる最中に、ここの建物が偶然目に留まったから、なんとなく懐かしくて降りてしまっただけである。

（ほんとにここもボロボロになっちまったな）

巨大なオーガが踏みつけていった庭や、倒壊させられた校舎などがそのままの状態で放置されており、瓦礫の上に生育する雑草の長さから、破壊から相当の年月の経過も感じられる。まるで、ここら一帯は自然へと還元されてしまっているようなのだ。それは、なんぴとにも盛者への滅びを感じさせ、浮世のはかなさを歌わさずにいられない。ましてや、それがわが母校である団堂にとってはなおさらであり、涙さえ滲んでくる。

（でも、ここに俺はいたんだ）

一度、破壊されてしまった団堂の記憶ではあるが、ここでの学生生活はよく覚えている。超一流の国立大学に現役で入学し、彼の将来は薔薇色に輝いていた。民間も、国家公務員も、大学研究者も、より取り見取りである。若かったあの頃は、さすがの団堂も鼻の高い天狗のようであった。

もっとも、団堂の大学生活は一般的な男子学生と同様、どうしようもない学生生活ではあった。講義は出ないか、出ても寝ているかで、我ながらろくでもない学生生活であると恥ずかしくなる。しかし、それでも不思議なことに成績は飛びぬけてよかったのだが。

（まだ、図書館は残っているだろうか）

団堂は、さらに大学の奥へと進む。石畳の隙間から頑張って生えている雑草を踏みつけながら、遺跡のようになってしまった大学の内部へと進んでいくのだ。

それにしても、校舎内も酷いものだ。天井がすっかりなくなってしまい、れんがが廊下の至るところに落ちていて、ここにも雑草が棲みついてしまっているのだ。

それだけではなく、なぜか割れたビール瓶がいくつも転がっており、これで殴り合いでもしたのではないかと思われる。おそらく、この中は不良どもの集会か何かに時々利用されているようだ。しかも、誰が書いたのかは知らないが、ボロボロのコンクリート壁には『共産党万歳』なる落書きが赤いチョークのようなもので書かれており、こういうところは東大らしい。

（袴田と会ったのも、ここなんだよな）

ふと、団堂がこの廊下を見ていると、袴田とよくここを往復したことを思い出す。なんとなく気が合って、早い頃から仲良くなったの

が袴田馨である。そのため、悪友としてよくつるんでいたものであった。彼はもともと心の優しい、穏やかな性格をした男だったと記憶している。それでいて、国をよくしたいという確固たる使命感を持っていた男でもあった。優しさと強さを兼ねそろえた、非の打ち所の無い人間であったのだ。それゆえに、団堂自身、袴田をライバル視するとともに、これには一目置いていた。

そんな袴田が、ある日、外法学にのめりこんでいく。それにつられるように、団堂も外法学を学ぶことにしたのだ。それにより団堂らは、次第にその人智を超えた力に魅せられていく。

それと同じくして、穏健であった袴田の政治思想は、タカ派的発想を取り入れてく。いや、タカであるのであれば、まだ幾分ましである。彼は、やがて鬼そのものになり、窮極的には、世界そのものを破壊してしまうというチャプター9の適用を思い至るのであった。誰よりも優しい心の持ち主であり、誰よりも世界の平穏を願った袴田は、世界の破壊を目論むようになってしまった。彼はすっかりと変わってしまったのだ。それはまるで別人であるかのように。

（俺は、袴田の目を覚まさせてやらないとな）

袴田の優しい心を喰らっていったのは、他でもない。あの最高執行官アムネシアである。最初にして、最強のプロトオーガ。プロトオーガの中のプロトオーガ。

そのアムネシアを破壊し、袴田を救い出せば、自分の役目は終わる。

そんなことを考えている間に、団堂は図書館跡地の付近へ到着した。本棚がドミノのように盛大に倒れており、分厚い本がいたるところにばら撒かれている。そこはもはや、ゆっくりと読書を楽しむ場所ではないのだ。

ところが、そんな人の訪れるはずのない図書館から人の気配がした。

間違いない。乱雑に床にばら撒かれた紙を堂々と踏みつける音がするのだ。ただでさえここら一帯はオーガの巣窟と化しているので、人がいることそれ自体、大変異様なのである。だから、団堂はおそるおそる中の様子を窺う。

だが、団堂がちょうどひょっこりと顔を出したところで、中の人物と目が合ってしまった。

「お前・・・」

「団堂。君も来ていたのか」

その男は、つい先ほどまで団堂の回想にも登場していた、団堂にとって最大の敵、袴田馨である。団堂はそれがあまりに唐突だったので、反射的に壁の裏に隠れてしまった。しかし袴田は、宿敵が目の前にいるにもかかわらず、団堂の方を一瞥すると、再び呑気に読みたい本を選び始めた。

そのためいつになっても袴田が近づいてくる気配がしないので、団堂は思い切って身を乗り出した。相変わらず袴田は、本をじっと選んでいて害意の欠片も感じられない。

「お前、なんでこんなところにいる?」

「卒業生が母校を訪れちゃいけないのかい」

袴田は、本棚から何かを探すのに夢中で、まるで団堂を相手にしていないかのように返答する。そのため、団堂は少しむっとして、袴田のほうへと向かう。

「俺が聞いているのはそういうことじゃない。お前は第2次再生計画のため、こんなところにいるはずがない。にもかかわらず、なぜこんなところで呑気なことをやっているんだ」

「なんだ、団堂。俺を心配してくれているのか?」

「ふざけるな。俺はお前のことを殺したくてたまらないんだ。間違っても、お前の心配をするなどありえない」

団堂は、胸に忍ばせていたハンド・ガンを、袴田へ向け、照準を合わせる。それを見た袴田は、なんだか苦笑して、手にしていた分厚い本を棚に戻した。そして、あらためて団堂の方を向く。

「団堂。今を生きる愚かな人間どもの最大の不幸とは何だか分かるか？」

「さあな。お前が生まれてきたことじゃないのか」

「・・・」

袴田は、団堂のいやみに出鼻をくじかれるも、再び本棚に目をやって言葉を続ける。

「これだけの書物がありながら、読書の楽しみを知らないことだ」

それを聞いて団堂は苦笑した。昔、ふたりで似たような趣旨のことで共感したことを思い出したからである。

「それは、俺とお前くらいの特別の趣向だ。必ずしも全員が不幸なはずがない」

「ちがうな。ここでいう読書とは、字図らを追うことだけではない。深い教養を得ることを示している。つまり、教養を得、自己を成長させることの喜びだ。これは何者にも眠る至高の喜びなのだ。この喜びに気づかない人間は、憐れでしょうがないよ」

「なるほどな。要するに、成長を止め、あとはただ腐っていく人間たちは不幸のどん底にいる。だから、チャプター9で救ってやろうというわけか。その論証は耳が腐るほど聞いた。それこそ余計なお世話なんだよ。お前のやろうとしていることは、ただの虐殺だ。絶

対に赦されるものではない」

「そうか・・・。ならば団堂。俺をここで撃ち殺してみろ」

袴田はそういうと、無防備な呈を曝け出して、団堂のほうへ向き直った。団堂は、袴田を簡単に殺す絶好の機会であると理解しながらも、引き金を引く気には全くなれない。いくら最大の敵とはいえ、もともとはすばらしい友人であった袴田である。だから、団堂は心に大きな迷いが生じているのだ。

「どうした?撃たないのか、団堂。君によれば、俺は悪なのだろう。ならば、この悪の化身を滅ぼしてみろ。お前は俺を殺すために、４人もの教え子たちを手にかけてきたのだろう?ならば、俺を殺すのも、その延長のようなものではないか。それとも、いまさら躊躇しているのか」

今、袴田の頭部を打ち抜けば、ほぼ間違いなくこの男を殺すことができる。だが、引き金を引けない。袴田は、こんなにも団堂を挑発しているのに、ずっと殺してやりたかった相手なのに、団堂はこの絶対のチャンスを前に何もできないのだ。

「くそ、なんで撃てないんだよ」

団堂は、思い切り引き金を引こうとする手に力を入れるも、まるで金縛りのように動きを縛り付けてしまうため、腕がプルプルふるえるだけなのだ。

「団堂。君に俺を殺すことはできない。君は、俺以上に優しすぎるからな。だから、無理はするな」

袴田は、優しい微笑みを浮かべつつ、当惑する団堂の目の前まで近

づき、彼の持つ銃に手を触れた。

「団堂。今からでも遅くはない。再び、俺の右腕になって、この世界を作り変えていかないか。そうすれば、今まで君がしてきたこと全てに目を瞑ろう。浦和のこともそうだ」

浦和のこととは、団堂の叛逆行為が開始された事件のことである。彼は、手始めに浦和拠点から破壊することとしたのだ。もっとも、次に行く前には袴田に察知され、見事にやられてしまったのだが。

「世界を・・作り変える・・？」

「そうだ。俺たちが学生の頃、よく語り合った理想の世界だ。よく働き、鍛錬を怠らないものだけが全てを得ることのできる世界。皆が世界のための歯車として、文明を高め合っていく世界だ。逆に、何もせずのうのうと生きていこうという連中は全てを失う世界。そんな世界がすぐそこまで来ているのだよ。団堂」

「俺の理想の世界・・・」

「この世界の人間どもは、皆、死んでいるも同然だ。チャプター９で彼らの息の根を止めてやることこそが、真の慈愛というものではないのか。お前が命をかけてまで守る価値など、この世界には何一つない」

袴田は、団堂の銃を納めさせ、その肩に手をおいた。そして、諭すような表情で、彼を見つめるのだ。

「あははははは」

だが、団堂は、突然に大声で笑い始めた。笑いが全然止まらなくて、さすがの袴田も鳩が豆鉄砲をくらった様な顔になってしまう。

「何がおかしい？」
「確かに、お前の言うとおり、俺もこの世界の連中を見限っていたさ。どいつもこいつも、同じような面をして、同じような行動をコピーして、何のために生きているのかすらよくわからない連中ばかりだ」
「・・・・・」
「だがな、俺はそんな馬鹿な連中が好きになった。俺たちからすれば、腐ってるような連中でも、必死に悩んで、足掻いて生きてるんだ。そして、そこにあるたった1パーセントの搾りかすみたいな幸せを探しているんだよ。俺が記憶を失って、いろんな世界を見ていくうちにいろんな馬鹿からそれを教えてもらった。もっとも、それがどれほどの意味を持つのか、お前には到底理解できないだろうがな」
「そんなもの理解する必要がない」
「だろうな。お前にこれが分かるはずもない。だが、今の俺にはよくわかる。俺は、そいつらの1パーセントの幸せってものを2パーセントにでもできればいいんだ。一番の馬鹿が、自分の幸せも省みないで、自分の力で少しでも世界をよくしようって、本気で願ったんだ。なのに、俺たちがそれをあきらめて、この世界そのものを否定するのなら、この先いったい誰がそれを成し遂げられる？お前のやろうとしていることは、結局困難から目を背け、安易な道に奔るようなもの。つまり、お前は馬鹿以下なんだよ」
「俺が、馬鹿以下だと・・・」
「そうだ。だから俺はお前の考えは絶対に認めない。お前の計画を絶対に阻止して、チャプター9を終わらせてやる。あいつが願った、最高の世界を創るために」
袴田は、心底がっかりした表情を見せて、2～3歩後ずさりした。
そして、切り裂くような細い目で、団堂をにらみつける。

「そうか、それが君の答か、団堂。君には失望した。君はもっと利口な人間だったと思っていたが、やはり一般大衆と何ら変わらない、成長を止めた死人だ。結局何も分かっていないのだよ。君は」
「なんとでも言え。誰がなんと言おうと、俺はお前を止めるだけだ」
「わかった。ならば、もう何も言うまい。君が邪魔をするのであれば、俺はこの絶対の力によってそれを排除するだけだからな。君も知っているように、アニミストでは、俺のアムネシアを斃すことはできないのだから」
「それでいいんだ、馨。じゃあ、俺はもう行くぞ。最後にお前と話ができてよかった」

団堂は、手にしていた銃をしまい、踵を返して立ち去ろうとした。

「団堂！」

だが突然、団堂の背中に向けて、袴田が呼びかける。それによって、団堂は歩を進めるのをやめた。

「第2次再生計画は、3日後、この東京大学で執り行う。これを阻止したくば、ここに来い」
「袴田？」
「勘違いするな。チャプター9は、ひとりの債権者しか生き残ることができないのがルール。あくまで、当日にお前を殺しに行く手間を省くためだ。だから、俺の計画を阻止したいのなら、逃げずに再びここに来い」

そのときの袴田の話し方は、昔の誠実だったころの彼そのものだった。それが団堂にとって、なんとなくうれしかった。

「わかった。3日後、必ずお前を殺してやる」

「俺もだよ。団堂」

団堂は、キザに手だけ振って、一度も振り向くことなく去っていった。

（二）

―福岡拠点―

ここは九州最大のオーガの聖地、福岡拠点である。例によって、拠点の付近は相変わらずオーガどもの巣窟と化していた。

ところで、そのような福岡拠点の上空には、鮮やかなピンク色をした妖魔がおり、下界の様子を見下していた。それは、辰巳春樹の駆る鬼女セアトである。

「ここに帰ってくるのも久しぶりだな・・・」

辰巳はもともと、ここ福岡県で生まれ育った人間である。ただ、彼女が生まれ故郷を懐かしむには、そのふるさとはいささか荒れ果てすぎていたのである。いまはもう、オーガたちによって十二分に蹂躙されており、どこがどうなっていたのか、その手がかりでさえも木っ端微塵となっている。

「パパ、ママ・・・。アタシ、帰ってきたんだよ・・・」

もっとも、壊滅したここら一帯のどこかに、自分が住んでいたことだけは確かである。そう、彼女の実家周辺は、まさにユグドラシルの転送拠点に選ばれてしまったのだ。

辰巳はそのころ、東京の特別な専門学校に通うため、上京していた。だから、ここでオーガたちの襲撃に遭うことはなかった。ただし、東京において襲撃を受けたのは彼女も同様である。そのような危難をなんとか生き延びた彼女は、ニュースで自宅周辺がとんでもない襲撃を受けていたことを知り、すぐに親の安否を確かめることにした。

だが、連絡はつかない。折り返して電話をくれることもない。一方で、訃報を告げてくれる人もいない。つまり、両親の生死は不明となってしまったのだ。また、両親は法律上も、失踪宣告の確定により死亡したことにされている。そうするとこの場合、死んだと考えるのが最も自然であろうが、生きている可能性がゼロではない以上、どこかで必ず両親が生きていると信じるしかなかった。だから、辰巳は本気で両親がまだここにいると思い込んでいるのである。

目の前で、友達を全員失って、そのうえ心の支えである両親まで失うとすれば、彼女の心は壊れてしまうのだ。本当は、辰巳春樹という女性の心は誰よりも脆い。

彼女は、その心の琴線が誰よりも繊細であるが故に、自分の心を探られるのを嫌う。だから、あえて明るく馬鹿みたいに振舞う。他人に入られるくらいなら、自分から入っていって荒らしてしまえばいい。

攻撃こそ最大の防禦。相手に自分の心を覗き込む隙を与えない。それこそが、辰巳春樹を辰巳春樹のままでいさせてくれるための、彼女なりの処世術なのである。

「でも・・・もういいんだ。実際に帰ってきて、ようやくわかった・・・」

しかし、自分を騙し続けるのも、もう限界であった。いくらなんでも、この光景を見てしまうと、全てを諦めたくなる。この光景はなんとなく予想していた。だからこそ、彼女はここに帰りたくはなか

った。

「パパ・・・。ママ・・・・」

辰巳の脳裏には、まだ鮮やかにふたりの笑顔が想起される。そこそこ自分のわがままも聞いてくれて、優しい両親。この世で一番、大切な人たち。父と母を守れる力を得るため、彼らが死んでいるとも知らずに、今まで必死に鍛錬を積んできた。全ては、もう一度家族みんなで安心・安全に暮らしていくため。だが、それはもう不可能であると確定する。今までの努力は全て水の泡。ご愁傷様でしたという他ない。

「蛾ァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

辰巳は、声にならない声で精一杯、叫んだ。叫んでも、叫んでも、悲しくてたまらない。この心の渇きは全く癒えないのだ。自分はいったい、何をしてきたのだろう。原点回帰してみても、何の答もでやしない。何もやっていないのと同じなのだ。自分なりにはがんばってきたつもりではあったが、結果的には無価値。

「パパァァァァァァ！！！」

そのとき、突如としてセアトが暴走を始めるのだ。

ドクン、ドクン、と辰巳の鼓動に合わせて、セアトのメンタルスフィアが同調する。すると、次第にその色が青き焔へと変わっていく。セアトの巨大な右手は、木の根のように枝分かれして行き、大地にその根を下ろそうと、すさまじい速度で成長する。無数に分岐したセアトの右腕は、大地を這いずり回るオーガたちに的確に降りかかる。その根は、オーガの肉をことごとく貫きながら、大地に埋め込まれていく。そして、その根を伝い、九州の広大な大地に異常重力

を発生させる。

「ママァァァァァ！！！」

大地が爆砕する。異常な重力が、この大地に立つ全てのものを地獄へ引きずり込もうとする。無数のオーガたちの肉をミンチ状へとすりつぶし、地上の瓦礫をさらに粉末へと粉砕する。仮にここに、彼女の両親が生存していたとしても、これでは間違いなく死んでしまうだろう。だが、そうだとしてもそれでよい。この一撃は、過去との清算の兼ねている。もう、この世に存在しないのなら、こうして完全にぶち壊した方が諦めもつくし、何よりも潔い。それに、故郷を蹂躙したこのオーガどもを一掃してやる必要がある。

「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

セアトはまだ止まらない。広範囲に枝分かれしたその右腕の原状回復能力を利用して、一瞬のうちに、その腕が突き刺さっている大地へと降り立つ。着地地点には、赤い肉がごろごろと転がっており、なんとも惨たらしいありさまである。

だが、辰巳もセアトも、そんな光景を見ても何も感じない。ただ屍の道の上を、べちゃべちゃ踏み歩きながら、前を目指す。目標は、前方のユグドラシルである。

もっとも、ユグドラシルも先ほどの異常重力攻撃の直撃を受けたため、外殻が崩壊し、中身が飛び出ている。あと一撃でも食らわせてやれば、おそらく機能を停止するに違いない。この赤きオーガ、ユグドラシルさえ消えれば、故郷を陵辱するものたちも皆、消えてなくなるのだ。

全てはこの一撃で終わる。これで平和な生まれ故郷に本来的な意味で帰ることができるようになるのだ。

「みんな、きえろぉぉぉぉ！！！」

セアトの右腕が、再びおそろしい速さで伸びる。ユグドラシルに向かって、ただ一直線に伸びていくのだ。

だが。

ユグドラシルの少し手前。なにものかが、その空間を引き裂いて、セアトの右腕を異次元の彼方へと吸い込んでいってしまう。気づいた頃にはもうおそい。次元の歪みは瞬時に閉じられて、異次元の中へ入っていってしまった腕の一部分はもう帰って来れなくなった。

他方、空間という絶対的な切断機により、セアトの右腕が一部分ごっそりと切り取られてしまうのだ。

『そう簡単には、通しませんよ』

何処からともなく声が響く。聞き覚えのある、甘い声。

すると、直ちにセアトの前方の空間が切り裂かれ、こじ開けられ、中から灰色のオーガが現れる。

空間を無数の細い腕でこじ開けながら、ずるずると現世に這い出るものがあるのだ。それは次元を自由に操るという、おそろしい能力を持つ異質なプロトオーガ。戦災を司り、敬うべき神を形式的に象った邪悪な魔神。それは、高等執行官アスラである。

『ユグドラシルを破壊するのは、この私を斃してからにしてください。辰巳春樹さん』

「どけ・・・」

『春樹さん？』

トゥワイスは、目の前の少女の異常に驚きを隠せなかった。あの青いメンタルスフィアを見れば分かる。完全に覚醒したらしい。それは、さすがのトゥワイスでも予想外の成長振りであった。

「どけっつってんだぁぁぁぁ！！！」

セアトの腕が、緑色の毒液を撒き散らしながらアスラへと向かう。
周囲の環境を溶解させながら、敵の首元を一直線にねらうのだ。

『全く、こんな形で貴女と戦うことになるとは、少し残念です』

アスラは、虚物化により、これを緊急回避する。

『ですが・・・心の底ではやけに興奮している自分がいるのはなぜでしょうかね・・・』

セアトのはるか後方に現れたアスラは、その無数の手を巧みに操り、何かをつむぎだす。
すると、セアトの周囲の空間が異常に歪む。世界が崩れていくような圧迫感がセアトを包み込むのだ。そして、空間が切り取られていく。セアトの存在する座標ごと、一切の防禦機能を無視して『1』を『0』へと変えていくのだ。
だが。

『くっ・・・』

どこからともなく、凶弾が撃ち込まれる。マグナム弾だろうか。しかも、下からの攻撃である。アスラは今、セアトの背後をとっているだけに、トゥワイスの予想しない地点からの攻撃であった。腕を2、3本根元からもぎ取られてしまう。

『なるほど・・。ここはもう、貴女の世界でしたね・・』

そう、トゥワイスは気づいた。セアトは、根っこのような触手を大地に突き刺し、地中から上空へ攻撃することが可能なのであった。もう、どれほどの触手がこの大地に埋まっているのか想像もつかない。すでに準備は出来上がっていたのだ。

『手加減の必要は、どうやらないようですね。わかりました。全力で楽しみましょう』

トゥワイスは、自身の圧倒的不利を感じつつも、どこか心躍る気持ちであった。

第４７話　わが理想（後書き）

最近、更新がかなり滞ってしまっていることをお詫び申し上げます。
なるべく、連日作業するようにしますが、一週間に一度程度の更新
になると思います。

第４８話　異次元の戦神

―福岡拠点付近―

どんよりと暗い、ここ福岡の空には分厚い雷雲が立ち込めていた。
まるで雲の化け物のような雄大な黒い雲は、天と地とを断絶して、外界とは切り離された別個独立の世界を構成する。故にここは光から閉ざされた世界である。
それだけではない。さらに、ポタポタと、大粒の雨が落ちてきたと思ったら、それはすぐに土砂降りへと変わる。もう冬だというのに、この季節にこれほどの豪雨は珍しい。
しかも、この大量の雨の猛烈なる勢いといえば、この瓦礫の山のような土地の一切を洗い流してしまいかねないほどだ。

また、この大地もとんでもないことに巻き込まれている。アスファルトの地面の至るところが隆起し、無数の根っこがずるずると地を這っている。黒い雲から、黒い雨の降りしきる其処は、もはや魔界に近い。魔族たちの領域を現世に体現したような異質な空間となっているのだ。
現にここには、魔界の舞踏場で跳ね回っているふたりの悪魔たちがいる。
それは、鬼女セアトに高等執行官アスラである。

『春樹さん、どうです？楽しいでしょう？執行官同士の命のやり取りというのは』

アスラは、セアトの攻撃をその軽い身のこなしで難なく回避し、逆に空間を切り取るという、その特有の攻撃方法で攻め立てる。

「楽しくなんてない。アンタも、団堂と同じだ。アタシを騙して、傷つけて・・・。何で、アタシに近づいた？答えろ」

厄介なことに、アスラの攻撃はいったいどこの空間が裂けるのか読み取ることが困難なのである。銃弾のように弾道コースがあるわけでもなく、刀のように太刀筋もない。突然に、空間が切り取られてしまうのだ。もっとも、空間が裂ける前触れというものは何となく感じられるので、それを頼りにして何とかアスラの攻撃を回避する。

『理由は特にありません。私はただ、辰巳春樹という人間に興味があった・・。ただそれだけです。騙すつもりも、傷つけるつもりも有りはしませんよ』

「うそだ。どうせ、アンタはアタシを利用するつもりだったんだろう。アタシは、アンタのモルモットじゃない」

『利用するつもりであったかとどうかと問われると、首肯せざるをえませんが、あくまで親愛なるパートーナーとして、自発的な協力を見込んだだけです。逆に貴女は、対価的牽連関係を抜きにして、他人と無償かつ一方的に付き合う人間など考えられますか？人間とは、少なからず他人を利用しあって生きている生物です。仮に私の貴女に対する利用行為が咎められるものであるとすれば、人間が他人と付き合う行為の全てが罰せられることになりますね』

「わけわかんねぇこと言ってんじゃねぇよ」

セアトは、右手に大型の銃器を抱え、凶弾をアスラに向けて放つ。クラスター弾に内蔵された、大量の小型実弾と焼夷弾が非連続的に大本の凶弾から発射され、その全てが意志を持つかのようにアスラへと向かう。弾と弾とが互いにぶつかり合い、跳弾となって、アスラに喰らい突く。しかし、アスラはこれを避けようともせず、その周囲に次元の歪みを創ると、弾丸のコースを捻じ曲げて、別方向へと逸らしてしまうのであった。

『しかたありませんね。もっと分かりやすくいえば、私とこのアスラのために、貴女にはダシになってほしかった、とでも言いましょうか・・・』

「結局は、モルモットみたいなものだろ」

辰巳は、突っ込み代わりに、マイクロブラックホール弾を発射する。もっとも、これはあっさりと回避されてしまう。

『まったく、貴女も頑固な人ですね。まあ、そういうところ、嫌いではありませんが』

「うるさい！！」

セアトは、根っこのような触手をアスラの周囲に包囲させ、一斉に毒液を撒き散らす。対して、アスラは、とっさに作り出した次元の裂け目に飛びこんでは、それを逃れる。

『それにしても、よくぞここまで成長しました。貴女は私の想像以上だ。このアスラと互角に渡り合えるなど、正直夢にも思いませんでしたから』

セアトの背部にするどい圧迫感。これこそ次元が切り取られる前触れなのだ。とてつもないエネルギーの爆発が隣の次元において発生しているようなので、何となくわかる。

すると案の定、小さく次元が裂けて、そこから一本の細い腕が現れる。

そして、セアトを巻き込んで、巨大な円錐状に空間が切り取られる。この暗黒魔界というキャンバスに、綺麗な空の色をした巨大な円錐を一瞬にして塗りたくるように。はたまた、この暗黒魔界という巨大なパイから、一切れのパイを取っていってしまうかのように。

「くぅぅ・・・」

伸ばしていた根っこと本体が切り取られる。これでは自己の持っていたアドバンテージが大きく失われてしまう。実際、地上を這っていた根っこは石化したかのように、その力を失ってしまったのだ。

『だからこそ、貴女の魂は、このアスラと共にあるのが最も相応しい。外法典のある条文の文言によれば、オーガは、オーガスを取り込むことにより、真の力を得るとあります。オーガスとは、もちろん春樹さん。貴女のことです』

アスラは、紳士的な態度でセアトを示す。とはいえ、トゥワイスが何だか腹黒いような、裏があるような胡散臭さを滲み出しているのは見え見えであった。

「なるほど。結局はそれが、アンタの狙いか」

『まあ、そんなところです。本当のところ、私にも理想というものがありましてね。この機をずっと伺っていたのです。わが師を越える、その日を・・・』

「そのためにどうしても必要なのが、アタシの力ってわけか」

『そうです。ご理解していただけましたか。そのために貴女は今まで私に生かされていたのですよ。私の大切な仲間を利用してでもね・・・』

辰巳は、あの時の巨大な恐竜みたいなプロトオーガ、アヴァターをすぐに連想した。そして、この男の踏み台として粗雑に利用された彼が、なんだかかわいそうになった。もっとも、あのアヴァターは、散々に自分を痛めつけたのだから、全く同情の余地などないのだが。

「でも、残念ながら。アタシは男を尻にしきたいタイプなんでね。取り込まれるのは、アタシじゃない。アンタだ」

辰巳は、大変、自信有り気に胸を張ってそう言った。

『ほう・・・』

この期に及んで満ち溢れる自信。トゥワイスはその源泉が一体なんなのかを知りたかった。そのため、トゥワイスもいったん立ち止まって、その宣誓に耳を貸すことにする。

「今のアンタの言葉を聞いてわかった。団堂を殺す方法。それは、あんたたちの力を得ることだったんだ。そして、その餌は今、アタシの目の前にいる」

セアトは、びしっと前方のアスラを指差した。

『この私を、本気で斃せると思っているようですね。フフフ、やはり貴女はおもしろい女性だ・・・。いいでしょう。貴女が私に勝てたのなら、貴女の尻にしかれて差し上げましょう。ただし、私が勝った場合には、当然・・・わかっていますね』

「当然。アンタに勝てないようじゃ、団堂にも勝てるはずないからね」

『よい返事です。では、改めて参りますよ』

トゥワイスは、周囲に研ぎ澄まされた殺気をすっと流し込んでいく。それは、この強い雨によって全く誤魔化されることなく、辰巳の心へと到達するのだ。

それは、いかなる猛将であろうも、一瞬にしてその士気を削ぎ落されかねないほどの威圧感である。

そしてアスラは、静かに構えたのだ。全く隙のない、洗練された構え。清流のごとく無数の腕を滑らかに稼動させるその様子は、神々しすぎて涙が出てくる。しかし、だからといって魂を奪われてしまうと、いつの間にか命まで奪われる羽目になるので、そんな悠長なことは絶対にできない。これは、あくまで偽りの戦神である。外道の力によって創られた、神の冒涜者である。こんな惑わしの神性などに心を許すわけにはいかないのだ。

「上等じゃん。いくよ、相棒」

だから、辰巳は恐れない。何だかよく分からない奴がいたとしても、構わず進み、その中を荒らしまくってやればよい。攻撃こそ最大の防禦。それが彼女の至上命題なのだ。

『一撃で終わりにします・・・。行くぞ、アスラ』

落ち着き払っていたアスラの目が異常に冴えわたる。

「これは・・？」

辰巳の中で、嫌な予感がした。戦う者の中に眠る本能が、不可解な脳波となって、彼女の全身を駆け巡り、その行動を静止させようとするのだ。だが、それはあまりにも遅すぎるのである。

瞬間。空間が崩れる。

トゥワイスは、盛大なトラップを張っていたのだ。

それは、黒い暗黒の雨が降りしきる死んだ世界を描いた大キャンバスを大きく書き換えるように。黒い絵では、少し寂しい絵になるからと、いろんな色を試してみるのだ。いくつもの巨大な円錐を、この黒い大空に浮かべるように。主役の女性を中心として、巨大な円錐が世界を切り取っていく。できた世界は、いろんなところが円錐

状に欠けてしまった、極彩色に彩られた世界である。
主役の女性は、頭を切り取られ、腕を切り取られ、足を切り取られ、散々な絵である。

『さすがに貴女でも、これは避けられませんよ・・・。これこそが、私の素晴らしき高等執行官アスラの力・・・』

トゥワイスがそういうと、たちまち世界はあるべき姿へと戻っていく。直ちに原状回復がなされなければならないのである。いろいろな色でできた円錐は、この絵の中に存在してはいけないのだ。
こじ開けられた次元が元に戻るエネルギーは相当なものである。この暗黒の世界の一切を吹き飛ばそうとする。

『非常に有意義な時間でしたよ、春樹さん。勝負は、私の勝ちですね』

自身の主たる部分を異次元によって切り取られた鬼女セアトは、浮力を失い、落下を開始する。それと同時に、切断部分から大量の血液がスプレー状に噴き出るのだ。

『では、約束どおり、貴女は私のオーガスとなっていただきます』

アスラは、ゆっくりと、セアトが落下した地点に向かって歩く。手も足も頭も失って、単なる肉の塊と化したセアトは、もう動く様子もない。

『もっと違う形で出会えたのならば、私たちはきっと、幸せになれたでしょう。ただ、それが残念でなりません。こんな救いようもない世界に生まれてしまったがために、罪も穢れもない貴女は、このような目に遭ってしまっているのですから』

アスラは、セアトの残骸を優しく拾い上げる。そして、未来への祈りを込めながら言うのだ。まるで、わが子を優しく抱きかかえ、光ある未来をこれに託すかのように。

『しかし、私が作り上げる世界では、きっと貴女も幸せになれるはずですよ。それは、貴女の大好きな戦いばかりの世界なのです。毎日が、争いの連続という修羅の世界。貴女なら、きっとお気に召してくれるでしょう。ですから、今は安らかにお眠りなさい』

雨は一層、強くなった。世の中に降り積もった浄化しきれない悪意を全て、雨が押し流していくのだ。この雨はきっと次の世界の恵の雨に変わる。このいたいけな少女の犠牲は、確かに悲しいものである。また、その犠牲を強いらせてしまった罪は、決して軽いものではない。

だがせめて、世界を包み込もうとしている、膨大な量の悪意だけは、この雨によって消えてなくなってしまえ。この背中に背負ってきた罪を流してくれなどとまでは言わないから。

「なら、私たちが戦う理由って、なんなの？」

『・・・？』

トゥワイスは、どこからともなく声を聞いた。これはなんとも奇妙な現象である。目の前の敵は、コクピットごと、異次元へ送り込んでしまったはずだ。それはこの目でちゃんと確認しているし、なによりこの残骸を見れば一目瞭然である。

『アスラ・・・』

そして次に、トゥワイスはこのアスラがやられていることに気づい

た。背中から、腹に向かって、何かが突き刺さっている。

「リーさん。私は、あなたと戦う理由なんてなかったのに・・・。私たち、きっと幸せになれていたのに、何で・・・。何でこんなことをしたのよ・・。どうして、こんなことになってしまうのよ」

間違いない。この声の主は、間違いなく、つい先ほど次元の狭間に放り込んだ辰巳春樹の声だ。

「春樹さん・・・。一体、どうして、ここにいるんですか？あなたのいるべき世界は、『ここ』ではありませんよね？」

おそるおそる、アスラは後ろを振り向きながら言う。

「私の相棒を見くびってもらっては困るわ。この子には、吸収（アブソーション）という能力があるの。だから、あなたのアスラの能力を吸収させてもらったわ」

「なるほど・・・。それならば、貴女がここにいる理由も頷けますね」

アスラの能力。それは自在に空間を切り開く力。よく見れば、アスラの空間切断能力と同じ方法によって、アスラの後方の空間が切り取られ、腕が一本だけ、別次元から送り込まれたのだ。

「そう・・。だから、私はここにいる。何もかもを、終わらせるために」

そして、セアトが狭い裂け目を切り裂きながら、無理矢理この世界に入り込んでくる。いったん、ほとんどの部分を切断されたセアトは、いつの間にか新しい身体に寄生して完全復活を遂げていた。そ

の姿は、あまりにも邪悪なものであり、この暗黒界を支配する魔王そのものである。
そして、さらに左腕でもアスラを突き刺すのだ。

「うぉぉ・・・！！」

トゥワイスは、吐血する。自己の身体にも攻撃が貫通したようだ。
その内臓を切り裂き、臓器内に血が溜まり、口内にまであふれ出る。

「ふふ・・・。どうやら、負けていたのは私のようですね・・。貴女はやはり、私の想像以上の女性だ。そして貴女は、本当は誰よりも繊細な女性だ・・・。そのギャップは、少し卑怯なのではありませんか？」
「あなたにそういわれると、なんだかうれしいわね」

辰巳は、心を曝したことの不安に潰れそうであったが、愛する男はそんな自分を理解してくれていた。

「これが本当の私。両親以外の人に見せたことのない、本当の弱い私なの」
「いえ、とても素敵です・・・。時には弱さを見せることも、女性の魅力ですよ・・・」
「ありがとう、リーさん」
「ふふふ・・・。さぁ、私を殺しなさい。団堂を殺しに行くのでしょう？このアスラの力は、貴女のものです」

トゥワイスは、死にそうに声を震わせながら自己を殺すよう唆す。
それに応じるように、セアトはその腕を振り上げるが、そこで止まってしまう。

「殺せない・・。殺せないよ、私。だって、私・・・本当は・・あなたのこと・・・・」

セアトは、振り上げたその腕を下ろしていく。

「まだ・・そんな甘いことを・・・」

辰巳が迷いを見せた一瞬で、アスラは無数の腕でセアトに掴みかかる。

「このアスラを前にして、そのような覚悟では、団堂には勝てない。鬼になるのだ。辰巳春樹!!この俺を殺して、団堂を殺し、袴田を殺せぇぇぇぇ!!」

「リーさん!!」

殺される。

アスラの放った殺気は本物である。ふとそう思った辰巳は、とっさに空間を切り開き、掴んできたアスラの腕をことごとく切断する。

そして、瞬時に空間が元に戻る勢いで、互いは後方へと飛ばされる。

「その程度か、辰巳春樹!!お前のような甘ったれた女が、俺を喰らうだと?このアスラを喰らうだと?笑わせるなぁぁぁ!!」

だが、アスラはしつこく、攻撃の意志をみせている。

そこでセアトは、その秘められし最終奥義、アブソーションを執行する。

両手の平に、奇妙な眼球が現れる。そして、セアトの攻撃により、腕を失い、ひるみきっているアスラに、その手を突き出して襲い掛かるのだ。

「私はぁぁぁぁ！！」

もし、この世界が、今とは全く違う世界であったのなら、きっと、私たちふたりは幸せになっていたと、辰巳は思った。両親も元気で、友達もたくさんいてくれたりして。

そして、きっと、この人のところへお嫁にいくとき、父も母もうれし涙を浮かべて、笑顔で自分を送り出してくれたのだろう。それが、大好きな両親への大きな親孝行となっただろう。そんな、今とは似ても似つかないような明るい未来があったのかもしれない。

この力で、もし、世界の時間を巻き戻せるのなら、もう一度、この人生をやり直してみたい。もちろん、オーガなんていない世界で。

（だから、今は、ごめんなさい。リーさん）

セアトは、その邪悪な両手でアスラに掴みかかった。

「うぉぉぉぉぉぉ！！！」

「セアト、これで終わりにして。これで・・・」

アスラが苦痛に悶える。その中にいるトゥワイスもまた然りである。それを思うたびに、辰巳は辛くなる。なぜなら、この攻撃は吸収である。破壊などと言った生易しい中身のない言葉とはわけが違うからである。食べ物を体内に吸収しやすくするため、胃液でぐにょぐにょに対象を溶かすのと同様に、アブソーションも対象を吸収に最も適した状態に変えてしまうからである。

「春樹さん・・。それでいいんです。それで・・・」

その言葉を聞いた辰巳は、再び一瞬の迷いを見せる。だが、気づい

た頃にはもう遅い。アブソーションの執行は、とうに開始されているのだ。こうなってしまったら、アスラを骨の髄まで吸収しつくすまで止まらない。

「リーさん、リーさん！！」

辰巳の叫びもむなしく、そう大きくないアスラの本体は、遠心分離機にかけられたように流動的になり、辰巳の中へとなだれこんでくる。少女が望むと望まないとにかかわらず、アスラはどんどん流れ込んでくる。

そして、アスラの灰色の装甲が、ピンク色のセアトの本体に纏わりついて、辰巳の周辺ではとてつもないことが起きようとしているのだ。

それは、トゥワイスの言っていた、オーガとオーガスの融合である。これによって、鬼女セアトとプロトオーガアスラは、真の姿に目覚めるのだ。

「馬鹿。リーさんのばか。ばか・・・」

辰巳は、鼻をすする。

「私、結局、ひとりぼっちになっちゃったよ・・・」

真のオーガを手に入れた代償として、辰巳は愛する人を手にかけた。これにより、辰巳春樹は真の意味で孤独となったのだ。もう、彼女を愛してくれる人は誰もいない。

「私、壊すよ。この世界を。全てをやり直すために・・・」

だから、彼女には世界の再生という理念は欠片もないのだ。こんな

世界、良くしようとも悪くしようとも思わない。あえて望むとすれば、戻りたい。幸せだったあの頃へ。

「この、アスタロトで」

アスタロト。これが彼女の得た新しいオーガ。それは、誇り溢れる、高貴かつ邪悪な魔王である。あらゆる次元の魔族どもを統べる、絶対的王者にふさわしい。

「行こう。アスタロト・・・」

だが、辰巳の目から涙が伝う。とてつもない力を得たというのに、心に穴が開いているようで、満ち足りないのだ。そのため、辰巳は、この戦いが終わる頃にはきっとその原因もなくなっていることだろう、と信じるしかなかった。

第４８話　異次元の戦神（後書き）

今回は、意外とアイディアがよく浮かんだため早期にアップできましたが（もっとも、そのために話は自分でも予期しなかった方へとずれていってしまっているのですが）、次回はほぼゼロベースからの作成のため、一週間程度かかると思います。

第４９話　第２次再生計画前準備手続

今日も太陽は、東の空から昇ってくる。
藍色の空を切り裂いて、オレンジ色の閃光が、墓標のような東京全域を照らす。母のように優しいこの光は、いかに憐れなこの瓦礫の山であろうとも、平等にその恵みをこの不毛な大地に降り注いでくれる。
この天の光は、絶望と共に生きる人々に、朝の訪れを告げてくれるのだ。

このように、太陽の動きは時間の流れを感じさせてくれる。どんなに世界が滅ぼされようとも、この時の流れだけは、絶対に変わることのない世界の真理である。人がどれほど足掻こうと、時間の流れは止まらない。世界を変えても、過去に戻ることはできない。泣いても笑っても、今日のこの瞬間は、もう二度と来ないのだ。

そして間もなく、今日この世界は、無くなる。今日が、この世界にとって、最後の日となるかもしれない。この世界が死んで、新たな世界が生まれようとしているのだ。
これを止められないのならば、自分を含めたこの世界は消滅する。

幸せも、後悔も、全て、虚物というプログラム的存在に還元され、この世界という一個の構造物ごと消し去るのだ。これを止めることができるのは、プロトオーガを用いる人間でありながら、オーガに相反するこの団堂曹士しかいない。団堂が敗れれば、世界は終わる。みんな死ぬのだ。

（袴田・・・。お前の親友として、俺はお前を止めてやる）

団堂は、東京上空を飛行する戦艦アガメムノンのブリッジから、オレンジ色の朝日に包まれる地上を見て、考え事をしていた。

現在の時刻は、6時23分。彼が起きるには、やや早い時間ではあるが、最終決戦を前にした緊張で、すっかり団堂の目は覚めていた。先ほどから、何度か水分を補給しているが、やけに喉が渇く。この生理現象は、今の自分の精神状態を投影しているのだろう。それゆえに怖いかと聞かれれば、確かに怖い。武者震いなのか、全身がガクガクと震える。なにせ、自分にこの世界の命運がかかっているのだ。しかも、相手はあの袴田である。その他にも多数の執行官がいる。正気の沙汰ではない。

だが、それでいい。それが、団堂に科された罰なのだから。死ぬことが十中八九確実と分かっていても、この身を粉にして、最後まで足掻いてやる。馬鹿な自分のせいで殺してしまった、あいつのために。あいつの願った世界を創るために。

「こら、曹士。なにぼぉっとしてんの？」

しばらく窓の外の様子を見つめていた団堂は、ノートのようなもので頭を軽く叩かれることで、自分の現在おかれている状況を再認識する。

「社長・・」

緊張に心をやられている団堂を気がかりに思ったのであろうか、弥生遼子が団堂に声をかけたのだ。

「あんた、本当に大丈夫？」

「少し、緊張しているだけです。問題ありません」

「そう。まあ、言うまでもないだろうけど、今回の戦いは今までで一番厳しいものになるわよ。きっと、あの3人もくるだろうし・・」

弥生も、窓の外に目をやって、寂しそうに言った。あの3人とは、辰巳春樹、グレイ、沖まもるのことである。

「倒すべき敵は、余りにも多くて、強大です・・」

「仮に、あいつらがあんたに牙を向けたとして、曹士、あんたにあの子達を殺す覚悟はある？」

「・・・」

団堂は、一瞬、答えるのをためらった。やはりかつての仲間である以上、殺したいわけないからである。

「あいつらのオーガは人工物との混合体であるとはいえ、立派なオーガよ。生半可な覚悟で臨めば、あんたでも負けるわ」

「それはよくわかります。なにせ、ずっと、一緒に戦ってきた仲間たちですからね。あいつらの強さは、俺がよく知っていますよ」

「分かっているのなら話は早いわ。なら、頭のいいあんたなら、この先何がどうなったとしても・・・わかっているわよね？」

団堂は、ゆっくりと頷いた。

「そう、それでいいの。あんたが、あいつらを殺さなくてもあいつらは結局この世界と一緒に死ぬ運命なの。変わってしまったあの子達を救えるのも、あんたしかいない。だから、せめてあんたが、あいつらに止めを刺して・・・助けてあげて」

弥生は、団堂の肩にずっしりと手をかけた。

「はい・・・社長」

団堂は、気のない返事をした。そんな団堂の様子を見た弥生は、軽いため息をつくと、少し笑顔になって言う。

「まあ、あんたの帰ってくるところは、ちゃんと守っておいてあげるから、安心していってきなさいな。期待してるわよ、曹士」

「先輩の言うとおりよ、団堂君」

「うわっ！！」

団堂の後ろから、艶めかしき声が突然に聞こえたので、団堂は変な声を出してしまった。もっとも、こんな声を団堂に出させることのできる人間はひとりだけである。

「おはようございます。団堂君、先輩」

団堂が後ろを振り向くと、亜季が戦闘用スーツに着替えてちょんと立っていた。妹とは異なり、非常にグラマラスな体型をしているにもかかわらず普段は落ち着いた服装をしている亜季ではあるが、今日に限っては、ボディラインがくっきりと出てしまう過激なスーツに身を包んでいるので、男たる団堂はこれを直視することができない・・・。が、思わずこれをちらちらと見る。

「亜季さん、その格好って、まさか？」

「ええ、団堂君。私も最後まで戦います。あの子の乗っていた鬼女アリスの修補が完了したようなので」

「アリスで出るんですか？アリスは、執行官の精神を吸うんですよ？」

「大丈夫。あの子ができて、私にできないはずがないもの。それに、私もあなたの助けになりたいの」

「はあ・・・」
「それより団堂君、どうしたの?様子が変よ。やっぱり、緊張しているのかしら?」
亜季は、団堂の挙動不審な行動をまじまじと見つめてくる。
「ええ、まあ、そんなところです」
団堂は、原因は貴女にあるとは、口が裂けてもいえなかった。
「緊張なんてらしくないわね。団堂君は、最強なんだから、自信もってね。それとも、私に何か求めているのかしら?先ほどから、目が教えてくれているわよ」
亜季は、やはり自分の格好を男に見られるのが恥ずかしいようで、少し顔を赤くして言う。どうやらばれていたようである。
「そ、そんなことよりも・・・。無理はしないでください。貴女が無事でなければ、意味がありませんから」
団堂は、慌てて窓の外へと目を逃がし、取り繕う。
「団堂君。あなたが失敗すれば、私だって死んでしまうのよ。だから、私だけ特別扱いっていうのは無し。いくら団堂君が無理するなって言っても、私は命をかけて戦うわ」
「そうでしたね・・」
「だから、あなたは私のことなんか気にしないで、自分のやるべきことに集中しなさい。あなたの足を引っ張りたくないもの」
「そ、亜季のいうとおり。こっちはどうにでもなるから、曹士は申立人の殺害。それだけを考えてちょうだい」

弥生は、馴れ馴れしく団堂をチョークにかけるように抱き込んで、それだけを伝えると、さっさと秘書の方へと行ってしまった。

「うわ、社長、香水臭い・・」

抱き込んできた弥生のぬくもりが、団堂の付近を濃密な香りを伴って、いまだに漂っている。最終戦だというのに、不謹慎な人だと思う団堂。

「ふふ、先輩も相変わらずなのね。じゃあ、私も・・・」

そんなふたりのやりとりを傍らから見ていた亜季は、不敵な笑顔を浮かべて、団堂のすぐ目の前に立った。弥生のぬくもりと入れ替わるように流れてきた、また別の亜季のぬくもりが、団堂を包み込む。

「あの・・・亜季さん?」
「がんばってね、団堂くん・・・」

亜季は、団堂の頭を優しく引き寄せて、キスをしてくれた。
何秒くらいしただろう。これはすでに、社交辞令の域を超えている。

「・・・」

ようやくにして、亜季は団堂の唇から離れる。
団堂は、突然のことで頭が上手く働かなかった。ただ、後ろめたい気持ちで一杯であったことだけは確かであり、天に向けて心の中で懺悔したのだ。

「じゃあ、私は、先に行くわね」

そんな団堂の苦悩も露知らず、亜季は恋する乙女のように満面の笑顔を浮かべて、機嫌よく行ってしまった。

団堂が、しばらく亜季の行く先をぼぉっと眺めていると、突如、警報が鳴り響き、彼もようやく正気に戻る。

「理事長。まもなく東京大学の上空近辺に到着します。突入の準備を開始してください」

「曹士。聞いてのとおりよ。覚悟はいいわね」

「は・・・はい」

団堂は、慌ててアニミストのところへと戻ろうとする。すると、誰かが変な声を挙げた。

「うわっ！あれ？ちょっと待ってください。この反応は・・・鬼女メイデン？まさか、まもるさん？」

団堂も、いったん皆とともに、窓の外に目を向ける。

「うそ？あれが、メイデンだなんて・・。あんな大きい化け物が、メイデンのはずないですよ」

そう、団堂たちが向かうその先には、巨大なオーガが仁王立ちするかのように待ち伏せをしていたのだ。それは分厚い鋼鉄の装甲に身をつつんだ、大地のようなオーガである。

おそらくは、目測でもこのアガメムノンよりも巨大なオーガである。

「いえ、あれは間違いなく鬼女メイデンを含みます。そしておそら

く、敵のプロトオーガアトラスと融合したものでしょう」

団堂は、あの巨大なオーガにつき、思い当たる節はひとつしかなかった。それは、高等執行官アトラスである。あれほど巨大なプロトオーガはアトラスくらいのものである。しかし、メイデンの部分も認められる以上、オーガとオーガスの融合を果たし、最高執行官になったのであろう。

（フォースか・・・。まもるを取り込んで、より強大な力を手に入れたか・・・）

そして団堂の頭には、非常に優秀な教え子であるフォースが浮かび、この少女がメイデンを吸収したにちがいないと推論した。なぜなら、アトラスにメイデンが敵うことなどありえないと考えたためである。ところが。

「みんな、久しぶり・・・。早速だけど、団堂はいるかしら?」

団堂は、その巨大なオーガから聞こえた声が、フォースのものではなく、まもるのそれであったがために驚愕する。

「この声、まもるなのか?」

「そう、私は正真正銘、あのまもるよ。そして、あなたをずっと待っていたの。団堂曹士」

まちがいない。若干、キャラ変わってるが、この声調は間違いなくまもるのそれである。

「メイデンが、フォースのアトラスを斃したというのか・・」

「そういうこと。フォースは、この私が殺したわ。まあ、そんなこ

とよりさぁ、みんな、見てよ。この子」

まもるは、自分の乗る巨大なオーガに注意を向けさせる。そうすると、新しい洋服のお披露目でもするかのように、その巨大なオーガは宙に浮いて、３６０度回転する。

「この子が私の優秀なオーガ、アイアンメイデン。どう？すごいでしょう？」

団堂は、確かにすごいと感じざるを得なかった。どこまでこのアイアンメイデンは、憎しみに支配されているのだろうか、彼にも全く想像がつかない。その重々しい憎悪のヴェールは、この世界の全てを呑み込んでも足らないほどである。

「まもる・・君は、そこまで・・・」

「ご理解いただけたかしら？」

「・・・」

できれば理解なんてしたくない。どうして、あの優しい彼女がこうなってしまったのか。いつも、後ろで団堂たちを見守り、あいつをいつも後ろから支えてくれていた、あのまもるが、こんな存在に成り下がってしまうなんて。

「・・・理解したのなら、さっさと来いよ。クズ野郎。私はお前を血祭りに上げたくて、ずっとここで待っていたんだからさぁ」

まもるがそういうと、同時に、アイアンメイデンの主砲がアガメムノンへと向けて、放たれる。かつての仲間もいるというのに、彼女は全くためらう様子も見せずに撃ったのだ。

「団堂を匿っているあんた達も同罪だ！死ね！！」
「アニミスト！！」

団堂は、顕現的虚物化により、アニミストを起動させ、瞬く間にその中に入り込み、アガメムノンの盾となる。瞬時にアニミストは出しうる限りのバリヤを張って、その砲撃の威力を相殺する。だが、有り余るほどの憎しみの業火は、アニミストの防禦能力を上回って、その身を焦がす。だが、こちらも死者たちの力の総力を用いて、全てを焼かれることのないように耐えるのだ。

「くっ・・・」
「団堂君！！」

亜季の声が聞こえる。どうやら、彼女たちは無事のようであり、団堂は安堵する。
それにしても、あのメイデンからこのアニミストの防禦能力を大きく上回る攻撃が放たれたのだ。こんなこと、信じたくもない。

「きたきたぁ。フォースの残留思念が教えてくれる。それがお前のオーガ、アニミスト。そして・・・」

まもるは、胸が詰まって一瞬間をおいた。

「そして、しーちゃんを殺した、最低のオーガだぁぁぁ！！」

まもるは、団堂に対して、後ろ指差すかのように、弾劾するかのように叫んだ。

「まもる。お前は、俺が止める・・・。これ以上、あいつを苦しませるわけにはいかないんだ」

第４９話　第２次再生計画前準備手続（後書き）

第１８話の２を冗編として新たに設けましたので、お気づきでない読者の方は宜しければ御閲読下さい。

第５０話　憎悪の焔に焼かれて

地獄。そう、ここは地獄か。
森羅万象あらゆる物を焼失させかねないほどの憎悪の焔が、世界全体を包んでいる。
これ以上ここにいたくない。彼女の心をこれ以上見ていると、この身を焼き尽くされそうになるから。
これはもはや留まるところを知らない山火事のように、辺りに存在するいかなるものをも巻き込んで、世界全体を焼き尽くそうとするのだ。
現に彼女はそのつもりらしい。世界の全てを、この憎悪の焔で包み込むまで、彼女はその心の憎しみを最後まで燃やしつくすのだろう。
沖まもる。かつての仲間である彼女の心にともった憎しみの業火は、団堂が以前に抱いたそれの比ではない。消せども消せども、消えない焔となって、彼女の一握りの願いを実現しようとする。それはまるでゾンビのように、ひとつの野望をかなえるためだけに、何度でもよみがえる。
全ては、団堂曹士。この男を殺害するため。
この男が、自分の一番大切な人にしたことを、この男に１００万倍にして返す。ただそれだけだ。

アイアンメイデンは、虚物化により、瞬時にアニミストの目の前に顕現する。
一瞬にして絶望的な圧迫感が団堂を襲うと共に、突然に巨大な質量が出現したため、突風が発生する。そして、瞬く間も与えずに、その鋼鉄の豪腕でアニミストを粉砕する。

「くそ・・・」

とんでもない力が、アニミストを通して伝わってくる。なんとかガードをしても、質量差で圧倒的に劣るアニミストは後方へと吹っ飛ばされる。

「いける。いけるよ、アイアンメイデン。貴女なら、団堂を斃せる。八つ裂きにできる」

まもるは、その腕から繰り出された強烈な一撃に酔いしれる。

「やめろ、まもる。俺たちには、戦う理由なんてないはずだ」

団堂は、なんとか体勢を持ち直して、アイアンメイデンへと向かう。

「うっせぇんだよ。お前にはなくても、私にはあるんだ。ただひとりの、大切な親友を殺された、この私には！！」

「そんなこと、あいつをこの手にかけた俺自身、一番よく理解しているさ！」

そう、あの優しいまもるを、こんな鬼に仕立て上げたのは自分のせいだ。この自分の手で、絶望的な量の憎しみを彼女に与えてしまった。彼女は、悪くない。すべて、この団堂が招いた悪夢。

「本当に悪いと思っているなら、大人しく、私に切り刻まれちまえよ。馬鹿」

まもるは、団堂を軽蔑するような口調でぶちまけた。そのたびに、自分の罪の重さが心に重くのしかかってくる。それでも、団堂は、前方の巨大な憎しみの塊、アイアンメイデンを直視する。

「悪いな、それはできない。そんなことをすれば、あいつが何のために死んだのか分からなくなるからな」
「はあ？何言ってんの、お前」
「あいつは、言ったんだよ。この世界を守れってな。だから、俺はあいつから託された願いを叶えるために、今ここにいる」

団堂は、その罪を背負うことに決めたのだ。そして、彼女を止めるのも自分の役目だ。
彼女の魂を、憎しみから救わなければならない。そして、この命に代えても教えるのだ。お前は、間違っていると。あいつは、こんなこと絶対に望んでいないと。

「あーはっはっはっはっはっはっは。しーちゃんを殺した、てめぇが言う台詞か、それ？笑わせんのも大概にしろ、カス。それは、お前がお前の生存根拠を勝手に正当化しただけだ。しーちゃんが、お前みたいなクズに期待してるわけないだろ」

まもるは、腹を抱えながら笑ってそう言った。

「あいつは、そういう奴なんだよ、まもる。それとも、もう忘れたのか？桐生詩季が、どういう奴だったのかを」
「うるさい！しーちゃんが私の中で言ってるんだ。お前を殺せ。お前を殺せって。だから、私は、お前を殺すんだぁぁ！！」
「馬鹿野郎！お前は、あの時の俺と同じなんだ。お前は、あの時の俺のことを見ていたのだろう。なら、なぜそれに気づかない。そんなことをしても、本当に大切なものを失うだけだと、なぜ気づかない」
「だまれ！私の本当に大切なものは、お前がすべて奪っていったんだ。だから、私が失うものなんて、何もない！」
「ちがう、あいつは今もなお、ここにいる！俺のこの心の中で生き

続けている。お前は、俺を殺すことで、あいつのこの想いまで殺そうとしているんだぞ」

「ふざけんな！しーちゃんを盾に、命乞いなんてしてんじゃねぇぞ、ハゲ。なら、てめぇの腹を引きちぎって、てめぇの中に捕まっているしーちゃんを、アタシが助けるだけだ！！」

「これ以上、あいつを苦しめるな、まもる！お前は結局、自分の憎しみを俺にぶつけたいだけだ。あいつに全て、押し付けるんじゃない」

「ちがう、私はどうなったっていい。ここで死んだっていい。全部、しーちゃんの・・しーちゃんの、ためなんだからぁぁぁ！！！」

アイアンメイデンの胸に光る、強大な蒼き焔が爆発する。

すると、その全装甲が一斉にパージし、割れたクリスタル片のようになって、きらきらとアイアンメイデンの周囲を舞う。それらは直ちに胸部に集中していくと、アイアンメイデンの全身を巨大な砲台とするのだ。

「アイアンメイデン、ファイナル・バースト・モード・・・」

ファイナル・バースト・モード。それによって、アイアンメイデンはもはや巨大なエネルギーランチャーそのものとなる。そして、その強大な銃口の奥底から今にも爆発しそうなほどの外法エネルギーの発生が感じられる。彼女の憎しみを全てを解き放ち、破壊のためのエネルギーへと転化した、気の遠くなるほどの量のエネルギーである。

『曹士！あれはまずいわ。絶対に避けて！！』

弥生の声が聞こえる。彼女が珍しく緊張に声が裏返っていることからも、アイアンメイデンから放たれようとしている砲撃の威力はと

んでもないものであることがわかる。
だが。

「アニミストが、あれを抑えなければ、アガメムノンが墜ちます。だから、社長はなるべく離れて！」
『馬鹿、曹士！！』

弥生の言いたいことはよく分かっていた。何があっても、このアニミストを失うことだけは許されない。それが、弥生の命とトレード・オフの関係にあったとしても。
しかし、団堂はそんなことができる人間ではなかった。だから、あえてアイアンメイデンの攻撃を受けることにした。まもるの叫びを、その身をもって、直に受け止めてやる。

「黒き焔に焼かれて死ね。ブラック・マリア、発射」

まもるが、死の引き金を引こうとした、その時である。

『まもるちゃん、やめて！！』

その声を聞いたまもるは、全ての攻撃を中断する。

「鬼女アリス・・。しーちゃん？」

まもるは、自分の親友と非常に良く似た雰囲気を感じた。
そう、アイアンメイデンの砲台の前に、亜季の乗る鬼女アリスが立ちはだかったのだ。そのため、まもるはその全行動をいったん停止する。そして、爆発寸前であったブラック・マリアは、急激に引っ込んでしまう。

「まもるちゃん、もうやめよう？もう、こんなことをしても誰も喜ばないわ。だから、もう、みんなのところへ帰ろう？」
「しーちゃん・・・」

そして、アイアンメイデンの砲台が、次第に下降していってしまう。

「わかってくれたのね？まもるちゃん」
「うん・・・わかった・・・」

そして、アイアンメイデンのファイナル・バースト・モードは解かれ、通常形態へと移行する。まもるは、もとに戻ったのだろうかと思われた。

「・・・アンタが偽者だってことがねぇぇ」

一瞬にして、この世界にまもるの殺気が満ち溢れると、アイアンメイデンは虚物化する。
まもるは、元に戻ってなどいないのだ。それどころか、彼女を騙すようなことをしたのが裏目に出て、まもるの怒りはより露骨に出てしまう。

「亜季さん！！」

それをすぐに察知した団堂は、直ちにアリスのフォローへと向かう。

「しーちゃんは死んだ。ばらばらになったしーちゃんを、この目で見たんだ。だから、しーちゃんが生きてるはずがない。だから、お前は偽者なんだァァァ」

アリスの目の前に巨大なアイアンメイデンが現出する。小さなアリ

スを一蹴してしまいかねないほどの気迫と衝撃が走る。
そして、アイアンメイデンはためらいもせず、アリスをその腕で粉砕しようとする。

「しーちゃんを騙った罪、死んで償えぇぇぇぇ」
「まもる、その人を傷つけるなぁぁぁぁ！！！」

間一髪のところで、アニミストがアリスの盾になる。が、とっさのことだったので防禦が全然十分ではなく、アニミストはもろにアイアンメイデンの一撃を受けてしまう。

「うわぁぁぁぁ」
「団堂君！！」

非常に強力な打撃が全身を駆け巡る。アニミストですら、その全身を砕かれかねない破壊力を有しており、現にアニミストの右腕部分は粉末へと化してしまう。

「邪魔すんじゃねぇよ、団堂」
「お前の相手は・・・俺だ。まもる」

まもるは、なにやら悔しくてたまらないらしく、歯軋りをする。

「気に入らない・・・気に入らない。どうして、しーちゃんを最後まで守ってあげなかったお前が、何でそいつだけ、命を賭けて守るんだよ。しーちゃんの偽者を。しーちゃんを、守るって言ったお前が！！」
「この人は、あいつにとって一番大切な家族だからだ。そして、この人を守ることが、あいつから託された俺の役目だからだ」

団堂は容赦をしなかった。ニルヴァーナの力を解放し、アイアンメイデンを3本の槍によって槍殺するのだ。数々のオーガをその手にかけてきた、アニミストの主要兵器がアイアンメイデンに向かうのだ。

「そんなものが、アイアンメイデンの鎧を貫けると思うか？」

まもるの言うとおり、アイアンメイデンへと向かっていくニルヴァーナの進行方向にはそれぞれ、彼女が張っていた気の遠くなるほどに重ねがけされたバリヤがある。さすがのニルヴァーナによる突撃攻撃であっても、それを突破する前に攻撃力がゼロにまで減殺させられてしまうのであった。

「ニルヴァーナの攻撃力を全て奪ったというのか？いったい、何枚のバリヤを張っている？」

「クククック・・・」

まもるの切れが悪い笑いが聞こえてくる。

「物理・外法それぞれの減殺バリヤ合計して、およそ６千枚よ。本当のところ、これだけで十分か不安だったけど、もう証明されたわね。お前の力では、このアイアンメイデンに傷ひとつ負わすことなどできないってね」

６千枚ものバリヤ。それは想像を絶する鉄壁である。団堂ですら、バリヤを１００枚ほど張るのがやっとである。もっとも、非常に狭い面積であればもっと増やすことが可能であるが、それはよほど防禦能力に自信がないと全くの無意味である。

だが、防禦に関しては誰よりも秀でた能力を持つ彼女なら、あれだ

けの媒介を上手く利用することで、もっとも効率的に最大の防御力を生み出すことも不可能でない。

「あーっはっはっはっはっはっは。お前の負けだ、団堂」

「まもる・・・」

しかし、6千枚ものシールドである。それを瞬間的にでも生み出すのは生易しいものではない。これをやるには余りに分が悪いのだ。そんな無茶なこと、この戦闘中ずっとしていれば、心が無くなってしまうほどの精神力を消耗してしまうのだ。それはもう、回復困難なほどの損害である。だから、この時点において団堂はこの勝負の帰趨をわかっていた。

（まもる、お前の負けだ）

そんな防禦をしていたら、アニミストを倒す前に彼女が消えてなくなるだろう。

それほどまでに、彼女はこの戦いに全てを賭している。そして、この戦いの行き着く先は、彼女にとって勝っても地獄であり、負けても地獄なのだ。

「まもる、もうやめてくれ。これ以上は無意味だ。お前のそのオーガでは、アニミストには勝てない。そんな無理な防禦をいつまでも維持できるはずがないだろう」

「なめんじゃねぇよ。お前なんかに心配されるぐらいなら、ここで死んだほうがマシだ。馬鹿」

「お前は、自分の力の限界がわかっていない。仮にお前が俺を倒したとしても、ここで使った全てのツケが遡及してお前を襲う。そのとき、お前は自分自身を死よりも辛い苦痛に貶めることになるんだ。それでもいいのか？」

「はぁ？愚問だね。私は、お前を殺しさえできれば何だってする。それが死より辛かろうが、甘んじて受けるさ」
「お前は、何も分かっていない・・・。外法の恐ろしさを・・・」

団堂は、悲しい目をした。

「こうして、敵として相対しているが、俺はお前を守りたい。お前が俺を殺してくれるのなら、喜んでお前に殺されたい。お前がそれで、生き続けてくれるのなら」
「なんだよそれ？お前の言っていること、意味がわからないよ」
「お前があいつのことを親友と思っていた以上に、あいつにとって、お前は親友と呼べる大切な人だからだ」

団堂がそういうと、アイアンメイデンは少し落ち着いた気がした。それを認識しつつ、団堂は言葉を続けて、彼女にひたすら訴えかける。この戦いの無意味さを。

「そして、あいつはよく言っていた。世界で一番優しい心を持っている人だと。だから、自分にとって自慢の親友だと。そんな大切な人を、こんなところで無駄に消してしまうわけにはいかないんだ」
「うるさいうるさい！団堂、お前は少し黙れ」

だが、彼女は団堂の話など聞く耳持たないようだ。無駄話を打ち切るように、アイアンメイデンは、改めてファイナル・バースト・モードへと移行する。

（しーちゃん・・・ごめんね。本当は分かっているの。しーちゃんがどうしたいのかなんて。だから、これは私のわがままなのかもしれないね）

「まもる、もうやめろ」

団堂は、急いで妨害行動に出る。だが、巨大なエネルギーランチャーと化したアイアンメイデンは、その巨体の全部をどろんと虚物化させてしまう。

（でも、悔しいじゃない。しーちゃんにとっての一番が、この私じゃないなんて）

アイアンメイデンは、アガメムノンへ銃身を向けて、さらにその上空に出現する。

（たしかに、最初はしーちゃんのうれしそうにのろけた顔を見るのが好きだった。でも、だんだん私が置いていかれてしまう気がして、苦しかったんだ。だから、この男のことが妬ましかった）

「ばかやろぉぉぉぉ！！！」

団堂は、アイアンメイデンとアガメムノンの間に割って入った。

（だから、私の最初で最後のわがままなの。いいよね。この男を殺しても）

まもるは団堂の思考パターンを読んでいる。少なくとも今の団堂は、アガメムノンを守るための行動を９９パーセント採る。そうすれば、自分に対して防禦がおろそかになるので、簡単にこれを撃破できる。全ては、原因・結果、原因・結果・・・の連鎖によって決定付けられた、因果連鎖のなれの果てである。だから、このフローチャートに従っていけば、結論としてはこれで、団堂は死ぬ。このブラック・マリアによって。

「消えろよ。団堂！！お前さえいなければ！！」

そして、黒い大きな泡が一瞬にして、細胞分裂するように増殖していく。瞬く間に、アイアンメイデンとアニミストを結ぶ橋となるのだ。

『曹士くん！！！』

暗黒の憎悪は、なんでもかんでも無へと還していく。希望を絶望に変え、喜びを苦悩へと変えるのだ。憎しみが、団堂の心を陵辱する。

（まもる・・・これがお前の憎しみなのか・・・きっと、辛かったんだろう）

団堂は、暗黒の聖母につつまれながらも、そこから直にまもるの気持ちを感じていた。ただもじもじしていただけのように思われた彼女であったが、実に複雑な心境の少女であったのだ。

（アニミスト・・・頼む。耐えろ。あいつを助けるんだ。ここで、くたばるわけにはいかないんだ。だから頼む、耐えてくれ）

跡形もなく消されてしまいそうなアニミストを、なんとかつなぎとめる。ぼろぼろになっていく、この肉がなくなったとしても、この魂だけは奪われない。

（力を・・・力を貸してくれ。詩季・・）

そして、長いことアニミストを包んでいた黒い泡はシャボン玉がはじけていくかのように消えていった。アニミストごと、消えていっ

たのだ。

『曹士――！！』

第５１話　夢から醒めて

団堂は、極彩色の光に包まれた濃い緑色の芝生が一面に生えた奇怪な世界にいた。
そこは、無限の幻想と欲望とが合成しあってできた夢の世界か。はたまた、外法の力の歪みから生まれたこの世とは異なる世界なのか。

いずれにしても、ここにいる限り誰もが完全でいられる。誰もが欲しいものを手に入れられる。
だが、この世界で得たものなど、全て広大な砂漠にゆらゆらと浮かぶ蜃気楼のように消えていくのだ。とてつもない絶望感と虚無感だけを残して。

しかし、夢を見る人間は、その夢を体験している間において、大抵それが現実のものであると信じて疑わない。いや、現実においてありえないストーリーの主人公になれるからこそ、それが夢であることを頑なに肯定しないのであろうか。まあいずれにしても、無理もない。そのすばらしきストーリーは、現実の人間が切望し、願った理想の世界そのものなのだから。そうであれば、藁にもしがみつく勢いで、そこにぶら下がり続ける人の業も合理性はあるだろう。
そして、ようやくにして人は夢から目が覚めれば、過酷な現実を直視せざるをえないのだ。ゆえに、儚い夢に浸っていた人間の目が覚めて、それが蜃気楼とともに消えていく瞬間に、人は思うのだろう。目が覚めなければよかったと。

そして、外法学の天才、団堂曹士もまた、その夢の呪縛から自由になれない憐れな夢の閲覧者のひとりである。彼も、ひとときの幻こそがリアルであると思い込み、実体のないからっぽの充足感を得ているのだろう。

「・・・」

団堂は、上なのか下なのか、はたまた横なのか、よくわからない方向をぼぉっとみつめて、変な気分に陥っている。だが、そんな中で、団堂の袖が引っ張られる気がしたので、彼はその方向を振り向く。

「ナインさん。どうしたんですか?向こうで、しーちゃんが待ってますよ」

沖まもるだった。それにしても、ナインなどと呼ばれるのは久しいが、いつもの気弱そうな彼女がそこにいた。そして彼女は、極彩色の光しかない方を無意味に指差す。

「まもる・・?君は、俺を憎んでなかったか?」

団堂は、つい最近まで彼女との仲がどうにもギクシャクしていたような気がしていたので、現状に違和感を覚え、なんとなく訊いてみた。

「いやですよぉ、ナインさん。たしかに、私が怒っていたのは事実ですけど、とりあえずは、しーちゃんが無事だったから、特別に許してあげたんですからね」

まもるは、にこりとして答えてくれた。

「そ・・そうだったな」

団堂も、そんな気がしてきて、何となく肯定してしまうのだ。これこそが、本来あるべき理想の人間関係なのだから、これを肯定して

も何の異論はない。なんといっても、団堂を悩ませていた悩みの種がひとつ消えたのだから。

「あ・・でも、本当は私も謝らないといけないですね。ナインさんに対して、必要以上に怒ってしまったことを、さっき、しーちゃんに怒られちゃって・・・。だから、ごめんなさい。ナインさんには、いっぱい酷いことを言ってしまいました」

「いや、そんなことはいいんだよ。なんたって、悪いのはこの俺だからさ。・・・それよりも、あいつ、無事だったんだ」

団堂は、いつものように詩季が無事でよろしくやっているような気がしてきて、すんなりとそれを受け入れた。また、いつものように、きゅうすけを散歩させながら躓きそうになっているのだろう。そう思うと、なんだか微笑ましくなってくる。

「そうですよ。ただ実のところ、まだしーちゃんは自分の足で歩いたりできるほど回復していないんです。それにもかかわらず、しーちゃんったら、私たち3人の仲を元に戻すためにひと肌脱いでくれたんです」

「なるほど」

「だから、今日は3人でピクニックです。もっとも、ナインさんにとっては、私は少しお邪魔でしょうけど・・・」

「何言っているんだ。今日は、まもるとぜひ遊びたいよ。もう、まもるとは、こうやって話をできるとは思っても見なかったからな」

「えぇ〜？私、そんなに怒ってないですよぉ」

「あれ、そうだっけ？」

「そぉですよ。ナインさんったら、もぉ。私をはるきちゃんと一緒にしないで下さい」

「あははは、そりゃそうだよな。ところで、今のまもるの発言、辰巳にチクっておくぞ」

「そ・・それはやめてくださいよぉ。はるきちゃんにぶたれるんですからね」
「うそうそ。冗談だって。そんぐらいで泣くなよ」
「もぉ、ナインさんったら・・・」

まもるは、本当に涙を滲ませては、天敵にぶたれる情景を想像して怯えている。

（まもるはいつもの彼女だ。全て、元に戻ったんだな）

団堂は、彼のよく知る『沖まもる』という少女が手付かずのまま保存されていることを確認して、改めて安堵するのだ。

「あ、しーちゃん。ごめんね、待った？」

まもるに手を引かれながらしばらく歩くと、前方に流れるように艶やかな黒い髪を持つ少女が後ろ向きに立っていた。まもるは、その少女に向かって手を振る。

「詩・・季・・・」

団堂は、彼女がすでにこの世にはいない気がしていたが、今はそんなことどうでもよかった。ただ、自分の視界に映る彼女を見ただけで、団堂は幸福感に包まれるのだ。それを阻害するような疑いを差し挟むことは、野暮であろう。

「俺・・・」

団堂の前方にいる神秘的な少女は、その肩の辺りまで真直ぐに伸びた黒い髪を風になびかせて、涼しげな光の色をしたワンピースに身

を包んでいた。団堂はそれに導かれるように、まもるなどそっちのけで、彼女の方に向かって駆け出した。

「詩季」

団堂は、彼に背を向けたままの少女を後ろから抱きしめた。もう二度と放しはしないかのように、これを強く抱きしめるのだ。

「ごめん。俺は、お前のことを信じてやれなかったこと、今も後悔している」

「ナイン君・・・」

黒髪の少女は、相変わらず団堂に向き直ろうともせずにつぶやいた。

「あんなにひどいことをしたのに、それでもお前は、俺のことを愛していてくれたんだよな。本当にありがとう。ずっと、これが言いたかった」

団堂は、この少女に対する愛おしさで胸が一杯になり、より一層強く抱きしめるのだ。

「ナイン君?」

「どうした?」

「私のこと、愛しているの?」

少女は、照れくさいのだろうか、やはり彼に対して向きなおろうともせずに訊いてきた。

「愛している」

それに対して、団堂はためらうことなく答えた。

「そうなんだ。じゃあ、ナイン君、愛する私の願いなら何でも聞いてくれるんだよね」

「もちろんだ。俺のできる範囲なら」

「じゃあ・・・」

黒い髪の少女は、その艶やかなシルクを翻して、甘い匂いとともにこちらを振り向くのだ。

「死ね」

「・・・・！」

まず団堂は、振り向いた少女の表情が凍てつくような殺気に満ち溢れていることに戦慄を感じた。そして、次に左脇腹付近に鋭い感触が走って、そこがやけに熱い。

しばらくして、少女はバックステップで後退すると、団堂の身体から赤黒い血液が噴出して、少女の白い冷徹な肌と、その光の色をしたワンピースを汚す。

「詩・・季・・・」

そして、団堂は自分の身に起こったことをようやくにして認識する。刺されたのだ。

現に、前にいる少女は赤い血がべっとりこびり付いた出刃包丁を持って、怪しい笑いを浮かべている。

「あーっはっはっはっはっはっはっは。やった。やったぁ」

団堂は、次第に猛烈な痛みで立つことさえ困難な状況になり、その

場に膝を突く。

「お前、頭おかしいんじゃないの？ひゃーっはっはっはっはっは」

たっぷりと団堂の返り血を浴びた少女は、するどい包丁を片手に大笑いする。

「・・・・」

団堂は痛みに耐えながら、そんな少女の様子を見て、自分の間抜けさゆえ半ば自分をあざけ笑いたい気分になった。

そう、これは当然の報いなのだ。これは万死に値する罪を犯した団堂への天罰に違いない。神からの祝福を受けたようなこのシュチュエーションで、愛する人から包丁で刺されるという残虐刑は、まさに団堂にとってこの上ない罰である。今、まさに自分の中を駆け巡っている絶望感といえば、死刑宣告が確定したほどのものである。

「どう？苦しい？団堂。これが、私の受けた絶望。痛いだろう。悲しいだろう」

「クッ・・・・」

団堂は、口からも血反吐を吐き出す。口内を鉄の味が染み渡って気分が悪い。

「でもね、お前は私にこれをしたの。いや、これよりもっと酷いことをね。だから、こんなものでは済まされない。もっともっと切り刻んで、苦しめてあげる」

「へへ・・全く、そのとおりだ・・・」

そして、再び団堂は笑うのだ。もう痛くてどうしようもないから、

笑うしかない。ここで、この少女に殺されるのなら、それはそれで楽でいい。

「わかっているのなら、話は早いわ」

少女は、殺意に支配された鋭い紅闇の目を光らせて、ゆっくりと団堂の前まで歩いてきた。

「さようなら。地獄でまた逢いましょう」

地に跪く団堂を見下ろしていた少女は、光を反射してぎらぎらする包丁を振り下ろした。
かすかに刃が肉を切り裂いていくような音がする。

「・・・・!!」

だが、振り下ろされたはずの包丁は団堂の身体には突き刺さらなかった。変わりに、少女の絶句が声にならない声となって、団堂の耳に到達する。

「どうして・・・・」

少女は、か細い声で言う。狂気に駆られていたこの少女は、先ほどとは打って変わって動揺していた。声が震え、手がしびれているようになり、今にも泣きそうな顔をしているのだ。

「どうしてなの。どうして、こんな奴を・・・」

そして、団堂は顔を上げた。すると、団堂と包丁を持った少女との間に、苦痛に顔を歪めながらも、その白いワンピースを真っ赤に染

めながらも必死で笑顔をつくろうとしている少女がいたのだ。そう、団堂の目の前には同じ顔をした少女がふたり存在したのだ。

「詩季・・・」

だが、団堂からすれば、どちらが本物であるかは歴然であった。この目の前で自分を庇った少女は間違いなく彼女だった。少しおっとりとしたような、頼りない雰囲気は絶対に彼女にしか醸し出すことのできないものである。

「ナイン・・君・・・」

だが、うしろの少女の一撃は、詩季の背中を一突きにし、中の重要な臓器などにまで到達している。そのため、苦痛に耐え切れず、彼女は直ちに足から崩れるように団堂の胸の中へと倒れていった。

「おい、しっかりしろ!」

団堂は、自分の腹の痛みなどすっかり忘れて叫んだ。

「あ・・あ・・・」

後ろの少女は、包丁から手を放しては、放心状態になってしまっている。最もやってはいけないことをしてしまったからだ。そのため、極限的な自己嫌悪に苛まれているのだ。

「どうして、しーちゃんが、ここにいるの?このブラック・マリアの聖域に・・」

少女は、前の光景を見て、ただただ顔が青ざめていく。足が震え、

立っていることすらままならない。

「どうして、団堂なんて庇うのよ！！」

少女は、目の前の事実が信じられなくて、頭を抱えて苦しむのだ。
これ以上、この地獄絵図を見ていたらおかしくなってしまうから。

「あああああああああ！！しーちゃんの馬鹿ぁぁぁぁぁぁ！！！」

そして、少女は慟哭の果てに泣き崩れた。

そんな光景を見た団堂は、ようやくにして夢の呪縛から解き放たれ、自分の状況を認識した。あそこで気が狂ったように泣き叫ぶのは、沖まもるが作り出した幻影。いわば、彼女の悪意そのものを象ったもの。
だとすれば、あの黒い泡の群れによる攻撃、ブラック・マリアとは対象を永久の悪夢に引きずり込む効果を持つ、おそるべき精神方法攻撃である。

（詩季。お前はやはり、ずっと俺の中で見守っていてくれていたんだな。そして、ずっと俺を助けていてくれたんだ）

団堂は、自分の胸に眠る詩季を見ると、彼女はかすかに目を開いて頷いてくれた気がした。

（安心しろ。まもるは、俺が必ず救ってみせるさ。これ以上、お前を悲しませたりはしない。だから、再びゆっくりと眠ってくれ）

団堂は、少女の華奢な身体を優しく包み込むように抱きしめると、ゆっくりと目を閉じる。そして、彼の周りを青い光が包み込むのだ。

これによって、ありとあらゆる幻影の世界が瓦解する。

「まもる、もう終わりにしよう。こんな戦い・・・・」

「そんな・・・ブラック・マリアが、解かれてしまう」

団堂は、次第に現実世界に連れ戻される。それは短くも儚い夢の淵から帰還するようである。夢の中で得たものを全て失う代わりに、自分のあるべき世界へと帰るのだ。

だから、団堂の胸の中にいた少女も、もう、どこにもいない。相変わらず、彼はアニミストの中で独りである。

だが、全く寂しくはない。なぜなら、やはりこの少女は、団堂の心の中で自分を見守ってくれているから。ゆえに、もうおそれることなど何もない。これが、彼女の答なのだ。だからこそ、改めて言える。

「まもる、もうわかっただろう。お前のやろうとしていることに、なんの意味も無い。だから、もう止めてくれ。お前がこの戦いを続けることで一番傷つくのは、あいつなんだ」

ようやくにして団堂は、東京大学上空に帰還する。そして、彼の目の前には強大なアイアンメイデンが存在する。

「ちがう、ちがう。あれは全て幻だもん。あのしーちゃんは、偽者だもん。だから、私は、お前を殺すんだ」

「まもる！！」

アイアンメイデンは、いきり立ってアニミストに襲い掛かる。いかなるオーガをも粉砕しうる巨大な拳を振りかざし、アニミストを団堂ごと葬るのだ。

「お前は、大馬鹿だ！！」

アニミストは、より青く燃える。それは、超高温で輝くシリウスの星のように、閃光のように限りなく白い青で燃えるのだ。これはまさに、アニミストの心に眠る鬼神の怒りである。悪を弾劾する怒りの焔が、ここに炸裂する。

すると、アニミストの周囲には新たに2本のニルヴァーナが召喚され、合計5本の槍を武器とする。

「槍が、増えただと？」

そして、間髪入れず、5本のニルヴァーナは一斉にアイアンメイデンに襲い掛かる。

だが、やはりいずれのニルヴァーナも、アイアンメイデンの身体に突き刺さる前に超絶的なバリヤによってその攻撃力を奪われてしまう。

「バーカ。数を増やしたところで、そんなへなちょこな攻撃がアイアンメイデンに通用するわけがないだろう」

「いや、まだだ！！」

団堂は、攻撃力を失ったニルヴァーナをまだ使うのだ。それぞれのニルヴァーナは一斉に剣状に形を変えると、彼はこれらを可能な限り踊らせるのだ。くるくると宙を舞わせたり、交差して別の角度からの攻撃を試みたり、とにかくニルヴァーナによる剣の舞を行う。ニルヴァーナも、本体たるアニミストの色に合わせて白黒で構成されているのであるが、遠めにみるとその配色が海辺のカモメのように見える。そして、5本のニルヴァーナが舞う様子とはまるで、巨大な獲物の周りを無数のカモメが飛翔し、群れをなして翻弄するか

のような光景である。そのカマイタチのような翼をはためかせて獲物をひたすら切り刻むようなのである。

さらに、一斉に5本ものニルヴァーナが不規則かつ神速の速さで、飛び交い、踊ると、この戦場に音楽が生まれる。互いの剣が打ち付けあうことで、その音がリズミカルなパターンを刻んでくれるのだ。そのリズムに合わせて、カモメたちは舞うのだ。ここはまさに、戦場の舞踏会である。

それぞれの剣は失速することなく、幾度、その攻撃力を奪われようとも、何度もアイアンメイデンを目がけて太刀を振るう。ダンスに夢中になってしまったかのように、狂ったようにただただ踊る。

「これでは・・・防禦が追いつかない？」

アイアンメイデンの防禦能力は確かに驚異的なものである。しかし、それゆえに広範囲でバリヤを維持することはできないのだ。だから、攻撃の来るたびに、その都度、適切な位置にバリヤを置いて攻撃に備える以外には、この防禦能力を維持する方法はないのだ。

このような弱点を理解した団堂が取るべき方法はただひとつである。有無を言わさず、攻撃の集中砲火を浴びせて、あの鉄壁のどこかにあるわずかな綻びを解きほぐす以外にない。

「終わりだ、まもる」

そして、5本ものニルヴァーナによる畳み掛けるかのような圧倒的攻撃力の前に、遂に鉄壁のアイアンメイデンの隙を見つけた。そこを目がけて、ひとつのニルヴァーナが矢となって飛んでいく。

「きゃあああ」

1本のニルヴァーナが、アイアンメイデンの右腕を貫いて、これを

瓦礫のように崩壊させる。貫通部分の内部から爆発を生じさせ、装甲を粉々にするのだ。

「あいつを誰よりも理解していたお前が、何であいつの本当の気持ちを理解できない？」

まだまだだ。右腕の破壊により、さらなる突破口は開かれた。より大きくなった鉄壁の隙間から、次々とニルヴァーナが侵入し、アイアンメイデンを破壊していく。

「本当は理解しているはずだ。そして、お前のやろうとしていることは、お前のただのわがままだってことも、当然に理解しているはずだ。まもるなら」

ニルヴァーナは、さらにアイアンメイデンの装甲を引き剥がしていく。防禦に全精神を回してしまっている彼女に、再生を促すほどの精神力は残されていなかった。

「そして、自分のしたことのむなしさに、一番苦しめられるのはお前自身なんだ。そんな親友の姿なんて、誰もみたいはずないだろ。そんな簡単なことに、何で気づかないんだ、まもる」

そして、ほとんどの装甲を失ったアイアンメイデンに対し、４本の槍が突き刺さって、これを串刺しにする。

「あいつの親友だと思っているのなら、それくらい気づけ！馬鹿！！」

そして、最後にアニミストは1本のニルヴァーナを両手剣に変えて、携える。そのまま、串刺し状態のアイアンメイデンの少し上に虚物

化移動して、とどめの一撃を振り下ろしたのだ。
これによって、アイアンメイデンは青い焔に包まれて、その身を焼かれていく。

「いや・・・そんな・・・この私が・・・・」

ニルヴァーナに秘められし、外法の力が滲み出す。それは、怒りの焔によって悪を蒸発させる正義の力である。

「ちくしょう・・・ちくしょう・・・」

アイアンメイデンは、粒子状へと分解されていく。あれほど巨大なオーガは、本来あるべき場所へと還っていくのであった。

第52話　人として無価値。生きることすら無意味

心が消えていく。
目に映る世界が崩れていく。
ぐらぐらして、足元に何も存在しないかのような不安感。
酷い吐き気がする。
ほら、大嫌いなあいつらが向こうで手招きしている。
嫌だ。絶対に嫌だ。
あそこには逝きたくない。
幸せまで、あと一歩だったのに。
どうして・・・どうして、私の幸せは、こんなにも小さいものなのに、流砂のように指の隙間から零れ落ちていってしまうのだろう。
私は、ただ、人並みの幸せが欲しかった。
金も、地位も、名誉なんて要らない。
ただひとり、この心を理解してくれる人がいればそれでよかった。
それって贅沢なことなの。
求めてはいけないものなの。
その程度のわがまま、聞いてくれてもいいでしょう。
最初で最後の私のわがままなのだから。

でも、そこから得るものなんて何もなかった。結局、全てを失って、何もかもが終わった。きっと、あの人は、自分のことを見限ってしまったのだ。それもそのはずだ。自分のわがままはいささか無理難題なのだ。無理が通れば道理が引っ込んでしまう。
そんなこと、分かっていたはずだ。あの人の心の動きは、自分が誰よりも理解しているはずなのだ。当然、自分のしようとしたことを、あの人は意図していないはず。あの人は、人を憎むことなど知らない。あの人の辞書に憎しみはない。あの人はそういう人なのだ。だから、私のしたことに賛同してくれるはずはない。あの人なら、絶

対に私を止めたに違いない。
でも、何かをせずにはいられなかった。心の奥底で沸きあがる衝動を抑え込むことなどできなかった。私は所詮、鬼に選ばれた憐れな少女。その宿命に抗うことはできない。ふきこぼれそうな憎悪の向く先にしたがって、何かをせずにはいられないのだ。

そして、その結果がこれだ。ただひとりの親友にも見放され、絶対的な力も失い、あとは死を待つだけの隔離病棟の患者みたい。憐れだ、憐れ。これが他人の人生なら爆笑ものだが、自分はまさに当事者である以上、全く笑えない。
本当に、酷い人生だ。神も仏もいないのだろうか。もしくは、それに準ずるものでもいい。人外の力で、人を救うことのできる存在はいないのか。この際、なんでもいい。助けて欲しい。
だが皮肉なことに、私の周りには、醜い鬼しかいないのだ。果たして、こんな人生があっていいのだろうか。
そんなはずはない。生まれてこない方がよかった、そんな人生なんて惨め過ぎる。
それなら、私は、なぜ生まれたのか。何のために生まれたのか・・・。
教えてよ。しーちゃん・・・。

（二）
東京大学上空

そこには、ルビーのような真っ赤な血液の色をした宝玉が5つきらめいていた。それらは、4本の巨大な槍の先端部分と、1本の両手剣の刃先にくっついて、太陽の光をさんさんと吸収して、この世のものとは思えない怪しい輝きを放っていたのだ。それはまるで脈打つ血の流れのように、なまなましい生命の鼓動を感じさせるヴィヴ

ィット・カラー。
また、その４本の槍は、役目を終えた斬頭台のように、恐怖のシンボルとして静寂を維持しながら、ただ何もない宙に漂っている。そして、その処刑執行官たるオーガは、左手に不相応に巨大な両手剣をだらしなくぶらさげるように持って、呆然と立ち尽くしていた。

「まもる！」

団堂は、強大な敵であるアイアンメイデンを、そのパイロットを除いて、跡形もなく浄化して見せたのだ。団堂のアニミストを軽く踏み潰すほどの巨大なアイアンメイデンであったが、その大量質量にもかかわらず、徹底的な浄化を促すことにより、完全に滅した。ただ、アイアンメイデンの執行官、沖まもるは、アニミストの巨大な手の平の上で目を閉じて横たわっていた。彼女の顔の色は、血の気が引いてしまったかのように真っ青であり、ヴァイタリティの欠片も感じることができない。

「しっかりしろ、おい！」

団堂は、コクピットから降りて、まもるの下へと向かう。アニミストの腕の上を走って渡るのだ。

「まもる」

彼は、倒れている少女を抱きかかえる。彼女に触れた途端、その身体の酷い冷たさに驚愕する。人のぬくもりを感じさせないどころか、まるで氷のように、触れるもの全ての温かみを奪っていくようである。

「おい！」

団堂は、彼女の頬を2～3発はたいた。それに促されるように、まもるの眉がピクリと動いた。

「・・・ん・・」

そして、彼女の目が次第に開いては、数回まばたきして、虚ろな瞳を覗かせてくれる。

「しー・・ちゃん・・・」

まもるは、完全に目を開くと、目の前にいる男に触れられていることを認識し、急にはっとするようにして、顔つきが厳しいものに変わった。

「私に、触るな!!」

まもるは、突然に団堂の腕を強く振り払って、飛び起きる。そして、バックステップで3歩ほど後退し、団堂とは距離を置く。

「まもる、もう戦いは終わったんだ。早く、戻ってこい。そんな身体で何ができる?」

それを聞いたまもるは、急に大声で大空に向かって笑い転げた。

「あはははははは。何が終わったって?まだ、これからよ。アイアンメイデンはなくなっちゃったけど、お前が生身の身体で私の前に現れてくれたおかげで、もう一度、お前を殺すチャンスができたんだ。だから、まだ終わっていない」

まもるは、なにかをセカンドポーチから取り出しては、無防備な団堂に護身用の小銃を向けた。それは小柄な女性でも容易に扱える銃器であり、その殺傷能力は相対的に低いが、この距離で急所をうちぬくのであれば大人の人間ひとりを殺すには十分なほどの威力はある。そうでなくとも、痛手を負わせたうえで、この地上２０メートルほどある高所からこの男を大地に突き落とせば、十分に目的を達しうる。

「まもる・・・」

「ひゃはははははは。さようなら、団堂。一足先に地獄に堕ちな」

まもるは、ためらうことなく団堂に向けて、一発だけ撃つ。護身用なだけに、からっからの軽い銃声が、静かに冴えわたる広大な天空に寂しく響き渡る。それの爾後、団堂は少し呻いては、膝をついた。

「・・・・どうした・・・？」

団堂の左腕から、血が噴き出る。ぽたぽたと、重力に従って左の手を伝い、アニミストの手の平に彼の血が落ちる。

「俺を・・・殺すんだろう。そんなところ、狙ってもしょうがないだろ？それとも、俺を、殺せないのか・・・」

団堂は、苦痛に歪んだ声で挑発する。

「う、うるさい！うるさい！！」

彼女は、頭をぶんぶん振って、現実の結果から目を背けようとする。一番殺してやりたかった男を今ここで、簡単に殺すことができる。なのに、この自分に限って、この絶好のチャンスをものにすること

ができないとは、とうとう自分にもやきが回ったと思わずにはいられない。こんな大切なところで団堂の急所をはずすなどあってはならないことなのだ。

まもるは、当惑したまま目をぎゅっと閉じて、狙いを定めることすらせず、2発だけ撃つ。だが今度は、団堂にかすりもしない。

「まもる、お前はやっぱり・・まもるだよ・・。わかっているんだろう。あいつの気持ち。だから、迷っている・・・。そうなんだろう?」

「ちがう。私は、お前を殺したいんだ」

まもるは、団堂に再び銃を向ける。そして、その引き金を引くのだ。だが、ブリキのぶつかるような乾いた音だけが響くだけで、何も起こらない。どうやら弾切れらしい。護身用なだけに、3発しか弾が入っていないのだ。それに気づかない彼女は、幾度か引き金を引くも、相変わらずおもちゃのような音が響くだけで、弾は出ない。しばらくすると、彼女の手は小刻みに震えだした。自分の無能さゆえに絶望し、もはや放心状態となっているのである。

「まもる、俺は・・お前になら殺されてもいいと思っている。俺のしたことが、お前をどれほど苦しめたのか・・・痛いほどわかるから・・・」

団堂は、負傷箇所を押さえてよろよろと立ち上がると、少しずつ、彼女との間合いをつめながら言う。だが、まもるからすれば、自分のことをこれだけ追い詰め、アイアンメイデンまでも消滅させておきながら、いまさらに殺されてもいいなどと抜かす、この男の矛盾挙動に苛立ちを隠せないはずである。

「なら、今、ここで死ねよ!!そこから飛び降りるなりして、今す

ぐ、ここで、死ね！！」

まもるは、無価値となった護身用小銃を放り投げて、強く喚き散らしながら大地を指差した。

「悪いな、今はまだ死ねない。でも、全てが終わったら、必ずあいつのところへ行く。約束する・・・あいつの親友との約束だからな・・・絶対に守る」

「ふざけるなよ・・・。お前の戯言なんて、いったい誰が信じる？どうせ、ひとりのうのうと生き延びて、幸せな人生でも送る気なんだろう？それじゃあ、しーちゃんが、かわいそうだよ・・。お前に・・・愛している人に信じてもらえず、殺されていった、しーちゃんが、かわいそうだよ」

まもるは、その場にへたり込んだ。そして、彼女の目から大粒の涙がこぼれ出る。もう、彼女はあらゆる手を尽くしたが、他にこの男を殺しうる手段も思いつかないのである。だから、悔しくて、やるせなくて、泣くしかなかった。

「まもる、俺はもう、幸せになんてなれないよ。一生不幸でいるさ」

「うるさい、口だけならなんとでも言える。お前の言いたいことを私に信じさせたいなら、そこから飛び降りて、死ね！！」

とはいえ、団堂も手の施しようがないのは同じである。まもるは、団堂の言葉に聞く耳を持たず、もはや何を言っても無駄だ。

彼もこの少女を救ってやりたいのはやまやまだが、当の本人にとっては、団堂に助けられるなど恥辱以外の何ものでもないはずである。

ふと、そのとき、ふたりを大きな影がつつむ。上空に光を遮るように、何かが現れたようだ。

『まもるちゃん』

まもるは、自分の親友と似た声の感じがする方を、とっさに向いた。すると、桐生亜季の乗る、鬼女アリスが来てくれたのだ。アリスは、アニミストの立っているすぐ傍に着陸して、アニミストが手を伸ばす先に重ね合わせるように、手を伸ばす。どうやら、団堂たちのところへ行くための架橋をしたらしい。

「さっきの、しーちゃんの偽者。お前まで、私を馬鹿にしにきたのか」

まもるは、親友の愛機を乗り回す、この偽者が気に入らなかった。そのため、絶望のため怒る元気もなかったが、残りの力を振り絞って、すさまじい形相でアリスをにらみつける。

「まもるちゃん、お願い。私の話を聞いて」

だが、亜季はめげることなく説得を続けようとする。そこで彼女は、アリスのコクピットを開扉して、上半身をのぞかせた。団堂はそこで見た亜季の髪型が変わっていることに気づく。すなわち、出撃前において彼女の髪の毛は腰まで伸びていたものであったが、それをばっさりと切り、肩にかかるぐらいの長さにしたのだ。それはまるで、妹の姿に酷似していたのだ。

「そんな・・・本当に・・・本当に・・・しーちゃんなの？」

まもるは、アリスのコクピットから出てきた女性の見目形を目の当たりにすると、目を皿のようにした。まもるから、亜季のいる地点までは多少の距離があるが、遠目に見れば、おそらくほとんどの人間が姉なのか妹なのか、全く見分けがつかないだろう。特に、精神

的にやつれきっているまもるにとっては、どうしても亜季のことが妹の方に見えてしまうのだ。

「うん、そうだよ。まもるちゃん。私は、大丈夫だから。まもるちゃんはもう、戦う必要なんてないの。これ以上、辛い思いなんてしなくてもいいの。だから、一緒に帰ろう?」

亜季は、足元に気をつけながら、ゆっくりとまもるの下へ向かう。そして、亜季は、時折、団堂の方にアイコンタクトを送って、『あとはまかせて』という意思表示をしてくれた。

「しーちゃん・・・。本当に、本当に・・しーちゃんなんだね・・・」

まもるがほろほろ泣いている様子を見ると、彼女は完全に詩季が生きているものと誤信しているようである。そのため亜季のやり方が、団堂からすれば、まもるを騙しているような気がして気が進まなかったが、彼はそれ以外に有効な手段を思いつくに至らなかったため黙認する。

さっき、まもるの身体に触れてわかったが、彼女はもう長くは持たない。また、この至近距離で銃をはずしたことからも、彼女の視力はほとんど奪われつつあるのだろう。あの身体の冷たさは、限界をはるかに超える精神力を費消した証拠である。アイアンメイデンの維持コストが、遡及的に彼女の精神を蝕んでいるのだ。

そのため、まもるが、亜季が詩季であると誤信するのも、それはそれで好都合かもしれない。たとえそれが彼女を欺くような方法であったとしても、彼女を救ってやれる方法があるのなら、嘘も方便というもの。彼女が、亜季のことを本当に詩季だと思っているのなら、それを妨害する理由はなにひとつない。

「まもるちゃん。もう、いいんだよ。私のために、まもるちゃんは、まもるちゃんなりに、一生懸命戦ってくれたんだよね。だから、まもるちゃんの気持ち、痛いほど伝わったよ」

「しーちゃぁん・・・、わたし・・わたし・・・」

とうとう亜季は、まもるのすぐ近くまでやってきた。そのことは、亜季が団堂の近くまで来ていることを同時に意味しているが、髪を切った亜季は、団堂でさえ、彼女が妹にそっくりであると思ってしまうほどである。そのため、亜季がまもるに近づくにつれて、彼女から憎悪の焔が浄化されていくようになり、次第に気弱なまもるの表情へと戻っていった。そして、消えていく憎悪と反比例するかのようにぶわっと涙があふれ出る。

そして、亜季はまもるのすぐ目の前に跪いて、目の位置を合わせると、迷子の少女をあやすように微笑んだ。

「ありがとう。まもるちゃん。ずっと、私の味方でいてくれて。私のために、こんなに傷だらけになってまで戦ってくれて」

「ううん。ちがうの・・。本当は、しーちゃんのためなんかじゃない。本当は、私のわがままなの。しーちゃんのためにならないと分かっていたのに、私が、馬鹿だったから、団堂さんを・・・しーちゃんの大切な人を、殺そうとした・・・」

まもるは、ついに自分の気持ちを告白した。そして、親友に対して嘘をついていたことの後ろめたさで胸が一杯になってしまい、彼女の涙は留まるところを知らなかった。

「まもるちゃん・・・。本当に、泣き虫なんだから」

そして、亜季は、這いつくばるようにぐしゃぐしゃになっているまもるを、優しく抱いた。

「ごめん・・・ごめんね。しーちゃん・・・。私は、しーちゃんを盾にして、しーちゃんを、一番傷つけることをしてしまった。本当に、ごめんね」

そして、まもるは、亜季の胸で泣いた。涙も鼻水も、お構いなく亜季の服に垂らし放題である。

「いいんだよ。最後の最後で、まもるちゃん、踏みとどまってくれたんだから。みんな、無事だったんだから」

亜季は、まもるをあやすように、その背中を優しく撫でる。

「しーちゃん、こんな私を・・赦してくれるの？しーちゃんの想いを、踏みにじるようなことをした、こんな私を・・・」

「何言っているの。どんなことをしたって、まもるちゃんは、私の大切な親友なんだから。赦すに決まっているじゃない。まもるちゃんがいたから、私は、ここまで来れたんだよ。だから、まもるちゃんが思っている以上に、私は、まもるちゃんが、大好き」

亜季は、涙を浮かべた笑顔で言った。それを聞いたまもるは、強く、親友の幻影を抱きしめた。

「ありがとう、しーちゃん。私も、しーちゃんが思っている以上に、しーちゃんのことが、大好きだよ。だから、ずっと・・ずっと・・・しーちゃんのこと、見守ってあげる。ずっと、しーちゃんが団堂さんと幸せでいられるように・・。それが、まもるの、生きる意味だから・・・」

「うん、そうだね。まもるちゃん・・」

まもるは、改めて、親友の幻影の深紅なる瞳を見つめて、涙で琥珀のようになったきれいな瞳を覗かせて、微笑んでくれた。しかし、まもるが言い終わるころ、亜季を強く抱きしめていたはずの彼女の腕の力が急激に弱まる。そして、腕が使い物にならなくなってしまったのかのように、地に落ちた。

「まもるちゃん・・？」

「それで、よかったはずなんだよね。私のするべきことは、最初からすぐそこにあったのに・・・、遠回りしちゃったよね・・・。でもね、実は私、団堂さんのことが羨ましかったんだ・・。だって、しーちゃんを独り占めできるんだもん・・」

亜季は、そんな彼女に異常が発生しつつあることを認識し、切ない表情で、まもるの言い分を聞いてあげた。

「ああ・・・、私、なんだか、とても眠くなってきちゃった・・・。少しだけ、眠ってもいいかな・・。すごく寒くて、身体が言うことを訊いてくれないの。無理して、メンタルポイントを遣い過ぎちゃったのかな・・・。ざまぁみろ・・だね・・」

そして、今度は、まもるの瞼が重くなってきたようだ。瞳孔がとじられてしまったように、彼女の瞳は輝きを失っているのだ。

「ダメよ、まもるちゃん！私のこと、ずっと、見守っていてくれるんでしょう？やっと見つけた、まもるちゃんの、生きる意味なんでしょう？こんなところで、眠ったらダメ」

亜季は、強く、まもるの肩を揺さぶった。だが、とじかけている彼女の瞼が、再び持ち上がることはない。

「本当に・・・しーちゃんは・・・いつも、厳しいよね・・・。でも、私、すごくがんばったんだよ・・・。いっぱい・・いっぱい・・がんばったんだよ・・。だから、少しくらい・・休んでもいい・・よね？大丈夫、ほんとに、ほんとに少しだけだから・・・」

まもるの言葉はかすれつつある。そしていよいよ、まもるの首は据わらなくなってしまうようになった。亜季が、彼女の肩を揺さぶるたびに、彼女の小さな頭が大きく揺れる。

「ダメよ！まもるちゃん」

「えへへ・・・大丈夫・・・。目が覚めたら、また・・いつもみたいに・・しーちゃんのこと・・守ってあげられるから・・・だから・・泣かないで、しーちゃん・・・」

まもるは、だんだんと口を開かなくなり、最後の方は何を言っているのかよくわからないほどである。ただ、最後の力を振り絞って亜季の瞼に溜まった涙を、感覚がまるでなくなった手で拭いてあげるのだ。

「まもるちゃん！！」

亜季は、最後に一度だけ、彼女の肩を強く揺さぶった。

「しーちゃんは・・・私が・・・まも・・・」

まもるは、最後に笑顔を作った。だが、その作られた笑顔は一瞬で消える。そして、それ以降、まもるが動くことはなくなった。

「まもるちゃん・・・」

亜季は、まるで自分の親友を名残惜しむかのように、沖まもるの遺体を強く、抱きしめるのだった。

いま一度だけ問う。
生きる意味とはなんなのだ。
幸せを求め、足掻くことなのか。

ならば、彼女は『生きた』といえるのか。
彼女が最後に見つけた、自分の価値。生きる意味。
それは、既に履行不能だというのに、そんなことにも気づいていない。
そうだとすれば、彼女は無価値である。生きることに意味は無い。
なぜなら、彼女の価値実現が不能だからだ。
したがって、彼女は足掻いたところで、幸せが得られない。

よって、彼女は『生きた』とはいえない。

だが、彼女は最後に笑っていた。それでも、彼女が『生きた』とはいえない、といいきれるのだろうか。
いや、いいきれまい。蓋し、彼女は、最後の最後で『生きた』のだから。

第５３話　突入、東京大学

―アガメムノン下層ブロック倉庫内―

団堂ら数名の、沖まもると交友のあった者たちは、アガメムノン下層ブロックの一角にある小さな倉庫に集まっていた。もっとも、ここは本来の機能としては搬入された物資等を保管しておく倉庫であるものの、ふたりの遺体を安置するに適当な場所が他にないため、即席の遺体安置所として利用している。
そのため、ほのかな線香の香りが立ち込めるこの部屋において、生前、仲のよかったふたりは寄り添うようにして安眠しており、奇しくもこのような形で再会を果たしたのであった。

「まもる・・・あんたは本当に馬鹿よ・・・」

弥生遼子は彼女の遺体のすぐ横で、感情を取り払ったかのような表情で、その冷たくなったからだに思いを投げかけた。その横で団堂は、静かに目を閉じては手を合わせて、ふたりに黙祷を捧げていた。

「まもるさぁん・・・・」

死者の冥福を祈る弥生の反対側では、その秘書、田中愛が数珠を持って涙・鼻水をだらだらと垂らしていた。静寂が支配すべきこの部屋で、彼女の鼻をすする音だけがやたらとうるさい。

「本当に、まもるは、幸せだったんでしょうか」

団堂は、ふと誰かに対してつぶやいた。なんとなく、それに対しての答が欲しかったからだ。だから、ここにいる特定の誰かに対して

というわけではなく、霊となってまだ彷徨いつつある彼女に対してというわけでもなかった。答えてくれるのならば、誰でもよかった。

「幸せだった・・と思うわ」

団堂の問に対して、桐生亜季が答をくれた。彼女は、団堂の隣で、彼と同じように手を合わせて、目の前で眠るまもるの安らかな表情を見つめながらそう言った。

「まもるちゃん、最後に笑っていてくれたもの」

亜季は、悲しみが併存するような笑顔を作って、団堂を見てそう付け加えてくれた。それは、無理矢理作ったような笑顔で、見ている団堂にとってはやけに痛々しいものであった。

幸せであった。そう言い聞かせるしかないのだ。亜季は、まもるが最後に笑いながら逝けるようにしたとはいえ、彼女を謀ったのだ。それが到底赦させるようなものではないことは、彼女でも重々承知していた。ガラスのように繊細な彼女の精神であれば、罪の意識が無いはずが無い。とはいえ、果たしてそれが結果的によかったかどうかは、もうすでに検証不能である以上、最後にまもるが見せてくれた笑顔を信じるしかなかった。

「大丈夫よ、亜季。あんたは、まもるを救った。それが結果よ」

ひとまず別れを告げ終えた弥生は、亜季の肩にぽん、と手を置いた。

「先輩・・・」

亜季は、その手の先にある弥生のキザな顔に目を向けてみる。自分を心の中で責めたたて今にも泣きそうな亜季から、涙があふれそう

である。

「今頃、まもるのやつ、あの子と幸せな時間を送っているわよ」

いつもは腹の底の読めない生意気な後輩ではあるが、弥生は意外にもその弱い部分を見て、亜季のことがなんとなく可愛く思えてきて、つい、らしくもない優しい表情を浮かべてしまう。

「だから、あの子達の魂の安らぎを邪魔しないためにも、チャプター9を止めないとね」

弥生は、気持ちが沈んできている連中を奮い立たせるかのように、この部屋にいる全員に対してそう言った。

「そうですね、先輩・・」

亜季は、目にぽんぽんとハンカチを当てるようにして、こぼれそうな涙を吸わせていった。そして、今度は作り物ではない、本当の笑顔を浮かべる。それを見て安心した弥生は、ドアの方へと向かう。

「じゃあ、改めて最終ミッションに入るわよ。各自、お別れがすんだら持ち場にもどってちょうだい」

「あ、理事ちょぉ。私も参ります」

こういう空気が余り好きではない弥生は、一足早く、持ち場に戻っていく。すると、熱心に冥福を祈っていた秘書も、彼女に引っ張られるかのように、駆け足で自分の持ち場へと戻っていってしまうのであった。

「さて、俺も行かないとな。チャプター9の最終段階まで間が無い・

・」

団堂も、弥生達にならって、退出の意思を見せることにした。

「曹士君、怪我は大丈夫なの？」

亜季は、ひとり部屋を出て行こうとする戦士の背中へと呼びかける。

団堂は、先の戦いにおいて、まもるに左腕を撃たれたため負傷しているのだ。だから、彼の左腕には包帯が巻かれて、赤い色がじんわりと滲んでいた。

「アニミストに乗っている限り、多少、執行官生命維持機能が働くので、問題はありません。それに、この程度の傷で音を上げているわけにはいきませんから」

沖まもるは、自分の守りたいもののために、その命すらも賭けたのだ。そんな彼女の戦いに触発され、団堂の決意はより固いものとなっていた。

「だから、もう、行きます・・・。俺は、もうここに戻って来れないかもしれないけど、その時は、亜季さんだけでも、幸せになってください」

団堂は、全てを悟ったかのような、覚悟の笑顔を亜季に対して向けた。それはまるで、あの時、妹が亜季に対して最後の『いってきます』を告げたときの雰囲気に似ていた。もう二度と会えないと確信しなければならない強烈な不安感が、再び、亜季の心に突き刺さるのだ。

「曹士君」

亜季は、その感覚が二度目であったがために、還って来れないとわかっている者をただ逝かせるわけにはいかなかった。だから、彼女の身体は、無意識に団堂を求め、走った。

「亜季さん・・」

亜季は、強く団堂を引きとめた。ぎゅっと、彼の傷だらけの身体を抱きしめるのだ。

「お願い、約束して。絶対に、生きて還るって。貴方までいなくなってしまったら、私、もう生きていけない。だから、あの子たちを弔うために、ひとりだけ死んでしまうなんて、私、赦さないから」

「亜季さん・・」

「亜季って呼んで」

「亜季・・」

「曹士・・」

そして、亜季は団堂を無理矢理自分に振り向かせて、その乾いた唇にキスをした。団堂は、詩季の御前において、こんな真似をするのがいかに罰深い行為であるのか認識していたが、何が何だかわからなくなって、もういいや、と未必的に亜季の身体を抱きしめた。やはり、いかに死を覚悟しても、寂しいものは寂しいのだ。その寂しさに加えて、髪型まで愛する人そっくりな人がここにいるのだ。団堂にとってすれば、不可抗力であるといわざるを得ない。

「・・・」

しばらくして、ふたりの唇は離れた。

「曹士、愛しているわ」
「亜季、でも、俺は・・・」
「わかっているわ。私は所詮、あの子の代わり・・。でも、それでいいの。貴方を愛せるなら、それで・・・」
「亜季、ありがとう・・・」

団堂は、この女性が、あいつに似ているからという理由ではなく、ただ純粋に桐生亜季という女性個人が持つ、固有の健気さが愛おしくなって、強く抱きしめた。

「俺は、必ず、ここに戻ってくる」

その団堂の言葉には、つい先ほどの言葉に込められていた、生の放棄はなかった。だから、彼は必ずここに還ってくる。そう信じることができた。

「いってらっしゃい、曹士」

団堂は、亜季をひとり部屋に置いて、彼のオーガ・アニミストのところへと向かった。

（二）

団堂は、いろいろとイレギュラーはあったものの、ようやくにして敵の本拠地である東京大学の真上に到着した。

「これは・・」

ところが、以前、ここに来たときとは打って変わって、大学の様子は豹変してしまっていた。大学の中心が巨大な筒状にくり抜かれ、

その空洞は地下の奥深くまで続いているのだ。そして、その奈落へと続くような穴の底からは、一筋の緑色の光が天へ向かって上っている。

「この奥に、袴田がいる」

団堂は、その穴から死者たちの手招きを感じるが、ためらうことなく、その地獄へと続く途を下っていく。穴を下れば下るほど、死者たちのうめき声は強まる一方である。さすがに、引き返したくなるという気分にまではならないものの、ここにはいたくないという気持ちにはさせる。この穴の中は、人間たちの住まう外界とは明らかに異なるのだ。瘴気が纏わりついてきて、並の人間であるならば、それだけで魂が砕かれてしまいかねない。

「あの野郎、悪趣味なことをする」

だが、これは袴田の団堂に対する、インヴィテーションのようなものである。本当の恐怖は、この先にある。アトラスはまもるが斃してくれたとはいえ、なにせまだ高等執行官が残っている。そのうえ、最後には袴田まで控えている。この程度でびびっていては、先が思いやられる。

「それにしても、これ、長いな」

団堂は、天へと伸びる緑の光を逆にたどっていくが、いつになっても到着点は見えない。いったいどれほど下っていけばいいのだろうか。いや、そもそも下へ向かっているかさえも怪しい。もう、ここは外法規則が支配する外道たちの世界なのだ。物理法則など、何の役にも立ちはしない。

団堂は、あまりに長い直線状の途をただ機械的に下っていたがため

に、考えることが無さ過ぎて、ふと、これまでのできごとを振り返り始めた。

そもそも団堂は、この世界を良くするために、外法学に手を出した。

人が人を支配するために必要なのは恐怖である。しかし、この時代において恐怖による統治は事実上困難であることはいうまでもない。なぜなら、このたるみきった民主過程がそのような統治を絶対に許しはしないからだ。マニフェストに恐怖政治を掲げるものなら絶対に当選は不可能であるし、仮に当選後に翻意して恐怖政治を行うにしても、事後的にその政治家は政治生命を絶たざるを得なくなる状況に置かれてしまう。

しかし、だからといってこのままたるみきった当たり障りの無い政治を続けていけば、やがてこの国は終わる。全ての人間を不幸にして、何もかもが崩れていくのだ。だが、この世界を救うための唯一の手段である恐怖に、もう人は騙されない。ならば、もう打つ手はないのだろうか。

そんなとき、人の常識を覆す、魔法のようなものが団堂のもとに舞い込んできた。それこそ、外法である。

外なる存在が生み出した、絶大なる力を持つ、窮極の法規範。これこそまさに、神が生み出したる法と言っても過言ではない。ヒトの手による法の解釈・適用を待たずして、神の目が要件を充足したと認めるだけで、直ちに外法効果が発生するのだ。これだけで団堂の手は震えた。

しかし、それだけではない。その外法典第9章の規定。それは、この世界を強制的に革新することができる機能を有する。まさに、団堂の求めた理想の力であった。これさえあれば、人々を恐怖に縛り付けておく必要も無い。その他、あるかどうかもわからない有効な

手段に訴えかける必要も無い。ただチャプター9の規定に従っていれば、世界は団堂の理想の世界へと一瞬にして変わっていくのだ。そして、この世界の閉塞状態を打ち破るためには、もうこれしかなかった。

だが、チャプター9起動のためには50億メンタルポイントという膨大なコストが必要であった。

そこで、仲間であった袴田馨は、未来の無限大なる国民の幸せのために、現在の国民およそ1億人を犠牲にすることを思いついたのだ。いずれにしても、チャプター9が成功すれば、世界構造の塗り替えのために全員が死滅する。建物を建て替えるためには、もとの建物を全壊させなければならないのと同じだ。ただ、チャプター9の場合は、建物の建て替えとは異なり、中の住人が避難するという方法を採ることができない。それならば、コストを集めるために、人間を生贄にするしかないと、計画を実行することにしたのだ。なにせ、未来永劫、無量大数の日本国民の幸せという反対利益が待っているのだから。失われる犠牲に対して、何億倍もの人間の幸福が得られるのならば、それもやむをえないと、団堂は本気で信じていた。

そして、団堂は、外法生命体オーガを生み出した。殺した人間をメンタルスフィアへと換えて、オーガとして蘇らせるのだ。オーガたちは、外法典第6章の規定により、無数に創ることができる。そのコストとなるメンタルスフィアがある限り。これによって、団堂は、オーガを創って、創って、創りまくったのだ。そして、世界に放って、ヒトを殺し、さらなるオーガへのコストへと換える。それを繰り返して、効率よくチャプター9のコストを集めたのだ。

しかし、団堂は、途中でチャプター9に疑惑を抱くようになっていた。本当に、こんなことをして、人々が幸せになれるのだろうかと。1億もの人間の不幸の上に築いた幸せに、いったいどれほどの価値

があるのかと。

団堂がそう考えたのが最後、自分たちのしていることがただの虐殺に思えて仕方がなくなっていた。オーガに逃げまとう人々の叫びを聞いて、母を求め泣き喚く子どもを目の当たりにして、そこに幸せなんて欠片も無いことに気づいたのだ。そして、それは同時に団堂を戦慄させた。怖かった。自分は、とんでもないことをしたのだ。こんなこと、世界の滅亡を助長させるだけじゃないか。そう考えた団堂は、罪の意識に苛まれ、苦しみ始めたのだ。

そのあと、団堂がしたことといえば、袴田の下を去るだけであった。袴田をはじめとした、彼の賛同者らは、もう完全に狂っていた。外法の力にとりつかれて、ただ世界を滅亡させるだけに存在していたのだ。

いうなれば、外法典とは餌である。この世界を外なる世界へとつなぐための餌だ。外なる存在たちは、この世界という大きな獲物を得るために、外法典という小さな餌をこの世界の人間に与えた。これは、仕組まれた罠なのだ。袴田は、罠にかかった憐れな魚で、この世界という大きな獲物を邪悪なる存在に引っ張ってあげているのだ。所詮、団堂は邪悪な神々の手の平の上で踊らされていたに過ぎない。

「ん・・出口か」

ふと、ある程度進んだところに、たどってきた緑色の光の光源が見つかった。そこだけやたらと、強い光を放っていたのだ。団堂は、思い切って、その光の中へと飛び込んでいった。

（三）

アニミストが光の中へ飛び込むと、すぐに目の前には広大な空間が広がっていた。そこは、なんとなくドーム状であることがわかるも

のの、縁部分が何処にあるかさえもわからないほど広大な空間である。なぜ、こんな地下にこれほどの空間が埋まっているのか、見当もつかない。もっとも、すでに外法規則の支配する世界であるところ、常識で考えるのは無意味であるが。

「ん？なにかくる」

ふと、アニミストは殺気を捉えたようだ。位置は背後。
団堂は、絶妙なタイミングを捉えて、後方の一撃を回避する。
すると、巨大なバスタード・ソードが彼の目に留まった。

『よく避けたな、ナイン。いや、団堂曹士』
「ゲイボルグ・ディアボリカ・・・。グレイなのか」

そして、団堂の目の前には、大きな黒い翼をはためかせて巨大なバスタード・ソードを携えた漆黒の堕天使が舞い降りたのであった。
その分不相応にでかい大剣を持つオーガなど、団堂はひとつしか思いつかなかった。

『そうだ、俺はグレイ。このときをずっと待っていたぜ、団堂。そして、お前のオーガ、アニミスト』
「グレイ、なぜお前がここにいる。そして、なぜアニミストを知っている？」

グレイは、ここでチャプター９が行われることを知ることができないはずである。また、アニミストを見たこともないだろうし、名前など知る由もないはずである。団堂は、それが何となく引っかかっていた。

『私だよ、団堂』

突然、グレイの声とは全く性質の異なる、冷徹な声がこの広大な空間を木霊した。それと同時に、あまりにも長い尾とともに、すさまじい力を放つオーガがここに現出する。

「高等執行官アーミタイル。サードか」

『覚えていただき光栄です。団堂』

アーミタイルが現れたのだ。その長い尾は、この広い空間にもかかわらず、しっかり収まっているのだろうかと思わせるほどである。

『そうだ。サードの旦那だよ。あんたのことは、サードの旦那からいろいろと教わったぜ、団堂。それと、お前のアニミストのことともな』

グレイは、自信満々にそう言って、大剣の先をアニミストへと向けた。

「教わった・・？」

だが、団堂を戦慄させたのはこのふたりが組んだことであった。意味がわからない。なぜ、グレイはこの冷血漢と組んで、自分と相対する必要があるのだ。

「サード、お前、袴田にこのことは言っているのか？」

『言ってはいないさ。だが、袴田はこの俺が殺すから、関係ないがね』

「そうか、なるほどな・・」

それを聞いて、団堂はこの男が企んでいることをなんとなく読んだ。

もとより、野心家のサードである。王座を奪うタイミングをいつかいつかと狙っていたに違いない。そして、運よく出会ったのがグレイというわけである。グレイを利用して、自分を殺し、アニミストの力をもって、袴田を殺すというのが、この男の筋書きである。

「フハハハハハ」
『何がおかしい』

団堂は、なんとなくおかしくて、噴出してしまう。それを怪しく思ったサードは、いらついて訊いてきた。

「残念だが、お前に袴田は斃せない。お前は、あいつの側近でありながら、そんなことにも気づかないのか？愚かだよ。愚か過ぎて笑えてくる」
『団堂、貴様ぁぁぁ』

アーミタイルは、中のサードの怒りに対応して、そのメンタルスフィアを強く輝かせた。だが、そんなアーミタイルをグレイのゲイボルグが制止する。

「旦那、ここは俺がやる。旦那にはわりぃが、手ぇ出すな。俺は、タイマンで、団堂とやり合いてぇんだ」
『ふん、なら好きにしろ。俺は、高みの見物といく』

サードは、再び冷静になると、グレイの提案を承諾し、アーミタイルをふたりの戦場から離した。だが、あいかわらずその尾だけは、ふたりの周辺を取り巻いて、土俵を構成してくれる。

「そういうことだ、覚悟はいいな。団堂」

そして、ゲイボルグはアニミストへ刃を向けるのだ。

「グレイ、俺はお前と戦う理由なんてない。刃をおさめろ」
「冗談じゃねぇよ。俺は、お前と純粋に戦いがしたい。それだけだ。死にたくなかったら、本気でこい、団堂曹士」

ゲイボルグ・Dは、虚物化して、消える。

「上か」

死角からの一撃。闇よりの強襲。ゲイボルグの動きは速い。

「うおらぁぁぁぁ」

アニミストも、それに対応するためにニルヴァーナを大剣に換えて、相手のバスタード・ソードに叩きつける。すると、釣鐘を思い切り叩いたような巨大な轟音が、このただっ広い空間全体を振るわせた。それはまるで、戦闘開始のゴングのようである。

「ノリのわりぃこと言ってんじゃねぇよ。この戦い、存分に楽しもうぜ。団堂よぉ。ひゃはははははは」
「グレイ、やるしかないのか」

団堂は、相対するゲイボルグを見つめて、改めてニルヴァーナを構えた。

第５３話　突入、東京大学（後書き）

第２～４話の内容を多少改変いたしましたので、ここに通知します。

第５４話　永劫のウロボロス

これは、忘れもしない、あの時のできごとだ。
なにせ、この日を境に俺の人生は、何百度にも捻じ曲げられたのだから。なんとも忌まわしい日だ。

「おにいちゃぁん」

俺の耳に少女のかすれた声が届く。声は遠いが、たしかに聞こえる。
これは、妹の泣き叫ぶ声だ。分厚い壁をはさんだ、さらに向こうから、怖くてたまらないと、生きたくてたまらないと、妹の声が生々しく届くのだ。

「マコ！！」

だが俺は、その場から一歩も動くことができずに、ただ妹の助けを求める声を聞くことしかできなかった。
右足の骨が折れて、まともに歩けない。さっき、重いものに潰されたからだろうか。とにかく、身体が言うことを利いてはくれない。

「おにいちゃん」

助けてあげたい。妹を、助けてあげたい。あいつのそばに飛んでいって、抱きかかえて、救い出してやりたい。

「マコ・・・」

だが、それは残念ながらできなかった。足の骨が折れているから？
たしかにそれも一理ある。だが、歩けないほどの重傷ではない。そ

れ以上に俺の足を止めていたのは、俺の目の前にとんでもなく恐ろしいものがあったからだった。

「お・・俺・・・」

それにしても、なんなのだ、あれは。あの巨大な怪物は、いったいなんなのだ。あんな化け物と、戦えとでも言うのか。

あれではまるで、太古より我が国に伝わり、忌み畏れられていた鬼ではないか。あれは、熊だとか、ライオンだとか、そういう動物とはわけが違うのだ。あれと正面きって戦うなど、正気の沙汰ではない。いったい、親父とまともに喧嘩できないような、ひよっこなこのクソガキが、あの怪物とどう戦えばいい。いや、無理だ。かなうはずもない。

「やめろ・・・」

あのカメラのレンズのように無機質な一つ目は何だ。仮にあいつが動物であったとして、あれに心があるとでもいうのか。

否、そんなものはない。あの目は、自分の目的のためであれば、手段を選ばない目だ。他者を傷つけ、奪うことに特化した目だ。やつの目に映る人間は、記号化され、抽象化された、アイコンにすぎない。それも、狩りの指標となるアイコンだ。あの化け物は、自分の目に映るアイコンを、片っ端から摘み取っていく。ただ、それだけなのだ。

目に映る目標を、仕事というかたちで、片っ端から処理していく、人間の業、それと何も変わらない。人間がいつも他の動物に対してしていることと全く同じ。食うものが、食われるものにしていることだ。

だから、それ自体、やつにとっては正当な行為。非難されるいわれはないし、そもそも非難に値するものとすら思っていない。人間だ

って同じだ。生きるために動物を殺す。仮にあの化け物のしていることが罪であるならば、人間の業もまた罪ということになる論理必然。

そうであるならば、やつは必ず妹を殺す。やつに反対動機の形成可能性を期待するだけ無駄なのだ。そんなこと、わかっていたさ。

「やめろよ・・・」

なのに俺は、期待可能性もないのに、ただひたすら、やつに妹を殺すことを止めるよう、呼びかけるしかなかった。いや、それすらもまともにできていない。どういうわけか、声がよく出てこない。こちらに気づかれては困るからと、あえてやつに聞こえないぐらいの声でお願いするだけだ。これで、もし、やつが自分たちを憐に思って、殺すことを止めてくれれば儲けものだろう。だが、無理な話だ。もちろん、自分で妹を助けられるのなら、ぜひともそれをしたい。だが、この足ではまともに動けないし、かえって妹に迷惑がかかる。それならば、助けに行けなくてもしょうがないだろう。なあ、そうだろう。

いや、それは嘘だ。いま思えば、それは妹を助けに行かなかったことを正当化するためのよい口実にすぎない。自分を騙し、安心させるための自己防衛だ。もっといえば、質の悪い、みじめったらしい言い訳だ。

本当は、怖かった。自分が可愛くてたまらなかった。だから、足の怪我抜きにして、怖くて足が震えまくって、歩けなかったのだ。

『わりぃ。にいちゃんのために犠牲になってくれ、マコ』

そんなことを言っている自分がこの心の中にいた。人間とは、本当におそろしい生き物だ。改めて思う。本当に大切だと思っていたものさえも、こう簡単に捨て去ることができるのだから。実に、人間

が生きていることそのものが罪であるといっても過言ではなさそうだ。いつも自分のことよりも俺を優先してくれる妹に対して、こんな仕打ちができるのだから。実に、改めて思う。俺は最低の兄貴だった。

「私のことはいいから、おにいちゃんだけでも逃げて！！」

だがそうは言っても、既に逃げ腰で準備万端でいる俺がここにいるのだ。そして、追い討ちをかけるかのように妹が言った言葉が、そんな俺の胸に突き刺さる。願ってもない言葉だ。逃げてもよいのだ。犠牲になる妹が、兄の名誉ある逃走に推薦状をくれたのだ。

とんでもない皮肉である。

なんて情けない兄であろう。一番怖いのは他でもなく、逃げ場を失って、正面からあの化け物と対峙している妹であるのに、その妹に心配されているのだから。これで逃げたら、男として、兄として、人間として、一生の恥にちがいない。

なら、妹と一緒に死ぬのか。

確かに、それならば兄としての面子を保てる。だが、それは無駄死にに等しい。どうせ、自分が助けに行っても、何もできやしない。反対に、化け物が自分の存在に気づいていない今なら、簡単に逃げ延びることができる。失うのはひとりの人間の命だけで済むのだ。結果の合理性をとれば、逃げるに超したことはない。妹は兄の生存を望むはずだし、現にそう言っているじゃないか。だから、俺は逃げてもいいんだ。そう、言い聞かせた。

「マコ・・・赦してくれ・・・」

謝るという行為、それ自体が全く無意味なものであったが、俺はそ

うするしかなかった。妹が、こんな薄情で、最低な兄など、決して赦すことはないだろう。だから、俺には謝る資格すらなかった。だが、そうするしかなかったんだ。少しでも、赦しを乞うことしかできないのだ。

「本当に・・・すまねぇ」

妹を置き去りにすることを心に決めた後、俺の足取りといえば、なんとも軽いものであった。足の骨折などなかったかのように、現場から走り去っていくのだから。逃げ足だけは速いとは、まさにこのことを言うのだろうと痛感した。

「おにいちゃん!!」

だが、最後に聞こえた妹の悲鳴には、兄の助けを求める意味があるように思えた。

（二）

渾沌の鬼神と、漆黒の堕天使が剣を交えて、直接にらみ合う。これだけ広い空間で、このふたつのオーガは、極めて近接していたのだ。まさに、男同士の意地と意地とのぶつけ合いなのだ。

「団堂、楽しいぜ。お前と戦うことが、こんなにも楽しいとは思わなかった。だから、すぐにやられるんじゃねぇぞ。これからがもっと、おもしろくなるんだからよぉ。なぁ、団堂!!」

「グレイ、お前はこんなことのために戦っていたのか？お前の戦う意味は、いったい、なんだったんだ」

アニミストとゲイボルグ・Dは、互いに剣を交える。アニミストが

手に持つ、大剣型のニルヴァーナからは死者たちの負の力が、ゲイボルグのバスタード・ソードからは冥府からもたらさせる暗黒の力がそれぞれ混ざり合い、エネルギーの暴走を生む。

「うるせぇ、俺は、妹を奪ったオーガを作った、お前だけは赦せねぇんだよ、団堂！」

ゲイボルグは、アニミストの剣をはじき返す。それの反動により、ゲイボルグは大きく後方へ跳び、アニミストとは距離をおいた。

「確かに、俺はオーガの作成を担当していた。そして、俺の作ったオーガによって、たくさんの人が犠牲になった。俺は、そのことについて弁解はしない。だがな、お前がサードと組んでやろうとしていることは、間違っている。お前の妹は、絶対にそんなものを望んでなんかいない」

「お前にあいつの何がわかるっていうんだ、団堂」

「わかるさ。アニミストを通して、お前の妹の気持ちを感じたから・・・。グレイ、お前を守れといっていたんだ」

「ふざけるな。でたらめをぬかしてるんじゃねぇ。あいつを殺したお前が、あいつの言葉を代弁するなんざ、虫唾が走るんだよ」

アーミタイルの力によって、外法の能力を得たゲイボルグは、団堂に見せたことのないほどのエネルギーを解放する。墨をさしたように静かな黒が、ゲイボルグを取り囲んで、暗黒のヴェールを生み出すのだ。

「お前にも聞こえているはずだ。お前の妹の声が。ただ、兄の無事を祈る声が」

「だまれぇぇぇぇぇ！俺には、てめぇのムカつく声しか聞こえねぇんだよ」

ゲイボルグから、数十本の闇の槍が解き放たれる。それらは、アニミストを包囲し、回避・防禦を困難とする。おそらく反射対策として、一点突破型ではなく全方位型にしたうえ、属性をまちまちにしているものと思われる。決定打・・とはならないだろうが、それでも相当のダメージを覚悟しておく必要はあるようだ。

「しねぇぇぇぇ。団堂ぉぉぉぉぉ！」

その流星群のような黒き槍に続いて、ゲイボルグが、暗黒の翼をはためかせて突撃する。その両手に、バスタード・ソードをしっかりとたずさえているのだ。

そして、数十本の槍が全方位からアニミストに襲い掛かった。渾沌の鬼神は、狂気の闇に見初められ、漆黒の雨に陵辱されるのだ。それだけではない。第2波として、ゲイボルグがまだ控えている。その巨大な剣で、アニミストにとどめを決めるらしい。そして、目にも留まらぬ速さで、その狂った闇の塊に、強大な刃を突き立てるのだ。

「終わりだ、グレイ！」

だが、そんな絶望的な闇の中から、希望にまみれた勝ち誇った声が聞こえる。すると、暗黒の闇を切り裂いて、ふたつの赤いルビーのような宝玉が飛び出してきた。

「これは・・」

完全に攻撃態勢に入っていたグレイは、突然に正体不明の物体を目撃したために、これがなんなのか処理することもできない。いや、

思考をフル回転させることにより、なんとか処理をして、どのような行動を採るべきか決める段階にはなったが、それでも遅かったようだ。身体がついていく前に、敵の攻撃がクリーンヒットする。

「ぐあああ」

ふたつのニルヴァーナが、カマイタチのように素早く動き回っては、ゲイボルグの腕を切り落とし、その戦闘能力を奪ったのだ。

「グレイ、お前にこのアニミストは斃せない。だから、もう止めろ。これでも、手加減してやっているんだ」

他方、ゲイボルグの攻撃を受けていたアニミストは、そのまわりを包んでいた闇を振り払って、多少は損傷があったものの依然として健在であった。しかし、その程度の損傷もすぐに自己修復できる程度のものであり、グレイには一層、絶望感が募る。

「俺のゲイボルグが、こうもあっさりと・・・。団堂は、化け物か・・」

アーミタイルの力を得て、以前よりも格段に強くなったゲイボルグであったが、それでもこのアニミストの力は想像を絶するものであった。それだけに、グレイですら団堂を化け物扱いするほかはない。

（やっぱり、俺は何もできないのか・・・マコ・・）

腕に全く力が入らない。あの時に感じたとんでもない絶望が、まるでその時のままで、グレイの心も身体も蝕んでいくのだ。

（俺は、お前のために、いったい何をしてやれたんだ・・・）

何もしてやれない。妹が、本当に助けを望むときに限って、俺は何もしてやれないんだ。

今だってそうだ。すぐ目の前に、妹のかたきがいるというのに、圧倒的な力に踏みつけられて、ひとつも結果を成し遂げられないのだ。

（ほんと、だせぇよな。俺は・・・）

粋がって見せてはいるものの、結局、グレイという男の本質は小心者なのだ。弱いものいじめをして、猿山の大将を気取っている小物でしかない。

（俺は・・また、逃げるのか？）

思えばあの時、大切な妹を置き去りにしてから、俺の人生は止まったままだ。いろんなことから逃げてばかりで、あそこから一歩も前に進んだ気がしない。妹が死んでからの数年、喧嘩ばっかりして、いろんなやつをシメてきたものの、根本的な部分は何も変わっていない。絶対に自分の心の弱い部分には勝てないのだ。

『おにいちゃん』

なんだろう。メンタルスフィアを通して、妹の声が聞こえる。

そんな風に呼ばないでほしい。お前に、兄と呼ばれる資格は、俺にはない。俺は、お前を見殺しにしたのだ。ただひとりの、大切な兄妹である、お前を・・・。俺は、クズだな。

「そうか、俺が一番赦せなかったのは、俺自身だったんだ。俺は、いつも情けない自分に対してガンを飛ばし続けていたんだ。あのと

きから、ずっと・・・」

グレイの頬を、一筋の涙が伝っていった。

そうだ。あんな思いはもういやだ。あんな思いをするくらなら死んだ方がましだ。ここで、お前を捨てて逃げるくらいなら、俺は迷わず死を選びたい。今の俺なら、そうすることができる。無駄だとわかっていても、それがなんとも愚かな選択であるとしても、俺は自信をもって、胸を張って、お前を守りに行く。そうだろう、マコ。それこそが、お前の兄として相応しい最後だろう。

『おにいちゃんは、私の自慢のおにいちゃんだから・・・』

あんな後悔は、もうしたくないんだ。だから。

「団堂。俺は、命に代えても、お前を殺す」

そして、グレイの心に厚く聳え立っていた、大きな壁は瓦解するのだ。彼の心を封じ込めていた弱き心は、新たに芽生えた闘志によって、粉々に砕かれる。

それにともなって、ゲイボルグのメンタルスフィアが青い光に変わっていく。

「グレイ・・・まさか・・・」

団堂は、ゲイボルグの青い光を目の当たりにして戦慄する。到達してはならない領域を、彼は超えてしまったのだ。

「やめろ、グレイ!!」

団堂は、グレイが覚醒する前にと、速攻で片を付けにかかる。最高執行官となってしまえば、それこそ厄介な結果になることが目に見えているのだ。

『これを待っていたぞ、グレイ！！』

だが、飛び込んでいったアニミストの前に、アーミタイルが妨害に入る。アーミタイルが生み出した、分厚い光の壁によって、アニミストは後方へと追いやられるのだ。

「サード！そこをどけ！！」

「ふはははははは。ようやく覚醒したのだ。絶対に、どくものか。俺はこのときを、今まで待ちわびていたのだぞ」

サードは、団堂の動きを封じたことを確認し、覚醒がはじまったゲイボルグの方を見る。

「・・・ゆえにグレイよ。今こそ、お前に植え付けた、ウロボロスの呪いを解き放つ」

アーミタイルは、光る大蛇のような形になり、ゲイボルグの中に侵食していく。そのはらわたを引き裂いていくかのように、濁流のように、グレイの心を貫いていくのだ。

そうすることで、ゲイボルグの闇と、アーミタイルの光が、互いに反発し合いながらも、じわじわと入り混じってカオスを発生させていく。

「これは・・・」

これはまさにオーガとオーガスの融合か。最高執行官が誕生する瞬

間なのだ。

「見ろ、団堂。この私が、最高執行官となるのだ。ふはははははは」

光。闇。ふたつの相反する力が相克の世界を生み出す。決してなじまないふたつの力が、それを超越したより上位の力に変わって、ここに生誕する。サードの想像をはるかに超越する、莫大な力。これが最高執行官の力だ。興奮がとまらない。

「この俺が、先生を超えるときが来た。アニミストもアムネシアすらも超える、絶対の力。永劫の力。カオスの力だ」

「そんなこと、させるか。グレイを持っていくんじゃない」

団堂は、取り返しのつかなくなる前に、そのカオスの塊をニルヴァーナによって切り刻む。これによって、たしかに光と闇の結合体はばらばらに砕けていく。

「無駄だ。もはや、無限の力を得た私に、そんな攻撃は通用しない」

しかし、それらは時を巻き戻したかのように、瞬時に再生を繰り返し、元の形に戻ってしまうのだ。

「見ろ、団堂。これが俺の最高執行官・・・」

そして、光と闇は完全に結びついていく。おそらくそれらは上位の力によって、完全に屈服させられた上で、ひとつの力の下に統合されてしまったのだ。

「これが、俺のアポカリプスだ・・」

最高執行官アポカリプス。漆黒の堕天使と永劫の天使とを従えることで生まれた、異様な存在。その全身は、クリーム色の穏やかな鎧で包まれている。まるで生まれたままの赤子のような優しい色をした肌は、無を感じさせる。とにかく、形容詞が浮かばなくて困る。ゆえに、『無』といわざるをえないのだ。

暗黒の堕天使でもなければ、神聖な天使でもない。人間の観念では表すことのできない、完全なる外の存在だ。あえて言えば、宇宙人。そんな不思議な存在。人の知識にはない形象。全てを無に還すためだけに存在する、破壊神。

「さあ、団堂先生。はじめようか、本当の債権者たちによる戦いを・・・」

偉大なるアポカリプスは、ふわふわとその柔肌を震わせて、アニミストに近寄るのであった。

第５５話　カオティック・グリード

グレイのゲイボルグ・ディアボリカと高等執行官アーミタイルを取り込んだサードの新しい力は、その名を最高執行官アポカリプスと呼んだ。
この何もない広大なドーム空間を、その偉大なる力で全て塗りたくるほどの圧倒的な存在感がある。地の奥深くから滾々と汲み上がってくる無限の力は、相対する団堂曹士の心をひれ伏してしまうほどだ。
それは、底なしの欲望を体現した形なのか。サードという男の中に、長い間くすぶっていた権力への強い憧れ。全てを我が物にせんとする、この男の執念に近い願望が淵源となっているのだろう。

「高等執行官・・アポカリプス」

思わず団堂もつぶやいた。
そう、これは紛れもない欲望だ。欲望は、例外なくありとあらゆる生命体に備わることが許された、『生きる』ことへの活力をもたらす絶対のエネルギー。生命体の行為の動機を生み出すのはいつもこの欲望なのだ。欲望がなければ行為など生まれない。
だが、欲望それ自体、全く『無』である。ゆえに形もなければ、熱も生まない。しかしなぜ、これが人の業として、無限大の『有』を生み出すのだろうか。単なる感情という、あるかどうかもわからないようなあいまいな存在だというのに・・。
ゼロに等しい欲望というモノ。ここから無限が生まれるのだ。そんなエネルギーは、少なくともこの世界において類を見ないであろう。現世において、唯一、論理法則も因果律も及ばない、いたって不合理なエネルギーだ。
しかし、これこそが全生命体の活動を支えている根源にちがいない。

そんなエネルギーの高まりを、アポカリプスの中心から滾々と感じるのだ。故にやつは、このおそるべきエネルギーを操る最高執行官なのだ。

「団堂よ。少し、このアポカリプスの力を試したい。だから、お前がお気に入りのその剣で、私のアポカリプスを八つ裂きにしてみろ」

サードは、必死に笑いをこらえながら、不合理なことを言う。

「サード、貴様・・・ふざけているのか？」

「ふざけてなどいない。私は、本気だよ。本気で、お前に斬られてやろうと言っているのだ。遠慮はするな。このチャンスを逃したら、もう二度と、お前は私に触れることすらできないだろうからな、クククク」

サードは、おそらく団堂に対して、アポカリプスの圧倒的な力を見せ付けたいだけなのだろう。そのうえで、アニミストを凌駕し、完全な勝利を得ようというのだ。だから、少なくとも罠を張っている様子はない。本当に、八つ裂きにしていいらしい。

「なら、遠慮はしない。これで死んでも、恨むなよ」

「ああかまわない。殺せるのなら・・・な。くくくく・・・」

アニミストは、大剣を手に持ち、構える。その切っ先は、真直ぐにアポカリプスの喉笛を捕らえている。

「・・・・」

いつでも団堂はサードを殺すことができる体勢に入る。アポカリプスは、外見上、装甲も薄く、あんな柔肌のような鎧など、このアニ

ミストの前では壁にもなりはしない。一撃でサードごと貫くことも可能だ。しかし、それが逆に彼の不安を煽る。どうにもいやな予感がしてたまらない。

ふたりの間の空気は、妙に冷え切っていて、濃密な瘴気が響かせる耳鳴りだけがやたらとうるさかった。

だが、次の瞬間には、この広いドーム内を一筋の風が走り抜ける。強烈な風圧が、濃霧のような瘴気を吹き飛ばして、アポカリプスの身体に叩きつけられる。

このような閉鎖空間で、突然発生のように風が吹くことはない。この強烈な風の原因は、アニミストにある。一瞬にして、アニミストが動いたのだ。この風はアニミストそのもの。

アポカリプスの喉笛を目がけて突き抜ける魔槍のごとき必殺の一撃は、唯一点のみにあるごく小さな獲物を目がけて突撃するハヤブサのよう。

これでは、仮にサードが罠を張っているにしても、避けられるはずがない。

肉を裂く、生々しい音が少しだけ響くと、アニミストのつるぎは敵の腹部あたりをきれいに貫いていた。文字通り、串刺しにしたのだ。だが、団堂はまだ安心できなかった。この程度でアポカリプスが機能停止に陥るとは到底思えない。だから、彼は続けて、追撃にはいる。

アニミストは、アポカリプスの肉を引きちぎるように、そのグミみたいな肉を切り開いては、突き刺したままのニルヴァーナを切り上げて、胸部を引き裂く。そして、続けざまに、その首を切り落とすように大振りの一太刀を入れる。あまり切り口はきれいなものとはいえないが、当然に胴と首は切り離される。この時点で、アポカリプスはオーガとして必要な機関を失っているので、事実上、機能停止のレヴェルに至っている。つまり、団堂の勝ちなのだ。

だが、それでもなお、アポカリプスは抵抗するどころか、動くことさえしなかった。

もっとも、最初の一撃で、オーガのコックピット部分を意図的に突き刺したので、サードが死亡して動かなくなっただけである可能性もある。それならばよい。ここでの戦いは、これにて一件落着となるから。

しかしながら、その可能性に期待するほど団堂はお気楽な男ではない。きっと、サードは生きているはず。だからこそ、このようなボーナスステージのようなチャンスをわざわざ与えてくれたのだ。必ず何か裏がある。それならば裏があるにしても、できる限り自分に有利になるよう、アポカリプスを破壊すべきだ。もっと、徹底的にアポカリプスを粉々にしなければ、この焦燥感が団堂から晴れることもない。

アニミストは、アポカリプスをすりつぶすように、まだきれいに原型が残っている左腕を切り落とす。また、続けざまに目にも留まらぬ速さで、敵を乱切りにするのだ。

「これでどうだ・・・」

もうすでに、アポカリプスは五体満足の状態にはない。これでも動くのであれば、それはもう奇跡なのだ。そんな納得感が得られるほどにまで、団堂はアポカリプスを気が済むまで八つ裂きにしてやったのだ。

「さすが、団堂曹士。見事なまでに徹底した破壊だ。痛かった・・・。非常に痛かったぞ・・」

アポカリプスの胴体部分に与えた大きな剣創は、その肉をぱっくりと開いて、コクピットブロックにまでも貫通していた。団堂の一撃が中にいるサードに致命的な一撃を与えたことは、その光景からし

て明らかだった。

「サード、お前・・どうして生きている？」

その傷口から見えるサードの様子を見て、団堂は目を疑った。アポカリプスのコクピットブロック内は、執行官たる彼の血で赤く染まり、サード自身、死んでいてもおかしくない傷を負っている。いや、通常の人間がこれほどまでの傷を負ったのであれば、死んでいなければならない。生きていること、それ自体が異常なのだ。すなわち、サードは上半身と下半身をふたつに分けられてしまったのだ。そんな光景が、団堂の目にも飛び込んでいるのだ。

「確かにそうだな。こんな傷を負えば、以前の俺なら一瞬にして死んでいるだろうよ。だが、事実として、俺はこうして生きている。己の半身が分断されてもなお、こうしてお前と言葉を交わしているのだ」

地に落ちていたサードの上半身は、ふわりと浮かび上がって、団堂の方へと向き直る。団堂は、その不可思議な光景をただ呆然と見つめるだけだった。

「これこそがアポカリプスの力だ。執行官である私は、その永遠の力の恵沢を授かり、人にあらず外法生命体となったのだ。だからもう、なんぴともこの私を殺すことはできない」

そして、ばらばらになっていたアポカリプスの肢体がそれぞれ、ぷるぷるとしたみずみずしいリキッドタイプに形質変化して、胴体部分に結集する。まるで、時を高速で巻き戻しているかのようにアポカリプスは本来の姿を取り戻していく。

「自己再生か。させない」

団堂は、アポカリプスの再生が追いつかないほどの速さで、何度もこれを斬りつける。自己再生は、基本的に執行官のメンタルポイントを代償にしてなされる回復行為。だから、切りまくっていれば、いずれ執行官の方が先に死ぬことになる。

「無駄だ。アポカリプスの再生能力は、私の精神とは無関係に発動する。私のメンタル切れを狙うのは無意味だよ」

やはり団堂の思惑は外れたようだ。無限に再生するのでは、斬っても斬れない水を何度も斬るのと同じ不毛な行為だ。

「くそ！」

だが、あきらめきれない団堂は、粉々にすればあるいは斃せるのではと、アポカリプスを砕いていく勢いで切りまくった。

「何度やっても同じことだよ、団堂曹士。さきほどからそういっているのがわからないのか？お前はそんな馬鹿ではあるまい」

やはり無駄なようだ。どれだけ団堂がその肉を引きちぎったとしても、全て本体に還ってくる。たとえ、粉々にしたって同じだ。ならば、アポカリプスを破壊することでこの戦いに勝利するという戦法は採れないことになる。

サードは、うっすらと笑みを浮かべて団堂に対してため息をこぼす。

「お前では俺を斃すことはできない。永遠の力の前では、団堂も、袴田も無力な存在と化すのだ」

「くそ、これで終われるものか」

団堂は、めげることなく乱切りを繰り返す。しかし、機械的に再生が働くアポカリプスの力を前に、団堂のほうが疲れてきてしまうのだ。

「さて、もう気は済んだだろう。次は、いよいよ私の番だ」

アニミストによって破壊された身体が、まだ十分に再生されていないアポカリプスは、パン生地をこねてつくったような人型をしていた。そしてその両腕から、白い光の剣と黒い闇の剣が真直ぐに伸びる。まるでサーチライトのようなふたつの剣は、それぞれアニミストを照らすと、その通過点を切り刻んでいくのだ。

「何・・・」

光のようにあまりに短い瞬間で、団堂も何がおこったのかわからない。しかし、攻撃を受けてから数秒経過して、アニミストが異常を訴えたことにより、ようやく攻撃を受けたことを認識する。

「こんなものではない・・」

予想外の出来事に狼狽する団堂の隙をついて、アポカリプスが近接する。そして、両手から延々と伸びる白く細い光と黒く細い闇とを合成して、カオスを生み出す。両者が結合するエネルギーは、団堂の心を引きずり込むほどに大きいものであり、そのカオスに触れたが最後、生きてはいられないと思わずにはいられないほどだ。

「さようなら、団堂!!」

サードが咆えた瞬間、そのカオスは固形へと形質を変化させ、直ちに剣を形作る。それは、本体であるアポカリプスと同じ、クリーム色をした棒のような物体であり、オーガの筋肉を断ち切るほどの能力があるとは思えない。しかし、それはあくまで物理法則までの話だ。外法としての能力は未知数。そこに仕組まれた外法法則がいったい何なのか。一撃をもらえばそれでゲームエンドの可能性もある。アポカリプスはそれほどまでにおそろしい剣を持っている。

（避けられない・・・）

その正体不明のカオスの存在を認識するだけで精一杯であった団堂は、アポカリプスの攻撃を回避する余裕はない。まちがいなく、その一撃をもらうことになる。だから、団堂の背筋はゾッとしていた。アポカリプスは、問答無用で大振りの一撃を加える。見事なまでのオーバーハンドブロウは、大きな弧を描いて、アニミストに対して盛大に降り注ぐ。団堂は、ダメージを最小限に抑えるべく、剣でこれを受け止めようとした。

「ぐあ・・」

だが、アポカリプスの持っている剣は、アニミストの持つ大剣型ニルヴァーナをすり抜けるようにあっさりとクリアし、本体を切断する。胸部に致命傷をもらったのだ。

「どうしてニルヴァーナが・・・」

団堂は、一応不完全ながらもガード行動に入ったはずだし、実際にアポカリプスはニルヴァーナを構えているアニミストに対して、カウンターを気にすることもなく思い切りきりつけた。そうであれば、アポカリプスの一太刀の重みがニルヴァーナを伝わって、アニミス

トの腕をじんじんと痛めつけるはずだ。渾身の一撃を叩き込んできたアポカリプスだって同じはず。

だが、そんな感覚など全くなく、アポカリプスの一太刀は、なんなくアニミストの胸部まで到達したのだ。本当に、あらゆる装甲をすり抜けてしまうように。これこそアポカリプスの特殊能力に違いなかった。

「まだまだいくぞ・・」

やつのあの剣の能力はなんなのだ。そんな疑問を抱いたままの団堂に対して、アポカリプスは容赦なくもう一太刀を振るう。

（あれは、ガードができない。なら、避けるしかない・・・）

団堂は、サードの空振りを誘って、タイミングを合わせてバックステップによる回避をする。

「甘い！！」

だが、そんなありきたりな緊急回避は当然にサードに読まれていた。突然にして、アポカリプスの剣のリーチがとんでもない長さに伸びたのだ。おそらく、この広い空間の端にまで到達するほどだ。そして、その通過点にいるアニミストは、無残にも右腕の肩部分を貫かれる。このままやつは、右腕を切り落とすつもりか。それはまずい。完全に逃げ腰の団堂は、虚物となり、アポカリプスとは距離の置ける位置に逃げる。

「あいかわらず逃げ足だけは早い男だ。あの時も、こんな感じで袴田から逃げていたのか、団堂」

団堂に対して圧倒的優位に立ったサードは、彼を鼻であざけ笑う。
団堂は、やはりなめられている気がしていい気分ではなかったが、今までの数回の攻撃を観察し、あの剣の能力を見抜くことができた。

「逃げる？どうして俺が、お前ごときから逃げる必要がある」
「お前ごときだと・・？」
「お前のその剣、おそらく分子結合を破壊する装置か。触れただけで、対象の構造維持機能をことごとく破壊するようだな。おそろしい武器だよ、まったく。どうりで、ニルヴァーナが真っ二つにされたわけだ」

団堂は、先ほどアポカリプスの一撃を受けたニルヴァーナを見せる。攻撃を受けた部分は、分子結合を破壊され、そこからニルヴァーナが折れてしまっているのだ。
それに加え、ガードバリアをかなり重ねがけしていたにもかかわらず、本体に深い剣創を作ってくれたあの剣の一撃は、分子結合破壊と考えなければ説明がつかない。分子は破壊するかしないかである以上、あの一太刀に攻撃力もクソもない。攻撃力とは無関係に触れれば対象を破壊するのであるから、ガードバリアはあっても意味が無いものとなる。

「さすがは団堂先生・・。よく、アポカリプスの力を見抜いたな。そこまでわかっているのなら、もはや隠す必要もない。そうだ、お前の言うとおり、これは分子結合を破壊する。よって、いかなる防禦も、このアポカリプスの前では無力」
「やはりそうか」
「だが、それを知ったところで何になる。いかに、最強の力と最強の鎧を持つアニミストといえども、アポカリプスを前にすれば、貴様にはこれを防ぐ術もなければ、これを破壊することもできない。この時点で貴様は負けているのだよ。団堂」

「なるほど。つまり、アポカリプスは用意周到で臆病なお前らしい能力を持っているわけだわな」

団堂は、しれっとサードを挑発する。

「貴様・・・」

当然にして、サードは憤慨する。頭に血が上った彼は、猪突猛進の勢いで、一気にアニミストの前にまで接近するのだ。

「いつもいつも偉そうにしやがってよ。特にてめぇは、俺のことを馬鹿にしやがって。だから、てめぇらは鼻につくんだよ。今すぐ、死ねよ。クソが！！」

無限の欲望を形にしたカオスが、真直ぐにアニミストを、そして団堂を絶命させんと襲い来る。これをくらえば、団堂曹士という人間は、極小の分子という欠片に換えられて空気中の塵と化してしまう。

「死ねぇ。団堂曹士！」

だが、団堂は避けようとしない。他方で、アポカリプスの痛恨の刃は目と鼻の先にある。

サードは、カウンターを気にすることなく、再びオーバーハンドブロウをする。まあ、それも当然だ。ガードはすり抜けられるし、カウンターをくらっても死なないのだから。少なくとも彼はそう思い込んでいる。

だが、サードの予想に反して、剣と剣とが交わる音が盛大に響いた。アポカリプスの剣は、分子崩壊をさせることなく、しっかりとアニミストのニルヴァーナとかみ合っていたのだ。

「なぜだ・・・なぜ、貫通しない・・」

「さあな、もっとも俺は、基本的なことしかしていないけどね、サード君。しかし、これがわからないようなら、また始めから外法学の勉強をやり直したほうがいいんじゃないか？」

明らかな動揺を見せるサードに対して、団堂はさらに馬鹿にしたような態度を採る。さっき、笑われたことが少し恨みに残っていたのだ。

「お前はいつも基本をおろそかにするから、どうせ俺のねらいは知らないだろうな。ちゃんと、基本を勉強している人間であれば、誰だって俺を斃せたぜ、サード。せっかく、いいオーガを持っているのに、もったいないな」

団堂は、カウンターとして、大きくアポカリプスを斬り払う。そのため、アポカリプスは勢いよく後方へとふっとんでいった。

第５６話　無限の幻想

団堂のカウンターをまともに受けたサードは、強烈な衝撃にもまれながら、いましがた、自分の身に起こったできごとをフィードバックしていた。

（なぜ、アポカリプスの剣が防がれたのだ？）

致命的なカウンターを受けたとはいえ、無限の再生能力をもつアポカリプスである。機体に走ったダメージなど、いくらでも取り返しが効くので、そんなことは問題ではない。それよりもどうして、アポカリプスの防禦不可能な攻撃が防がれたのか。完璧すぎる窮極の一撃が、よりにもよってあの団堂曹士ごときに防がれたのだ。そちらの精神的なショックの方がサードにとっては、切実な問題となっていた。

（おのれ・・団堂め）

サードが、歯軋りをするほどに苦虫を噛み潰す表情をすると、彼の気づかぬ間に、殺気に満ちて瞳をぎらぎらと光らせているアニミストが追撃に来ていた。死者の強い怨念を纏う、そのオーガの表情に、サードは一瞬、背筋が凍ってしまった。

「く・・・」

アニミストによる、アポカリプスのコクピットを一突きにする強打がなされる。これによって、その腹部の肉を吹き飛ばし、上半身と下半身を分断する。

「ぬおぉぉぉぉ」

またその一撃は、同時にアポカリプスの力によって、ほとんど再生していたサードの肉体を、再び、人でない形に歪めてしまう。

「く・・クソが・・・」

だが、相変わらずアポカリプスは、砕け散った肉を瞬時に集合させ、攻撃前の状態に戻ってしまう。めためたになったサードも同じだ。

「貴様ぁぁ、調子に乗るな」

そして、アポカリプスは体勢を立て直し、すぐさま混沌の剣を振りかざして、団堂に襲い掛かる。全てを無に帰す異界の力が、彼に襲い掛かるのだ。

「消えろ、団堂！」

だが、やはりアポカリプスの攻撃は、アニミストによって防がれてしまう。本体へ直撃となるはずの一撃は、鈍い衝撃音だけを奏でて止められてしまったのだ。

「サード、アニミストのニルヴァーナは少し特殊なんだよ。まあお前が考えているように、確かに、その存在形式として物理法則上の物体であるのが原則だ。つまり、このニルヴァーナも所詮は分子と分子の結合によって構成される、アニミストのパーツのひとつだ。だが、その存在形式は自由に改変できて、外法規則上の外法物にもなる。この場合、そもそも分子で構成されるという前提は存在しないから、お前の力はその意味を失うというわけさ」

「そうか・・、俺の剣が貴様の剣に防がれたのは、貴様の剣がもつ

外法効果と反発ないしは相殺していたからか」

「そういうことだ。もう少し、基本的な外法理論を頭に入れておけば、ニルヴァーナの外法規則を全て無効化できたんだろうが、お前のことだ、そんな外法典に書いてあるような基本知識をいちいち覚えているわけがないだろう。だから、お前の攻撃はとりあえず俺に当たらない」

「ふざけやがって・・団堂ぉぉぉ！！」

頭に血が上ってしまったサードは、怒りにまかせて切りかかってきた。だが、それもやはりニルヴァーナとの接触により、アポカリプスの混沌の力は相殺され、単なる棒と化してはじかれてしまう。その反動によって、ひっくり返りそうになったアポカリプスに対し、団堂は3本のニルヴァーナを、まるでミサイルのように飛ばして追い討ちをかける。

まず、1本目がアポカリプスの身体に突き刺さり、エネルギーの急激な膨張と収縮を一瞬で処理することで、外法エネルギーの暴走を生じさせる。これにより、次元の裂け目が生まれたかのような歪みが、アポカリプスの肉を奪っていく。他方で、辛くも逃げていくアポカリプスに2本目が貫通し、同様のエネルギー暴走を引き起こす。ここまでくると、ほとんど原型が残っていないアポカリプスであるが、それでもちょこまかと動く。そんな、アポカリプスに対して、3本目も容赦なく襲い掛かるのだ。

「ぬぉぁぁぁ！！」

「これでどうかな？」

3発のミサイル型ニルヴァーナを命中させた団堂は、あとに何もなくなっていることを確認すると、さすがに再生は無理だろうと感じた。

「・・・っくくくく」

だが、いまだにサードの引き攣るような笑いが聞こえてくる。するとその直後、この空間内に霧散していたアポカリプスの全構成要素が結集をはじめるのだ。どうやら、その再生能力は半端なものではないらしい。

「団堂よ・・。アポカリプスの攻撃を見切ったからなんだというのだ。それでも、貴様がこのアポカリプスの無限の力を否定することだけはできないのだ。故に、貴様は私を斃すことはできん」

「やっぱり無理か・・・」

アポカリプスの永遠の再生能力は、たとえ塵ゴミ以下からでも、元の姿に再生できるのであったのだ。もっとも団堂自身、アポカリプスを完全消滅させる程度でこれを斃せるとは思っていなかったので、この光景を見てもさほど驚いたりはしなかった。

「強がりはよせ、団堂。私にもはや限界などないが、貴様にはある。いくら貴様が強いとはいえ、無限にその力が持続するものではない。幾度と私を粉塵へ帰したとしても、私は何度でも蘇る。その間に、貴様を殺す方法などいくらでも思いつくことができるのだ。だから、私は今から外法典の条文を漁り、貴様の外法効果を無効化する条項をゆっくりと検討することとしよう。私が、それを発見したときこそ、貴様の最後だ」

「そうか、なら時間はそんなに残されていないな。どんどん行くぞ、サード」

サードは外法典を手に、団堂は剣を手に、互いに対立した。そして、すかさずアニミストの必殺の一撃を叩き込むのだ。もはや、サードに1ページでも外法典の条文を読ませるわけにはいかない。それほ

どまでの勢いで、盛大に斬りつけるのだ。

「うぉぉぉぉ・・・」

中のサードごと一刀両断にする一撃。だが、たちまちにして、再生能力が発動する。

「無駄だと言っているだろうが、クソが」

サードは、まるで五月蝿いハエを相手にしているのか、不毛な攻撃に苛立ちを隠せないでいる。しかし、当の団堂は、自分の行為が無駄であることをわかっているのか、それともわかっていないのか、構わずに何度でもアポカリプスを斬りつけるのだ。

「なるほどな、俺に条文を読ませない戦法というわけか。だが、そんな激しい攻撃がいつまでもつか、見ものだな」

サードは、再生した外法典を再び見ようとする。だが、その直後にアニミストの一太刀が貫通し、サードの腹部を引っ掻き回す。

「イテェ・・・イテェよぉぉ・・」

しかし、回復し、元どおりになったところであろうが、団堂の猛攻は止まらない。反撃を許すまいと、さらなる一撃を叩き込むのだ。

「ぐあああああ」

せっかく回復したサードの肉体は、再び肉塊に戻される。コクピット内に、彼の血が勢いよく飛び散り、猟奇殺人の現場そのものに変容してしまう。それでも、死ぬことの許されていないサードは、ま

た人間へと戻される。コクピット内に飛び散っていた血液もまた、一滴として残さずに、彼の肉体へと還っていく。

「やめろ・・・」

ふと、不死かつ無敵の力を得た人を超えた男、サードは無意識にも、そのような弱気な台詞をつぶやいてしまっていた。どんな攻撃を受けようと、無限の力によって回復ができる彼を前に、何者も無力のはず。こんな攻撃、あと数分もすればたちまちに止んで、形勢逆転の狼煙が上がるのだ。ならば、そんな彼が弱気になるなどありえないはずなのだ。

「やめろ」

だが、事実として、彼の全身は震えていた。ほぼ神とさえいってもいい彼であれば、アニミストなど、おそるるに足らないはずだ。なのに彼の表情といえば、額に脂汗をにじませて、酷く苦痛に歪んでいるのだ。

そんな彼の事情などお構いなしに、アニミストは、ニタリと不敵な笑みを浮かべて、怯えるサードに冷酷な一撃を振りかざす。すると今度は、サードの頭はマグロのたたきのように中身をぶちまけて床に転がった。だが、それも瞬く間に原状へと戻され、何事もなかったかのように砕かれた頭骸骨も元どおりになる。もっとも、さっきまでと違うのは、彼の表情がだんだんと恐怖に引き攣りつつあることだった。

「もうやめてくれ・・・」

サードの身に叩き込まれているのは、まさに恐怖そのものであった。アニミストの一撃一撃は、本来ならばどれも彼を即死させるはずの

ものなのだ。おそらくは痛みも感じる間がないほどに、強烈な一撃が叩き込まれているはず。普通の人間なら、自分が死んだことにも気づかないであの世へ旅立っているのかもしれない。

だが、死ぬことができなくなってしまった彼は、それの痛みも恐怖をもすべて体験しなければならない。たとえ頭が粉砕されたとしても、彼はそんな自分を体験しなければならない。それは、いったいどんな気持ちなのだろうか。想像すら困難なほどに酷なものに違いなかった。

「やめてくれ!!」

彼は、何度も、何度も、死の恐怖を体験する。死んで楽になろうなどということは、もはや彼の身体ではできなくなっていた。修復不可能とすら思える深刻な肉体的なダメージでも、すぐに修復され、痛みも間もなく消えるのだ。ならば、死んで楽になろうと思うなどおかしいのではないか。しかし、彼の精神的なダメージを考えると、どうだろうか。

「もういやだ・・・」

人間にとって最大の恐怖。それは、死だ。だが反面において、死とは、一生に一回しか訪れ得ないものであるから、まだ救いがある。

「殺してくれ・・」

しかし、たった一度でも死の恐怖は強烈であるのに、これが何度も繰り返されるサードは、いったいどれほどの地獄を味わっているのだろう。いくら死なない身体であるとはいえ、人間にとって最大の恐怖を幾度となく味わっていれば、心の方が先に壊れてしまうはずだ。これは、メンタルポイント切れという意味ではなく、死んだ方

がはるかにましという意味なのだ。

「あああああああ！！！！」

アニミストは、その仮面の下に潜ませている鬼の口を愉悦に曲げて、無抵抗のアポカリプスを一定のリズムですりつぶす。

粉砕。再生。粉砕。再生。粉砕。再生。粉砕・・・。

サードを粉々にして殺害し、ある程度再生が済んだところで再び殺害する。これを無限に繰り返す。サードの心が消えてなくなるまで。そう、無限なんて都合のよい幻想にすぎない。無限などというものは何処にも存在しないのだ。だから、無限のように思われるアポカリプスにも、執行官という限界が存在したのだ。結局、足を引っ張っているのはサード自身だったのだ。

（二）

「あ・・・あ・・・あ・・ああ・・・」

もう、どれほどこのような不毛の行為を繰り返していたのであろう。1時間か、1日か、あるいは1ヵ月か・・・。アポカリプスの執行官は、その無限の力の偉大さに取り付かれて、すでに廃人と化してしまっていたのだ。もはや彼は、外法典を引くどころか、アポカリプスを動かすことすらできない状態になってしまっていた。

「サード、死んだか」

団堂は、ひとまず目の前の敵が片付いたことに安堵すると、先を急ぐことにする。中の執行官に対して、まるで新品のようにつやつやのアポカリプスをあとに残して、次なるステージをめざすのだ。

「・・・く・・」

しかし、動かなくなったと思われたアポカリプスの腕がかすかに動くと、団堂は身構えた。

「サード、まだ生きているのか。なんて執念だ・・」

彼の欲深さにはさすがの団堂もあきれ果てるほどであった。だが、そこから聞こえる声は、サードのそれとは、どうやら別人のようである。

「俺・・・こんなところでなにやってんだ・・・」

「グレイ?取り込まれたんじゃなかったのか」

その声は紛れもなくグレイのものであった。サードのアーミタイルによって、取り込まれてしまっていたグレイが、何処からともなく帰ってきたようなのだ。

「あ、そうだ・・・あの時、たしか、俺はサードのやつに取り込まれたんだった」

グレイは、意識を失う前の状況をかろうじて想起した。

「それで・・・そのあとは・・・思い出せねぇ」

グレイは、投げ出すようにして、それ以降の追憶をやめた。

「おい、グレイ。大丈夫なのか」

団堂は、おそるおそるグレイの下へと近づく。

「あれ、団堂・・団堂じゃねぇか。なにやってんだ、アンタ。こんなところでよ」

「なにって、サードと戦っていたんだ」

「ああ、そうか。そういやそうだったな」

グレイは、まだ頭痛でもするのだろうか、頭を押さえながら現状認識を行う。

「それで・・・ここにアンタが生き残っているということは、アンタがサードに勝ったんだろ、団堂」

「そうだ」

「け、やっぱアンタはつぇえよな。あのサードをぶったおしちまうんだからよ」

「ああ、お前が吸収されたおかげで余計に手間取った」

「ふぅん。まあいいか。とにかく、団堂。アンタは、俺に勝ったんだ。この先に進む権利がある。だから、さっさといきな」

「しかし、グレイ。お前はまだ戦えるのに、俺を先へ行かせてもいいのか。俺はお前の妹を殺した張本人なんだぞ」

「うっせぇよ、もういいんだよ。そんなこと。お前と戦うことで、あいつを殺したのは、結局、俺自身だったってことに気づいたんだ・・・。ありがとうよ」

グレイは、らしくもなく顔を赤らめて礼を告げる。

「グレイ・・」

団堂は、なんとなくそんなグレイに後ろ髪惹かれる想いであった。

「あぁー、もういいからさっさと先に行きやがれ。まだ、やることが残ってんだろ?なら、こんなところで油なんか売ってるんじゃねぇよ、ばーか」

「しかし、グレイは、これからどうするんだ」

「俺か?俺は、社長の船を守りに行く。鬼に取り付かれて、ひょいひょい出ていっちまったからな。そんで謝ってこねぇと」

「そうか、お前がいてくれれば心強い。社長たちのことをくれぐれも頼む。グレイ」

「ああ。アンタも、袴田なんぞにこの世界を消させるんじゃねぇぞ」

「わかった・・」

そういって、団堂は、さらに奥へと消えて行った。

「さてと、俺もそろそろこんなとこからオサラバだな」

グレイは、改めて自分の乗っている機体を動かしてみると、いつも乗っているゲイボルグとはどうも勝手が違うことに気づく。そう、彼の機体はアポカリプスになってしまっているのだ。

「こいつ、使えんのかよ・・」

グレイは、愚痴をこぼしながらも出口へと向かっていくことにする。

「・・・?」

だが、そんな彼の背中には、身が凍りつくほどの冷酷な殺気が突き刺さるのだ。

アポカリプスが、欲望を体現した無限の力であるならば、この殺気は圧倒的絶望の総体にあるうちの氷山の一角だ。途方もない負の世界から生まれる絶望のエネルギーが、ひしひしとグレイの心を掴んで離さない。

「久しぶりね、グレイ。債権者総会の会場はこの奥でいいのかしら」
「この声！てめぇ、しばらく見ねぇと思っていたが、生きてやがったのかよ。しかも、なんだそのオーガ？」

振り返るグレイの前には、魔界の支配者たる高貴なる威厳があった。そこから放たれる魅惑のオーラは森羅万象あらゆるものを跪かせる。そう、その名は最高執行官アスタロトであった。

「あなたのオーガこそ、随分と変わってしまったのね、グレイ」
「安心しろ、てめぇのキャラほど変わっちゃいないさ。辰巳春樹」
「ふふふ・・・」

少女は、なんともいえぬ、不敵な笑みを浮かべるのであった。

第57話　malicious fascination

アポカリプスとの死闘を終えた団堂は、息つく間もないまま、袴田の待つ戦場へ向かっていた。広大なドーム状の空間の床部にあった下降用ゲートより、再び地へと下る。何がいつ現れてもおかしくないという、張り詰めた緊張感を維持したまま、さらに下降を続けて10分ほど経過したころであった。あれからずっと地中に向けて突っ切っていたようであったから、とうにマントル層にでも到達しているかのように思われたが、そんな灼熱の溶岩地獄のような光景はいつまでたっても現れなかった。それどころか下れば下るほど、視界はどんどん広くなっていく。地中にありながら、天空よりも広い無限の世界がそこにはあった。

そう、湧き出る泉のごとく自分の目の前にはスモッグのような黒い闇が拡散を始め、拡散を始めた闇がさらに拡散を始め、累乗倍に展開される。狭かったシャフトのような一本道は、すでに暗黒の闇が覆い尽くす巨大な空間となっていたのだ。むしろここは、宇宙のような広大な空間だ。上を見上げれば、どこまでも広がる黒い空がある。そう、ここはすでに『この世』ではない。いつのまにか団堂は、莫大な力によって作り出された異世界へのゲートをくぐらされて、外法が支配する異なる世界へと放り投げられたのだ。だから、彼の知る常識や良識の手垢にまみれた世界など、もう何処にも存在しないのだ。

「寒いな・・・」

物理法則の適用が排除されたこの世界において、いったい寒いとはどのような、もとい、どれほどの意味を持つものかはあきらかではない。灼熱の焔を前にしても、身が凍りつくようなこともありえるだろうし、またその逆も然りだ。ただ少なくとも、見知らぬ世界で

ただひとり、無謀な戦いに挑み、そしてただ死んでいく。そんな自分の寂しさがとても寒かったことだけは確かだ。人間の心の動き。ただそれだけは、どこに行っても通用する普遍的なルールのようだ。

「なあ、アニミスト。お前は、俺みたいなやつがお前の執行官で、本当によかったのか？」

団堂はただなんとなく、半分ふざけてそんなことを訊いてみる。だが、アニミストは答えない。積極的に団堂のことを肯定するでもないし、否定するでもない。ただそれは、団堂の意思に忠実に動いてくれるだけなのだ。アニミストもれっきとした外法生命体であるのだから洒落のひとつを吐くぐらいの可愛げがあってもよいように思えるが、もとより言葉を発するようにはできてはいないから、当然といえば当然だ。

「・・・・」

団堂は、あまりに寂しすぎてとうとう邪気に気でも触れたのかと思い、自分のことを少し苦笑した。オーガが、自分の執行官に対して文句もクソも言うはずがないのに、なんともおかしな行為をしたものだ。

「いずれにしても、もう間もなくして、この戦いも終わる。結果云々はぬきにして・・・」

短かったような、長かったようなこの戦いであったが、もうゴール地点はそう遠い場所にあるわけではない。袴田との決着のときはすぐそこにあるのだ。もっとも、少なくとも非常に高い確率で、団堂は袴田に殺されるだろう。最悪の場合、もしくは、その手前で、ということも十分にありうる。しかしながら、それはそれでいいのか

もしれない。やることはやったわけだし、ようやくあいつと同じ場所に行けるから。

だが、万が一、団堂がこの世界を変える権利を手に入れたら、そのときは―。

「そのとき、俺はどうするんだろう」

一応、この世界を元に戻す。当初からの建前でいけば、それが最大の目的であったはずだった。世界を元に戻して、今までと同じ世界を歩いていく。失ったものもたくさんあるけれど、きっとすぐにこの国に活気は戻ってきてくれるはず。オーガというとんでもない外法生命体と長きに渡って抵抗を続けてきた日本人だ。きっと、強く、たくましく、これからの未来を切り拓いていけるはずだ。

だが、そのあと俺はいったいどうするのだろう。あいつのいないこの孤独の世界で、絶対零度の砂漠のような世界で、俺はいったい何のために生き、なにを喜びにすればいい。それとも自分は死ぬこともできずに独り、のうのうと生きていけばいいのだろうか。それは、本当に自分が望んだ世界なのだろうか。いや、そもそも生きていてもいいのだろうか。海の藻屑にでもなって消えればいいのだろうか。それとも、俺は・・・・。

「ん・・？」

自問自答に夢中であったが、突如、前方に巨大な物体があることに気づく。スの塊のような闇にアニミストの周辺領域全体が覆われていたのでなかなか気づけなかったが、近づくことによってその実体がある程度明らかになってきた。それはまるで、闇を纏う暗黒の魔城のように気高く聳え立つのだ。見上げども、見上げども、頂上がまるで拝めない、山のごとき巨大建造物。

「これはいったい？」

団堂は、もっとそれに近づいてみることにする。近づけば近づくほど、モヤのような闇が晴れてその正体がよく分かってくる。まさにこの巨大な物体の正体は壁。堅牢なる分厚い城壁。この広い空間の果てを画定し、はみ出ようとするもの一切を堰きとめ、遮ろうとする巨大な壁であった。しかし、ただの壁ではない。触手のようなパイプが無数に張り巡らされては、壁を這いずっている。まるで生きているかのよう。まさに生命の鼓動のようなものが感じられるのだ。

「まさか、これがオーガとでもいうのか・・・」

これが仮にオーガであるとして、かつてオーガの作成を担当していた団堂にも全く記憶がないものである。そうなると、団堂が抜けたあとに袴田が新しく作った新型オーガと考えるのが凡そ妥当そうだ。いや、そうとしか考えられない。さっきから、コクピット備え付けのポンコツディスプレイがビープ音をぎゃあぎゃあ喚きたてている。このアニミストが同じオーガとして、あの巨大な壁が危険であると団堂に警告を告げているのだ。しかし、こんなに大きなオーガなどあってよいのだろうか。アイアンメイデンも相当に巨大であったが、これはその比ではない。

「これを破壊すればいいんだな」

だが、巨大であるとはいえ、単に大きいだけの壁である。これを破壊するのもそう難しいことはないはずだ。一箇所だけでもぶち抜いて、向こう側に出られればそれで事足りるはずだ。こんな巨大なものを全部跡形もなくぶちこわしていたら、自分の一生かかってもたりないぐらいだ。

「ニルヴァーナ、こいつをぶち破るぞ」

団堂は、5本のニルヴァーナをアニミストの胸部に集め、なにやら縦長の筒を形作る。それらは、綺麗に整えた筒の形を崩さないよう、器用にもくるくると高速回転を始めて、筒の内部に巨大なエネルギーを生み出す。

やがて、筒の中には許容限度を超えたエネルギーが充満してしまったのか、鮮やかな桃色の光が筒の隙間という隙間から滲み出してくる。とんでもないエネルギーを含んだそれは、まさにエナジー棒。果てしないエネルギーを棒状に限りなく圧縮させ、極々小化した破滅そのものだ。あまりにたがの外れたその塊は、周囲の空間を歪ませ、光彩を屈折させ、周囲の闇を吹き飛ばす。

「撃て、アニミスト」

ありあまるほどのエネルギーを溜め込んだそれは、爆発の先を求めて暴走寸前となっている。まるでオーバーヒートしてガタガタいっている洗濯機のようになっているので、そろそろ投げてしまった方がよさそうだった。だから団堂は、遠慮なくそれをぶっ放すのだ。本来、あまり仲のよくない（？）個々独立のじゃじゃ馬娘のようなニルヴァーナであるが、それらが5本も集まって発動する協働兵器。たとえ、前方の壁がどれほど厚かろうと、一切合切くり抜いて、滅失させるはずだ。

「・・・どうした？」

だが、その壁に接触する直前、エナジー棒を纏っていた鮮やかな光は一瞬にして失せ、高速回転する5本のニルヴァーナだけがむなしく残り、その壁に突き刺さる。そのまま、ニルヴァーナたちは、せっせとがんばって、ドリルのように壁をガリガリ抉り取ろうとする

だけであった。やがて、高速回転の勢いすら失ったニルヴァーナたちは、慣性によって残っていたエネルギーまでもが底を尽き、その壁に突き刺さったまま動きを止めて沈黙するに至ってしまった。

「外法無効シールドか？」

この現象の原因として考えられるのは、この壁全体に外法無効シールドでも張り巡らされているのではないか、ということが挙げられる。

しかしながら、それはありえないだろう。たとえ、外法無効シールドであっても、物理との併合兵器であるニルヴァーナのエナジー棒が直ちに失速するなど、それほどの効用があるはずもない。

それならなぜ・・・。

「・・・！！」

原因究明のため、思考を巡らせていた団堂に対して突如、壁のどこからか数本の触手がアニミストに向けて伸びてきた。闇が濃くてどこから来たのかもわからないが、早めに危機を探知できたので、これをかろうじてかわす。否、この軌道では、もとよりかすりもしないから、団堂が避けたのではなく、当たらなかったのだ。当てる気がそもそもないのだ。それなら当たるわけがないはずだ。なぜなら、これはただの威嚇だから。開戦の狼煙を上げるため、あくまで挨拶代わりにした、攻撃ですらない攻撃。有効打にすらならないジャブのような、ほんのささいな、取るに足らない数撃。わざと相手はかわせるような速度、角度で攻撃しただけだ。

だが、そのおかげでわかった。団堂の敵はやはりここにいる。

「お前がそうか・・・」

触手の戻っていく先を目で追っていくと、そこにはアニミストの5倍ほどの大きさがある巨大な蕾が、まるで空中に鎮座するように浮いていた。巨大な鉄板を幾重にも貼り付けたような鉄の塊か。いや、よく目を凝らしてみれば、その分厚い鋼の板は薔薇の花弁の一片に酷似する。それはいわば、鋼の花弁を闇のような宇宙に咲き乱れさせている、異形かつ巨大な妖花。

「こいつ」

おぼろげな意識の中、以前、全執行官が団堂の前に集まったとき、団堂はコイツを見た。見たことのないオーガであったこと以上に、コイツはあの中で特に異彩を放っていたから、相当印象に残っていたのだ。

「お前・・・お前は誰だ?」

団堂は、顔も知らない謎の執行官に対して問う。あえてこのタイミングで、この場所で、団堂の邪魔をするこの未知なる執行官に、団堂は問う。

「フフフ・・・」

謎の執行官は笑う。あくまで上品に、口先だけで、だけど、ふきこぼれそうなほどの喜びを必死に抑えつけるように。
しかし、そこからもれる声のあどけなさといえば、まるで少年のよう。悪戯が功を奏した時に見せる、少年の悪意なき無邪気な嗤い。

「僕は・・・そう僕は、ナイン。かつて、先生の下を抜け出した君の後釜だよ。団堂曹士先生」

そうだ、この声は・・・。少し前のことではあるが、はっきりと覚えている。

団堂は、この声だけを手繰り寄せて、記憶を遡っていく。あのとき、たしか八王子の山中で、これと同じクソ生意気な糞餓鬼の声を聞いたんだ。ピーピーと耳元で、散々喚かれたから思い出すたびに頭痛が走る。

「お前は、あの時の・・・ノイ！」

確かあの時、この餓鬼は己のことを『ノイ』と名乗っていた。その名前を口に出した瞬間、ノイのクソ生意気な面もはっきりと想起できた。私学教育で義務教育を修了してしまったいいところの坊ちゃんのような餓鬼の顔が、団堂の脳裏で再生産されたのだ。

「へへへ、団堂先生、僕のこと覚えていてくれたんだ。うれしいな。でも、それは残念ながら便宜上、つけさせてもらった仮名でね。僕の本当の名前はナインっていうんだよ。まあ、あの時は君と被っていたからね」

ノイは、やはりあの時の大人を小ばかにしたような口調のままで応える。何も変わらない、無邪気な子どもの口調で、人懐っこい話し方をするのだ。

「ノイ・・・。お前はやはり、執行官だったのか」

しかし、その声が発せられるのが、あの巨大なオーガからであると、いくらそれが子どもの口調であるとはいえ、かえって不気味さが増し、団堂も全く予断を許せない状況にあった。

「そうだよ、団堂先生。あのときは黙っていて悪かったね。僕は、

このアーリマンの執行官さ。そして、君の敵でもあるのだけれど・・・」

ノイの声のトーンが、だんだんと暗くなっていく。彼の声が暗くなっていくほど、溢れんばかりの殺気が反比例して増えてくる。ノイは、途方もない闘争心をむき出しにしているようだ。

「さあ、早くはじめようか。僕たちの戦いを・・・」

ノイがそういうと、アーリマンの周りにびっしりと張り付いていた、花弁のような分厚い装甲は、めりめりと音を立てながら花開いていき、粘液のような体液が長い糸を引きながら、その内部を曝け出していく。巨大な蕾にすぎなかったアーリマンは、果実を包む鋼鉄の花びらを引き剥がすように捲り続けると、中から悪の極を身をもって体現するかのような最兇のオーガが現れる。

巨大な蕾が花開いて出てきたのは、アニミストとさほど変わらない大きさの真っ赤なオーガ。しかし、花開いた鋼鉄の花弁が蝶の羽のようにアーリマンの背部で広がり、羽までその大きさに含めるとそのサイズは相当でかい。

そんなことよりも殊に目を引くのはアーリマンの兇悪さだ。それは全世界の悪意（マリス）を掻き集め、結晶化した、悪１００パーセント。いや、それは悪であると同時に美しくすらある。美しいほどに悪であり、悪しきほどに美しい。生物一般は、なぜだかやくざなものに心惹かれる性質があるが、それに極々近い感覚であると思う。

「ノイ・・・お前」

「いくよ。団堂先生」

アーリマンの放つ、圧倒的な魔性に魅せられた団堂を正面に、アーリマンは巨大な花のような羽をはためかせて飛来する。うっかり不

意を打たれた団堂は、急いで防禦行動へと移る。今からでは回避など到底間に合いそうにないのだ。

（こ・・これは？）

団堂は、すぐに違和感に気づいた。しかし、ただでさえ不意をつかれ、呆気にとられている団堂は、そのことに気づいても何もできなかった。

すぐ目の前には、のた打ち回る数本の触手にまみれた、アーリマンの巨大な右腕が振りかぶられる。回避はもはや無理。ならば、仕方がない。一発ぐらい、もらってやる。

アーリマンより放たれた、図太い触手を叩きつけるかのような右フックの一撃は、拳の衝撃と同時に、数本の触手がアニミストの装甲を穿ち、突き刺して、蹂躙する。その直後、衝撃のために後方へと仰け反らせるが、触手がそれを絡めとり、アニミストを後ろに逃がすことはない。

そのため、アニミストの内部では、後方へとかかってたすさまじい重力が、一気に前方へと反転させられることになる。これにより、中の団堂は、おそろしくかき回され、内臓を抉られるような感覚を味わう。

「おぇあ・・・」

喉の奥まで腕を突っ込まれたかのような不快感により、嘔吐感が昂ぶる。だが、そんなことを気にしている場合ではない。まだアニミストは、敵の触手に捕らわれているのだから。

「やれ、アーリマン」

触手の収縮のより、アーリマンのリーチに引き戻されたアニミスト

は、いまや格好の的である。敵は十二分に溜め込んだ至高の右ストレートの構えでアニミストをぶっ飛ばす気だ。

「くそ、虚物化もできないのか？」

やはり、このアーリマンには特殊能力があるようだ。あの時に感じた違和感から類推して、もしやと思ったが、まさか虚物化まで許されないとは。ならばもう、こちらも真っ向勝負に出るほかない。

「うおぁぁぁぁ！！！！」

吐きそうな最低の気分は気合いで吹っ飛ばして、こちらも右ストレートを構える。触手の収縮する勢いに乗って、このままアニミストの強烈な拳を叩き込んでやる。

そして、ふたつの鉄拳が正面衝突する。ふたつのオーガの間が爆砕し、モヤのような濃密な闇を吹き飛ばし、互いに後方へと吹っ飛んでしまう。これによって、幸運にもアニミストを絡めとっていた触手はぶちぶちと根っこから千切れ飛んでいってしまい、ようやくにして解放された。

「ははははは・・・」

ノイは、嗤う。これは愛想笑いなどではない。彼は半ば、恍惚状態に酔いしれ、異常なアドレナリンの分泌のために、心の底から嗤っているのだ。団堂との殺し合いが愉し過ぎて、膝までもがカクカク嗤っている。

「あはははははははははははは」

ノイは、瞬きひとつせず、狂気に染まった猫のようなくりくりした眼を開き、叫びのような嗤いを響かせる。

「いいよ・・・。いいよ・・。団堂先生。僕、いま、すっごく愉しいんだよ」

ノイは、息継ぎをするのがやっとというほどに、興奮したまま、今の自分の最高の気持ちを団堂に伝えてくれた。

「なにが愉しいだと？お前のおかげで死にかけたぞ・・・。全く、お前のそのアーリマンというオーガは、とんでもない力をもっているな」

団堂は、命からがら、アーリマン必殺の右ストレートを、こちらの右ストレートでなんとか相殺できたことに安堵する。しかし、その反動で、アニミストの右腕の基本部分は完全にいかれてしまっているようだ。これは、早急に自己修復する必要がある。

だが、おそらくそれは無駄であろう。先ほどのエナジー棒の件といい、防禦の際といい、いくらなんでも気づくはずだ。

「そうだね。これ以上隠しても無意味だし・・・。おそらくは先生の考えているとおり。アーリマンの力で、ここら一帯の外法規則は全て無効化させてもらっているよ。だから、物理法則以外の原理原則をこの戦闘において使用することはできない。つまりは、外法属性攻撃も、各種防禦シールドも、虚物化も、自己修復さえも、全てできないんだよ」

やはりそうだ。団堂自身、お初にお目にかかる高等外法技術、いわゆる外法封じ。

理論的には、外法効果の部分についてのみ、これを無効とする特則

で、あらゆる外法規則を塗り替えてしまい、効果妨害をするもののようだ。

「だから、団堂先生。オカルトなんかに頼らないでさ、僕に見せてよ。君自身の本当の強さを。アニミストなんかよりも、もっと恐ろしい。団堂曹士という男の真の恐ろしさを」

第58話　Child prey

ふたつの拳が強烈な衝撃波を走らせる。
そのために、アニミストとアーリマンの間でたちこめていた闇は一斉に散り散りとなって吹き飛んでいく。これによって、えらく闇の中に沈んでいた、互いのオーガのおぞましき表情が、はっきりと浮かぶようになるのだ。にらみつけるような鋭い眼光が、それぞれ互いの敵をしっかりと捉えるのだ。
彼らは、目の力のみで牽制し、威圧し、挑発する。そのためか、ふたつの間には何者にも付け入る隙のない不気味な沈黙が渦巻いていた。

「アニミストを完全に腐らせたってわけか。これでは、俺が圧倒的に不利だな」

アーリマンの外法封じによって、アニミストの機能のうち、大半がその機能を失ってしまうことになったのだ。とりあえず、なぜかアニミストのコアであるメンタルスフィアまで機能停止には陥っていないのは、なんとも良心的ではあるのだが・・・。それでも、主力兵装のほとんどを外法規則に頼っているアニミストは、空手に等しい状況にある。

「圧倒的に不利ってことはないよ。だって、アーリマンのせいで外法に頼れないのは僕も同じだからね。もっとも、アーリマンは、物理属性による戦闘において最強のオーガとして設計されているんだ。本来、オーガは、対オーガ戦闘を想定してはいないから、外法封じなんてあっても何の意味も無いんだけど・・・。でもね、このアーリマンは完全に対オーガ戦を、特にアニミスト対策をねらいとして設計されている。だからいかにアニミストといえど、現状の戦闘能

力でいえば、君はアーリマンにはるかに劣っているんだよね」

そう、彼の言うとおり、拳をひとつ交えただけでアーリマンのパンチ力の方が圧倒的に強いのは、決してお世辞ではなくて、明らかなる事実であった。なにせ、向こうは大したダメージを負っていないのに、こちらは右腕が使い物にならなくなってしまっているのだから。そもそも、アニミストは、肉弾戦を想定していないのだ。

「なるほど。お前のアーリマンは、オーガでありながら、対オーガ用のいわば、アンチ・オーガだな・・・」

「そう言われるのは心外だな。だって、まともにアニミストなんかと戦ったら絶対に僕が負けちゃうもん。これも立派な戦略というもの。だけど、こうやって外法規則を無効化すれば、君と思う存分に戦える。君と最高の殺し合いができるんだ」

ノイは、涎を垂らしそうになりながら、アーリマンにファイティング・ポーズをとらせる。

「お前・・・、どうしてそこまでして俺と戦う必要があるんだよ。少なくとも俺は、お前と戦う理由なんてどこにもない」

そんな準備万端のノイに対して、団堂は、彼の出鼻を挫くように言う。それを聞いたノイは、やはり出鼻を挫かれたらしく、せっかく準備したファイティング・ポーズを取りやめて、前のめりになってしまう。なんともしらじらしいノリ突っ込みであろうか。

「どうしてって・・・、君と戦いたいから・・というのは答にはなっていないかい?そもそも、戦いに理由なんて必要なのかな?」

ノイは、団堂の気持ちが理解できず、ボリボリと頭を掻いた。

「ふざけるな。これは、スポーツとは違うんだ。理由もないのに、お前を殺すことなんてできるわけがないだろう」

どうしても戦おうとしない団堂を前に、ノイはとうとう腕を組んでしまう。

「どうしたんだよ、先生。う〜ん、どうにもまいったなぁ。もしかして、僕のことを心配してくれているの?もしそうだったら、はっきりいって愚問だよね。どっちにしろ、袴田先生がチャプター9によって、僕ごと消去しちゃうんだからさぁ。本当に僕のことを考えてくれているのなら、むしろ全力で僕を殺しにきてくれたほうが、僕はうれしいよ」

「お前の都合なんて知るか。これは、お前を殺したくないっていう、俺個人の都合だ。だから、そこをどけ。ていうか、お前、前に俺に言ったよな。友達の願いは絶対だって。これが、その願いだ。早くどけ」

ノイの熱心な説得に対して、団堂は、いつぞやノイ自身が使った論理を持ち出して、すぐに切り返しの反論をし、彼に食い下がった。

「先生、ここでそれを使うなんてずるいよ。確かに、友達の頼みを聞くのは、友達としての義務だよね・・。それは、僕が君に対して言ったことだよ」

「ならばそこをどけ」

「でもね・・。ゴメン、先生。その頼みだけは聞いてあげることができないんだ。本当に、ゴメンね・・・」

そういいながら、ノイは、改めてファイティングポーズをとった。

「ノイ！」

「だから、もし君に戦う理由がないのなら、僕が作ってあげる。僕が君を全力で殺しにかかって、君を強制的に戦わせる」

「そんな挑発には乗らない。俺は、お前がオーガの執行官だとしても、滅ぼされなければならない者だとは思わない。お前はまだ子どもで、いくらでもやり直しが利くんだ。そんなお前と殺しあう意味が、いったいどこにある？」

「先生・・・、君に僕の何がわかっているというんだい？いや、やっぱり君は、僕のことを何一つわかっていない。先生が知っている僕は、あくまで偽りの僕。ただのひとりの人間として、社会性という仮面によって、その本性を隠蔽した僕さ。本当の僕は、ヒトという生き物の邪悪そのもの。そう、このアーリマンのように非情で、残忍で、冷酷な悪魔さ。何よりも自分の欲望に忠実で、自分の目的のためならば何だってする。たとえば・・そうだねぇ・・・」

「・・・・」

「ちょっと話は長くなるんだけど、ひとつ、君にいいことを教えてあげようか。実はこのアーリマンの花粉は魔の媚薬でね、ヒトの精神に作用し、狂気を掻き立てる効用があるんだ。そう、あれはたしか・・ソウルで君とシックスが戦っていた時だったかな。君が伸びているときにアニミストの中に大量に積んでおいたんだけど、よく効き過ぎちゃって、オーガに乗るヒトは、殆どみんなおかしくなったでしょ。あれ、全部、僕の仕業なんだ」

「じゃあ、俺があのとき、異常な行動に出たのも・・お前の仕業だっていうのか？」

団堂は、あのときのゾッとするような感覚をはっきりと思い出していた。心が闇に沈み、怒りなのか、狂気なのか、圧倒的な絶望が自分に襲い掛かってくる気分が再生産されるのだ。

「そう。おかげで、圧倒的に不利だった君も、シックスのアホを打

ち殺せたわけだし、アニミストの覚醒もなされたというわけ。感謝してよね。まあ、でもそのせいで、団堂先生、君は君の大切なヒトを、まさにその自らの手によって、ばらばらにしちゃったわけだけどね。あはははははははははは・・・・」

ノイは、団堂を見下し、蔑み、あざ笑う。

（なん・・だと・・・）

ノイのささやくような、それでいて呪文のようなその言葉は、団堂の心を鷲掴みにして、彼の記憶の中に刻銘に刻まれた、ばらばらになった詩季の姿を蒸し返し、半ば強制的にフラッシュバックさせていた。

切り裂く肉の感触、噴出す大量の鮮血。握りつぶされたようなコクピットの中で、血の海に沈んでいた彼女の見るに耐えない姿。

（ノイ・・・お前が・・俺の・・敵・・・）

眼球が血涙に埋もれてしまったのか、それとも脳全体が燃えるような深紅の怒りに支配されているのか、団堂の目の前は真っ赤になる。とにかく身体が熱い。心臓部分が燃えているのか、全身が熱くて、手足が震える。呼吸が荒くなる。いったい、何なのだろう。この気持ちは・・・。身体が、熱くてたまらない。まるで、これは自分の身体ではないようで、地に足が着いている気がしない。しかし他方で、客観的に自分を見ている自分がいて、でも、熱くなった身体を止められなくて、手をこまねいている。

「あはははははははははは。あはははは。愉快。愉快。あはははははは・・・・」

空間が爆砕する。雷鳴が一瞬轟くような音がなったのだ。
そう、何も考えられなくなった団堂は、いつのまにか、無意識にもアーリマンをぶん殴っていたのだ。そのため、大爆笑をしていたノイの叫びのような笑い声も急停止する。
アーリマンの細い身体が、大地に叩きつけられ、3～4回バウンドし、そこで止まる。
少し油断していたノイは、突然の強い衝撃に口内を噛み、口の端から血が垂れる。だが、その反面、彼の表情は怖気がするほどの歓喜に満ちていた。

「やっと、戦う気になってくれたんだね。そう、彼女の死も、君の覚醒も、全てはこの僕が仕組んだ罠だったんだ。この僕が、何も知らない君をして、意のままに君を操り、君の大切なヒトを自らの手によって殺させたんだ」

アニミストの一撃によって、アーリマンの右頬の部分がひしゃげ、その勢い余り、後方へと仰け反りながらアーリマンは吹っ飛んでいく。その最中であっても、中のノイは、団堂が自分のことをようやく仇名すべき最悪の敵と認めてくれたことに喜び、ただただその事実に酔いしれていた。

「ノイ！お前は・・お前はぁぁぁぁ」

アニミストは、疾風怒濤のごとく追撃する。彼の前にいる物体は、紛れもないオーガなのだ。善きものを否定し尽し、正義を蹂躙する、まさに最凶のオーガ。魔性の極みたる、悪の権化。
滅ぼされる必要のないオーガだと?なんと、馬鹿げたことを抜かしたものだ。こいつは、直ちに消されなければならない。正真正銘、世界にとっての害悪だ。もっと早く気づくべきであった。情けなど、こいつに意味も無いし、必要も無い。除去せねばならない。一秒で

も早く、この世界から消さねばならない。このアーリマンとは、団堂にとって、最優先に仇名すべき敵以外のなにものでもなかったのだ。

「そうだよ、団堂曹士。君の敵は、ここにいる。僕はここにいる。だから、もう言葉は要らないよね。君の叫びが、君の拳が・・・、君の想いを、君の怒りを教えてくれる」

ノイは、それ以降、まだあどけなさの残る子どものような仮面を取り外し、アーリマンの執行官としての恐ろしいほどに冷たい表情へとその表情を変えた。

見つめられたものを切り裂いてしまうようなノイの冷酷な瞳は、冴えた洞察力を駆使して、迫り来るアニミストの動きをしっかりと捉える。戦闘のために純化したノイの感覚は、するどいナイフのように研ぎ澄まされ、アニミストの音速の動きを正確に追っていく。

すっと、音もなくアニミストの右腕から打撃が繰り出される。だが、基礎部分が粉々に破壊された右腕の攻撃など、頑強なる肉体を持つこのアーリマンにとって、もはやおそるるに足らない。このまま、その右腕ごと、アニミストの顔を粉砕してやればいい。

そう考えたノイは、アーリマンを右足から踏み込ませて、強烈な左ストレートを叩き込む。

「なに?」

だが、右足を思い切り踏み込んで、アーリマンの顎が下がったところ、予想もつかないところから、その下がった顎を目がけてアッパーが飛んでくる。気づいた頃にはもう遅かった。

「がぁっ・・」

アーリマンは、下から突き上げてくるような強打を顎に受け、そのまま全身を揺さぶられながら、天に舞う。完全に不意を突かれたノイは、迂闊にも突然の衝撃に舌を噛む始末。大地震のような縦揺れの振動に蹂躙される中で、それでもノイは、アニミストを見る。すると、それには背中から2本の隠し腕が伸びていることに気づく。

（なるほど。右腕は囮か。そして、僕の一撃を読んで隙だらけの僕の顎に、隠していた腕で一発いれたのか。そういえば、アニミストには腕が4本あったんだっけ）

アニミストにとっては、格闘が不向きであるとはよく言ったものだ。武装としての外法を封じられているのに、肉弾戦最強のアーリマンに対し、その肉弾戦においてさっそくクリーンヒットさせるとは。なんとも末恐ろしいオーガであろう。

「ノイ！これで、とどめだ」

ノイが感心していると、上にふっとばされたアーリマンを目がけて、容赦なくアニミストが跳躍する。

（さすがに、次の攻撃はもらいたくないな・・・）

危機を察知したノイは、アーリマンの背中にある鋼鉄の羽を瞬時に折りたたみ、再び蕾の形態へと戻る。これによって、アーリマンは一瞬にして鋼鉄の鎧を纏うことになる。

「く・・・」

アーリマンをめがけて繰り出された、アニミストの拳は鉄壁の花弁

を前にして完全に砕かれる。とんでもない装甲を誇るその鎧は、物理攻撃の一切をものともせず、傷ひとつ負わすことすらかなわなかった。

頑丈な壁に逆にやられたアニミストは、一瞬、上空でよろめく。ノイは、この期を逃さず、蕾の底部から数本の触手を槍のように突き出して襲い掛かる。団堂はこれを回避しようとするも、よろめいていたほんの一瞬の隙が命取りとなり、アニミストに数本の触手が突き刺さった。

「まだだよ、先生・・・」

両肩や、腹部を貫通した触手を通して、何かがアニミストの体内へと送られる。

「ちくしょう、これはいったい？」

団堂は、モニター画面が一斉に悲鳴を挙げたために、それに目をやった。すると、両腕及びその他の箇所における神経回路に深刻なエラーが発生しているようなのだ。確認のため、エラー箇所を動かそうとするも、殆ど反応がない。どうやら、精神的なリンクシステムが、何らかの方法によって断線したものと思われる。

「さあ、どうする先生？今、君のアニミストの中には、アーリマンの猛毒が駆け回っているよ。この猛毒が、オーガの体内に充たされた時、君のアニミストはその機能を停止し、終わる・・・」

猛毒。アーリマンの触手を通してアニミストの体内に送り込まれているのは、謎の猛毒。

そう、綺麗な花には毒があるのだ。その美しい花弁の鮮やかな色彩は、見るものの心を奪い、誘い出す。そして、花に取り込まれたが

最後、いつのまにか花の毒によって、身も心も侵され、ゆくゆくは花の餌食となるのだ。今のアーリマンの姿は、まさにその危険喚起の標語を如実に物語ってくれている。

「くそ・・。どうすれば・・」

団堂は、この触手から逃れるため、かろうじて動かしうる部分でただもがく。しかし、しっかりとアニミストの身体に突き刺さった触手は、容易に離れることはなく、アニミストの身体を次々と侵食していく。アニミストの全身に行き渡るエネルギーも、枯渇を始め、モニター上のエラーはさらに深刻を極める。

「どうしたの、先生？これで終わりなのかい？残念だなぁ・・・。君の大切なヒトを殺した敵が、すぐ目の前にいるというのに、君はその程度の力しかだせないんじゃあ。ねぇ、団堂先生・・・。あははははははは」

アーリマンの鋼の花弁に篭りながら、ノイは、団堂に対して圧倒的となった状況に笑いが止まらないでいる。そして、彼はただ悠然と余裕を振り撒いて、手を拱いてばかりいる団堂を、見下し、挑発するのだ。

「ノイ！お前はぁぁぁぁぁ！」

団堂の脳裏に消えない傷となって保存されていた詩季の記憶が、血のように赤黒い映像となって団堂の頭の中で飽和する。それは、彼の思考回路を溶解させ、機能不全にさせるに十分な威力がある。そして、完全に頭に血が昇った団堂は、とうに外法が使えないことも忘れて、毎度の必勝パターンにのっとり、必殺のニルヴァーナを放つ。

もちろん、ニルヴァーナの遠隔操作司令は外法規則に基づく効果である。だから、外法封じが支配するこの戦場では、団堂の遠隔操作司令はニルヴァーナに届くはずはない。
しかし。

「しまった・・・」

ノイの慌てる声が聞こえる。うっかり、敵に反撃を許してしまったという声だ。
外法が使えないはずのこの空間で、間抜けにも外法を使用した団堂の暴挙に対して驚く声ではない。
そう、動かないはずのニルヴァーナが、壁に突き刺さったまま止まってしまった5本のニルヴァーナが再起動し、触手に犯されているアニミストを助けに来たのだ。

「ニルヴァーナ、コイツを切断しろ」

それは鋭い刃となって、アーリマンの太い触手をいとも簡単に切断した。そして、切断された触手は、地に落ちて、猛毒を撒き散らしながらのたうちまわる。拘束がとかれたアニミストは、ややよろめきながらも、かろうじて立っていることができた。どうやら、頭に血が昇って暴挙にでたことが、結果的にはよかったらしい。

「助かったのか・・・」

次第に、アニミスト体内の浄化作用が機能を開始し、毒に侵された身体の不自由も緩やかに回復を始める。

「く・・・逃げられたか」

アーリマンは、すぐに触手を仕舞いこんで、もとの人型に変形する。
再びあの、おぞましくも美しい巨大な蝶の羽が開くのだ。

「ゆけ、ニルヴァーナ」

3本のニルヴァーナが、鉄壁を解いたアーリマンの下へ向かっていく。3本のニルヴァーナは、死肉に群がるハイエナのように、アーリマンの柔肉にかみつくのだ。だが、アーリマンは、避けようとしない。

「無駄だ！」

ニルヴァーナがアーリマンに到達した瞬間、それらはまるでジャミングをかけられたように、それぞれ目標を失って、加速を失い、重い音を出して地に落ちた。どうやらまだ外法封じの効力は死んでいなかったようだ。
しかしながら、それを見た団堂は、あることに気づくことができた。

（やはり、外法封じは生きている・・・。とすれば、あのときだけ、外法封じが死んでいた、ということになるな）

それはいったいどういうことなのか。
答えは簡単だ。強力な外法封じを発動させるためには、一定の条件が必要なのだ。そして、一瞬、外法封じが効かなかったのは、必要な条件を充たしていなかったからだ。
では、その条件とは何だ。
アーリマンの蕾形態。強力な装甲と、恐ろしい猛毒を持った触手による攻撃を持つ、一見隙のない形態。
仮に、外法が使えないとすれば、あの圧倒的防御力を前にして、アニミストは為す術もなかったであろう。あの形態のままで攻め込ま

れていれば、アニミストに勝ち目はなかった。なのになぜ、アーリマンは、絶対的有利な状況で、あえて人型に戻ったのか。

それはおそらく、人型でなければ、外法封じを発動できないからだ。きっと、あの羽が撒き散らす燐粉にこそ、外法封じの秘密があるはず。

そう、裏を返せば、蕾形態のときには、アニミストは外法が使えるのだ。アニミストの外法を使えば、あの装甲であっても、破壊することは容易だ。

「ふ・・・」

団堂は、ノイに気づかれないように、静かに嗤った。なんという皮肉であろう。あまりに粋がいいはなしで笑えてくる。圧倒的な装甲により、傷ひとつ付けることすら許さない鉄壁の城。分厚い鋼の花びらをこれでもかというほど重ねたアーリマンの蕾形態。だがそのときこそ、アーリマンは自らの急所を曝け出していたのだから。これを皮肉と呼ばずして、なんと呼べばよい。

（ならば勝機は、次にアーリマンが蕾に戻ったときか）

団堂は、手元に残しておいた、２本のニルヴァーナを手に取り、二刀流とする。

（おそらくは、あの羽から出ている花粉が外法封じの原因だろう。それなら、花粉の触れられないアニミストの動力源には作用しないはずだ。そしてそれはニルヴァーナの動力源も侵されていないことを意味する。ならば、これを手に持っている限り、ニルヴァーナの力をほぼ１００パーセント引き出すことが出きるはず）

遠隔操作は封じられているとはいえ、その攻撃力は未だ健在なのだ。

これを使わない手はない。ついさっきまでは、すっかり忘れていたが・・・。とにかく、アーリマンにとって完全有利のインファイトを制するためには、こちらもエモノを使用するしかない。

（あとは、どうやって蕾形態に戻させるか・・・）

外法封じが効かなくなるという最大のデメリットがある以上、人型での対応が可能である限りは、やつは絶対に蕾にはならないはず。だから、アーリマンが蕾にならざるをえないほどの猛攻を加えてやればよい。しかし、インファイトにおける戦闘能力では、圧倒的にアーリマンが有利だ。こちらが、やつのガードをくずすことは困難。さっきは隠し腕による不意打ちが成功したからよかったものの、今度は同じ手を喰らうはずもない。

（しかし・・やるしかない！！）

団堂は、腹をくくり、ゆっくりと細い足で歩きながら近づいてくるアーリマンを見た。

「ふふ・・、ニルヴァーナ。アニミストの最強にして最悪の外法生物兵装・・・。それを手にしたということは、本気で僕を殺しにくるつもりなんだね」

「そうだ、ノイ・・・」

団堂が返事をして数秒の沈黙。

そして、ふたつのオーガの足元が爆砕し、距離を詰め合ったふたつのオーガは、クロスレンジで交差したのだ。

第59話　Identity

僕は、どこから来たのだろう？

僕が目を開けたとき、ふと頭に過ぎった最初の疑問がこれだった。
僕は、生まれたときから、この体型で、髪型もこんなんだった。
そんで、僕は、もともと外法学の知識を持っていた。
そう。それは、外なるルールを解釈・適用し、執行する能力。
僕にはそういう特別の能力があったから、袴田先生には、とても良くしてもらった。
君は、天才だ。先生はそうやって、もてはやして、僕を高等執行官というポストに置いては、大変に可愛がってくれた。

『君は、きっと、団堂曹士になれる』

先生は、決まって、そういうことを僕に言った。

そういえば、なぜだろう。僕には、もっと、もっと、小さかった時の記憶がないんだ。
単純にもの心がついていなかったから？いや、問題は、そう簡単なものじゃない。
だって、僕は外見上、中学生の子どもなんだ。少なくとも、小学校中学年の時に体験したことぐらい、覚えていてもいいはずだろう？
それなのに、それ以前の記憶が全くないんだ。

僕のお父さんも、お母さんも・・・僕は知らない。
でも、たまに僕の知らない記憶が蘇ることがあるんだ。
それはデジャヴのように、突然、僕の頭の中に浮かぶあいまいな光景。

知らないんだけど、なぜか知っている。そんな矛盾を僕は、たまに経験する。
これは、本当に僕の過去なのだろうか。それとも、誰かの過去なのだろうか。
それは一体何であるのか、僕には検証する術はないけれど、確かに僕の中に生きている。

僕は、一体、誰なんだ。
もちろん、先生は、僕のことをナインと呼ぶけど・・・。それは、僕が9番目の執行官だから。
いなくなってしまった団堂先生と同じ番号。だから、本来、僕はこの名前で呼ばれるべきではない。
これは僕の本当の名前じゃないから。
これはいなくなってしまった人への喪失感を埋めるためだけに与えられた、かりそめの名前。

なら、僕は存在していないのと同じじゃないのかな?僕は、団堂曹士の代わりとして、袴田先生のために機能しさえすればいい。僕は、団堂曹士でさえあればいい。それ以上の存在になる必要もなければ、それ以上の存在になることは許されていない。
だから僕は、誰かに与えられたこの身体で、僕という存在を打ち立てたりしてはならない。僕は、団堂曹士という存在を排除してはならない。
僕は、団堂曹士でなければならないんだ。

でも、そんなことを言われて、この僕が納得するはずもない。
だって、それじゃあ僕の心の行き先は何処にもないじゃないか。
団堂曹士ではない僕自身が、この心で、確かに感じたこの気持ちまでもが嘘のはずがないのに、僕が僕であってはならないなんておかしすぎる。僕は、一人の人間として、たしかにここにいるのだから。

性格も、考え方も、趣味も違う。僕の目で見る世界と、団堂曹士の目で見る世界は、絶対に違っているのに・・・。
僕は、僕だ。
だから、僕は、僕という存在をこの世界に打ち立ててやる。
団堂以上かもしれないし、団堂以下かもしれない・・・。
だけど、僕は、生きているんだ。

その答は、団堂曹士との戦いのあとに、必ずあるはず。

だから僕は、君に会いたいんだ。
本当の自分を見つけるために。

（二）

「ノイいいいいい！！！」

団堂は、叫び散らすような声で、僕の名前を呼ぶ。僕が決めた、僕自身の名前を。
彼だけが、僕を、僕として真直ぐに捉えてくれる。もっとも、向こうは僕を殺す気満々なのだけれど、それでも僕は、自分の名前を呼んでくれたのがちょっぴりうれしかった。

「団堂・・曹士・・・！！」

アーリマンは、アニミストの間合いに入る。アニミストは大剣に化けたニルヴァーナを持っているから、リーチがアーリマンに比べてはるかに長い。そのため、アニミストの攻撃は届くが、アーリマンの強打はとてもではないが届かないという状況にある。両者の間隔

は、思った以上に長いのだ。アーリマンが触手をのばすなどして、引き寄せることもできないわけではないけれど、団堂は同じ手に引っかかることはしないだろう。しかし、あれだけの長い剣を振り回していては、小回りが効くはずもない。そこが団堂にとって致命的な隙となるはず。だから、ノイは踏み込みのタイミングを計るために、ただひたすら、アニミストが大振りをする瞬間を待つ。

「ノイ、お前は！！」

アニミストが、左手の大剣をアーリマンに突き立てつつ、右腕を大きく振りかぶる。

そして、袈裟斬り。

音もなく、アニミストの閃光のような一太刀が振り下ろされる。根本から砕かれている腕から繰り出されたとは思えないほどの重い刃は、右上から左下へと向かって、アーリマンの首を切り落としにかかる。

「いまだ」

だが、それをアーリマンは、上手に上半身を左側にねじり、太刀筋のすれすれのところを回避する。そして、アーリマンはがら空きになったアニミストの右わき腹を目がけて、その懐に飛び込みつつ、リバー・ブロウを叩き込む。

「く・・・・」

肉で拳を受け止めることで、鈍い音が響く。アーリマンの突き刺すような一撃は、コクピットに衝撃をもたらすものではないが、アニ

ミストの右わき腹を砕き、陥没させる。まるで、内臓物を抉り出すようであり、アーリマンの細く鋭い腕がするすると侵食していくのだ。そして、ひいては身体の中を掻き回し、掻き出された肉が四散する、そんなおぞましい光景。

だが、同時にアニミストも、左に持った剣で、アーリマンの胸部を貫く。どうやら、相打ちか。

「まだまだ」

しかし、アーリマンは、胸部にニルヴァーナが貫通したとはいえ、全くひるんでいるわけではないし、自由に両腕を動かすことができる。戦闘に支障をきたすほどのダメージはない。対して、アニミストは、右腕で袈裟斬りにしたままの状態で、右に逃げたアーリマンを左腕の剣で突き刺したため、両腕はガチガチにクロスした状態となる。それゆえに追撃体勢に入るためには、数テンポ、アーリマンに遅れてしまう。しかも、アーリマンは、既に得意のインファイトに入っている。これは・・・かなりまずい。

「アニミストに、これが受けられるか？」

そして、アーリマンの細い腕の筋肉が、メリメリと音を立てて膨張を始めた瞬間、突如として一斉爆撃のような音が、この広い空間に響いた。

空間をゆらしながら、アーリマンの連打が炸裂したのだ。

アニミストのボディに右からも、左からも、強烈な強打が畳み込まれる。アーリマンが調子付くに従い、連打はさらに加速する。

アニミストの腹が吹っ飛びそうなほどの強打。たまらず団堂は、アーリマンに突き刺したままのニルヴァーナを手放して、後方へと逃げる。

「先生、甘いよ」

だが、バックステップの緊急回避など、アーリマンの踏み込みに比べれば、はるかに遅い。アーリマンの驚異的なダッシュ力のため、アニミストは直ちに追いつかれる。まるで、アーリマンは、アニミストの懐に張り付いているかのようで、全く逃げられないのだ。

「これで・・終わりだ！！」

アーリマンのフィニッシュブロウが炸裂しようとする。そのダッシュ力を乗じた上でなされる、窮極のアッパー。これが決まれば、間違いなくアニミストの首は吹っ飛ぶだろう。

「？？」

だが、アーリマンの胸部に刺さっていたニルヴァーナが、突如、爆砕する。

ニルヴァーナは、アーリマンの肉を吹き飛ばしながら、すさまじい衝撃波と共に破裂したのだ。ニルヴァーナの肉とアーリマンの肉が、細かな破片となって四散する。

「くそ・・、そんなことまでできるのか」

団堂は、これを狙っていた。あえてクロスコンバットを挑むという、一見して無謀な戦術。アーリマンにインファイトを採らせ、イニシアチヴを与えることがどれほど危険であるか、団堂ほどの男であれば理解しているはず。にもかかわらず、彼があっさりとインファイトを許したのは、これを狙っていたためなのだ。しかも、ノイには、ニルヴァーナの遠隔操作はできないという先入観が働いているため、ささった剣の爆発を警戒するなどという行動は選択肢に入る余地が

ない。団堂は、ノイのその先入観を逆手に取り、時限式の爆発を仕組んでいたのだ。たとえ、遠隔操作ができなくとも、独立した生命体であるニルヴァーナに事前の司令を送っておけば、時限爆発も可能であろう。

「こりゃ・・一本とられたね」

ノイは、現状を確認する。アーリマンの右腕が、肩からごっそりなくなっている。ノイは、まんまと団堂の策にはまり、アーリマンの主要武器を失ってしまったのだ。これは、ノイにとって、かなり致命的だ。この拳こそ、アーリマンにとっての最大の武器。これをいったん失ってしまうと、外法封じを無効にしない限り、失った右腕を再生することもできない。

(どうする?さすがに左腕だけじゃあ、心もとないし、ひとまず蕾にもどるか・・・。しかし、戦闘能力が落ちているのは、向こうだって同じ・・)

そう、対してアニミストも、アーリマンのボディ連打をもろに受け、まともに立っていることすらできない状況にある。団堂の策が決まったとはいえ、時限装置を遅く設定しすぎたのだろう。その『あそび』の時間を利用して、アーリマンも敵に同様の致命傷を与えていたのだ。

(ならば、まだ左一本で十分戦える。蕾に戻るのは、あくまで最後の手段だ)

そして、アーリマンは、左腕だけを頼りに特攻する。その強靭な脚力で、一気に敵の懐に飛び込み、一撃必殺を叩き込む。だが、アニミストもひるむわけにはいかない。アーリマンをいったん調子づか

せてしまえば、もうこれは手に負えなくなる可能性もある。だから、アーリマンが太刀の間合いに入ったかどうかも確認しないで、アニミストは大振りの横一閃をなす。

「そんな攻撃・・当たるわけないでしょ？」

全てを吹き飛ばすほどの衝撃を伴い、大きな斬撃が真空波となって飛んでいく。だがそれでも、研ぎ澄まされたノイの感覚とアーリマンの運動性をもってすれば、そんな無差別的な攻撃など、容易に回避できる。インファイトに持ち込ませないための苦肉の策であろうが、そんな狙いも定めていないような攻撃がアーリマンに当たるはずもない。もし、ラッキーヒットを狙っているのなら、憐れである。

「・・・・？？」

だが、それでもアニミストは、大振りの斬撃を繰り返し、アーリマンを寄せ付けようとはしない。何度も、何度も、衝撃波が空中を舞うのだ。団堂は、一体何を考えているのであろうか。無駄だということを理解していないのか。もしかして、圧倒的な不利に遭ったため、パニック状態にでもなっているのだろうか。それほどまでに、彼は不毛な斬撃を幾度となく繰り返すのだ。確かに、あの斬撃が繰り返される限り、アニミストの懐の飛び込むのは極めて危険であり、アーリマンとのインファイトを避けることができる。だが、それは無駄な時間稼ぎにしかならない。この斬撃が止めば、アーリマンは直ちに懐に飛び込み、必殺の一撃をぶち込みにくるのだから。

（あ・・・斬撃が、途切れた！）

一瞬、周囲はとても静かになった。斬撃の嵐が止んだのだ。前方のアニミストは、大振りの格好のままで、隙だらけだ。このまま、懐

に入って、この左腕を叩き込んでやる。

「終わりだ・・・先生」

アーリマンは、一気に大地を蹴って、左腕を構える。懐に入ったら、すぐにでもアニミストの息の根を止めるために。この渾身の左の一撃で、アニミストは終わる。

そして、アーリマンと僕の勝利をもって、この僕が・・・世界で唯一の僕であることの証明がなされる。

この僕が、団堂を・・・団堂曹士を超えるのだ。

団堂曹士ではない・・・この僕が、ようやく、ここに生まれるのだ。

ノイという唯一の存在を、この世界の中心に打ち立てるのだ。

何にもない僕は、今まで、ただこれだけを願って、生きてきたんだ。

絶対に・・・僕は、僕になる。

「うおぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

強風のような風切り音を引き連れながら、アーリマンによる左のスマッシュ・パンチが飛ぶ。すさまじい踏み込みの勢いに乗って飛ぶ。

アニミストの頭部を目がけて、その頭部を粉々に砕くために。

（決まった・・・）

肉を抉り取り、骨を砕く音は・・・聞こえない。

当たらなかったのか・・・？

それとも、音がなる余地のないほどに恐ろしい神速の一撃だったのか。

そうだ。きっと、そうだ。アニミストが蒸発するほどの最強の一撃だ。音などなるはずがない。僕が、命をかけて繰り出した一撃は、そんな低俗な一撃なんかじゃない。完璧の一撃だ。しかも、アニミ

ストの砕かれたボディで、これを避けることなんてできるわけがない。
だから、僕の・・・勝ちだ。先生。

「え・・・・」

そして、数コンマほど遅れて僕のまわりに衝撃が走る。
コクピットが激震する。衝撃波で、内臓がかき回されて、息をすることすらできない。右から、そして左から、再び右から・・・立て続けに左右交互に衝撃が走る。
一体・・・何が起こっている。
アニミストは、跡形もなく吹き飛んだはず。それならば、僕が攻撃を受けるなど、ありえない。アーリマンのあの一撃を避けられるはずもない。だって、タイミングも、軌道も完璧だった。なのに・・・どうして?何が、起こった?全くわからない。
ただひとつ・・・わかっているのは・・・。
僕が今、敵の猛攻を甘受しているということだけだ・・・。

「ノイいいいいいいいい!!!」

アニミストは、両手にニルヴァーナを持ち、相対するアーリマンは、両の腕を失い、これに八つ裂きにされていた。
なぜ、アーリマンの左腕が吹っ飛んでいるのか?なぜ、アニミストは、いつのまにニルヴァーナを両手にしているのだ?

(そうか・・・!!)

あの時の無駄にも思えた大振りは、アーリマンの封魔燐粉を吹き飛ばすためだったのだ。
ほんの少しの空間ではあるが、外法封じが効かない空間ができる。

その間に、ニルヴァーナを再生させ、アーリマンが飛び込むのを誘った。あとは、ないはずのニルヴァーナで、カウンターを決めてやればいい。アーリマンの踏み込みの勢いを利用すれば、その左腕くらい吹き飛ばすのも可能だろう。

（これが・・・団堂曹士・・・）

外法学の天才。まさに、とんでもない男だ。この状況で、そんな冷静に的確な戦術を選択できるのだから、頭がおかしいというほかない。

「うわぁぁぁぁ」

完全に虚をつかれたノイに対して、感心する間もなく、追撃がスコールのように降り注ぐ。まるで疾風怒涛のごとく繰り出される、途切れ目のないほどの斬撃。これが全て、アーリマンの肉を抉り出すように切り刻んでいくのだ。

血の雨のように、大量の鮮血が噴出し、互いを汚していく。

「どうして・・・どうしてだよ!!僕の・・・僕の勝ちだったのに・・・どうしてだぁぁぁぁ!!!!」

何もできない。僕は、何もできない。

最凶最悪のオーガである、このアーリマンをもってしても、このアニミストを止めることができない。いったい、何なのだ。このオーガは?頭がおかしくなっているのか?こんなめちゃくちゃなオーガが、あってよいのか。僕は、こんなにも恐ろしい・・理不尽な存在と戦っていたのか。

自分を取り戻す?自分という存在を打ち立てる?

僕は、何を愚かなことをほざいていたのだろう。もはや、僕はそれ

どころではない。
死。
死だ。殺される。確実に死ぬ。
僕はもう、生きて帰ることすらできない。
怖い。怖い。怖い怖い怖い。

「死んじゃう、死んじゃうよ!!早く・・・早く、蕾に・・・」

そして、命からがら、アーリマンは大きな羽を折りたたんで、たちまち蕾へと戻っていく。しかし、その様は、ノイが自らの殻に閉じこもって行ってしまうかのようで滑稽であった。

「早く・・・再生しなきゃ・・・腕がないのに、あいつと戦えるわけがないじゃないか」

ノイは、コクピットの中央でちょこんと縮こまっては、ぶるぶると震えていた。どうやら、形勢が整うまで、篭城を決め込むらしい。だが、それはアーリマンの弱点をむざむざ曝しまくるに等しい暴挙である。

「!!!」

この空間の中で、とんでもないエネルギーの高まりが感じられる。外なる世界から、濁流のように途方もないエネルギーの総量が雪崩れ込んでくるのがわかる。
そう。外法封じが解除された今、封印されていたアニミストの力が解放されたのだ。このオーガは、ネクロマンサー・システムをフル稼働させ、光り輝くバースト状態にある。もはや、折れた腕も、砕かれたボディも完全に再生する。

「そんな・・・ふざけるな・・・」

やっとの思いで破壊したアニミストの身体が、綺麗さっぱり治っている。絶望感が、ノイを襲う。だが、そんなノイを他所に、直ちに5本のニルヴァーナが結集を始め、回転を開始する。今まで散々に、行動を制限させられていたためだろうか、その運動はいつもよりも激しかった。おそらく、とんでもないエナジー棒が出来上がるに違いない。

「やめてよ・・・やめてよぉぉぉ!!!」

薄いピンク色の光を放つ、巨大な円柱は、まっすぐに蕾となったアーリマンのもとへと飛んでいく。全ニルヴァーナの力を結集した窮極のエナジー棒は、その鋼鉄の花弁を何枚もまとめて蒸発させ、吹き飛ばしていく。なんとも無骨で、無粋な技であるが、飾りっけのない分、その威力はすさまじかった。これは、たとえアーリマンであっても受けきれまい。

(僕は・・・死ぬのか?)

結局、僕はいったい、何のために生まれたのか?
この戦いのあとには必ず、答がある。そう信じていた。
しかし、その答は。
世界からの拒絶だった。
僕は、団堂曹士にもなれず。ノイという人間にすらもなれず。ただ、孤独な肉の塊として、無様に死んでいくだけだった。誰も、何も、僕を、僕として、見てくれることはない。

僕は、誰なんだ?
また、ノイの頭の中には、あの疑問が浮かんでいた。

ずっと、ノイ自身の心を食いつぶそうとしている、不愉快なわだかまり。

決して晴れることのない心の闇。

しかし、そんな哀れな子どもにも、ニルヴァーナの放つ神的な薄いピンク色の光は、平等に降り注ぐ。優しい、優しい、破滅の光。それは、きっと緩やかな死を約束してくれる。そんな光に包まれながら、ノイは一筋の涙を流していた。

第60話　Hopeful World

死者たちの魂を燃やして、桃色の光が全てを包み込む。
それは魂の輝きか、命の煌きか。それは「心」を捻出して創られた異界のエネルギーなのだ。
忌まわしいけれども、どういうわけか温かい・・・妖しき涅槃の光がこの世の何もかもを蒸発させていく。まるで洪水のような鬼神の威光は、この歪められた不浄の世界を徹底的に舐め尽くすのだ。
見た者の眼を焼き、さらにその眼から伝わって脳を焼き、ひいてはその魂までをも焼き尽くす。
この光は世界の終わり。終焉への光。溢れた光の分だけ闇もまたあとに続いてくる。その闇に放り込まれた世界には何も残らない。
罪人の魂を浄化し、その固い楔を解き放ち、怒りも、悲しみも、苦しみさえも、全ては極楽浄土の世界へと導かれん。全ては生まれ変わるために、何もかもを忘却の彼岸へと追いやって、穢れた魂を救済せんとする。
そしてやがて光は収縮する。現世への回帰を告げるのだ。救いは終わった。もう、燃やすものは何もない。全てはこの残酷な光の渦潮に溶けて同化した。よって、除去すべき邪な魂はここにはない。
戦いは、終わった。

「ノイ・・・」

団堂は閃光に潰されそうになった目をこすりながら、アーリマンの様子を窺う。まだ光に目が慣れず、視界は暗くてぱちぱちするが、閃光が走る前にあらかじめ目を閉じていた彼はかすかに敵の様子を見て取ることができた。
そこで、アーリマンの様子はというと、本体を固く防禦する堅牢な鎧、巨大な花弁はことごとく剥ぎ取られ、もぎ取られ、それはまる

で脱皮したばかりの虫のように弱弱しかった。しかも、アニミストの必殺の一撃は、アーリマンの外壁に飽きたらず、中の本体までをも高圧力・高温の融解により大破させた。どうやら、完全に戦闘能力を失っているようだ。

「団堂・・・曹・・・士・・・」

だが、それでもなお、アーリマンの執行官である少年には息があった。本当にかすかな声ではあるが、確かに彼は団堂の名を残りの力を振り絞るようにして呼んだのだ。何か掴めそうで掴めないものを必死に手探りして這いずるように、そこには憎しみなのか、とてつもない執念のようなおどろおどろしい感情が横たわっていて、とても細い声なのにもかかわらず、気の遠くなるような気迫だけは痛いくらいに伝わってくる。

「こんな・・・こんな終わり方なんて嫌だ」

「ノイ、もう終わりだ。お前の負けだ」

しかし、団堂はノイが生存していることに驚きもせず、勝者としての立場から、嫌味にも似た冷酷な言葉を投げつける。もとより、団堂はあの一撃でノイを殺すつもりはなかったのだ。まだこの少年に対して言っておきたいことがあった。だから、あの一撃で跡形もなく吹き飛ばすような無粋な真似だけは避けた。

そこで団堂は、最後の情けでもかけるつもりなのか、ゆっくりとアーリマンの残骸の下へと近づいていく。アニミストが着地したときの振動だけで、アーリマンは倒壊しかけのビルのように瓦解しそうになり、いよいよ憐れであると痛感する。そんな団堂の様子をひれ伏しながら見上げているノイは、敗者に対する屈辱的な情けを受ける前に自ら口を開く。

「まさか・・・僕のアーリマンがやられるなんて・・・。一体僕は、どこで間違ったんだ。どこにも、僕が負ける要素なんてなかったのに・・。だって、僕の土俵で戦ったんだ。外法を封じた上、僕の得意な接近戦での撃ち合いだったんだ・・・。僕が絶対に勝つ筋書きだったんだ。袴田先生にも譲るつもりなんてなかった。なのに・・アニミストは・・団堂曹士は、はるかに僕の上を行っていた・・・。僕は、始めから君に勝つことなんて無理だった・・・というべきなのか?僕は、結局、君に殺される運命だったのか?団堂先生・・・僕は袴田先生の掌で踊らされていただけだったのか?」

ノイは、自分を哀れむかのように苦笑を混ぜて言う。それが、団堂にとっては悲痛に思えてならない。

「ふふふ・・・、こうなってしまったのなら、僕にはこれ以上できることなんてない。敗者は、敗者らしく死ぬだけだ・・。僕は、君に殺されなければならない・・・。当然だよね・・、だって僕は、君の大切なヒトの命を奪った・・・君の仇敵なのだから・・・」

アーリマンは、溶けてよくわからなくなった腕を、アニミストの方へと差し出して、コクピットへの止めを促した。

「結局、僕は・・・君を超えられなかった。いや、それどころか僕は、誰にもなれなかったんだ・・・。僕は、いったい、何なんだ・・・。何をしたくて、こんなところに生まれてきたんだ・・。どうして僕は、君を傷つけることなんてしたんだ・・・」

ノイは、神に懺悔するかのように訴えた。しかし、その弱く、細い声は次第にぐしゃぐしゃになっていくように聞こえた。そして彼はまるで年相応の子どものように、自分の無力さになりふり構っていられなくなり泣き出したのだ。高等執行官として、最悪のオーガで

あるアーリマンを駆るこの少年が、身分を全て剥ぎ取られ、ただの子どもになった瞬間だった。

「僕には・・僕のことを愛してくれる人もいない・・。僕のことを、今まさに、考えていてくれる人なんていないはずもない・・。そのうえ、僕は・・僕ですらない・・・。こんなのって・・酷いよ。僕はこれ以上、生きていたくない。だってこんなに心が寒いんだ。だからせめて、一秒でも早く、君の手で僕を殺してよ・・・、団堂曹士！早く・・、早く・・僕を殺してよ！！」

孤独。力を失った彼を、今まさに追い詰めているのは、孤独という痛烈な感情だった。そんな雁字搦めのような理不尽に、ノイというただの子どもは、駄々っ子のように泣きじゃくるしかなかった。彼のあまりに小さいガラス質の心は、孤独という巨大な絶望に耐えられるほど、十分に成熟してはいないのだから。

「ノイ・・・」

「うぇぇぇぇん！！！」

そして、ノイは嗚咽をもらして大声で泣いた。この気持ちを誰かにわかってもらいたくて、全世界の誰かにこの泣き声が届くよう、叫ぶように泣くのだ。きっと誰でもいいから、この寂しさを埋めてほしいのだろう。

団堂自身、そんな彼の気持ちを理解できないわけではなかった。団堂もかつては記憶を失い、自分が誰であるかすらもわからないという孤独を痛いほどに味わった。だから、今のノイの気持ちはよくわかった。

「ふざけるな・・・、クソガキ・・。今さら、甘えてるんじゃねぇよ」

「団堂先生・・・」

だが、そんな泣きじゃくる少年に対して、団堂が向けた言葉は、あまりに厳しいものであった。無力な少年は、団堂の怒鳴るような声に狼狽し、泣き声を挙げることすらできないでいる。

「俺は、お前を殺すために、戦っているんじゃない。確かに、お前がいなければ、あいつは死ななかったかもしれない。だがな・・・自惚れてんじゃねぇ。あいつを殺したのは、間違いなくこの俺なんだ。お前はもともと、蚊帳の外なんだよ。だから、お前を殺して、全てが丸く収まる・・・そんなことはありえない。俺が抱えている罪は、そんな簡単なものじゃない」

そう、わかっていた。ノイが、団堂の憎しみを駆り立てていたとはいえ、結局はあの時、詩季を信じてやれなかった自分がいたことだけは確かだ。その事実だけは変えられない。そして、憎しみの赴くまま、この手で彼女を殺した。それが全てだ。ノイは、関係ない。だから、ノイを殺しても何の意味もない。

なのに、このガキは、さも自分が団堂を意のままに操って、詩季を殺したかのように話を捻じ曲げた。それが団堂にとって気に入らなかった。自分が黒幕であると自惚れて、団堂の犯した大罪すら無かったことにしようとしたのだ。贖罪の機会すらも奪われた気分だった。それがどうしても気に入らなかった。だからこそ団堂は、ノイと戦ったのだ。その腐った性根を叩きなおすために。

「それに・・、お前みたいなクソ生意気なガキは、そうそう居るものじゃない。その時点で、ノイって言うクソガキは、相当に個性的な人間だろうが。お前はお前だ。これ以上、他に何がいる?だから、俺を超える必要なんてどこにもないし、ノイはノイであればいいんだよ。何でお前は頭がいいくせに、そんな簡単なことも気づかない

んだ?他人に甘える前に、自分でよく考えれば、すぐにでもわかるだろう」

「先生・・・」

「それでもここで死にたいというなら止めはしない。ここで俺がお前を殺してやる」

そういって団堂は、鋭利な剣の切っ先をノイのいる部分に向けた。

「僕は・・・」

ノイは、団堂の態度に対して怯えるでなく、自分の目の前にいる圧倒的な存在に目を奪われていた。ノイはそこに明日への希望を見出したのだろうか、泣き止んで、その後に何も言わなかった。

それをノーの意思表示だと判断した団堂は、ゆっくりと刃の先を納めて言葉を続ける。

「あとさ・・、やけに寂しがる必要もない。俺は、お前の友達なんだ。お前が困ってるのなら、いつだって助けに行ってやるし、遊びにも付き合ってやるつもりさ。もっとも、あの時のお前の言葉が嘘じゃなければの話だけれど・・・」

「そんなわけ・・・ないよ」

「なら、いつまでも泣いているんじゃない。お前のことを考えてやれる友達が、今ここにいるんだから。それに、お前は人生これからだろ?自分のことを愛してくれる人なんて、これからいくらでも見つけられるさ。それなのに死んでしまったら、何も変えられないだろ?」

「うん・・」

「なら、お前が死ぬ必要はない。このチャプター9を生き残って、残りの人生を、ノイとして、楽しく生きていけばいい」

「団堂先生・・ありがとう・・・」

「馬鹿、泣いているんじゃねぇよ」
「だってさぁ・・・、涙が止まらないんだもん・・・。僕、こんなにうれしいと思ったことなかったから・・・」
「まったく・・・。本当に、お前がこのアーリマンの執行官だったなんて驚きだよ。どうして、袴田のやつは、お前を起用したのか・・・」
「うぇぇん、ごめんね・・先生・・・」
「ほら、とりあえず立て。アーリマン、大破しちゃったけど、歩くくらいはできるだろ」
「う・・うん・・」

団堂は、少し親父の説教のような強弁をふるったため、何となく恥ずかしい気持ちになった。だから、ぶっきらぼうで投げやりに言いながら、アーリマンに対して、粗雑に手を差し伸べる。この少年とは敵として再会したけれども、今度こそは本当に、信頼できる友達となるために、温かい手を差し伸べるのだ。ノイは、根っからの邪悪ではない。子どもであるが故に、物事の是非善悪もわからぬまま、袴田によって利用されていたのだ。だから、彼にはちゃんとヒトとして向き合ってあげれば、目覚しい成長を遂げてくれるはず。もともと彼には天才的といえるほどのポテンシャルがある。こんなところでそれを無にするのはあまりにもったいないことだ。そしてゆくゆくは、立派な人になって、きっと幸せを掴んでくれる。団堂は、そう確信できた。彼は、希望で溢れているのだ。

「ノイ!」
「せんせ・・・・・」

だが、ノイが団堂のことを呼ぶ声が、最後まで発せられることは無かった。そして、団堂の差し伸べた手が、彼によって強く握り返されることも無かった。

「え・・・？」

その後、遅れて鮮血が飛び散る。放水のような激しい赤の飛沫は、たちまち八方に飛散して芸術的で残酷な光景を描きながらアニミストを酷く汚してく。

団堂は、何が何だかわけがわからないまま、最後に団堂の手を握り返そうとしたノイの腕が、ぼと・・と寂しい音を立てて、地に落ちたのを聞いた。

「ノイ・・・」

団堂は、彼の目の前に落ちた腕を見て、その先にアーリマンの身体のほぼ全てが切り抜かれるように無くなっているのに気づく。それはまるで神隠しにでもあったかのような、不思議で、突然の出来事。しかし、ただの神隠しと一線を画するのは、アーリマンがつい数秒前にいた場所が、おぞましいほどの血で染まっていることだった。生物を身体の中から爆発させたかのように、なにかが酷く飛び散っている光景がそこにはあったのだ。団堂は、突然で、あまりに残酷な出来事に、ただただ驚愕するしかない。

「ノイ・・・一体、どうして・・こんな・・・」

少年は、間違いなく生きようとしていた。絶望も悲しみも乗り越えて、彼はノイというひとりの人間として、新たな一歩を踏み出そうとしていた。彼は、この先の人生に希望を持っていた。彼の短い人生のなかで、唯一、生きることに前向きになれた瞬間であったのかもしれない。だが、それも一瞬で消えうせた脆さに愕然というひと言を飾るしかない。なんて儚いのであろう、人の希望というものは。

「ふふふふふ・・・」

打ちひしがれる団堂に対して休む間も与えられることなく、凍てつくような冷笑とともに女の声がした。それは鼓膜に突き刺さるような、冷たく、悪意に充ちた声。こんなもの、およそ人が放つ声ではない。直接脳に音を流し込み、精神を侵食するような悪魔の囁き。耳を塞ぐことは許されていない。目を背けてはいけない。そして、よりおそろしいことに、そこには人の声に潜在する情がまるで感じられない。機械が生み出す電子音の組み合わせとか、偽りでも若干の温かみのあるものであればどれほどよかっただろう。それは、機械音以上に機械的で、情が完全に殺されている。いや、情がないわけではない。その声には彼女の情が確実にある。ただし、それは壮絶な憎悪という負の情であり、それこそがかの声を絶対零度の域にまで凍らせている。

「お前は・・・辰巳・・春樹・・なのか？」

団堂は、聞き覚えのある声の方をおそるおそる振り向く。精神論的に言えば、人ならざるこんな声など聞いたことなどないが、物理的に純粋な音として捉えたこの声は、たしかに彼にも聞き覚えがあったのだ。おそろしさの反面、不思議にも懐かしさまで生まれているのだから間違えようがない。

「ふふふふ」

そして、団堂が振り向いた先にあるオーガは、彼に再び悪魔の笑みを返してくれた。しかもそれは、今まさに飛び出してきそうなほどの臨戦体勢にあり、処刑の執行を待ちきれない様子をにじませているのだ。

これこそは最高執行官アスタロト。高等執行官アスラと鬼女セアトが融合した最高執行官。基本的にはセアトをベースにしているから辰巳春樹のオーガであることは容易に判断できる。だが一方で、かつてのセアトとは似ても似つかない部分があることもまた真実。アスタロトは、少なくとも善的ではない点においてアーリマンと同系統のオーガに属する。だがより注意深く観察すると、悪をテーマとしたアーリマンとは趣を異にする。

すなわち、そこには静かに燃える青々とした闇が、べっとりと塗りたくられ、どこかある種の気品すら感じられる。何ものにも染まることのない闇こそがまさに、その品位を極限にまで磨き上げている。闇は、ただ一方的に全てを吸収し、自らを他に強要する傲慢であるが常。闇は、あらゆるものを飲み込んでは、それをさらに新たな闇とする。その逆はない。このオーガはそんな圧倒的な闇なのだ。しかし、飽食なる闇を本質としながらも芸術的とさえいえるほどに荘厳で、整然としたフォルムからは、秩序もまた芽生えてくるようだ。それはあたかも闇魔界の統治者。天界より追放を受け、地の国に植えつけた楽園を旧神に代わり支配する堕天使。

早速、アスタロトは音もなく、その鍵爪のような右腕を掲げる。それと同時に魂が絶叫するほどの殺意が団堂の背筋を凍らせ、とてつもなくいやな予感を感じさせるのだ。

その殺意は、とてつもなく近いのに、しかし決して行ってはならない場所から、まるで影のように団堂に纏わり憑く。

「これは・・・まずい！！」

アスタロトの殺意は実現する。彼の敵を討ち滅ぼしたいという強い意志が絶対的な力となって現世に現出する。それはまるでアニミストの周囲の空間がひっくり返るような現象だった。ちょうどその真裏にあたる別の世界が、まさにアニミストを襲ってくるのだ。この

世界の一部をアニミストごと食いつぶそうとしているのだ。

「くそ・・・」

突然の出来事に不意をつかれた団堂は、直感で回避をしたものの間に合わず、左腕が持っていかれてしまった。それはまるで透明な貪獣が、その巨大なあぎとで食いちぎっていくような光景だった。あんな攻撃をアニミストの主要部分に喰らったら一巻の終わりだろう。おそらくは、先のアーリマンのようにアニミストは団堂ごと、跡形も残らず消滅するにちがいない。きっと凶暴な何かが、この修羅場に潜んでいるのだ。どこから来るかわからないから恐ろしい。だって奴はこの世界とは別の世界から突然に現れてくるのだ。常に狙撃されているという味わいたくもない嫌なスリルに曝されているよう。精神的な負荷は重く、団堂の心にのしかかる。そんな獲物をあざ笑うかのように、野獣は今か、今かと、絶対的優位な状況で爪をとぎながら団堂の隙をうかがっている。そして、団堂が隙を見せたなら、いつの間にか彼は別の世界へと連れ去られてしまうのだろう。アーリマンや引き千切られた左腕と同じところへ逝くのだ。

尤も、ノイも別の世界で元気にやっているといいのだが、そんな期待は持たないほうがいいだろう。その別の世界とは、おそらく限りなく地獄に近いにちがいない。団堂は、開く空間の狭間から覗かせた向こうの世界をとっさに見てしまったからわかる。それは彼の心を恐怖によって打ち砕くに十分すぎる光景だった。人間の発想をもってしても形容できない、えもいえぬ世界がそこにはあったのだ。あれは無数の邪神がひしめく異世界か、もしくはどことも知れぬ孤独の銀河か。いずれにしても、それは死ぬよりもはるかに辛い煉獄魔界にちがいなかった。人として新たなスタートを決意した少年ノイは、夢も希望もクズの様に踏みつけられながら、そんな世界に放り込まれていったのだ。彼が無事でいる可能性など、もはや絶望的だ。なにもかもが奪われたのだ。全て目の前のあの魔王によって。

「ノイ・・・」

あの子は変わろうとした。
生きようとした。
過ちを修正して、それを乗り越えて、幸せになろうとした。
楽しいことがたくさん待っていたはずなのに。
しかし、それは一瞬の出来事で失われた。
奪っていいはずがない。変わりたいと願う、いたいけな少年のささやかな希望は、たとえどのような理由を論証したとしても奪っていいはずがない。それが傲慢で、自己中心的な欲求を満たすための不合理なものであるのならなおさらだ。
赦すわけにはいかない。絶対に赦さない。
その行為が、かつての仲間が引き起こした惨劇であったとしても。

「貴様ぁぁぁぁぁ」

今の今まで団堂を包み込もうとしていた恐怖は、きれいさっぱり憤怒の感情によって吹き飛ばされていく。極度の興奮状態は、幸運にも団堂の恐怖を忘れさせてくれた。激情は、彼の闘争本能を奮い立たせてくれた。彼にとって決して許されざる汚行が導火線となって、明確な敵を指し示す。あれこそがまさに滅ぼされなければならない悪だ。絶対に認めてはならない。笑わせてはならない。ここで必ず消去しなければならない。

「俺は、お前を殺す」

団堂は感謝する。もし彼女が何もしないで団堂の前に現れて、突然に戦いを挑んだのなら、おそらく彼は戦いをためらったに違いなかった。

彼女と過ごした期間は決して長いものではないけれど、実にたくさんの思い出がある。共に死線を潜り抜け、同じかまどの飯を共有した仲だ。それらに想いを致せば、簡単に戦えるはずもない。しかも団堂は、同じくかつての仲間であるまもるを手にかけたばかりだ。あの時の虚しさや、悲しさを二度味わうなどしたくなかった。

しかし不思議なことに、今、団堂の頭の中にそんな気持ちは欠片も浮かんでこない。それどころか、奴をどう料理しようかという考えばかりがわいてくる。敵はかつての仲間としての絆を取り払ってくれるほどに残虐な外道であってくれたために、彼の躊躇いを消してくれた。まさに自分の中で殺人許可証がおりたのだ。彼は、自分を本気にさせてくれた彼女に感謝しているのだ。

「行くぞ、アニミスト」

それにつくづく今回の敵が戦いやすい相手でよかったと思う。アスタロトは、団堂の見た限りでもかなり強い。攻撃を躊躇うなどといった油断が入れば一瞬にしてやられかねないほどに強い。現に本気で相手を殺す気なのは向こうも同じようで、団堂を惨殺してもなおお釣りのくるほどのエネルギーを練っている。これは先ほどの攻撃と同じ感覚。死神が後ろから迫ってくるような悪寒が、彼の恐怖心をかきむしる。

「・・・・！！！」

見えない野獣が裏の世界から表の世界を次々と食い破っていく。空間には幾つもの巨大な穴が穿たれ、天変地異となるのだ。

そしてその瞬間、世界は八つ裂きにされた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1527l/

chapter 9 of the testament

2011年5月23日01時08分発行